

PL Shin gunsho ruiju
755
.35
S5
v.8

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY





新群書類從

第八



PL
755
.35
S5
1.8



一幸若舞の詞は何人の何時の頃に作り出したるものなるか明らかならず。されど幸若舞といふ事は桃井播磨守直常の孫宮内少輔直詮の幼時比叡山にありて幸若といひし頃仕出でたるものなりといへば、おほよそ足利氏の義満義持の頃にあたりて世に起りしものなるべく、隨て其の詞も其の頃よりの人々の作りしものとおぼし。義政の應仁の頃には既にめづらしからず行はれ、降つて徳川氏の寛文延寶あたりまで諸侯貴人のこれを用ひて宴を助け酒を侑めたること諸書に散見す。されば詞も一時一人の手に成らざる事明らかなり。されども今存するものゝ中にては、新曲といふもの最も新らしく、其の餘は皆新曲以前のものと推測らる。新曲は後醍醐天皇皇子尊良親王の御上を作れるものにして、餘の例に倣ふ時は題して一ノ宮とも武文ともいふべき

筈なるに、たゞに新曲とのみ云ひ傳へて其題名無くて済みぬる
を思へば其の後に新らしき作は出でざりしなるべし。新曲の文
勢筆意を考ふるに、他の曲とは大に其の様を異にして、巧ならぬ
にはあらねども、蕪陋の中に健剛の氣を含める中古のをかしき
趣は更に無く、他の曲と新曲との間に幾干の歲月あることはい
と明らかに見ゆ。たゞ新曲と古曲とを併せて、すべて皆何人の作
るところなるか、一證左の存して之を明らかにするだに無きを
恨むべしとなすのみ。

一今刊するところの舞曲計四拾一番、一のいづみが城を除きては、
新古書目に散見するところのものを網羅して剩さず。

一舞曲古刊本の其の一は明暦板にして四年戊九月吉日山田市郎
兵衛開板とあり。其の幾番を刊したるやは明らかならず。予はた
だ其の敦盛を睹たり。十四行本なり。其の二是寛永板にして、寛永

十二年乙亥二月吉日開板之と鳥帽子折の末に見えたり。此の種の本は三十六番を具足せりとおぼしく、予は其數番を除きて之を目睹せり。すべて皆十行本なるが、中に八島一番のみは十一行にして字體もまた聊か異に、二部見たる本の二部とも然るを見れば、故ありて板本を亡ひなどし、蚤く既に他の板をもて闕けたるを補ひ、書肆みづから拙くも不揃ひなるものを鬻ぐに至りしとおもはる。其の三は刊刻の年時不明なる十五行本にして、予ただ其の高館一番を睹たり。此の種の本の刊せられしもの三十六番なりやはた幾部なりや是亦不明に屬す。此の他猶異板の刊本ありや否や、年代久遠、今遽に武斷すべからず。

一舞曲寫本は淺草文庫舊藏にかかる内閣文庫現存のもの最も古し。字體、紙質、綴様より考ふるに蓋し慶長前後のものなり。九行、鳥の子紙、大和綴、豎本にして繪無し、繼信忠信記と題したる畫卷の

影寫本一巻あり。題名は異なれども其の文は全く八島に同じ。而して其の巻端に詞書二條爲重卿筆とあり。爲重卿は後小松天皇の至徳年間に新後拾遺和歌集を撰みたる人にして桃井幸若と年代相當るといへども、後人の記入に係れば深く信ずるに足らず。原本を目撃して後之を考ふべきのみ。唯中古の草子畫卷の類を其の儘舞の詞として舞々の用ゐたるか舞の詞の時に或は思ひのほかなる名を負ひて、草子畫卷の類として人に玩ばれたる事あるかいづれにしても猶此の類の寫本ありや。是等は聊か心に留むべき事たり。別に予が所見に俗に奈良繪本と稱する畫入りの横本の景清あり。此の類は所謂仕入本なれば、予の目睹以外に猶多く存すべきやもとより論を待たず。予は目撃せずと雖も、予の友人素影齋藤君の予の爲に之を見、且つ其の幾部を影寫して予に餽られたる幸若氏故領地越前丹生郡西田中邑幸若氏舊

家隸打波氏の所藏寫本は、横本にして字體も優美に、年代の古さ
は蓋し閣本に及ばずと雖も、其の佳本にして信憑すべきは比類
無しといふべし。此の他寛永刊本に詞章相同じき百數十年餘の
古寫本十餘冊あり。今刊するところの舞曲皆是等の本を比較し
て及ぶべき限りは佳良ならしめんことを期したり。

一入鹿、大職冠、百合若、志田、満仲、硫黃が島、築島、伏見常盤、常盤問答、文
覺、伊吹、夢合せ、馬揃、那須與一、笛之卷、鳥帽子折、腰越、堀河夜討、四國
落、富樫、笈さがし、八島、清重、高館、濱出、景清、元服曾我、和田酒盛、小袖
曾我、劔讚歎、十番切、新曲の三十二種は寛永本に依り、鞍馬出は寛
永本同様の古寫本に依り、敦盛は明暦本に依り、鎌田、未來記、靜、切
兼曾我、張良の五種は内閣寫本に依り、木曾願書、夜討曾我は幸若
氏寫本に依りたり。

一今刻一に各々其の本づくところの本に依り、一點を増減せず、一

畫を改竄せず。假名遣ひの誤謬、文字の假借等、まさに改め正すべきものと雖も、其の舊を存するは却て當時の一般の發音ならびに舞舞の語り癖等を想見するに足るの料たるを以て之を改正せず。間々特に本のまゝなる旨を挿記して、奇異なる語法、難解の文言、既存の誤謬、無理なる文字の假借等を明らかにし、今刻の誤脱して然るにあらざるを明らかにす。

一番の曲其のやゝ長きものは、舊刻或は分つて上下とす。然れども本是書肆の便宜に隨つて分冊せしに過ぎず。故に各刻定め有ること無し。其の初より上下を爲せるにあらざること分明なるを以て、今刻すべて通じて一部を完くし、強ひて分冊せず。

一舞曲もと今を距る近からざる時代の語り物なるの故を以て其の文法おのづから今人の耳目にも親しからず、上代の習風にも似通はざるものあり。例を舉ぐれば、してのて文字を略して、君の

御おぼえめでたくして、とあるべきて文字を省き、君のおぼえめてたくし、と云ふが如き、とともに文字を略して、如何に覗うとも擊たるまじ、とあるべきも文字を省き、いかに覗うと擊たるまじ、と云ひ、たとへばしやうもんあなたにあるともと云ふべきを。たとへばしやうもんあなたにあると、と云ふが如き、又事態切逼せる情景を叙する時は、ぞ、る、こそ、けれ、の古代語法中に、忽然として、此處に下女一人ゆきあふた、やあ此やかたのうちに何事があるととふた、爰に和田の右座に疊が一でうあいた、といふたぐひの近代語格を交ふるが如き、又自他の談話の區別を明らかにすべき語を省きて、甲者乙者の言語を、わいだめ無く續くるが如き、間投詞を形狀の詞と名詞との間に挿むで、八尺五寸のさても棒をば、六尺三寸のさても長刀水車にまはいてといへる如き、皆卒然として之に臨めば、本文に誤謬脱漏あるべく思はるゝもの甚だ

多し。讀むもの漫に武斷して誤謬脫漏とする勿れ。

一語形もまた希異なるもの少からず。頭の事をうんきと云ひ、足にはくものをけいちといふが如き、普通辭書に其の語無しとも、漫に疑ひて本文誤脱あるべしとなす勿れ。

一本文一に舊に依れるは前記の如し。たゞ婆心止む能はずして讀者の便利の爲に濁音の點のみを付したり。佛經の音讀を假名のみにて記したるが如きは、濁點無き時は殆ど之を讀みて錯過すべければなり。若し嚴刻の士の婆心醜甚と叱呵するあらば、予もとより甘んじて其の責を受くべき也。

明治丙午十月初六

幸田露伴識

新群書類從第八目次

舞曲

入鹿

大職冠

百合若大臣

志田

滿仲

硫黃が島

築島

鎌田

七八

五三

一〇

九六

一〇〇

一一〇

伏見當盤	三五
常盤問答	四七
文覺	五三
伊吹	六五
夢合せ	七四
馬揃	七七
木曾願書	八一
敦盛	八四
那須與一	一〇四
未來記	一一〇

笛之卷

二〇八

鞍馬出

二二五

烏帽子折

二三〇

腰越

二四二

堀河夜討

一四九

四國落

一六五

靜

一七一

富樺

一八九

笈さがし

一九九

八島

二一〇

清重

二二七

高館

二三一

濱出

三五五

景清

三五八

切兼曾我

三八一

元服曾我

三九三

和田酒盛

四〇〇

小袖曾我

四一五

劍讚歎

四二六

夜討曾我

四三〇

十番切

四五〇

新曲

四六二

張良

四七七

新群書類從第八

舞曲

いるか

抑かまたの先祖をくはしくたづねるに天津こやね
のみことに三十六代の御末みけこのきやうと申て天
下にかくれぬ臣下たり志かるにみけこのきやうは君
の御おぼえめでたくし天下のまつりごとをわがまゝ
に志たまへば世そねみ人へんしゆしていかにもして
御なかのあさらけなむをたくみさんにんのきやうか
いをそうちもんすると申せ共みかど御もちゐなかりし
かどげには又しよきやう一味のおんるにてなだめが
たくやおぼしけんとがもなかりきみけこのきやうに
ちよつかんのせんじをかうぶりてはるかなりける東

路やひたちの國にはいしよりおもひをはかんざむ
のゆふべの雲にかけながら涙を遠島のみちよりすゑ
にさきて、見もならはざる東路やひたちの國にく
だりみやのあたりにいほりしてあかし暮させ給ひけ
ればあたりの里人見參らせかしまのみやにすめばと
て四郎ねぎとぞ申けるいつしかはやく落ぶれのうふ
でんしやにまじはりさんわうのときを得一けいのす
きをになひすんの田をかへしいつしのくはの葉をと
りけんはくのたぐひをいとなみていみじからねどく
わういんを去年は今年にをしうつりあやめも志らず
すみ給ふかくてすぎゆき給ひしにわりなきいもせの
なかなればわかざみ出來給ふ有しにかはる御すまゐ
にもいつきかしつき給ふ

すでにそのとしもうちすゞなつくれゆけばみな月の
中の五日があつき日に田のくさとりにいで給ふいた
はしや若ざみをこの田のあせにぐし出てあを葉の志
ばを折かざしなかでいねよとちをふくめ夫婦ともに

もゝくさをとる手に付てなへのはのさかへむ事をよろこびてひめもす取てくらさるゝかゝりけるところにいづくからともおらざるに一つのきつね來りがまをくちにくはへようしのまくらがみにをきかきけすやうにうせければちゝはゝいそぎたちよりかまをとりて見たまふにこほり手のうちにかゝやくやうなかまでありもしもたからになるやとて此子にそへてぞそだてらるぶゆくれんまの時を得はや十六になり給ふたちはなのきやうの御時にのうぶでんじやのわざなれば庭の夫にさゝれなくゝ京へのぼりしにもゝしきや大内の庭の小草をきよめしにきやうしのべんは御覽じておほくのしちやう夫のなかにいとけなきわづぱありかたちはやつれはてたれどたゞ人ならずおぼえたりこんこつのさうの有こんこつのさうとは大臣のさうの事成るなかへ今はくだすまじ宮中にとどまりてみかどをしゆごし申せとてもんせうしやうににんせられ右京の太夫に經あがりて宮中のまじは

りはやうんかくに成給ふくわほうのほどどのゝしさよかゝりける處にそがの入鹿の大位臣ノアヤマリ歟とて大惡行の臣下あり君の御位をうばひとつて我わうにならんとたくむ此事天下の大事とて東山のおくにふぢのおほくはいかゝりたる大木のもとにてせんぎひそかにときを得かのいるかの志んをば右京の太夫に仰付うたるべきとのりんげん也ちよくめいなればそむきえずりやうじやう申かへりようしの時きつねのあたへたる一つのかまをたばさみねらひうかゝひ給へども彼入鹿かの大臣は三年の事をかねておりつるぎをたばさみほこをもち宮中の出住にもけいごのもの前後にみちさきをはらはせ出いればうつべきやうことなかりけれかまたりこゝろにおぼしめす人をたばかるはかりごと志たしくならではかなはじとおぼしめされけるあひだみめよき女を尋わがひめとがうしいつきかしづきたまひけりびしんはいはねとかくれなしみやこの上下かつ知てをよぶもをよばざりけるも望をか

けぬ人はなしある時かまたりいるかのしんの御かた
へ御ふみをつかはさるすでにうきよのしやうがいよ
めい今をかぎりなり親子わりなき對面も今度斗の事
を一人もちて候がせめて武運の至りにやかひなきひ
めにて候をいもとやらんの其ためかのぞみはおほく
候へどもうけひくかたも候はず當君の御代に御かた
さまならでは志たしみ申さむたよりもなし志うちよ
とおぼしめさるゝともめしをかせ給ひなば身の面目めんぼく
たるべしとかきこそ送給ひけれいるかはをもき人な
れ共いもにははやくくつろぎたねんのぞみの折節御
ゆるされはきゑつとてやがてむかへとりいつきかし
づき給ふかくてわが君出來たまへば家門のはんじや
う時をえこれに志かじとさゝめひたりかまたりおぼ
しめすいまははやうちとけぬたばかりよせてやすや
すとうたばやと思召かせのこゝちにもてなし日を經
てばんし一せいのふりをまなびたまへば宮中の上下
とはせ給はぬ人はなしされどもいるかは見えさせ給
はずまちかね給ふふせいにているかのしんの御かた

へ御ふみをつかはさるすでにうきよのしやうがいよ
めい今をかぎりなり親子わりなき對面も今度斗の事
なるべし入鹿の臣も北の方も御いりあれとかゝれた
りいるか此よし御覽じておほきにおどろき給ひくる
まやりだせうしかひよいそがせ給へ御前とてさうな
くいで給ひしがちうにてこゝろをひつかへし志ばし
ようしかひ此くるまとゝめよ御前ばかりやり申せ我
はゆかじと思ふなりそれをいかにと申にむかし異國
にさるたとへありみなめん／＼もきゝ給へ語てきか
せ申べしれうきんこくのれうわうとけんこくのけん
わうと國のさかひをあらそひて數度のたゝかひ隙も
なしけんこくは多勢れうこくは無勢なりしかりとは
申せともれうこくの味方にきんそんさんらくとて二
人たけきつわものありてんをかける時うきくもをは
しる事平路をつたふごとし大地をとをるときばんし
やくをうがつ事はくへうをとをすがごとしうみのう
へにて馬をのりみやうくわの中に身をかくし大つう

じざいにかけまはればけんこくのつはものかすをつくしてうたれけりすにはやけんわうもうたるべきにておはせしがけむわうかしこき人にてみめ能女をたづねわがひめみやとがうしはとうによと名付さんそんをむこにとるきんそんたけきつはものなれ共いもにはやくくつろぎかのひめみやにちぎりをこめけむこくへこそわたりけれどうとのきんらくもあにがやうになるうへちから及ばぬ次第とて兄弟つれてぞわたりけるけんわうなゝめにおぼしめし兄弟をちかづけかの姫宮と申はまるがまさしきひめなりちぎりをこむるなんたちなどか子にてはなかるべき親子わりなき申ならばれうわうをうつてたべもしもあらばかたぐにれうこくへ玄のび歸てびんぎあらばとねらひけりれうわう此由御覽じてれいならずなんちらがまるに近付ことよきはうちに悪心こもるゆ

へうたれじとだにおもひなばいかにねらふともうたるまじ志かりとはいへども日比まるにつかへ數度のけういをほろぼし今まで國を志る事も只なんぢらがきうこうたりひごろのちうのふかければ命をなんぢにあたふべしさりながら五體ふぐに有ものはぶつたいをうけがたしまるがほうざよのはうたひをちつともそゝがさすしてきんさんにべうをつき籠奉るべき也すはたましゐとの給ひてみづからむねのあひだよりあをきくちなはとり出しみわげにとつてさしわげきんそんにたび給ふ御さいごのりんげむにまるの命は惜からずなんぢらたこくのたばかりを知ざりけるこそむざんなれかならずこうくわいすべきそとこれをさいごのりんげんにてたちまちほうぎよなり給ふ御ゆいごんにまかせてきんざむにべうをつき御からだをほりうづみたましゐのくちなはをけんこくへわたしけんわうにこれをみせ申けんわうなゝめに思召こゝまでのわざなればきんそんをもきんらくをもも

ろともにうち取て代をおさめんとのせんじにて官軍
うんかにとりまひたりむざんのありさまやれうわう
のおはせし時にこそきんそんきんらくがゆみ矢のゆ
うもつよくしてゐながらしよこうをせいせしにれう
わうほうぎよの其後はつうりきもつかれはてはかり
ごともめぐらすつるきもとばすいはんやはこをなぐ
る事もなくいたづらにかれらうたるべきにて有しが
猶兵法のとくによりおほくのなかを打やぶりれうこ
くさしてにげてゆくあとよりくわんぐん追かくるせ
んはうつきてれうわうの御べうのまへにまいりいか
いせんとかなしまむべうのうちにこゑ有てまるがまつ
ごのりんげん今こそ思ひゑるべけれかたきはちか付
ぬいたづらにかれらうたせん事のむざんさよいでい
でさらばなんぢらを一見つぎ見つぎ今度のいのちた
すけんまるがからだをほりおこししゝきのしゝにを
しのせ一つのはこをあたへよふせいでみんとせんじ
有べうはおほきにゑんどうしつかは二つにわれにけ

りふしぎの思ひをなしつゝほねをひろひつぐほどに
いかゞはしてなかりけんおとがいのほねのたらざれ
はひだりのひざのかはらをとつておとがひのほねに
さしつく扱ゑゝむらはくちうせぬとりつくろふにあ
たはず青黄赤白の四色のしゝにをし乘ほこを参ら
せたりければ拍子にあはせかけひくおもてをあはす
るものはなしけんこくのつはもの數をつくしてうた
れけりゑかりとは申せども其日もすでにくれいりあ
ひ時になればばうこつをつがふかばねにて日もいら
ばはなれてかなふつべしとも覺えずとたかきをかに
あがりいり日をゑはしとゝまれとまねき給ひけりけ
ればげに日光もあはれみて山のはにかゝる日が又已
の刻にたちかへるかたき是をみていよ／＼しんいを
とゝめ合戦をとゝめてにげかへるこうだいのめいせ
きふかくにつくりをかれたり入日を返すまひの手此
御代よりもはじまりれうわうのひきよく此御事な
りけりはたうのまひと申は養子のひめの事なりきん

そんきんらくはらくそんあつそり是也げんじやうら
くはやたいなけんじやうらくに作らるゝ此ことはり
を聞時は我も女にちぎりかまたりにたばかられあす
こうくわいのあらん時せんびをくふとかなふまじけ
ふはゆかでもありなんあすは日がらよからずとうち
とけ給ふ事もなく今度もたばかりそんじてうたでぞ
やまれけるとかやかまたりから及ばせ給はず春日
の宮にさんろう有て一せつたしやうの道理にてころ
すはとがにて候へども彼入鹿の大臣は天下をかるく
するのるならず國をついやすげきとたり志かるにか
のいるかのしんをやすくとうたせ給ふものならば
ならのみやこの其うちにこうぶくじのこんたうとて
ちやうろくの釋迦しゃかのざうを作りきやうわうをいのり
國家をごこくすべしと大願をおこしすこしまどろみ
給ひけるにゆめ共あらずうつゝともなくあふひのさ
かき葉一ふさなをしのそでに落かゝる又あたりを御
らんあればさかきのはそづえ一つありそも此つえと

申は何といへる子細ぞやをよそつえにもたしゆあり
ほとけのつえはまかさつちやう無明常夜のやみのう
きまよひをゑるつえ也ぼさつのつえはしやくぢやう
くどくの高きをへうせりごんぐげだつちくぢやうも歟
はくたわうのしゆはんちやうしゆもんのとてるしゆ
ちやうこそふかきこゝろの有成に今のさつきのほそ
づえはまうろうのめいあんちやうめくらのつくつえ
なり照日月はあきらかにましませどこくう常夜のご
とくなればつえにひかれてたどりゆくかるがゆへに
名付てめいあんちやうと申なり我もめくらにあらず
とも此つえをつきつゝまうもくのまなびをして敵に
こゝろゆるされてうてと思召るゝぞとやがて下向の
みちよりもこのつえをつきつゝ此間の病氣に目をや
みつぶしたりとてたどりありき給ひけりいるかこの
よし御覽じて人をたばかるはかりごと何とかたくま
せ給ふらんおそろしやとて用心すみな人の申けるは
かのかまたりと申はひたちのくに四郎ねぎが子にて

てんぶやじんのものなるが宮中へめしいだされ宮路
 ヤマリ歎にのぼり天下をけがすとがによつてくらゐにうて、
 まうもくになりたるものぞといひければ入鹿げにも
 と思召ちつとくつろぐふせいありころは亥もつき下
 刃なかにかまたりいるかをしやうじるろりに火をを
 かせいるかのしんとかまたり御手をあたゝめ給ひし
 にかまたりの若ぎみのまだいとけなくましますをめ
 のとがいだき参らせてあたりをとをり申時むづから
 せ給へばなにてその子はなかするぞこれへへと
 おほせければさうなく御手にまいらするといいか
 はしけんさかりの火のなかへとりおとし給ふいるか
 此由御らんじてまこといつはり爰なるべしなど見お
 とさで有べきかとさしのびて見給ふかまたりいとい
 さとつてあらざるかたに手をあげてもだへこがれ給
 ふまにつるにむなしく成給ふかひなき亥がいをとり
 あげておひざのうへに参らするかまたりいだき取給
 ひ爰はいづくぞおもこかほかしこはいづくまへうし

ろあし手をさぐりまはしつゝこはいかにあさましや
 あたりに人はおはせぬかなど取あげてたび給はぬじ
 ひとくどせんどたはぼさつのぎやうにあらずやあは
 れがたわの其中にめくらはことにうらめしや亥かも
 一子の若なればかくかたわなるうき身こそさきだち
 ぼたいをもとはれんとこそおもひしに眼前みやうく
 わのなかにいるをたすけぬ事のむざんさよいきてか
 ひなきうき身をもころしてたべや人々と天にあふぎ
 地にふしてりうていこがれ給ひければ見る人も聞人
 もそでを亥ばらぬ人ぞなきいるかこのよし御らんじ
 てあらいたはしや誠にまうもくしたまひけるぞやさ
 れば我身いつはりあるものが人のまことをうたがへ
 り今より後はうたがひのこゝろをといめ亥たしむべ
 しと思召はやうぢとけさせ給ひけりかまたりいまは
 かうとおぼしめしひんぎよさまなり御用意あれとう
 ちへそうもん申さるゝみかどえいらんましくてか
 んてより御たくみの事なれば異國よりさんかのひよ

うをわたされたりひらかるべき道理有しよきやうの
こらず參内あれとちよくしを立させ給ふしよきやう
のこらずさむだい有かまたりばかりふさんありたと
へまうもく成とも大事のせんぎ有あひださんだいな
くてかなふまじとかさねてちよくしたちければかま
たりのしんも參内あるいつよりもほうゑひきつくろ
ひようしのとききつねのあたへたるひとつのかまを
たばさみこはらえうのくるまのあざやかなるにめさ
れやうめいもんにくるまをとゞめざつしきに手をひ
かれ御前ちかくなりければそれよりかいしやく申も
のもなしゑやくもつてかまたり紫晨殿のきだはしを
さぐり／＼よちのほり御床のすのごにしやく取なを
しかしこまり御前をうしろになし申あらざるかたを
ふしおがむこゝろを知たる人々は爰をせんどゝきも
をけすこゝろをゑらざる人々はゆゝしかりけるゑん
かなとなげく人もありにけりみかどえいらんまし
ましてあはれいかにかまたり本座にあれとのせんじ

なりしよきやうたちも殘らず御本座あれと申さるゝ
御こゑ付てかまたりさぐり／＼よちのぼりすでにい
るかの座ちかくなる入鹿かたひざをおし立かまたり
の御手をとつてをしあげむとのしきだいなりかまた
りはいるかをさしあげむとゑたまひけりすでにはや
御座敷身の毛を立ておぢおそれはやさわがしく成し
かばかたきにいろをさとられてあしかりなんと思召
三とせが間ふさいだる兩眼をくわつと見ひらき弓手
のなをしの下よりもくだんのかまを取出しうちふり
給ふと見えしかばいるかのしんの御くびは水もたま
らずおちにけるくびもなきむくろがゐたるところを
つんと立てかまたりををしのけめてのなをしの下よ
りもこほりのやうなけんをぬき御座へはしりかゝつ
て御ゑとねにいだきつき切つついつしこくして北枕
にぞふしにけるされ共君はかねてよりあらうみのし
やうじのまにうちかくれさせ給へばさらにつゝがも
ましまさずいるかうたれて其後國土もとみさかへた

みのかまどもゆたかなり

大職冠

それわがてうと申はあまつこやねのみことのあまの
いはとををしひらきてる日のひかりもろともにかす
がのみやとあらはれてこつかをまほり給ふ也されば
にやかすがをはるの日とかく事はなつの日はこくね
つす秋の日はみじかく冬の日はさむけしはるの日は

草葉の風になびくがごとし

のどかにしてよくばんぶつをしやうちやうす四きに
ことさらすくれめいしつなるによりつゝはるの日と
かきたてまつりてかすがと名づけ申なりかのみやの
うちこはふちはらうちにておはします藤原のその中
にたいしよくわんと申はかまたりのしんの御事也は
じめはもんしやうせうにて御さありけるがいるかの
しんをたいらげたいしよくわんになされさせ給ふそ
もこのくわんと申は上たいにためしなしきたまつた
いにありかたきめてたきくわんどなりけりこれによ

つて此きみをはふひととも申いつもかまをもち給
へばかまたりのしんとも申なりかすがのみやにさん
ろうあつてあまたのくわんをたてさせ給ふ中にもこ
うぶくじのこんだうをさいしよに御こんりうあるべ
しとてしやうごん七ほうをちりばめしやこんたうを
たてさせ給ふくわほうは天よりあまくたり國のなび
き玄たがふ事はふるあめのこくどをうるほふした
きんだちあまたおはしますちやくによはくわうみや
うくわうぐうと申たてまつりてせうむてんわうのき
さきにたゝせたまふ二によにあたり給ふをこうはく
によとなづけて三こく一のびじんたり玄かるにかの
ひめぎみのゆうにやさしき御かたちたとへをとるに
ためしなしかづらのまゆはあをふしてゑんざんにに
ほふ霞にものこびあるまなさきはせきやうのきり
のまにゆみはり月の入ふせいひすいのかんざしはく
ろうしてながければやなぎのいとをはるかせのけづ

るふせいにことならすがたは三十二さうにしなさ
けはてんかにならびもなしかゝるゆうなる御かたち
のいこくまでもきこゑのありて七みかとのそうわう
たいそくわうていはつたへきこしめされてみぬこ
ひにあこがれ雲のうへもかきくもり月のともゝおの
づからひかりをうしなひたまひけりしんかけいしや
う一とうにそうし申されけるやうはぎよくたいの御
ふせいよのつねならずおがみ申て候なにをかつゝ
ませたまふべきおぼしめさる事のさうばちしんの
中へせんじあれとそうし申されたりければみかどゑ
いらんまし／＼てあらはづかしやつゝむにたへぬ花
のかのもれても人のさとりけるかいまは何をかつゝ
むべきこれよりとうかいす千里日ほんならのみやこ
にすむたいしよくわむがをとひめを風のたよりにき
くからみぬおもかげのたちそひてわすれもやらで
いかゝせんしんかけいしやううけたまはつてこれは
何よりもつてめでたき御しよまうにて候物かなちよ

くしをたてゝりんげんにてむかひとらせたまひゑい
らんあれとのせんぎにてうんかと申つはものをちよ
くしにたてさせ給ふうんかすでにたいそうのきんさ
つを給はりす干ばんりのかいろをすぎ日ほんならの
みやこにつき大しよくわんのみもとにててうさつを
さゝぐたいしよくわんは御らんじてわれはこれじち
いきとて小こくのわうのしんかとしいかにとて
こくの大わうをさうなくむこにとるべきと一どはち
よくしをちたい有ちよくしたもどつて此むねをそ
うもんすたいそいといあこがれ二どのちよくしを
たてさせ給ふせうむくわうていきこしめしなさけは
上下によるべからず小こくのしんかの子なりともそ
のはやかりはあるべからずまるへんどうをいたすと
てかたじけなくもくわうていのわんはんをなされ
ればちよくしめんぼくほどこしていそぎたちもどつ
てへんてうをさゝぐればたいそうおほきにゑいりよ
あり吉日えらびさう／＼にむかひぶねをぞこされけ

るこんどのむかひのちよくしにはたちばなのあつそ
んにうだいしんほうけんなりそもそもほんてうと申は小
こくなりとは申せどもちゑ第一のくになりみれんの
いでたちかなふまじけつかうあれとのせんぎにてむ
ねとのたいせん三百そうきさきの御ふねをばれうと
うげきしうとなづけてしゆつたんをもつてかたどり
へにはあふむのかしらをまなびともにはくじやくの
おをたれたりふねのうちにしきをゑきちんたんを
まじへくわうようらんけいみがきたて玉のはたは風
になびきこがねのかはらは日にひかりぐせいのふね
ともいつつべしはつひてんくわん玉をたれみをかざ
つたるによくはんじによ三百人すぐつてこれはせん
ちうの御かいしやくのためにとてかざりふねにぞの
せられたりけるじちいきよりもろこしまです千ば
んりのかいしやうの御なぐさみのそのためにおんが
のまひあるべしとてちご百人すぐつてみをがざつて
ぞのせられたりすでにふ月のすゑつかたともづなと

いておしいだすあまのかはせにあらねどもつまこし
ふねのほをあげたりかくてなみかせゑづかにてふね
はほんてうつのくにやなんばの浦につきしかばちよ
くしはならのきやうにつくたいしょくわんはうけと
つてひとつはいこくのきこへといひ又一つはほんて
うのいくわうのためとおぼしめされさんかいのちん
くわを山とつみ五千人の上下をそのとしの八月なか
ばよりあくるう月はじめまでなしたまふ大しよ
くわんくわほうのほどのでたさよ卯月もやうく
すゑになりゆきければ吉日をえらびたまの御こしを
たてまつるなんばのうらへ御出ありそれよりもれう
とうげきしうにめされじゆんぶうにほをあげれば
ふねはほどなくたいたうのみやうしうのみなとにつ
かせたまふだいりにきこしめされてすはやこくむの
ぎやうけいよいざく御むかひにまゐらんとてひだ
りみぎの大臣によくわんところ百くわんけいしやう
くわんにんしちやうにいたるまでのこるところはな

かりけり

そもそも大こくのくにのかすを申に一千四百四十
にこほりのかすを申に九萬八千よぐんてうのかすを

申に一萬二千六かじいちのかすを申に一萬二千八百
ちやうあんのいちと申はざいけのかすは百萬けん人
のかすを申に五十九おく十萬八千人たついちなりち
やうあんじやうのみなとより十のみちわかてりけん
ろけんなんだうとはたつみをさしてゆくみち三十五
にふみわけりおくなんだうと申はひつじさるへゆく
みち五十九にふみわけりさいけいだうと申はにしを
さしてゆくみち二十六にふみわけりかうほくだうと
申はきたをさしてゆくみちすゑはたゞふたつとうや
うだうはふなちにてすゑは日ほんにつゝけりかゝる
みちくよりもみつぎ物をそなへきさきをおがみた
てまつるあら有がたやたゞ一めおがみ申人だにもひ
んくをのがれたちまちにふつきのいへとなるされば
にやくわうていもれうがんに志たしみなれちかづか

せたまへばしよびやうをいやしたちまぢにやうじや
うの大きいにあへるこゝちして御持の間世すなをにた
みのかまどもゆたかなり

かくてうちすぎゆくほどにきさきのみやおぼしめす
われはこれ小こくのものとありながら大こくのきさ
きにそなはりたるそのこうめいを日本にのこしてこ
そとおぼしめし御ちゝたいしよくわんこうぶくじの
こんだうおなじきしやかのれいざうを御こんりうあ
るべきにかの御だうのせにうにぶつぐほうぐをおく
つてまつだいの志るしともなさばやとおぼしめしそ
ろへ給ふたからにはまづくわげんけいしゆひんせき
くわけんけいと申はうちならしての其後にこゑさら
になりやますとゝめんとおもふときには九でうのけ
さをおほふなりしゆひんせきはすゞりかのすゞりの
とくゆうは水なくしてすみをすつてこゝろのまゝに
つかふなりほんほんのほけきやうをたらようにてあ
なんそんじやのあそばしたるしちしやうるりのみづ

がめしやくせんだんのけいだいへいるりのはなたで
せんだんのけうそくにくたんじゆのじゆすれんく
わうこのとらのかはこんじきのえのかはくわその
かは三まいかゝるたからの中にしやくせんだんの
みそきにて五寸のしやかをつくりたにくじきの御
しやりを御しんにつくりこめながらはう八寸のすい
しやうのたうの中におさめてむげほうじゆとなづけ
てこれを一のてうほうにしをくりふみをべつしにか
きいしのはここにをさめておくらせたまひけるとかや
此たまはすなはちこうぶくじのほんざんしやかほと
けのみけんにゑりはめ給ふべきなりとかきこそをく
り給ひけれさてしもかゝるてうほうをたれかはしゆ
ごしてをくるべききりやうの人をえらめとてつもも
のどもをめさるゝに大こくのならひにて百人が大し
やうを百ことなつけ千人が大しやうを千ことひ萬
人が大しやうを萬ことなづくかうほくだうのすゑう
んしうといふ國にまんこしやうぐんうんそとてだ

いがう一のつはものありをとらぬほどのつはものを
三百人あひそへみやこをたつて大たうのみやうしう
のみなとより一よふのふねにさほをさしをひての風
にほをあげてす千萬里ををくりけりかいていにすみ
給ふ八大りうわうのそうわうたまの日ほんへわたる
事をじんつうにて志ろしめしもろくのりうわうた
ちをあつめおほせられけるはわれらはすでにかいて
いのりうわうたりといへど五すい三ねつひまもなく
をつこうにもあひがたきしやくせんだんのみそきに
て五寸のしやかのれいぶつの此なみのうへに御ざあ
るをいさぐむばひとつてわれらしやうがくなるべ
しもつとも志かるべしとて八大りうわうのなみかせ
あらくたてたまへばふねひよう□うしちさんしなみ
ぢぢづかならざりきされどもきどくふしげのほとけ
のめしたる御ふねなればじやうかいの天人はくもを
志のぎぶつぼうしゆごのやしやらせつはなみ風を志

そやをいるごとくことさらをひてとなりにけりりう
わういとゞいかりをなしなみかせにてとゞめすばお
さへてむばひとるべしさあらんときにはこくのもの
さだめてつよくふせぐべしりうわうのけんぞくに玄
かるべきものはなししゆらはたけきものなればたの
ふでみんとのたまひてあしゆらたちをぞたのまれけ
るかのしゆらの大しやうまけいしゆらもろくのけ
んぞくをひきぐしてこそいでられけれどよりこの
むとうじやうなれば百千にやつかんのけんぞくども
をいぎやういるいに出たせほこたうぢやうをとり
なたせかたきはすまんぎ候ともいくさはいゑのもの
なればたまにをひてはむばいとつてまいらせんと申
て口ほんとたうとの玄ほざかひちくらがおきにちん
をとりまんこかふねをまちゐたりこれをば玄らでま
んこじゆんぶうにほをあげこゝろにまかせふかせゆ
くに日ごろありともおぼえぬ所に玄まひとつうかべ
り見ればはたあしひるがへしくろがねのたてのあひ

よりもつるぎやはこのいなびかりたうちやうのかげ
どもがうんかのごとく見えければあれはなにといへ
る玄さいぞやいかなる事のあるべきぞとこゝろもと
なくおもはれけれどもさあらぬていにふかせゆくに
かのしゆらの大しやうまけいしゆら一ぢんにすみ
いで天をひかす大をんにてたゞいまこのおきにせ
きをするたるつはものをいかなるものとおもふらん
しゆらといへるものなりかいていの龍わうたちを見
つがんためしいしゆをいかにとおぼすらん御ふねに
ましますしやくせんだんのみそきにて五寸のしやか
のれいぶつよのたからはほしからすそのすいしやう
の玉すみやかにわたされ候へさらすば一人もとをす
まじいと申まんこ此よしきくよりもあらことぐし
のいきほひさうや扱はをとにうけ給はるこのあしゆ
らたちにてましますよなわが大こくのならひにて百
人が大しやうを百こと名づけくわん人といふ千人が
大しやうをせんことなづけてしゆりやうといひ萬人

が大しやうを萬こと名づけしやうぐんとこれをいふなりかいぐしくはなけれども一萬人が大しやうなればまんこしやうぐんうんそとはそれがしが事にて候もつともりうくうよりの御しよまうに玄たがひてすいしやうの玉まいらせたくは候へども七御かどのなかよりもきりやうのしんとえらまれ日ほんのちよくしを給はるときの日よりもして命をばわがきみのおんのためにたてまつるさればめいかろき事は此ぎによる事なればいのちのあらんかぎりはたまにをゐてはとらるまじいぞげにと玉がほしくば萬こをうつてとれやとてからくとぞわらひけるしゆらどもこのよしきくよりもさらば手なみを見せんとててつぢやうらんばのつるぎをひつきげうんかのごとくせめかゝるまんこ是を見てかなふべきやうあらざればふなぞこにつゝと入てしやうぞくをぞきたりける萬こがその日のしやうぞくにじんつうゆげのうでがねさはんやかんのすねあてしめうほうれんげのつな

ぬきはきにんにくじひのよろひをくさすりながにきくだしてあのくたら三みやく三ぼだいの五まいかぶとをゑくびにきゑのびのををぞゑめたりけるがうまりけんの大がたなま十もんじにさすまゝに大たうれんといふつるぎあしをなかにむすんでさげけんみやうれんといふほこもつてふねのへいたにつゝたちあがる三百よ人のつはものどもおもひくにいで立てはしふねおろしをしうかべすでにかけんとしたりけりたうのいくさのならひにてみたんにかくる事はなしてうしをとつてがくをうつてひようしにあはせかけひくせいぞろへのたいこはらんしょくしょつてうしけよとうつたいこはさそくくとうつなりひけよとうつたいいこはおんてうこつとうつなりくんでくびをとれとはつるてうこつとうつなりかなはぬときのせんにはしほうてつはうはなしみだれびやうしきりびやうしきうにをよぶときにはちをばたきとながしてかうべをつかにつめよとうつしゆらだう人の

たゝかひはむかしもいまもためしなしそのうへしゆ
らがたゝかひにくわゑんのあめをふらしくふうを
ふきとばせばんじやくをふらする事はゆきのはな
ちるごとくつるぎをとばせほこをなげどくのやをは
なす事まなごをまくがごとしみをかくさんとおもふ
ときけしの中へわけていりあらはれんとおもふとき
しゆみにもたけをくらぶべしかゝるゑんづうめいよ
をまのまへにげんじこゝをせんどとたゝかへばすで
にはやたう人こゝろはたけくいさめど此いきほいに
をされてのがれがたくぞ見えにけるさるあいだまん
こはみかたのぐんびやうどもをちかづけてとてもか
なはぬ物ならばしゆらの大しやう四五人そこのみく
づとなしてこそいこくのきこえも玄かるべけれわれ
とおもはん人々は供をしてたべやとてこんがうかい
のまんだらたいざうかいのまんだらりやうかいしよ
そん一千二百よそんのまんだらをほろにかけてふき
そらしふなぞこよりもめいばどもそのかずあまたひ

きいだすまんこがひさうのめいばにじんつうあしげ
となづけて七き八ふんあけ六さいおがみあくまであ
つうしてをつさまむかふよこはたはりおぐちそと
うつまねのくさりしゝあひほねなみよめのふしあふ
つくりつけたるごとくなりらんてんのくらをゝきし
よつかうのにしきのうはしきにこんぐぬつたるり
のあぶみりきしゆのちからがはをばしやうぐのち
にてそめたりけりおなじきおもがひをかけさせこが
ねのくつはがんじとかませにしきのたづなゑつてか
け萬こゆらりとうちのつてなみに玄づまぬうくくつ
を四つのあしにかけたればなみのうへをはしる事は
へいろをつたふごとくなり三百よ人のつはものども
いづれもむまにのつたれどもみなくうくつかけ
たればくも井にかりのとぶやうに一むらがりにさつ
とちらししゆらがぢんへきつて入しゆらどもこれを
見て一ひき二ひきのみならず三百ひきのむまどもが
いづれもなみをはしる事はふしぎなりときもをけし

かほどにいさむしゆらどもゝにげまなこにぞなつたりける大しやうのうしあしゆらすゝみいでゝいひけるはなふこゝざうそかねてより申せし事のちがはぬなふめたれがほのすくやかしもてかほくせめにすみたていらんあちそひあらがふぎにはにまじき事にて候ぞやてをくだかではいかにしてかうみやうふかくが見えばこそ一合せんせんとていでたつたりしありさまはあくこうしんゐのよろひをきむみやうけんごのかぶとのをを志めとうじやうむざんのほこつゑてゑんゑぐちはたさゝせ百千にやつかんのけんぞくどもをあひ志たがへ志きりにときをつくればへきてんやぶれはじやうにおちかいていをうごかしなみをあげこくゝさながらどうようして月のひかりもうづもれてひこへにちやう夜となつたりけり此ほど

ごあしゆら三百人からこんらあしゆら五百人手をくだいてぞきつたりけるまんこはめいよの馬のりうみのうへにてのるたづなさうかいふとりうはいふのりうかべたるむまのあしゆんでのものをつくときあふぎやうのたづなきつとひくめてのものをつくときにふぎやうのむちをちやうどうつにぐるものをおふときにはせんぎやうあをりのあぶみのむちをきよく志んだいにのつたりけりにしからひがしへうつてとをるとときには三百よ人があとに付てこゝをせんどゝきつたりけりいれかへくたゝかへばしゆらがいくさはうたれかゝつてかなふつべしとも見えざりけりそふ大しやうのまけいしゆら八めんはつびをふりたてゝ入したのほこをうちぶりうちじにこゝなりとおめきさけんでかけにけりまんここれを見てかなふべきやうあらざればうしほをむすびてうずとししよ天にふかくきせいする志かるべくはくわんせをんひぐわんたがへ給ふなふる萬こがつはものどもこゝをせんどゝきつたりけりら

ぐんじんちうねびくわんをんりきしおんしつたいさ
んちかい今ならではしゆらがおそるゝけまんのはた
をたゞさしかけよいやさしかけよとげぢすればけま
んらんばう玉のはたをまつさきにさゝせわれをとら
じとせめかゝるまんこがつはものかつにのつてをつ
ぶせ／＼きつたりけりゑんりきもつきはてつうりき
ひぎやうもかなはずしてそこのみくづと成にけりい
きのころしゆらどもすみか／＼にかくれたりまんこ
かちどきつくりかけもの舟にとりのりしゆらたう
じんのたゝかひにかちぬや／＼といさみをなしたう
どかうらいはしりすぎ日ほんちかうぞ成にけるさる
あひだりうわうたちこれをばさていかゞはせんとせ
んぎせられけりその中によつてもなんだりうわうの
たまはくそれになげんのちゑをたばからんにはみめ
よき女によもゑかじこゝをもつてあんするにりうに
よをもつてこの玉をたばかつて取べぎなりりうわうの
をとひめにこひさいによと申てならびなきびじん

たりしをみめいつくしくかざりたてうつぼぶねにつ
くりこめなみのうへにをしあぐるこれをばゑらでま
んこじゆんぶうにほをあげこゝろにまかせてふかせ
ゆくにかいまん／＼としては又はしやうちゝむたり
へきこんのおきぬく風くわう／＼としては又いづれ
のほくさうにかこゑやどさんかしらなしおほかはら
きどのしまもろみのしまもめいしまさつまのくにゝ
きかいがしまゆきのもとほりつしまのないことゆゑ
なくはしりすき九ごくのちをはゆんでに見てさぬき
のくにに聞えたるふさゝきのおきをとをりけりなが
れき一ほんうかんでありすいしゆかんとりこれを見
て此ほどの大風にてんちくたうどのちんかうばしふ
かれてながら、やらんと人々あやしめたりければ萬
こ此よしきくよりもなんのあやしめ事ぞたゞとりあ
げよとげぢをなす御ぢやうにゑたがひはしふねおろ
しとりみるにちんかうにてはなしあやしやはつて見
よとて此きをわつてみるになにとことばにのべがた

きびじん一人おはしますすいしゆかんとりこれを見
てをのまさかりをなげすてゝあつとばかり申萬こ此
よしめるよりもいかさまにも御身はてんまはじゆん
のけゞむにてしやうげをなさんそのためなあやしや
いかにといひけれどなにと物をばいはずしてたゞな
みだぐみたるばかりなりまんこかさねていひけるは
いやなにとたるませたまふともせひにつけておぼつ
かなしたゞかいていに志づめみくづになせといさみ
をなせばあらけなきつはもの御てにすがりうみへい
れんとすりうによはいとゞあこがれてあらうらめし
人のことばやのにふし山をいへとするこらうやか
んのたゞひだにもなさけはありとこそきけみづから
と申はけいたんこくの大わうのいつきのひめにてさ
ふらふなるがあるきさきのざんによりうつばぶねに
つくりこめさうは萬里へながさるゝたまゝきどく
ふしきにじんりんにあひたればさりともとこそおも
ひしに何のつみにうきかいていに志づむべきぞうら

めしさよとかきくどきみだれがみをつたひてなみだ
のつゆのこぼるゝはつらぬく王のごとなりしもを
おひたるをみなへし志たはしほるゝふせいしせいし
がやさうにしてられてひしきものにはそでしぬれほ
す日もなしとわびけるもいまこそおもひ志られたれ
かつらをかきしまゆずみはちすをふくむくちびるも
ものこびますあひきやうなみとなみだにうちぬれ物
おもふ人のふせいかやうちむつけたる御ありさまよ
せどもやかてたるまかされげにくそれはさぞある
らんそれゝゝとうせん申せとておなじふねにのする
りうわうのわざなればむかふさまにかせふきてふさ
さきのおきに十日ばかりとうりうすなきだにりよ
はくはことにもうきにまんこあまりにたへかねて
風のたよりにかよひきていねかりそめのうたゝねは
なにとなるこのをとたかくよにもすゞめのすみうき
におどろかさんがいたはしさにあふぎの風をいさめ

つゝ月てうさんのかくれぬればあふぎをあげてこれをたとへ風たいきよにやみぬればきをうごかしてこれををしゆあひみる人をこうるにはふみかよはねどこうるならひきみがこゝろをとりにくるなふいかにくとおどろかすりう女はもとよりねもいらすさりながらうたゝねいりたるふせいにてたぞやゆめみるをりからにうつゝともなきことはゝゆめのうきよあだなれば人のことばもたのまれずよのまにかはるあすか川みづばのあ口のかりそめにかせにきえぬることのはの末もとをらぬものゆゑにあだなたちてはなにかせんなかく人にははじめよりとはれぬはうらみあらばこそそのうへわれはうまれてより此かたかいもんをやまたすむかしよりいまにいたるまでおほくのしやうをうけし事あるひは六よゝ四しやうにうまれ五すい八くのくをうけあるひは三づしやくにおちしだいもつのひにあへりかゝるざいごうをふりいま人げんとうまるゝ事もかいりきによつてな

り第一せつしやうかいをたもつてはしんのざうとなるちうたうかいをたもつてかんのざうとなるじやいんかいをたもつてひのざうとなるまうごかいをたもつてはいのざうとなるおんじゆかいをたもつてはじんのざうとこれなるこれに五いんしつせいありいはゆるきうしやうかくちうそうわうひやうばんいちこつこれ又みめうの御のりとしごちのおんせいこれ也これに五つのたましゐこんしばくいしむなりき此五つのかたちをぐそくするをほとけと申五のかたちかけぬればぐちあんへいのちくるいたりいかにも佛をねがほんする人はまづ五かいをよくたもつべしひとつもかいをやぶりなばむそくたそくのものとなつてながく佛になるまじおほせはをもくさふらへど第三のかいもんをいかにとてやぶらんとなみだぐみたるばかりにておもひ入てぞおはしけるまんこもたいたうそだちぶつぼうるふのくになればあらくかたり申あらしゆせうやきてはごしやうの御ためにきん

かいをたもたせたまふかそのかいものなかに六は
らみつのぎやうありその中にとつてもんにくはら
みつとは人のこゝろをやぶらすいかに五かいをたも
つても人のこゝろをやぶりなば佛とさらになりがた
しさればにやはとけには三みやう六つうおはします
是はひとへにくわこにしてしよはらみつをぎやうせ
しくどくいまにあらはれてはとけとなり給へりたと
ひ一どはたきのみづにごりてすまぬものなりとつゐ
にはすみてきよからんこひには人のゑなぬかさても
むなしくこひしなば一ねん五百しやうけんねんむり
やうごうしやうぐせのあいだにつきせぬうらみ
のふかうしてともにじやしんとなるならばはとけと
はならずしてじやだうにながくおつべしかいのしな
あまたあり五かいをよくたもつては人げんとうまれ
て五たいをうくるなり十かいをたもつては天にんと
うまれて五すいをうくるなり二百五十かいは又しや
うもんとうまれてはとけにはなりがたし五百かいを

たもつてはゑんがくとこれなるこれもはとけにゑな
らずぼさつさんしゆ一しんかい此かいをたもつてや
がてぼさつとなりつゝはとけとさらに成がたし大せ
うゑんどんかいこのかいをたもつてはやがてはとけ
になるなり大せうのかいぎやうは二ねんをつかぬか
いなりしんたいはむさうにてかしんもとよりじくう
なりしやうじにもつながれずねはんにさらになちうせ
すじやしやうすなはちきよければすゞべきあかも
なしといふべきほんなうなしねがひてきたるはとけ
なしめる一ねんをほうとしきく事をみのりとすこゝ
をゑらぬをまよひとすゑんやうふたつわがうのみち
いもせふうふのながらへこれぶつぼうのみなもとお
ろかにおもふべからすおんなんびきあれやとぞおもふ
いかにくと申けるりうによはきこしめされてそれ
はほつしんのみのりとしぶつぼうにをゐてはひさう
のところなれどもねがふ事なくしては佛とさらにな
りがたし上だいはきもじやうこんにしてちゑも大ち

ゑなるべしまつせのいまは下こんにてちゑある人も
すくなしむかし上だいの大ちゑの人だにもいゑをい
でさいしをしてほうのためになんぎやうすしちた太
子はかうゐなるばんせうのくらゐをふりしてわりな
くちぎりふかゝりきやしゆたらによをよそに見十九
にてしゆつけをとげだんどせんのほうれいあら、
せん人をしとたのみわしのみやまのれいほうにたき
きをこりみをこがせんこくにむすぶあかのみづこ
ほりのひまをくむたびになんだはそのつらゝとな
るよるは又夜もすがらせんにんのゆかのうへにしが
せんのとこのふとんとなりかゝるゑんくのこうをつ
みまさしくしやかとなりたまひ三がいのどくぞんし
しやうのゑことましゝて一大しやうけうをときひ
ろめ給ふなりこゝをもつてあんずるにばんなうそく
ばだいしんしやうじそくねはんとてさいしをたいし
さふらひてほとけとやすくなるならばなどやたいし
しやくそんはわうのくらゐをふりしてゝきさきをい

とひ給ひけんそのほかしようぐわのらかんたちいづ
れかさいしをたいして佛となりし人やあるさてもほ
とけの御をとゝなんだたいしと申せしはしつけぼん
なうつきすしてによ人をこのみ給ひしをかくてはほ
とけにならじとて佛はうへんめぐらしてじやうどぢ
こくのありさまをそくしんに見せたてまつりつるに
しゆつけとげさせてなんだびくとぞなし給ふいとい
このじやぎやうをよしとをしへたまふはまうもくに
あしきみちをしゆるふせいなるべしかやうに申せば
とてもとより我は佛にてあるなりこくう一しやうと
う一體かしらはやくしみゝはなはあみだむねはみろ
くはらはしやかこしは大日如來也そのほか十はうの
しよ佛たちもろゝのぼさつとしわがたいにぐそく
して十ぱうのこくうにほうによとしておはしますき
たりもせずさりもせずいつもたへせずましますをほ
つしん佛と申形を作りあらはし淨土をたて、住家と
し給ふをほうしんふつと申なり八相成道したまひて

法をときすなはち衆生をりやくしたまふを應身佛と申也三身をとりわき一しんを志んするはさとりのまへの佛なり三じむ一そくとくわんじいづれをも信ずるをさとりのまへと申佛とならんそのためなんざやうくぎやうせんものいかで善惡みだるべき身はいたづらになさるゝとかなふましとそおほせける

まんこ此よしきくよりもことのほかにはらをたていかにや／＼きこしめせほとけをねがふ人はみなたうとちゑとじひしん一つかけてもなりがたしたうといつぱきやうたいいちゑといつぱさとりのしんじひととべくさのまくらのうたゝねのつゆのなさけはゆめばかりちぎりなんまんこあまりのうれしさにかつばとおきてみをいだきなふこはまことにて御さ候かふたつとなきいのちをもまいらせんと申りうによはきこしめされていやそれまでさふらはずげにやらんうけ給はればしやくせんだんのみそきにて五寸のしやかのれいぶつのましますよしをこのふなうちにてうけたまはるそのすいしやうの玉みづからに一夜あづけさせ給へともかくもおほせに志たがふべしといふまんこ此よしきくよりもあらしやうたいなやじよのしよまうとこそおもひしに此すいしやうのたまに

とをひめぐつてうさもつらさものちのよにおもひ志らせ申さんとそのゝちはものをいはずりうによはもとよりかやうにめされんためたばかりすまさせたまひ玉をのべたる御てにてまんこがたもとをひかへさせ給ひなふいたふなうらみたまひそよまことにこゝろざしのましまさばみづからがしよまうをかなへてたべくさのまくらのうたゝねのつゆのなさけはゆめばかりちぎりなんまんこあまりのうれしさにかつばとおきてみをいだきなふこはまことにて御さ候かふたつとなきいのちをもまいらせんと申りうによはきこしめされていやそれまでさふらはずげにやらんうけ給はればしやくせんだんのみそきにて五寸のしやかのれいぶつのましますよしをこのふなうちにてうけたまはるそのすいしやうの玉みづからに一夜あづけさせ給へともかくもおほせに志たがふべしといふまんこ此よしきくよりもあらしやうたいなやじよのしよまうとこそおもひしに此すいしやうのたまに

おゐては中／＼おもひもよらぬ事なりとふつとおもひきりけるがいや／＼なにほどの事のあるべきぞとおもひなをしさても／＼御みは何として御ぞんじ候ひけるぞやさしくも御しよまう候ものかなさらばそつとおがませ申さんとてくろがねじやうをさしゐんばんをもつてふうじたるいしのからうとの中よりもすいしやうの玉をとりいだしうによのかたへわたすけいせいとかいてはみやこかたぶくとよまれしも今こそおもひ忘られたれかくてしうあひれんばのわりなきちぎりとみえつるが三日もすぎざるにかきけすやうにうせぬたまはと人に見せければとりてうせぬと申たゝばうせんとあきれはてこくうにてをこそたんだくすれあらくちおしやりうぐうのみやこよりたばかりけるを忘らずしてとられけることのむねんさよさりながらとかふ申におよばずとてのこるたからをさきとしていそぎみやこにのぼりさまぐのほうぶつをとりいだしてたいしょくわんにまいらせあ

ぐる太しよくわんは御らんじてをくりぶみの其中に第一のたからものすいしやうのたまの見えぬはいかにとたづねとひたまふつゝむべきにてあらざればありのまゝに申あぐるかまたりきこしめされてあまりおもへばむねんなるにせめてわれをぐそくしそのうらのありさまを見せよとおはせければうけ給はると申てもとりのふねにのせ申ふさゝきのおきへをしいだしてこゝなりと申たゝばう／＼としたるなみのうへを御らんじてむなしもどり給ふみちすがらおぼしめすさもあれむねんなるものかな三ごく一のてうほうをわがてうのたからとはなさずしていたづらにりうぐうのたからとなしけんくちおしさよよく／＼物をあんするにりうぐうかいは六だうにおゐてもちくしやうだうのうち人げんのちゑにははるかにをるべきものをさあらんときはなにとしてたばかられけんふしぎさよ我又せんげうほうべんしいかにもあんをめぐらしこの玉におゐてはとらふすものとおぼ

しめしみやここにかへり給ひててうせきあんをめぐらし玉をとるべきはかりごとくふうまし／＼けれどもさすがかいちうへだゝつてたしうゑんたうならざればふねのかよひちあらばこそゑかりとは申せどもしんそくにおゐてをやたいせ太しはかたじけなくもによいの玉をとらんとてゑんしかひをもつてちよつかいをはかりつくしつゝゐにはうじゆゑたまへり大ぐはんとしては又つゐにむなしきことあらじわれもちかひてねがはくはしやうぐせゝのあひだに此玉にをゐてはとらふすものとおぼしめしみやこのうちをゑのび出かたちをやつし給ひ又ふさゝきへくだらるゝかのうらにつきたまひうらのけしきを見たまふにあまどもおほくあつまりてかづきする事おびたらしくかのあまのなかにとしのよはひはたちばかりに見えみめかたちじんじやうなるが流すいにもつれてあそぶ事たゞへいろをつたふごとくなりかまたり見こめたまひてかのあまのとまやにやどをかり日か

すををくらせたまひけるにあまにもいまだつまもなしかまたりたびのひとりねのとこもさびしき事ながらこゝにてひをやかさねけん根かたけれどもひめまつのはやうら風にうちなびきにはもつらきうらながらそよよしめしといひかたりてふたりあればぞなぐさみぬうきねのとこのかぢまくらなみのよるにもなりぬればともゝなぎさのさよちどりふきゑほりたるうら風にこゑをくらぶるなみのそとすざきのまつにさぎあればこすゑをなみのこゆるにてゑはやのけふり一むすびすゑはかすみにきえにほひゆめちににたるうたかたのなみのこしふねかすかにてからろのをとのとをければはなになくなねのかりがねわれもみやこのこいしさにこゑをくらべてなくばかりうきみながらもまきの戸をあけぬくれぬとすぎゆけば三とせになるはほどもなしかくてなんによのなからへわりなき中のちぎりにやわかぎみいできたまふいまはたがひに何事もうちとけたりしいろ見えたりかま

たり見こめ給ひていまはなにをかつゝむべきわれこそみやこにかくれもなき太しよくわんとはわが事なりこゝろにふかきのぞみのありて此ほどこれにありつるぞゑかるべくはみづからがしよまうをかなへてたびてんやあま人うけ給はりなふこはまことに御ざさふらふかあらはづかしや四かいに御名かくれもなきかゝるき人にゑたしみ申ける事よひとつはみやうがつきぬべし又ははくぢよげせんにてはだへはなみのあらいそたちゐはいそのながれきこゑはあらいそにくだくるうつせなみのをとかみはやしほにひきみだすつくものごとくなるみにてみやこのくものうへ人にをきふしひとつとこにしてまみえぬることはづかしけれゑかじたゞみをなげてゑなんとこそはくどきけれかまたりきこしめされてとてもゑせんいのちをわがためにあたへりうぐうかいへわけいつてたづぬる玉のあり所を見てかへれとの御ちやうなりあま人うけたまはつてりうぐうかいとやらんはありと

はきゝていまだ見ずゆきてかへらん事かたかるべしたとひいかなるおほせなりともいかでかそむき申べきとかまたりにいとまをこひ一よふのふねにさほをさしおきをさしてこざいでなみまをわけてつつといり一日にもあがらず二日にもあがらず三日四日もはやすぎて七日にこそなりにけれかまたりおほせけるやうはあらむざむやかのものはうをのゑじきともなりけるかあやしやいかにおぼつかなしとこゝろをつくさせ給ふところによみがへりたるふせひにてもとのふねにぞあがりけるいかにととはせ給へばゑばしは物を申さずやゝあつて申けるはなふこのどよりりうぐうかいへゆくみちは事もなゝめの事ならずひとつかしからをさきとしてくらきところをまばつてちいろのそこへわけいるにうしほのるすいつきぬればくれなるのいろのみづぞあるなをしそこへわけ入にこがねのはまちにおちつく五しきのれんげをひふしあをきくちなうおほくしてれんげのこしをまとへり

なをしさきを見わたすにれいかきよくながれみづの色は五しきにてさうがんたかくそばだてりかわにひとつのはし有七ほうをちらばめ玉のはたほこたてならべかせにまかせてへうようすかのはしをわたるにあしすさまじくもきえゆめうつゝともわきまへすなをしさきを見わたすにろうもんこゝにさしさみたまのまくさはかすみのうちこがねのかはらは日にひかりさうてんまでもかゝやけり三ぢうのくわいらうに四ぢうのもんをたてたり一つの大りおはしますりうぐう城これなりけりへいるりのはしらをたてめなうのゆきげたにはりのかべを入にけり四しゆのまんしゆのやうらく玉のすだれをかけならべちやうにもあやをかけつゝとこににしきの志とねを志きちんたんをまじへなをらんけいをみがきたつかゝるめでたきさうたくにしやかつらりうわうはじめとしわしきつりう王にいたるまでほう□をかざりさらるゝもろゝのせうりうどくりうこがねのよろひ

かぶとをきて四つのもんをまほれりさてもたづぬる玉をばべちにでんをつくつてたからのはたをたてならべかうをもりはなをつみ二六じちうにばんをおきいねうかつがう中／＼に申にをよばざりけり八人のりうわうじゝこく／＼にしゆごすれば此玉をとらん事こんじやうにてはかなふまじましてみらいでとりがたしおぼしめしきり給へわがきみとこそ申けれかまたりきこしめされてさては玉のありどころをたしかに見をきつるものかなあるとだにもおもひなばとりゑん事はけつちやうなりりうどももはかりごとをめぐらしたばかつてとりたればわれもたくみをめぐらしたばかつてとるべきなりそれりうじんと申は五すい三ねつひまもなくくるしみおほき御身なり此くるしみをまぬかる事は志らべのをとによも志かじこゝをもつてあんするにりうわうをたばかるならばまいとくわげんにてたばかるべしこのうみのおもてにごくらくじやうどをまなび玉のはたほこ百ながれた

てならべさて又がくやをさうにかざつて左右のげんくわんを志らべすましそのみざりにみめよきちごをそろへおんがくをそうするほどならばたゞ天にんにたるべしさあらんときに大そうじやうからりんをうちならししやうてん下かいのりうしんをおどろかしくわんじやうするならばすゝめによつてかみほとけのぞみらいりんましまきぱりうぐうのみやこより八大りうわうをさきとしてそこはこのけんぞくどもをひきぐしていだるべしそのあひだはりうぐうかいにりう一人もあるまじきぞるすのまをうかゝつてそろりと入てぬすみとつてやあたへかしとぞおほせけるあま人うけ給はりあらゆゝしのきみの御たくみやさふらふかゝるせんげうなくしてはいかでかたやすくとりゑなんたゞしるすのまなりとも玉のけいごはあるべしたとひむなしくなるともたまにおおてはゑさいなくとりあげきみにまいらすべきがもしもむなしくなるならばまたたゞちうのみどりごのちぶ

さをはなるゝ事もなしきみならではのちの世をあはれむ人のあるべきかとてなくよりほかの事はなしかまたりきこしめされてこゝろやすくおもへもしもむなしくなるならばけうやうのそのためにならのみやこに大がらんをこんりうすべし又此わかにおいてはいまだようちなりといふともみやこへぐそくし天かの御めにかけふさゝきの大臣とがうしふちはらのとうりやうたるべきよしをこまんゝとのたまへばあま人うけ給はつてよろこぶ事はかぎりなしやがてみやこへしやをたてまひぬしをめしくだしあたりのうらのふねをよせしゆたんをもつていろとれるぶたいをこそはりたてけれ十ぢやうのはたほこ百ながれ立ならべかせにまかせてひるがへせばさうかいはやがてじやうどゝなるひだりみぎのがくやにかざりたてたる大だいこまんまくをあげさせしゆれんに玉のすだれをかけはうざをさうにかざつてうげんぢとくの大そうじやうからりんをうちならし上てん下かい

の龍じんをおどろかししやうすれば八大りう玉しゆ
らいしてせんぎまちくなりけりなんせんぶしうふ
さゝきのうらにしてほうざをかざりちうしやうある
いざやらりんやうがうなつてちやうもんせんとせ
んざしてそこばこのけんぞくどもをひきぐしてこそ
出られけれどにりうじん出たまへばこく中のちご
たちみをかざりまうけこゝをせんどゝまひ給ふたゞ
天にんのごとくなりさるほどにりうじん五すい三ね
つたぢまちまぬがれ給ひけるあいだなに事もうちわ
すれまひにみとれたまひてふさゝきに日をぞをくら
るるすはやひまこそよけれとてあまもいでたちをぞ
かまへける五しきのあやをもつてみをまとひやくわ
うの玉をひたいにあてかねよきかたなわきばさみぬ
のづなのはしをこしにつけなみまをわけてつつと入
たとひなんしのみなりとも一人うみにいらん事どく
のうをりうかめ大じやのおそれもあるべきに申さん
やおんなの身とあつて一人うみへいる事はたぐひす

くなきこゝろかなす干ばんりのかいろをすざりうぐ
うのみやこにつくやくわうの玉にてらされてくらき
ところはなかりけりことさら見をきたりしことなれ
ばまよふべきにてさふらはずりうぐうのほうでんに
あがめをくすいしやうの玉おもひのまゝにぬすみと
つてこしにつけたるやくそくの布づなをひけばせん
ちうの人／＼あはややくそくこゝなりとてゞにつな
をくりあぐるあまもいさみてかつげばうへよりいと
ゞひきにけりいまはかうと見えしところに玉をまも
れるせうりう此よしを見つけあとをもとめてをふ事
はみつばのそやをいるごとくせんちうの人々あはや
ほのかにみゆるはくりあげよとげちするにあまのあ
とにつゐてひとつの大しやをふてくるだけは十ぢや
うばかりにてひれにつるぎをはさみたてまなこはた
ゝせきじつのみつにうつろふごとくなりくれなるの
ごとくなるしたのさきをふりたてすきまなくをつか
くるあまかなはじとおもひけるあひだかたなをぬい

てふせぎけりせんちうの人々このよしを御らんじて
をあがきみをいだきおつづふひつころんつあはや
／＼とおほせけるかまたり御らんじぎよけんをぬき
ようちのとききつねのあたへたる一つのかまにとり
そへとんでいらんとし給ふを船中の人々ゆんでめて
にすがつてこはいかにとてとゞめけりすでにはやこ
のつなのかりすくなく見えしとき大じやはしりかゝ
つてなさけなくもかのあまの二つのあしをちぎれば
みづのあはときえにけるむなしき玄がいをひきあげ
しよ人のなかにこれをゝき一どにわつとさけぶかま
たり御らんじて玉はとりゑぬものゑに二世のゑ
んはつきはてぬむねのあひだにきずあり大じやのさ
けるのみならずとあやしめ御らん有ければ此きずの
中よりもすいしやうの玉いでさせ給ふさては大じや
のをつかせしときかたなをふると見えしはふせがん
ためになくしたまをかくさんそのためにわがみをが
いしけるかとよせめて此きずをわがみすごしおひた

らばかほどに物はおもふまじきをおんなははかなき
ありさまかなおつとのめいをそむかじといのちを
するはかなさよともしびにきゆるよるのむしはつ
まゆゑのみをこがすなりふゑによる秋の玄かはは
かなきちぎりにいのちをうしなふそれはみな、＼し
うあひれんばのわりなきちぎりとはいひながらかゝ
るあはれはまれなるべしわれには二世のきゑんなれ
ば又こん世にもあひ見なんなんちはいまこそがぎり
なれわかれのすがたをよく見よとていとけなきわか
ぎみを玄がいにをしそへたりければしゝたるおやと
玄らぬこの此ほどはゝにはなれつゝたまにあふたる
うれしさよむなしきちぶさをふくみつゝはゝのむね
をたゞくを見て上下ばんみんをしなべてみなみだ
をぞながしけるあまはむなしくなりたれどかしこき
せんげうはうべんによりりうぐうかいへむばはれし
むげほうじゆをことゆゑなくむばひかへしたまふこ
とありがたしともなか／＼に申におよばざりけり此

たまはすなはちおくりぶみにまかせこうぶくじのほ
んぞんしやかほとけのみけんにゑりはめたまひける
とかやしやうじんのれいざうしやくせんだんのみそ
きにて五寸のしやかをつくりにくじきの御しやりを
御しんにつくりこめながら方八寸のすいしやうのた
うの中にをさめむげほうじゆとなづけ三こく一のて
うほううりうわうをしみ給ひしことはりとこそきこえ
けれ

ゆりわか大臣

抑むかし我てうに嵯峨の帝の御とき左大臣きんみつと申てならびなき臣下一人おはします志かれ共きんみつに御代をつぐべき御子なしかくてはいかゝ有べきと大和の國初瀬のてらにまふとしてひぐわんつきせぬ觀音のりしやうをあふぎ三十三度のあゆみをはこび申子をこそ志たまひけれ今にはじめぬくわんおんのねがひの志ほもはやみちてほどなく御子をまうけ給ふ志かも男子にて御座ある夏のなかばのわかなればはなにもよそへてそだてよとてゆりわかどのと名付申いつきかしづきたまひけり七歳にて御はかまめし十三にてうゐかふりめし四位の少將殿と申奉る十七にては程なくうだいじんにならせ給ふ御わらは名によそへてゆりわかだいじんと名付申三條みぶの大納言あきときのきやうのひめぎみをむかへとらせ

給ひならびなうこそかしづきけれそもそもわがてうと申は國とこよりもはじめてさていざなきといざなみは彼國にあまくだりふたはしらの神と成て第一に日をうみ給ふ伊勢の神明にて御座あるそのつぎに月をうむ高野のにうのみやうじん月よみのみこれなりそのつぎにうみをうむつの國に御たちあるひるこの宮ゑびす三郎殿にておはしますそのつぎに神をうむ出雲の國そさのおはおほやしろにておはしますそのほかまつしやのふるいとうはみな此かみのそうしやたりかみのほんぢを佛とはよくも志らざることばかなこんほんぢのかみこそ佛とならせ給ひつゝ衆生をけどし給ふなれ其はともあらばあれそも我てうと申はよつかいよりもまさしくまわうの國となるべきを志んみづからひらき佛法ごちの國となす大まわうたけ自在てんにこしをかけ種々のはうべんめぐらしていかにもして我てうをまわうの國となさんとたくむによりて則天下にふしぎおばかりき此度のふしぎに

はむこくのむくりがほうきして四萬ぞうのふねどもにおほくのむくりとりのりやうさうとくわすいとぶくもとははるくもかれ四人が大將にてつくしのはかたにふねをよせせめ入とこそ聞えけれ

國に有あふゆみとりふせぎたゝかひけれどもかれらがはなつどくの矢はふる春雨のごとくにて四方でつぱうはなちかけ天地をうごかしせめいればかなふべきやうあらすしてみな中國さしてひき志りぞくそも我てうと申は國はぞくさんへんどにてちいさしと申せ共ぶんだいよりもつたはれる三のたからこれあり一つにはしんじとて大ろくてんのまわうのをしての判是あり二つにはないしどころとてあまるかみのみかゝみなり三つにはつるぎほうけんといづものくにひがみのやまの大じやのおりもとりしれいけんなり是みな天下のてうほうにて代々の御よに異國よりきういおこつてあざむけ共神國たるによりつゝばうこくとなす事もなし今もあまでるを御神のいす

す川のすゑつきす伊勢へほうへい奉りないしどころの御たくせんによりつゝ討手をつかはすべしとてしよしやのほうへいりんじの御神樂參らせ給ひけり其中にとつてもないしどころの御たくせんはかたじけなうぞきこえける七つにならせ給ひしをとぬがそでにたくしてすゝふり立てゑんたくあるむくりがむかふ日よりして天下のかんたちたかまがはらにしゆゑしていくさひやうぢやうとりぐ也ゑかりとせは申せ共むくりが大將りやうさうがしよてうにはなつどくの矢がすみよしのめされたる神馬のあしにたち此きずいやさんそのためにかみのいくさをのべられたりこれによつてきういともちからを得たりとせめいるなりされどもかれらがふるまひは風ふかぬまのはな成べしいそぎこのたびほんぶのいくさをはやめよかみもむかはせ給ふべし凡夫のいくさの大將には左大臣がちやくなむにゆり大臣をむくべきなり彼人討手にむくならばしよじんかうりよくまし／＼てこん

がうのちからをそゆべきなりもしさも有て下向せば
くろがねのゆみ矢をもつべきなりをそくて此事あし
かりなんいそげ／＼と志んたく有てかみはあがらせ
たまひけり御ちゝさだいじんは御子のゆり若脱スルカたいじん
をめして下かうせよとの御ぢやうなり志んたくと申
りんげん又はぶめい成ければ吉日をえらびみやこい
でと風聞す扱ゑむたくにまかせてかねの弓矢をもつ
べしとてかぢの上手をめしよせ一所をきよめかぢや
とさだめせい／＼をつくしてつくり立る弓のながさ
は八尺五寸まはりは六寸二ふん矢つかは三尺六寸矢
かずは三百六十三ねには八つめのかぶらを入弓矢
もくろがねにて引てはかへすべからずと人魚のあぶ
らをさし給ふ國にありあふゆみとりみなたうせんの
つはものにて一騎も残るところはなしすでにえらぶ
吉日はこうにん七年かのへまる二月八日にみやこを
たつだいじんどの御せいは三十萬騎に志るさる、
そのほか以下のぐんびやうは百萬餘騎とぞ聞えける

みやこを立て其日はやはたの御まへに陣をとりあく
ればつの國なにはがたこや野にぢんをとり給ふ去程
にわうじやうのちんじゆをはじめ奉りいくわんをぬ
ぎかへよろひをめしせいれいみさいの色のうへには
やしやらしんのかたちをげんじ雲にのりかすみにの
り一つは國家をまばらんため又は氏子をしゆごせん
爲我氏子わがうち子かたちにかけのそふごとくさき
に立てぞまばらるゝさてかみたちのきによりてうみ
かせすゝしく吹ければつくしにちんどるむくり共こ
のよしを承て今度はまづ／＼ひけやとて四萬ぞうに
とり乗てむくり國へぞひきにけるさてこそ天下もお
だやかに國も自出度おはしけれだいじむどのはこの
よしそうもん申されたりければ内よりのせんじには
だいじんがこのたびのけしやうにはつくしの國司を
とらするぞ急てまかりくだれとのせんじあり大臣殿
は九國にすまむものうさにちたい申されけれどもく
にのまばりの爲なれば在國せではかなふまじとかさ

ねてちよくしたちければちからをよばず御臺所をひきぐしていそぎつくしにくだり豐後のこうに京をたてさながら都にをとらずすませ給ふ又みやこにはくぎやうせんぎまちくたりむくりが大將は四人ときこふるをせめて一人討取てこそいくさにかちたる亥るしはあるべけれきういは二さうのものなれば何とか思ふて引つらんこゝろのうちもさとりがたし先かうらいこくへうちごえ七百六十六國をせめ亥たがへ其大勢をそつしはくさいこくをせめなびけ其後むこくをせめん事何の子細の有べきとせんぎしてつくしへせいをぞこされける大臣殿も吉日をえらび御いでとこそ聞えけれ亥んざうの大船百よぞうたかせの誤カねは數亥らすそのほかうらくのれうせんかたせふねそうじてふなかずは八萬ぞうむくりは四萬そうにてむかひけるに一ばいましてぞむかはれける扱大臣殿の御座船をばにしきをもつてかざりたてともへにいはふかみく六十餘州のれい神たちゐがき鳥ゐさかき

は雲に光りをまじへつゝはうくわたいこをそすすれば身のけもよだつばかりなり卯月半に大臣ははや御座船にめされけり御臺なごりをおしみておなじ船にとのたまへども思ひよらずとの給ひてをしこそといめたまひけれさてふねどものともへには五色のへいをはきたてゝ神かせすゝくふきければまゑんまかひもおそるべしむかしのたとへをひくときは神宮功ノ誤わうぐうの亥んらをせめさせ給ひし時神あつめしてむかはれしもかくやとおもひ亥られりむこくにぢんとるむくりどもてんのいろをきつとみて二さう神通のものなれば討手のむくとさとりをなしちかふよせてはかなふまじ亥ほさかひへうつていでふせいでみんとせんぎして四萬そうのふねどもにおほくのむくり取乗唐と日本の亥ほざかひちくらがおきにぢんをとる大臣殿の御座ふねをもちくらがおきへをし出すかれもをそれでちかづかすたがひにをそれでよりもせで五十よちやうをへだてつゝ三とせ

の春をぞをくられけるむくりが大將りやうさう一陣
にすゝみいで天をひゞかす大音にてわれらがいくさ
の手立にはきりをふらするならひ有きりふらせよと
げちすれば承ると申てきりんこくの大將ふねのへい
たにつゝたちあがつてあをきいきをつくいかなるじ
ゆつをかかまへけんきりと成てぞふりにけるはじめ
はうすぐふりけるが次第／＼にあつく成て月とも日
とも見えわかすこくうちやう夜のごとくにて一日二
日にてはれもせで百日百夜ぞふりにけるさしもにた
けきゆみとりもきりのまよひにわろびれてゆみのも
とすゑをだにも寒らざればひくべきやうこそなかり
けれこのきりばかりにおかされてさうはのみくづと
ならん事うかりなんとぞなげきける大臣殿はむねん
至極におぼしめしいまならではいつのときかみのち
からをあふぐべきとおぼしめされけるあひだうし
をむすび手水とし南無天照皇太神宮そのほか六十餘
州の大小の神祇此きりはらしてたび給へときせいを

申させたまひければあらありがたやきせいの志るし
はや見えて伊勢の國おきふくあらしにきりもほどな
くすみよしのまつふくかせもすゞしくてまよひのや
みも白山のゆきよりはやくきえければいつしかかし
まかんどりもよろこびのほをぞあげにける大臣殿は
なめならず御よろこび有てさらばいくさをはや
めんとてはしふねおろさせ給ひ態大せいはむやく思
ふ子細のあるぞとて十八人を引ぐしてむくりが船へ
ぞかゝられけるりやうさくわすいこれをみてたう
らうがをのといさみつゝほこをとばせつるぎをなげ
四はうてつはうはなちかけ天地をうごかしせめけれ
ども大臣ちつとも御さはぎなくむくりが船へぞかゝ
られけるふねのへさきにつかせたるくろがねのたて
のおもてにははむにやしんぎやうくわんおんぎやう
こんでいにてかゝれたるそんせうだらにの中よりも
しややしややひしややといふもじが三とくふしぎの
矢さきと成てむくりがまなこを射つぶいたりふどう

のしんごんにかんまん二つの文字がつるぎと成てと
びかゝりおほくのむくりが首をきる觀音經のめいも
んにおふるきうなんといふもじが金のたてと成てむ
くりが矢さきをふせげはみかた一騎も手もおはずさ
てこそ諸人ちからを得ちんこのかつせん手をくだく
大臣殿は御らんじていつのれうぞとおはせ有てくろ
がねのゆみのつるをとすればくものうへ迄ひきあ
り三百六十三すぢの矢を残りすくなくあそばせばり
やうさうはうたれぬくわすいはらきりぬとぶくもと
はしる雲かれら二人はいけどられぬそのほか以下の
むくりどもあるひはうたれはらを切てうみへ入て死
するもあり四萬ぞうにとり乗たるむくり多くうた
れてわづか一萬ぞうになるさのみはつみになるべし
とて起請を書せたすけをき本地へもどさせ給ひて日
本はいくさにかちぬとて八萬ぞうのふなうちのよろ
こびあふ事かぎりなし大臣殿は此まゝ御歸朝有なら
ばめでたかるべき事どもをこのあひだのながぢんに

せいきをつくさせ給ひめのとのべつぶつをめしてお
ほせけるはいづくにか島やあるあがりて身をやすめ
んとの御誕なりべつぶ兄弟承てはし船おろしたづぬ
るになみまにひとつ的小島有げんかいがしまこれな
りみかたのふねをば志のびやかにあげ參らせ御しき
がはをのべいはのかどをまくらにせさせ申すいめん
ならせ給ふだいちからにくせやらんね入てさうなく
おきさせたまはず夜日三日ぞまどうみ給ふ

さる間べつぶ兄弟はとせんさの餘りにものびたりを
ぞはじめけるをとうとのべつぶのしんが申けるはあ
らめでたやこの君先度はつくし九箇國をたまはらせ
たまひうへみぬわしと御座ありしが剩 このたびは
おほくのむくりをせめほろばし給へば日本國をたの
さまたげなくたまはらせ給はん事のめでたさよ人の
くわほうをねがはりみな此君のやうにと申兄のべつ
ぶが是を聞さればこそとよその事よきみはさやうに
とみ給はれわら兄弟はもとのまゝにてくちはてむ

事こそ口惜けれいざこの君をうち申しうなくして御
あとを知行せんと申をとうとが是をきゝあらもつた
いなの御たくみや候此きみの御おんをあめやまにか
ふぶり人と成し我等ぞかしいにしへの御おんをわす
れ申われらが手にかけ申ならば天命いかでのがるべ
き御志あん有べく候べつぶ此よしきくよりも扱はな
んちはきみと一たいよなつゐにこの事もれ聞えなば
われ一人かとがたるべしよそにかたきはなきぞとよ
わどのとあふて死なんとてかたなのつかに手をかけ
てとんでかゝらむとすをとうとがこれをみてげにて
さやうに思召給はいたとへば手にかけころし申さず
ともいきながら此島にしてをき申て歸るならばと
ろはわづかのこじまにて十日ばかりも御いのちの何
にながらへ給ふべきあいのべつぶが是をきゝこはお
もしろくも申されたるものかなさらばさやうに仕ら
んとていたはしやきみをばげんかいがしまにしてを
き申ものふねにあがりみかたのぐんびやう共を近

付て申けるはいたはしや君はむくりが大しやうりや
うさうがはなつ矢を御きせながのひきあはせにうけ
とめさせ給ひて候をうす手にて御座有しをさりとも
さりともとたのみをかけし志るしもなくつゐにむな
しくならせたまひて候御志がいをもくがにあげ御臺
所の御目にかけたくは存候へども諸神をいはひたる
御座船にて有あひだいたはしながら海底に志づめ申
て候さて有べきにてあらざればふね出せよとげちす
ればみかたのぐんびやう共はひとへにゆめの心ちし
て我をと召しとをしいだす「そう」二そうのふねな
らすそうじて船數は八萬そ一度にはをあげ梶をと
れば天地もひらくばかりなりこのことどもに大臣は
夢うちさまさせ給ひてたれかあるとめさるれど御返
事申ものはなしこはいかにとおぼしめしかつぱとお
きさせ給ひてあたりを御覽ありければひと人もな
かりけりめしたる船を見給へばほをあげてこそをし
いだせさてはべつぶがこゝろがはりを仕るかたとへ

ばべつぶこそこゝろがはりをするともなどや以下の
ぐんびやうら我をばつれてゆかぬぞやのふねこち
へとのたまへどもみなふねどものをとたかくきゝつ
け申者もなしせて思ひのあまりにやかいしやうに
飛びたつていきをばかりにをよがせ給へど船はうき
木の物なればかせにまかせてはやかりけりちからを
よばず大臣はうかりし島に又もどりそなたばかりを
見をくりてあきれてたゞせ給ひけりさうりそくりが
いにしへかいがんはたうにしてられしもこれに似た
りと申せどもせめて其はふたりにてかたりなぐさむ
かたもありところはわづかのこじまにて草木も更に
なかりけりさうてん廣くとをうして月の出べき山も
なしあしたの日は海より出又夕日もうみにいる露の
身はたのみなや夜ふけて聞もなみのをといはまのや
どをたのめてやうちふしかたもぬれまさるまれにも
こととふものとてはなみにながるゝむらがもめなぎ
さのちどりなく時は猶又ともゝこひしくていといあ

けゆく夜もながく暮行日かげもをそかりけれつゆの
いのちをくさの葉にやどすべきやうなけれ共なり
そつみていのちをつざうき日かずをぞをくらるゝい
たはしゝ其なか／＼に申ばかりもなかりけりさるあ
ひだべつぶきやうだいはつくしのはかたへふねをよ
せよろこびのきてうと風聞す豊後のこうに御座有御
臺所はめづらしききよく共をかまへさせ給ひ御出を
そしとまちさせ給ふところにさはなくしてべつぶ兄
弟うちつれて先御しよさまさして参るみだいどころ
は御らんじてあれはいつもの御さきへのあんない申
にこそ參りつらんと人してきこしめすべき事ををそ
くおぼしめし自身みすまじかく御出有てめづらしの
きやうだいやなにとて君はをそく見えさせ給ふぞ兄
弟志ばし御返事申さずかさねていかにとたづねさせ
給へばそのとき兄弟涙をながすていをして申さんと
すれば涙おつる申さずば志ろしめさるまじいたはし
や君はむくりが大しやうりやうさうと申ものとをし

ならべくませ給ひ二人ながらかいていに玄づませ給
ひてそのゝち又も見えさせ給はねばそのおもひのみ
ふかうしていくさにかちたるゑるしも候はずさりな
がら御かたみの物をば給て候と御させながとかねの
弓御劍をそへて參らせあぐるみだいこのよし御覽じ
てこれはふしげの事どもかなかたきとくませたまは
んにいつのひまに御かたみをといめて海にいり給ふ
べきぞや前後ふかくの事を申ものかなあはれこのも
のの兄弟を取ておさへてごうもんしめしとはばやとは
思へどもはかなきによしやうの御事なればこゝろひ
とつにくたしつゝれんちうふかくいり給ひかたみの
ものをめしあつめいだきつかせ給ひてりうていこが
れたまひければ御まへなかゐのねうぼうたち一度に
わつとなきければよそのたもとに至るまで玄ぼるば
かりにあはれなり

其後べつぶ兄弟打つれて急都へ上りよろこびのき朝
と風聞す天下のはんじやうよのきこえ何事かこれに

まさるべきと上下さゞめき給ひけり玄かりとは申せ
どもだいじんどの御きてうなきあひだ天下はやみの
ごとし御父左大臣御母御臺所としたけよはひかたぶ
きさかりの御子にをくるゝ事はかれ木にえだのなき
ふせいつれなきいのちにかへばやとなげき給へどか
なはずうちよりのせんじには大臣がきてうするなら
ば日本國をと思ひつれどもうたれぬるうへちからな
したれにけじやうををこなふべきべつぶ兄弟にはつ
くしの國司をとらするぞいそぎまかりくだりごけに
みやつきだいじむがけうやうねんごろにとへとのせ
んじなりべつぶ承てあんに相違のせんじかな日本國
をと思ひてこそ君をばふりすて申たれめづらしから
ぬつくしへとて又こそくだりけるとかやべつぶみち
みちあんじけるはさもあれ我君の御臺所は天下一の
美人にてましませばかせのたよりのたまづさを參ら
せて見んするにうけひき給はゞ玄かるべしそむき給
ふものならばふしづけ申さんとたまづさねんごろに

こしらへこれはみやこよりの御状なりとてさゝげければきんじよのねうぼうとりつぎみだいどころにまいらせあくるみだいどころはみやこよりの御状を聞召なかくうはがきをだにも御らんじあへすいそぎひらいて見給へばおもひのほかに引かへてべつぶがかたよりのたまづさなりあまりの事のかなしさに二つ三つに引きかしこへがばとてさせ給ひいのちあればこそとの給ひて御まほりがたなをめしよせじがいをせんと玄たまへばめのとのねうぼう參り御まほりがたなをむばいとり申御道理にて御座さふらふ三條みふの御所よりもかならず御むかひのまいりさふらふべしいのちをまたふしたまへととかくなだめたてまつり返事をせぬ物ならばふとくしんなるべつぶにていかなるしよぞんかたくむべきとめのとの女房がそばよりも返事をする

三とせの後の新枕我にかぎらぬ事なれ共すまふ草も取くにひけばやなびくならひ也ま見えむ事はやす

けれどもきみのむこくへ討手に御むきのときうさのみやにまいり千部の經を書よまむと大願を立七百よぶはかきよみぬいま二百よぶはかきよますこのしゆくぐわん成就の後はともかくもと書とめてこれは御臺所の御返事なりとてかへす使は急ぎ立歸りべつぶどのにみせ奉るべつぶひらいて見奉りあらめでたや扱はなびかせ給ふべきやしゆくぐわんじやうじゆの間はいか程か有べきと百年をくらす心ちしてあかしくらしまちゐたり其後みだいどころかずのねうぼうたちをめしあつめさせたまひ命あればこそかゝる事をもきくなればいまもふち瀬に身をなげ跡かきくれたく思へどもくさのゆかりも玄のぶゆゑそよぐこころもよしあしと君がおもかけのゆめうつゝにたちそふ時は又玄したる人とは見え給はずこひはいのりのものときくあふまでいのちおしき也大臣殿此まゝ御歸朝なきならばわれも身をなげむなしくなるべしさあらん時に御かたみを山野のちりとなさんよりた

つとき人にはうじ跡をもとはせ申さんとて御手なれ
のびはことわごんしやうひちりきさうのかずを取
あつめたつとき人にはうせらる四十二疋の名馬ども
みな寺々へひかれり三十二疋の鷹犬たかのきづなを切
てぞはなされける此程有したかじやうたちをも思ひ
思ひにちらされけり十二てうのたかどものあしをと
いてぞはなされける十二てうのそのなかにみどりま
ると申ておほかの有けるがきみのなごりを忘たひ
てやたちさるかたもなかりけり御臺所は御らんじて
あれはきみの祕藏のみどりまるなるがつかれにのぞ
みてあればこそ羽をたれひれふしてはゐたらめあれ
あれ女房達ゑじきをあたへてはなし給へとおほせけ
れば承るとは申されけれ共いづれもみなねうばうた
ちの事なればゑかうやうを忘らずしてはんをまろめ
てそなふるこのたかうれしげにて此はんをくはへ雲
非はるかにとびあがりはねうちのべてとびけるがだ
いじんどの、御座あるげんかいがしまにとびつきぬ

はんをばとあるいはのうへにをきわが身もそばなる
いはおに羽をやすめてぞゐたりけるあらいたはしや
大臣殿は只うつせるかげのごとくにて岩間のやどを
たちいでみぎはのかたを見給へばこのほど見なれぬ
たか一もとはをやすめてぞゐたりけりだいじんあや
しく思召いそぎ立より見給へばいにしへ手なれしみ
どりまるなりあまりの事のうれしさにいそぎたちよ
り給ひてさてだいじんが此島に有とは何とて知てき
たりけるぞげに鳥類はかならず五つう有とはこれか
とよさてもこれなるはむは御臺所の御わざかや此は
んをたばんよりなどことづてぶみはなきぞ豊後にい
まだましますかみやこへかへり御のぼりかふちは瀬せ
となるならひかやいかに／＼とのたまへばこゝろぐ
るしきふせいでなみだばかりぞうかべけるだいじ
んどのは御うんじていまこれほどの身と成て此はん
ぶくしてあればとていくほど命のながらへむ鳥類な
れ共あの鷹たかのみるところこそはづかしけれくはでも

あらでとおぼしめすがさもあれみどりまるが萬里の
なみを分こしたる心ざしのせつなきにいで／＼さら
ばぶくせんとて御手をかけさせ給ひければうれしげ
にてこのたかが羽をたゝきつめをかき御ひざのまは
りにひれふしてものいはぬ計のふせいなり大臣殿は
御覽じてあらたよりもなやみどりまるなんぢがみる
ごとく本葉だにもなきしまなればおもひのいろをも
書やらずいかゝせんとおほせければこのたかうれし
げにて又雲井はるかに飛びあがるだいじんどのは御
らんじておばしもかくて候へかしあらなごりおしの
みどりまるやとおほせければさはなくしてみどりま
るいづくよりとりて來りけんならのかしは葉ふくみ
て大臣殿に奉るそぶがここくのたまづさをかりのつ
ばさにことづてしまこそ思ひおられたれわれも
思ひはをとらじと御ゆびをくいきり木葉にものをぞ
あそばしたるたんの落葉なりければたゞ歌一首かき
付てをしたゝみまろめてすゝつけにゆひつけてはや

かへれよと有しかばうれしげにてこのたかじ三日三
夜と申には豊後の御所にまゐりけりまださうてうの
事なるに御臺所はぎやうだうして御座ありしがみど
りまるを御らんじてなんぢはこくうをかけるものな
ればいたらぬところよもあらじ物いふものにてある
ならば大臣殿の御ゆく衛をなどかは申さで有べきぞ
あらうらやましのみどりまるやとおほせければこの
たかうれしげにて御前さして參りすゝつけをぶりあ
げゐなをりたりみだいふしげにおぼしめしくはしく
見給へば木葉に血のついたるありいそぎとりあげ見
給へばいにしへのんのことづてに一首のうたにかく
ばかり

とふとりのあとはかりをはたのめきみ

うはのそらなるかせのたよりを
かやうによませ給ひつゝ扱は此世に大臣はいまだな
がらへ給ふぞやは是こそいのちのあるおるしなれかみ
なきかたにてあれはこそ木葉にものをばあそばした

れすいりとすみ筆なればこそちにてものをばあそ
ばしたれいざや硯を參らせておぼしめされん事のは
をくはしく書せ申さんとてむらさきすいりのゑんの
すみかみ五かさねにふでまきそへ御臺をはじめ奉り
そのかす／＼のねうばうたちわれをとらじとふみを
かくとりあつめたるまきものはよしなきわざとおぼ
えたり

すいつけにゆいつけかまへて今度はとくまいれみど
りまと仰ければこの鷹うれしげにて又雲井はるか
にとびあがりはねうちのべてとびけるがむらさきす
すりのならひにて志ほのみちひに志たがつて時々を
もく成ほどに次第にひかれてさがりけりいまはとお
もひとびけるがおほくのふみとかみ共につゆふくみ
てをもくなりたゞ引にひかれつゝそのまゝうみにひ
たりてむなしくなるぞむざんなる志まにまします大
臣殿鷹だにもいまはかよはねば何になぐさみ給ふべ
きぞや此たかの又も參らぬはらしもへつふがかたへ

もきこえころきれてもあるやらんととき／＼かよふ
いきだにもかぎりのいろと見えさせ給ふ猶も命のす
てがたくてみるめあをのりとらんといはまのやど
をたちいでみぎはのかたを見給へばなみうちかゝる
いはまに鳥の羽すこし見ゆる大臣あやしく思召いそ
ぎとりあげ見給へば此程かよひし御たかなりあまり
の事のかなしさにかしこにどうとまろびゐてたかを
御ひざのうへにかきのせあらむざんのありさまやと
くはしくていを見給へば志づむもひとつことほりな
りむらさき硯のゑんのすみそのかす／＼のふみ共が
志ほにみだれて見えわかねどもこゝろ志づかに見給
へばとり／＼にこそ見えにけれこれやによしやうの
はかなきとはかみすみふでだに有ならば是ほどおほ
きいはほにていかほども物をばかくべきにすいりを
つくるはなにごとぞやさても此たかゝきかいかうら
いけいたんごくへもゆかずして又この志まにゆられ
きて二度ものをおもはするかならず生をうくるもの

こんはくふたつのたましる有こんはめいどにをもむ
けばはくはうき世にあると聞われものちのつゝま
りていまをかぎりの事なればめいどのみちのゑるべ
をしてつれてゆけやみどりまるわれをば誰にあづけ
てさてなにとなれと思ふぞとて此鷹にいだきつきり
うていこがれ給ひけり

彼大臣の御なげききみに見せばやとぞ思ふこれは大
臣殿おまにて御なげき豊後のこうに御座ある御臺所
の御なげきはなか／＼申ばかりもなしせめておもひ
のあまりにや宇佐のみやにまわり給ひ七日こもり願
書を書きてこめさせ給ふきみやうちやうらいどうべ
うしんもしも大臣殿きてうのゑみをふくませ給ひ二
度御目にかゝるならばうさのさうゑひ申べし玉のほ
うでんみがき立こがねの戸びらをのべひらきるりの
かうらんやり渡し老やこうのぎぼうしみがき立みぎ
りのいさごにこがねをませかべには六つぼうをちり
ばめていけにはたまのはしをかけるがきはくわうえ

うらんけいしくわいろうとはいでん四つのろうもん
たまのまぐさをみがくべしとうりやうのむねをうき
やかにゑんでんひさしをひろぐといかにもやうら
くむすびさげけまんのはたはくもをわけゑせんへい
はくゑしこまいぬこがねをもつてみがくべし大塔と
しゆろうをいかにもたかく雲のうへにひかりをはな
つてつくるべしゑきのさいれいべぢりんじはなのみ
のきをなすべきなり九本のとりゐをたかく立極樂淨
土をまなぶべしごくらくほかに更になし諸神のしよ
けう淨土とすあゆみを神にはこべばゑんたうよりも
ぶつだうにきする方便これなりそのかいていのいん
もいもたえせずあらたなりほうさいかみにいたせ
ばほだいのたねをつゝむなりそ／＼神と申はゑん
そくたるをすがたとし正直たるをこゝろとすちりの
うちにまじはりわれらにゑんを結べりほんぐわんか
ぎりあるならばわれをばもらし給ふなよ敬白とかき
とめてくる／＼とひんまひてゑんせむにとうど置七

日七夜まどろまで亥じやうしんにぞいのらる、

まことにかみのちかひにやいきのうらのつりんつり
におきへいでたるがみなみのかせにはなされてきた
のおきへながれゆき大臣殿の御座あるげんかいがし
まにふきつくる船人どもは亥まかげにあがりいと
物うきおりふしに大臣殿を見付申けうがるいき物有
やとてかなたこなたへにげさつておぢてさうなくち
かづかずだいじんどのは御覽じてあらくちおしやさ
てははやわがすがた人間とは見えざりけるや何と成
行事共とて御涙にむせばせ給へばなみだをながす體
をみてちつとこゝろががうに成てさもあれなんちは
いかやう成いきものぞととへば大臣うれしく思召有
のまゝにかたらばやとおぼしめすがもしもべつぶが
たの者にてもありもやせんと思召いつはりかうぞ仰
ひる是は一とせゆりわかだいじんどのむこくへうつ
てに御むきの時ふなぶにさゝれてむかひたりしもの
なりしがふしぎに船にのりをくれこのしまにすてら

れて候大臣殿御歸朝の後ははや三とせになるかとお
ぼえたり亥かるべくは御はうしに我を日本の地につ
けてたべとおほせければ船人共が是を聞あらふびん
の次第やなくしする身にはなにはにつきものうき事
のおほひぞや人の上ともおもはねばたすけてさらば
もどらふする風のこゝろを亥らぬなりわれ人くわほ
うめでたくばじゆんぶう次第に出すべし有ともうん
がつきはてなばなをしもととくはなさるべし只くわ
ほうをねがへだいじんげにもとおぼしめしうしほを
むすび手水とめされあらうらめしやなにとて日本の
佛神は我をばすてはて給ふらんくわんおんぎやうの
めいもんにうを大海けしこくふうすいこせんぼう
ひようだらせつたとひせんばうひようだらせつの國
におもむくとわれ一人がきねんによつて本地のきし
へつけてたべときせい申させ給へばまことに佛神も
ふびんにおぼしめさるゝか八大龍神なみかせとめ俄
に順風ふき來るほばしらのせみくちに八大りうじん

ことぐくおもてをならべ座せられたり船のへさきには不動明王のがうまのりけんをひつさげてこんがうけんごのさくのなはあくまをよせじとしゆごせらるゝかんまん二の御まなじりともにはかうもくぞうじやうでんびしやなてんたいくわうてんとらせつてん風天水天火天とう雨風なみをゑづめんためじやうかいげかいの龍神しやしんのとくをといめて夜日三日と申にはつくしのはかたにふきつくる有がたし共中々に申ばかりはなかりけり

ふな人申けるはこれ迄といけたるちうに我にゑばらく宮使恩ををくれといひければ大臣げにもと思召ならはぬわざを志たまひて恩をぞくらせ給ひけるこくないつうげの事なればべつぶのしんがつたへ聞いきの浦のつり人がけうがる者をひろいきてやしなひをくとつたへきくいそぎつれてまいれと御つかひたつそのころなびかぬくさ木もなしやがてぐしてぞまいりけるべつぶたちいでつくぐみてあらけうがる

いきものかな鬼かと見ればをににてもなし人かとみれば人にもなしたゞがきとやらんはこれかとよわれにゑばらくあづけよ都へぐしてのぼりものわらひのたねとなさんとてをしといめかどわきのおきなにあづけやがてふちをぞくはへける彼がどわきのおきなど申は年比大臣殿にめしつかへしものなれども御かほにも御あし手にもさながらこけのむし給ひ御せいもちいさくいろも黒く有しにかはる御すがたをいかでかみしり申べさせられ共なさけふかきふうふにてあらむざんとやせおとろへたるがきやとてかさねてふちをぞくわへけるある夜のねざめにおほかむばに語りけるは扱もせんぞのきみゆりわか大臣殿むこくへうつてに御むき有て又も御歸朝なき間そのおもひのみふかうしてそゝろにとしもよるぞとよさても御臺所はこうのちやうやにましますよなむば此よしを聞よりもさればこそとよその事よべつぶどのゝみだいにこゝろをかけさせ給ひ御たまづさのありしか

どもさらになびかせたまはねばむねん至極におぼしめし此二三日さきほどにまんうがいにふしづけ申けるときく是につけてもうきいのちつれなくひさながらへかゝる事をもきくやとてせきあへすこそ涼にけれだいじんどのはものごしにて聞召あらなにともなの事どもや今迄のちのおしかりつるも君にやあふと思ふゆへ今はいのちもおしからずあけなば急ぎたづねゆきまんなうがいけに身をなげて二世のちざりをなさばやと思ひ入てぞおはしける其後おほかがこゑとして今よりのちはいまくしうな泣きそとこそ申けれむばこのよしを聞よりもあはれげによの中に心づよきは男子なりおほちのやうにつれなしこそしうのわかれもかなしまねわれら日比の御なさけ只今のやうにおもはれていかに云共なかうぞとて又さめぐとなきあたりおほち此よしきよりもあらやさしのむばごせやさほど君を大事におもひ申さば物語をして聞すべしかまへにくちばしきくなおそ

ろしや彼べつぶどの、うしろ見の忠太はおきながをひにあるあひだ御臺所のふしづけられさせ給はん事をおほちかねて承り是をばさていかゝはせんと思ひあい亥のびとりひめみだいどころと御同年にまかり成を御命にかはるべきかとたづねてあればひめはなゝめによろこふで男子女子にはかぎりさふらふまじ御しうのいのちにかはらむこそさいはいにてさふらへ亥のびやかにと申程におほち餘りのうれしさにひめをばみだいどころとがうしまんなうがいけに亥づめ姫がゐたりしちやうだいにきみをばかくし申たれかたみはこれにあるぞとてかずのかた見を取出しむばが手へこそわたしけれむばはかた見をとりもちてこれはゆめかやうつゝかやさりながら君をたすけ申こそなげきのなかのよろこびなれ亥かりとは申せ共人間にかぎらず生をうけぬるたぐひの子をおもはぬはなかりけり三界一のどくそん釋迦むに如來だにも御子のらごらそんじやをば又みつけうととき給ふ

こしつてうは子をかなしみ志のらのなづきにはしを
たつるよるのつるは子をかなしみれんりのえだにや
どらすやざうこうしをねむりやぐわいのゆかにふす
ときくいきといき生をうけぬるたぐひの子をおも
はぬはなきものを我身をわけしひとりひめしのい
のちにかへし事うらみとはさらにおもはねどあらお
しのひめやとてりうていこがれ泣ければおほぢもと
もにくときこそ大臣殿は聞召ともにつれて志のび
ねのせきとめがたき御なみだやるかたなふぞ聞えけ
る大臣殿はたゞいまも立出名乗てきかせばやとおぼ
しめされけれ共志ばしとおもふしよぞんにて時節を
またせ給ふかくて其年もうちくれあらたま月にもな
りければ九國のざいちやうらみのとうをはじめべ
つぶどのをいはふいたはしやたいじんどのには御か
ほにも御あし手にもさながらこけのむし給へばこけ
まると名付申矢とりのやくをぞさしにける大臣弓場
にたゝせ給ひこゝにて運をきはめばやと思召あそこ

なる殿の弓立のわるさよこゝなるとのゝをしでのふ
るうとさんぐに悪口し給ふべつぶこのよしきくよ
りもいつなんぢがゆみを射ならふてさかしらを申ぞ
もどかしくば一矢射よ大臣殿は聞召射たる事は候は
ね共あまに人々のいさせ給へるが見にくきほどに
申て候べつぶ聞てきほどなんぢが射ぬ弓をさかしら
を仕るぞ是非射じと申さばうさ八幡も御ちけんあれ
人手にはかくまじぢきに切てすつべしとくいよとせ
めかくる大臣殿は聞召仰にて候程に一矢いたくは候
へどもひくべきゆみが候はずべつぶ聞てやさしく申
ものかなつよきゆみの所望か又よはき弓の所望かお
なじくはつよき弓の所望にて候やすきあひだの事と
てつくしにきこゝるつよげを十ちやうそろへてまい
らせあぐる二三ちやうをしかさねはら／＼と引おつ
ていづれもゆみがよはくしてことをかひたと仰けれ
ばべつぶこれをみてきやつはくせものかな其儀にて
あるならばだいじんどのゝあそばしたるかねのゆみ

矢を射させよ尤矣かるべしとてうさ八まんの御ほう
でんにあがめをくかねのゆみ矢を申おろし大臣殿に
奉るいつしかもとよりおんたらしかゝりのまつにを
しあてゝゆらりとはつてすびきしてかねの御てうつ
をうちつがひ的には御目をかけられずくわんらくし
てゐたりけるべつぶの志んに目をかけて大音あげて
おほせけるはいかにや九國のざいちやうら我をばた
れとか思ふらんにしへ志まにしてられしゆりわか
だいじんが今春草ともえ出づる道理にまかせてわれ
やみん非道にまかせてべつぶやみんいかにくと有
しかばおほとも志よきやう松浦たう一度にはらりと
かしこまりきみに志たがひ奉る

べつぶもはしりおりかうさんとて手をあはするいか
でかゆるし給ふべきまつらたうに仰付たか手こてに
いましめかゝりの松にゆひつけ自身立出たまひてな
んぢが志たのさへづりにて我に物をおもはするいん
ぐわの程を見せんとてくちのうちへ御手を入志たを

つかんで引ぬいてかしこへがはとなげすてくびをは
七日七夜にひきくびに志たまへり上下萬民おしなべ
てにくまぬものはなかりけりをととのべつぶのし
んをもおなじごとくざいくわあるべかりしを嶋にて
申ことばのなさけを有のまゝ申さらばなんぢをばる
さいにせよとていきのうらへぞながされけるそのゝ
ち大臣殿こうのちやうやへうつらせ給ふ御臺このよ
し聞召ひとへに夢の心うしてたもとをかほにあてな
がら涙とともにいで給ふあはぬがさきのなみだはこ
とはりなれば道理なりあふての今のうれしさにこと
の葉もたえてなかりけり何のつらさにわがなみだお
さふるそでにあまるらんみだいどころはうさのみや
の御しゆくぐわんのよしを御物語ありければだいじ
んなゝめに思召たてさせ給ふ御ぐわんは事のかずに
てかずならず金銀珠玉をちりばめたまふ其後だいじ
んどのいきのうらのつり人にたづぬべき子細ありい
そぎまいれと御つかひたついかななるうきめにかあふ

べきと只をににかみとるふせいでこうのちやうや
へ參り庭上にひれふすだいじんどのは御らんじてい
のちのしうにてあるものがなにとてをそれをばなし
給ふぞそれへ／＼と仰有てひろえん迄めし出されう
れしきをもつらきをもなどかはかんせざるべきと御
さかづきに指そへていきとつしま兩國をうら人にく
だしたびにけりかどわきのおきなをめし出させ給ひ
てつくし九ヶ國のそうまんどころたび給ふおきなが
ひめのためにまんなうがいけのあたりに御寺を立給
ひ一萬町の寺領をよせさせ給ひけるとかやみどりま
るがけうやうにみやこのいぬゐにゑんごじと申みて
らをたて給ひけり鷹のためにたてたれば拵こそいま
の世までもたかお山と申なれ大臣殿の御ぢやうには
つくしに住居をするならばものうき事もありなんと
御臺所を引ぐして都へのぼりたまひけりあじろのこ
しは十二ちやうはらごしは百餘ちやうおほともしよ
きやう松浦たう御供を申さるゝきのふ迄はいやしく

もこけまるとよばれたまひしがけふはいつしかひき
かへて七千餘騎をひきぐしてみやこへのぼりちゝは
は對面有てのちやがて參内申さるゝみかどえいらん
まし／＼ていかにめづらしや先度べつぶが上りうた
れぬるよし申せしをまことぞと思ひてちよくしをく
だす事もなしふしげのいのちながらへ二度參内する
事一眼のかめのたまさかに浮本にあふがごとくとて
日のもの將軍になさせ給ふぞ有がたきさてこそ天
下太平國土あんをん壽命ちやうおんなりとかや

志だ

改誤

すでに承平は七年にて開元す天慶九年にかはる天曆
十年きのと卯彌生すゑつかたに相馬殿のひめぎみを
小山の太郎にとらせらるゝをやまの太郎ゆきしげは
のぞむ所望のかなふうへよろこびこれに玄かじとて
むかへもてなしかしづき申ひとつには仁儀の法とい
ひ草のかげなるさうまどのゝおぼしめされんところ
も有けうやうふかく申さんとてさむがのせつしやう
をきんだむし有時はせんをひき又有ときは經を書て
おもひいりてぞとぶらひける玄だにましますみだい
どころつたへきこしめされてをやまの太郎ゆきしげ
はあらおとこかとおもひてあればなさけのみ有人に
てありおやの事を思ふものだにもよにはまれなる事
ぞかしましてや見もせぬ志うとをかやうにふかくと
ぶらふ事はよくたのもしきこゝろかなときぐこな

たへ來れかしさうまどのゝかたみとも見ばやとこそ
おほせけり

有時みだい所うきしま太夫をめして仰けるはさう
まどのゝ末期の時おぼしめしやわすれけんあれほど
おほき所領をひめに一所も御ゆづりなしたとへばそ
れこそなくともむこのおもはんところも有志だのし
やうを半分わけ小山にとらするものならば玄だがゆ
ゆしきうしろだてよのらうどうを百騎二百騎たのま
んよりも一人なりともをやまはまことのせんにたつ
べきものぞ能はからひさふらへうきしま玄ばし御返
事を申さずやゝ有て申けるは古殿のあしき御はから
ひをいかでかおほせをかるべきそれ弓とりの君達に
ひめ子はつるに他人となるむこはいしやうちかゝら
すうつればかはるよのならひわりなくおぼしめされ
候はゞおりくのひきでものにたからはつくさせ給
ふとも所領にをゐては一所もゆづらせ給ふべから
ず人にはどんよくこまうとてよくしんうちにふくめ

ば玄たしきなかもうとうなり候よそ／＼ながらの御

對面こそなか／＼する世迄もめでたくわたらせ給ふべけれ小山殿に御たいめんもむやくの御事たるべしと以外に申けりみだいこのよし聞召御返事なふてたゝせたまひいつしかさうまにすぎをくれうちの者さへかろしめておかしきものとおもはる／＼わほうのほどのつたなきよなから／＼うきよに有がほにいへをもちてせんもなし玄だとのにいとまごひたつとき山のかくれがにも引こもらばやなんど／＼ふかくぞうらみ給ひけり玄だとのきこしめされては、子のうらみは御道理あすはなにともならばなれ一人まします母上の御意にられてはせんなしとて信太の庄を半分わけは／＼うへにまいらせらるは／＼うへな／＼めならずに御ようこび有て小山のたちへをくらせ給ふをやまな／＼めによろこぶでひとつにはむこいり又はよろこびの所知いりなりければあじろのこしは八ちやうはりごしは十二ちやうそうじてきばは三百騎上下は

なめきゆ／＼玄くしてしだの館へぞうつられける

新殿をつくらせかくて爰に住給ひ今みたち殿とはやり玄だの先祖の郎等ども日々に出仕はひまもなしされ共うきしま父子六人はおり／＼ばかりの出仕にてさながら御前につめざればみだいの御意もうすぐ成何はに付て昔よりもうき事共おほくしてこゝろのとまる方もなしよの有さまをみると後世あやうかりければながらへざらん物ゆへにしやつまでと思ひきり玄だの河内にひきこもりいんきよしてこそゐたりけれ御臺此よしを御覽じてあらおかのうきしまがふるまひやそもあのうきしま太夫を郎等にもたぬものは世にはすまれぬものか小山殿一人だにもましまさば何の子細の有べきとよろこびをなしてさかへ給ふさりながら浮島太夫はいんきよしぬ玄だはいまだようちなり大事のちけんまるかし家につたはるてうほうをうちにをきてはせんなしとて一つものこさずをしまくつてをやまの太郎にあづけらる、

さるあひだをやまんなき所にひまこもりくはしくみ
るにまきかどだい／＼よりももちつたへたるせうも
んども一つものこらずこゝにありなに／＼玄だ玉つ
くりとうてうは八萬町の所也あらおびたゞしや此内
わづか一萬町それがし知行仕るをだによにふそくも
なきとぞんするましてや殘る七萬ちやうひたち下總
兩國のおほいのすけとなるならばわれにましたるゆ
みとりの國に二人ともあるべきかとやがて大よくし
んぞ出来るかゝるめでたきてうほうをさうなくあづ
かる事天のあたへとぞんすれば安堵を申さんそのた
めにくまのまふでに事よせていそぎくにを打たつて
都へぞのぼりける關白殿ノ誤天下につき申あんどのむねを
そうもん申うちよりのせんじなりさうまが爲には一子で候
なにものぞとのせんじなりさうまが爲には一子で候
ゆづりの手つきせうもんども代々の御書共を玄せう
だゞしく參らせあげ理非をすまひてそうもむす其上
國はうとくなりようにも玄よしにも當別別當ノ誤にもたから

をあかせていさせたりける君にもこがねれうの馬
れうら金銀のたぐひを數をつくしてまいらせあぐる
左右の大臣きさきのみやねうばうたち其外の人々に
もたからをあかせていさせたりけりたとへばてき
はうささうるともなどかはかなはであるべきまして
あらそうものはなしむくうしさいに申なしあんど給
はりくだりけりさるあひだ小山みち／＼あんじける
は御臺所と玄だとのに少分なりともとらせふちせば
やと思ふがいや／＼かゝるむづかしきものをたすけ
をくならば後のよのわづらひと成事も有べしたちま
ちうしなはんと思ふがそれは餘りなさけなし玄よせ
ん領内にをかぬ迄とおもひ國もともにつきしかばさ
きへ人を立みだいどころと玄だとのにひたち下總兩
國に安堵はかなふべからずとをきくにの玄らぬ里へ
とく落行給へんじも國にまし／＼て我ばしうらみ
給ふなとをつたてのつかひをたつるみだい此よしき
こしめしひとへにゆめのこゝちしてうつゝとさらば

わきまへずをやまとのが所存にはてんまはじゅんが
入かはりたるかやいかなる事にてかくいふぞとくど
きなげき給へ共あらけなきつかひにてなさけをして

てふるまへば浮島太夫が言葉のすゑいまさら思ひ玄
られたりさてあるべきにてあらざれば玄だとのばか
り御ともにてなみだとともにいで給ふけふいで、又
歸るべきみちだにもわかれといへば物うきにけふ出
てのそのうちに歸らん事もかたかるべしゆくもとま
るもをしなべてもろきは今になみだかなかひの國に
聞えたるいたがきの里といふところにたづぬべき人
ありて彼さとまではおちゆき給へとたづねる人も跡
なくなるなにはにつけてたよりなしいまはいづくへ
行べきぞ名はいたがきと聞きけれどかせもたまらぬ
ぬ事なれど頼もしきは人の郎等也さうませんぞの家
人さつしま兵衛むらをか五郎をかへの彌次郎たかみ
の左衛門この人々をさきとして以上十一人御あとを

玄たひ申いたがきのさとにまいりきみを見付申よろ
こぶ事はかぎりなし

さて／＼なにとすべきぞと内儀ひやうちやうとりど
りなりそのなかにとつてもさつしま兵衛す、みいで
て申われらがせんぞのさつしまたゆふ主君らうどう
のけいやくを申君もわれらも三代也せうへいの合戦
はじまつて數度のたゞかひ有しかどもつるにふかく
をかゝざりしにきみもにやくに御座あり我等もわか
き者なればをやまとのにいやしまれ無二の本領おふ
りやうしてをひいだし申むねんさよいつまでかくて
こらふべき敵は大せいなれ共ぶせいでうかゞふはか
りごと夜討に玄くはよもあらじもとより我等あんな
いしやひまをうかゞひ玄のび入三方よりも火をかけ
一方よりも切ていり千騎萬騎のなか成とも思ふかた
きは只一人をやまとくまんす事其は何の子細の有べ
きとはや手にとるやうにぞたくみける其中にとつて
もといったの太郎が申やうこれこそよからぬせんざな

れ理をもちながらのあらせんぎは思ひもよらぬ事にて候さいさんつがふたさたにてなし一もんだう二もんだう三もんさむたうつがつてまけをはつたるさたをだにもおつそふかんと名付て又取たつるはさたのはうましてや一度もせざらぬさたをてきはうさへぬそのさきにむくうに申なをしてたまはるところの安堵なりあれはまさしきたしやう是はさうまの御子とはよにはかくれもましまさずたとへばせうもんあなたに有とぬすみとられししよけんを立などかは取てかへさるんと理非をすまひていひければ尤此義に同するとて御臺所と玄だとのをぐしてみやこへのばかりけり小山此よし傳へ聞さればおんをみておんを玄らざるはぼくせきのごとしあはれみをたれたすけをきたればかたきとなるこそやすからねのぼせ立てはかなふまじ道にてをつつめてうてやとてくつきやうのつはものを七十餘人さしつかはすかゝりけるところにこしまの五郎の申やううつては國にかくれ候

まじ理のなればこそうつたれとてやがてほんりやうをばめさるべしさればむかしがいまにいたるまでちからに及ばぬかたきをば佛神申事のたちまちかなふよしをうけてたまはれば信田殿を調伏めされて御覽せよと申をやまげにもとおもひやがてかしまへ使者をたてかんぬしいそぎしやうじよせいつよりもきらめいてちうをつくしてもてなす酒も三こんと見えし時しやきん百兩よき馬にくらをひて引立たりかんぬしゑつきのいろ見えそぞろぎいさむふせいあり小山今はかうよとおもひあたりの人を遠々とのけ玄だをてうぶくすべきよしをひこへにたのみ奉る神主けしきかはつてこほくちおしき御詫かなわれらはかしまのしやにんとし天長地久御ぐわんゑんまんそくさいえんめいといのるより外別にひしゆつは候はず殊さら人をてうぶくすべき事はなかくみやうのちけんもおそろしう候さるべしきほどのかうそうへおほせつけられ候へと立てにげむとすをやまこのよしみ

るよりもゐたるところをづんと立てたもとをとつて
ひとつとやめさては御へんは敵方と一所の人や一期の
ふちんみの大事をありのまゝにかたらせてたのまる
まじきとはなに事ぞちから及ばず御身をばえこそは
返すまじけれとてすでに討むとしたりければせんは
うつきてかんぬしもはや事うけをそしたりけるには
かの事にてあるあひだ吉日えらぶまでもなし一所を
きよめだんをたてゝ本尊をあんちしたりけりてうぶ
くのだんの次第はおそろしくぞ見えにける

四面のだんをかざつてほうびようにはけの花にうも
くに山うつ木しやすいの水に井もりのちくらにはひ
つちのいひをもつてせうかうつかううしのはねけま
んにあせぼのはなをもりあかにはくじやの水をたれ
すでにとうみやうにはほそきのあぶら立にけりおん
じき日々にかはつて初一日のほんぞん地さうさつた
南むき二日は觀音北向三日はせいし東向四日はあみ
だ西むき五日はぐんだりがうさんせ六日はすでにこ

んがうやしや第七日にあたる日はちうぞん不動みや
うわうせめにせめてぞいのりけるされども道理なき
によつて其ゑるし見えざればぎやうじや面目うしな
ひて二七日ぞかぢしける是にも志るし見えざればお
んころ／＼せんたりしやなんまかるしやなむとぞせ
めにける珠數のをつかれきればこゝを持てひざ
をたゝきさんごをもつてむねをたゝきとつこを持て
かうべをうちいたゞきをうちやぶりちやうじやうよ
りもあへけるちをばふどうのりけんにをしぬつて是
はてうぶくにんの身の血成とくわんねんして天地を
うごかしせめければあまりにつよくせめられて五だ
いそんはしんどうしてがうさんせはとつこをふりこ
んがうやしやはほこをつかふ大いとくののりうしが
つのをふつてぞほえにけるちうそむふどうのけんの
さきになまちがついて見えしかば一ほうは成就した
りとてたんをやぶらせ給ひけるあらいたはしや信田
殿これをは夢にも忘ろしめされすあけぬくれぬとの

ばらせ給ひけるほどにをはりの國に聞えたるくろた
のしゆくにつかせ給ふされどもてうぶくかぎりある
によつて玄だとのにはおひたまはで母御臺におひ給
ふ事のいたはしさよされどものばらでかなはぬ道な
やみながらものばらせ給ふ日數やう／＼かさ成て近
江の國に聞えたるばんばの宿につかせ給ふ次第日々ノ誤歟
四大或ハ肢體におとろへ今はぎやうぶもかなはねば四五日とうり
うしたまへり信田殿をはじめ奉り十一人の人々はあ
とや枕にたちよりていかゝはせんとなげ、どもつる
にはかなはぬ生死の道あしたの露ときえ給ふあはれ
と云もありあり玄だとの御なげきたとへをとる
にためしなしたれとてもむじやうはのがれがたけれ
どかゝるあはれはまれなるべし扱あるべきにてあら
ざればむえんのひとをかたらひてけふりとなすぞあ
はれるなる十一人の人々は一つこゝろに申やう玄だと
の御くわほうはこゝまでなりとおほえたりいつま
でつきそひ奉り京よゐなかと玄んくせん又よの人を

たのまばこそ弓矢のきず共なるべけれ是をばだいの
ちしきとし世をのがれんと思ふとて玄のび／＼にも
とひきりまどろみ給へる信田殿のまくらがみにとり
をきていとまごひをも申たけれどさこそは玄たはせ
給ふべき玄のびねなひて出てゆくさすがたねんの御
なじみたのみし君にてましませばなごりのおしさは
かぎりなしされ共思ひきりつゝわかれ／＼になりに
けり

てん明ければ玄だ殿御目をさまさせ給ひてなげきて
もかなふべき道かやいそば／＼と仰けれ共御返事申
ものもなしこはいかにと思召かつばとおきさせたま
ひてあたりを御らんありければあらなに共なや十一
人の人々のたぶさばかりぞのこりける玄だとのこの
よし御覽してあらなさけなの玄わざやとてもうき世
をいとはゞなどもろともにつれゆかで年にもたらぬ
玄だ一人を何となれと思ひてすてゝはいづくへ行け
るぞとくどきなげき給へどもその玄るしもましまさ

すはらをきらんとし給ふところへ宿のていしゆ參り事の子細をうかゞひ申にはじめをはりの事共をくはしくかたり給ふていしゆ承てさほどの道理をもちらんなどやみやこへ御のぼりあつて御さたはなきぞ申せどもとも人ひとりもあらばこそうきよにすみてせんもなしすしきにたづぬるものあらばかく成つるとかたれとてねんぶつ申かたなをぬきすでに玄がいと見え給ふていしめ餘りのいたはしさに御かたなをむばひとり玄がいをとまり給へとよみやこまでの御ともをばこのおとこが申べし命をまたふもつかめはほうらいにあふとつたへたりつき人のはてをばいきてぞ見はて給ふべきしては何のきよくあるべきととめ申たりければ御玄がいはとまりけりあくればていしゆ御ともして都へとぞのぼりける五條にやどをとりてをききたの法をば申をしへてていしゆはいとまたまはりてばんばのしゆくにくだりけりまだとのたゞ一人部にとまりたまへども羽ぬけのか

ものみづなみにうかれてたゞぬふせいしかたわぐるまのなか／＼にやるかたもなきごとくにてみやこに日をばをくれどもさたするむねもましまさずしたえんをつたへねばながざいきやうもかなはずしたよりもなふておはしますしよせんかなはぬ事をあんするは却而ぐちの至なりわれひたちの國へくだりあねごを頼てゐんするにせいじんの後びんひまをうかゞひ一かたなうらみん事なにの子細のあるべきとおぼしめされけるあひだめづらしからぬ玄だへは又こそくたりけるとかやかぎりあらば我こそ人をふちすべけれどもとき世に玄たがふならひとてをやまが門のへんにたゞむであんないとおほせければうちよりもたそとこたふるいやくるしうも候はず玄だにて候萬事はたのみたてまつるかうさんなりと仰ければをやまこのよしつたへき尤かうこそあるべけれこなたへといはまほしけれども所存のうちをさつし申たるに便隙をうかゞつてひとかたなうらみんために

きたり給へるこゝろのうちかゝみにかけておぼえた
りおさへてうちたけれどもかうにんの法なればたす
け申片時もくににまし／＼てわればしうらみ給ふな
とはる／＼くだる志るしもなくもんよりうちへいれ
ざるはいと、むねんぞまさりけるあらいたはしや信
田殿はる／＼ちかくめぐりきて父のみはかをいまな
らではいつの世にかはおがむべきぞとおぼしめしみ
はかにまいり給ひ草木のはなをつみ手向何とてくわ
ほうつたなき身をひとつはちすのれいたいへむかへ
とらせたまはずしうき世にのこし給ふ事よとくどき
なげき給へ共ばうれいなればどくつより御こゑ出る
事もなしさく／＼と志たるかせのをとまつにぎんす
るばかりなりばう／＼と志たる草のつゆのすそもた
もともうち志ほれつきせぬものはなみだなり

れてとしひさしきうきしま太夫成けりかねては志ら
ざるすみよしのまつ年なればよろこびを引あはせた
るさいはいとてぐして河内に歸り五人の子共をちか
づけやこれ／＼おがみ申せなんぢらがこのあひだこ
ひ奉りたるにしよてんのめぐみあるによつて不慮に
まいりあふたるは一がんのかめのたまさかにふばく
にあへるがごとしつゝむとすると此事さだめて披露
有べしこの山里と申はむかしよりも能じやうくわく
いかにかたきがせむる共たやすく落つべしとおぼえ
ずなんぢらにいくさをさせ時々みてめさまひてとし
を送てゐんするにさだめてみやこへもれ聞え國のみ
だれはなに事ぞとかみの御つかひ立ならばとりつゝ
きをつそを立てよろこびのさたをきはむべしいまこ
そいしのせいなりともつゐには國をおさむべじ俄に
あはてゝなにかせんたにくみね／＼尾つゝきども
を人夫をそろへてほりきらせよはしりどうつきいし
ゆみ爰かしこのつまら／＼にはりかけさせよかゝり

をたかせかひだてをあげうちとけゐるなどげちすれ
ば子共もなゝめによろこふでとてもきゆべき露の身
をきみゆへ玄なんうれしやとよろこびいさむぞたの
もしきつゝむとすれどこの事小山がかたへきこえけ
ればをやまおほきにおどろきさてはせんぞの郎等に
うきしまがたのまれけるや方々ひきあひつのつては
ことの大事たるべしいまだちからくなきさきにはや
よせよと申承ると申てをやまがしつしよこすか大將
にて一の木戸迄せめいりけれども大勢うたせ引かへ
すかくてはかなはじとて小山が舍弟三郎ゆきみつ三
千餘騎をそつしこゝをせんどゝたゝかひけれどもこ
れも大せいうたせてひつ返すさては自身むかはでは
かなふべからずとをやまどののむかはれければひた
ち下總兩國にのこるつはものは一人もなし城にもこ
こをせんどゝたゝかひけれ共げにやよせ手は國がひ
とつに成て谷をもみねをもへいちに道をつくらせあ
ら手を入れかへせめければさのみはいかでこらふべき

ぞや二三の木戸をも打やぶられつめの城にぞこもり
ける父の太夫やぐらのうへより大音あげていひける
はいのちをたばふ合戦は事によるぞよにある人を玄
うにもちすゑをたのむときにこそいのちもおしくお
もはるれいつまでいきて何どきに世に出づべしとお
ぼえず子ともはなきかうちじにをせよ太夫もこゝろ
やすく腹きらんと云まゝにれいのおほゆみとりいだ
しはりかへあまたもたせ矢びつ三がうかゝせ追手の
やぐらにはしりあがつていかにやねうばうこなたへ
きてさま引てたべいくさをして見せんと有しときね
うばう生年五十六かすをなるかみをからわにあげう
すぎぬかづきやぐらにあがりなにとて子どもがいく
さはこたれて今までをそひぞと玄きりにちからをつ
けられてはやうきしま太郎かけ出るその日をさいご
と思へばれうをぬふたるひなゝれにをにがたすつた
るさうのことびやくたんみがきのすねあてくまのか
はのもみたび玄ろがねにてへりがねわたしあくちだ

かにふんごうだり玄しにぼたんのはいだてしいとひ
おどしのよろひのみのときとかゞやくをわだがみと
つてひつたてくさすりながにざつくと着ゆつて上帶
ちやうと玄め九寸五分のよろひどをしをめてのわき
にさひたりけり一尺八寸のうちがたなを十六字にさ
すまゝに三尺八寸候ひし玄やくどうづくりのたちは
ひて四十二さひたるたかうすべりをはすだかにとつ
てつけおなじけの五まいかぶとにくわがたうつてゐ
くびに着左らあやのほろをさつとかけぬりごめのゆ
みの四人ばりせめのせきづるかけさせ真中にぎりよ
こたへ三のへだちの玄らあしげ七き八分あけ六さい
にきんぶくりんのくらをかせゆんづえにすがりゆら
りとのり堀のはばたにこまをすゆる兄弟五人のもの
共がおもひくのぐそくを着こゝろぐのむまにの
りたがひにたづなをとりちがへかけうかけしと玄た
りしをかたきみかたが是をみてあつぱれむしやのい
きほひかなとほめぬ人こそなかりけれちの太夫や

ぐらのうへにてつくぐみてあれくねうばう御ら
んせよいづれもきりやはをとらぬよなふあつたら
子どもをよにあらせ所領のぬし其なさずして只今こ
ろさんおしさよなはや玄ね子どもさはいひながら今
をかぎりの事なれば今一度こなたへかほ見せよたれ
も名残はおしいぞとさしもにがう成太夫もはらく
とぞなきゐたるねうばうがこれを聞からくとうち
わらひおひにほれたか太夫殿わかれたいまのなさ事
誤歟
かな泣てもかなふべき道かやいかにや子どもいくさ
はさすが大事のものこゝろががうなるばかりにて兵
法玄らでかなはずみかたぶせいに有ながら敵の陣に
かゝるにはすきのさきとかり矢かたぎよりんくわく
よく兩陣也ぎよりんといへるかけあしは魚のいろこ
を學べりくわくよくといへるは鶴の羽がひをへうし
たりこまのたづね玄ちすしてかたきがむぐうにきら
れぬぞむかふかたきをきるときはけあげのむちをち
やうとうつておもて返しのたづなをすくひおがみき

りに切すてよ弓手へかゝるかたきをばすみのたづな
きつと引さうかうのむちをうつてきれめてへかゝる
かたきをばたちのつかをかへしてさはらのむちをう
つてきれおほちもむばもこれにてみるぞさじきの前
のはれいくさぞふかくをかくなよ子共とておかしき
事はなけれども子共にちからをつけんがためさまの
いたをうちたゝきからくとわらひけりいとやはや
りた子どもが父にも母にもいさめられおごゑをあげ
てかけいづるまへのかはらはあしひきなりならひつ
たへしたづなの祕事をしへをかれしむちのきよくむ
ぐうにむまをのりつれかけてはさつと引てみればま
へのかはらのいしよりもおほきは死人なりけりとつ
てかへしてさつとはかけ五六度迄たゝかふたりねう
ばうこれをみて子どもがいくさのおもしろきにうし
ろづめしてとらせんとてかづいだきぬをさつとおろ
せば志たはむしやにいでたつたりくなのはかま
の志たにひざよろひにすねあてしもえぎにほひのよ

ろひ着たけなるかみをからわにすへ太夫がこのみし
つけのばうを志ばしかせとてうちかたげ追手の木戸
をひらかせほりのはへたにこまをすゑだいをんあげ
てなるやういかにや小山の人々我をばたれと思ふ
らんやうせいゐんより三代つのらいくわうに五代也
わたなべたうに大將軍みたのげんじがむすめにみた
やしや女とはみづからなりとしつもつて五十六二つ
となき命をば志だの御れうに奉るぞ我とおもはん人
人かけよ手なみを見せんとかぶとをとつてうち着つ
つすでにかけむとしたりけりちゝの太夫やぐらのう
へにてつくぐみて子ともががうなるは道理はゝが
心ががうなればかほどなるもの其が親子兄弟ふうふ
と成てよりあひけるこそふしげなれいかにや御れう
こなたへ御出有てをんないくさを御らんせられ候へ
ためしすくなき事どもとて志だとのをやぐらへしや
うじ申くはしく見奉てまさかどの御まなこに人見が
ふたつまし／＼て八ヶ國のわうと成て八ヶ年を御た

もち有しがきみにもゆん手の御まなこに人見が二つ
ましませばわうゐまでこそおはせずともかならず坂
東八ヶ國のぬしとはならせ給ふべしたとひわれく
討死を仕るとも君はいのちをまたふして廿五まで
は御まち候へかならず二十五にて御代にたゝせ給ふ
べしわれらもそれがおもはれて子どもが命もおしけ
れど當座のはぢをかゝじためみなうちじにをつかま
つるおほちもむばもうちじにせば御身はかたきにい
けどられてをやまがたちにとしを經てよろこびの御
代を待給へいとま申てさらばとてやぐらをゆらりと
んでおりひとまどころへつゝといり一牧ませのおほ
あらめそでをはとひてからとすてどうばかりゆりか
けえびらがたなくびかきがたな三こし迄こそさひた
なぎなたの四尺八寸有けるがえをば三尺五寸にこし
らへひたえにかねをのべつけたり今ちつと此え長し
てきりかずやをとらんと二しやくばかりにさしさげ

ふつゝとねぢきりなげすてころにまはひてふつてみ
てあつぱれかねやとうちうなづるてなむさんぼうあ
ぢきなやいか程のものがきられ妻子にものをおもは
せんなふねうばうと語りふうふともにこまのたづね
をかひくつてかたきの陣へかけて入おもてをあはす
るものはなしぶうをつかふ兵法にそばなぎいしづき
はらひうちこの葉返しみづぐるまむま人きらはずう
ちふする長刀つかふ兵法になみのこしげりりいなづ
まぎり車返しやるかたなねうばううちとをれば太夫
跡より切めくるさきに子共かくれはちゝはゝあとよ
りかけにけりものによくくたとふればてんぢくし
うのたゝかひにふひやうがさきにかくればわうぎや
うかくぎやうかけあはする金銀けい馬かゝる時太子
もかゝり給ひけり此たゝかひの兵法をしやうぎのば
んにつくれるもこれにはいかでまさるべきうきしま
太夫がなぎなたもこらへで三つにうちおれば大手を
ひろげかけあはせねぢ首つゝぬき人つぶてからたけ

わりにひつさひたりきのふけふとは思へ共三年三月の合戦也此たゝかひは夜日七日うたるゝものはかすらす子共も五人と申せどもこゝやかしこにをしへだゝりひとりものこらずうたれたり太夫ふうふばかりなりさのみにつみを作ては未來のごうとなるべきなりかちもせざらぬものゆへいざむばごせと申てたがひにかたなをぬきもつてさしちがへて死たるををしまぬものはなかりけりしだとのこのよし御覽じてうきしまが云言はさる事なれどもふうふ討死するうへ何にいのちをたばふべきと御こしのものをぬきも

せんぞの家人ちほら太夫におほせつくるちはら信田殿をあづかり申大事の囚人是成べしもしうせや申さんといましめたりし其うへをかさねてつよくいましめおくふかにをしこめてふけゆく夜半をまちたりしはひつじのあゆみのちかづくもかくやとおもひしられたりあねごこのよし聞召あさましやみづから男のこゝろとひとつに成かくなすとやおぼすらんさいごを一目みんとて人玄づまつて夜はんにちはらがもとへ御出ありしだとのつけたりしかす／＼のなはを御覽じてあらなきけなの玄わざやみづからにもつけずしてなどしだとのばかりにつけけるぞや何とてものをばおほせられぬぞうらみのこゝろにてましますか日のもとにあらゆるかみも玄ろしめせうしろぐらき事はなしとかきくどきのたまへば玄だとのきこしめされてうらむるしよぞんはなけれどもなみだにくれてことばなしとてもわが身はくわほうなく今をかぎりの事なればかやうにあこがれ出給ひ小山がかたさりの夜半にうちうみに玄づめはやとおもひさうま

どり申てる

小山此由みるよりもさればひとのくわほうの有ときは只何事も心に任せけるぞや去ながらはくちうにかうべをはねむ事も天下の聞えもしかるべからずゆふさき君の御じがいや候こなたへ御出候へとていけどり申てる

へもれ聞えかさねてうきめを見給ふな御歸りあれと
ありしかばあねごこのよしきこしめしたとひをやま
にもれきこえおなじふちにしづむともうらみとは更
に思ふまじかやうにならせ給ふ事たゞこれゆへの事
なればうきものもちてまいりたり御らんせよとおほ
せありたもとよりもまきものをとり出してたびにけ
りしだどのひらいて見給ふに本領のちけんまるかし
これは家につたはるべきてうほうにて候へばもちて
は何のゑきあらんとりて御歸りましませやあねご此
よしきこしめしそはさる事なれ共たとひ御身し、
たりとゑんまのちやうの出仕の時ぐしやうじんの御
まへにてさゝげ給ふものならば道理かぎりあるによ
りなど一こうのつみとがもうかびのがれで有べきぞ
たゞ持給へとありし時とりてぞもたせ給ひけるさて
しあられぬ浮身にてなどりのたもと引さきてあねご
はかへり給ひけりすでにそのよも夜はん斗の事なる
に小山よりもつかひをたて玄だをば玄づめて有ける

かとくしづめよと有しかばちはらちからなふして小
船一そうちこしらへ玄だとのをのせ奉り玄づめのいし
をくびにかけさせ申おきをさしてこぎいて爰にてや
玄づめんかしこにてやしづめ申さむとさすがにしづ
めかねうかれてしばしたいよへりあらあぢきなやよ
のなかにすまじきものはみやづかへわれ奉公の身な
らずばかゝるうき目によもあはじむかしはさうまに
つかへ申このきみを主君とあふぎしそのときは月共
日ともおもはずやさんがくよりもたかきおんしらん
よりもかうばしくつきそひまいり申せしがいつぞの
ほとに引かへてうつればかはるみのうさはわが手に
かけて玄づめなばくさのかげにてさうまどのさこそ
にくしとおぼすらんたとへこの事もれ聞えてあすは
ふちに玄づむとも一たんこのきみをおとさばやと思
ひてたゞいまこそ御さいごよと念佛をす、むれば手
をあはせたからかにかうしやうねんぶつを申さる、
ちらもともに申こしのかたなをひんぬいてなはさ

んくに切て捨しづめのいしばかりをばだんぶとう
ちいれ南無三ぼう今が見はてとたかくいひゑづめた
體にもてなしたすけてくがにもどりけりこれやしく
わうの御ときに入んたんが古郷に歸りしもかくやと
思ひゑられてあり

あけなば人めゑげしとてよの間にをくりたてまつり
あかつきかけてちはらはわが宿にぞ歸りけるすでに
其夜もあけゝれば小山よりも使を立ちはら御前にめ
されゑだをばゑづめてありけるか中々御尋迄も候は
ずゑづめ申て候小山聞てさほどゑづめるに其時の
けむ見をばなどこはぬぞやがて心得たりなんぢはさ
うませんぞの家人心がはりをしておとしゆるとおぼ
えたりたゞとはんにはよもおちじあれがうもんして
とへ承ると申てもざんやはらを取てふせちうにあ
げ七十餘度のがうもんはめもあてられぬふせい也五
體しむぶんきれそんじ餘りくつうの有ときはしやお
ちばやとは思へ共までゑばし我こゝろちはらは入日

のごとくなり信田殿をたとふれば出る日つぼむはな
なれやよめいをいふ其かぎりありかはれや命とい
かに問ふともおちざりけり水火のせめをあてゝとふ
是にもさらにおちざれば枯木よりもなはをさみげあ
ぐる時にはいきたえておろせばすこしよみがへる七
日七夜はひまもなくあらてを入かへせめければさの
みはいかでこらふべきあしたのつゆときえにけり小
山おほきに腹を立妻子はなきかかさねてとへ承ると
申て二人のわかはゝもろともに庭上にひつすゆるを
やまたちいでつく／＼みてかほどくわほうめでたき
身が世になきしだに思ひかへおとしゆることむねん
なれ男が云し事をしらぬ事はよもあらじいつはるけ
しきのあるならばやがて男がごとくなすべしとお
ほきにいかり給へばねうばううれへたるいろもなく
たとへばみぢんになされ申ともしらぬ事をは申まじ
有し夜のあかつきしだとのをしづめ申に出るとて小
船一そうちこしらへゑだどのをのせまいらせゑづめの

石を首にかけさせ申おきをさしてこぎ出るみづから
あまりのいたはしさにはまにくだり事のやうを聞さ
ふらへば信田殿の御こととしてかうしやうに念佛を
めされちはらもともに申だんぶとものゝなつてより
のちはをともせずとてもかやうにうしなはれ申身を
信田殿の御いのちにかはり申一まづおとし申さぬぞ
や是いつはりとおぼさはあたりの浦人をめして御尋
あれと申さらばめせとてあまたをめされくはしくと
はせたまへばその夜のおきのていなに事ありとはぞ
んせねどもみなこの體と申掛はしづめけるものをふ
びんにちはらをとひけると妻子を返し給ふあらいた
はしや志だとのなをもみやこのこひしくてあけぬく
れぬとのばらせ給ひけるほどにあふみの國に聞えた
る大津のうらにづかせ給ふかどなみこそおほきにう
んのきはめのかなしさはひとをうとへてうるつじの
藤太が小家に宿かりそめに御とまり有藤太は信田殿
を見参らせかどへてうらむそのためよもすがらこし

らへたり御年もにやくに御座あるがいづくよりいづ
かたへ御とをりあるぞと問ければ志だとのきこしめ
されてこれは坂東がたのものにて候がみやこへのば
り候藤太承て歩行の御ありきのいたはしさよみやこ
までの御供をばこのおとこが申さんとてやせたる馬
に鞍ををきしだとのをのせ奉り我身もともにいでに
ける不案内の御事なれば御やどをもそれがしがひけ
い申さんと五條に行てばくらう座の人あきびとのそ
うりやうわう三郎にいひかたりこま一びきにかへと
つて藤太は國に下るわう三郎がもとよりも鳥羽のふ
なとへうるそれよりも津の國さかひのはまへぞうつ
たりける四國西國にうりまはりのちにはほくろくだ
うのなだをうられさせ給ふわかさのをばま越前のつ
るがみくにのみなと加賀の國に聞えたるみやのこし
へぞうつたりけるものゝあはれはおほけれ共みやの
こしにてとやめたりおりふしはるの事なるに志づが
志わざををしほて田をうてとせめければくわといへ

るものを持をだのははらへは出給へどうつべきやうは
さらになしかのさむくわうのいにしへはゑんわうく
わうていかたじけなくみづからすきをになひて其一
けいの田をかへし五こくのたねをまきしかばゑんわ
うかんわう目出度ゑしやくのほたけも長かりきそれ
はけんわうせいしゆにてくにをはごくむ道理ありか
のしだとのゝのうげうは涙の種をまくやらん野にも
山にもたつたひめさほのはやしにひれふしてなくよ
りほかのことはなし

是をみる人々がいたづらものと申てとなりの里りん
ごくにかはんといへるものはなしもてあつかふてゑ
だどのををひいだし奉るあはれとよそにしらくもの
たちいでぬればあまのはら身はなからに成かみの
とゞろ／＼とあゆめどもとまりさだめぬうかれどり
なくねに人もおどろきあけぬる門をすぎのした道あ
るかたにまよひゆく身はうへ人となるまゝたもとに
ものをこつじきくさばにかゝる命をばつゆのやどに
本ノマ

やをきのらんさだむるかたのなきまゝあしにまかせ
てゆくほどに能登の國にきこえたるをやのみなとに
つき給ふおりふしをやのみなとへは夜たうがよせて
来るとてもん／＼かどをきりふさぎ用心きびしかり
けりかゝるとよそにてゑろしめされずもん／＼門に
たゞんで世になしものゝうかれたるにゑひましま
せと有しかばおりふしよはひかたぶきたるせう一人
見てあらおそろしやこのほど待かくるぬす人のけこ
見こそきたつたれあれよつてうちころせわかものど
もと下知をなすおりふしありあふわかものどもがろ
かひのをれやすのえを引きげ／＼たちいでさやうな
るしれものはいづくのほどに候とてゑだどの見つけ
申まづ一つえづゝぞうつたりける太夫かさねて云け
るは一つえづゝはあそび事かれといのものをたす
けをきものをいはすれば後には人がそんじ候ぞたゞ
ひたうちにうつてうちころせ若ものどもとげちをな
すいとゞはやりたるわかものがいたはしやゑだどの

をさんぐにうちふせ申今ははや御命もたすかりが
たく見えさせ給ふところにかのうらのとねのねうば
うなさけのみ有者にてゑだとのを見まいらせあらい
たはしやこの人はよにすてらるゝ人の子のおやのゆ
くゑをたづねかねかゝる遠國はたう迄來りたりとお
ほゆるなりまづひらこの人われにたべと申若者ども
これをきゝねうばうのおほせなりとも承る事も候べ
し又うけたまはらぬ事も候べしこの事をひてはお
もひもよらぬ事なりとひたうちにぞ打にけるねうば
うあまりかなしさにさけをもらふぞたすけよさけと
だにもきゝければおとなしきからわらはべ迄つえを
すてゝぞつきにける

かくてわかいゑにいれ申いつきかしづきたてまつる
有しほどはなけれどもかたちもすこしなをらせ給ふ
かゝりけるところにはるかおくむつの國そとのはま
のしほあき人かのうらへふねをのるとひはとねのも
となればしだとのを見參らせあの人我にたべとてお
ぼゆるなり我此としになるまで子をもたず我子にせ
さへてゑほにかへとつてふねにうちのせ申十八日と
申にははるかおくむつの國そとのはまにぞあがりけ
るかの太夫はなさけもさらになきものにて一兩日も
すぎさるにこのうらにすむものはゑほをやかではか
なはぬぞゑほやきたまへまれ人とゑほ木をこらせて
ゑほがまの火をたかすることものうけれいといゑほ
たれ衣きてしたもえくゆるかまの火をたくこそは物
うかりけれつらき中にもなぐさむはしほやのけふり
一むすびすゑはかすみにきえにほひてゆく衛のほど
もゑらなみのよる／＼そでをゑぼらしてひたちのく
にのこひしさはいとい日々にぞまさりけるあきも半
の事なるにかのうらの領主しほぢのしやうじどのと
いつし人はま出して夜もすがら月をながめてあそば
れしがゑだとの御覽じてこゝにゑほやくわつぱのめ
のうちのけだかきよ見いれなどのじんじやうさよい
かさまにも太夫はよに有人をかどへきたりたるとお

んとの給ひておきへてばふてとりたまひちやくそん
とがうしいつきかしづきたまひけりかくてげんぶく
せさせ申志はぢの小太郎殿と申てかみからしもにい
たるまでかつがうせぬはなかりけりかゝりしときの
おりふしこくし國にくだり給ひたがのこうにつかせ
給ふざいちやう御家人はせあつまつてひばん當番を
つとむる國司よりの御ちやうにはわれひたちの國に
有しときさうまとないきがちんじによつて兩方たえ
て年ひさしくそれも座敷のろんさかづきのけんぱい
さだめのなかつしゆへ也われ在國のあひだに座敷の
やうをさだめんとて左はかつまの太夫右は玄ばたの
しやうじそうじてざしきは十三ながれ人數かれこれ
三百餘人くもりたる者をつけざればはれがましさは
かぎりなしなかにもしほぢのしやうじどのわが身老
體なるあひだ養子のちやくそん小太郎殿をいだし申
さるゝならびのざいちやうこれをみてかなふまじと
ぞさゝへける國司よりの御ちやうには何とてしほぢ
うてかへらるゝ

國司御らんじていたはしゝ奥州の國司を三とせ

は自身參らぬぞ上をかるくするゆへが其義ならばし
ほちか本領ことぐくめしあぐべきとの御誼也しだ
どのきこしめされて名のらばやとおぼしめすがいや
いや國ひろきところにてもしをやまがないゑん一ぞ
くのありもやせんと思召名乗かねてましますがいま
のらずば養子の父母のはぢといひ又ざしきをたゝ
んもむねんなり名のらばやとおぼしめしけいづをと
り出して國司の前にさゝげらるこくしこのよし御ら
んじなに／＼かつらはらの親王よりも六代のこうる
んまさかどの御孫さうまの實子したの小太郎なにが
しどうぢふみけんしよなるあひだ五十四ぐんが其う
ちに是にましたるぞくしやうなしと國司のたい座ゆ
るさせ申なをり給ふぞめでたけれすでに御さかもり
七日とぞ聞えけるざいちやう御番人いとまを申てや
かた／＼に歸らるゝ玄だどのもおなじくいとまをか

かあひだ奉る其まにこくしは都へのぼつて安堵を申
て參らせんとてこくし都へのぼらるゝ去程に信田殿
きのふまではゑほをやき浮身をこがし給ひしがけふ
はいつしか引かへて五十四ぐんの主と成國をたいら
げ給ひけるひたちの國に候ひしをやまの太郎ゆきし
げはゑいぐわさかへてきはもなし七月七日ひとてた
からものを取いだし七夕にかすならひなり小山殿も
一本ノマ、金銀れうらかずのたからを取りだしてたなばたにか
されけるなかにゑだたまつくりちけむまるかしをい
かにみれ共なしこれはよの人のゑるべからず御身の
ぬすみ取てたのたからとなしたるとおぼゆるなりか
かるうしろぐらき人をたのみて何のゑきあらんはや
はや御出候へとていたはしやひめ君をひいだし申
あらいたはしやひめぎみもとよりもかく有べしとご
したればはじめてなげくに及ばずとてめのとばかり
を引ぐしてをやまのたちをぞいでられけるあさまし
やみづからたれを頼ていづくへとてかまよふべき

ぞや信田殿が身をいれしうちうみにゑづまんとては
まぢへくだらせ給ひけりかゝりける處にちはらがご
かずのふみ共をといめをかせ給へ共ひまがなくして
參らせすさぶらふこれ／＼御覽さぶらへとて有しむ
かしのふみ共をあねごの御手にまいらせあぐるあね
ごこのよし御覽じてあらうれしやゑだはいまだうき
よにありけるぞやかなはぬ迄もさたのためみやこへ
とてぞのぼりつらんいざやめのと是よりもみやこへ
上り尋むさりながらかくて都へのぼりなばよしなき
あだなや立たんとあたりのたつとき寺によりたけと
ひとしき御ぐしをそりこぼし給ひけりめのともやが
ておなじすがたにさまをかへこきすみぞめに身をや
つしみやこへのぼりたまひけり名所きうせきをなが
めこえさせ給ひつゝ三十五日と申にみやこにつかせ
給ひけりにしひがしの京をたづねぬれど其ゆきがた

もなかりけり清水にまいり南無大悲觀世音よろづの
ほとけのぐわんよりもせんじゆのちかひはたのもし
や今一度玄だとのにあはせてたばせ給へやときせい
ふかくぞ申さるゝ熊野のたうを尋とねんが脱スルカ南海道にさしか
かりてんわうじすみよしねごろこがはをうちすぎて
くま野に參りて三つのやまこゝろ玄づかにふしおが
みたづね給へどゆきがたなし四國九國をたづねむと
だうしやぶねにびんせむこうて四國に渡りあはぢし
まもこゝろ玄づかにたづねけりつくしくだりのみち
すがら長門のこうあかまがせきあしやのやまがはか
たの津しかの島迄たづねれどそのゆきがたもなかり
けりなごやを出てせとをゆくひらとのおほしままつ
らみろくじ玄づのさとくわんきごたうじまいはうが
島もちかく成ゆきのもとおりとをるにぞきゆるばか
りのわがこゝろ日向の國にとさの島きのさとにあは
しま豊後ぶせんをさしすぎて肥後の國にきこえたる
おとりたうの山をこえこひはしうしのみつしあそ

たけをこえすぎて筑前の國にいきの里遠國ははうに
いたるまで名所はつきぬ物也玄だの小太郎なにがし
ととへどこたふるものはなしつくしのうちにくもり
なしいぎやめのとはよりもちうごくさしてたづねむ
とすはうの國にさしかゝりおほちのこほりあさくら
やごくらくいちときくからに立とゞまりて尋けりは
りまの國にいりぬればあかまつ河原ゆいのしゆくた
かたのわたりやのゝやど名所きうせきをながめこえ
させ給ひてさかひのまつに出させ給ふさうまのもり
からずざき人まつがをかを尋ねれどそのゆきがたも
なかりけりすまの浦はすのいけと聞からにおなじは
ちすにのらばやな兵庫につけばみなと川すゝめの松
原うちでのしゆくこや野いたみ手嶋のやどおほたの
まちやあくたがはかうないやまざききつねがは舟に
乗らねどくがなはて月のやどるかかつら川うき世は
くるまのわのごとくめぐりきぬればこゝのえのはな
のみやこにつき給ふこゝのえの内にくもりなしいぎ

やめのとこれよりもとの道にさしかゝりくだらん
との給ひてわれをばたれかまつざかやあふさかの關
の清水にかけ見えていまやひくらん望月のこまのあ
しをと聞なる、大津うちでのはまよりも玄がからさ
きを見わたせばかたゞのうらに引あみのめごとにも
ろきなみだかな勢多のからはしはる／＼とたづぬる
人のおもかげをうつしもやせんかゝみやまゑちの河
瀬のなみぢりてすそは露そではなみたのひまよりも
すりばりやまをこえゆけばあれでなか／＼やさしき
はふはのせきやのいたまもる月見たるるのしゆくす
ぎてうゑしさなへのくろ田こそ秋はなるみとうちな
がめ參河の國のやつはしのくもでに物や思ふらんふ
じをいづくととをたうみこひを駿河の身のゆく衛ま
つよひの月も雲間を伊豆のくにしだにはいつか奥州
まで三とせ三月がそのあひだ志だの小太郎なにがし
ととへどことふる者はなしそのとしの文月半にたが
のこうにつかせ給ふころは十四日うらぼんとて上下

ばんみんをしなべて慈悲をほどこす日成けり玄だ
のも父母のけうやうのそのためにつじぐにふだを
たてせぎやうをひかせ給ひしがびくにたちを御覽じ
てあれ／＼しやうじ申せとてちぶつだうにうつし申
能にいたはりたてまつるあらいたはしやひめぎみぢ
ぶつだうにうつらせ給ひ夜もすがら御經をあそばせ
しが曉方になりしかばゑかうのかねうちならし御こ
ゑたかくゑかうありこの御きやうのくりきによつて
一切の衆生こと／＼むじやうばだいとせうすべし
ことにはちゝさうまどの母御臺玄だどの成佛とくだ
つなり給へ其中に玄だとのいまだうき世にあるなら
ば御此經の十羅せつによのくりきによつてきたうと
ならせたまひて信田の小太郎に今一度あはせてたび
給へなむさんぼう／＼と衣のそでをかほにあてもろ
きは今のがみだかな信田殿もちゝはゝのけうやうの
そのためぢぶつだうに御座ありて夜もすがら御經
をあそばせしがゑかうのころをきこしめし夢うつゝ

共わきまへずあひのしやうじをさつとあけくはしく
見奉りしにあねごのなりゆくすがたりする／＼と
はしりより御たもとにすがりつき是こそ志だの小太
郎にて候へとてきえいるやうになき給ふあねごもこ
の事をうつゝと更にわきまへず扱いかに小太郎かこ
れこそいにしへのせんじゆのひめでさふらふなれう
きときは道理なりうれしき今になにとてかさのみ涙
のこほるらんとむつまじげなる御ありさまよそのた
もともぬれぬべし

志だどのおほせけるやうはかほどめでたきよのなか
に何をかさして御なげき候ぞいさせ給へあね御前
われひたちのくにへうちこへあまりうかりし小山が
かうべをはね此あひだのむねんをさんせんとこそお
ほせけれ尤志かるべしとて五十四ぐんがそのうちよ
りもよかりけるつはものを三千餘騎そろへらるゝを
やまこのよしつたへ聞國にこらへがたふしてにげて
みやこへのぼりけるさるあひだこくしは志だどの、

安堵を申給て國にくだり給ひしがみちにてをやま參
りあひこまよりもとんでおりまつびらこのたびのい
のちを御たすけあれと申やすきあひだの事とてたば
かりよせてからめとり京づとゝ名付志だとのにたび
給ふ志だどのなゝめならず御よろこび有てむさし
のくにつまごひが野邊にひきすへくびうちおとした
まひてあしたの露ときえけるをにくまぬものはなか
りけりやがて志だとの上洛ましまして天下の御目に
かゝらるゝみかどえいらんまし／＼坂東八ヶ國を
志だどのにたび給ふこのついでにあふみのくにとか
や大津のうらを申うけつしの藤太をからめ取十日に
とをのつめはなし廿日にはたちのゆびをもひでくび
をひき首に志たまへり只人はなさけあれなさけは人
のためならずつるにはわが身にもくふとにくまぬも
のはなかりけりばんばのしゆくへうちこえまし／＼
てはる草と小太郎もえ出て候ぞうれしきをもつらき
をもなどかはかんせざるべきとをしまの庄三百町ば

んばのていにたび給ふひたちの國へ下向有て信田の
河内にて討死したりしうきしま太夫が子孫はないか
と問給ふ太夫が孫は三人めし出し候ひて三千町をた
びにけりちはらが後家わかもろともにまいればなゝ
めならずにおぼしめし坂東八ヶ國のさうまんどころ
を若どもにたび給ふやがて御身は信田の河原に御所
を立て御とし廿五にて御代にたゞせ給ひて日ばんた非ノ誤
うばんつとめさせゑいぐわにさかへ給ひけりあねご
のびくにおほかたとのと申ていつきかしづきたまひ
しすゑはんじやうときこえけり

満仲

それひそかにおもむるにおほつてほかなきは天の道なりのせてすつる事なきは地のとくなりはじめきよくしてすめる物はのぼつて天と成をもくしてにごれるものはくだつて地となるちうわうはにんたり是よりしてくんしのみちをこなはるゝものかをよそ仁王五十六代のみかどをば清和天皇と申奉る王子六人おはしますやうせいゑんさだひでの親王さだもとのゑんわう彼さだもとのゑんわうはびはひきにておはしますかつらの里にすみ給へばかつらの親王とも申さだひらのゑんわうさだよしのゑんわうさだすみの親王とて兄弟六人おはします中にも第六さだすみの親王の御子をば六そんわうと申六そんわうの御子はたゞのまんぢうと申奉る其頃みなもとのしやうを初て給はらせ給ひ上野守と申奉てゆみ矢をとつて天下

にならぶ人なかりけり嫡子津のかみ頼くわう二男大和守よりのぶ三男たゞのほうげむとてひえいざんはちふゑんをはじめてたてられし人なりすこぶるてうかの御まほりとしてうてきをほろぼし國を玄たがへ給ふ事はふる雨のこくどをうるほふすに似たりしやうりのくすりを以そせうの病をいやしけんはうのともし火をかゝげしうたんの暗をてらす玄かる間人うやまふ事かぎりなし爰にまんぢうおぼしめしたち給ふ事ありそれしやうじのならひうゐてんべんのことはりはみなゆめまぼろしの世の中也此しやばのちやうみやうをおもへばわづかに六十年下天のけうらうせう不定の夢なりゆく末とても夢ならざらんやせうじゆせんねんのみどりもしもの後の夢とつるにさむべしいかにいはんやきんくわ一日のさかへも露のまの身たもちがたし朝にはこうがん有てせいろにほこるといへどゆふべにははつこつと成てかうげむにくちぬよひにはらうげつをもてあそぶといへどあかつ

きはべつりのくもにかくれりわづかなるよのなかに
何にこゝろをとゝめてかいたづらにあかしくらすら
ん我今生にてかく弓矢をとつて人にをそれらるゝと
いふともまことのみちにをもむかんするときは數千
人のけんぞくども一人もつき玄たがふべからず只む
じやうのせつきにをつたてられあはうらせつにかし
やくせられんことのくちおしさよ佛法に近付三ばう
をうやまはんとおもへば弓矢のみちゆるくなるべし
とおぼしめされけれども思ひたち給ふその御こゝろ
すてがたくてあるたつとき上人のあんじつに入ての
給ひけるは我等ごときのしゆじやう等は何として後
生をたすかり極樂にわうじやうすべく候やとたづね
給へば上人きこしめされてかしこくも御たづね候も
のかな尤出家の玄るしにはさやうの事こそ承りたく
候へそれきんめい天わうの御代より佛法我朝に渡り
しやうぐう太子もりやをうち玄たがへしより此かた
ぶつぱうはんじやうの今にをいてそうきやうにこ

となり爰に法花經と申て八ぢくのきんもむの候が無
二無三のほうもんにて候かれにちぐうしけちえんし
給ふべしとおほせければまんぢうきこしめされてさ
て法花めうてんのほんしやくをば佛は何ととかせた
まひ候らんとたづね給へば上人きこしめされてそれ
法花はとんぢんちの三どくより我等衆生の佛生はま
さに出生すと見えたりぢよくすいうでいのなかより
ものりのはちすを開出すぢんらうまうざうはむさの
かくたい也これによつて一代八萬のはなは五時のは
るにひらき三代そくせの月ははつけふのあきに明ら
かなりきうせんたうちやうにたづさはりせつにんた
うくわつにんげんみな一ねんのうち也ほんなうそく
ばだい玄んしやうじそくねはんととけりゐんぬちも
みなこれむしやうのめうきやう也玄やうどもえども
ほんらいくしやく成とかやさても此御經を釋尊四十
餘年のせつけうの後八ヶ年に玄むじつのさうをとき
あらはしたまひて候この御きやうにげんせあんをん

後生せむしよととき又はにやくもんぼうしや無一
不成佛とのべたりいちげもんぼうのくどくは五はら
みつのぎやうにもすぐれ五ぎやくのせうだつはたう
らいさぶつのきべつをうけ八さいの龍女も南方むく
世界のしやうだうをとげたりいかにいはんやみ矢
をとり給ふこともわたくしならずわうばう佛法のげ
ご國家をまほりたみをはごくみ給はんゆへなり一世
つたしやうのくどく有へし佛もあくまがうぶくした
まふ經ありざいぞくの身にてましますとも御心のむ
けやうにこそより候はんすれかの天ちくのぢやうみ
やうこじ我てうのしやうとく太子も在家にましく
ながら佛法しゆぎやう玄たまひぬ十惡五ぎやくの輩、
もしゆゆのねんによつてむしゆごうのざいしやうを
せうめつすべき事はうたがひなく候なりまんぢうと
こそおほせけれどもまんぢうきこしめされあら有がたや
候その儀にて候はゝ法花經を一部てむじゆ申度候た
とへばぐどんに候共つねは參るべく候一字づゝなり

とも御さづけ候へと仰ければ上人聞召れて子細にを
よばずさづけ申べしさても此御經を釋尊ときたまひ
し時は草木國士玄つかいじやうぶつと見えたりそく
しん成佛をとげ給ふまでこそなくともすいりきえん
せつ申べしとてほどなく一部てんじゆ玄たまひける
とかやまんぢう心におぼしめすそれ人の一大事は後
生なり末の子を一人出家になしわれらが後生をとは
ればやとおぼし召びぢよ御せんと申て十二歳になり
給ふ若君をめしておほせけるはなんぢ寺へのぼりが
くもんしほうしに成われらが後生をとぶらひてたべ
と仰ければびぢよ御前はきこしめしあら何ともなや
人のうへにだにも出家のすがたはこゝろにそますお
もひしにいまさら我身にあたつて請ける事のむよう
さよとはおぼしめされけれどもまんぢうの仰にて有あひ
だちから及ばずりやうじやう申されければやがてな
かやまといふ寺へのぼせ給ふまんぢうかさねておほ
せけるはなんぢ寺へのぼりせはがくもんさいしよに

法花經をよくよみおぼえ其外よろづのぎりを志るべ
しと御やくそくありければりやうじやう申てらへは
のばらせ給へども御經あそばさん事は中ノ一おもひ
もよらずむりやうの木のかはをはざあつめよろづの
かつらをもつてくさりよろひはらまきなんどゝいひ
木なぎなた木だちをつくつて多坊のちごをかりもよ
ほしとびこえはねこへはやわざすまひちからわざか
ゝる武藝のまねならでは一かうよるひるたゞてんぐ
の矢とりのごとくなり志しやう同宿けうくんすれば
けつく却而ちやうちやくす寺一番のあくぎやうは此
若君一人のちやうきやうなりとぞ聞えけるまんぢう
此事を夢にも思召よらず今ははやびぢよ御せんきや
うをば能よみおぼえてぞ有らんよびくだし御きやう
よませちやうもんせんとおほせあつてふちはらのな
かつかさなかみつと申さぶらひを使にてびぢよ御せ
んをよびくだし給ふちごおもひたまひけるはあら何
ともなやこの二三ヶ年寺には候へとも經の一宇もな

らはず里にくだるものならば治定法花經よめとおほ
せあるべしいかゝはせんと思召がいまさらならふに
及ばずとてたゞのさとにくだり給ふまんぢうやがて
御對面有てめづらゝやびぢよ御せんはひさしく見申
さねばねんなふせいじん候やさてもやくそく申せし
御經をよみおぼえてぞ有らんそれくよませ申せち
やうもんせんとおほせければ承はると申て志たんの
つくえに八ぢくのこんでいの御きやうをならべちご
のまへにぞをかれけるまんぢう御らんじてかねて申
せし事はこれなりあそばせちやうもんせんと仰けれ
どもとかくの御返事も志たまはずまんぢう御らんじ
てなふなにとて經をばあそばさぬぞせひ一字もよみ
そんじそれがしうらみ給ふなとひざの上にたちぬき
かけてはやくよめとぞ仰けるいたはしやびぢよ御
前はつるに一字もならはぬ經の事なればひばとくま
でもましまさず赤面してこそおはしけれまんぢう御
らんじて頼む志るしのなきやつをばかくこそはから

ふべけれとてぬきうちにもやうと打給へばこのほど
てらにてなはせたまひたるはやわざのあるしにつ
くえのうへなる御經一卷をつとつてちやうりやう一
くわんの書と名付しつとゝあはせるながらうしろへ
ひらりと飛いなづまでん火ふゆうかげろふとぶとり
なんどのごとくにはやちらりとうせて見へたまはず
まんぢうおほきに御はらをたてさせたまひなかみつ
をめして仰けるはなんぢ此たちにてびちよがくびう
つて参らせよとてやがて御重代の御はかせを出させ
給ふ

なかみつはあまりの御道理至極にて御座有あひだと
かくの御返事を申さずしかうべを地につけ赤面すま
んぢう御らんじていかさまなんぢはいぎにをよぶか
是非うつてまいらせすば今生後生ふちうのものにて
あるべしと仰ければかねてぢたいの義はあしかり
なんとぞんじ御はかせを給てわが宿所にまかりかへ
るあらいたはしやびぢよ御前はなかみつがもんのう

ちへにげいりよにめんぼくなげ成ふせひにてたゞす
みたまふところへまかりかへるひたゝれのそでにす
がりつき給ひかねてより御うちにおほきさぶらひの
なかにとりわきなんぢをこそたのもしくおもひつれ
とてさめぐとなき給へばまさにうつてにつかはさ
れけれ共あまりの御いたはしさになふ何とてそれに
御座候ぞこなたへ御出候へとて内へいれ奉てなかみ
つ申さても御うちにおほきさふらひの中にたれにも
仰つけられずしわか君の討手をなにがしに給はる事
はひとへに御命のたすかり給ふべきゆへなりたとひ
それがしかくびをはうたれ申共御いのちにをひては
たすけ申べし御こゝろやすくおぼしめせと申ところ
へまんぢうの御方よりもかさねて使をたて何とてび
ちよがくびをそなはりたるぞとくうつてまいらせよ
とのかさねぐの御つかひたつなかみつ承てあら何
ともなや扱は御いのちにかはり申それがし腹を切た
りとも若君の御いのちたすけ給ふ事あらじさあらん

時は何にもむやくたるべし扱なにとすべきぞやまさ
にうてとおほせらるゝは三代さうおんの主君又たす
けよとおほせらるゝも主君にておはしますとやせん
角やあらましとかきあつめたるもし草なんたい爰
にきはまりてせひをもさらにわきまへずいや／＼こ
＼におもひいだしたる事あり若ぎみと御同年に参り
あふ子一人あり名をばかうじゆ丸といふ九つのとし
より寺へのぼせ今年十五にまかり成わかぎみと御ど
うねんにまいりあふこそさいはいなれ彼者をよびく
だし御命にかへばやとこそおもはれけれそうじてこ
のちごのこゝろざしよにうなんにして神妙なりけ
ればおしやう同宿もおほく有ちごの中にも一大事と
こそおもはれけれおほかたすがた亥んじやうにして
やうりうよりもたをやかなりはだへははくせつのご
としあたか十五夜の月の風情一たびゑめばもゝのこ
びありがくもん世にすぐれ一字を千字にさとるなら
びなきちごがくしやうの名を得たり殊には詩歌くわ

げんのみちにちやうじしゆえんゆうけう人にすぐれ
玄かる間一字のそうきやうあるひはこゝろをたかね
の月にかけおもひを玄がのうらなみによせざりける
はなかりけり一じゆの花をみてはみな我家のひかり
をあらそふごとく也およそ心ざしさんがくのごと
くきはわうこんよりもなをかたし半夜のかねのこゑ
あかつきのわかれをうらむ一たんのはうしわかれも
これもたゞおなじいつもこゝろに詩をつくりうたを
ゑいじてかんきよに月日ををくり給ひけりかゝるゆ
う成ちごのかたへおやきしよくして迎をのぼせちと
申だんすべき子細の候いそぎくだられ候へといへば
かうじゆ聞て此六七ヶ年か間父母にかうかん申さず
内々こひしくおもふところへむかへの來りたりけれ
ばうれしさたぐひなふして玄しやうどうしゆくにい
とまをこひやがて里に下る父なかみつはもんにたち
てまつちご父を見つけうれしげにて馬よりおりあゆ
みよりけるすがたこつがら禮義したるふせいおとな

しやかなりけりちゝづくぐと是を見てあらむざん
やかほどまでそだてをきたる玄るしもなく只今我て
にかけん事のふびんさよとおもへば玄のびのなみだ
せきあえずなんぢをたゞいまよびくだす事べちの子
細ならずそのゆへは主君びぢよ御せんまんぢうの御
意にそむかせたまひなにがしに討手を給はるところ
に又若ぎみのたのみにげいり給へば何としてなさ
けなくうち奉らんとぞんするそれ義をおもくして命
をかるくしさかひに望てかばねをとちうにする事
はくんしむの法君は臣をつかふるにおんをもつてしま
はくもんの玄君につかへ奉るに義をまばつて身をおしまざる
は忠臣の法なり恩にそくするしんかつゐに一度は主
君の御命にかはるべきもの也おやにかうある子は身
を捨てぼだひをとぶらふと云事有なんぢ此間寺にて
がくもんの玄るしにさだめて此むねをは能存知つら
んめんばくなき事なれどもあはれ此若君の御いのち
にかはり申てたべかしとおもひて扱よびくだしたる

ぞといへばかうじゆ聞いてにつことわらひうれしくも
うけたまはり候ものかな弓とりの子とむまれ候より
しては主君の御命にかはるべき事をはおもひまうけ
て候ひとつには御しうの御いのちにかはり申又はお
やの御いに玄たがはんする事こそさいはいにて候
へはやく首をめされびぢよごせんをたすけまいら
せ給へ身のいのちにをゐては露ちりほどもおしみ申
まじそれゑんおふのふすまをかさねても玄たいの
やぶれざる間也きくわくのちぎりをいたすもつゆの
いのちのきえざるほどいづくの里人かひとりとして
のこりといまり候へき只とくしやうをかへんこそ身
のよろこびにて候へ去ながらすこしの御いとまを給
はり候へ母子にさいごのたいめん申たく候といへば
なかみつ聞いてあらふびんの申事やいそぎたちこえた
いめんあれかまへて此事を母に玄らせたふなどい
へば其時かうじゆはらをたて扱は子ながらもみれん
玄ごくの者と思召御みかぎり候かそこのほどは御こ

、ろやすくおぼしめせときもけなげに申なし母の御
前に参りはゝを見奉てやがてなみだをながす母御ら
んじてめづらしかうじゆや此六七ヶ年があひだて
らに居たまゝくだりければさこそよろこぶべきと
おもふ身が我を見てなく事よとおほせければ其時か
うじゆおつる涙をおさへとりあへず申すさん候彼も
ろこしのかんわうここくをせめられしときかうせい
しやうぐんを大將とし百萬騎をそしここくへ御つ
かはされけるに合戦すでに十二ヶ年経てつるに軍
にうちかつて古郷へ引てかへるときとくしやうのみ
やこをよそに見はゝのましますところへゆき母を
見奉てやがてなみだをながすはゝ御らんじてこれは
どいくさにうちかつてよろこびにてのぼる人の何の
うれへの有てなき給ふそとおほせければ將軍きこし
めされてさん候ここくへまかりむかひしときはゑろ
き御ぐしも見えさせたまはざりしが今いくほどもな
きあひだに御ぐしゑろたへに見えさせ給ひて候ほど

にそれをなき候と仰ければしやうぐんのはゝきこし
めし身につまる年月をぬしだにもおもはぬにおやの
よはひのかたぶきすゑのちかくなる事をみてなく事
よとあはれにもうれしくもおもはれけるとあるふみ
に見えて候を今更おもひあはされて候ぞや九つのと
し寺へまかりのぼりし時は黒くわたせたまひし御
ぐしの今年十五にまかりなりくだりて見たてまつれ
ば御ぐしやうくゑろたへに見えさせ給ひ候ほどに
いまいくほどか見まいらせんとかなしくてふかくの
なみだをながすなりといつはり申たりければ母は誠
とおぼしめしふびんのものゝ申事やげに子にてなく
ば何ものかはゝがかみのゑろくなるをばかなしむべ
きましてなからんのちの世をとはれんことのうれし
やとたゞいまさきに立給はん事をばゑろしめされず
しよにたのもしくおもはれける母のこゝろぞあはれ
なる是にゑばらく候て御物語申度は候へどもうけた
まれば主君びぢよごせんまんぢうの御意にそむか

せたまひこれに御座のよしをうけ給はる卒度參り御
めにかゝりやがてまいり申さんといつはり母の御前
をまがり立これをさいごと思はれけるかうじゆのこ
ゝろぞあはれる

其後ちご一間所にたちいり御經よみ念佛申一首の歌

にかくばかり

きみかためいのちにかはる後のよ

やみをはてらせ山のはの月

かやうに書亥しやうどうしゆくこしのはうへかすか
すのかたみのふみまいらせたくは候へ共これさへか
なふべからずとたゞ文一通にいつはりかうぞかゝれ
けるさて／＼此たびまかりくだる事はべちの亥さい
ならず其ゆへは主君びぢよ御せんまんぢうの御意に
そむかせたまひ自身御手にかけさせ給ひて候をとぶ
らひ申せとてよびくだして候ほどにわがきみの御さ
いごのていみるにこゝろもこゝろならずちゝにもは
ゝにも亥のびわか君の御骨をとりくびにかけ高野の

みねとやらんへおもひ立て候ぞや三とせがあひだの
春秋ををくりむかへかならず參り御めにかゝり候べ
し亥しやう同宿こしのはうへかうじゆ丸とかきとめ
びんのかみをすこしひいて文のおくにまきこめてこ
そをかれける我文ながら一しほになごりのおしさか
ぎりなし一間所をたち出父の御まへにまいり母ごは
さいごのたいめんこゝろ亥づかに申て候今ははや今
生に思ひ置事候はずさりながら一間所にふみの一つ
う候をばこの年月すみなれしてらへをくりてたべと
たしかに申をきつぼのうちにわれとしきがはをしき
たけ成かみをたかくまきあげにしにむかつて手をあ
はせなむ西方極樂世界の阿彌陀佛ことには我賴をか
け申大慈大悲のくわんせをんねがはくはほんぐわん
をすてずわれを道引給へとまことにこゝろすゞしく
見えければちゝたちぬきもつてたちよりけるがめも
くれこゝろもきえはてゝ太刀のうちどもみもわかず
かなしきかなや春三月の花も無常のかせのふかざる

ほど三五のよるの月も雲のおほはざるほどなりむじやうのつるぎをぬき一度身にふれなばいつきのくらゐをてんじてすなはちとくだつすべき也いづれの人かおやとなり何ものか子と生れためしなき事をもらすらんめいえうおちやすし秋一時のでんくわうのかげのうちにつるぎをふると見えしかばくびは前へぞ落にける

かねておもひまうけたる事なればいまさらなげくにをよばずとて若ぎみの御ひたゝれを申おろしひたゝれの袖にかうじゆがくびをつゝみまんぢうの御まへに参り御意そむきがたきによりいたはしながら御くびを給て候今はや御本望をとげさせ給ふうへ御はらるさせ給へあら御なさけなの我君の御所存やと申もあへずくびを御まへにさしをきひたゝれの袖をかほにをしあてければまんぢう御覽じあへずいしくも仕りたりさりながらくびをばなんぢにとらするぞ能にけうやうし跡をばとふて得させよとれんちうふ

かくいりたまへばそののちくびをとりわがしゆくしよにかへりねうばうをよびいだしくはしきことをかたりかうじゆがくびを見せければははかうじゆがくびを見てやがてきえりものいはずそれえうてうたるくれなるのかほばせはなにそねまれしすがたもゆふべのかせにさそはれせんけんたるみどりのまゆずみつきにねたまれしかたちもあかつきのくもにかくれゑしやぢやうりにんげんのならひしやうじむじやうのこととはりはさま／＼おほしと申せどもとりわきあはれなりけるはかうじゆがことでとゞめたりさればこそかうじゆてらよりくだりわれを見てなくほどにふしんをなしてさふらへば異國の事をかたり出しみづからをなぐさめしを夢にもみづからゑらぬなりたとへば御しうの命にかはるべき事をみづからいかでとゞむべきぞかくとゑらする物ならばとともにかいしやくしさいごのていをみるならばかほどに物はおもふまじなさけなのなかみつやとくびにいだきつ

きふしおづみてぞなきむたり

おりふしひぢよごせんはものごしちかく御座有しが
かうじゆがさいごのよしを聞召あひのしやうじをさ
つとあけ立出させ給ひて何と申ぞ夫婦のものかうじ
ゆがくびをうつ程ならば何とてびぢよが首をばうた
ぬぞかうじゆをきらせ我うきよにながらへたれに面
をあはすべきとおもひきらせたまふ御色を見て急ぎ
ふうふの者まいり御まばりかたなをむばひとりけふ
よりしてぶようの御心中をといめさせ給ひがくもん
よきにめされかうじゆがばだいをねんごろにとぶら
ひて御とらせ候へはや／＼御玄のび候へとて人めを
つゝむ事なれば夜半にまぎれてたゞのさとを出都に
つき爰は人めも玄げしとて天台山の玄もやま十せん
じの御まへに御供申この神意の御はからひとして此
山のいかならんするせきがくの人にも御付有てがく
もん能にめされ候へいかにわが君聞召され天ちくに
亥しと申はけだものゝ中のわうなり彼亥し年に三つ

づゝの子をうむ生れて三日と申に萬ぢやうの岩石を
おとしてみるにそんせすやぶれざるを子としむなし
く成はそのまゝ也かゝるけだもの迄も子をばためす
ならひの候まんぢうのわかざみ様を御かんだう候を
うらみとはし思召され候ならひせにてはかなはずけ
ちえんすべき道理の候いとま申て若ぎみびぢよがせ
んは聞召やはや歸るかなかみつよ浮世はくるまのわ
のごとく命のうちに今一度めぐりあふべきよしもが
ななごりおしやとのたまひてはる／＼見をくりたゝ
すみたまへばゆく道更に見もわかずたま／＼こと問
ものとてはみねにさわたるさるのこゑも我身のうへ
とあはれなりふりかへりふりかへり見をくりてあと
に心はといまりてたゞの里にぞくだりけるなかみつ
我宿所に歸り女房をよび出しなんばう人のいのちは
すてがたきものぞかうじゆがさいごのときとにもい
かにもならばやと千度百度おもひつれ共わか君をひ
とまづおとし申さんためつれなくいのちながらへた

りいまは今生におもひをく事候はずいとま申てさらばとてこしの刀をひんぬいてはらをきらんとせし時女ばらかたなにすがり付しづまり給へなかみつよたれも思ひはをとらぬぞ先みづからをがいしつゝ其後腹をきり給へげにまことわすれたり我々なからん其跡にかうじゆ丸がさいごのていきみの御耳に入ならばいたはしやわか君の野の末山のおくにかくれしのびてましますをさがし出させ給ふならばくさのかけにてかうじゆまるなげかん事もふびん也然るべくばなかみつよ自がいをおもひととまりてわれ／＼ふうふ一すぢに念佛申かうじゆかぼだいをとふらひてとらせなばなどかはとくだつならざらんかやうに申せばみつからがいのちをおしむに似たるべしとも角もよきやうに御はからひ給へといひければおもひきりぬる道なれ共至極の道理になかつかさじがいをとまりけるとかやは津の國たゞの里の事扱も若君はせんじの御前に誠に東西をもわきまへさせ給はず誰

につきがくもんし何と成給ふべき御覺悟もなく只ばう／＼として御座ありしがまことに十せむじの御引あはせかとおぼしくて山よりもゑしんのそうづさんしやまし／＼けるが若君を御らんじてあらいつくし國はいづく御里はいかやうなる人にてましますぞとたづね給へばびぢよごせんはきこしめしさん候是はようせうよりもおやにをくれいやしきひとり身にて候とおほせければそうづ聞召れてそれはいかやうの人にも御座あれかしそれ／＼御とも申せとて同宿たちに手をひかせわがばうにをきたてまつりてかくて年月つもりければけいせつのまどのまへにひぢをくだけてんだいしくわんのもんにこゝろをしてらしきんかうのしつないにはゑんどんじつさうのくわんねんにそこをきはめ御年十九と申時しやうほうねんじゆ經をよみ給ひしがかたはらにうちむきさめぐとなき給ふそづ御らんじてきやうこつやちごはなに

をなき給ふぞと仰ければさん候此御經をよみ候にお
やにふけうの子はあび地ごくを出ずと候ほどに身の
をきどころのなきまゝにそれをなき候とおほせけれ
ばそうづきこしめされてふしぎの事をのたまふもの
かな御身はようせうよりも親にをくれいやしきひと
り身にて候とまさしくかたり給ひしが今さらふけう
とおほせらるゝ事こそ意得がたふ候へびぢよごせん
はきこしめしいまはなにをかつゝむべきがくもんも
せずふように候ひしにより親のふけうをかうぶりた
るものにて候扱おやはいかやうの人にて候ぞ津の國
たゞの里にまんぢうと申人にて候とおほせければ僧
都聞召してさればこそかねてよりたゞ人ならず御す
がたを見参させて候ひしが扱はをとに承るたゞのま
んぢうの御若君にて御座ありけるを今迄存申さぬこ
そ愚僧がふかくで候へ是につけてもがくもんをいか
にもめされ候へ御かんだうの御事をばげんしむ參て
こひゆるし申さむとて十九のとし御ぐしおろしゑし

んゐんのゑんがくとこそ申けれさればしくわんのま
どのまへにはいちしづちうだうの月をすまし又にん
にくのころもの袖には四萬相應のはなをつゝみつる
にてんたいゑんしうのわうさうをきはめ給ひて御年
二十五と中にししやうゑんしんの御供してたゞのさと
にぞ下られける昔のばいしんはにしきのはかまをき
てこそきやうの人に見えぬると承りて候が今のび
ぢよごせんはにしきにまさるすみぞめのころもをめ
されてふるさとにかへり給ひけりまづなかつかさが
ところへ御出有てひそかにあんないとおほせければ
なかみついそぎまかり出若君の御すがたをつく／＼
と見まいらせあまりの事のうれしさにしばしはもの
を申さずやゝ有てなかつかさながるゝなみだををし
といめあらめでたのわか君の御すがたを御のぞみに付
てもかうじゆが事をこそおもひ出されて候へかねて
よりまんぢうも御ほつたいの御すがたを御のぞみに
て御座候あひださだめて御たいめん有べしやがてま

いりて申さんとてまんぢうの御まへに參り若きみの
御事をばなにとも申いださずしこのほくれいに聞え
させ給ふゑしんのそうづ御たいめんのそのために只
今御らいりんと申まんぢうきこしめされて何と申ぞ
ゑしんの僧都これ迄の御出とやらおもひよらずそ
れ／＼こなたへ申せとて僧都をしやうし奉りまんぢ
うやがて御對面有てしよたいめんにかやうの事をた
づね申せばはやかりおほく候へどもわれらごときの大
惡ぎやうのぞくはいかにとして後生をたすかり極
樂に往じやうすべく候やと尋給へば僧都きこしめされ
てそれ法花のめいもんにだいつうちせうぶつじつ
こうざだうじやう佛法ふげんせんふとくじやう佛道
ととかれたりほとけも未出世したまはざるときは成
佛もなくとがもなし一ねんみしやうい前にはむしや
うむしにして成佛のちきだうにあらす人のをしへに
よらずたゞわれとおぼしめすべきなりそれいちげも
んぼうのくどくは九ていこうのせんこんたりをよそ

たしやうくわうりん有べし尤ぶつだうのたよりあり
殊更のみ矢を取給ふとも合戦のみちまでもこれを思
召いださは一念しやうかいのみなもとに立歸てじゆ
ざいは草露のごときみてそくしん成佛たるべしと
けんしうといふものに見えて候とのべたまへばまん
ぢうきゑつのまゆをひらきさては弓矢を取候とも一
しんのむけやうによつてごくらくにわうじやうすべ
く候ひけりとて御よろこびはかぎりなし

ときしも比は九月十三夜の名月くまもなかりしにや
まありとしらするしかのとをごゑもこゝろすごく聞
なしてちぐさにすぐくむしのねまでも我有がほにも
のあはれるなるおりからにゑんがくたつとき御聲にて
じやくまくむにんしやうどくじゆしきやうてんかに
しけんしやう／＼くわうみやうしんとたからかに
あそばせは誠にじむりんのぢうしよなりといふ共じ
やくまくにして人のこゑもなし四明のならにはあら
ね共どくじゆの御こゑはぼん天たうりてんの雲のう

へにもきこゆらんたつとしと申もあまり有こゝろの
有もあらざるも袖を玄ぼらぬ人はなしまんぢうしゆ
せうにおぼしめしまことにすいきのなんだをうかべ
そうづをしばしとゝめ申されければそうづきこしめ
されて是は日をさしてごんぎやう子細の候明日歸山
とおほせければさらば御弟子の御僧を一七日といめ
申たく候そうづ聞召れてこれはようせうよりも身を
はなさぬ弟子にて候へども御きやう御ちやうもんの
ためならば一七日はとめをかるべし御用過なば本山
へをくりてたべとのたまひて御かんだうの御事をば
何とも仰出されずしょくじつにそうづは御登山有ゑ
んがくひとりといまつて七日御經をあそばすまんぢ
う御らんじてさもあれ貴方はいかやうの人にてまし
ますぞそれがしも御年ほどの子をもつて候ひしがが
くもんもせずぶようく候ひしによつてさぶらひに申
つけくびをうつて候が今更こうくわい仕つれどもそ
の志るしも候はず是に候女は其子がはゝにて候がわ

かれをかなしみ御覽せられ候ごとく兩眼をなきつぶ
して候何とやらん御すがたを見奉れば其子にすこし
似させ給ひて候事よいかに御臺聞召せこのほど御經
あそばされ候御僧こそ有しづぢよに少似させたまひ
て候と仰ければみだいきこしめされてあらなつかし
やさふらふ今より後はさしたる御ようさふらはず共
つねはたちよらせ給ひ御きやうあそばしみづからな
ぐさめて給はりさふらへゑんがく聞召れてさては我
ぶようによつて母のまうもくとならせ給ふ事よさこ
そ佛神三ぼうも我をにくしとおばすらんざいしやう
のほとこそくちおしけれとほつとていきうしたまひ
てきねん申されける事こそしゆせうなれなむりやう
せむ世界の釋迦せんせ法花しゆご三十ばんじん本山
こわうさんわう十せんし佛法のいりきれいげん地に
おち給はずば母のまうがんをたちまちひらかしめ給
へがけんとうみやうぶつほんくわうすいによしと此
もんをとなへかんたんをくだきいのられければ誠に

佛神もふびんにおぼしめさるゝか本尊の御まへより
こんじきのひかり立てきたの御かたのいたゞきをて
らし給ふまんぢう大きにおどろきなふあれ／＼御ら
ん候へほんぞんの御前よりこんじきの光りのたゞせ
たまひて候と仰有ければ北の御方聞召それはいづく
に候と御らんじければありがたやしむてひさしき兩
眼たちまちはつとひらけゝりきどくなりとも中々申
ばかりはなかりけりまんぢう夫婦手をあはせ誠のい
き佛にて御座有けりとてくぎやう禮拜したまへばゑ
んかく座をさつてをそれをなすまんぢう御らんじて
あらかたじけなや何とて御座をさらせ給ふぞさん候
釋尊御せつぼうのみきん父じやうばん大わうの御ち
やうもんに出させ給ふ時は佛たにもれんげ座をさり
給ふにましてやわれらはいやしき僧いかでかをそれ
をなさゝらんまんぢうきこしめされてあらおろかの
おほせやそれはをや子のれいぎ是はいしやうたもん
の事何かはくるしう候べきゑんがくきこしめされて

今はなにをかつゝむべき我こそ有しひぢよにて候へ
なかつかさがなさけによつて我子のかうじゆをきり
我をばたすけ候ぞや彼僧都につき奉りふしげにかゝ
る身とまかり成て候とかなり給へばまんぢうふうふ
ゑむがくのころもの袖にすがり付是は夢かやゆめな
らばさめての後をいかゞせんまことはうつゝなりけ
ればうれしさたぐひましまさずさればこそ能らうど
うには別しておんをあたへめしつかふとは今こそお
もひしられ候へなかつかさが情をば生々世々わする
ましとのたまひていそぎふうふをあされやこれく
見よやふうふの者今より後はびちよごせんをなんぢ
ら婦夫がためにはかうじゆ丸とおもふべし後生の事
をばたのもしくおもへとてまんぢうも北のかたもな
かつかさふうふのものゑんがくにいだきつき給ひう
れしきいまのなみだには一しほぬるゝたもとかなを
よそ九萬八千町の御領をふたつにわけ藤原のなかつ
かさなかみつにあてをこなはせ給ふ又かうじゆ丸が

ほだいをとはんためせうとうじと云てらを立本尊にはちごもんじゆを作てしゝにのせ給ぶそれ法花といつぱみたゑしやうほうまんとくのくらゐ三世の諸佛しゆつせほんくわいは衆生成佛のぢきだうなりきやうにあらはすときはめうほうれんげの五字につゝめなにとく時はなむあみだぶつの六字にせつする也あるひは五ごうしゆいのゆひしのきやうを六字のなにつゝめ十こうしやうがくのくわとく一念しやうねんの衆生にほどこすと見えたりしゆいといつぱ座せんのひみつ也てんたいにはしくわんとときしんごんにはしつさうけうさうとのべたりほつきう三ろんにはくう有のにうの二相にかゝはるくきやうきよゆうのめいせむも皆是いちしつふさうのかいけんにしかずたゞし、ふしゆせつかほうめうなんしとくわんすべしめうらく大師の御しやくにいはくしよけうしよさんたさいみたこゑ西方にゐ一じゆんゆいしんのみだこしんのしやかとなればほんらいむとうざいがせう

うなんばくときくときはいかにもしてこゑに出して念佛を申べしあみだは本來のめんもく也十まんをくどもへだてす我等がほうすんのうちれきくとして分明なりもとよりはうがくなしたねんしやうべりあにしきさうにあべからんやもとより法花と念佛はいちくのほうもんなりされば古佛のてんにいはくしやくざいりやうせんみやうほつけこんざい西方みやうみだぢよくせまつだいみやう觀音三せりやくとう一體りしゆしやと云々いかにとじて法花と念佛かくべつにこゝろうべき只生死は春の夜の夢のごとしじんによの月はもとよりめいはくたりたにんのじゆみやうをかつて自身の命をつぐまよひのまへのせひは是非ともにひなりさとりの前のせひはせひともにせなりじた一によたりふんみやう成かなやさきに死するかうじゆ後にしするびぢよ御前今ははや名のみばかりぞのこりけるさればくうや上人の一しゆの歌にかく計

よの中にひとりとゝまるものあらは

もしわれかはと身をやたのまんと

ゑいじ給ひけるとかやとうばうさくか九千ざいうつ
らの八萬ざいも名のみばかりぞのこりけるひさう八
萬こうむとうかねぶりもたゝ夢のよのうちなりまん
ぢうの御こゝろ法のためにくわだてざいしやうみな
かれをくみぼだいのみちあきらかにしゝそん／＼も
はんじやうし天下をたもち給ふ事千秋ばんせいのみ
なもとをあらはし給ふ物なり

又かやうに義ををもんじ命を軽くし名をのちのよに
のこしをくかうじゆまるが心中じやうこもいまもま
つだいもこれやためしなかるらんと人々申あひにけ
り

いわうかしま

爰にかどわきのへいざいしやうのりもり折を得て小
松殿にまいりおとゞに申されけるは其人のなげきを
やめ給はゞ身のよろこびも有ぬべしいわうが嶋のる
にんを今度のうちにしやめんなりたまはゞさこそよ
ろこび申べき先あんじても御らんせよさつまがたい
わうがしまのうきすまゐおもひやるさへふびん也お
とゞげにもとおぼしめしじやうかいへ參り此よしか
くと申されければじやうかい聞召れて丹波の少將な
りつね平判官やすより二人の御教書出さるゝおとゞ
かさねて仰けるは三人をめしあつめ一つ島へながし
二人めしかへし一人とゞめさせ給ひなばいよ／＼う
らみはふかかるべし只このついでは亥かるべうもや
候らんと申させたまひければじやうかいきこしめさ
れてほつせうじのしゆぎやうが事はずいぶんじやう
かいが口入によつて人と成しものぞかしそれに東山
しゝの谷にあつまつてさん／＼にあつこうしぬと聞
しゆぎやうが事にをひてはじやうかいはゑるべから
すとおほきにいからせ給へば此上ちからをよばすと
て二人のみげうしよばかり八でうどのより出さるゝ
おなじき使甘日に京を立さつまがたとは惣名奥七た
うはたうどくち五たうは日本なりそうじてしまは十
二島はじめ白石がしまちどりがしまいわうが島へ
一人づゝながさるべきにて有しを門わきどのゝ御そ
せうふかきによつて一いわうがしまへながさるゝか
く三人の人々はとせんさのあまりにいざや島めぐり
してあそばんとて島めぐりをぞゑたまひけるげにや
都にてつたへきゝしよりはるかにこえておぼえたり
いかづちのをとたえずみねにはらいでんひまもなく
ふもとのさとにあめふりて昔は鬼がすみければきか
いがしまとも申なりいまは又何となくみねにいわう

がたちければさつまがたいわうがしまとも申なりた
またま此しまにすむ人は我住國の人にかはり我いふ
事をかれ玄らずかれいふ事をわれ玄らず男はあれど
もゑばしきず女はあれ共かみさげず玄つがやま田を
かへさねばべいこくのたねもなかりけりそのゝくわ
をとらざればけんぱくのたぐひもなかりけり水をむ
本ノマ、
すばんとてはさはにくだりこたら木をとらんとては
さんりんに入てまよひけり明暮月日ををくりけるう
き身のほどこそかなしけれ

され共少將の御ために御しうとにておはしますかど
わきの平ざいしやうのりもりの所領肥前のくにかせ
の庄たるによつて少將一人のいしやうしよくじを日
に玄たがつてをくり給へばせうしやう一人のいしや
うしよくじをもつて二人の人々をはごくみ給ふたん
ばのせうしやうなりつね平判官やすより一つこゝろ
に仰付けるはわれ都に有しときくま野を玄んかう申
十度參らんと大願をおこし五度づゝまいり十度にた

さもと思ふときこの玄まへながされぬまことや熊野
のごんげんはわれをねんせむ衆生のあらばのゝする
山のおくにありともひかりをさしてみちびかんとの
御せいぐわんほんしん今にたかはせ給はずばいざや
此島へごんげんをくわんしやう却我等が歸路をいの
り申さんさて僧都はなにとかおぼしめすそうづ聞召
さんわうの御事ならば玄かりごんげんの御事ならば
さして信心は候はずこのうへちからをよばずとて二
人すぐくと御立ありまんくたる海上を見わたし
本ノマ、
かくとあるいそ邊をめぐり三の御山に似たるところ
をたづねけりあるひは山高して津水ひさしくながれ
出あるひは木々のこずゑれい／＼としてそばだてり
爰は本宮せうじやうでんかしこは玄んぐうかんのく
らはるかのきたにあたりつゝはくせきのがゝとある
よりもうすいくもよりながれ出松のあらしもかみ
さびひれうごんげん出たち有なちの御山に似たりと
てこゝをなちとぞ定めけるつの國くほつの王子より

九十九所のわうじ／＼をかたのことくくわんじやう
申それよりくろへに御下向あるそのまにそうべはた
かきところにあがり東西南北を見わたしよろづくわ
んねんじてましますに黒雲あつくへだゝつてせきが
んくづれて海に入其時僧都せんにふるき詩を思ひい
で風佛前に花をさんすきしくづれて魚がいすそのき
しこゝろなふして罪をえずされば五體は五つのかり
物地すい火風をかたどれりこゝろはこくうのごとく
にてかたちなればいろもなし諸法は有無の二道に
てありとも見え又はなし立てもるても座せん也とは
かいむざんの高枕しをきぬふしぬと志たまひけりか
くて二人の人々は日數つもれどもたちかふべきじや
うえのあらざればあさのころも志ほにくちたるをさ
はの水にてあらひ岩田川のきよき瀬にてほんなうの
あかをそゝぎ五だい王子ふしおがみそれより山路に
あがりければかはらやみねのあらしにさそはれて
いわうをこして参るにぞちうてんぢくもとをからず

ちうでうちかつゆくませ河ほつしんもんにもいりぬ
ればはやほんぐうにまいりけりあら有がたやこれこ
そ本宮せうじやうでんにてましませいざやわれらが
きらくをいのり申さんさんまいがあらざればはまの
まさごをうしはにてあらひさむまいと定め花を手折
て御へいにさゝげ歸洛ののつとをぞ申されけるさい
はい／＼これあたり来るさいし治承二年つちのへい
ぬ月のならびは十月二月日の數三百五十餘ヶ日吉日
りやうしんをえらむでかけまくも悉くまします日本
第一だいりやう權現ゆや三所ごんげんならびにひれ
う大きつたのけうりやううつのひろまへにして信心
のだいせ主羽りん藤原のなりつねならびにしやみし
やうしゆ一しんしやう／＼のまことをいたし三ごう
相應の心ざしをぬきんで謹以敬白それ清淨大ぼさつ
はさいどくがいのけうしゆさんじんゑんまんのかく
わうたり兩所ごんげんはとうはうじやうるりいわう
のしゆ衆病しつぢよの如來たりあるひはなんばうふ

だらく能化しうにうしゆけんもむのたいしにやくわ
うじはしやば世界のほんしゆせむしやのたいしちや
う上のぶつめんを現して衆生のしよぐわんをみてし
め給ふかるがゆへにかみ一人をはじめしも萬民にい
たるまであるひはげんせあんをん又は後生せんしよ
のために朝には淨水をもすんでほんなうのあかをそ
そぎゆふべにはゑんざんにむかつてほうがうをとな
ふるに感應をこたる事なしがゝと有みねのたかきを
ばゑんとくの高きにたとふけん／＼とある谷のふか
きをばぐせいのふかきになぞらへ雲をわけてのぼり
露を志のびてくだり爰にりやくの地をたのまづばい
かゝあゆみをけんなんの道にはこばんやごんげむの
とくをあふがすばなんぞかならずしもゆゑんのき
かひにましまさんやよつてしやう／＼大ごんげむな
らびにひれう大ぼさつはしやうれんじひの御眼をな
らべさをしかの御みゝをふり立われらが無二のたん
せいをちげんして一々のこんしゆをなふじゆせしめ

本ノマ、
給へまくのみりやうしょごんげむは各儀に志たがつ
てあるひはうえんの衆生をみちびき又は無縁のぐん
るいをすくはんがために志つほうしやうごんのすみ
かをはなれ八萬四千の光りをやはらげかりにすいし
そくとげんじ六道三有のちりにどうじ給へりかるが
ゆへにしやうこうやくのうてんくちやうしゆとくち
やうしゆとらいはいそでをつらねへいはくれいてん
をさゝぐる事隙もなしにんにくのころもをかさねか
つごうの花をさゝげ神殿の床をうごかし信心の水を
すましてはりしやうのいけにたゝへたり志んめいな
ふじゆましまさば諸願なんぞ成就せざらんやねがは
くは十二所ごんげんりしやうのつばさをつらねては
るかにくかいのそらをかけつてさせんのうれへをや
と禮拜してじやうえのたもとを志ぼるはありがたふ

つきしま

抑中むかしの事かとよ其ころ平家の大將をばあきのかみ清盛と申奉る御出家有てのかいみやうをば淨海とこそ申けれある時一門れん座の座敷にてのたまひけるはそれ人のよに有ゑるしには大ぐわんおこしあるひは國をあらため里山くわうやを名所となしたみすなを成まつりごとを末代のかたみとするなり天下のゑきしゑきやうを我まゝにふるまふといへど平安城のこうりうはじやうかいがわざならずおかるにかの平の京は左青龍右白虎せんしゆじやくごげんむじむ相應の地をゑめし北にはたゞ鞍馬寺きぶねの奥よりながれ出る水のゆく衛を白川や東山に三井寺しきの谷のみねつゝき鬼門にひえい山でんげう大師のさうくたり南におとこ山いは清水と名付和光のかげくもりなくはくわうほうそをしゆごし給ふ西山

のふもとにまつの尾とほうりんじかめやまのおくよりもながれいづるきよたきをおほ井川と名づけすゑをばかつら河といふ仁和寺御むろくわうりうじ佛法をちのこの京にてたえする事あるまじいつら／＼ものを案するになんばの四天王寺とならの京もたえせずたとへば九條にたらすとも末代のかた見に新京をたてゝ見ばやとてことをき國のさしつまでくはしくみるに地きやうなしさでのみやまんむねんさに兵庫のうらをわつてみるにわづか五てうのところなりこれならではおかるべき地形も更にあらざればしよせん是をふくはらの新京と名付里大りをざうしんせん此京はんじやうするならばじやうかいのなきあとのかた見と人もおもへかしあきのいつくしまをもこの儀をもつてざうしんす人々とこそおほせけれ御一門の人々此儀尤玄かるべう候とておの／＼ひやうごにくだりさと大りをたてかくてこゝにすませ給ふ

時の御しうとに平大納言時忠すゝみ出て申さるゝあ

はれおなじう候はやあのしゆかいをうめさせふねの
とまりとなすならば本てうにをひてかほどの名所あ
らじとこそ申されけれじやうかいきこしめされてそ
れこそなによりもつてきかまほしき事さうよ四國西
國の船どもがつくならばいよ／＼ふつきたるべしす
きいたやとはとをあさなり一の谷にあらいそにてわ
だのみさきへよる船のいそまでつく事なきあひだ江
島がいそより吹風にはつそんするとてかなしめば此
京立できよくもなしとてもいちごの大ぐわんにわだ
のみさきをすぢかひにたつみむきに海上を三町計う
めさせそのしまのうへに在家をたて船のとまりにな
すならば數千ぞうのふねつくともかせのなんにはあ
ふまじいたゞしはるかのしむゑんをうめんする事ど
ごと龍神も佛神もなどかあはれみなかるべき五條の
大納言くにつなのきやうはおはせぬか御身奉行して
嶋つかせられ候へ國つなのかきやうは承りかやうに申

せばおほせのむねをそむき申に似て候へども告もさ
るためしの候せうへいにまさかどはばんどう八ヶ國
をたいらげ下總の國さうまのこほりに京をたてまつ
りごとをなし給へどもこよみのはかせがなくして年
のさかひをえらざれば五せつのいはひもさだめえず
ほどなく運命つきはてぬ是は末代までてたかる
べき御ぐわんなればはかせをめされ候てくはしき事
の子細をも御たづねあれと申されたり淨海聞召さる
事ありとの給ひて清明がながれあべのやすちかやす
のりに三代のけうい安氏と申て天下のきつけう世を
はかるはかせをいそぎめされけりやすうちやがて參
らるゝじやうかい御らんじていまにはじめぬやすう
ぢがうらかたにふしんはよもさうしわだの三さきの
すぢかひにたつみむきに海上を三町ばかりうめさせ
て其亥まのうへにざいけをたてふねのとまりにせさ
せんと近日におもひ立ぬるは成就すべきかいかゝさ
う古かたかんがへ吉日とつてえま成就のきせいをみ

やうのかごにまかせてたべやすうぢとこそ仰けれ安
氏承てもとよりうらは上手うらきくところのしかん
きやくごぎやうさうそくのうをんたうしゆくやう十
二道六みやうたいやうさんじつ迄わうさうをきはめ

てかんがふるにあやまる處はなけれ共うらに一つの
ふしんが候島をつかせて御覽せよ一度にこの志ま成
就せし事のていりをうけうらなひ申候はん吉日は
三月十八日吉時はなつの一天とうらなひきだめ申じ
やうかいきこしめしさらば國つなぶぎやうをせよう
けたまはると申て大和山城伊賀いせほりま津の國丹
波七ヶ國の人夫をもつてむこ山しうち山のいはがん
せきをくわつ／＼と引くづしてわだの三さきへはこ
ばせけり朝うめける大もつはみつしほはやくてさし
のくる岩をかさね人夫をましよるにうめける大もつ
はあかつきひくしほはやくしておきへはつと引ては
出うもればさつとゆりくづす大もつ大石數本らずろ
うざがいさごのだうにはおもはいたよりも有ぬべし

五萬人の人夫をもつて十日ばかりはうめけれどもす
こしもゑるしの見えざるは龍神なふじゆなきやらん
扱いかゞはせんとの御詫なり

じやうかいきこしめしことのほかに御はらをたてさ
せたまひはかせのやすうぢをめしておほせけるはな
んちは何とうらなひたるぞさらに此島成就せずい
れんを入れ見せてあればうむべきところにいしもな
くよしなきかたにちりるさすがそこにはなみもなく
殊外志づかなると申がいかやうの子細にてさやうに
は有らんさてのみやまんすむねんさよいかゞはせん
との御ぢやうなり安氏承てさうなくふしんをひらき
えずやゝあつて申けるはげに世にすむならひは大事
にて候うらのまゝ申せばわが身のあだ申さねばてん
しのゐをくだすりやうやうちうくわの身たるべしそ
れ人間にかざらず生をうけぬるたぐひのいのちに過
たるたからはなしされば佛もいましめて五百かいの
其中にせつしやうかいを第一にたもてとけうげし給

へり此大願に御とが御座あるべし是はひとへにやす
うちががうと成なん事こそ何よりもつてくちおしけ
れそれをいかにと申に人ばしらを御たてなくしては
更に此迄ま成就あるまじきとうらのおもてに見えて
候ゆゝしき罪業これなるべし御思案あるべく候一人
ならず二人ならず三十人の人ばしらが立べきなりと
申浮海聞召れてもたせ給へる御あふぎにてたゞみの
おもてをちやうとうつてやあ此事披露有べからず何
としても此島の成就すべき事こそさいはいなれそれ
堂たうをたつるにも一たん國のゆるぎたみのこゝろ
をなやませばせんも悪をさきとする也それ善惡の二
法といつぼうらとおもてのごとしいまこの迄まの人
ばしらにたちなむものもかならずわこのしゆくゑ
んなくしてはいかに思ふとよもとられじさりながら
人ばしらを一度にとらばあらはれてろじをとめて
悪かりなんときぐとれとの御説にていくたこやの
のあたりにいかにも人をかくしをき京よりも下るも

のはじめて京へのぼる者中にてとつてをしこめてこ
ゑばしたつなといましめてこくしやうするぞむざん
なるさこそきうりのこひしさをおもひやることあは
れなれとられぬるもの共がかく有べしとごしたらは
老たるおやにいとまごひなごりおしき妻子にも形見
をとらせてゆくすゑのすぎはつべき言の葉をなどか
は語りをかざらん只かりそめの事なればけふよあす
よとまちくらし風のそよとふかんにもすはやとおも
はん心ざしいつをたのみにまつかね山もなしき月日
をぐら山ゆく衛をえらねばよもたづねじ我身のきえ
む命より待よるむなしきなるさとをおもひやること
あはれなれとろうのとぼそにとり付てかなしみあへ
る有さまを見るになみだもせきあへず一人二人の事
ならず二十餘人とりぬればいゝ田こやのへんにこ
そへんげのものが住やらん道ゆき人を中心てとつて
ゆきがた迄らずと風聞すれ親をとらるゝ者も有一人
もちたる子をとられきえもとかなしむものもあり丹

波はりま伊賀いせ近國たこくのもの其がいくたのあたりにみちくへてたとひまゑんのものがきてわがち我子を取たりともせめて志がいを見せてたべいつごろかこの野邊にたび人うせて候と尋かねたる有さまは野がひのうしのくれごとに子をたづぬるがごとくなりかくするほどにかべにみゝいはの物いふよのならひ兵庫の浦の人しらにことぐくとられぬるとぞきこえける

たづねかねたるもの其が里大裡に參りていしやうにひれふしこれは丹波のわだのものははりまのあかしの者これはきんやかたのゝものあるひはいが伊勢都のものたすけ給へと聲々にかなしみあへる有様はめいどにおもむく罪人のゑんまほうわうぐしやうじんみやうくわん達のしやばにてのつみをかゝみにうつされごくそつの手にわたる時六道能化の地さうそんたすけ給へとこそぐにかなしみ給ふもかくやらん生死むじやうのうきよのなかげんせもめいどにた

がはすとよそのたもともぬれぬべし御一門の人々此よしを御覽じて志づむものころもをしなべて一かたならぬしうたんども未來のごうとならせ給ふべしたとへばこの志まなくしても何にふそくの御座あるべき今は扱のみ候へかしとをのく申されたりければじやうかい聞召れて何とさう一門の人々たまく淨海が思ひたちぬる大願をさまたげんとのせんぎさうやじやうかいもさほどの道によふべきにて候はずそれまかだこくのあじやせわうは佛生國のしやうぐんわうにうたれさせ給ふかいにち大わうは八萬四千人のきさきをこうす一しやう太子はりうじゆほさつのいのちをとる神通第一のもくれんはちくしやうげだうにうたれ給ふむしやうのくにのほり給へる釋尊だにもだいばだつたに御あしをうたれ給ふこれおんぞうゑぐのほうなりいはんや末世の人間にをひてをやせんあくふたつりなくして成就する事あるべからずくにつなのさやうはおはせぬか庭上にひれふす

やつばらをもむよりそとへをひいだしじやうをつよ
くさひてをけ左右なく人をいるゝなとないしんには
らはたゝねどもあるゝけうきを見せんがため御ざし
きを御たちありいたあららかにふみならし此島むや
くとおほさんする御内とざまの人々御出仕はかなふ
まじいじやうかいけうくんせむものはあめがゑたに
覚えすとあひのしやうしをはたとてれんちうふか
く入たまへば御一もんの人々此よしを御らんじてや
く神こんまがきたつてもこの人なだむる事あらじ三
十人の人ばしらをなかゝいそぎそろへよとてゑの
びくにとらすれば二十九人ぞとつたりける今一人
とらんする國ともへいあんあらざれば道行人もとい
まつてへんろ遠路ののたび迄もおぢをのゝひてとを
らす一人と成てぞ日をくるあつぱれ國土のわづら
ひやあふさながらたみのなげきなり爰に諸國をめぐ
るしゆぎやうじや一人兵庫のうらをとをりける取手
の人數是をみてこゝをとをるはしゆぎやうじやの身

なれ共人待かぬるおりふしとをりあふこそさいはい
なれ是を人數にせんとてくびにかけたる笠もぎすて
やがて人數にそなしにけるかくて三十人の人ばしら
の思はいづれをとらねどなかにも彼しゆぎやうじや
のゆらいをくはしく尋ぬるにたとへは津のくになに
はいりえのみつまつに刑部左衛門國はると申人にて
候か四十のいんにいるまで子のなき事をかなしみく
らまのたもんに參り申子をこそしたまひけれくには
る三十二妻女二十八と申八月にゆふなる姫をまうく
るときしも八月十五夜のくまなき月のさよなに生
れぬるひめなればとて名月女と名付てかん家本てう
にもためしなふこそかしづきけれ其心中はくわう女
にてえんでんたりしさうかはゑんさむの月にあひお
なじかすみのうちのやまざくらにほひあくまで身に
あまり人にまみゆる其すがたいけのはちすのあさつ
ゆにかたぶくふせいもかくやあらんひめのすがたを
見きく人をよぶもをよばげりけるものぞみはおほく

ありけれどませのうちの八重ぎくもつゝめば色のま
すふせいりやうじやうするかたあらすして十三のく
れまでひとりすむ十四と申花の春父にも母にも玄の
びめのとのねうばうはかりひきぐしてあしやの野邊
にたちいでちぐさのいろをながめてあそぶ爰にひと
つの物語あり丹波の國をがはのしやうのせと申とこ
ろはおむろの御領也けりかのところのあづかせをば
仁和寺の藏人かねうちとこそ申けれその人の子に藤
兵衛いへかぬとて其ころ十九になりしが詩歌くわげ
んのみちにちやうじなさけも人にすぐれたりしが河
内の國きんやに所領あるによつて十日ばかりきんや
に有しが是もつれぐさのあまりにあしやのべに
たちいで、うづらがりをぞしたりけるいへかぬ何と
なくひめのすがたを見付うつろひやすきむらさきの
いろそめぬることよしなけれこそたつばかりに思へ
ども思ひのいろに立出ではあしかりなんとおもひと
ものものをばはるぐと玄のばせ我身は一むらす、

きのさぶらひけるにやすらひ立てひののすがたをこ
ころ玄づかに見たてまつれば夕日にしにかたぶき給
へば姫は家路に歸らんとてこまつなぎの一ふさもえ
出たるをとりもぢて

春はまつこまつなぎにぞわか葉さす

・ ふるはのいろも見えわかばこそ

くさむらに玄のぶいへかぬが玄のぶこゝろのつゝみ
かねて

春の野にぬしも見えさるはなれこま

くものいにてもつなぎとめばや

かやうにゑいじてあらはれ出る名月は御覽じてあら
はづかしや此のべに人あるべし共玄らずしてくちず
さみけんかなしやと思召れるあひだおもひのいろ
もあをやぎのいとはづかしげなる御有様はつゆに玄
ほるゝ花かとよめのともさそはでふりすてゝいそが
はしげにてかへるさはあらしにたぐふ落花のふけゆ
くふせいもかくやらん家かぬいとゞこゝろのあこが

れてめのとがたもとをひかへふうふなさけの和合も
わたくしならず志しゆうのうちのあひしやうもいづ
もじの神の結びなりとらふすのべをふみならし草む
らにきえむも此道なりいせ物語げんじにもかやうの
事をこそつたへて候へたとへばそつじの儀なりとも
かせのたよりになびけてたゞ御供の人といひすてゝ
いそぎをつつき候ひてらうせきながら御ともを申べ
きにて候とこそとも志らぬのべよりも取て馬にう
ちのせ申めのともともにひきぐして丹波ののせへぞ
かへりけるあらいたはしや二人の人々はふるさと志
のぶはなか／＼てうせきひまなくおもへ共めのとは
をそれでをとづれす名月はちゝはゝのふけうをいた
くはいかりあけぬくれぬとせしほどに三年になるは
ほどもなし國はるふうふのなげきは申ばかりもなか
りけり人の子の能よりもあしき我子をばなをしふび
んにおもふならひいはんやは是は佛神にさせい申て只
一人もちたるひめにて有あひだよにたゞひなふかし

づきしをゆきがた志らずうしなひてなげく思ひはい
かばかりいたはしやはゝ御せんは三とせと申秋の志
もおもひにきえてぞはてにける刑部のせうくにはる
はひとかたならぬ思ひともに妻女のかたみをとりあ
つめ高野のみねにのぼりつゝおくのるんにてもとひ
きり妻女のかた見をこめをきて姫がゆく衛をたゞね
んとて高野のみねを下かうして先三熊野にまいらる
る三つのお山をふしおがみたづね給へどゆきがたな
しだうしやぶねにびんせむし四國に渡りてたづねれ
どもそのゆきがたのあらざれば又船にびんせんしは
りまのむろにあがりつゝ都の方のゆかしさにあけぬ
くれぬとのぼるとて兵庫のうらをとをりけるが取手
の人数にゆきあひておさへてとられてろうしやと成
とにもかくにも國はるの運のきはとぞ聞えけるすで
にこの志まは三月十八日のたつの一てんとさだまり
けれ共人ばしらのわづらひによつて卯月も過て五月
になる卯月五月はよき日もなしとて六月二十三日の

うしの刻にぞさだまりけるとられぬる者其がとても
たすかるべきのうちにあらずはやしてうみに入られ
てみくづと成てきえはやとおもひきることあはれな
れなかにもくにはるの思ひぞいとゝあはれなるかく
あるべしとごしたらば高野のみねにてつゆとも志も
ともきゆべきものをうきよにもしもながらへばひめ
がゆく衛やきくとおもひかゝるしゆぎやうにおもひ
たつて今さらうきめを見る事よかほどにうすきゑん
ならばなにに生れたりけんうらめしのちぎりや
とてをや子のちぎりをは今更うらみ給ひけりか様に

おもひたまひけるうらみのねんやつうじけん又かみ
のめぐみにてや候ひけん丹波ののせにまします名月
女の御かたへふしぎ^おのたよりぞ候ひけるそのゆへい
かにと尋ねるにたとへは津の國わたなべちかきかん
ざきにくつはのしやうじながきよと申人の子にこん
どうじゑげともとてさふらひしが是もくにはるのひ
めのすがたを見つけより／＼こゝろをつくせしに思

ひのほかにかのひめのうせぬるよしをつたへきゝ世
をあぢきなく思ひきつてやがてとんせいし諸國をし
ゆぎやう仕るがたんばの野せにつく名月女のましま
すとは夢にもおもひよらずいへかぬかもむぐわいに
たゞんでそでのうへのときれうを所望してやすら
ふかさもあれくにはるせんもむはひやうごのうらの
人ばしらにとられぬるよとあさましくて何となく一
しゆのうたをぞゑいじける

うき世そとおもひすてゝも一すぢに

人のうへにもうき事をきく

かやうにゑいじてたゞみけりおりふし名月はもの
ごしちかく御座ありしが今のうたをきこしめしなに
とやらんむねうちさはぎ人をいたしてしゆぎやうじ
やはいづくの人ぞと問すればしゆぎやうじや承てか
くあさましき身にてよにありがほにふるさとを申べ
きにてあらね其つゝみても又何かせん是は津の國か
んざきのものにて候めのとも名月もかんざきの者と

聞召ふきくるかせもなつかしくてしやうじをほそめ
にあけそのひまよりも見いだせばとしにもたらぬし
ゆぎやうじやなりなふしゆぎやうじやいせんのあら
ましにうき世ぞとおもひすてゝも一すちに人のうへ
にもうき事ぞきくとくちすさみ給ひしはさて世には
何事のさふらふぞしゆぎやうじや承て人のうへと申
も此ほつしんのゆらいなにをかつゝみ申べきかたつ
てきかせ申さんたとへば津の國なにはいりえのみつ
まつに刑部左衛門國はると申人の候ひしが一人のひ
めをもつたまのすがたを身にまとひなさけのふかき
心ざしはやうきひりふじんにもあひをとらじときこ
えしをすみよしまふでのありしときそつとみしより
玄づこゝろなきこひと成てより／＼心をつくせしに
思ひのほかにかのひめのうせぬるよしをつたへきゝ
世をあぢきなくおもひきつてやがてとんせいしか様
に諸國をめぐり候がこの二三日さきほどにあき人の
たよりにふるさとの事をたづねて候へば名月女のは

はは去年の秋むなしくならせ給ひぬちゝにはるは
高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎやう仕ると
てひやうごのうらの人ばしらにとられ六月二十三日
に玄づめらるべきよしをつたへきゝあふゆかりし人
のゆく衛さへかくなりゆくよとあさましくて何とな
くこしおれをつらねぬると申名月はきこしめしゆめ
かとおもへばうつゝうつゝかとおもへばまことしか
らずかさねていかにとたづねさせ給へばなふさのみ
にとはせたまひそようきみのかやうになる事もその
ひめゆへの事なればなにはにつけてうらみのかずな
みたならではとももなしよそのみるめもはづかしや
とたもとをかほにをしあつる名月はきこしめしさる
事のありしづやすみよしまふでの有し時こしのさき
にたまづさをひきむすびておとせしを供の下女が拾
ひ取てみづからに見よと云何なるらんとみてあれば
思ひもよらぬはなをみてつゆときえなんかなしさよ
もし此風のたよりをふびんと思召御返事ましまさば

かんざきに聞えたるしやかだうのかねのをにむすび
てたべと書とめておくに一しゆのうたをかく

玄らせても玄るしなくてはすぎのかど

あけぬくれぬといかでまちなん

とかきといめたりし水くきを只おほかたにおもひな
しすてたりし事のありしそやわれを玄のぶのこひご
ろも今きてみるぞよしなき我のへかやうになる人な
らすばたゞいまもたちいで、父母の御事をもとま
ほしくは思へ其われぬへかやうになるといへばさす
がかうともいはしろのまつことの葉もかきくれてお
つるなみだのひまよりもめのとはなきかしゆぎやう
じやにときれうたてまつれやとてれんちうふかくい
り給ひきぬひきかづきたれふしりうていがれ給
ひけりそのころ丹波のくにへはみやこよりほんけの
一ぞく御下向有て三日のかりくらあり國に有あふ弓
とりたち皆かりくらにいでらるゝ家かぬもおなじく
まかり出るかゝるたぎやうのひまなりしにめのとの

ねうばうをめしておほせけるは此人歸らせ給ひては
いかに思ふとかなふまじすこしもいそぎゆきちゝの
いのちにかはらんとおほせ有てとるもののもとりあ
へず夜半にまぎれて只二人丹波の野せをたちいで、
あしにまかせてたどりゆくかのみくさやまと申は木
こりのかよふ道おほしかなたこなたとふみまよひと
ある木かげに立よりて一夜をあかし給ひけりかくて
もはてぬ夜半なれば月西山にかたぶきほのくとあ
かしかたなるさうてんにやうく木かげをたち出る
末の松山こひのもりこゝろばかりはいそげ共ゆく道
さらに見もわからずにちりんいでさせ給ふをこそひが
しとばかりわきまゆれせいほくにまよへど何とてか
南へみちのなかるらんかくて二人の人々そのぬし玄
らぬたまづさのふみまよひゆくおりふしをのまさか
りをもちたりし山人一人のきあふたり此山人が見參
らせあらふしげや秋まちかぬるはぎの花きさやうか
るかやおみなへし露をもげにくねるかや玄ぐれに

そむるもみぢ葉とませのうちの八重ざくにあひまが
ひぬる上らうのやかんのをそれもはゝからでそこで左
ほれたる立すがたは何を志るべのたよりにか人りん
まれ成亥んざむにかやうにたちいり給ふらんとあや
しめ申てたつほどにとがめもとひもせられずしてた
がひにやすらふばかりなりいやこらうのへんげかあ
やしやと山人の思ふもことはりなりめのとのねうば
うこれをみてこゝろありげなる山人なればすこしい
つはりひやうごへのみちのあんないをも問ばやとお
もひいかに是なる山人にたづね申たき事のさふらふ
わらは共と申は當國はつかのこほりのものにてさふ
らふがこれにまします上らうのち御ノ誤、子はひやうごの
うらのつきしまのぶぎやうにたゝせ給ひて更にひま
なくおはします母子はけいばにて殊外にくませ給ひ
父子かへらせ給はぬさきにあらざる事を申つけうし
なふべしとのたくみのさふらふほどにみづからあま
りのいたはしさに夜半にまぎれて御供し是までまよ

ひてさふらへどもゆく衛を玄らでたゞすむ也野にも
山にもあるべぐさ兵庫の浦への案内ををしへ給へや
山人よ此山人がうけたまはつてさらばとくにも此み
ちをかくとはおほせもなくしてこなたへ御出候へと
てたに河をわたりそばを行めのとも名月もたがひに
たもとをとりかはし草葉々々をわけてゆきたかきと
ころにあがつて是はいにしへひやうごへのおひわけ
と申て候を近年人まつがたうけと申ならはすゆらい
の候をかたつてきかせ申度は候へどもすこしもさき
へといそがせ給ふ上らうたちにてましませばねんご
ろにはかたり申さぬなりあれ御覽候へにしへみちの
候はあれはむろたかさごへ下る道かまへてそなたへ
ゆかせ給ふなたつみへすこしゆき一だんだかきとこ
ろより東のかたを御らんせられ候へみなとがはさい
たかしもかんとりすゝめの松原みかげのもりくもゐ
にさらすぬのびきやわたなべかんざき天王寺すみよ
しのはまも見えぬべしにしはあかしたかさごおほく

ら谷といふかたなり南にかすめるなぎさこそひやう
ごのうらにて候へ東西へわかつみちのべのいかにお
ほく候とさうへあやぶみましまさで兵庫のうらをめ
にかけてすぐにゆかせ給ふべしなごりおしほのゆふ
日かけこれより御いとま申とて山人はみねにとまり
けりめのともしうもろともにこのおそろしきやま
の内道あるべせしうれしさよいかさま是は山人にて
よもあらじ多年たのみをかけ申くらまの大悲たもん
の山人とげんじ給ふかやありがたさよとかたりつゝ
さしもにものうきみちなれども此物語になぐさみて
やう／＼ゆけば津の國のひやうごにつかせたまひけ
りあるうら人にゆきあはせ給ひ人ばしらのゆく衛を
たづねさせ給へばこのうら人が承て惣じて人ばしら
のゆく衛とてたづねきたりたらんする者にあんない
をも忘らせ音信をもいはせたらん者をやがてとつて
人ばしらに立べきとさだめさせたまへばいかに上ら
うたちをいたはしくおもひ申せばとてわが身にかへ

て申べきかなか／＼思ひもよらぬ事なりとかたりす
てゝとをるさすがに道理なりければかさねてたづぬ
るまでもなくとあるところにやどを取て日數をくら
せ給ふさても丹波のいへかぬは三日の狩くらすぎわ
がしゆくしよにまかりかへる御内の者はしりむかつ
てなふかみさまこそ過夜めのとのねうばうはかりひ
きぐしてうせさせ給ひて候をいかに尋申せ其御ゆき
方もましまさすいかゝはせんと申いへかぬ聞いてふし
ぎの事を申ものかなとれんちうにたちいり見ればげ
にくうせて見えたまはずこはいかにとあきれはて
つねにすみ給ひしところを見ればくはしき事をかき
をき給ふなに／＼今生ならざるはなのえんかやうに
ちらかはるべしとはゆめ／＼おもひよらざりしに父
はゝきの御事をかせのたよりにきゝぬれば身のと
ががうもおそろしく御身のとがもうらめしやいたは
しや母御前は去年のあきむなしくならせ給ひぬちゝ
くにはるは高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎ

やうめさるゝとてひやうごのうらの人ばしらにとら
れけふともあす其御さいごを定めぬよしを承るなさ
けのゑんがつきばこそ御身のうらみもおはせんめす
こしもいそぎゆきちゝの命にかはるべし我もなから
んそのあとにいかなる花になれ給ふ其おぼしめしわ
すれすはばだいをとふてたび給へ返々とかきとゞむ
いへかぬこれをみてこはいかにひやうごのうらの人
ばしら只大かたに思ひなしよそのなげきとおもひし
に身のうへかゝるわがたもとの涙のあめと感ぬる事
よ道理なりことはりやさりながらかねてはひよくれ
んりとこそちぎりしになどやゆめばかりおらせてお
はせたまはぬぞととる物もとりあへずこまをはやめ
て打ほどにひやうごのうらにつきかなたこなたとた
づねけるにひやうごひろしと申せどもげにやつきせ
ぬちぎりにやねうばうのやどにたづねあひうれしと
ねちとの御事はと問は申々音信をだにも申さぬ也と

ぞなげかれけるあふ御心やすくおぼしめせこのしま
と申は五でうの大納言くにつなのきやうの一ゑんに
御あづかりとうけたまはることさら國つなのきやう
にはよきないゑんをもちて候やがてまいりてこのよ
しかくと申されければ國つなのきやうは聞召めんめ
んさまの御そせうを自餘の事にて候はいいかでかそ
むき申べき此しまと申はわたくしならぬ御ぐわんに
てくにつなばかりがはからひにて申々おもひもよら
ず明々日はかならずおまつかるべきないだん有べし
さとだいりに御まいり有てていちうあらはくにつな
もこゝろのをよびは申べし御一門の御ざしきをうか
がひ給へと仰ければいへかぬなめによろこびてわ
がしゆくしよにまかり歸りよもすがらしゆつしのい
うばうに語りけるは此事申かなへずば庭上にてはら
きつてゑんまのちやうにてまち申さんとかたり里だ
いりに參り事の子細をうかがひけるにじやうかいか

ねての御定めに三十人の人ばしら十八人はおとこにて今十二人は女ときくおとこをおきに玄づめをんな十二人をいその方に玄づめよとりぐのなげきをわきて見んする事ども中々おもふもふびんなるべし一度にばつと玄づむべしと仰いだされたりければ思ひきりぬるいへかぬもきもたましるも身にそはず今申さではいつのよに申べきぞとおもひふるへることをさしあげ一人ならぬなげきをわけて言上せしむる事世にもをそれいりたる申狀にて候へども三十人の人ばしらのまんするときめしをかれししゆぎやうじやはたとへばつの國なには入えのみつまつに刑部左衛門くにはると申ものにて候が去年のあき妻女にはなれさやうの心中にてや候ひけん高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎやうつかまつるとてこのうらをまかりとをり御ぐわんの人数にめしをかれ島のはしらと成さうべきか彼しゆぎやうじやがむすめは此いへかぬめがさいちよにて候がちゝがさいごのよしを

聞命にかはらんと申てこれまで參りて候へどもさすが女の身にて候ほどにをそれをなし庭中へ申あぐる事なふてあまりになげき候ほどにこの家かぬめが参りていちうに申あぐる事のかたじけなさよと申てをそれをのゝく有さまは水に玄たがふ柳のふし玄づめるが如くなりじやうかい御らんじてやああれはなにといひたるそせうぞやそうじて人ばしらのゆく衛とてたづね來たらんものにあんないをも玄らせいんしむをもいはせたらんものをやがてとつて人ばしらに立べしとさだめをきたるにたがはからひによつて是迄はきたりたるぞなんぢも思ふても見よ三十人の人ばしらを一人あはれ見とりかへば自餘のうらみはいかいせんなか／＼思ひもよらぬ事なれどもあまりになんぢがじやうかいにかけて申ところのふびんなれば明々日を相まちよそつとげんざむさすべしと仰有て御内にいらせ給へばいへかぬ時のめんぼくをほどこし我しゆくしよにまかりかへりねうばうにかたり

けるはあらめでたや明々日はかならず國はるを給は
るべしとの御誕の候を御こゝろやすくおほしめせと
とにかくになぐさむれども名月はちゝにもあはでこ
のまゝ扱のみはてむかなしさよちゝよくといひけ
るをものによくくたとふればきろうこくのはくと
うがさんろにすてし父をこひらうふくと三度よび
きえ入つらんありさまもかくやと思ひ志られたりさ
るあひだ人ばしらの吉日吉時にはや成ぬ三十のかご
をつくらせ三十人の人ばしらをろうのうちにてかご
にいれさせふね一そうに一人づゝとぞさだまりける
とられぬるもの共の妻子志たしきものどもか近國た
こくよりきたつてあれはわが子かわがちゝかかるひ
は兄弟などとてたもとにすがりかななしむをはうい
つじやけんのものふ共こゝろよはくてかなはじと
しもつをあてゝをひのくる今をさいごの事なればい
ひたき事はかず／＼さこそと思ひやらるれどせめて
ちかづく事なければかさをあげたもとをあげ有にあ

られぬありさまはめもあてられぬふせいなり中にも
くにはるをばよの人ばしらにはまじはらせすそのゆ
へいかにとたづぬるに家かぬもさるゆみとりなれば
とてもさいごのきはと思ひいかなるしよぞんかたく
むべきにくんびやうあまたそへよとてろうよりかご
に入させちうになひて出るめのとのねうばう是を
みて只いまとをらせ給ふこそちゝくにはるにてまし
ますと申もあへず名月はかさをかしこになげすて諸
人の中ををしわけて此かごにすがりつきなふ名月女
こそこれ迄まいりてさふらふ我もろともに志づまん
といはんとすればものふ共志もつをあてゝのけむ
とすいへかぬ其身をはゝからでやあなさけなしとよ
ものふたちその人一人ばかりをは御めんなるぞと
いひければ時の奉行のかづさのかみあらくな申そ其
人はでう／＼そせうのあるかたなりすこしかごをか
きすへなごりおしませ申せ承ると申てかごをかしこ
にかきすゆるつゐのわかれとおもへどもつかのまの

たいめんきこそやと思ひやられてなか／＼によろこびの涙はふちと成てくがにて玄づむばかりなりやゝ有て父くにはるおつるなみだのひまよりもげに心ざしのましませばこそ是迄たづねたり給ふらめなにとてか人の子の親の思ふ心中にさういして有らんわごせがおもひふかうしてはゝはつるに死してありくにはるもおなじみちへと千度百度思ひつれどもうきよにもしもながらへばわごせがゆく衛や聞とおもひかゝるしきやうにおもひ立て今さらうきめをみると事もひとへにわごせゆへぞとよ子はかたきかたからかとせんあく二つをあんするに人の子はたからにてわごせはおやのかたき也かくはいひてあれ其ふかきうらみはのこらぬぞ此年月佛神にきせい申せしりしやうには命のうちに見つること何よりもつてうれしけれか様に小車のめぐりあふべきみちならばはゝもろともにながらへてみるとだに思ひなばいかゝはうれしかるべきぞたゞしうれしきなかにもかくあさま

しきさいごのていをあのまれ人に見えぬることなによりもつてはづかしけれよし／＼それもことのゑんひめを思ひすて給はずばみしものとおぼしめしばだいをとふてたび給へなさけなのめのとやかやうにちかきあたりにすみながらへてあるものが今までいんしむせぬ事のうらめしさよと有しかは姫はなみだのひまよりも御道理にておはしますゆるさせたまひさふらへやみづからともに玄づみつゝ御手をひかへて三津の川玄での山路をこえすぎてゑんまのちやうの御供も申べきにてさふらふぞやみづからをもこのかごにそへさせ給へ人々とてもだへこがれかなしめばちゝもかごのうちにして泣てはくどきうらみてなくうとうがながす血のなみだ今こそおもひおられたれ人のなげきも我思ひもうきよにすめばおほけれどかかるあはれはたぐひなしと上下ばんみんをしなべてあはれと問ぬ人ぞなきかづさのかみは御らんじてかくては時刻もうつるなりはやしてかごをかゝせよと

て又ちうになひて出る

さるあひだじやうかいはわだの三さきの觀音だうに
て御けんぶつあるべしとてござわうざちよをさきとし
て御一門三百餘人ざゝめき渡て見えさせ給ふ扱もは
かせのやすうぢはなぎさにかなしむありさまをみて
是はひとへにやすうぢががうとなりなん事こそくち
おしさよと思ひ觀音堂に參り庭上にかしこまりあれ
あれ御らん候へ諸人のなげきはひとへにあび大しや
うの罪人のねつてつのほのほにむせぶらんもかくや
く候玄やくそん一代のせつけうに法花經を經王とす
一萬部の法花經を玄よしやさせられ三十人の人ばし
らの名字名乗重歎書しるししつめの石には年號日付龍
神なふじゆましませとてかいていにしづむる物なら
ば五十二んべすいきのくどくには八十をつこうの
生死のつみをめつし龍神なふじゆましまさばかなら

す玄まは御成就候べしいかゝと申されたりければ淨
海きこしめされてとかくの御返事もましまさず御ま
なこのけしきかはりければ御一門の人々もはかせの
安氏もみなせきめんしてこそおはしけれさても丹波
のいへかぬはそれをもはゞからでねうばうめ
のとをひきぐしくわんおんだうにまいり庭上にひ
れふしあら御なさけなの御事やたゞ御たすけあれと
申さんにこそにくし共おぼしめすべけれ二人のもの
に一人とりかへさせたまほんに何にふそくの御座有
べきぞ玄かるべくも候はゞ我々ふうふにくにはるを
とりかへさせ給へやとてんにあふぎ地にふしりうて
いこがれかなしみける淨海御らんじてふびんとや思
召れけんぎわうをめして仰けるは人のうへにふく風
の我身にあたらぬ事やあるいかにこゝろつよくとも
あの女にあはれをとふて得させぬかと仰いだされた
りければござわうなゝめによろこぶでいそぎ名月女の
そばにゆき御なげきをばじやうかいもふびんとおぼ

しめさるゝに御前ちかふ御まいり有て御申あれとて
引たつるじやうかい御覽じてやあちかふきたつて申
さず共なんぢがそせうをば聞わけぬるぞさらばくに
はる一人をばあの女にとらせよのこる二十九人をば
時刻うつればなげきのあるにとつくしづめよとおほ
せ出されたりければのこる人數のなげきはなか／＼
申許もなしかゝりけるところに淨海の御内に三十人
のわらはの中にもまつわうこんていと申てみめかたち
じむじやうなるが觀音たうに參り申けるは三十人の
人はしらをみな／＼たてさせ給ふとも人のなげきの
しまならば成就する事候まじ又おぼしめしたち給ふ
御ぐわんをむだにしたまひては君の御意にもそむく
べき志よせんはかせ御申のことく一萬部の法花經を
亥よしやさせられ三十人の代官になにがし一人立な
らば末代島は成就してたえする事候まじいと申うけ
たるまつわうは上古も今もまつだいもためしすくな
きこゝろかな

淨海ふびんに思召誠にすいきの涙をうかめあらふび
んのものゝ申事やさらばはかせともかくもはからひ
たまへとおほせければはかせなゝめによろこぶでい
そぎはまに下り先くにはるをとりいだして名月女に
たぶ扱又のこる二十九人をもみなとり出し給ひてこ
と／＼かへしたびければうけとり請取はまに出う
れしきにもなみだつらきにもなみださきだつ物は涙
なり三十人の人ばしらふしげのいのちたすかるはな
にはいりえのくにはるのひめゆへなりとよろこび我
國さとへ歸てあるひは兄弟まこ子共に取付／＼よろ
こぶ事うらしまがいにしへ七世のまごにあひぬるも
是にはいかでまさるべきじやうかいよりの御誕には
たんばのくにのいへかぬが志うとが命にかはらむと
思ひ切こそやさしけれきんやかた野のせの庄八百町
をとらする志うとをふちし天下へ能心みやつき申せ
とてくだしたぶこそめでたけれ又吉日をあらため七
月十三日にさだめさせたまひて一萬部の法花經をら

くちう洛ぐわいのてらへへ日記をあげて志よしや
させらるゝ程なく御經出來ひやうごの浦へまいらす
るはかせ御經とりあつめかずの御へいを切たてふね
をしうかめ打乗てはるかのおきへをしいだし御經志
づめ御へいをふへてきようしやくのつとを申さるゝ
まことに松王のぞみ申ける間彼一にん人ばしらにた
てられけるぞ志のせうなるどくじゆの御經あるべし
とて一千餘人の御僧達を洛中洛外よりしやうじくだ
し給ひてなぎさに御經あそばせば大小ちくのけぢる
んの龍神なふじゆあるによつて島は成就する十四町
の所なりきやうのしまと申て平相國のこうりうの今
に有とて見えにける名月と申も只よのつねの人なら
ず鞍馬の大悲たもむてんの御はからひによつてきち
じやうてんによのけしんにてしまをも成就人ばしら
をもたすけんために名月とげんじ給ふ也扱松王と申
も只よのつねの人ならずだいにちわうのけしんにて
島を成就の其ためにたて給ふとぞ聞えけるつたへき

くいにしへのたいせ太子はかたじけなくもによいの
たまをとらんとてゑんしかひをもつてちよつかい
をはかりつくしつるにほうじゆ得たまへり大ぐわん
としては又つるにむなしき事あらしこの淨海も末代
たみをあはれみてひやうごに島をつき給ふ地ざうさ
つたのけしんしくうせいいくわんの御ちかひありがた
しともなかなかに申ばかりはなかりけり

かまた

源氏左馬の頭義朝は待賢門の夜軍にかけまけさせたまひ東國さして落給ふ爰にせんぞくががけてよかはほうしの大将におほやのちうきかはなす矢を信朝進ノ假借長の弓手の膝口にうけとめさせたまひ其御手大事にて美濃の國わうはかの長者のたちにつかせ給ふ長者いそぎたち出義朝の御目にかゝりさては朝長は御供かきかまほしやとありしかば義朝聞しめされて大事の手負さいごのきはといふならば長者の歎きふかゝるべしと思召さん候朝長をば悪源太とうちつれ鎌倉へつかはして候明年のころかならずぐしてまいるべしとふかくつゝませ給ひ其後鎌田を召れいかに正清朝長が手を見よ尾張をさしてひとまづおつべきにてあるやらんくはしくとへ正清承りちうぐうの太夫信朝長に參りみやうにちは都よりうつてのまいり候

べし夜半にまぎれてひとまづ御供めされ候へと申す朝長聞しめし御供申たくはさぶらへどもいた手うすでに七かしよの手おいごたひやすからねば御供申がたし詞さらば平家の者どもにかきくびなどにせられてはかばねのうへの耻辱たるべし唯々腹を切なんと御返事を申させ給ひやがて鎌田を召れいかに正清弓箭にたづさはりきゝうの家といひながらじがひをいまだ恵らぬなりいかやうにするものぞくはしく申せ鎌田承りさん候それじがいと申は十方じやうどとは申せども先最後の時は西にむかつて手をあわせかうしやうに念佛申腰の刀をするりとぬき弓手の脇にがはとたてめてへきりゝと引まほし心もとにさしたてゝ袴の着きはへをしおろし臓をつかんでくり出してすんくに切てすてたるをきよき自がいと申なり朝長聞しめし頓而心得たまひてをしてをしおきなをり腰の刀をするりとぬきゆんでのわきにがはとたてめてへやう／＼ひきまほしかへす刀を取なをしこゝろ

もとにさしてゝきらん／＼と玄たまへどもいたで
うすでにうでこはり御身かうこうならざれば玄がひ
をはんに玄かけたまひ鎌田はなきか首をとれ正清こ
のよし見まいらせ泪とともにまいりつゝ御首をとら
んとしけれども三代さうおんのしう君にいづくに刀
をたつべきとなくよりほかの事はなし朝長は御覽じ
てふかくなり正清はやとく／＼とのたまへばいたは
しや御首をみづもたまらずかきおとし義朝にまいり
つゝ御自分がいのよしを申せば御落泪はひまもなし其
後義朝かまだをめされこれより尾張へは何として着
べきぞ鎌田承り長者の弟にわしのすのげんくわうを
おたのみあれと申やがてわしの尾たのませたまへば
やすきほどの御事とて柴舟くだすにことよせ人々を
のせ申かせをたかくひあげ上に柴をつみかけこふ
づの七良が七百餘騎にてさゝへたる關所のまへをと
かくちんじてをしとをしうつみの浦に船をよせ鎌田
兵衛を御使にて長田をたのませ給ふ長田なんなくた

のまれ申新造に御所をたて君をいれ申いつきかしづ
きたてまつるこの事都にかくれなし時刻うつしてか
なふまじひいそぎうつてを下さんとて彌平兵衛家清
に三百餘騎を下したぶ小松の内府御誕にはおろかな
る御はからひかなかの東國と申は源氏に心ある事な
りうつてくだると風聞せばあづまに殘る源氏がうん
かのごとくはせあつまりいかさま大事も出来なんし
よせんたばかり狀をこしらへ長田をたのませたまひ
くわぶんの國所領を一旦あたへみかたにめされ義朝
をたばかりやす／＼とうつてのちかの長田もちうば
つたるべきに何の玄さい候べき此儀に玄くはあらじ
とてやがてたばかり狀をこしらへ長田が館へつけさせ
給ふ長田なんなくたのまれ申御教書を戴きひらひ
親の首をきるのみならず玄たしむべき兄弟をほろぼ
し六親ふはにして三寶のかごなし父母ふかうにして
天ばつをかうむるそのいわれあひかはすカ・ル「去年

のつみきんねんにかんじ平治のたゝかひにかけまけていとをさつて遠島おんびにまよふわづかにろめいをせきさりにかけさせうの志たひをらんぶうにまかすほゝたのみすくなきことは槿花一日の陰を待がごとく忘うふう春の雨をまつに似たり逆も玄めつすべきものおや此みかたにくみせんことはたゞ玄ん玄んにのぞんてはくひやうを踏に似たるべしはや義朝がかうべを切て天下に捧申べしけしやうには美濃尾張三河三ヶ國を宛行同じゆりやうは望たるべし仍狀如件平治二年正月一日長田が館へとかゝれたり詞長田御げうしよを戴夜半に人をまはし五人の子どもをちかづけこれ／＼おがみ申せ繪旨のむね至極の道理是にありげにも義朝は親の首を切たまふ五ぎやくざいの人なるをしうにたのみてなにかせんいざ此君を討申美濃尾張三河三ヶ國をたまはり上見ぬ鷲とおもはりいかゞはからう子ども承りこはゆゝしき御大事有候此人々三人を討には尾張國がうごきてもたやすく

案ノ假借

うたれ給ふまじ御恩安あれと申す長田聞てふかくなりなんぢら勢をそろへてうたばこそたばかつて打べきに何の子細の有べきぞと申かゝつしところに三男せんじやうと申者ゑぼしのさきを地につけ仰のごとく此君は親の首を切たまふ五逆罪の人扱又一代ならず二代ならず三代さうおんのしうの首を切たまはれ五ぎやくざいはさてをきぬ八逆罪をいかゞせんながらしくは候へども爰にたとへの候を語てきかせ申すべし昔てんぢくせつせんのかたはらにめいみやうてうといふ鳥ありかの鳥どうひとつにてはし二つひとつのはしがゑをもとめぶくせんとせし時ひとつのはしかしこくて此ゑをちうにてばうてくうひとつのはし思ふやういかなればよの鳥はどうも一つはしも一つ我等いかなるいんぐはにやどうひとつにてはし二つたま／＼もとむるゑじきをもうばはるゝ事の口惜さよ所詮一方をたいぢせばやと思ひ毒の蟲をもとめてぶくするまねをせしとき常のごとく心得此ゑを

ちうにてばうてくう フシはしは二つと申ともどうが
一つであるあひだ フシ其毒どうにおさまりて死んだ
ひがやぶれつゝどうたひがそんしてをのれさへに死
したると承りて候ぞ我も人も自然是もつてわひとし
かるべし此君と申はせいたうかしこくおはします鎌
田兵衛正清はならびもなきがうの者わらはにしぶや
のこん王は弓矢をとつて名人と名をえたるほどのも
の也是三人をうたんには尾張八郡うごきてもたやす
く討れ給ふまゝ ツメ我々が心中にはとてもすつる命
ならば君にたのまれ奉りうつみに城をこしらへかた
きむかふて見るならば軍兵どもをさしつかはして目
ざまし軍せさせ軍兵つきば腹切て玄での山の御供こ
そ弓矢をとつての面目なれむかしが今にいたるまで
むことしうとをうちとつていや世に出たるはうはな
しきかるべくば此事をたゞ思ひとゞり給へとよ詞
長田聞てことの外に腹をたて何と申ぞあにくはじや
めそれ天地ひらけはじめてよりこのかた天は父地は

母父母のおんをかうむつて庄司が申事を直にそむく
はきつくはいなりそうじてあのせんじやうめを見れ
ば中々腹もたつ罷たてといふ儘に居たるところをづ
んとたち簾中ふかくいりたるはとかう申すにをよば
れず クトキ荒むざんやせんじやうは父に玄かられ常
のところに立ち入つくるあんじけるやうは親のめ
いをそむくとてしうに弓矢をひくならば八逆罪のと
が主と一所になり申父に弓矢を引ならば五ぎやくざ
いのとがたるべし玄かじたゝもとひきつてさまをか
へうき世をいとはばやと思ひとし十七と申すには綠
のたぶさを押切て刀と友に西へなげつたのふぢ笈か
たにかけ心と衣を墨に染とんせい修行に出たりしか
のせんじやうを見し人のほめね人こそなかりけれ
其後長田残て子どもをちかづけにせんじやうにど
とんせいしたるとなさてなんぢらはせんじやうにど
うすべきか早々返事を申せ子ども承りともとくも御
はからひのあしくはよも候はじと申す長田聞てうち

わらひかやうに申も汝等を世にあらせんがためぞかし先むこの鎌田をばせんじやうがていへしやうじ山海の珍物とりかづく酒をしいよ醉たらんところを見て酌にたつたる者持たる酒をなげかけひらまんと（るノ誤ニアラ）ころをむすとくめひとまどころによき兵をかくしをきおりあふて討べしわらはのこんわうをばうつみの沖に大あみをおろしあみの奉行にことよせうつみにてうつべし主の義朝をば此庄司めにまかせよまづこなんわうをたばかつてこそといふまゝに左とみのもとのちりとらせ若き女をつかひにてこん王をしやうする玄ぶやさうなくきたる長田いそぎ立出三こん盃すきて後いかになふ玄ぶや殿を頼み申べき事の候が但たのまれたまはんならば申べしこんわう聞て何事を仰候べき長田が大事たるべくは一命をなりとも玄んすべし長田聞て打わらひそれまでも候はず我君の是までの御下向を一期の面目うどんげと存知蓬萊をからくみ君をいわひ申さんため蓬萊の下ぐみに魚と鹿

がいることにて候程に五人の子どもをば三川の國あすけの山へ鹿狩にこしさふらひぬ又うつみの沖に大あみをおろして候が奉行にはつたとことをかいて候若き時のあそびにれうすなどりと申てくるしからぬ事なれば奉行にたつてたべかしとうちとけがほにぞたばかりけるこんわうきゝあへずあかで腹こそたつたりけれたけなるかみをぶるくとほどひておほわらはにぞなつたりける爰にたとへありはんくはいいさみをなせば髪甲のはらをおひぬくいつもはなさずもちたりし四尺三寸のかくつばの打ものつばもとツメ二三寸くつろげ長田をはつたとにらんで何とさう長田君を大事におもひ申さばごぶんなりともいづまじきかさなくぱりんたんりんがうにはうばいども、ありこそするらめなどよびよせて出さぬぞやうめいたいけんゆうはうもんとまりく關々にて合戦に骨おりもののぐにかたひかせくだつて三日もすぎざるにあはの奉行にたてとさうや鳥のこがしろくなつて

こまに角のおいんほどまはられよ庄司定めて上へ申
さるべし太刀とり繩とりさだまつて打て切てすてら
るゝともまつたくこんわう出まじひ見ればなかく
腹もたつ罷立と云儘に銚子かわらけちらかしそと
のていまでおどり出しかのこんわうかいきおひはい
かなる天魔やくじんも面をむくべきやうはなし

詞去間長田はこんわうにおどされふるひく座敷を
たちかうのとのゝ御前にまいり何と物をば申さずし
たゞさめんゝとなく義朝は御覽じてあれはいかに長
田は何事をなげくぞさん候べちのゑさいにてさふら
はず我君のは是迄の御下向をいちごの面目うどんげと
ぞんじ當世はやる蓬萊をからくみ君をいはひ申さん
ため蓬萊の下つみに魚と鹿がいることにて候ほどに
五人の子どもを家の子郎等さしそへ三川の國足助
の山へ鹿狩に越さふらひぬうつみの沖に大網をおろ
して候が奉行にはつたとことをかひて候ほどに御内
のゑぶやをたのうで候へば奉行にこそたゞさらめ

クトキあまつさへとしよりたる庄司めをさんぐに
あつこうせられ申つれなく命ながらへこれまでまい
りて候とはらゝとなく詞義朝聞しめされてげにげ
にそれはさざあるらんぢたひあのこんわうはものぐ
るわしき者にて我いふ事をさへ五度に三度はそむく
者まとしてごぶんが申さんことをいかで承引すべきぞ
よし／＼庄司腹いて歸れ奉行には出さうするにてあ
るぞとて長田を歸させ給ひて後こんわうをめさる宏
ぶや承りあい庄司がそせう申たござめんゝしき大事
と心得御前にかしこまる義朝御覽じてあらけなくは
のたまはでやあ何とて汝はちがうたるぞ都より此國
まで長田をたのみくだる身が山ならば須彌山海なら
ば滄海よりも猶たのもしう候に一旦ちがうことあり
とながく承引はせざるべきと上のれうすなどりとや
らんは若き時の遊にてくるしからぬことぞとよ奉行
に立て魚を取庄司が心をなぐきめよこんわう承りつ
つしんで申けるはさん候それがしまつたく奉行に出

まじきにてもさふらはぬが長田がいまのふるみひを見候に君に心がわりを申五人の子どもをばかりくらにことよせさいそくまはし勢そろへ我君をうち申さんするたくみをめぐらすと見て候を御存なきこそおろかなれ義朝聞しめされてよしそれとてもちからなし長田が心かわるならば一所にありても何かせんもしもちうしんたるべくば後のうらみをいかゞせんただくいでてうををとり庄司がこゝろをなぐさめよクトキこんわう承りあかぬは君の御誼とておうけを申てごせんをまかりたつが君も聞し召せとたからかにフシ人はうんめいつきぬればちへの鏡もかき曇才覺の花も散はつるらふどふがたかかるを御存知なきひたゝれの上下四つのくゝりをゆる／＼とよせさせ黒糸おどしの大鎧草すりながにさつくとき惣而刀は三腰さす四尺三寸の角鐔の打物三尺五寸の太刀をか

さねばきにはき四尺八寸の長刀をひきづへにつるてかうのとのゝ御前に參りとうたいせんこの夕煙きのふものぼりけふも立ほくばう朝露のあたしめおくれさきだつ世のならひ君うつみにてうたれすばフシ参りて御目にかゝらんと泪と友にたち出る義朝は御覽じていまはしゝこんわうかど出いはへとの給ひてみづから酒をぞ下されける御暇申てこんわうはうつみの沖へ出にけりちぎりはあれど山鳥のおをへだつるがごとくなり調去間うつみにはかねてよりこんわうにくみての人数を定むるに先一番にきしのおかの十郎のくみをぐりをさきとしてむねとの大力卅六人大船八そうもよほし上にあゆみのいたをわたしこんわうをのせ沖をさしてこぎ出發にも魚がなきぞかしこにも魚がなきかと爰かしこと目を見合こんわうをうたんとする瀧谷もとよりぞんじのことちつともさはぐけしきもなくもつたりし長刀にて舟ぞこをとふとふとつきならし何とてめん／＼は夕日にしてかたむ

きたまふに綱手をばとらずしてやゝもすればそれが
しに目をかくるこそふしんなれあふやがて心得たり
汝等が主の長田君に心替り申某を此沖にてうたんす
るたくみをめぐらすとおぼへたりカ、ル思ひうちに
あれば色外にあらはるゝ天知地忘る我忘る人知まぢ
かくよつてかなふまじひ ッメ先長刀のきつてにはこ
む手なぐ手ひらく手はつはうさひしき長刀の手をつ
かふものならばさんをみだしてうたるべし長刀おく
れくだけば二ふりの太刀をもつてさんぐに切べし
太刀のつかおれくだけば三腰の刀をぬきかつゝ取
て引よせさしころしてそこのみくづとなすべきなり
運命つきはてゝ太刀も刀もおれくだけば汝らがたぶ
さを取て五人も十人もさうのわきにかひこうで海底
につつと入五日も十日もそこにて日をおくるならば
汝等がめいはといまるべしまぢかくよつてかなふま
じひとともへをかけり廻ればうつみを出しときには
こんわうならば我くまん誰くまんとはいさみしかど

此いきおひにおそれつゝ舟底せがいにひれふしてふ
るひわななきあたりするはことおかしうこそ見えに
けれ是はうつみの物語爰に物のあはれをといめしは
鎌田兵衛正清なりよひまではござんに伺公申さよふ
けがたにおいとまたまはりらうのやに歸りみたいし
みた若とて二人の若のありけるをゆん手めての膝に
おきクトキをくれのかみをかきなで涙をながし申け
るは正清都にて度々の合戦にそゝろに命のおしかり
つるもたゞなんぢらが有ゆへなりいつかなんぢらせ
いじんし父が供をつかまつり耻ある矢をも一筋いる
そのおりからを見るならばいかはうれしかるべき
とフシあけ暮是をねがひしに思ひの外に引かへて君
おちうどゝなり給へば御供申て正青もうたれんこと
は治定なりさあらんときに汝等は三川の國ゑんふく
じのゑんしゆのごばうにふかくけいやく申なりゑん
しゆの御坊にまいりつゝせうきやうの一巻をもよき
に學して正清がなからんあとをとへやとてつゝむに

あまるその泊餘所のたもとも濡ぬべし詞らうのおか
たは御覽じてこれはいまだ正月三日もすぎざるに御
身は何をの給ふぞといひもあへぬにしうとの長田く
みてをあまたよふひして鎌田どのやましますもの申
さんとありしかば正清スルカしうとの聲と聞これに候とて
太刀をつとり出スルとするらうの御かたは御らんじて袂
をとつてひつとレめあはてたり鎌田殿さはいでみえ
させ給ふものやけふこの比のならひにて親は子をた
ばかれば子は又親にたてをつく志かも御身おちうど
にてよろづに心を置べき身がサシあくまじき夜にて
もなし今夜をあかしたまひてフシ夜明てお出さふら
へやかまだ殿とぞとレめける正清聞いていつよりもむ
つましげなるふせいにて立歸りうちわらひなふさの
み留給ひそよめさるゝは御身の父正清がためにしう
となりいながら返事を申さんはふかくのいたりとぞ
んずるなりやがて歸らんさらばとてなごりのたもと
ひきさけて長田とつれてぞ出にけるかりそめながら

別とは後にぞ思ひ忘られたる詞去間せんじやうがて
いへしやうじ山海の珍物こくどのくはしをとゝのへ
いろをかへては三度もりふせいをかへては五度七度
盃の數もかさなればさしもにがうなる正清も次第次
第にひらめいたり長田是を見てあは時分はよいぞと
思ひちやうだいへつつと入かいを一つ取りだしみぢ
んさつとうちはらひにつことわらつて申やういかに
なふ鎌田殿此間の御つかれ思ひやられていたわしう
候こどもあまたさふらひぬしやうじもかくて候へば
にかほくるしく候べきたゞうちとけておあそびあ
れかいのみにとつては山田のがうと申て三百町の所
の候を鎌田殿に奉る庄司三度たまはるなりツメ御身
も三度まいれとてむこの鎌田におもひさす去間正清
しうとの呑たる盃に所領をそへてえさするうへいづ
くに心のおかるべきさしうけ／＼のむほどにみぢん
つもつて山となりいさごちやうじて岩となる盃の數
もかさなればゆんでの座敷がめてへまはりめての座

敷がゆんでへまはつて天上のおほゆかゝひらりくる
りとまいければうしろの左やうじによりそひてとろ
りくと喫けり酌にたつたるともやなぎもつたる酒
をなげかけおしならべてむすとくも鎌田もとよりが
うの者さつしつたりといふまゝにともやなぎがたぶ
さを取てひざの下にひつしたり長田是を見て居た
所をづんと立て鎌田がたぶさをとつてうしろへゑ
いとおりつくる鎌田是を見てなきなし長田さやう
にはせらるまじひと長田をかいつかんでとつてひき
よせたりけれどもいかゞはもつてのがすべきかくし
をきたる兵がすきをあかせずおりあひて一刀づゝと
思へども十三刀さゝれて樊噲といさむ正清もよはよ
はとなつてかつばとふすクドキ荒むざんや正清最後
の言葉ぞ哀なるされば弓取のもつまじきものは國を
へだつる妻子なりおやのおこす謀叛をなどかはゑら
であるべきぞたとひえんこそつくるとも二人の若が
あるなればなどさいごをばゑらせぬぞやなゝのこは

なすとも女に心ゆるすなと申つたへて候さいしちん
ぼうぎうわういりんみやうじうじふすいしやげにも
おもへばかたきなり子は三界の首かせとはいまこそ
思ひ玄られたりさんがいのくびかせとほんなうのき
づなにひかれつゝふかくのしをするものかなフシ
南無阿彌陀佛みだぶつとは最後の言葉にてあした
の露ときえにけり正清のさいごのていをしはかられ
てあはれなり詞さすがに長田もふびんに思ひ夜あけ
て首をとらんとてむなしき死骸にきぬ引おほひ各々
なりをぞゑづめける荒いたはじやらうのおかた是を
ば夢にもゑろしめされずよふけ人もゑづまりて兄
假借弟のひとぐもみなく歸らせ給ふがふしぎや妻の
正清はなにとておそく見えさせ給ふらんとうすぎぬ
とつて髪にかけとうらうまはりまごびさしを通ると
き人に忍ふだる聲にて鎌田殿やまします正清とよび
けれどよひにうたれた事なれば夜更てよぶに音もせ
ずよまのていを見てあればあぶら火すごくかきたて

あたりに人一人きぬひきかづきふしてありうたれた
るとは思ひもよらず醉臥たるぞと思ひするくとよ
つてなふ御身は鎌田殿にてましますかさやうに酒に
えひたまひては玄せん我君の御せんに何とてたゝせ
給ふべきおきさせ給へといふまゝにきぬ引のけて見
てあればクドキ紅に身をぞ染にけるあまりの事のか
なしさにフシ死骸にかばとうちかゝり玄ばしきえ入
給ひけりすこし心を取直しさこそ最後に自をうらみ
させ給ひつらん夢にも自玄らぬなり我をもつれてゆけや
とて最後にぬかぬ刀をぬきすでに自害と見えけるが
まで玄ばし我心明日になるならばむざんや二人の若
どもは父母が行衛を玄らずして父よ母よとよぶなら
ばじやけんの祖父伯父ごにて鶴鷹のゑを打やうにう
たせたまはんむざんさよ同じ道にと思ひ切又らうの
やにたち歸二人の若を見給へば兄が手をば弟にかけ
弟が手を兄にかけよねんもなうてふしにけりらうの

御かたは御らんじて二人の若をかきいだき父正清の
臥たりせんごにとうとおろしをきいかに一人のわか
共よ祖父おぢごの玄はざを見よなきけなの事やとて
りうていこがれなきたまへば二人の若も諸ともに臥
玄づみてぞなきにけるさてあるべきにてあらざれば
いかに聞か兄弟よかくうらめしき浮世にながらへて
あらんよりちゝもろともにうちつれてゑんまのちや
うにて母をてよとかたりつゝ兒みたいしを引よせて
弓手のひぢのかゝりを二万がいしてをしふする弟が
是を見てあらおそろしの母上や我をばゆるしたまへ
とて居たるところをづんとたちさらばよそへもゆか
ずしてころすべき母にすがりつくいとい心はきゆれ
どもまなこをふさぎ思ひ切心もとをひと刀あつとば
かりを最後にて兄弟のわからどもを三刀にがいしつゝ
わが身ははだのまほりよりしゆへんのじゆすを取出
し西にむかつて手を合ひこゝだに女は五障三從にゑ
らまれて罪のふかいとうじたまはるきうせんにかゝ

るみづからをたすけたまへや神佛南無阿彌陀佛とさ
いごにて刀をくちにくはへつゝ鎌田の玄がいにうち
かゝりあしたの露ときえにけりらうの御かたのさい
ごのていあはれといふもあまりあり詞荒いたはしや
ごんせんは是をば夢にも忘ろしめされず鎌田うたれ
ぬると聞しめしさこそらうのおかたがなげくらんと
ふらはばやとおぼしめしらうのやに立寄よべどこた
ふるものもなしあては鎌田うたれぬるところにある
ぞとおぼしめしよまのていを見たまへばらうのおか
た二人のわかみな／＼あけにそみ同じ枕にふしてあ
り母此よしを御覽じて是は夢かや現かやクドキさり
ながらだうりなりことわりや何にいのちのおしから
ん子よりもちごはいとうしきに花のやうなる著ども
をさきにたてよほひかたぶくみづからが一人あとに
のこりなば深山がくれの遅櫻フシ梢の花は散はてゝ
下枝にひとふさ残りて嵐をまつにたるべし我をも
つれてゆけやとて母もがいをとげたまふ平治二年

正月の二日の夜の事なるに鎌田をはじめ父子五人み
づのあはとぞきえにける詞天あければ長田鎌田が
首をとらんとてよまのていを見てあれば我女房をさ
きとしてみな／＼あけにそみ同じ枕にふしてありさ
しもなさけなき長田とは申せどもこゝろよはりとん
せいするか腹を切かいかゝはせんと思ふがいや／＼
身より出せるざいなれば荒くはほうなものどもが
なつたるありさまや長田が世にいづるものならばく
はほうのさいぢよはいかほどもあるべきになむさん
ぼうあみた佛とへんしゆの念佛を申鎌田が首をとつ
たるはとかう申にをよばれず其後義朝の御前にまい
り今日は三ヶ日の御かれい八幡宮へ御社參有べく候
たかみのゆどとのと申て忘さいなきところのさふらへ
ば御出あつて御ぎやうすいと申義朝聞しめされてせ
んぞの郎等ならずはたがかやうにふるまうべきかま
へて長田弓矢のみやうが七代まであんをんなれやと
の給ひて御ちうたいの御剣御腰の物を長田に預け給

ひしは御うんのつくるところなりかくて義朝のどのうちへ入給ふよるよりさだめし事なれば都合二百餘騎にてゆどのをふたゝ三重にをつとりまひてときをどつとあぐる義朝圍しめされて心替りか長田さん候都よりうつての參りて候に御自言あれと申す義朝聞しめされて長田がことはかねてより思ひまうけつることなきなし鎌田たとひ勇と一所になり我に心かわるとも三代さうおんのしうになどさいごをばゑらせぬぞやいかにゑい長田刀まいらせよ自分がいせんと仰ければ承はると申て刀に鎌田が首をそへゆどのうちへまいらせあぐる義朝鎌田が首を御膝の上にかきのせ給ひてカゝル荒はかなのたゝ今のうらみごとや我よりさきにたちけるぞや フシ玄での山にてまちよゑいさんづの川でおひつかんツメ腰の刀をするりとぬきゆんでのわきにがはとたてめてへきりゝとて引まはしかへす刀をとりなをし心もとにさしたてゝ袴のきゝわへをしおろしげうをつかんでくり出し四

方の壁になげつけゆぶねにて御手をすゝぎ西にむかつて手をあわせ何とて義朝玄なれぬぞさる事ありや父爲義天台さんぐわちりんの御坊にふかく玄のびておはせしをたばかり出し申て御首を切申すそのいんぐはたちまちむくうて死なれぬ事はに惜しいかにゑい長田いそぎまいりて首をとれ長田さうなくまいりえず長刀にてさしまいらせおづく御首たまはりぬフシちたの郡でうたれたまふたゞ人間のゐんぐははめぐるにはやきものであり去間長田は義朝の御首をもやすくと給りぬいまはこんわうが首をおそしてノ誤かまつるさてもこんわうはうつみの沖にありけるがれいならずむなさわぎゑきりなるは何事か君にましまると心もとなくぞんすれば舟をよせよとげちをする力をよばぬ次第とてさうなく舟をさしよするこんわうゆらりととんでおりいとま申てめんくとて五十町のところなるをもみにもうでぞはしりける爰に鎌田がめしつかひし下女一人はしりむかひさて御

身はいづくへ行てましますぞ鎌田殿はゆふべうたれ
たまひぬ君は今日たかみのゆどにて御腹めされさ
ふらひぬいまは御身の首を遅しとまらせたまふに
いづくへもひとまづ玄のはせ給へと申こんわうきへ
あへず泪をはらぐとながしさばかりそれがしが申
つる事を御せうゐんなくてうたれさせたまひて候や
さては鎌田は御心替をば申ざりけるやあふ尤かうこ
そあるべけれさだめて長田は我館にはよもあらじ君
の御さいご所たかみのゆどにぞあるらんそれがし
がうたれんずる事を一定と心得うちとけたらん所へ
つつと行長田が首を打おとし御けうやうにほうせん
と心のうちにそんすればツメたかみの城を心懸てゆ
らりくとあがりけり長田是を見てすはやこんわう
がうつみにてうちもらされ是迄きたつたるはあます
なもらすなとてまんなかにとりこむるこんわう是を
見ておもしろし長田そなたはまうせいなり我はたゞ
一人まいりさうといふまゝに大勢のなかへわつてい

りさんぐにきつたりけり去間長田かなふべきやう
あらざれば我館をさひてもみにもうでにげにけりこ
んわう是を見ていづくまでといふまゝに長田を目に
かけてはしりけり去間長田我が館へつつと入堀のは
しをひいて四六のきどをちやうとうつこんわう是を
見て荒もの／＼しけらのたけりといふまゝに三重の
堀をばひらり／＼とはねこして八尺ついぢのありけ
るに手をかくるこそおそかりけれかけずゆらりとは
ねこへちう門めんらうとをさぶらひ長田をおつては
玄りしは荒鷹かとやくやつて雉子をおふがごとくな
り去間長田つま戸よりもつつとぬけ行がた玄らずな
りにけりこんわう是を見て力をよばぬ玄だいとて又
とつてかへして大勢の中へわつて入西東北南ぐもで
かぐなは十文字八はながたといふものにさんぐに
きつたりけり手本にすゝむ兵を五十三騎切ふせ大勢
に手をおふせ東西へはつとおつちらしうそのわたり
をさうなくし都をさひてのぼりけるこんわうが心中

をば貴賤上下をしなべかんせぬ人はなかりけり

ふしみときは

盤ノ假借
抑常葉御前のせんぞをくはしく尋に父はむめづの源左衛門はゝはかつらのさいしやうとてゐんにみやつきたてまつる一年天下に女くらべの有しきとき千人が

中を百人すぐり百人が中を十人すぐり十人のなかよりも三人えらびいださるゝ一人はあやめのまひヘノ誤一人はまこのものまひ今一人はとつこのまひとぞ申ける彼あやめまこもと申せしはかほいつくしくかざりつねにいしやうをめしかゆるとつこの舞と申せしは更にけしやうはなけれ共いつもたへせぬすがたなれば名をときはとつけよとてとつこのまひをひきかへて常葉の舞とぞつけ給ふそのころよしともは天下のしゆごとまし／＼て家もさかへうへこす人もましまさずより／＼さんだい有て所望申されたりけれ共みかど御用ましまさず有時よしとも玄しむでんの玄もくち

にてへんげの物をきりとむるみかどえいらんましましてくわんもつかさもなにならずもとよりのぞみの事なればさらばときはをとらせよとてかたじけなくもみかどは常葉のまひのたもとに御手をかけさせたまひて一二のきざはしたんすのいしあまおちのきはにて給はりけり

そのころときは十七さいよしともは三十三かりそめぶりになれそめていま三人の子をまうけかゝる思ひにふし玄づむあらいたはしや常葉御せんいづくへもひとまづおちばやなんどおぼしめすがまて玄ばし我こゝろ四條のばうもんほりかはのめのとが宿所にをき申母子をばさていかゞせん又三人のわかどもがよはひをものにたとふるに出る日つぼむ花なれやいかにはういちじやけんの物のふと申共八十にあまり給ふはゝ子によも目はかけじ其儀にてあるならばいづくへもひとまづおちばやなんど思召あにいまわかのしやうぞくははだにねりぬき引ちがへあきぢしろの

ひたゝれめす次をとわかのしやうぞくはくれなるの
ふたつぎぬひきまはしのおびばかり御身は十二ひと
へもはかまのそばたからかにさしさみ二さいにな
りし牛若を三五のあひにかきいだきいちめがさにて
かはかくしとうのうらなしさしはひて五條あたりの
くろつちをはじめてふむぞあはれる

ころはいつぞの比ぞとよゑいりやく元年正月十七日
の夜の事也清水参りと申て諸人かずを玄らざりき上
下のだうしやにうちまぎれきよみづに參りつゝひだ
りのかうしにつや申とをのれんげをもみあはせ八ふ
んのかうべを地につけて抑御山は田村丸の御こんり
う大同二年に立られやまよりたきが落ればみなかみ
きよき御てらとて扱こそがくにも清水寺とはうたれ
たりみづからが一七れい今までまいりのりしやうに
は三人のわかどもがゆく衛まほりてたび給へなむ大
悲くわんせおんとわにぐちちやうどうちらしなみ
だにもせび給へばことに御ほぞんも御なふじゆやま

し／＼けんみすもきちやうもさ／＼めひてぼうしやも
ゆるぐかとおもへばいと／＼しゆせう也さるあひだ常
葉御前と／＼ろきの御ばうにうつらせ給ふひじり涙を
ながしそれきうちやうのふちはまつにはなれていろ
見えず三がいの女はかしこしと申せ共一人のつまに
をくれたよりなしとはいこそもひ玄られたれい
たはしやよしとものうき世に御座の御時はかりそめ
ぶりのまふでもこしくるま乗物よとさこそゆ／＼しく
おはせしにいつそのほどにひきかへてかちはだしな
る御ありさまを見まいらせ候へば更になみだもせき
あへすこれに志ばらくといめ申たく候へども六はら
近きところなればいづくへもひとまづおちさせ給へ
と仰けう常葉きこしめされてさんさぶらふみづから
がおちうするかたは大和の方にて候いとま申てさら
ばとてと／＼ろきの御坊を出させ給ひ爰はかたきのや
かたのまへこなたへこよやわかどもとて二人の若の
手を引てとをるところはどこ／＼ぞ三十三間いまぐ

ま野一二のはし法性寺明れば正月けふははや十八日
の事なるに宇治ははるさめふりけれどこばたの山は
雪ぞふるいつ君がたまさかにあゆみもならはせ給は
ねどふる玄ら雪を御手にてうちはらひ／＼あしにま
かせて常葉御前まよはせ給ひけるとかやあらいたは
しやわかぎみたち御こそゑをあげさせ給ひ何とてわれ
われにおちやめのとはそはざらんさて又みだいさま
にかいしやくにんは参らぬぞつめたやなふはゝみだ
いとおどろがなにたれふしりうていこがれたま
ひけりときは此よし御らんじてふかくなり若どもよ
さればにやなんぢらはげんじの大將たるべき身がか
くふかくにみゆるか明々日に成ならば六はらがたへ
いけどられいま若ばおとなしきとて六でうかはらで
きらるべしつぎをとわかはさしころしうしわがいま
だにやくなれば母もろともにいけどられかも河かか
つらがはに玄づめられなん其時はつめたい共申まじ
さむいともやはかいふたゞいとおしきものとてはう

しわかひとりで候とてそこをみすてゝおち給ふわか
君たちは御覽じてなふつめたいとも申まじさむい共
申さじとて御たもとにすがりつきこばたの山にかゝ
らるゝいたはしゝともななか／＼申ばかりはなかり
けり

さるあひだときはごせんと有松のこかげに立よらせ
給ひてふる白雪をいとはれしがむかひの谷を見給へ
ばともし火がほの／＼とみゆる人すむところにてあ
ればこそ火は見えてあるらめとはるぐくだつて見
給へば賤がいほりぞさふらひけるとぼそをほと／＼
とたゝき是はみやこのものにて候がこのゆきみちに
ふみまよひこれまで參りてさふらふ一夜の宿をかし
給へとさも高聲にのたまへばうちよりもあるじのむ
ばがたちいでゝ戸ぼそをあけ常葉の御すがたつくづ
くと見まいらせ内へはしり歸てなふいかにおぼぢご
かどのほとりに女のこそゑとしてやどかせと申ほどに
たち出でみてさふらへばあたりほとりもかゝやく程

の上らうのおさあひ人をあまたつれやどかせと申が
うつたへの人にてはなげなぞなふこの山にすむなる
こらうやかんのものがおほぢやむばをじきもつにせ
んためかさらすば今夜はゆきけしからすふりつみた
ればゆきをんなといふ物かあらおろしやと申おほぢ
聞てそれはこらうやかんにてはあらじむばはよも亥
らじおほぢはあら／＼すいしたりいで／＼語てきか
せんかたじけなくもしゆじやうじやうくわうのくら
ゐあらそひの御時六でうの判官ためよしじやうくわ
うがたをつかまつりつるに合戦にかけまけてんだい
さん月りんの御ばうにふかく志のびてましますを眼
前の御子よしとも討手を給ててんたいさんよりさが
し出し七條しゆじやかこんけたうをか田と申ところ
にて御くびを切申其いんぐわたちまちむくふてたい
けいもんの夜いくさにかけまけぬるは道理なりこれ
によつて六波羅よりよしともがたの落人をばいはを
もありたいない迄もさがせといふ事なればもしもよ

しともがたの落人にてや有らんにかりそめにやどを
まいらせておほぢは何となるべきぞ其ねうばうに宿
かさすば今夜一夜のうらみたるべしうらみはすゑも
とをるまじやあこなたへこよやむば御前とて亥ばの
あみ戸をはたとたてこばたの里の事なれば皆くちな
しとをともせずあらいたはしや常葉御前さきへとゆ
けばみちもなしあとへ歸れば山路なりあたりに人の
あらばこそかなたこなたとかりもせめさて有べきに
てあらざればおほぢが家かげに立よらせたまひあた
りのゆきをはらひのけ御こそでをぬいでさつと亥き
若君たちをすへならべ人のおやの子を思ふみちほど
にあはれるなる事よもあらじいちめがさをそばだてゝ
風ふく方のかきとなしかんぶうをふせぎ給ひけるさ
るあひだ常葉御せんあかつきがたの事なるに諸法の
うゐてんべんのことはりをおぼしめしいだされてい
かにわか共ものをきけさればほつけ一乘のくりきは
たつとし一の巻のはうべんほんに十方佛土中のいう

一せうほう無二やく無さんしよぶつはうべんせつと
とかれたり此もんの心は十方佛土の中にたゞ一乘の
ほうのみ有て二つもなく三もなしほとけのはうべん
のせつをのぞくのぞくといつぱいち一すなはちめう
なりされば妙とかける文字はへんには女作りにはお
さなしとかけり此ことはりを聞ときは只みづからと
わか共はめうの一字にてあらずやさあらん時は十方
の諸佛もなどかあはれみなかるべきうらめしのうき
世やな南無阿みだぶつみだ佛と十べんとなへたまひ
つゝ又わかたちにうちかゝりりうていこがれ給ひけ
り

おほぢ此よしきくよりもかどの邊に女のこゑとして
たつときをとのきこゆるは宵に宿かり給ふ上らうの
いまだかへりかねてましますげなぞなふたかきもい
やしきも女はおなじ事にてあらずやあらこゝろつよ
やと申むばこのよしを聞よりもそれもこゝにたとへ
のさふらふたにの枯木はたかしといへどもみねの小
松にかけさゝず宵におほぢごのよしともがたの落人
にてやあるらんとかたくせいぶんし給ひしその一言
のおそろしさに扱こそこなたへとは申さねおほぢさ
なしとのたまはゞむばはいやにてはさふらはずいざ
やこなたへ申さんとてふうふたちいで戸ぼそをあけ
なふあれはよゐの上らうにてましますか御身一人な
らずおさあひ人をあまたつれいづくよりもいづかた
へ御通有ぞと問ければときは聞召れてうちうら見た
るこはねにてさればこそとよ山人よ風にはもろき露
の身のきえぬは人のいのちにていまだながらへてさ
ふらふぞやいたはしの事やとていまわかどのをばお
ほぢがいだきをとわかるのをばむばがもりでゐへし
やうじたてまつりあたため申に志たがつてすそのつ
ららもとけにけりかくておほぢはあひのしやうじの
ひまよりも常葉の御すがたをつくづく見まいらせな
ふいかにむば御前でゐにまします上らうはよのつね
の人にてはなげなぞなふそれをいかにと申にむかし

みめ能人はかんのりふじんそとをりひめをのゝ小町

やとりかねたる夜半の月かな

の若ざかりびしやもんてんのいもうとにきちじやう
てんによと申せしはもろこしてんのほとけにてわれ
らごときの衆生等は名をのみ聞て目にはみず當時み
めよき人はあやめのまひまこともの舞よしとものみだ
いどごろくものうへのときは御せんとやらんもこれ
にはいかでまさるべき一しゆのうたをかけまいらせ
御こゝろのうちそつとひき見申させ給へむば此よし
を聞よりもそれはわらはがわかざかりみやこに有し
ときこそ月見はな見と申てうたれんがをもたしなみ
さふらへ三十年かあひだふしみのさとにしてられ歌
道の事をばはつたとわすれてさふらふおほぢむかし
をわすれさせ給はずば一しゆのうたをかけ參らせ御
こゝろのうちをちつとひき見申させ給へおほぢなゝ
めによろこぶであひのしやうじをほとゝと音づれ
一首はかうぞ聞えける

木はた山おろすあらしのはげしくて

常葉きこしめされてあらはづかしやすがたこそ志ま
のゑびすに似たれどもこゝろは花の都なりけりみづ
からもこしおれうたなり其よまばやとおぼしめし
木はた山すそのゝあらしけはしくて

ふし見ときけとねられさりけり

おほぢやむばが承て扱はうたがふとこゝもなしよし
ともがたの落人なりでゐは人目も憲げければやあこ
なたへしやうじ申せとてぢぶつだうをこしらへとき
はをしやうじ奉り歌をよみ詩を作りけふものきがふ
り候けふもけはしう候天はれて上らうのおぼしめさ
れんもところ迄おほぢやむばがをくり申さんけふ
もけふとといひればあるじのなさけにほだされて伏
見の里にときは御せんはあらたまの月をこしきさら
ぎに成迄おはしますかくておほぢのあたりに人にめ
つかはるゝ方もをんな共がひとつところにあつま
つて申けるはむかひのたにのおほぢ子の本にこそ正

月のなかごろよりみめいつくしき上らうの御宿をめ
されいまだかへりかねてましますよしをうけたまは
れ共我も人も人につかはれ參らせてひまなき身にて
さふらへば參りておがみ申事もなしけふはそらはれ
月も能さふらへば主々にいとまを申いざやまいりて
おがみ申さん尤玄かるべしとて都合女は五人何をが
なもつて參らふ時世に志たがふけうなればとてめん
くにちよくしゆを持つれておほちがでるへさつと
かゝりさけのいりたる物をとうくとすゑならべ常
葉の御すがたをつくとまほりとれてぞゐたりけ
るとときは此よし御覽じてあらおそろしとまほるやあ
のやう成げすはかならずくちのさたうなるにみづか
らいつはりをかたらばやとおぼしめしなふいかにね
うばうたちわらはなぐさめにきたり給ふがうれしき
にめんばくなくは候へどもみづからが古郷を語てき
かせ申さん本國は大和の國ふる里はうだのこほりや
まざとのものなりみづから十四の春の比父母に玄か

られ參らせみやこにのぼり五條あたりにこやどを取
高きもいやしきも女のならひこゝろにまかせぬ事と
てやがてとのごをまうけ御覽さふらへ三人のわかを
まうけてさふらふかゝるわりなきなかと申せどもあ
らたのみなの男の心や一でうむろ町にはじめてつま
をかたらひ三とせかよふと申せどもみづからさらには
ねたまづそれもこゝにたとへのさふらふいせ物語に
つたへたり男は大和のものならひ河内の國たかやす
といふところにはじめてつまをかたらひこれも三と
せかよへどもあとにのこれるふるき妻のねたむ事こ
そなかりけれ男布面思ふやうわれならでよのこゝろ
があればこそ我をばねたまざるらんと却而女をねた
むある夕ぐれにわれは河内へゆき候いとま申てさら
ばとてたちをつとりわきばさみ河内へはゆかずして
南おもての花ぞのに夜すがらかくれてさいぢよの
ていを相みるにあらむざんやこの女是をば夢にも玄
らすしてちぶつだうに參り佛前にむかひかうをもり

花をつみ夜すがらことをひきならしうらみなひてぞ
ゐたりける夜半計に此女ゑろきひさげに水をいれむ
ねのあひだにをきければかならずゆにぞなりにける
すべてはみづをいれ夜すがらむをひやしけるこれは
三とせが其間ねたしとおもふ心ざしいろにはいださ
ざりけるがほむらとなりてにへにけりすでに曉のか
ねきくころにも成しかばくるしげなるいきをつき是
より河内のたかやすへはたつたごえと申て悪所の有
ときくものをいつの日の何時かこの山にて我つまの
死せんず事のかなしやとおもひつらねて此女一しゆ
の歌をぞゑいじける

風ふけばおきつゑらなみたつ田やま

夜半にやきみかひとりゆくらん

とかやうにゑいじたりければ男このよし聞よりもけ
んしむ二君につかへす貞女りやうふにまみえすとい
まこそ思ひゑられたれ
すがたかゝりのまさる女はありとてもこゝろのまさ

るねうばうのありつべしともおぼえずとて河内がよ
ひをおもひきりふるき妻にぞちぎりけるそれを誰ぞ
とたゞぬるにざいご中將なりとかやかやうの事を思
ひよそへみづから更にねたまぬをあたりのともたち
が我をとぶらひいふやうはおかたはいまだゑろしめ
されぬや一でうの上らうをこの家のうちへいれまい
らせ御身をば大和のうだへをくり申さんとのたくみ
のさふらふおかたとそはん事共もいまいくほどか有
べきあらなごりおしやといふまゝにたもとにすがり
なくほどにねたまじものとはおもへども其ときみづ
からはらがたちうらめしやてんにすまばひよくのと
り地にあらばれんりのえだ神ならばむすぶの神佛な
らばあひせんわう五道りんゑのあなたなるしやか大
悲のゆんでにさふらふねほんのきしひかはる共われ
らがいもせはかはらじとふかくたのみをかけつるに
男のこゝろと河の瀬は一夜にかはるとつたへしもい
まこそおもひゑられたれとへみづからにこそ縁つ

きはてゝをくるとも三人のわかをさきにたてゝ出る
ならば子ともにめがくれよびかへさぬ事はよもあら
じとそれをたのみにかけそら出にいでゝさふらへば
なさけもおらぬ子ども親にてよび返す事こそなか
りけれ玄かもそれはあらたま月一度出たる男のとこ
ろへ二たび歸らんはづかしさめんぼくなくはさふら
へども又おやをたのみ大和のうだへくだりさふらふ
が此のきみちにふみまよひ有じのなさけにほだされ
このほど是にありつるぞやわごせたちも若ければせ
う／＼ねつたき事有とも男のもとをそつつにいでゝ
こうくわいすなどの給ひてあまりの事のかなしさに
玄のび／＼のなみだ也おほぢやむばが承てたり今こ
そ上らうの御にく衛をくはしく承て候へさてしも五
人のねうばうたち御しゆをばよくもちてまいりたれ
どもさかながなくてはきよくもなし歌をもうたひ舞
をもまふて上らうさまをなぐさめてたべ五人のねう
ばう承てみやこの人こそこゝろが月や花に似てうた

をもうたひまひをも舞給へわらはどもの申はねにふ
しとらにをききんうひがしにかゝれば常夜のねぶ
りはやさめやもめがらすのうかれ聲かうぞとなひて
つけわたるとりもろともにねやをいであさゆふのせ
いろをいとなみ御主の御意にちがはじとそれをのみ
こそたしなみさふらへうたをもまひをもおらぬなり
さりながらわらはどもの得たる事のさふらふ五月に
なれば田へおりてたうとおここにほやはれてめん
めんにさなえをつとつて一拍子にさしかゝり田うた
といふ事をすこしづゝ覚えてさふらふがそれをなり
とも歌をふするかなふおほぢ聞てあふさる事ありう
しをばたうりんの野にはなし馬をくわざんのやうに
返すかもさむうして水に入にはとりさむうして木に
のぼるしよほうじつさうときくときはみねのあらし
も法のこゑそれをなり共ひとづづゝ申せくとおほ
せけりさてしも五人のねうばうどもひとつくにのも
のにておなじ田歌を一拍子にうたふべきかとおもひ

てあればさはなくして五人が五國のものなり一人は出雲一人ははりま一人は丹後一人はいづみいま一人はとをたうみのくにの者なりおほぢ子のおほせにて候にをぬしうたへいやそなたからうたひはじめてこそなたにもうたふべけれそれうたへたれうたへとばつたひしとあらそふそのなかにとつても出雲の國のねうばうとしずこしおとなしく見えけるがいやもんだうはむやくみづからうたひ初てそのつぎつぎをうたはせむといふよりはやくづんどうち時ならぬ田うたをはつたと上てうたふたり田うへよや田うへよさうとめ五月ののふをはやむるはかんのふの鳥ほとゝぎす山がらこがら四十がらこのとりだにもさわたれば五月ののふはさかんなりゑどろもどろにうたひなし舞を一手まひおさめ一せいをこそあげにけれめでたやありがたや天照大神くまの、ごんげんかしまかんとりすはあつ田すみよしかもの下上祇園しやうちやにむめのみや八まん大ぼさつ惚じてかみ

の御數は九萬八千七しやとぞ聞えけるたかまがはらに神ぞまします神の父神の母いざなぎいざなみのみこと也わらはが古郷出雲の國にたち給ふそさのをのみことさればかみの御ためにそうまんどころこのたびあゆみをはこぶともがらたれかりしやうをうけざらん此りしやうをうけとつてたゞ今の御座敷の上らうにまいらせんあらめでたやとうたふたりそのつぎをみてあればはりまなるたかさごやくおのへの松は高からでゑたにすむは何やらん富とさいはいさつと請取て只いまの上らうに是をそへてまいらせんあらめでたやと申てさかづきををつとつてやがて御しやすくに參りけりそのつぎをみてあれば丹後の國のねうばうかうこそうたふたれたんごの國にはひさしき人をたづぬるにうら嶋の明神七百歳をたもち給ふをつかうなれあひあまのはしだてくせのとのもんじゆのちゑとさいかくをさつとうけとつてたゞいまの上らうのわか君さまにまいらせんあらめでたやとうた

ふたり其つぎをみてあればいづみの國のねうばう年
を申せば十八さいにまかりなるかほにもみぢをちら
してうたひかねつゝ打うつぶひてゐたりけりうたふ
たる女どもこのよしをみるよりもわごせは人に歌を
うたはせてわれはなにしにうたふまじきと申ぞうた
へ／＼といふまゝにたもとをとつて引立るそれまで
もさふらはずうたはんといふまゝにゐたるところを
づんとたつてながえのちやうしをきつとかざひてひ
しやくとつてうちかたげざしきを二三度まはり候て
はつたとあげてうたふためでたやなわらはが古郷い
づみの國のものなれば其名によそへていづみがわひ
てさふらふぞのこりの女ども拍子を打そろへやごせ
わごせそこつなる事な申そいづくのほどにわひたぞ
あふこゝのほどにわひてさうながえのてうしに銀の
ひさくにくむとも取共よしつきじかゝるめでたき
いづみをばたれにかまいらせん／＼あふそよまこと
わすれたりたゞ今の御座敷の上らうに參らせんあら

めでたやとうたふたり其次をみてあればとをたうみ
の國なるはまのはしのつめのもの名所の者なれば
いかにおもしろくうたはんずらんどこゝろをすまし
目をすますところに此女がまひをば舞すして志もお
ちさしてはしりいるうたふたる女どもこのよしをみ
るよりもわごせはうたをうたはずしいづくをさして
にぐるぞ出よ／＼とせめければさはなくしてこのを
んなきるものゝつまをたか／＼とさしさはさみたもと
よりもたすきとりいでさつとかけふりたるかさのと
ころぐ／＼やぶれたをきつと引そばめつゝといでゝき
よくにかゝつてうたふた遠江なる／＼はまなの橋の
下成はこひかふなかはへの子かいかになんぢらかり
りうめく共かりうめく共しや取てうちあげて只いま
の御座敷のさかなにまいらせんあうめでたやと申て
きよくにかゝつてくるひけりざしきうちの人々一度
にどつとこゑをあげおどるばかりにまひおさめ座敷
にどうとなをりけりわかぎみの御くわほうすゑはん

ふしみときは

じやうと聞えけり

ときは問答

去程にときは御前はほどなくきよもりになびき給ひけり老木の花のながらへてはるにあへるがごとし子共のみるめもはづかしやつまのかたきになびくこそたぐひすくなき次第なれこゝろつよくてさてはてばわが身の事は扱をきぬ母や子どものゆくすゑまでよもすなほにはあらじものをと思ひのほかにぞなびかれけるさてこそきよもり引かへてあさからずちぎり

給ひけり

三人の若たちにもあまたのめのとをそへさせ給ふ母のにこうもいたはりていつきかしづき給ひけりときは心に思召今こそかやうに有ともかはるならひのあるならば又うきめにもあひぬべしすゑ迄子細のなからんは出家のすがたに亥かじといまわかどのはだいごの寺をとわかどのをばおんじやうじへこそのぼ

されけれうしわかどのはおさなくていまだめのとにいだかれてあかしくらすとせしほどに七歳にならせ給ひけりときはこゝろに思召あのうしわかと申は兄弟が中のくせものなりたいしよへのぼせをくならば人のくちもおそろしく都はとりにひきこもれるてらをたづねてのぼすべしいづくにか有らんと仰いだされたりければ有人申けるやうは鞍馬寺と申はゆげの女院のみはかたう本尊は大悲たもんてんふくちゑとともにまんぞくせり牛若殿の御ためにはよかりなんとぞ申ける

ときは聞召れて其儀にて有ならばみづからよそがら一けんしさも有なんと思ひなばうしわかをくらまへのぼせばやと思召かりそめぶりの御まふでなればあじろのこしの志たすだれさあらぬていにかけさせ御ともの人々にも女房たち一二人はしたの女二三人りきしやばかりを御ともにてかはらをのぼりにまいらるゝかものみやしろふしおがみ七まがり八ちやう

ざかくらまにつき給ひけり地しゆごんげんふしおが
みらいだうにまいらせ給ひてかうしのうちへ御いり
有らいばんにむかひ禮しつゝ高座にむすとあがりて
かうろとりあげけいならし玄ばらくねんじゆ玄たま
へりかゝつしところに鞍馬寺の別當とうくわうのあ
じやり日中のつとめのそのためにらいだうに参りか
うしのうちを見給へばゆふなる女着座してはやねん
じゆなかばと見えにけり

とう光御覽じてやはか女のみとしてたい法座へはあ
がるべきたさんちごの偽て寺をわらはんそのため
にぶらいちやくざのねんじゆかやさありとても一た
んとがめばやと思召いかれる面をふりあげてやあい
多太子と申せしが十九にて出家をとげだんとくせん
にとちこもりあらら仙人を玄とたのみなつみ水くみ
つま木取六年きうじ玄たまひ玄んくをとげさせ給ひ
て廿五にて僧に成ぐどんと申奉る又六年はちやう座
にてまどろむ隙もましまさず十二年を經給ひてばだ
いじゆの本にて佛とならせ給ひて御名をば釋迦と申
なり三十の御年よりけごんきやうをとき給ふ三七日
の間なりしちしよはちゑに是をとくあごんきやうと
のかうしへのぞむ事はなきものをそのうへふじやう
申は十二年のあひだ也はらないこくろくやおんにて

げだいなき男子の身だにものぞまぬにかゝるいはれ
を玄りながらてらをあなづりのぼれるか又もとより
ぐちのをんなにてまよへるまゝにのぼれるかせひに
付てひがことぞもつたいなし女房よはや出よとぞい
かられけるときは聞召れてこなたの事をおほせさふ
らふか本よりぐちの女にて玄らで参りてさふらふぞ
をしてたべとて仰ける東光聞召げに知すはをしゆ
べしそれ釋迦佛と申はじやうばんわうの御子なり七

多太子と申せしが十九にて出家をとげだんとくせん
にとちこもりあらら仙人を玄とたのみなつみ水くみ
つま木取六年きうじ玄たまひ玄んくをとげさせ給ひ
て廿五にて僧に成ぐどんと申奉る又六年はちやう座
にてまどろむ隙もましまさず十二年を經給ひてばだ
いじゆの本にて佛とならせ給ひて御名をば釋迦と申
なり三十の御年よりけごんきやうをとき給ふ三七日
の間なりしちしよはちゑに是をとくあごんきやうと
のかうしへのぞむ事はなきものをそのうへふじやう
申は十二年のあひだ也はらないこくろくやおんにて

この法をとき給ふぞういちあごんちやうあごんざう
あごんちうあごん此四あごむのなかにも女を殊にい
ましめりはんにやきやうと申は三十年にとき給ふあ
たらしきほんには一萬六百卷二百六十餘品なりかみ
のかすを申に一萬八百三十八文字の數は六十おく四
十萬字に及るさる、此ほんにやきやうのなかにも女
高座へあがれといふようもん更になきぞとよもつた
いなし女房よはや出よとぞいかられけるときは聞召
れてげにくいはれのきふらひけるぞやもし此きや
うのなかに女をほめたるきやうもんのあらばこの高
座をば出まし御ひじりませさせ給ひなば法師のうへ
のふかくたるべしわらはまけてさふらはゞをんなの
ふかくたるべしすいぶん此女も一言つかひ申べしま
づそまかどうじ經にとくしよさいすべし男子をうみ
てたねをつぐなんし此ほうぎやうせばまさにげだつ
を得べしもしせんこうとあつくわのほうのことば
をろんせばうちむちしゆたばらもんびしやしゆたと

うに至る迄しやべつも更に有まじ經のせつとのたま
はレ一切經の惣一法花經をもつてほんとせり彼法花
經と申はだいごみのきやう也まき數は八卷文字の數
を申に六萬九千三百八十餘字につもれり彼だいがう
に妙法れんげきやうととく其第一の筆はじめにめう
といへるもじを書へんには女作りにはおさなしと書
てこそめうとはこれをよまれたれめうと書ける文字
のよみかず多とは申せ共先たへなりとよまれたり六
萬九千三百八十餘字のもんくは別の事をばほめず
してめうをほめんが爲也妙と書ける心は言にものべ
がたし筆にもいかでつくすべきごんごだうだんなる
間しんきやうしよめつなりとかや爰をもつて安する
にまんぼうのいたいきは女をもつて極たりかの法花
經と申は釋迦佛の御年七十三と申二月上の八日によ
きはじめ給ひて八ヶ年の間せりやうせんへの十ぼん
はじよほんはうべんほんひゆほんしんげほんやくさ
うゆほんじゆき品けじやうゆほん五百弟子品志んぎ

原ノ誤

品ほつしほんこくうへの十一品はほうたう品だい
ば品くわんぢ品あんらくぎやう品ゆしゆつ品じゆり
やう品ふんべつくどく品すいきくどくほんほつしく
どくほんじやうふぎやうばさつぼんしんりきぼん是
也又りやうせんへ歸て七品とかせ給ひけりぞくるい
ぼんやくわうぼんめうおんぼんふもんぼんだらに品
こんわうぼんふげんほんこれなり惣じて二十八品な
りそのほかのせうぎやう五千餘卷のなかにも女高座
へあがるなといましめ給ふもんもなしおぼつかなし
べつたうの扱こゝろのうちこそおかしけれとうくわ
うおほきにもきもをつぶさせたまひて此もんだうに
まけなばかつうは寺の名おりたるべしかなはぬ迄も
今一言つかはばやと思召面白ねうばうあるきやうの
なかにせうさんせんかい男子しよばんなうかつしゆ
ゆい一人女人しごつしやうととかれたりこのもんの
こゝろは三千界のあらゆるなんしのもろ／＼のぼん
なうをあはせあつめもつて女人一人のごつしやうと

すされば地獄は外になしをんなにかざるところ也女
人人生れなば地獄のつかひ來るとて三世の諸佛は
玄たをまきおちさせ給ふとこそきけとをくかんかを
尋ぬるに天台山の高山へ女の参る事はなしわうざ
んまれいさんしやうりやうせんに至迄女をゆるし給
はずまちかきあきつしまにもゑんりやくじ高野山初
瀬をかでらやたへま寺たうのみねに至る迄ないぢん
のかうしへのぞむ事のあらざればはるかにおがみ奉
るかいぎやうの程のつたなさよ女と生れる事もひ
はうしやうほうなる間ぐちのやみふかふして玄つと
のおもひあさからすじやねんをつくる事もなし御堂
のけがれ候ぞとうして御出ましませ猶も御出なきな
らばげそうともに申付をひいだすべしとぞいかられ
けるときは聞召おほきにはらを立給ひいかにやとう
くわうものを玄らずば無言あれたつとき人のけしか
らず女をそしり給ふ事にくむにはあらずかならずり
んゑのごうをはなれんがため也まよひの前になんに

よ有さとりのまへになんによなし善惡二つなきゆへ
にじやしやうも更にへだてなしこれはふかきこゝろ
にて申ともゑろしめさるまじ先みゝちかに申べし佛
も母がましませばこそまやのためにはじめてほうお
んぎやうをとき給ひたうりてんにあがりひちげがあ
ひだ法をときはゝのためにほうせらる佛も昔はぼん
ぶにて太子をおはせし其ときは三人のきさきおはし
ます一をばやしゆだらによ二のきさきをばいぎとて
さうなく人にみせられず第三にくたみとてことによ
うがんびれいなりその三人の御なかに御子あまたお
はします嫡子をばらざら太子つぎにせんぢやうびく
なりきやしゆだらによと申は釋迦佛のいんにしゆと
うばさつとおはせし時くいによといへる女に五もと
のれんげをうえてのちねんとうぶつとくやうせしそ
のやくそくのつきすしていまやしゆだらによと生れ
て太子にちぎりこめ給ふ大唐のいわうざもしやうり
やうせんにいたるまでをんなをそしり給ふ共りやう

かいの法をばやはかはそしり給ふべきたいごんりや
うぶかけて後ちやうゑの二法たちがたしさの玉ふ東
光も母のはらにやどつてくちゑもまんをぐそくせり
さいせかうらいしやうないしはらしやに至る迄父母
ともにあたへし女をそしるほうしはゝのおんをそ
むけり父はのん知ざるをば只ちくるいにたとへた
りかみをそり衣をすみにそめたれ共ぐぢなるものを
ぞくと云うへのかたちはかはらねどこゝろにほつし
ん有人を法師とこれを名付たりとうくわうのごとく
にきやうのもんをゑるべにてこゝろにほつしんなき
人をけうしやとこれを名付て木にかゝるふぢのそら
へあがるがごとくにてをのがちからで更になしぐち
まうねんをさきとしていたづら事をほんとする人の
こゝろのはかなさよさもあれ此寺はいづれのみかど
の御時にいかなる人の御願にてたてられけるととひ
給ふとうくわうきこしめし我寺と申はくわうとくて
んわうの御代の時勸進のひじりはもとはならほつし

くわんちやうばうと申せしが南部をいでゝ天台山北
谷にすみ給ふせうそうづと申てうげんちとくのひじ
り也彼僧都のすゝめによつてめうらくだいしの御建
立ゆげのねうゐんのみはかたう本尊は大悲たもんて
んふくちゑともにまんぞくせりときは聞召よの事を
はさてをきぬこのもんだうにはかちぬるぞそれをい
かにと申に女をいれぬてらならば女院のみはかをば
などこれには立をかれけん其うへだいひたもんてん
女をそしり給はずしんの御弟子御いもときちぢやう
てん女御前とてひだりのわきに立給ふげにと女をえ
らみていださるべきにさだまらば女ゐんのみはかと
きちぢやうてんによもろともに御寺をいだしおはし
ませみづからも御供してべちに寺を結てあんじせん
はいかにやべつたうとこそおほせけり

もんがく

爰に源氏の御代にいでさせ給ひたる由來をくはしく
たづぬるにもとはつのくにわたなべげんじの大將に
えんどうむしやとうふさがその子に遠藤たきぐちも
りとうと申せしが出家してのかいみやうをもんがく
とこそ申けれそのころあらざる大行をくはだてゑん
ごんけうに心をかけごくねつに笠をもきすげんとう
のさむき夜にふすまのかずをもかさねず大みねかつ
らぎを七度とぞり熊野のなちのたきに三七日うたれ
正身の大聖明王にあひ奉りしかばすでにごんじやと
こそ申けれ其後みやこへのぼりあたご山のふもと高
尾のゑんごじと申古寺に御座有しがかゝるさうゑい
ぶつかくを建立すべき事こそ本望なれまづしゆろこ
んりうあるべしとて洛中らくぐわいをくわんじんし
てまはられしが東山ゐんの御所ほうぢうじどのへま

いり是はたかおのゑんごじのかねつきだうの勧じん
に參りて候御はうがあれともんがくはくわんじんち
やうをたからかにこそよみ上けれころは卯月上旬の
事なるにをそざくらちる木のゑたはさむからでそら
にゑられぬうの花の雪は御庭にちりゑきてやまほと
とぎす村雨にぬれてさわたる折ふしに雲上のくわん
げんかうは半也上らうたちは御覽じてそう／＼なり
あの法師後日にまいれ御ほうが有べしとの御誕也も
んがく聞召れ何雲上のくわんげんかうとや笙笛きん
くごびはねうとうのあそびは一たんのゑいぐわかね
つきだうの勧進は末世のためにあらずやくわんげん
かうをとゝめ御ほうがあれともんがくは又くわんじ
御らんじてそ／＼なりあのほつしををひ出せとの
御誕也承ると申て青侍七八人はらりとたつてもんが
くを引立後日にまいれ御ほうがあるべしとのせんじ
にて候にかさねて参る事こそきつくわいなれいそぎ

いでよといふまゝにそくびをついてをひいだすもん
がくこゝろにあたはぬ事なればいかにもおづかにあ
ゆみ出るいそぎ出よと云まゝに勧進ちやうをひんば
ふて二つ三にひつきかしこへがばとなげ捨又取て
引立て門の外へぞいだすもんがく御らんじて抑これ
は何事ぞいなならばいくたびも其由をこそいふべけ
れ黒衣のうへのちじよくをあたふるところはいこん
なりつら／＼物をあんずるにせんじゆの二十八ふし
ゆ薬師の十二神明とがうさんせぐだりやしや明王の
がうまのりけんを引さげてあくまを退治し給ふに何
ぞもんがくがたいしたる此けんはいつのれうぞと思
召うすすみぞめのころものそでをくる／＼とくりあ
げてめてのわきよりもこほりのやう成劔をぬきをつ
ぶせ／＼さすほどに青侍を七八人時刻もうつさすさ
しころすしゆもんのぶしきあつまつてたか手にてに
いましめて庭上のこにはに引すへたり上らうたちは
御覽じてほつかうものゝもんがくとはあのほつしが

事かいそぎうんきをはねよと儀せられければすでに
死罪にをよびけり

され共はうわうよりのせんじにはたとへばあのしや
もんこそはかいの者といひながら種々のほうゑを身
にまとひたるものをつるぎのさきにはかくべきぞ七
でうおほぢにどくつをかまへおとしいれ百日を待べ
し百日すぎばほりおこし跡をはとふて得させよとの
せんじなれば宮人等すきくわをもつていで七條西の
洞院に二丈五尺につちあなをほつてもんがくをおと
し入うへにもつちをはねおほひ百日日數をおくりし
はげにあはれるなる次第なりかくて十日計うちすぎて
もんがくのろうのあたりに聲有てこの内のひじりひ
じりとありしかば文學きこし召れてかやうにどくつ
にこもりて後とひくる者もなきものを一向にわれを
うしなはんとのせんじにてありけるなぢよくあく世
中なるあひだそれとてもちからなしとこそ仰けれさ
はなくしてちうだう薬師いわうせんせいよりの御誕

にはたとへばあのしやもんこそはかいのものといひながらあらざる大行をくはだていまだ其願成就せず今度のいのちをたすけをき諸願せさせんとの御ぢやうにて十二神の中よりもこんびら大しやう御つかひに參りて候どくつのくらきやみならばるりのつばを得さするぞつぼのひかりでてらしてゆけ食事の望の有ならばとてもくすりを得さするうへ藥をぶくして命をつけそれ給はれやもんがくとてげにあてやかな御手にてるりのつぼをぞくだされけりげにとくらきやみをばつぼの光りでてらしけりしよくじの望のあるときはくすりをふくしていのちをつぐ何に其身のおとろふべきやせず黒ましまんがくは日數ををく

りたまひけり又十日ばかり打すぎちうだうやくしいわうせんせいよりの御誕には左様にどくつにこもらんよりも我前にきたり御經をよみだらにをみて百日をまつべしとの御誕也文學承てかやうにどくつに籠て何としてかは出べきぞ其時こんびらはらをたてさ

やうの心中にてこそかゝる無明のくを受れ神通自在たるべくばなどかたやすく出ざるべきもんがくげにもとおぼしめし居たる所を立とおもへばその身はけしことくにていでられるぞしゆせうなるさてこんびらとうちつれてちうだう藥師に參りつゝきやうをよみだらにをみて給ひてあかしくらすとせしほどにはや百日になりにけり

まんじける夜半にかたじけなくも御本尊はみちやうのうちよりもあらたに御こゑをいださせ給ひいかにもんがく日數もけふは百日とおぼふるなり人のこゝろをやぶるはぼさつのぎやうにあらずやいそぎどくつにかへりほうわうよりの御尋にあふべしとの御誕也承ると申て急ぎどくつにかへらるゝさるあひだはうわうよりの御誕には有し時のひじりは日かずもけふは百日とおぼえたりいそぎどくつをあけあとをばとふて得させよとのせんじなればくわんにんらすきくわをもつていてどくつをあけてみてあればやせも

せずくろみもせすいとや氣色はあてやかににつこと
笑て出給ふ官人きもをつぶしつゝ東西へはつとにげ
ちつたり文學御らんじてなふなにてどうてんし給
ふぞこれは有しどきのひじりにてはなきかともんが
くにちからをつけられてやうくこゝろをとりなを
しもんがくをしゆごし奉りほうちうじとのへぞ參り
ける

山のれいに一ゐんを建立し二世あんらくの大裡を
假借
ごんぎやうせしめんとこう勸進の狀それひそかにお
もむ見れば玄んによくわうだい也しそうぶつのけみ
やうを立といへどほつしやうすいまうのくもあつく
おほつて十二いんゑんのみねにたな引しより以來本
おほんでんの月の光りかすかにしていまだ三徳四萬
のたいきよにあらはれずかなしきかな佛日はやくぼ
して生死者てんのちまたみやうくたり只いろにふ
おぢさせ給ふほうわうえいらんましくてしゆせう
なりもんがくさるたとへあり愚者のつくる善はせん
ともにつみちしやのつくるつみは罪ともにせんとは
今こそ思ひ忘られて候へさらば有し時の勸進ちやう
をよみ候へちやうもむあるべしとの御諱也もんがく
聞召れてくわんじむちやうがあらばこそ時刻うつし
てかなはじと持たるあふざををしひろげくわんじん
ちやうをたからかにこそよみ上けれしやみもんがく
敬白ことには貴賤だうぞくの助成をかうぶりて高尾

利ノ
毒
滿

ゑんらごくそつのせめをまぬがれむや爰に文學たま
たまぞくちんを打拂て法衣をかざるといへど惡行猶
こゝろにたくましくして日夜に罪をつくりせんべう
又みゝにさかつて朝暮にすたるいたましきかな二度
三づのくわきやうに歸てながく四生のくりんをめぐ
らさん事を此ゆへに無二のけんしやう千萬ちくく
に佛種のいんをあかしすいえん至城のほう一つとし
誠ノ借字
ぢくチ脱スルカ

てばかりのひがんにいたらすと云事なしかるがゆへ
にもんがく無常のくわんもんになんだをながし上下
の玄んぞくをすゝめ上ほんれんだいのえんをむすび
とうめうかくわうのれいぢやうをたてむとなりそれ
たかお山うづ高してじゆふせんのこすゑをへうし谷
亥づかにしてしやうさんとうのこけを亥けりがんせ
んむせんぬのを引れいゑんさけんでえだにあそぶ
ゑんりん遠してけうちんなし亥せきことんなふして
亥じむのみありちけいすぐれたり尤ぶつてんをあが
むべしほうがすこしきなりたれの助成せざらんやは
のかに聞しゆしやゐぶつたうくどくたちまちぶつし
んをかんすいはんやいつし半せんのほうざいにをひ
てをやねがはくは建立成就してきんけつほうりき御
ぐわんゑんまんなんしとひりんみんゑんきんしんそ
ぎやうしゆんぶゐのくわをとたひしんによさいくわ
いのゑみをひらかんことには又しやうりやうゆうぎ
前後大小すみやかに一佛ゑんもんのうてなに至るか

ならずさんしん萬とくの月をもてあそばんよつて勸
進しゆぎやうのをもむきけだしもつてかくのごとし
治承三年三月日もんがくばうとぞよみあげけるほう
わうえいらんまし／＼てしゆせうなりとよもんがく
扱はごんじやにてまし／＼けるやけふよりしてもん
がく上人にふせをき申いそき我山へあがり給へ御奉
加有べしとのせんじはめんばくとこそ聞えけれ亥か
りとは申せどもしよきやうのこらず一とうにそうも
ん申されけるやうはたとへばあのしやもむをすなを
にをかせ給ふならばらうせき國にあまるべし死罪を
ばやめられてるざいさせられ候へとそもそも申され
たりければ右大將むねもりのきやうは此よしを承り
もしさま有て候はゞなにがし申給て伊豆のおほしま
の觀音堂へながしうしなふべしと申されたりければ
ほうわうえいらんまし／＼てそのころ平家の事をせ
ひをむだに亥たまはずそれはともかくもむねもりが
まゝたるべしとのせんじ也むねもり文學を給はりか

までほんだうはむやく也熊野のなだをわたし船路
たるべしとの御説にてふくるのしやうしもつかさ次
郎太夫ありはると申さぶらひに仰付上下三十六人に
てもんがくしゆこし奉りほうちうじどのをぞいでに
けるあらいたはしやもんがく都のうちを出し事いま
ばかりとやおぼしけん七でうおほちにたち出て東を
はるかにながむれば音羽の山の松かせはをのれとき
んや志らぶらんふもとにおつるたきつばはなになが
れたる清水寺本尊はせんじゆせんげんにやくがせい
ぐわんの御ちかひもだしたまはずば今一度みやこへ
かへし給へときせいしてにしをはるかにながむれば
丹波におひの山みねのうたにのたうさがほうりん
じうづまさのやくしになをもなごりありきたには鞍
馬關山鬼門にあたりてひえいざん中だう薬師の十二
神さて我やまの十二神こんびら大將七千のやしや北
野をはいしたてまつりもんがくが此たびのおんるの
ざいをなだめつゝ今一度都へ返し給へときせいして

南をはるかにながむれば八幡山にたつきりの石清水
にやかゝるらんかいとくげだつぐせりきこんがう
八まんねがはくはげんじをまほりたび給へときせい
を申させ給ひつゝ志つか作り道鳥羽院の御さんさう
よそながらふしおがみ刑部左衛門なにがしがそのき
うせきをみるからにいとい涙もせきあへず念佛申經
をよみそのゆふれいをとぶらひてよどん津につきけ
ればはやかはふねにうつされて水にまかせてながれ
ゆく弓手をはるかにながむればことのね志らぶるき
んやの里彼ざいご中將のましろのたかをてにすへし
かたのゝはらのかりごろもいまきてみるぞよしなき
めては山崎關戸のゐんたれかたてけんたから寺ひな
をそだへるとりかひのかぶりの里は是かとよゑのぐ
はげたる古佛はや渡邊につきしかば海上はるかにか
ちを取をひてのかせにほをあげてなみぢはるかにふ
かれゆく心ざしこそあはれなれ

文學仰けるやうはあつぱれ源氏のよなりせばか程の

ざいによつてよも遠島まではながされじをこれも平
家のやつばらがてうくわするによつて也是より伊豆
の大島へなん十日にもゆかばゆけげんじをまぼるゑ
しには食事をといめぶくすまじとの給ひて船底に
いらせ給ひまくら取てひきよせうちふし給ひてその
のちはをきさせ給ふ事もなく又ねいり給ふ事もなし
ふしながらおほせけるは扱こゝはいづくととをるぞ
天王寺のおきと申もんがく聞召れど異國にてはなん
がく大師我朝にては聖徳太子衆生さいどのぢひふか
しさりとも佛法方のもんがくをばよもすてはて給は
じなさてこゝはいづくととをるぞすみよしさかひう
ちのみなとわが吹あげやたまつしまぬのびきのまつ
きみゐでら藤しろたうげゆらのみなときりへの王子
ちりのはまみなへたなべのおきすぎてなちのおきと
ぞ申けるもんがく聞召れて我此御山にまいり三七日
瀧にうたれしやうじんの大聖明王にあひ奉りし其と
きははやごんじやとこそいはれしなになにとをこなひ

なしたる文學がぎやうぞや爰はいづくぞはまの宮さ
のゝ松原太夫の松新宮のみなといたの里いせの國亥
まの國尾張參河のおき過ててんりうのなだにつき給
ふ彼などと申は東國一の惡所也ふじのたかねに黒
雲が二なみ三なみさつとかゝると見えしかばあはけ
しきのかはるはなは手をとひてほこもをおろしほば
しらを立なをせといへる時刻もなかりけりいせの國
くつかあらしといふ風がま十文字に吹たりけりくま
野成新宮おろしはうしろにふく一方ならず四五方よ
りもみあはせたる風なれば枯木はえだをおろしてふ
くもくえうをあらひくさの根をかへしてあぐるなみ
はひとへにけぶりのたつがごとくなり四方のかせが
一度にはつともみあはせてふくときは今はこのふね
かなふべきやうあらずしてかたはらをたてゝくるり
くるりとめぐりけり船の中なるものどもが聲をそろ
へて一同に南無あみだぶつと申けれども船底成もん
がくはなに思ふたけしきもましまさずそらいびきし

てこそふされけれしゆごのぶし樋取どもこのよしを
みるよりもあらぶだうなあのひじりやたとへはびん
せんなどにて乗たるとか申共かゝる風波のなんな
らば御きやうよみだらにみて龍神なふじゆのきた
うなどもあるべきに此おきにて我々が死せんする
事どもはあのもんがくゆへとおぼゆるなりふなぞこ
よりひきいだし海へ入むといふもあり又有方のせん
ぎにはわたくしならぬもんがくなればいかゞはせん
と云もありかやうにいろ／＼さたしけるを聖はきこ
しめさるどもいよくきかぬていをしてそらいびき
してこそふされけれかゝりけるところにとも打なみ
があまつて文學のつぶりのうへをきつとうつてぞと
をりける其時もんがくはらを立ふしたるところをか
つぱとおきふねのへいたにつゝたちあがつて大音あ
げていかにこのおきを上人がとると志らぬかえさ
こそるにんといひながら龍王だにもあなづりて此な
みかせをたゝするは大龍めがわざか小龍めがわざか

雨風やめぬものならばりうぐうとはいふまじきぞも
んがくわけ入てためしをたつてくれうぞえ龍王めり
うわうめとぞいかられけるしゆごのぶし樋取ども此
由をきくよりもさればこそもんがくにははやものが
ついてくるはするぞりうわうめとざうごんせばいか
でなみかせやむべきぞ是につけてもわれくが死せ
んする事どもはうたがひあらじと申つゝいよ／＼念
佛しけれどもひじりはちつともどうてんせすりうわ
うめとぞいかられけるもんがくの御こゝろすゑたの
もしうぞ見えにける

かゝりけるところにびんつらさうにゆふたる龍女一
人なみのうへにうかむわれをばたれとか思召りうぐ
うのをとひめにこひさい女とはみづからなり聖人の
此なみのうへを通らせ給ふをおがみ申さん其爲につ
の國わたなべよりも是までつきそひ申せ共ふねのう
ちにぎよしん有てをきさせ給ふ事もなし角て大嶋の
御堂にあがらせ給ひては又いつのよにかはおがみ申

べきと思此なみ風をたゝせ申上人の御すがたを拜申
事の有がたさよ今は十六のつの落成佛とくだつうた
がひなしいざさらばこうはの風やめて參らせんとて
かきけすやうにうせければいま迄あれておそろしき
風ノ字脱スルカ
やみうみのおもてへい／＼としてをひての風がふき
ければしゆごのぶし棍取ども上人をらいしたてまつ

りろかひかぢをたてなをし風にまかせてふかすれば
都を立て文學伊豆の大島まで五十五日に着給ふ食事
をといめ給ひしはげんじをまぼるいはれなりかくて
もんがくは大志まの觀音だうにあがらせ給へばけい
ごの人々も御いとま申都へこそかへりけれ爰にもん
がくの御弟子にがくもんばうと申ておはせしが片時
もはなれ申さねども今度はるざいの事なればちから
をよばず一人みやこにとゞまつてなげく事はかぎり
もなしかくてもあられぬ事なれば御あとを志たひ申
くだらばやと思ひほんだうにさしかゝり夜を日につ
いでくだるほどに大島のくわんおんだうに參り上人

にあひたてまつりよろこぶ事はかぎりもなしかくて
師弟子の人々は觀音堂に御座有けれどもあたりの里
人まいりたつとみ申人もなし何としてかはちかづけ
むと思召さうきやうの法ををこなはせ給ふこうする
かた八十日過しかた八十日をこなはせ給ふ

ひるがこじまに御座ある兵衛のすけ頼朝はつたへ聞
召れてめのともりながをめして仰けるはまことや承
はれば大島のくわんおんだうへこそみやこよりうげ
んちとくの上人の御下向有てさうきやうの法ををこ
なはせ給ふがつゆほどもちがはぬよしをうけたまは
るいざやまいりて御うら一つとひ申さん尤志かるべ
しとて主従御船にめされおほしまのくわんおんだう
にあがらせ給ひうしろだうのえんのいたをとう／＼
とふみならし給ふ折節もんがく初夜のつとめのそ
ために高座にあがらせ給ひしが只今うしろだうのえ
んのいたのなつたるをとを聞召ひじりはふしんにお
もひ志かんを取て見給へばとをくは百日ちかくは五

十日の間に日本のあるじとなる人のあしをとゝ聞いた
事のふしげさよと師弟子御物語ありければ頼朝う
しろだうにきこしめしらめでたのうらかたや候是
にましたる事あらじいざもどらんと仰ければもりな
が承りかゝるうげんちとくの上人に御對面有てなを
なをすゑのめでたかるべき事共御たづねあれと申よ
りともげにもと思召つとめ一座の過るまでうしろだ
うにたちやすらはせ給ふかくてつとめもすぎければ
たゞいまのまれ人こなたへと仰けりよりも御座に
なをらせ給ふもんがく御覽じてあらふしげや御身は
誰人ぞわらは名はもんじゆ子げんぶくめされて其後
兵衛のすけ頼朝にてましますかよりともふしげにお
ぼしめしさん候とおほせけりもんがくおほせけるは
御身のちゝよしとものなれるはてが見たきかと仰け
ればよりともきこしめされて見たく候ともみたか
ならずともなか／＼申ばかりもなしいで／＼さらば
みせ申さんとそばなるをひをひきよせからげなはぶ

る／＼とひとつひて上だんよりもにしき七重につゝ
みたるされたるかうべを取りだし是こそ御身の父よ
しとものなれるはてよ見給へとて頼朝の御手にまい
らせらるゝよりとも御らんじて更に誠とおぼさねば
さあらぬていにもてなしそばなるつくゑにをき給ふ
文學御らんじてほどふりたる事なればさだめて御う
たがいあるべしその志るしを見せ申さんとてつくゑ
なるかうべにむかひ兵衛佐よりもこそ是迄來り給
へ義朝よしともと二三度よばせ給へばされたるかう
べのうちよりも御なみだそゝぎそれかあらぬかと御
聲かすかに聞えければ其時よりもつくゑなるかう
べをとりあげ御そでのうへにのせたか／＼とさしあ
げ只今いきたる人にものの給ふふせいにてさてもに
し坂本までは御供申せしがくらさはくらしゆきはふ
るさがり松のへんにてをひをくれ參らせ夜もほのぼ
のと明るまでりうげのやまにまよひしがよるはほう
しの大將大屋のちうきといふものあとより手忘れく

をつかけすでになんぎにをよびしをきた近江いぶきのふもと草野の庄司にたすけられかれがところにてとしををくり春にもならば御あとをゑたひ申さんとおもひしに尾張のおさだにうたれさせたまひ御くびのぼり獄門にかゝれるよしを承るせめてはかはらせ給ふ御すがたをなり共見まいらせむとおもひ草野のさとをたちいで、玄のびみやこへ上りけりいまづかはらといふところにて彌平兵衛にいけどられうき六はらへわたされて六でう河原にてすでに死罪にをよびしをいけのにこうにたすけられ此國へうつされて二十餘年の春秋ををくりむかへてすぎゆけ共少も父の御事をわすれ申事もなしあればもんじゆか兵衛のすけかと今一度仰候へとてきえいるやうになき給ふ文學もがくもんもさて御とものもりながもこそゑもをしますなきむたりもんがくこのよし御らんじてそれは五ぎやくざいのひとにてなみだをかけぬ事にて候それこなたへとおほせ有てにしき七重につゝみもと

のごとくにおさめ給ひもんがくがあらんほどは御こうやすくおぼしめせ平家をてうぶくすべしとてやがて十二ヶ條のまきものをかきこそ志るし給ひけれそもそも十二ヶでうと申は第一に天地のきたう第二にこくわうのきたう第三にふものきたう第四に源氏のきたう第五にはげんじをまほるしゆしやうのきたうかくのごとくの五ヶでうは五體五きやう五せつのいはひをかたどるところなり今のこる七ヶでうは平家をうしなひほろぼすべきてうふくの玄ちふしぎをあらはす七つの數なりけりこれは御身のはるぐときたりたまへるこのたびの御引出物とて參らせらるよりともなゝめにおぼしめし三度いたゞきまほりにかけ萬事はたのみたてまつるいとま申てさらばとて又御座ふねにめされてなごやの御所にぞかへられけこれやこのげんじのはんじやうのはじめと聞えけり其後もんがくはしらきのこしをつくらせみなみのえんにかきすへこくうにむかつておほせけるはもん

がくこそたゞいま上洛つかまつれこしかきやあると
おほせければをつとこたへて程もなくりきしや二人
きたり御こしをかきこくうへあがると見えしかばせ
つながあひだにわうじやうのぎをんばやしにつき給
ふひるは人めをはかりよにいればもんがく四條の
まちへたちいでゝかずのぐぶつをかひあつめ祇園ば
やしの其うちに三ぢうにだんをつき七ぢうにたなを
ゆひ百八十本のへいぐしきりたてかずの人形を作
て平家のむねとのうんかくの名字名乗を書かるして
うぶくの法ををこなはるゝ三七日にまんずるとき上
だん中だん下だんの百八十本のへいぐしが一度には
つとみだれあひ平家のむねとの雲客の御くびきれて
みやうわうのりけんに立と見えしかば一法は成就し
たりとてだんをやぶつていで給ふかくてじゆゑいの
あきのころ平家みやこをおとされつるにいくさにか
たずしてほろびはてさせ給ひしはもんがくのいきど
をりこはきゆへとぞ聞えける

いふき

義朝に三男わらは名はもんしゆ子げんぶくおたまひて其なを兵衛佐頼朝いまだにやくにておはせしがたいけんもんの夜いくさにかけまけさせたまひ東國としておち給ふ西坂本までは父の御ともめされしがくらさはくらしゆきはふるさがり松のあたりより追をくれさせ給ひよもほのぐとあくるまでふぶきにふかれみちもなき雪の山にぞまよはれける御年は十二歳いつしかみやこにおはせしときはこしくるままれにもむまにめすをだによにもふしげにおぼせしにかちはだしなるゆきの道これがはじめの事なればさこそ物うくおぼすべきうぶきぬと申よろひをば小原のことにあげをきひげきりの御はかせをつえにつゐてぞおちられけりされどもゆみ矢のめいしやうとてかゝるふぶきのものうきにひげきりばかりすてもせ

でいのちとともにたれたりすでにそのよも明ければ今はをひてぞかゝるらんゆく衛もおらぬざうひやうのそとにてかゝり中々にげんじの名をくださんよりもきよきじがいをせんとてゆきの上に玄ばかりしき御はだのまほりより法花經一卷とりだしこゝろ玄づかにあそばしてをひ手かゝらばおんじやうにきよきがいと思召玄ばらくいきをつき給ふかゝりけるところにみのかさきたるたび人の二人つれて京のかたへとをりしを頼朝御覽じて此者共を頼みいづくへもひとまづ落ばやなんとおぼしめしなふいかにたび人と御言葉をかけ給ふ何事にやと申て御そばちかくまいりければよりとも此よし御覽じて我は人めをつゝむもの玄かるべくは御はうしにたすけてたべと有しかば庄司此よし承りこれはまぢかき此近江伊ふきのすそにすまるせしくさの、庄司とは我事なり予にて候藤丸郎きみの御供つかまつりまかりいで、候ひしがたいけいもんの夜軍にみかたかけまけ給ひて

ゆきがた志らすとうけたまはれば其ゆく衛をもきか
んため片田のへんに有つるがみやこへのぼり候ぞや
かゝるさしあひなかりせばやすきほどの事なれ共人
をたすけまいらせて我子は何と成べきとすげなくそ
ことをとをりじり頼朝このよし御覽じてさてはうんめ
いつきぬるや志ばしとゞまりねがはくは志がいをな
りともかくしてゆけばらをきるとのたまひてをしは
だぬがせ給へばしやうじこゝろよはくして御かたな
にすがりつきとしのほどを見申せばまだうらわかき
みどり子のまつもひさしきすゑまでもげにたのもし
きとしのほど御子もいきてあるならばこのきみにい
か程年まさむ此きみぢがいましまさばちゝ母つたへ
聞召さこそしやうじをうとましくきちくのやうにお
ぼすべきこのきみを一まづおとさばやと思ひてみの
にをしまき奉り十文字にゆひからげとものおとこに
かきおほせうへにふるみの打かけてみやこへはのぼ
らずかた田をさしてくだりしはなさけ一とぞ聞えけ

るいくほどなくてあとよりもよるは法師の大將に大
屋のちうきをさきとして五十餘人たてをつきあやし
しやたび人よとまれ／＼とをつかくる庄司にもちを
さきにたてわが身はあとにふみとゞまつて是はたし
よよりきたず御領内の百姓小原のさとにすまるす
る次郎太夫と申ものくわんさんのくわしのためにと
ころをもたせて坂本へ参るものにて候なり落人は此
さきへ其かずあまたおとをりあるとうしてをはせ給
へやと雪ふみのけてやりすごすかくてよしともはか
た田より御船にめされむかひの地へと聞えければち
から及ばずをひての者どもはみなさかもとへぞかへ
りけるそのへちしやうじ左づかにあゆみかた田へ入
參らせしる人をたのみ一えうのふねにさほをさしあ
さづまのはまにあがりさのみ御身をいかにとしてみ
のにはつゝみ申さんとそれよりも御手をがたにかけ
くさのゝさとにいれ申我宿所にていたはりであらた
まの月ををくりしはめでたかりける次第かなある時

しやうじ申けるはこれよりいづくをさして御いそぎ
ぞ御心ざしのところ迄をくりと申べし頼朝此よ
しきこしめしさして行べきかたもなしいづくの里也
共あはれと云人のあらばすみはてなんとぞおほせけ
る庄司此よしうけたまはり我子の九郎まだ見えずお
りふしきたり給へば九郎が生れきたれるかしう共子
とも思ふべし是にまし／＼候へとてふかくいたはり
たてまつるこくないつうげの事なれば左馬のかみよ
しともは尾張のおさだにうたれたまひ御くびのぼり
ごくもんにかゝれるよしをきこしめしいかにしやう
じわれをば誰とかおもふらんよしともに三男わらは
名はもんじふ子げむぶくして頼朝なりさりともと思
ひしち、はうたれ給ひ御くびのぼりごくもんにかゝ
れるよしを聞いて今はいのちのいきたり共たれか
あはれととふべきぞみやこにのぼり今一度父の御く
び一目みてもしも命のながらへばさまをもかへてひ
たすらになき人々をとぶらふへしいとま申てさらば

とてたちいでさせ給へば庄司をはじめ女房も御たも
とにすがりさては我子の九郎めが主君にてまします
やわが子にこそははなれむめきみさへわかれ參らせ
てわれらは何と成べきとたもとにすがりなきにけり
よりも此よし御らんじてげに／＼申もことはりな
りひげきりをとじめをく是にをきてはあしかりなん
美濃の國あふはかのちやうじやがもとへをくりつゝ
いかならん世までもうしなはでもてと申べし是に刀
一つあり八まんどのゝ御かたな名をいはきりと申な
りうきよのなかのかたみに庄司どのにとらするぞふ
しげのよにもいでたらばこのかたなをゑるべにてた
づねきたり候へとてわが身はわきざしばかりにてあ
みがさにやつれはてみやこへのぼり給ひける心ざし
こそあはれなれさても六はらの御所には人々にけし
やうををこなはる彌半兵衛むねきよには美濃の國た
るゐをたまはりまかりくだりしがいまつがはらをと
をるとて頼朝にまいりあふあみがさのうち人に玄の

ばせ給ふていあやしく思ひ申とて笠ひきおとし見申
せばよりともにておはしますてんのあたふるかたき
とてやがていけどり奉りみのの國へはくだらすいそ
ぎ都にのぼり六はらどに參りこのよしかくと申上
るきよもり聞召さればこそ爰ぞとようんはてんのな
すところくわほうはくわこのしゆくゆふよしともは
うたれぬ惡源太ともなりははらきりぬよりもをば
いけどりぬいまは誰かのこりゐて平家にてなをなす
べきやがて朝頼きるべけれ共古刑部卿たゞもりの佛
事おりふしさしあひなり佛事すぎて切べしそのあひ
だはむねきよにあづくるぞ宗清頼朝をあづかり申い
くほどならぬしやうがいをみるとこそなか／＼あはれ
なれあらいたはしやよりもいくほどならぬしやう
がいとてこゝろまします御そうちをしやうじ申ご
せのくわうせんくらきやみのまよひをたのみ奉りい
まだよううちにましませどちきやうしやにて御座あれ
ば日夜に御經をこたらすあかつきがたのゑかうには

此御きやうのくりきによつて父あにくさきだつ人
一つはちすに生れ給へと一心にゑかう志たまへばむ
ねきよもねうばうもこのよしを承りたゞ人のたから
には子にすぎたるはましまさずあれほどなげきの御
なかにぬんぶつ申きやうをよみゑかうの心ざしをば
十はうの神佛さこそうれしくおぼすらんくやしくも
又むねきよがいけどりまいらせとうきめをみるかな
しさよとふうふともにいひかたりふかきおもひとな
りにけりさようちはけて殊更こゝろぼそげにましま
すところへむねきよふうふまいりしゆをすゝめ申せ
どもさらに寛いれ給はずわかき人にてましませばい
つはり御こゝろをもなぐさめばやと思ひいかに頼朝
聞召れ候へげにや承はれば古刑部きやうたゞもりの
佛事折節さしあひなり其ほか死罪の人々もみなくび
をつぐと承る殊さら御身をばよかはのそうづめいし
ゆん三井の僧正ゆふはん仁和寺のけいうんおりゑき
りに申さるゝ御そせうのまへなればたとひるざいは

なさるゝとも死罪は更に候まじ御心やすくおぼしめ
せといつはりすかし申せば頼朝きこしめしあらおろ
かなりむねきよ命をおしみよりもがなげく身にて
はなきぞとよむかしは源平兩家とてとりのふたつの
羽がひくるまのりやうわのごとくにてをとりまさり
はなくし天下のまほりと有つるがせんせいとなる事
有て此時ほろびはつるらんちゝあに／＼さき立人ひ
とつはちすに生れむと此事ならでたじもなし今夜は
此さけのむべき也をの／＼も參り給へやとなげくけ
しきもましまさずよりも仰けるは此ほどはくわん
げんすさみつるにあまり思へばこゝろなしふえや
るとの御誕なりむねきよ承りかんちくのやうでうを
とり出して參らせあぐるころは春のなかばなればそ
うてうにねを取てしゆつこんらくをあそばしうきみ
のうへのなげきにはくわいこんらくをあそばすむね
きよもねうばうもかんるいおさへがたふしてびは一
めんこと一ちやう取いだしねうばうにことををしあ

づけ我身ちびはのををあはせばちをとけだかくひき
ければ女房なみだもろともに十二のけんをえり立る
のをに手をかけにけりこれふつけうのうつはものう
さもつらさもうちわすれ是になぐさみ給ひけり
よもほのぐと明がたに門をたゞくもの有八を出し
て問すれば頼朝を今日きるべしと申使なりびはこと
をとりひそめ頼朝にいだきつき申なくより外の事は
なしよりもおとなしやかにの給ひけるは思ひまう
けたる事なればいまさらなげくにをよばずさだめて
くびをばおほぢを渡さるべしかみけづりてたび給へ
むねきよもねうばうもなごりのためと思ひければ三
十三枚のくしとはらひをとりいたしきのふまでは一
すぢを千すぢ百筋千秋萬歳といのりし黒かみをけふ
は又六でうがはらのよもぎがもとのちりとなさむ事
こそかなしけれと落るなみだに目がくれてくものた
てとも見もわからずさてあるべきにてあらざればふう
ふとともにわけけづりぎやうすいせさせまいらせてす

すしのひとへはだにめさせねりぬきにおほくちかさ
ねうかりけるかな法なりとてたかてのなはをかけ申
むねきよもねうばうもたかてのなはにとり付てそれ
人は一じゆのかげ一河の水をくむ事もたしやうのき
ゑんとうけたまはるがこんじやうならぬ御きゑんにま
まいりあひ候て今さらうきめをみる事よ御もちゐも
有ならばわれ／＼ふうふが首をめされ頼朝の御いの
ちをたすけ給へやかなしやとりうていこがれなきけ
ればげになさけなきかたまでもあはれととはぬ人ぞ
なきよりともぎやくしゆのためにそとばを三本きざ
み一ぽんは父のため一ぽんはあにく／＼いま一本は我
ためとてかみにはあじをあそばしなかにはきやうの
もん玄もにはしいしゆゑかうのむね年號日付みなも
との頼朝とあそばし此邊にいづくにてもこまのひづ
めもかよはすぐるまにをされぬところやあるたづね
てまいれとおほせければむねきよ承り三つのそとば
をたまはりいづく／＼と申共こまのひづめもかよは
くときはたすけでいかいあるべきくるまやりだせう

ずくるまにをされぬところはいけどののさむさうな
かしまなりと申てにし八でうにもちてゆきなかしま
にわたり三つのそとばをたつる彼いけどのと申は古
刑部きやうたゞもりのごけにておはしますきよもり
には御まゝは、じひ第一の人なりおりふしえんにま
しませしが誰そとばぞととひ給ふたゞいまきられ給
ふよりとものそとばなりと申めしよせ御らんじて人
してかゝせけるがいや自筆なりと申いくつになるぞ
と問給ふ十三と申としのほどよりも手ははるかにお
となしく見えけるやようもんおほしといへどもこと
にすぐれたるめいもんなりなにく／＼我從無數こうら
いしやくじゆしよだいせんごん一ぶんふるがしんせ
よ十方しゆじやうこのもんのこゝろは我もしゆこう
よりこのかたつみあつむるもの／＼のだいせんごん
を一ぶんも我身にといめず十方の衆生にほどこしあ
たふこれひけきやうのめいもんなり此ことはりをき

しかひよいそげ供せよむねきよとてとるもののもとり
あへず六でう河原にいで給ふさる聞頼朝はをつたて
のくわんぐむ七八十人がなかにして源五右馬のせう
なは取なりかいしやく人はなんばせのを五條の橋よ
りしも六條河原へひきいたすさるあひだ頼朝ゑきが
はになをり給ひければかいしやくにんがまいり西の
はうへをしむけ御ねんぶつをすゝめければ手をあは
せ高聲に念佛申さるゝいけどのゝ御車をほんまちば
かりにやりよする御念佛の其こゑがくるまのうちへ
聞えければいけどの聞召みづからゆくとおもはゞや
がて頼朝きらふす人に亥らせで此くるまをはやめよ
やれむねきよむちをうてやうしかひよたゞ一所にお
どるはわざとよりも切せんとやよりともきらるゝ
ものならば我は御所へはかへるまじやがて身をなげ
死なふぞいかにやとのむねきよいだきおろしてたゞ
うちあげくるまの亥ちにたゞ今ころびおちもとし給

ふをけん見にたてた後藤内車のとふを見付いかさま
亥がの大寺より大僧正かそうづか囚人こはむくるま
ぞとくきれやつとゆびをさすたちとりうしろへ廻て
なげかけんとせしとき八幡のちかひかやかはらのい
しにふみくじけうつぶしにかつばとまろびたちをか
はらになげかけおきあがつてたちをとらんくとす
るひまにくるまをさつとやりよせいまだといめもせ
ざりしにいけ殿ころびおち給ひよりともをひつたて
おなじくるまにうちのせもこめたとのがくびかない
まはよもきられじこゝろやすくおもへとてはらく
となき給ふ頼朝もいけどのゝ御たもとにすがり付は
らくとなき給ふものによくぐたとふればつみふ
かき罪人ぐしやうじんのてにわたりむけん大じやう
のそこにおとさるべかりしを六道能化の地ざうのし
やくぢやうをからりとうちふつてかゝんみさんま
いとよばはりかけすくひあげたすけむとし給ふもこ
れほどぞありつらん八でうとのに歸らるゝけん見ぶ

ぎやうもきりても六はらどのにまいりきよもりにかくと申ければとうきらぬこそふかくよと御こうくわいとぞきこえけるやがて主馬の判官もりくにをめしてなんぢ八でうどのに參り申べき事はちからをよばすよりともをばいけどにまいらせ候げんじにつたるてうほうによろひにはかんたかうぶきぬ七りう八りうとて有たちにはひげきりとて候を今度よしともたいけいもんをいでし時嫡子悪源太にもゆづらず二男ともながにもゆづらず三男頼朝にゆづりぬるよし聞え候おほそれながらいけどの御こうしゆによつてたづね出して給はらば平家のたからたるべしと御つかひを立たまへばいけどのきこしめされてよるともにかくと仰ければよりも聞召あら何共なの事共やいへに傳はるてうほうを命をおしみいかにとしでかたきのてにわたさんと思召れるあひだとかくものをものたまはずおもひりてぞおはしけるいけどの仰けるはおろかなりよりともいのちだにも有な

らばたからをばもとめて持べし只みづからに御まかせさふらひてありのまゝ仰られよ頼朝げにもとおぼしめしさむ候うぶきぬをば山しなのしやうじんがもとひげきりをば美濃の國あふはかの長者がもとにあげをき候とありのまゝにぞの給ひけるいけどの御よろこび有て六はらへかくとおほせければ六はらより使をたて二つのたからをめしいだすかくて二つのかから平家におさまるべきにて有しを小松のだいふたから也源氏方にもちてこそたからとはなるべけれのおほせにはおろかなる御ぢやうかな是げんじのたから也源氏方にもちてこそたからとはなるべけれ平家方にもつなればしやうげをばなす其たからとなる事候まじたゞ返し給へとてみな／＼源氏へかへされけりさらばよりもをばいかならん波島へもながしうしなへと仰けり一番のたひにはいせのくにこさの島とぞ聞えけるいけどの聞召彼こさの志まと申はいせへいじがおほくしてかなふまじとおほせけれど二番のたひには伊豆の國ほうでうひるがこじまこれも

こゝろもとなしとて御身まぢかき侍にくわうけつの
源五もりやすが子にもりながと申て生年十六歳にま

かり成をまぢかくめされいかにもりながよ頼朝がと

もをして伊豆の國にくだりてうせきみやつき申べし

いさゝかの事もあるならばいそぎわれにしらせよ俄

の事にてあるならばもりながさきにはらをされあと

をばとふてとらすべしいかによりともむますとも我

をばおやと思ふべし御身を子共おもはふぞなむやげ

んじのうちがみの正八幡大ぼさつ頼朝の御れうをあ

んをんにまぼり給へやとうしろすがたをおがみ給ふ

頼朝も立歸りふしおがませ給ひけり生れあふたる親

子ぞと御ようこびはかぎりなしさるほどに頼朝もり

ながをともなひ伊豆の國にくだつてほうでうひるが

こじまにて二十一年の春秋ををくらせ給ひけるとか

やつるに源氏一系の御代となりたまひてせめしと

ころはどこ／＼ぞいちのたにひえどりごえさぬきに

やしま長門にだんのうらはやともがおき迄も三年三

月にせめなびけ天下をおさめ給ふ事八幡大ぼさつの
御ちかひとぞきこえける

夢あはせ

去程にもりながはまださうてんの事なるに頼朝に参る君はいまだよるのところに御座ありけるにあひのしやうじをほとほとゝとづれもりながが出仕申て候頼朝きこしめされいつ／＼よりもあだちどのがけさの出仕のはやさよもりなが承てさん候今夜それがしふしきなる御むさうをかうぶりて候たしかに夢物語申さむためさて出仕申て候よりとも聞召れすけが吉事のゆめならばはや／＼かたれたもたんとの御説なりもりなが承てあつぱれ御前にこゝろありまの人あらば語てきみにたもたせ申さんと申おりふし御まへにおほばの平太亥こう申て候けるがきみの吉事の御夢ならばかう申大場めがゆめあはせにはまいらふするにて候はや／＼御語り候へもりなが聞て先ゆめのいとくをかたつてきかせ申さんむかしちうてんぢ

くのあるじじやうばんだいわうのきさきの宮は七月十四日に紫晨殿に御いで有ひるの御ゆめにこんじきのはだへの御僧御くちのうちにとびいらせ給ふと御夢を御覽じあくるせうへい元年に七多太子をまうけ給ふいまの釋迦は是也我朝のようめい天わうのきさきのみやはあるよの御むさうに金のたま手ばこをひだりの御衣にうつすとゆめを御らんじてしやうとくたいしをまうけ給ひなんばに四天王寺をたてもりやを退治したまふもみなこれゆめのいとくなり又わがてうのでんげうだいしはれんげをいだくと御ゆめを御らんじてひえいざんを建立しめいしゆつをあらはし給ふなりさればゆめとたかはあはせがらにて候ぞや能やうにあはせてたべや大場殿とぞ申けるおほば聞いてあらめでたの夢のいとくや候はや／＼御語候へもりなが聞て先一ばんの御むさうに東やまに松原むらさきの八重雲をかきわけつる／＼と出させ給ふ朝日を君の三五にいだきとらせ給ふと見參らせて候そ

のつぎの御むさうにきみはゑろきじやうえにたてゑ
ぼしあさいくつをめされさがみの國やぐらがだけに
御あがり有て東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと見
參らせて候其後やぐらがたけに御こしをやすめさせ
給ふがひがしへもみなみへもしへもむかせたまは
すきたへむかせ給ひゑみをふくませ給ふと見まいら
せて候そのつぎの御むさうに君のゆんでの御あしを
きかいがしまのかたへふみおろさせ給ひ扱又めての
御あしをそとのはまのかたへふみおろさせ給ふとこ
ろにきみの御てうあいにおぼしめす大場の平太かげ
よしおろきへいじにてうがたにくちつゝませさかな
にくけつのあはびをもつて御前に参るきみは御覽じ
てあはびのふときところを御手にもたせ給ひて酒を
たぶ／＼と御ひかへ有ていかに貴僧法師さかなひと
つとありしかばきうこう承て御まへをづんと立てかも
がいれくびゑぎの羽がへしさつとさひていはひのわ
かをぞあげにけるそのつぎの御むさうにきみのさう

の御たもとにさんほんのひめこまつをぞたてをかせ
給ふとたしかにもりながめが見まいらせて候ぞやよ
きやうにあはせてたべや大場どとのとぞ申けるおほば
に御吉事先一番の御むさうに東山に松原むらさきの
八重雲をかきわけつる／＼と出させ給ふ朝日を君の
三五にいだきとらせ給ふと御らん有て候はうたがひ
もなくわがきみは日の本のせいしやうぐんとあふが
れさせ給ふべき御すいさうの御むさう也其つぎの御
むさうにきみはゑろきじやうえにたてゑしあさい
くつをめされ相模の國やぐらがたけに御あがり有て
東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと御らん有て候は
七なんそくめつしつふくそくしやう是成べし其後や
ぐらがだけに御こしをやすめさせ給ふが東へも南へ
も西へもむかせ給はず北へむかはせ給ひゑみをふく
ませ給ふと御らん有て候はあふさるよみの候ぞやき
たかさぬると書てはうでうとよみの候ぞや爰をも

場殿が合様ひとへに君の御吉事とこそ聞えけれ

つてあんするに北條の四郎を御たのみあつて御代に
たゝせ給ふべき御すいさうの御夢候也そのつぎの御
むさうにきみのゆんでの御あしをきかいがしまのか
たへふみおろさせたまひさてめての御あしをそとの
はまの方へふみおろさせ給ふ處にきみのてうあいに
思召大場の平太かげよしおろきへいじにてうがたに
くちつゝませさかなにくけつのあはびをもつて御前
に参ると御覽有て候はあはびは海の物なればきかい
かうらいけいたんこくかいじやうはろかひのといか
ん程我きみの御知行にまいらふすることそれでたけれ
其次の御むさうに君の左右の御たもとに三本の姫小
松をそだて置せ給ふと御覽有て候は一本は我君一本
はあだちとの今一本はかう申大場の平太かげよし也
そも松と申は一寸だにものびぬれば千々にえださか
へぢやう千年のよはひをたもつ由を承る其松の如に
若ぎみあまた御まうけ有て末ははるぐとさかへさ
せ給ふべき御すいさうの御むさう也盛長の夢物語大

馬そろゑ

さるあひだ頼朝もりながをめされ此間の事どもは夢うつゝの吉事もんがくのうらのさすところ天命爰にしよくわんしてくわほうの花のつばみいではひかつがうふせいなり明夢とうらかた共すでにやうくときをうくるくわいぶんをまはしたのふで見んとの御誕なりもりなが承り先くわほうめでたき人なればと思ひ海の渡りを仕り三浦の館につくかの三浦のおほすけよしあきらは年つもつて百六に成しがひたゝれのひぼつかひつくゑに置てふしおがみまご嫡子わだの小太郎おほたうのひこ太郎をひそかにめされ先祖の君の御判をおがみ申せ子共まごともよいのりにもみやうもんにも又後生のうつたへにもなるべしされば亥んぼうけんのおきなはうんなむのろすいをのがれむとて大石によせてひちを折たいこうばうとい

つし人ゐひんのなみにつりをたるゝへうたん亥ば亥ばむなしく草がんゑんがちまたに乞げしれいてうふかくとざす雨げんゝがとぼそをうるほふすに似たるべしさればくつげんはよのうき事をうらみつゝ草のいほりに身をかくしむかしをゑのび老にけりよしあきらも人ならば山にもこもるべけれども此老が身につまるゆき我身ひとつにとりなしてよるべもゑらぬおきのなみうらしまがたま手ばこあけてもいといくやしきかほどめでたきわが君の御判をおがみ申事一眼のかめのたまさかに浮木にあへるがごとしとうとうりやうじやう申さんとて三浦三百九十三騎となかちやうにはんをすへきみにたのまれ奉るそれよりもりながはちばのたちにつくおりふし千葉のすけ他行のあひだおほすけ出合見參有て子にて候つねたねこれになればちからなし昔より此ところはちばのまじかづさへ御越候て歸りがけにしいしゆのやう承すけ上總のすけとて父母のごとし一方かけてかなふ

り度候まづくこれは見ぐるしく候へどもとてがう
たる馬にくらををきよろひかぶとをひきにけりもり
ながは是をみて野にもやまにもみかたぞとそれより
いとまごひつゝ千葉のたちをぞいでにけるかゝつし
と頃に千葉のすけつねたねわかたう四五騎あひぐし
さむちんに乗て出来るもりなが是をみてのりながら
の對面恐入て候へ共君の御使にて候へばまつびら御
めんなれといふまゝにちばがこまに打寄彼あらまし
をかたるつねたね聞てさておやにて候おほすけは何
とか申され候ひつるおほすけのおほせには上總のす
けがまいらばちばのすけも參らんとの御返事にて候
つねたね聞て是は何よりも恐入たる御返事を申され
て候ものかなたとひかづさはまいらずとも一騎成と
も味方參りまづさきがけ高名し名を後代にあぐべき
也いでくりやうじやう申さむと駒よりもとんでお
り本よりも千葉のすけはせうぶげんにて候へば手せ
い多くも候はず七百騎にて參らむとてなかちやうに

判をすへてきみにたのまれ奉るそれよりもながは
いはういなんちやうほくちやうなんあひろかはかみ
うさ山のべかなたこなたをふれまはるたのまるゝ國
は十三ヶ國大名は七十餘人小名數を玄らずわれをと
らじとはんをすへ君にたのまれ奉るさる間もりなが
は伊豆の田中をいでゝ百廿日と申には國々の人々の
御請のはんをとりもつてなごやの御所へぞかへられ
ける彼もりながをみし人のほめぬ人こそなかりけれ
さる間頼朝伊豆のおやまに御ちんをめされ續く味方
をまち給ふ我をとらじと參られけるをちやくたう付
て御覽すれば頼朝の御せい以上三百五十三騎に玄
さるゝよりもちやくたうひけんの後是はすけがし
うけんのはじめなればめんくの馬共を一目みんと
の御謹なり承り候とて先一番に君の御家の子あきの
しゝとの四郎殿のたますだれといふむまをとをされ
たり面白のむまの名やたますだれとはかけてこゝろ
やすゝしかるらんそのつぎをみてあればあふみげん

じの大將にさゝ木の四郎たかつなのよつじろに白鞍
をかせしろさほさゝせ御前をとをされたりおもしろ
のむまのふせいや所々に四つ目結のかたつきやさし
きむまのもんかなとどつとほめてぞ通されける其次
をみてあればどひのこぐろに白くらをかせ御まへを
通されたりこのむまと申はまだまき出の名馬にてい
さみにいさむで前の足をづんとあげうしろのあしを
ひつしきかしらをふつてめを見出しおどりいでゝい
ばふこれもをとらぬ名馬かなとどつとほめてぞとを
しけるそのつぎをみてあればさても御しうとに北條
の四郎ときまさのさゝなみあしげといふむまに志ろ
くらをかせしろさほさゝせ六人のとねりにひかせ御
まへをとをされたりおもしろの馬の風情やこのむま
と申は骨はふとうてすぢおほしの馬の色々はあしかふち黒
あり尾くちちいさくわけ入て尾は三ぢうのたきのお

つるがごとなり左右のもゝはからのびはてんじゆ
とはんしゆばらりともひで二面さかさまに立て置た
る如也をつさまさんづにしゝ餘りよめのつきさまつ
まねの骨くろがねをのべたるごとしつめはあつふて
つゝたかし千里を打とつかるまじ前よりみれば秋の
鹿遠山をとびたるごとく也そばより見ればにはとり
が大庭へおどり出ときをうたふが如くなりまはりて
みれば龍が雲を引つれ虎が風に毛をふるひざうがき
をかみならししゝがはがみしたりしも是にはいかで
まさるべきあつぱれむまのいきほひかなとどつとほ
めてぞとをしける是をはじめと仕りさはらの十郎が
いかづちあしげかり野すけがかなづちあしげたしろ
のくわんじや美女くりげ祐經が奥州くりげぬまたの
平内がとびすゝめ南條が小鷹がはらけふるほりがほ
かけ船三島の源太がしゝの子にさう藤太が岩くだき
つちやの三郎とらつきげ扱岡崎がみやまかげ大ぬき
の四郎が黒かすげ惣じて名馬の色々はあしかふち黒

かけつるぶちかげふちあひさうふちかうしくりげひ
めくりげ我もくとひかれたり以上三百五十三騎は
いづれもをとらぬ名馬也去程に頼朝治承四年八月の
廿三日に兵見ころへ馬ころへめされていつも久しき
源氏の玄らはたをほのぐとさしあげまなづるがた
うげに打あがつて御陣をめされしが御代をめされん
其爲に手勢七騎を引わかつてとひのやととかうらよ
りも御船にめされあはのれう島を心掛けおきなかに
玄らはたをさしあげ給へは三浦よこ山たんこだま此
よしを御覽じあは君のおきに御座有にいざやさらば
參らんと千騎二千騎百騎二百騎うちつれく參程に
武藏の國とかやこうのろくしよぶんばいの宮の前に
てちやくたうつけて見給へばよりともの御せい廿八
萬騎にはどなくならせ給ひて一天四海に光をはなつ
平家を三年三月にせめなびけ天下をおさめ給ふ事八
幡大ばさつの御ちかひとぞ聞えける

木曾願書

爰に信濃の國の住人木曾の冠者義仲は平家をせめむ
そのために五萬餘騎を率し信濃の國を打立て越後の
こうに着しかば木曾の給ひけるは平家大勢にてある
間となみ山を打こえ越中のひろみへ出るならば定て
かけあひの合戦にてぞあらん但かけあひの合戦は勢
の多少による事なりいつも我いくさのかれいなれば
勢を七手にわかつて方々よりもむかふべしまづ叔父
十郎藏人行家に一萬餘騎をさし從て玄ほのてへまは
しからめてへこそつかはされけれ残四萬餘騎をてん
でにわかつたての六郎親忠に七千餘騎を指そへて北
くろ坂へぞむけられけるにし名高梨山田の次郎是も
七千餘騎南くろ坂へぞむけられける樋口の次郎かね
光は五千餘騎にしてくりからのだうのうしろへまはさ
れけりねいこやた五千餘騎まつなかのくみのきばや

しやなぎはらに引かくす今井の四郎兼平は六千餘騎
を相玄たがへわしの島をうち渡りひのみや林に陣を
取木曾殿は一萬餘騎にて黒坂の北のはづれを西への
わたりをしてはにふの森に陣をとる木曾殿のはかり
ごとにたさしをさきにたてよとはたさしをさきに
ぞ立られける五月十一日の巳の刻ばかりに黒坂の峠
へ駒をかけあげ玄ら旗三十ながればかり一度にさつ
と打たてたり平家も加賀を打たつてとなみ山にうち
あがり源氏の勢を御覽じてあらおびたゞの大勢や
爰は山もけんそに谷もふかふしてからめてさうなく
よもまはさじ馬の草かひすいひんともに玄かるべき
所なれば先々陣をとれやとて大勢さつとおり立て山
路に陳をとりたりけり

木曾はやはたの社領はにふの杜に陣をとつて四方を
きつと見わたしければ北のはづれにあたりつゝなつ
山の嶺のみどりの木の間よりあけの玉垣ほの見えて
かたそぎ造りの社壇あり前に鳥居ぞ立にける里の人

をめされてあれに御立ましますはなにの宮いかなる
神をあがめ申ぞいかにくくと問給へば八幡大菩薩と
あがめ奉る當國の新八幡宮はにふのやはたと申也
木曾殿嬉しくて手書にだいぶかくめいを召て仰ける
はさいはひに義仲當國新八幡の御寶前にちかづき奉
つて合戦をとげんとほつす今度のいくさうたがひな
くかちぬるとおぼふる也さるによつてかつうは後代
のため又は當社のいのりにも願書を一筆かいてまい
らせんとおもふはいかゝあるべきかくめいむ志かる
べう候とてむまよりもとんでおりゑびらのなかより
も小硯とり出したゝう紙をしひろげ願書をかゝむと
つかまつる

かくめいがその日の裝束にはかちんの直垂にふし繩
目の鎧にくろつのばのそや打てぬりごめどうの弓わ
きばさむで木曾殿の御前にひざまづいて是を書あつ
ばれ文武二道のあふさて達者かなとぞ見えたりける
かれかくめいはいまだ南都にさふらひし時高倉の宮

三井寺をたのふで行幸ならせ給ひし時三井寺なんな
くたのまれ申南都へてう状をこす返狀を大衆せんぎ
あつて彼ゑんきうにかゝせられけるに清盛を平氏の
さうかう武家のぢんがいとかいてぞの名をあげし名
人なればいかでか書は損すべき此願しよにいたく飯
命頂禮八幡大菩薩は日域朝廷のほんしゆ累世明君の
なうそたり寶祚を守らんがため蒼生をりせんが爲に
三身の金容をあらはし三品の權扉をを開き給へり
爰にけいねんよりこのかた平相國といふものあつて
四海を我まゝとし萬民を惱亂せしむこれ佛法のあだ
王法のかたきなり義仲いやしくも弓馬の家にむまれ
わづかにきゝうのちりをつぐひそかに彼のぼうあく
を見るにゑれうかへりみるにあたはず運を天道にま
かせ身を國家になぐこゝろみにぎへいをおこさむと
ほつするきざみに囚徒ゑりぞけんととうせんりやう
かの陣を取士卒いまだあはせずといへどいつちのい
さみを得いまゑんゑつを守る處に今一陣にをひて旗

をあげ戦場にしてたちまちに三所和光の社壇を拜す

ほめぬ人こそなかりけれ

かはうノ誤カ
きかんのじゆんじゆくすでにあきらかなり凶徒誅戮

うたがひなしやくはんぎなんだこぼれかつがうきも

にそむなかんづく曾祖父前陸奥守ぎかのあそ身を

宗廟の氏族にきふくして名を八幡太郎と號せしより

このかたその門葉たるものきぎやうせずといふ事な

し義仲その後胤としてかうべをかたぶけて年久しい

ま此大功を起す事たとへば嬰兒の貝をもつて巨海を

量り蠍蟬の斧をいからして隆車にむかふがごとしへ

かりといへど君のため國のために是をおこす身のた

め家のためにして是を起さずこゝろざしのいたり亥

んし眞にありたのもしきかなやよろこばしきかなや

伏てねがはくばめうけんいをくはへれいじんちから

を合勝事を一時にけつしあだを四方に亥りぞけ給へ

亥からばすなはちたんき冥慮にかなひほうけん加護

をなすべくばひとつ瑞相をみせしめ給へ壽永二年

五月十一日源の義仲敬白と書たり彼かくめいが筆勢

そもそも此たび平家一のたにのかつせんに御一もんさぶらひ大將そうじて以上十六人のくみあしのそのなかにものゝあはれをといめしはしやうこくの御とゝつねもりの御子息にむくわんの太夫あつもりにてものゝあはれをといめたりその日の御しやうぞくいつにすぐれではなやか也むめのほひのはだよせのゆうなるにうらくれなるをめされねりぬきにいろいろのいとをもつてあきの野に草づくしぬふたるひたゝれゆん手のてつかいりやうめんのすねあてむらさきすそごの御きせながこがねづくりの御はかせ十六さいたるそめはの矢むらゑげどうの弓れんせむあし毛なるこまになしだまき白ふくりんのくらをかせ御身かろげにめされたりめされたる御むまよろひの毛に至るまでげにゆゝしくぞ見えられける御一門と

同じく主上の御供をめされはまにくだらせたまひしが御うんのすゑのかなしさはかんちくのやうでうを大裡にわすれさせ給ひわか上らうのかなしさはすてても御いであるならばさまでの事のあるまじきをかつうはこのふえをわすれたらんする事を一もむのなをりとおぼしめしとりにかへらせ給ひてかなたこなたの時こくにはや御一もんの御座ふねをはるかのおきへをし出すあらいたはしやあつもり志ほやはのたをこゝろがけこまにまかせておちさせ給ふ

かゝりけるところにむさしのくにのぢうにん志のたうのはたがしらくまがへの次郎なをざね此たび一の谷のせんぢんとは申せどもさせる高名をきはめずむねんたぐひはなかりけりあつばれこゝもとをよからんかたきのとをれかしをしならべむずとくんでぶんどりせばやとおもひなぎさにそふてくだりしがあつもりを見つけ申なゝめならずによろこふでこまのたづなうつすゑて大をんあげて申あれにおちさせ給ふ

は平家がたにをきてはよき大將と見え申て候かう申
つはものをいかなる者とおぼしめす武藏國のちうに
ん玄のたうのはたがしらくまがへの次郎なをざねか
たきにをひてはよきかたき候ぞまさなくもかたきに
鎧のあげまきさかいたを見せ給ふものかなひつかへ
し御せうぶ候へいかにくとてをつかけ申あらいた
はしやあつもりくまがへときこしめしがれがたく
はおぼしめされけれ共こまにまかせて落させ給ふか
かりけるところにはるかのおきを御覽すれば御座ふ
ねまぢかくうかんでありあのふねをまねきよせのら
ふすものとおぼしめしこよりもくれなゐに日出し
たるあふぎぬきいではらりとひらかせ給ひておきな
るふねをめにかけてひらりくとまねかる、せんち
うの人々にひとしもこそおほきにかどわき殿は御覽
じてほろかけもしやの船まねくは左馬のかみゆきも
りかむくわんの太夫あつもりかあれを見よとの御ち
やうなり悪七兵衛承りふなばりにつゝたちあがりな

ぎなたをつえにつきかぶとをぬいできつと見ていた
はしの御事や何として御座ふねにめしをくれさせ給
ひけんつねもりの御子息にむくわんの太夫あつもり
にてわたらせ給ひ候ぞやめされたる御むまの毛よろ
ひのけにいたるまでまがふとこうはましまさずいた
はしさよと申けりかどわき殿はきこしめしあつもり
ならばこのふねををしよせてたすけよすいしゆかん
どりうけたまはりろかいかぢをたてなをし船をなぎ
さへよせんとす此ほど二三日ふき志ほりたる北風の
名ごりのなみはけふもたつかせはきほおつてなみは
ごうじやのごとく也はくらうせがいをあらひいさご
を天にあぐればたゞゆきのやまのごとく也せうせん
こそをのづから弓手へもめてへもおもふさまにはあ
つかはるれことにすぐれたる大せんに大勢はめされ
たりたゝむなみにせかれつゝ次第くにいづれ共い
そへるべきやうはなしあつもり此よしを御覽じて
いやくこのむまをおよがせてあのふねにのらふす

ものとおぼしめしこまのたづなかいくつて海上にうちひてうきぬ玄づみぬをよがせらるゝいたはしやあつもりらうむしやにてましまさばんづにのりさが

つてとき／＼こゑをたて給はゞ御もまはいちもつ也

おきの御座船になんなくむまはつくべきにわかむしやのかなしさはむまにはなれてかなはじとおぼしめされけるあいだまへがさにのり懸てさうのあぶみを

つよくふみたづなにすがり給ひてうきぬ玄づみぬを

よがせらるゝ馬いちもつとは申せどもたゞむなみにせかれつゝをよぎかねてぞ見えにけるくまがへ此よ

しを見まいらせまさなの平家やをきの御座ふねははるかにほどをへだてつゝ玄かもなみ風あらふしてい

かでかなはせ給ふべきひつかへし御せうぶあれさなき物ならばなかざしをまいらせんと弓と矢をうちつ

がつてそゝろ引てかゝりけりあつもり御覽じてなかさび矢に射あてられ一もんの名をりと思召こま

のたづなひつかへしてとをあさになりしかばみづま

りばつとけたてそめはのかぶらうちつがひかうこそ
ゑいじ給ひけれ

あつさゆみ矢をさしはけてひくときは一本うき

返す事をはゑるかそもそもひし

くまがへもこゝろある弓とりにてあつとおもひさうのあぶみをけはなつて返歌とをほしくてかくばかりいたつきのはやはつれんとおもひしに

やといふこゑにたちぞとゝまる

かやうにゑいじてまちうけ申さるあいだあつもりゆみと矢をからりとすて御はかせひんぬいてうけて見よとてうたれたり熊谷さらりとうけながし取てなをしてちやうどうつ二うち三うちちやう／＼と打あはせけれどもいづれもせうぶ見えざればそれくまんもつともとてたがひにうち物からりとすてよろひの袖

をひつちがへむづとくんで二人が兩馬のあひにどうとおつるあらいたはしやあつもり御こゝろはたけくいさせ給へどもらうむしやのくまがへにてものゝ

かすとはせざりけりやすくと取てをさへ申かぶと
ちぎりてからりとすてこしのかたなひんぬいて首を
とらんと玄たりしがあまり手よわくおもひさしうつ
ぶひてさうがうを見たてまつるにうすげしやうにか
ねくろくまゆふとうはかせさもやごとなきでんじや
う人の年れいならば十四五かと見えさせ給ふ熊谷あ
まりのいたはしさにすこしくつろげ申上らうはへい
けがたにおひてはいかなる御きんだちにてまします
ぞ御名字を御名のり候へあらいたはしやあつもりら
うむしやの熊谷にくみ玄かれさせ給ひよにくるしげ
なるいきをつきげにや熊谷は文武二道のめいじんと
こそきゝつるに何とて合戦にはうなき事をば申ぞ
われらは天下のてうしんとしうんかくの座敷につら
なつて詩歌くわげんのみちにゅやうじたりし身なり
しか共この二三ヶ年は一門のうんつきていとをあこ
がれ出しよりこのかたぶしのいさめるほうをばあら
あら聞て候それ人の名乗といふはたがひのぢんにむ

らがつていくさみだれのをりから矢なきゑびらをこ
しにつけつばなきたちをぬきもつてこれはそんぢや
うそのくにのなにがしたれがしと名乗てうちもの
せうぶをし又くんでせうぶをけつするとこそきゝつ
るにわれはかたきにおさへられ玄たより名のるほう
とはいまこそ聞いて候へあふ心得たりくまがへ名字を
なのらせくびをとつてなんぢがしうのぎけいに見せ
んためなよしきそれ世にはかくれもあるまじきぞ
たゝそれがしがくびをとつてなんぢがしうのぎけい
に見せよ見玄る事もあるべしそれがみ玄らぬ物なら
ばかばのくわんじやに見せてとへかばのくわんじや
が見玄らすばこのたび平家のいけどりのいかほどお
ほくあるべきに引むけて見せてとへそれがみ玄らぬ
ものならば名もなきものゝくびぞとおもひてくさむ
らにすてをけすてゝの後はやうもなし熊谷とこそ仰
けれどまがへ承て扱は上らうはぶしのいさめるほう
をばくはしくは玄ろしめされぬや世に物うきはわれ

らにて候きみの御意に玄たかつて身をたすけんとす
れば親とあらそひ子とたゝかひはからざるつみをの
みつくるはぶしのならひなり花のもの半日のかく
月のまへの一夜のともせいふうらうげつ飛花落葉の
たはぶれも今生ならぬきゑんと承るこのたびの合戦
に人しもこそおほきにくまがへが參りあふ事をせん
世の事とおぼしめし御名乗候へ御くびを給てたゞ奉
公の其ちうに後世をとぶらひ申べしあつもりは聞召
なのらじものとはをもへどもごせをとほんずうれし
さにさらば名乗てきかすべしわれをばたれとかおも
ふらんかどわきのつねもりの三なんにいまだむくわ
んはかり名にて太夫あつもり生年は十六歳いくさは
是がはじめなりさのみにものなたづねそよはやくび
とれやくまがへよくまがへうけたまはつてさては上
らうはくわんむの御すへにて御座ありけるやなに御
年は十六さいなにがしがちやくしの小次郎も生年十
六さいにまかりなる扱は御同年に參候ひけるやかほ

どなき小次郎みめわろく色くろくなさけもゑらぬ
あづまゑびすとおもへ共我子とおもへばふびんなり
むざんや直家なをざねもろともに今朝一の谷のをふ
手にてかたきまれいの三郎がはなつ矢をなをいへ
がゆん手のかいなにうけとめなにがしにむかつて矢
ぬいてたべと申せしをいたでかうすでかと問ばやと
おもひしがいやくくまがへほどのゆみとりがかた
きみかたのまのまへにてとふべきかとおもひはつた
とにらんであらゆひにかひなの直家や其手が大事な
らばそこにてはらをきれ又うす手であるならばかた
きとあふてうちじにをせよ味方の陣を枕とし玄のた
うの名ばしくだすなといひてあればまことぞとをも
ひなにがしがかたをたゞ一目見かたきのぢんへかけ
入てよりそのゝち又二めとも見ざりしなりさてもく
まがへがつれなく命ながらへ武藏の國にくだりなを
いへがはゝにあひてうたれたるといふならばかんろ
のはゝがなげくべしつねもりとやらんも花のやうな

る若君をなぎさに一人残しをきさせこそなげかせ給ふ
らんつねもりの御しうたんとさてなをざねがおもひ
をばものによくくたとふればりうすいおなじ水な
れどふち瀬のかはるごとなり熊谷あまりのいたは
しさに又さしうつむひて御さうがうを見たてまつる
にせんけんたるりやうびんはあきのせみのはにたゝ
へえんてんたりしそうがは遠山の月にあひおなじ業
平のいにしへかたのの野邊のかりごろもそでうちは
らふゆきの玄たすいたいこうがんきんしうのよそほ
ひをたとへばゑにはうつすとも此上らうの御すがた
を筆にもいかでつくすべき熊谷こゝろに安^{案ノ借字}じけるは
いやくこのきみの御くびを給てなにがしおんしや
うにあづかりたればとて千年をたもちさて萬年のよ
はひかやまつだいの物がたりにたすけ申さばやとお
もひなふいかにあつもり平家がたにてをはせらるべ
き事は武藏のくまがへと申ものとなみうちぎはにて
くみはくんで候へ共わがこのなをいへにをもひかへ

たすけ申たりと御物がたり候へととつてひつ立たて
まつりよろひに付たるぢりうちはらひ馬にだきのせ
たてまつりなをざねもともにむまにのりにしをさひ
て五町ばかりゆきすぎうしろをきつと見てあれば近
江げんじの大將にめがたまぶち井ばみつ井よつめゆ
ひのはたさゝせ五百騎計てをつかくるゆん手をみて
あれば成田ひら山ひかへたりめてのわきにはどひど
の七騎でをつかくるうへの山には九郎御ざうし志ら
旗をさゝせ御きんじよにとつては武藏坊辨慶ひたち
ばうかひぞん龜井かたをか伊勢駿河この人々をさき
としてこゑくに申やうむさしのくまがへはかたき
とくんづるがすでにたすくるは二ごゝろとおぼえた
り二ごゝろあるならばくまがへとともにうちとれとわ
れもくとをつかくるこのきみの有さま物によくよ
くたとふれば籠のうちのとりとかやあじろのひ魚の
ごとくにてもりて出べきやうはなし人手にかけ申さ
んよりなをざねが手にかけ後世をそれかしとふらは

ばやと思ひて又むすとくんでどうと落いたはしや御首をみづもたまらずかきおとし目よりたかくさし上をにのやうなるくまがへも東西を左らでなきいたりくまがへなみだをこゝめ御志がいをかなたこなたへ

をしうごかして見たてまつればよろひのひきあはせにかんちくのやうでうを左たんのいへにひちりきを一本そへてさゝれたり又めてのわきを見てあればまきもはいけん仕にあらいたはしやあつもりのみやこ出のことの葉をくれぐれとこそあそばしけれ此きみ都に御座の御時はあんせつしの大納言すけかたのきやうのひめ君十三にならせ給ひしが天下一のびじんにてましますを仁和寺おむろの御所にて月なみのくわげの有しどきあつもりはふえのやくおなしかくこてことひき給ひし御すがたを一めみしよりこひと成てうたによみふみにかきこさるそのふみかずのかさなりてあふせのなかとなり給ふ中三日と申にへいけ

ていとのくわらくをさつてさいかいのはとふにをもむき給ふあらいたはしやあつもり御身は一の谷に御座あると申せ共御こゝろはさながらみやこへのみぞ通はれける

おぼしめしいだされしとおにつくられけるかとおぼしくて志きにちやうをぞかゝれけるまづせいやうのあしたにはかきねこづたふうぐひすの野べになめく志のびねややけいのかすみあらはれてそともの花もいかばかりかさねざくらに八ゑざくらきうかさんぶくのなつのそらにもなりぬればふぢなみいとふかほとゝぎす夜々のかやりび志たもえて志のぶるこひのこゝろすくわうきく志らんのあきにもなりぬればおのへの志かたつたのもみぢまくらにすだくきりぎりすさかでやはぎのさきぬらんげんとうそせつのふゆのくれにもなりぬればたにのをがはもかよひぢもみな志ろたへによるなりといへどもきえてあともなしなごりおしきこきやうのきの木ずゑを見すてつ

ついまは又一のたにのこけちの下にうづもるゝつね
もりのすゑのこのむくはんの太ゆふあつもりとかき
といめてぞをかれけるかれを見これをみたてまつる
にいといなみだもせきあへす御亥がいをばらうどう
にあづけをき御くびふえまきものともにもたせ大し
やうの御まへに參り此よしかくと申あぐるはうぐわ
ん御らんじてあらふしげや此ふえはなにがしが見亥
るところの候それをいかにと申に一とせたかくらの

みや御むほんくはだてのとき天下にこえだせみをれ
とて二くはんのふえありせみをれをば三井でらにて
みろくにゑかうゑたまへり小枝をば御さいごまでも
たせ給ふよしうけ給るがみなせくわうみやうせんに
てうたれさせたまひしとき此ふえへいけのてにわた
る一もんのそのなかにふえのきようをめされしにじ
やくわんなれどもあつもりはふえにきようの人なり
とてくだされけるとうけたまはるけさ一のたにのだ
りやくしよてふえのとをねのきこえしは此人の

ふきけるかとて大しやうなみだをながさせたまへば
ゑるもおらぬもをしなべてみんなみだをぞながしけ
るあつもりはめい大しやうくまがへいしくもつかま
つりたり此たびのけじやうにはむさしのくになが井
のしやうをとらするぞいそぎまかりくだれとの御ぢ
やう也くまがへらうどうどもしよちいりせんとよろ
こぶところにくまがへその御返事にをよばすなみだ
のひまよりかく計

人となり人となればやとぞ思ふさらすばつゐに墨
染の袖かやうにゑいじ御まへをまかりたち何として
あつもりの御亥がひをげんじざうひやうのこまのひ
づめのかよふところにしてをき申べきをくり申てあ
ればとてよもざいくわにはをこなはれじいや／＼を
くり申さばやとおもひ亥ほやはのはたにくだりせうせ
ん一さうこしらへざつしき二人さぶらひ一人あひそ
へじやうをかきゑたゝめ入しまのいそへぞをくられ
けるへいけは元りやくぐはんねん二月七日に一のた

にをおちうらづたひ志まづたひして十三日のさうて
うに八しまのいそにつくくまがへがをくりのふねも
おなじ日やしまのいそにつくかたきみかたの事なれ
ばそのあひはるかにろかいをといめ大をんあげて申
そもそもげんじがたよりもくまがへがわたくしのつ
かひにまかりむかつて候かどわき殿の御内なるいが
のへいないざへもんのせうどのへ申たき志さいの候
とたからかによばゝるあらいたはしやへいけは一
のたにをおちかいろはるかにをちのびたればさうな
ふげんじのせいのかゝるべしともおぼしめされずた
だ此ほどのもうきにはなみまくらかぢまくらゆめお
どろかすまつかせいのちも志らぬまつらぶねこが
れてものやおもふらんこゝろぼそくもおぼせしにげ
んじのふねよときこしめしわれさきにくとろかい
りかたぐ世はぎようきにをよんとときまつぼう

にきすといふたとへばいこくのはんくわいがわたつ
てのつたりともあれほどのせうせんに何ほどの事の
あるべきぞたれかあるゆきむかつてきひて參れと有
しときへいないざゑもんうけ給はつてぞんするみち
候きひてまいり候はんとやかたのうちへつつと入て
いでたつその日のしやうぞくははなやかにこそみえ
にければだには志ろきかたびらみなしろおつてひつ
ちがへかちしのよろいひたゝれの四のくゝりをゆる
ゆるとよせさせやうばいたうりのさうのこてびやく
だん見がきのすねあてに志しにばたんのはいだてし
本ノマ見がきのすねあてに志しにばたんのはいだてし
いとひどしのよろいのみのときとかゞやくをわだが
みとつてひつたてくさすりながにざつくときゆつて
うはおびちやうど志め九寸五分のよろいどをしをめ
てのわきにさいたりけり一尺八寸のうちがたな十文
字にさすまゝに三じやく八寸候ひけるしやくどうづ
くりのたちはいてなしうちゑぼしにはちまきし志ら
えのなぎなたをつえにつき我におとらぬらうどう共

を七八人あひぐしはふねをろしうちのりて表にたてをしとませざゝめかひてをしよするはんくわいがいきほひもあふかくやとおもひ志られてありそもそもげんじがたよりもくまがへがわたくしのつかいとはそもそも何事の志さいぞやをくりのもの申さん候あつもりをくまがへがてにかけ申あまり御いたはしきによつて御志がいにいろ／＼のぶぐども又は志がじやうをあひそへこれまでをくり申て候いそぎ御ざぶぬに御うつしあれと申もとくに聞てあらふしげやあつもりは一もんの御ふねにめされあはのなるとにましますよしをうけたまはつて候がやはかうたれさせ給ふべきもしいつはりにてや候らんをくりのもの申御ふしんはことはり誠いつはりをばたゝせんちうを御らんせよと申もとくにきひてげに／＼これはいはれたりとてをくりのふねにわがふねをおしよせなぎなたを杖につきをくりのふねをさしうつぶひてみてあればげにといろ／＼のぬいもの志たるひたゝれに

あつもりの御志がいとおぼしきををしつゝみてぞをきにけるむらさきすそごの御きせながこがねづくりの御はかせ十六さいたるそめばのやむらしげどうのゆみも有まがふところはましまさずもとくにあまりのかなしさに長刀をからりとすてをくりのふねにのりうつり御志がいにいだきつきなけれどもさらになみだなしさけべどもこゑはいでざりけりやゝありともとくにはなみだをながし申やういたはしや此きみの一の谷を御いでのとき此きせながをたてまつるおとなしやかにあつもりのいつしか御一もん世がよにましくて四かいに風のおさまりつゝもとくにしょち志らせ見るとだにおもひなばいかばかりうれしかるべきとおほせられしそのときはもとくにがうれしさを何にたとへんかたもなしまことのときはどうてんしめされざるあつもりを一もんの御ふねにめされつづあはのなるとにましますと申たるもとくにがころのうちのふかくさよいま一どもとくにかとおほせ

いだされ候へとてきえいるやうになきければをくりのものもとも人もげにことはりやだうりとてみんなみだをぞながしをくりのもの申これは御つかひのみにて候いそぎ御ざぶねに御うつしあれと申もとくにきいてげにくおもひにばうじおもひわすれて候とてあつ盛の御志がいをわがふねにうつし大船にこぎよせ此よしかくと申あぐるかどわきどのもつねもりもなにあつもりがうたれたるといふかさん候と申あらふしげやあつもりは一ものふねにのりあはのなるとにあるよしを風のたよりにきくしほどはいかばかりうれしかりつるにくまがへが手にかゝりさてはうたれてありけるかとなみだながらにいでたまふにようばうたちにとりてはによるんをはじめたてまつりむねとのによくわん百六十人もはかまのそばをとりみなふなばたにたちいで、御志がいにいだきつきこれはゆめかやうつゝかと一緒にわつとさけばれしを物によくくたとふれば二れや二のしやくそ

んの御にうめつのきさらぎや十だいみでし十六らかん五十二るいにいたるまでわかれの見ちの御なげきかくやとおもひ志られたりや、ありてち、つねもりはをつるなみだのひまよりもあらむざんやあつもり一のたにをいでしときこきやうのかたを見をくりころぼそげにてたつたりしをいさめばやと思ひあらふかくやとよ敦盛よ三だいくわいもんのいゑをはなればねをやさんにうづみなをはんてんのくもゐにあくべきみがらうどうのみるめをもはぢよかしといふてあればさらぬていにてなぎさまでくだりしがふえをわすれて候とてとりにかへりしそのときともにかへらむとおもひつれどもかたきみかたにをしへだてられ又二めとも見ざりし也なきあるくまがへにてかたみこれまでをくりたりむなししき志がいこのかたみけふはみつあすよりのちのこひしさをたれにかたりてなぐさまんなふ人々との給ひつゝもだへこがれたまひけりへいけがたの人々はいま一しほのみ

だ也そのゝちくまがへがをくりたるじやうをめしい
だし大しやうなれば此じやうをもしよしつねばしを
くりてあるかつかひはせひをわきまへすたゞかどわ
きどのへとばかり申とてもいがのへいなぎへもん
へとかきたるじやうにあるあひだいゑながふみを
つかまつれうけたまはり候とてふねのせがいにひざ
まづき狀をたまはりこし上たからかにこそよふだり
けれなをざねつゝしんで申ふりよに此き見とさんく
はいしたてまつしあひだおきにせうぶをけつせんと
ほつするきざみにはかにをんできのおもひをばうじ
かへつてぶげいのいさみきえあまつさへはしゆごを
くはへたてまつるところにたせい一どうにきほひか
かつてとうざいにこれはあるかれはたせいこれはぶ
せいはんくわいがへつてちやうりやうがげいをつゝ
しむたま／＼なをざねはしやうをきうばのいゑにむ
まれたやみをらくせいにめぐらしいのちをおなじう
すちんとうがゆふへせりはんはんにをよんじたか

くのかんばくをほどこせりさても此たびかなしきか
なや此きみとなをざねふかくぎやくえんをむすびた
てまつるところなげかしきかなつたなきかな此あく
えんをひるがへすものならばながくしやうじのきづ
なをはなれ一つはちすのえんとならんやかんきよの
ちしよをゑめしつゝ御ぼだひをねんごろにとぶらひ
申べき事まこといつはりこうもんかくれなく候この
おもむきをもつて御一もんの御中へ御ひろうあるべ
く候よつて恐惶つゝしんで申げんりやくぐはんねん
二月七日むさしのくにのちうにんくまがへの次郎な
をざねゑん上かどわきどのゝ御うちなるいがのへい
ないざへもんのせうどのへとぞよふだりけり御一も
んうんかくけいしやうどうおんにあつとかんじたま
ひげにやくまがへはをんごくにてはあほうらせつゑ
びすなんどゝつたへしがなさけはふかゝりけるぞや
ぶんしやうのたつしやさよひつせいのいつくしさよ
かほどやさしきつはものにへんじやうなくてかなは

じとおほいどのへんじやうをつねもりのぢひつに
あそばしてたぶつかいはふみをたまはりいそぎ一の
谷にこぎもどりくまがへどにみせ奉るくまがへい
かんとしてゆみやのみやうがなくしてはつねもりの
御ぢひつをおがみ申さんといたゞきひらいてはいけ
んつかまつるその御しよにいはくあつもりがぢがい
ならびにゆいもつたまはりをはんぬ此たびくわらく
をうつ立しよりこのかたなんぞ二たびおもひかへす
事のあらむやさかなるものへおとろふるはむじや
うのならひあへるものにわかるへ事ゑどのならひし
やくそんらごらてんの一しのわかれにあらずやいは
んやばんぶをやさんぬる七日にうつたてしよりこの
かたつばめきたつてかたらへどそのすがたをみずき
がんつばさをつらねそらにをとづれとをるといへど
そのこゑをきかずさればかのゆいせきのきかまほし
きによつて天にあふぎちにふし是をいのるぢんめい
のなふじゆぶつだのかんをうをまつところによつて

七日がうちにこれをみるうちにはぢんぐをいたし
ほかにはかんるいそでをひたすによつてむまれきた
れるにあへりきえつのはういなくしてはいかゞそ
すがたを二たゞび見んするすこぶるしゆみのいたゞ
きひきうしてさうかいかへつてあさしすゝんでこれ
をほうせんとすればくわこおんくたりぢりぞきこ
たへんとすればみらいやうくたるものかばんたん
おほしといへどひつにつくしがたしこれはむさし
のくまがへのかへしぢがいとぞよふだりけるさるほ
どにくまがへよくくみてあればぼだひのぢんぞお
こりける今月十六日にさぬきの八しまをせめらるべ
しひきいてありわれも人もうき世にながらへてか
ばこの世はつねのすみかにあらずくさばにをくぢら
露みづにやどる月より猶あやしきんこにはなをゑ
いじゑいぐわはさきだつてむじやうの風にさそはる
るなんらうの月をもてあそぶともがらも月にさきだ

つてうゐのくもにかくれり人げん五十ねんげでんの
うちをくらぶればゆめまぼろしのごとく也一どしや
うをうけめつせぬものゝあるべきかこれをばだいの
たねとおもひさサハだめざらんはくちおしかりき志だい
ぞとおもひさサハだめいそぎみやこにのぼりつゝあつも
りの御くびをみればものうさにごくもんよりもぬす
みとりわがやどにかへり御そうをくやうしむじやう
のけぶりとなし申御こつををつとりくびにかけきの
ふまでもけふまでも人によはげをみせじとちからを
そへし志らまゆみいまは何にかせんとて三つにきり
おり三ぼんのそとばとさだめじやうどのはしにわた
しやどをいでゝひがし山くろだにゝすみ給ふほうね
ん上人をゑしやうにたのみたてまつりもとひきりに
しへなげそのなをひきかへてれんしやうばうと申花
のたもとをすみぞめのとうちのさとのすみごろもい
まきてみるぞよしなきかくなる事もたれゆへ風には
もろき露の身ときえにし人のためなればうらみとは

さらにおもはずかくてれんしやうくろだにゝろうき
よし志やうねん念佛申てゐたりしがあるときれんし
やうこゝろのうちにおもうやうきのくにに御たちあ
るかうや山へまいらばやとおもひ志やう人に御いと
ま申つたのふぢをひかたにかけたのむものはたけの
つえくろたにをまだ夜をこめていでけるがみやこい
でのめいしよにひがしをながむればせいがんじいま
くまのきよみづやさかちやうらくじかのきよみづと
申はさがのていの御ぐわんじよすみとものざうりう
たむら丸の御こんりうだいどう二ねんにたてられよ
ろづのほとけのぐはんよりもせんじゆのちかひはた
のもしやあつもりのしやりりやうとんせうばだいと
ゑかうしてにしをながむればたんばにをひの山おり
くちにたにのだうみねのだうきたをかへりて見をく
ればうちのをいでてれんしのふなをか山のはかざる
しめるに涙もせきあへず南をながむればとうじさい
じ四づか年はゆけれども老もせぬむつだかはらとうち

ながめ山ざきたから寺せきどのゐんをうちすぎやは
たの山をげかうしてこれたかのみこの御かりせしか
たのゝはらをとをりきんやのきじはこをおもふうど
のに亥げきませがきのやどをすぐればいとだのはら
くばつのわうじをふしおがみ天わうじへぞまいりけ
るてんわうじと申はしやうとくたいしの御ぐはんな
り七ふしげのありさまこうはふるともつきすまじか
めゐのみづのがれたえぬぞたつとかりけるとふし
おがみ候ひてあまのにまいらるゝ大みやうじんと申
はかうやのちんじゆにておはします御やまにほうし
をさづけてたばせたまへとねんごろにきせい申ては
やかうやさんへまいらるゝかたじけなくもかうやさ
んと申はていせいをさつて二百里きやうりをはなれ
むにんじやう八えうのみね八つのたにがゝとして
したかしせいらんこすゑをならせどせきしつのかげ
のどかなりあふかのてらよりみゑいだうのたにたい
ざうかいの大日百八十そんをへうせりさてまた大た

うよりしおくのゐんへこれも大日の三十七そんをへ
うせうこんだうのほんぞんはあしゆくほうしやうみ
だしやかこれ又大しの御さくなり大たうと申はなん
てんのてつたうをまなんでとそつ天のばんりをかた
どり十六ぢやうのほうたうかみは千だいのあみだ申
は千じゆの二十八ぶしゆ亥もはやくしの十二じんや
うくせじにきはなく亥ゆじやうあくしよのつみき
えらいがうのさんぞんをおがむぞたつとかりけると
ふしおがみ候ひておくのゐんへぞまいりけるみちの
ほとりのはつこつはいさごをまくがごとなりいよ
いよねんぶつ申おくのゐんへまいりあつもりの御こ
つをこめをきれんげだにのかたはらにちしきゐんと
申あんじつをむすびみねのはなをたをりあかのみづ
をむすびをこなひすましれんしやう八十三と申に大
わうじやうをとげにけりあくにつよければせんにも
つよしぶんぶ二だうのめいじんかんかはざらずほん
てうにかゝるつはものあらじとかんせぬ人はなかり

けり

明暦四年戌九月吉日

山田市郎兵衛開板

なすの與一

なすの與一 むねたかは大將の御前にゆみ取をなしか
しこまる判官御覽じてたゞ今御へんをめす事べちの
儀にあらずおきの平家かたよりも作りものを出して
有御へんは弓の上手ときく一矢いよとの御ぢやうな
り與一謹てかしこまる大將は御覽じてあらやうく
しや只つかまつれと仰ければかさねてぢたいの儀有
あしかりなんと存知あるあふぎ射する事いとやすく
候とおうけを申御前をまかりたち駒引よせて打のり
わだちふこだまたう大せいひかへておはしますぢ
んのまへをとるとき與一申けるやうはそれものゝ
おもしろきは夏山や青葉まじりの木の志たにひわと
こがらとうぐひすとそがぢやうそのきのえだにいく
こゑなくと目にはみずしてこゑばかりとんちにかけ
命もころさず羽もちらさず是をひきめの目のうちに

射こふでとるぞ大事なるあれ體にまのあたりにさし
あらはれたるぶんの物與一くわじやにてあらずとも
弓取てひかんものかなめぎはより射ちざり海上のは
なとちらさん事いとやすく候とからくとはわらひ
けれども與一もやうゆならざれば心ばそさはかぎり
なし志ほでむながひのひたるほど駒海上にうちひて
おきをきつとみてあればあふぎの立たる其間七八た
んきりと見ゆるこゝはとをしと存ずれ共志ばらくち
んをぞ取たりけるかゝりけるところにおきの平家三
萬六千餘騎月卿雲客あひのこらず只今出たるなしう
ちゑぼしのしよくわんはあふぎの射手かおもしろし
とさゝめきわたつて見えさせ給ふまづ一番にすゝむ
船女房連の御座船也そつのすけどのふげんじどのさ
らなどのおばすてどのしやうとうしの丹後の御つ
ばねあはの内侍に上總のおつばねをさきとして上ら
うねうばう百六十人下ともに二百八十餘人がまんま
くをあげさせあつぱれ時の見物やとてさゝめき渡て

見え給ふ其つぎをみてあれば先帝をはじめ奉り御一
門に取ては右大臣むねもり御子の中將ときざね四位
少將ありもり藏人の太夫なりもりしゆりの太夫つね
もり能登のかみのりつねさてそうかうにとつては三
井のそうづけんしむぎやうめいぼうのあじやりほつ
せうじのしゆぎやうのふゑんさてさぶらひにとつて
は越中の次郎兵衛上總の五郎兵衛惡七兵衛景清ひだ
の三郎左衛門此人々をさきとして諸國のじゆりやう
けんびいしかりむしやに至るまであつぱれときのけ
んぶつやとてさゝめきわたつて見えにけりさる間興
一はくがを歸てみてあれば大將をはじめ奉り武州に
ちゝぶとの相州にわだとのたしろのくわんじやのぶ
つかはごえの太郎玄げいへうつの宮の彌三郎とも
つな山なさと見をさきとして源氏六千餘騎がなぎさ
へさつとおりくだつて射やあてんずらん射やそんせ
むとてにあせをにぎりてかたづをのうでおはします
うしろはうりうあふはか前はむれたか松やくり八島

も近かりけり比は元暦元年三月十八日の事なるにき
のふ吹たる西の風いまだなみこそゑづまらねふねは
うき木のものなれば浮つゑづんづたゝゑふたり能登
のかみのはかりごとにげんじにちじよくをかゝせん
ためくるりをかまへて立たればはま風ははげしくひ
らりくるりと舞たるはくがをまねくがごとく也興一
がむまと申はあけ六さいの野取のこまなみ風にたは
ぶれてあがつつおちつこの馬がたづなをうつてぞく
るひけるふねもさしきになをりかねあふぎ矢つばに
さだまらねば乗たるむまもくるひけり持たるゆみに
あせをこめあましつやうにぞ覺えけるさるあひだ興
一うしほをむすび手水としなむやなすのゝ龍神正八
幡大ほさつなみかせゑづめてたび給へときせいを申
ふりあふのひてみてあれば誠に氏神八まんの御かご
にて候ひけるかなみ風ちやうとゑづまつていまはか
うとみゆる興一こゝろに思ふやう女の立たるぶんの
物なかざしにているときは花みてえだを手折風情と

やノ音轉

おもひ上矢のかぶらぬき出しさつ／＼とつまよつて
 みてあればちつとこの矢羽ひろくしはまさにふか
 れあしかりなんと思ひしづわにのりゆまへわのはづ
 れにをしあてこしのかたなをするりとぬきはしり羽
 二三度さつ／＼とかひてすてければ源氏平家は御覽
 じてまことの射手ぞよくするとほめぬ人こそなかり
 けれ

そのゝち興一あぶみふんばかりくらかさにつゝたちあ
 がつてだいをんじやうにてなのるたゞいまげんじろ
 くせんよきがなかよりもあふぎのいてにさゝれまか
 りむかひたるつはものをいかなるものとおもふらん
 下野の國のじゆう人金村の太夫に十八代のこうゐん
 いの庄司の其子になすの興一むねたかとて生年十
 八歳にまかりなるそれあふぎと申は上下によつてし
 やべつの候かみかかなめかいづくを矢つぼと承て仕
 らんと申大臣殿きこしめしあつぱれ大がうの者かな
 あふぎならばいづくをなりとも射あてたらんをかち

とはおもはず矢どころこひつるやさしさよ自餘のも
 のはかなふまじいせんにあふぎたてたるたまむしい
 でゝ矢どころをとらせよ彼たまむしがゆらいをくは
 しくたづぬるに本は九國の住人はなみの太夫が末子
 はなやの八郎京ばらのいもうとあざ名をあふむのま
 へとめされしが一とせ女院北山にて花見の御遊の有
 し時百首つらねて參らせあぐる日本一番のときはに
 をとらぬ美人とてゑきに名をこそかへらるれ春はあ
 をやざいとざくら夏は又藤の花秋は七夕のあまのが
 は瀬にせきすへてたえ／＼見ゆるはたきの水近くい
 ろのませばとて名をたまむしとつけらるゝむめ地の
 おりこうばい七つひとへのきぬのつまをとりふねの
 せかひにつつたちあがつてかれうびんなる聲をあげ
 あらいまめかしの射手殿やさふらふ日本ひろしと申
 共花のみやこにてとやめたりくるまは千里をかける
 とは申共くさびをもつてほんとせりはりをさげては
 みづをを射かうがひ立てまちを射はさみものにはく

しを射あふぎをたてゝはかなめをいるとは申せ共か

なめのへんはめづらしからずもでのへんをあそばせと袖かざして立たるはかなをかがゑづにうつすともふでもいかでかをよぶへき與一このよしきくよりもことに大事のところを矢つぼにさゝれつものかな射すものとおもひてかぶらをうしほにうちひて三人張に十三束とつてからとうちつがひ本はずうらはずひとつになれときり／＼とひきゑぼりかつてつよにぞはなちける

せい兵のいる矢のくせとして手本にはならずにはひととを鳴してあふぎのくもでの邊をばひふつと射切たりあふぎはやうのものなればはなのごとくさつとちるかぶらはいよくととなりして大臣殿のめされたる御座船のせかひのうちにしかいしやうへさつぶと入たりけり平家三萬六千餘騎いたりやくがの源氏いたりやしよくわんと亥ばしはなりも亥づまらず大將は御らんじて神妙なりと御ぢやうにてやが

て御はんをいださる、

さるあひだ與一はたくる／＼とひんまひてあはのなるとのわたりをしいはやがせとをうちすきはなのみやこにつきしかばくわん東へくだつて頼朝にかくと申神妙なりと御説にてやがて御判をいださる、二つの御はん給はり一門のこらずひきつれ所知入とこそ聞えけれ

未來記

去間牛若殿鞍馬の奥そうじやうががけといふ所へ夜
な／＼通ひ給ひけり天下をおさめん其ために兵法け
いこのたしなみなり抑兵法と申は三略のじつしよた
り昔大唐しやうざんのぞうけいが傳へしひしよなり
吉備の大臣入唐し八十四卷の中よりも四十二帖にぬ
き書て我朝へわたされしを坂のうへのりじん九年三
月にならひ敵を玄づめたまひけり扱其後に田村丸十
二年三月にならひならさかやまのかなつむて鈴鹿山
の盜人かゝるげきとをたいらげ天下をまほり給ひけ
りサシ扱其後にすたりゑいざんにこめられしを詞白
河いんちのこのかうべならふとは申せ共さしたるゆ
うはなかりけりさる間牛若殿唯さんがくをはしりま
はり枯木の枝を傳ひ御身をかるめ給ひけり爰に天狗
共さしあつまり内儀ひやうぢやうするやうは抑當山

は玄かく大師の祕所として行人ならでは此山へ通ふ
ものもなかりしに鞍馬寮の牛若が我等がすみかをあ
ざける事其いわれなき物をいざや天狗のほうばつを
あてんなど、申けり愛宕の山の大天狗太郎坊申や
う抑此兒ふようにて親にも師にも不孝ならば天狗の
ほうばつあつべけれ其父母けうやうの其ために兵法
けいこのたしなみなり父母にけうやう有者はかなら
ず天道の加護を蒙にばつしたまはんせんざこそ玄か
るべくもなしといふひらの山の次郎坊進出て申やう
抑我等が異名を天狗といふはいわれありむかしは人
にてさふらひしが佛法を能習ひ我より外に智者なし
と大まんじんをおこすゆへ佛にはならずして天狗道
へおつるなりたとへまんじんおゝくして此だうへお
つる其情をいかで玄らざるべきいざや牛若合力し天
狗のほうをゆるし親の敵をうたせん尤然べしとてむ
ねとの天狗七八人若山伏に出たち牛若殿の前にゆき
いかに小人きこしめせ抑此あたりに人住ところ候へ

ば御出あつて玄ばらく フシ御あそびさふらへや小人
とこそ申けれ牛若どのはきこしめし是唯ものとおぼ
さねどなんの子細の有べきと思召れけるほどに山伏
のかたにのりそこ共玄らぬ山を行ふかき谷にわけて
入いづく迄牛若をぐそくするぞあやしやと思召れけ
るほどに山の氣色と木のこだちかんれいがゝとそび
ゑて萬木枝をならべては花しやうゑんにさかんなり
りゝたるにはひはかうばしく松柏みどり色ふかし瀧
のおとれい／＼とひゝき岩間をくゝるおと是やまこ
とにしやうりやうせんのきゝどくをんかとうたがわ
る爰はほんだうならびにはいでん玉を磨きゑんでん
にしゆぎよくをつらね九重の塔は雲にそびゑ坊中む
ねをならべつゝ門々甍をつゝけたりかほどめでたき
みてらの此せんこくに有けりと思召れけるほどに玄
ばらくたちておはしますコトバ懸りける所に有大坊
の客殿にむねとの大衆百人ばかり連座してくはんげ
んかうのもあそびせうちやくきんくごげんくわん

を玄らべ面白かりける座敷なるが牛若殿を見付まい
らせ管絃をといめててうしやう申はるかのぎしやう
にすへまいらせ山河のびしょくを調へちんけうをつ
くして持成申すらんぶになれば天狗共我をとらじの
あそび事てんこつの物の上手がむじんのきよくをつ
くしてわれおとらじとぞくるひける老僧たち申され
けるはあそびばかりにて事ゆべきか源平の合戦の
此すべに有べきをかねて玄つてはんべるなり小人の
御持成にまなびて御目にかけよといううけたまはる
と申てゆゝしげなる天狗が是は平家の大將安藝守清
盛と名乗てす、み出安藝國嚴島の明神の御はからひ
によりつゝ此世を今よりおさむべし平家に野心の者
をば都のうちにをくべからず薩摩がた硫黃の島へ流
すべしほうわうをば鳥羽の古宮に籠にてまつり清盛
が子共いよ／＼はんじやうし一門六十三人はいづれ
も官ろくおもかるべしちやくし次男は左右の大臣孫
は國王カ・ルあるいは百官けいしやうなりフシあふれ

源氏のすゑんぐをたねをたつてほろぼすべし南都に
敵がこもるとさうげきとこわくて手にあまらば大佛
殿に火をかけよツメうけたまはると申てゆしげな
る天狗が本三位の中將重平衡ノ假借と名乗て三千餘騎をそつ
して南都へ押寄て大佛殿を焼はらふ春日のおとがめ
こはくして既にはや清盛は火のやまうを請とつてせ
うねつ地獄のかなやのほむらいかで是にはまさるべ
きあらあつやかなしやとこがれじにこそゑんだり
けるとかやうに清盛のはや一期をかたつてさつと入
コトバかゝりける所にゆしげなる天狗が是は平家
の世つぎ右大將宗盛と名乗てかむりそくたいのしや
うぞくにてゆしげに座せられたり不思議やへいじ
のみだれのとき伊豆の田中へ流されし頼朝世をみだ
り伊豆の目代山木をうつて相模の國石橋山に幡をな
びかせたてをつくおうばの三郎押寄て石橋山をいお
とす頼朝主從七騎にて武藏の國へおち給ひこうのろ
くしよぶんばいに幡をなびかしつゞくみかたをまち

給ふに我もとさんせられけるをちやくたうつけ
て見たまふに夜日三日が其うちに頼朝の御勢貳拾八
萬七千餘騎はたの玄たにあひなびき先陣は相模の國
小林の郷に京をたて新鎌倉とさめく爰に信濃の住
人に木曾のくはんじや義仲は平家をせめん其ために
五萬餘騎をそつし信濃の國をうつたつて越後の府に
着しかば越路にかゝりせめのぼりツメ都まだかき越
前の火打が城に陣を取平家の人々肝をけし驚さはぎ
給ひて十萬餘騎にて都をたつて近江の國とかやあら
ちを越てちのめ山うちこへかつるの山に陣を取源氏
はくつきやうのじやうくはくに籠てさうなくおつま
じかりしを有人のたばかりにようことのせきをやぶ
られこらへかねて落給ふ平家跡よりせめつゞく加賀
の國玄のはらあたかのたかいは天地もひゞくばか
りなりそこをも義仲うちまけて加賀越中の國境くり
から山に陣を取平家の人々かつにのり彼山へせめの
ぼる其時源氏の氏神八幡大井の御はからひによりつ

つ平家三萬六千餘騎は一夜がうちにくりからぬ谷の
朽木とほろびはつ平家にげてのぼりしを源氏跡より
責かゝる平家都をおとされ神祇をとつてはるかなる
福原の京に落紹ふコトバ去間義仲は天下を守護し奉
りゆ、敷見えて今ははや木曾のせいたたるべき
が頼朝の果報におゝはれ代を背くべきすいざう有
サシクドキ平治のげきしんはさすが情の有つるにああ
らうかりけるかな源氏のげきふう四海にふきあれて
雲の上迄浪たかし頼朝きこしめされて君をまばらん
ためにこそ義仲都の守護共あれ却て天下をなやます
は重而けうい成べし其儀ならばうつてをのばせんと
て大將にはかばのくはんじやのりより此牛若殿元服
して九郎義經と名乗べじ牛若をば鞍門の多門伊勢の
兩社まほり守護し給ひきんようをあらはしきゝうの
家をつぐべきなりカ・ル是によつて教頼義經を兩大
將と定めカ・ルフシ都へせめてのぼるべしフシむざん
やなよしなかは天下のにくまれてういのはぢゆみや

のするもすたれはて栗津が原でうたるべしツメ義經
都のけいごとして三種の神祇事故なく都へかへし申
さんと三くさのたうげひよ鳥ごへからめてをまほし
責入べし平家こらゑで城をおつ汀のみくづとなりは
つる終には西海のあかまもじだんの浦はやともが沖
にて二位殿先帝宗盛を始めたてまつり平家三萬六千
餘騎は水の淡と消えはつべしフシ扱其後に牛若殿兄
ににくまれ給ふなよ梶原に心ゆるすべからず兄弟中
不和ならば其身の運はつくべきなり クル六親不和に
して三寶のかごはよもあらじカタツメ爰迄すゑをばお
しゑぬ扱其後をしらぬなり是迄しやうじまいらせて
對面申ゑるしには天狗のほうをゆるすなり是をまば
りにかけよとてくろがねの玉を取り出し牛若殿にまい
らせてかきけすやうにうせければ有し所はうちうせ
てそうじやうががけなる松の枝にぞおはしける扱は
天狗がうしわかをかどへけるよと思召東光坊にかへ
らる、

ふえのまき

さるあひだ牛若殿くらまのてら東光坊にてがくもん
きはめ給ふふでをとつての筆法にきよりんこさう水
露のてんくしらうしの筆のあとぶんじよのかずをの
こらすならひぞきはめ給ひけるときはこゝろにおば
しめすそれちごのもてあそびにな／＼と申ともく
わげんにすぎたる事はなしそのなかにとつてもふえ
はいちらの名物なればよからんふえをもとめくらまへ
のぼせうしわかにとらせばやとおぼしめし都まちか
きよどのつのみた次郎がもとよりもふえを一くわん
かひ取て鞍馬へのぼせ給ふうしわかなゝめに思召き
さらぎなかばの比よりもふきはじめさせ給ひつゝそ
の年の神無月すゑはのころになりければ百二十調子
のがくをば吹こそきはめ給ひけれ牛若こゝろにおば
しめすそれ人の持たからぬ威徳をきかねば何ならず

此笛のいとくを聞ばやとおぼしめし淀の津のみた次
郎をぞめされけるみた次郎承てくらまでら東光坊に
まいりうしわかどのゝまします庭上にかしこまる牛
若殿は御覽じてよどの津のみた次郎とはなんじが事
かさん候と申此笛はかんちくか本ちくかきかまほし
やと仰けりみた次郎承てさん候此ふえと申はさぬき
の國びやうぶのうらにてほうき五年に生れ給ふ弘法
大師入唐し青龍寺にましますけいくわくわしやうを
玄とたのみ玄んごんのひみつをきはめ給ひわれ入唐
のついでにてんぢくりやうじゆせんにおはします大
聖もんじゆをおがまばやと思召玄ん／＼とある遠島
をわけこえ給ひけるほどにかうしうといふ國に十の
道わかたり其中に取てもかうなんといへる道こそせ
きけんの南なれこの道にさしかゝりたいたくの野邊
ゆきすぎてはんにやだいをぞおがまれける彼はんに
やだいと申はなんがくだいしひさしくをこなひ給ふ
御寺也いま日本に生れてはまやどのわうじ聖徳たい

し共申なり衆生さいどのぢひふかしなむがくだいし
とふしおがみ又五十里をゆき過ぎよくせんじとて
御寺有かのてらと申はなんがく一の弟子ちき上人の
御寺なりかの天台にかよひ御法をとかせ給ふなりあ
なたへも五千里こなたへも五千里一萬里の道なるを
夜日七日にゆきかよひ御法をとき給ふなりかるがゆ
へに御しやくにもけいやうわうふくとしやうばんり
ととき給ふかゝるえんたうをわけこしたまひける
ほどにたうてんぢくのさかひなるりうき河につき給
ふ彼河のひろき事は三百二十餘町なりなんばんてん
にさかのぼりいさごをあらひながせりりうさのかは
と書てはいさごながるゝ河とよむさうれい山のふも
とに一のはしわたらる石橋と是を云しやつけうと書て
は石のはしとよむいはれにはりをつらねてはしらと
しるりをならべてかうらんとすはしげたはしらには
めなうをつくりつけはしのうへせばくして尺にもた
らずとをくしてそれる事はにじをなせるがごとくな

りみるにきもきえひざふるひ足すさまじく身のけだ
ちわたるべきやう更になしさりともこれをわたらす
ば白雲萬里をへだたりて何としてかは參るべきわた
るにこそと思召いのちをすてゝわたるゝほうりき
なれば相違なくはやむかへにぞつき給ふ水上さして
よぢのぼりさうれいのみねにあがりつゝはるかのそ
らを見給へば夕日程もなかりけりてにとるばかりち
かくしてかすみはたにのそこにありらひでんくもを
ひゝかし風せううんを拂てきんはくはことにちん
たり爰にはつせんどうじゆきあひ給ひいづくよりい
づかたへとをるものぞとひ給ふ弘法聞召れて是は
じちいきのこうぼう成がてんぢくりやうじゆせんに
おはします大聖もんじゆをおがまんためこれまで參
りて候どうじきこしめし是よりりやうせんじやうど
へははくうん萬里をへだゝりて何としてかは參るべ
きもどれとの御ぢやう也こうぼうきこしめされて萬
里のみちも一足の下よりつゝく事なればこゝろなが

くあゆまばなとかまいらで候べきどうじきこしめされておろかなりなんぢはけしにたとへたるぞくさんこくの小僧が唐土をこゆるだにもありがたき事なるにましててんぢくあゆみすぎりやうさむじやうどへ參らん事なか／＼思ひもならぬ事也たゞもどれとの御錠なり弘法聞召れて國は小國なれどもじちいきと名付て目をかたどれるくになりてんぢく其名高けれど月氏國と名付て月をかたどる國なりたうどひろしと申せども晨且國と名付て星をかたどるくになり國は大小にはよるべからず只ちゑこそほんにてあるべけれどどうじ聞召おもしろしこうぼううちゑくらべには參らんさてこうぼうは日本よりこれまでたつね來れるはぐちのそうにあらずやもんじゆもこゝろのうちもありりやうじゆせんもこゝろに有むねのほとりにもちろんながら遠島を尋ぬるはぐちのそうにあらずやこうぼうきこしめしおもしろしあのどうじ法にはじりのふたつあり心の内のもんじゆはそうのもんじゆこ

れなりりやうじゆせんのもんじゆは別のもんじゆ是也別ときらへばそうもなしそうときらへばべつもなじり惣別の不二なるをちしやとは申候ぞどうじ聞召ことばのしよけんむやくなりめいよをげんじてきとくをみせまもちゐんきどくはなにをあらはさむかみもなく筆もなくすみもなくして只今もじをひとつ書てたべ弘法聞召かゝむす事はやすけれどどうじのきどくを先見せよいで／＼さらばかゝむとてはしる雲にむかつてあびらうんけんとゆびをふるあらしにくもははやけれ共ほんじはちつともみだれずあざあざとこそ見えにけれこうぼう御らんじてしゆせうなりあのどうじさらばかくとの給ひながるゝ水のおもてに龍といへる文字をかくさしもに水ははやけれどもんじはちつともみだれずおびをむすべるごとくにあざ／＼とこそ見えにけれどうじ御覽してあの字にてんをうつてこそりうとはよまれ候へこうぼう聞召うたんす事はやすけれどもりうとならんがいぶせさ

にさてこそてんはりやくしたれなに程の事の有べき
ぞたゝうち給へ弘法さらばうつとの給びてひとつ
てんをうちたまひいまだそのてもひかぬまにいかづ
ちなつて雨くだり大水出来たり水ばなをみたまへば
もゝいろの大龍がかしらを高くさしあげ水におをた
たひて大木枯木のえだき岩をながしてくだすを
と地震のゆるがごとしすはや見よどうじにげ給へと
ありしかばどうじちつともさはがずこくうにあがり
雲をふんでさらぬていに御たちあるいたはしやこう
ぼうにげ給へとありしかばこうぼうちつ共さはがず
ばんじやくのゐんをむすんで河のおもてになげ給ふ
二十余丈にそびへたる大ばんじやくとなりしかば其
上にとびあがりとつこをにぎりこうぼうしはらくね
んじゆしたまへりどうじ御らんじてしゆせうなりと
よこうぼう我を誰とか思ふらんりやうじゆせんのも
んじゆ也いで本體をあらはさんうてんわりはなきか
しゝいてこよとありしかばをつとこたへてほどもな

く金のほうくわんをいたゞきせきいにけんをはきし
しにはらつてんのくらををき御前にひつたつるどう
じ則もんじゆなり五色の光りをはなちつゝしゝにめ
されたりければところはやがてじやうどと成りやう
ざん淨土これなり抑もむじゆと申はじやうるりじや
うどのそのなかに八大ぼさつの惣一なり行者をむか
へとりては極樂にをくらるゝ有時はりやうざんじや
うどにて法花のすいさうをとき又有ときはじやくめ
つ道場にして三世諸法のじつぎをたてしゝの上にし
ては又釋尊の左のわきに立給ふかゝるありがたき大
聖もんじゆをまのあたりにおがみ給ふ弘法大師の御
こゝろさこそうれしくおぼすらんもんじゆかさねて
仰ける末世の衆生のまよひにはうざうむざう是おほ
し有相といへるこゝろはよろづのものをありとみる
是は有相のまよひにて地獄へおつるはじめなり又無
相といへるこゝろはよろづのものをなしとみるとこれ
ばむざうのまよひにて地獄へおつるはじめなり一ね

んふしやうなるをこそもんじゆのちゑと申てぞつこの佛に成ものぞ此みちをまほりはや下向せよとの御説なりこうぼうよく／＼ちやうもん有てあらしゆせうや候さらば御いとま申とて其よりもどり給ふさうれいの山のふもとにひとつの流落るかのたきのさうがんに三本の竹有こうぼうけんをぬきもつて末のよを三ふしこめてきり給ひ契りのあらば日本にてめぐりあへやとの給ひて川にぞながしたまひけるそれよりもとはし渡りはや大唐につき給ふたうどの寺のはじめはやうしうの白馬寺殊更たつとかりけり歸朝のこちがふきければみやうしうに出給ふ御船にめすときを持ところの佛具に五ことつこさむこをこくうへなげさせ給ひけり紫雲くだつてこれをまきはるかの海をわけこしてきの國の高野のみねにとゞまれりさんこの松と申事此時よりのいはれ也とつこははなの都なるとうじの塔にとゞまれり五こは越後の國くるみの寺にとゞまれりそれよりもだいしばのろ島

とときさみのしまはるかのにしに御覽じて堺川といへるみなとこそたうどのわうのみやこよりながれ出たる大河なれそれより三日はしり過かしらなしといふ津こそもろこし船のとまりなれきみしうといへるおきすをすぎかうらい唐土のさかひ成もめいじまをはしり過ぎやうのみさきはくたいしゆもころいのみせんもゝ島きとの島もろみのしま船こしすぎてつちよりもあくればつしまのないにつくいきのもとおりはしりすぎいきのさかもと目にかけてあはや筑前の箱崎よはかたのつこそ見ゆれとてをの／＼いさむ折ふしに悪風俄にふきおちてかうらいのおきするきとの島までふきもどす大師ひゐんをむすび我又歸朝する事ひほうのためにあらず衆生さいどのためなり順風たべや龍王ときせいを申させ給ひければなみのうへにどうじ一人たゞみ此なみ風と申はかうらい唐土の神佛大師になごりをおしみ今一度たうどへむかへんための風なれば龍神のしよいならずとてかきけ

すやうにうせにけりこうぼうきこしめされて其ぎにて御座あらば先日本へつけてたゞ我日本につくなればたうどのてらをまなびきんかうふしとがくをうつてかうらいたうどの神佛を勧請申あれにて御めにからむとさせいを申させ給ひければ梶取共がこれをみてあそこなるほうしは何をいふてさゝやくぞ死なふす事が目に見えてひとり事をするやとてわらふものもありにけり誰も命はおしいとてなげくものも有にけりだいしのきせいまことにてをひてぞふきにけるとかや過にしくわんむ天皇の御時三十七にて入唐まし／＼てさて又四十七にてさがのていの御ときにはりけるぞふしげなるつくしのはかたにあがりふぢ御歸朝とこそきこえけれされ共人はなどやらんしら

んありければ天ぢくりうさがはにてきりながしたるだけで有きたいふしげにおぼしめし三ふしの竹をみにきざみ給ひてをひのあしにゆひつけ都へのぱり給ひしが三ふしの竹がよに入は五音の聲を出す五音のこゑと申はきうしやゝかくちうこれなり三くわんの笛にえり給ふおほすいれうこすいれう青葉のふえと申すあをばのふえと申はたけはしほにかれたらどあを葉はふしに一つあり枯ざるとくに名付たりこすいれうと申はしゆじやくわんのをにが取よなくこれをふきしかば天人是をとらんとて羽衣をもつてなでゝはてんにあがりなでゝはてんにあがるかるがゆへに名付てひとえかくしとこれをいふ此三くわんのふえをば天下のてうほうなりとて大裡にこめ給ひしをさごろもの中將吉野山にて花見のけうの有しとき此笛を申うけてふきて遊ばせ給ひしにまんじゆらくをふきしかば天人是をちやうもんし五すいのくをのがれてばさつと成てまひあそぶ其後に中將院の津に

住居するちうじやう年を老て後みた次郎がおほぢのみだ太郎がこんをもつわれ／＼までは三代也ふく事はなけれ共此ふえを持ぬればさいなん更に來らす佛神のかごにあづかるてうほうして候をいかなる人が申けんかみさままても聞召めしをかせ給へばちからにをよび候はす若君とこそ申けれ牛若聞召おもしろしみた次郎いはひに三度かたれとてをし返しかたらせ猶もあかずやおぼしけむ草子にとゝめ給ひて笛のまきと申て鞍馬でらにありとかや其後にみた次郎なんりやう五つ給はり家路へとてぞかへりける

鞍馬出

さても六はらの御所には牛若殿の惡行の身にあまるときこしめし御一門さしあつまり御評定はとりぐなりかの人おひたつものならば當家のゆき大事たるべしうつてすつるか忍びてながすかんどひやうちやうある母の常葉はきこしめしあるにあられぬ御身にて玄のびてふみをあそばし牛若殿につけたまふ牛若文を御覽じてかやうに母の御手より文をたまはりいづくの國たれやの人をたのみて下るべしともおぼえずや所詮牛若御本尊より外たのみ申方もなしとかうたうにお參りあり夜と共きせいを申されたりそもそも比沙門と申は四天の中の第一に八天たうの尊者たり佛法ごちの其爲に弓箭を守りたまふなり牛若がいちごの本望は身の爲おこすむほんならず父母教養の其ために平家を討とおもひたち兵法稽古の

嗜なり多門のしつしゆの福をば父母教養せんものにあたへんとちかひなりほんせい今にたがはすばうしわかにこそたぶべけれとふかくきせいを申しうちまどうみたる御夢に玄ろきうさぎとねずみとが袂にいると御覽じてうちおどろきおぼしめすうさぎは東のものねずみは北のいきものなり東北のすみをばうしとらとこそ名付たれいしやなそんと申はこのはうにおはしますかるがゆへに名付つゝ多門てんと申なり比沙門のすみかをばべいしらまなやじやうとて米の降みやこなりいかさまにも牛若はうしとらの方に立越て代に出よとのぢげんかやあら不思議やな北と東のあひにはたれやの人をたのみて下るべしともおぼえずとまだいとけなき御心につくぐと案じたまひけり既に天はれまた早朝の事なるに道者四五人につだうす尊者とおぼしき男のうとくの人とおぼしくてみはちに金をまき入珠數さらくとおしもんで千五百里の道のあひだをあんのんに守りたまへやとふか

くきせひを申さるゝ其後かうしのうちよりも五十ばかりなる僧出て御道者はいづくの人ぞ態とのまいりか便宜さふかいやこれは便宜ながらわざと參りて候そばなる法師これをきゝ御邊はいまだ亥らぬかあれこそ都にかくれもなき三條の金商人殿吉次殿よといひければあふさる事ありめづらしやおくよりもいつの比の御登りぞ去年の冬まかりのぼりて候が餘寒漸うちとけば此間に罷下り候べしさもあれ音に承る秀平殿と申はいかほどの分限の人ぞひでひらどのと申は五十四郡のそうすいふくし白河の關よりも東は残る所もましまさずざいぢやう國民あひ亥たがひ勢を持事はその數を玄らず日本半國より猶おほき分限とこそうけたまはれさて其人は奥州の住人かいや都の人と承るが一年源氏のお大將八まんとのと申せしがおくへくだらせたまひさだたうむねたうやすたうをたいらげ御上洛の御時奥州の守護代をかのもとひらにくだしたまふ五十四郡の國人は皆もとひらに思

ひつくこはきを和げよはきをなで民をあはれみまつりごと古法にまかせてとりおこなふ國のなびき亥たがふ事は草木の風になびくがごとなりかくてをくを納めつゝ秀平殿の代々は吹風も聲をとめたつ波もきしをあらはずよき大將とうけたまはる秀平殿と申はぞくしやうよき人にて國をもよく納め給ふ七珍萬寶あきみちてたゞ長者のくらゐと申なり牛若殿はきこしめし是は多門のたくせんや秀平は先祖の家人たのみくだる物ならばなさけなくはよもあらじ吉次をたのみ道づれしてくだらばやとおぼしめし吉次とふかくけいやくをめされ東光坊にお歸りあり常のところに御いりあつてたびの出たちを亥たまふになみだもさらにせきあへすいつも御身をはなたれぬこがねづくりの御帶刀こんねんとうのこしのものこれぞ亥のびてもたれたるめしつかはれしわらはのあひすりのひたゝれに御身のめされたるせいがうの大くちをぬぎかえさせたまひ御ぐしからはにたかくあげ七さ

いの御としよりすみなれさせたまひたる東光ぼうを
たゞ一人さ夜にまざれていでたまふさすがにみてら
のおんなごりかたえのちごたちこじどうじゆくのな
こりどもあひねんふかき人おほしみらいをかけてち
ぎりしものいまも玄らせであるならば前後をしゆご
しゆくべけれども人めを玄のぶたびなればたゞ一人
ぞおいであるこゝろざしこそあはれなれ

師匠になごりのをしければかたみのためとおぼしめ
し一首のうたをぞのこされたる

おもひきや身をおく山にすまゐして

このみひとつになりゆかんとは

かやうに詠じたまひ庭の名木めいせきどもをいつの
よにかはたちかへりまた見んすらんあぢきなやたう
りものいはねばわがいでぬるをよもつけじ梅けいせ
つをふくめどもなどあかつきを玄らせぬぞさて本坊
を立出て地主ごんげんふしおがみあかるの水もさえ
くもりかけさへやどす月もなし七つに曲るくらまざ

か夜ふけてものうき道の邊をきぶねの神のやしろこ
そげにたのもしくきこえけれなごりぞをしきいち原
のたちといまりてみぞろいけちはやふるらんかみが
のみちをたゞのもりすぎて夜はほのくと玄ら
川や吉次にいまもあわだぐちはやまつざかにうしわ
かどのほどなくつかせたまひけりまつきちじはみえ
ずしてみののくにのぢうにんせきはらのよいちわう
ばんをうけとつて夜を日につゐでのぱりしがその夜
は大津にとまりまつざかのあたりにてうしわかどの
にまいりあふ牛若殿は御覽じてげんじのものゑのか
どいでに平家のらうどうにあふところはむねんなり
いかさまきやつに見合みやこにひろうせさせてはあ
しかりなんとおもひあふきをかざしあみがさをかた
むけさらぬ體にておとをりある興市が馬と申はあけ
六さいの野とりのこまものをみてはきれやすしよひ
にふつたるあまみづのみちにたまりてありけるをそ
ぞろにけあげけるほどにうしわかどのゝひたゝれは

たゞ亥ばかりにぬれにけるうしわかどのは御覽じてこまのあしたちしどなりあしくもゆきあひけるやとてそなともみすにげたまふよいちらくにはこつてにぐるこゝろのいたぬけさに手綱もとらでかけたり牛若どのは御覽じてなふ亥かるべく御馬を亥づかにうたせたまへや我等がやうなるわらんべこそあげの水はいとはすともみやこがたの弓とりのとがむるかたも候べし手綱にあまらばその馬をしておとをり候へあたら馬をしてうよりをりてひげとの御ぢやうなり興市むねんのこと葉をきゝこほどのものにあてられて返事をせぬものならば京いなかのものわらひとなるべしまたさらぬていにてとをりたらばさしてなんにもなるまじきをあれほどのわらんべあつれは路次のらうせきあてねばときのちじよく太刀のむねにてうちふせておひうしなへと下知をするうけたまはり候とてわかたう三人ちうげん六人上
下九人のものどもが太刀長刀のさやはづし聲ばかり

にておどさんとておのれは／＼とぞおどしけるうしわかどのは御覽じておのれがありさまはいなりまつりかぎをんの會か加茂のまつりのものまねか其足に風をひかせんとやあおそしうもないぞとてからからとぞわらひける興市このよしきくよりもにくいやつがこと葉かな具足よごしに切ばしするな太刀のむねにてうちふせておいうしなへと下知をする承候とて眞中に取こむる牛若殿は御覽じて僧正がかけにてならはせ給し天狗の法出やう所と思食御帶刀すりとぬいてみけんにさしかざし大勢の中へわつて入むかふものを拜みぎりめてへまはるは車切り手にうけて左太刀よせてかへすはさゝ波ぎりこすへをもむは嵐ぎり天狗だをしのわらひぎりこゝはと思ふひじの手をば残さずこそはつかはれるべ若殿の御はかせひらめくとみえしかば手のうらいまだかへさぬまに六人死て三人は痛手負てぞひれふしける興市このよし見るよりもあれほどのわらんべたとへば十四か十五

かにいかほどかあまらじ手なみ見せんといふまゝに
こまかけよせてちやうとうつ牛若殿は御覽じてきや
つは日本一ばんのおこのものにてありけるや直にま
つてすてゝはおもひ出のあらばこそなぶり切にきや
つをしてあそばしゃと思しめしうけだちにうちてぞ
まはりけるよいちこのよしめるよりもされこそ此

わつぱは北て行かいづくまでにがさんとなげかけな
げかけ切たりけりうしわか殿は御覽じて いつまで
きやつをなぶるべきとおぼしめし弓手にきれてかい
ちがひ興市が馬のさんづをひらきうちにちやうどう
つ馬はうたれてはねければくらだまにとられてまつ
さかさま」とうどおつるおきん／＼とするところを
はしりかゝつてむねうちにちやう／＼とこそうつた
りけるすこしもくぼき所にて雨水にぬれにけり牛若
殿は御覽じてあふもつ體もさふらはず兒と女には御
めさふかや馬よりをるゝいんぎんさよ御供の者はい
づくにあるぞやああの馬引て興市殿をのせ申せそれ

ゑぼしおり

そもそもあんげんぐわんねん三月中じゆんにみなも
とのうしわか殿くらまのてらを御いでありけふよろ
こびにあふみなるのだのしゆくにてきち次のぶたか
にゆきあはせたまふその日のとまりはかゝみのしゆ
くきち次がやどはきくやときこふるかゝみのしゆく
のゆうくんざつしやうかまへ吉次殿をもてなすさる
あひだきち次世にありがほなるふせいにてじゆんの
さかづきくだしきやくのさかづきとばせければそ
のちはさか盛は成あらいたはしやうしわか殿は人め
をつゝませたまふあひだきりどのわきにすご／＼と
たゞ一人たゞすみ給ふかゝりけるところにへいけの
さぶらひ大しやうけんもつ太郎よりかたあく七びや
うゑかげきよひだの三郎ざゑもんはやむまにのつて
ばんばのしゆくよりもふれてとをりけるは此ろじを

十六七のせう人のとをらせたまふ事のあらばみやこ
へ御とも申のぼりたらんともがらに上下をゑらます
くんこうあるべしとふれてその日にみやこへとをり
けり
うしわか殿はきこしめしそのぎにてあるならばなに
しにくらまをばいでけるぞやそれはつしやうのおほ
ぢひろしといへどとしにもたらぬうし若がみのをき
どころのなきこそなによりもつてくちをしけれさり
ながらたゞいまはちごとこそふれて候へおとことふ
れてあらばこそしよせんおとこになりてくだらばや
とおぼしめし下ちよをちかづけこのへんにゑぼしお
りばしさうか下ちようけたまはつて今日みやこより
くだらせたまふ人のこれにてゑぼしを御たづねさふ
らふか去ながらゑぼしの御しよもうにて候はゝあの
むかひに見えたるたかもがりのうちこそ五郎太夫と
申てゑぼしの上手にてさぶらへうし若なゝめにおぼ
しめしもがりのうちへたづねりあんない申さうう

ちよりたそとこたふるいやくるしいうも候はずきちじ
のぶたかのともしてくだるくわじやにて候がゑばし
のしよまうにてこれまでまいりて候そのときゑばし
おりの大夫うしわかどのをしやうじ申くわじや殿の
めされうするゑばしは大きびざうかこさびざうかゑ
んせいやうたうせいやういかやうなるをめされうぞ
御このみ候へやがておつてまいらせう牛若どのはき
こしめしあらくちおしやゑばしはたゞくろければく
ろひとばかりこゝろへたるにあまたなのありけるこ
とよなにとがなおらせうなしよせんおもひいだした
りわれらがせんぞはひだりおりをめさるゝよしをう
けたまはつて候へば人かずならぬうしわかもひだり
へ折せきばやとおばしめしなふ太夫ど此くわじや
がきうするゑばしはそれなる大きびにつぶのちつと
あらゝかなるを一くせ三くせませひながたにあひを
あらせくしがたをいがぐと一ためためてひだりへ
おつてたび候へそのときゑばしおりの太夫ことのほ

かにはらをたてさればあのやうなる下らうにものを
このますればわがみのくわかいのほどをもたらすこ
ともかたじけなやひだりおりをめされうする人は一
とせをはりのくにのまのうつみにてうせ給ひしさま
のかみよしともその御こにて御ざ有ちやくしあくげ
んだよしひら二なんともながさんなんよりとも四郎
はあのゝ御ざうし五郎はとをたうみのかばの御ざう
しのりより六はだいごのてらのきやうの公七はおん
じやうのあくせんじのきみ八なんにあたらせたまふ
たうじくらまでらに御ざあるうしわかどのこそめさ
れうするにわどのばらがやうにきち次がともをする
くわじやがひだりおりをきうする事おもひもよらぬ
しよもうかな牛わかおかしくおばしめしおほせはさ
にて候へどおくへまかりくだらふすせきゝとまり
とまりにてひだりおりをきたるよとひとのとがめの
あらんときみやこのやどにふるきゑばしのありつる
をしよまうしてきてさうがひだりおりもみぎおりも

このくわじやは志らぬなりかゝるむづかしきゑぼし
をせきやにあげ申といふてうちすてゝとをるなら
ば御みのなんもあるまじきわつぱがとがものがるべ
し太ゆふきいてあらおもしろのことばづかひやいか
さまこれはやうある人とおもひ一たんは申までとい
ふてやがておりすましてまいらする

牛若鳥帽子とりまはし御らんじて能鳥帽子にて候か
一のなんが候太夫きいて地になんがさうかさびにく
せが候かひながたくしがたこゆびどころ何くになん
が候ぞうしわか殿はきこしめしいづくになんも候は
ずゑぼしはわがしよもうのごとくおらせまいらせて
候太夫きいてあらことぐしのくわじや殿が申事や
あの吉次は一ねんに一ど二ねんに二たびおりのぼり
するそのともしてくだるくわじやどのなれば心やす
くおもはれよくわじやどのがおくはなむけにとらせ
ぞうしわか殿はきこしめし世にありがほなる太夫が

とらせことばかなうしわかよにいづる物ならばいゑ
のきすともなるべきことばなればたちをとらせてゆ
かふするがそれは千五百里のみちのようじんもかく
るかたなをとらせてゆかばやとおぼしめし源じ御ち
うだいのこんねんとうのこしのもの取出させたまひ
てなふ太夫殿このかたなをゑぼしかはりとばしお
ぼしめされ候なみやう年になつのころおくよりもよ
きむまをようい申さういとま申て太夫とてうしわか
やどにかへらせたまふそのゝちゑぼしおりの太夫女
ばうをよびいだしされば此とし月かゝるげざいをつ
かまつりゑんみやうをたすかるをぶつ神三ばうもふ
びんとおぼしめさるゝによつてこのかたなをたまは
る見たまへこれはみなこがねぞみやこのまちにてこ
きやくし一ごのうちをらく／＼とすぎます事のう
れしさはさていかにによばうきてなにとものを
ばいはずして太夫がもちたるかたなを一め見やがて
さめ／＼となく太夫これを見てふしげのによばうの

ふせいかなおのこがたからまうけてよろこばゝとも
によろこばすしてわごせはなにをなげくぞによれば
うきいていまはなにをかつゝみさふらふべきさては
さきほどにゑぼしめられたまひたるくわじやどのは
みづからがためには三だいさうおんのしうぎみて
御ざさふらひけりそれをいかにと申に御みのもたせ
たまひたるかたなはげんじ御ちうだいこんねんどう
と申かたなみづからをいかなるものとおぼしめすぞ
これは一とせおはりのくにのまのうつみてうせ給
しよしとものみうちかまだがためにはいもうとなり
君にはなれまいらせみのをきどころのなきまゝに御
みにちぎりをこめことしは九ねんになりさふらふ九
ねんのなさけにそのかたなをみづからにたべかしな
ふわがきみのあうしうへとはる／＼御くだりましま
すにおくはなむけにまいらせん

太ゆふきいてなか／＼の事ふうふかいらうたんせつ
のわりなきいもせの中なればなにをかさしておしむ
べきとによればうにとらするによればうなゝめによ
ろこふでへいじ一ぐてうはながたにくちつゝみこゆ
ひとりそへきち次がやどへたづねいりあんない申さ
ううちよりたそとこたふるいやくるしうもさふらは
すさきほどにゑぼしめられたまひたるくわじやどのは
に物申さんとうちに入うしわかごにあひたてまつり
なふいかにわが君みづからをばいとなるものとおぼ
しめすぞこれは一とせこきみの御とも申のまのうつ
みにてうせたりしかまだがためにはいもうとなりな
んしのみにてもさふらはゞ御さいごの御とも申べき
がたとへおんなのみにてさふらともいかならんふち
せにもみをゑづめんこそじゆんしにてはさふらへど
もすてがたきはいのちめんぼくなくはさふらへども
ゑぼしおりとちぎりをこめことしは九年になりさふ
らふ九ねんのなさけに此かたなを太夫にしようもう
しわがきみのあう州へとはる／＼御くだりまします
をめをがみ申さんためにこれまでまいりてさふら

ふぞやそれゑぼしをきるにはこゆひをゆふてきる事
ざふらふそのゑぼしたまはれこゆひをゆふてまいら
せんとはしげたやうにくも井にざつとゆいあげこの
ゑぼしをめされておくへくだらせたまひさとうひで
ひらを御たのみあつてすまんぎをいんぞつしへいけ
の人々を御こゝろのまゝにほろばしいま一度御よに
たゝせたまへいとま申てわがきみとてにようばうや
どにぞかへりけるうしわかどのはきこしめしげんじ
のものゑのかどいでせんぞのらうどうにあふたる
事のめでたさよそれゑぼしをきるには二人のおやを
とるならひのあると申がうしわかはたれをゑぼしお
やにとらうぞしよせんおもひいだしたりわれらがせ
んぞ八まん太郎よしいゑは七さいにてやはたへ御ま
いりあつてあれにてげんぶくめされ八まん太郎よし
いゑとなのらせたまふ二なんにあたり給ふはかもに
てげんぶくめされかも次郎とのらせたまふ三なん
にあたりたまふは大つのゑんらへ御まいり有てゑん

ら三郎殿となのらせたまふと承るそのごとくうしわ
かもかたおやをばうぢがみ八まんをとり申さうすか
たおやをば此とし月すみみなれしくらまの大ひたもん
をとり申さうすたちはたもんのつるぎかたなは八ま
んと心ざしないのはしらにたてをかせたまひ九つの
もとゆひみづからめされ御ぐし御はやしあつてゑぼ
しためつけめされへいじのさけをみづからうつした
ちのまへにも三々九どかたなのまへにも三々九どた
むけそのゝちわがみも御めしあつてさもあれこんや
のきやくじんがなをばなにと申けみやうはげん九郎
じつみやうはよしつねと申なりと一人ごとをゑたま
ひておきのいはひをとげさせたまふあらいたはしや
このきみの御よが御よにて御げんぶくましまさばあ
めが下のしよさぶらひまいりはうこう申べきがとき
よにゑたがふならひとてよぶもこたふるもたゞ一人
の御げんぶくめでたきが中にもさきだつ物はなみだ
なり天あければうしわかどのゑぼしためつけめさ

れきち次がまへにかしこまつておはしますきち次
つと見てくわじや殿はゑぼしをめして候かそれゑぼ
しをきるには二人のおやをとるならひのあると申が
くわじや殿はたれゑぼしをおやにめされて候ぞうし
わか殿はきこしめ情しさん候あまり人々のゑぼしめし
つれたるがうらやましさにこゝろならずにきて候へ
どもおほせのごとくいまだなをばつかず候とてもは
や天ともちともちゝはゝともばんじは頼申うへいか
やうにもなをつけてめしつかはれ候へきち次きいて
あふこのうへはちからをよばず今日よりして御みが
なをばきやうとうだとつけうぞやかしこまつて候た
だしといふに御みがやうになまめひたるわかき人を
かちにてろじをつれんすが大事今日よりしてきち次
がたちをかづいておくへくだり候へそれいなとおも
ひなばこれよりみやこへのばられ候へうしわか殿は
きこしめしこれをたとへに申かや世はまつせに及と
いへど日月はいまだちにおちたまはずてんじやうの

からにしきくだつてでいしやにまじはる事なしなに
としてげんじのちやくくがうき世をわたるきち次
がたちをもたうぞあらはかなの心やなきち次がたち
をもたばこそめいどにましますちよしともの御は
かせをもつにこそとおぼしめしひげきりの御はかせ
をわつそくにかけ吉次がたちをかづいておくへくだ
らせたまひけり涙のあめはたまかづらむかしはかけ
て見しものをきち次やうくだるほどにみのゝく
ににきこえたるあふはかのちやうじやのしゆくしよ
につくかの長者が中でのゐには大みやうかうけの人
人だにもとまりたまはぬにきち次がとまるいはれは
よしともの御ために一けん四よんめんにひかりだうをた
てられしときかね五十りやうむま十ひきくわん進に
まいるなさけのふかきものなればとており上りには
といまり候おほはかのゆうくんざつしやうかまへき
ち次殿をもてなすさるあひだきち次世にありがほ
なるふせいにていままいりのきやうとうだはなき

かこなたへまいり上らうたちの御前にて御しやくを申せあらいたはしやうしわか殿いつしやくとりならひたる事御ざなけれどもときよに志たがふならひとてをつとこたへてめさるゝにまことにとりならはざる事なれば^{銚子ノ假借}調しのさけをゆんでへきつ／＼とこぼしたまふきち次きつと見て大のなまこにかどをたてふかくのものかな人の御まへの御しやくをばさやうにたまはるものかきつくわいなりまかりたてと志かるあらいたはしやうしわか殿ときならぬかほにもみぢをさつとちらしさん候われさいこくがたにてしよやまでらのしゆとのしゆつしの御とも申しきみつみあかのみづさやうのほうこうをこそ申ならひて候へぶしの御前の御しやくはこれがはじめにて候いかやうにもをしへてめしつかはれ候へきち次きいてやさやうの事もわたくしにてこそ申せこれは人の御ざしきぞたゞまかりたてと志かるあらいたはしやうしわか殿志ほ／＼としてざしきをたゝせたまふ

こゝにはまちどりのつぼねちやうへまいりて申されけるはなふきみきこしめせしうだにもふかぬふゑをいままいりのきやうとうだとやらんがふきげにさふらふよにありがほにふゑをひてさふらふぞやきみのちやうはきこしめしわごせはとうかいだうのなをりを申ものかなげいはぬしをさげずでいのうちのはちす志るを志んりんといひ志らざるをきちくにたとへたりいかに吉次がつれたるきやうとうだと申ともふけばこそふゑをばさすらめてうし一つしよまうせよはまちどりうけたまはつてうしわかどのゝ御そばちかくまいりきみのちやうよりの御しよまうにてさふらふ御みのこしにさゝせたまふそのふゑ一てあそばせうしわかどのはきこしめしなにこのくわじやにふゑふけと候ややまとだけにめをあけたるくさかりて候へどもふく事はなか／＼おもひもよらず候吉次きいてやあなにと申ぞかみさまよりの御しよまうは

なんぢがためにはしやうがいのおもひでにてはあらずやたとひきこりぶゑにてもあれ又くさかりぶゑにても候へかしなどてうし一つふき申さぬぞうしわかおかしくおぼしめしこれは一たんのれいまでさらば一てふいておもいでにきかせばやとおぼしめしはゝのときはの淀のつのみだ次郎がもとよりもかいとらせ給ひたるこうぼう大師のせみをれなればいつくしさともなかくに申ばかりはなかりけり此ふゑをとりいだしかんごじやうさくちうろくげくとて八つのうたぐちにはなのつゆを次めしとうばんしきにねをとつても井にさつとふきあげばん事を次づめてあそばしたりちやう此よしをきこしめしもしろのふゑのねやからはしの中將殿は日ほん一のふゑ吹ふし一けんのそのためにおくへ御くだりましませしが此しゆくに御つきありよとゝも笛をあそばせしおんせいいきざしほどひやうしものあひすむたるところはからはしどのゝ笛にはみぎはまさつておぼえたりこ

れほどのふゑにてさだめてがくはふくらんがく一てあそばせみなもとはきこしめしてもてうしをふくうへふかばやとおぼしめし一こつでうにねをかへしゆつこんらくをあそばしやがてをしかへしくわいばいらくをあそばすちやうこのよしをきこしめしもしろのふゑのねやあらおもしろのがくのなやくわいばいらくといふがくさかづきをめぐらすたのしみげこも上戸もをしなべて酒をのめとの笛のねや次かるべくはあすばかりきちじどのがとゝまれかしきやうとうだにふゑをふかせくわげんしてあそばんきみのちやうはきこしめしらおもしろのふゑさふらふやみづからひとつたまはつてたゞいまのふゑのとのにおもひざし申さうきちじきいていかにきやうだいうちのものちかうまいりてものをきけそれがしがみやこにて申せし事はこれぞとよふゑはふかすとこしにさせまいはまはずともつねにあふぎをもと申せし事はこれなりきやうとだがふゑをふかすばかみさま

の御さかづきをばなにしてたまはらふぞそれ一つ
給てげんせのみやうもんごしやうのうつたへにせよ
あらうらやましのきやうとうだときをうらや
みしはことはりとぞきこえける

そのゝちうしわか殿三とぎこしめすうしわかどのゝ
さかづきをかなたこなたへまはし夜もふけければ
まちどりさかづきをおさめてみなつぼね／＼へぞか
へられけるこゝにはまちどりのつぼねごせたちをち
かづけていかにごせたちきゝたまへいせんにふゑふ
いたるきやうとうだとやらんはみめもいつくしいも
のふゑも上手たゞしと申におかしき事を申つるもの
かなそれふゑのなはかんちくこちくやうちくあをば
二ば天人のひとへがくしこうばう大しのせみをれわ
がてうのふゑはうちやまとしまだけよりたけなど、
こそ申せまだこそきかねくさかりふゑとはあふむか
しの人はこゝろのいたりがなふてふゑにてくさを
かりたればこそ草かりぶゑとは申つらめおかしさよ

などゝ申てとり／＼にこそわらひけれおりふしきみ
のちやうはものごしにてきこしめしわごせたちはそ
のくさかりぶゑのいはれをゑつてわらふかゑらでわ
らふかたとひ百やうをゑつたりともいちやうをゑら
ずばあらそ事なけれと申たとへのあるぞとよいで
いでわごせたちにその草かりぶゑのいはれをかたつ
てきかせんむかしわがてうにようめいてんわうと申
は十六にならせたまふまできさきのみやもましまさ
ずある時くぎやうてんじやう人さしあつまつてあふ
ぎを六十六本おりゑにようばうをかゝせくにぐへ
まはしいかならんするゑづのめしづのこなりとも此
あふぎのゑににたるにようばうやあるいそぎだりり
へまいらせよ一のきさきにいはふべしと日ほんこく
をばふれられける日ほんひろしと申せども此あふぎ
のゑににたるにようばう一人もなくしてあふぎはみ
なみやこへぞのぱりけるかゝりけるところにつくし
ぶんごのくにうちやまと申ところにちやうじや一人

あり四はうに四まんのくらをたてゝすめば四萬のち
やうじやと申せしを人の申やすきまゝにまのどのと
こそ申けれ四十のゐんにいるまで子のなき事をかな
しみうち山のしやうくわんおんにまいり申ごをこそ
志たまひけれあらありがたやきせいのゑるしはやあ
つてほうじゆをたまはるときたの御かた御らんずれ
ばやがて御ちやくたひのみと成七月のわづらひ九月
のくるしみ十月はんと申にさんひほたいらかなり
とりあげ御らんありければ玉をのべたるごとくなる
ひめぎみにておはします御むさうによそへたまよの
ひめとなづけいつきかしづきたてまつるかのひめ十
四のはるの比みやこよりゑあふぎのくだりけるをひ
きあわせて見たまへばものいはゝあふぎのゑがねた
むべうにぞ見ゆるさるあいだだりへそもん申さ
れたり御かどゑいらんまし／＼ていそぎだりへま
いらせよ一のきさきにいはふべしとやがたて勅した
きかつちやうじやうけたまはつてたとへせんじにても候

へたゞ一人のひめなればおもひもよらぬ事なりとせ
んじをそむき申されたりみかどゑいらんまし／＼て
そのぎならばまのどのけしのたねを日のうちに一ま
んごくまいらせよそれがかなはぬものならばひめを
だいりへまいらすべしとかさねでちよくし下るちや
うじやうけたまはつてたとへいかていのものなりと
も日かずをふらばもとむべきがけしのたねを日のう
ちに一まん石なにしてかはもとむべきぞたゞひめ
をだいりへ參らせよちやうじやのにようばうこれを
きゝなふまの殿いとうなさはぎたまひそよ御み十八
みづから十四のあきよりもちやうじやのゐんがうか
うふつて四はうに四まんのくらをたてうちのけんぞ
くなにはにつけてともしき事はなけれどもかゝるも
のはときとしてくさあはせにもあふやとてあのいぬ
ゐにあたつてかやのくらをつくらせとし／＼のけし
のたねをとりあつめてをひたるが一まんごくはそは
ゑらず十萬ごくもあるらんちやうじやなゝめによろ

こふできらばくるまをかざれとてくるまのかすをかざつて日のうちに一まんごくだいりへそなへたてまつるみかどゑいらんましくてしよせんたゞまのどのは三ごく一のちやうじやであり

御かどゑいらんましくて其ぎならばまのどのしよつかうのにしきをもつてりやうかいのまんだらをはたいろに七ながれおりつけてまいらせよそれがかなはぬものならばひめをだいりへまいらすべしとかさねくのちよくしたつちやうじやうけたまはつてこはいかにしょつかうのにしきをもつてりやうかいのまんだらとやらんはほとけたちのじやうどにてはすのいとをもつておらせたまふとうけたまはるそのうへわれらはぼんぶのみとしてなにしてかはもとむべきにようばうたゞ姫をだいりへまいらすべしちやうじやのにようばうこれをきゝたゞ一人のひめなるをだいりへそなへまいらせぎよくろうきんでんのうてなのうちのすまひをせばわがことはおもふとも見

んずる事もかたかるべしゆふさりはなごりおしみのくわんげんとてよとゝものくわんげんなりされどもあかつきはすこしまどろみたまふかゝりけるところにうち山のしやうくわんおん長じやふうふのまくらがみにたちよらせ給ひていかにちやうじやきくか御みがむすめはみづからに申ごよなおしむところもふびんなればもろくのほとけたちをしやうじ申ちやうじやが中のでいにてにしきをおるぞちやうもんせようけたまはりてちやうもんすたなばひこぼしのおるひのをとほていほろゝこゑはさながら御のりなりはたいろに七ながれおりつけてちやうじや殿の申のでゐにをさ給ふちやうじやなゝめによろこふでいそきだいりへまいらせけり御かどゑいらんましくてしよせんたゞまのどのはほとけにてましますやほとけのむすめをこひかねて十せんのくらゐをすべる共なにかはくるしかるべきくらゐを御すべりましまして十六のはるのころたどろくとくだらせたまひ

けるほどに十八日と申にはぶんごのくに、きこえた
るはやうちやまにつきたまふさるあひだみかどはと
あるせうけにたちよらせたまひ一夜のやどをかりた
まふやどのていしゆみかどを見まいらせあらいつく
しのせう人や御みはいづくの人ぞさん候これはなら
はぬたびをうきくものとまり定めぬしゆぎやうじや
にて候あらやうくしやたゞくをおほせ候へみや
このものにて候花のみやこの人はかゝるをんごくへ
は何のための御くだりぞさん候ほうこうののぞみに
て候そのとき太夫よこでをちやうどあはせしようの
しゆチ脱スルカ
くわじや殿がほうこうごのみや此太夫こそちやうじ
やどのゝじつしなれこのとしになるまでこをもたす
けふよりして太夫がこになり候へでんぢをかうさく
せんずるとも又かいせんをせんずるともそれは御み
がまゝざうよみかどゑいらんましくて御らんせら
れ候ごとくやうりうの風にふけたるごとくにて田ぢ
をかうさくせんこともまたかいせんとやらんもなか

なかおもひもよらず候たゞほうこうならばのぞみに
て候太夫きいて此うへはちから及ばずさらばちやう
じやに申さんとちやうじやどのに參り此よしかくと
申あぐるちやうじやきこしめされていそひでつれ
てまいれうけたまはると申てみかどをぐそくしたて
まつるちやうじや御らんあつてあらいつくしのしよ
くわんや御みはいづくの人ぞみやこのものにて候な
をば何といふぞさんろと申候さんろとは山のみち人
のなにははじめて聞たあらおもしろいなやいかにさ
んろどの此ちやうじやはうしを千びきかひ候が九百
九十九ひきにはとねりがそふてかひ候があれなるあ
めなるうしをばとねりどもがはつたとにくんでくさ
をもみづをもかはぬなりけふよりしてさんろどのに
たてまつるくさをもみづをもよきにかうてたび候へ
あらいたはしやみかどはこひゆへりやうじやうした
まひてあくればうしのくちをひき千人のとねりとう
ちつれうしろの野べへいでさせ給ふ千人のとねりど

もはかりならひたる事なれば手でにかまをひつさげ
かきよせかきよせくさをかるいたはしや御かどはい
つかりなはせたまはねばうしにうちかゝりふゑう
ちふいてましますむまはばとうくわんおんうしは大
にちによらいのけしんとうけたまはるがげにやさあ
りけるかにんげんは見しり申さねどくしやうなれ
どもいろふせいを見しりたるかとおぼしくてくさを
もはまずつのをかたぶけ玄たをたれみかどのふゑを
ちやうもんす千人のとねりどもこのよしをきくより
もさんろどのがふくものゝなをばなにといふやらん
よこぶゑと申さうおもしろひぞやさんろどの草ばし
かるなふゑをふけなんぢがうしにはくさをかりてか
けふぞよふけよ／＼といふほどに一どもくさをかり
たまはずこれをもちてこそよふけてこゝろすめるを
ばさんろのくさかりよるのふゑわかめかるは田ごの
うらわかくさかるほむさし野よわかめわかくさはわ
かのうらようめいてんわうのこひゆへあそばすふゑ

をこそくさかりぶゑと申なりこれはつくしの物がた
りさても都にはみかどをうしなひたてまつりくぎや
う殿じやう人さしあつまつてはかせをめさるゝには
かせまいりてうらなひ申さん候こうする八月十五日
にうさ八まんの御まへにてうはうじやうゑと申事を
とりをこなはせたまへそれはさていかていのものに
さすべきぞつくしぶんごの國うちやまと申ところに
ちやうじや一人ありかのものに御じんじをつとめさ
するものならばみかどはみやこへくわんぎよあつて
天下はめでたかるべきよしをれいもんをひいて申さ
らばつくしへ玄しやをたてよとてちやうじやのもん
にさか木をたつるおりふしちやじやいであひたまひ
てこれはなにと申玄だいぞやさん候こうする八月十
五日にうさ八まんの御まへにてうはうじやうゑと申
事をとりをこなはせたまへそれはさていかていのも
のゝ入事にて候ぞさん候しきしやうこくしやうじん
ぐわん宮人八人のやをとめ五人のかぐらおのこまい

りていとうのつゝみをうちさつ／＼のすゞをふりあげけばあげむまみこのむらしゝでんがくとをつてのちやぶさめ候よ／＼やうじやきこしめされてあらむづかしげなる事やとてきんごくりんごうをたづぬるにのこりはことぐ／＼そろひけれどもこのやぶさめとやらんにはたとことをかくそのとき千人のとねり共をあつめてもしなんぢらが中にやぶさめばしゑつてあるかとねりどもうけたまはつてかみにだにゑろしめされずそのうへわれらはあけくれうしにこそりならひて候へやぶさめとやらんはなか／＼おもひよらず候ちやうじやきこしめされてげに／＼それはさぞ有らんあの山路はみやこのものときくもしやぶさめを忘つて御神事をつとめさするものならばたとひいかていのものなりともちやうじやがむこにとらふぞそのときみかどにつこと御わらひ有てやぶさめとやらんはなによりもやすさふなる事にて候御かどには十町にば／＼をやつて二町をばのけばゝとなづけ

八ところにまとをたてゝあそばすをば八つまとゝなづけてこれはくぎやうでんじやう人のわざかみのまへには三ぢやうにば／＼をやつて三ところにまとをたてゝあそばすをばやぶさめと申てこれはぶしのゑわざにてなによりもやすさふなる事にて候ちやうじやきこしめされてさてはなんぢはよく心得つるものかな此やぶさめをゑつて御じん事をつとめさする物ならばうさ八まんも御ぢけんあれせひちやうじやがむこにとつて四はうに四まんのくらをたてすたのたからをそへてゑさせうずとかたくけいやくゑたまひけりさるあひだ八月十五日にもなりしかばうさ八まんの御まへにてきんごくりんごうの大みやうせうみやうさじきをうちらちをゆひをの／＼けんぶつゑたまふちやうじやふうふもおなじくさじきをうつてけんぶつするあひだゑきしやうこくしやうじんぐわん宮人八人のやをとめ五人のかぐらおのこまいりていとうのつゝみを打さつ／＼のすゞをふりあげけば

あげむまみこのむらしゝでんがくとをつてのちやぶ
さめになるさるあひだみかどにはいろよきしやうぞ
くたてまつりかげなるむまにかひくらをひてひつた
て御かどにたてまつるみかどなゝめにおぼしめしひ
きよせゆらりとめさればやわたしとつて返し一のま
とちやうどあそばす二のまとはたとあたつて三のま
とに此たびひらいてかゝらせたまひけるにゑんでん
にはかにゑんどうしてゑろきすいかんたてゑぼしき
んのしやくを御もちありかたじけなくも八まんはゆ
るぎいでさせたまひてゑらすにかしこまりいかなる
御事候ぞわうは十せんかみは九せん九せんのかみの
じんじを十膳の御みとしてつとめさせたまへばいよ
いよ五すいをもうなり候いまはみかどへくわんぎよ
あれくわんぎよならぬものならばまつせのしゆじや
うをばつせうするで候ぞ人おほきそのなかにちやう
じやふうふはさじきよりこぼれおちさせたまひてい
かなる御事ぞ十せんの御みを三とせがあひだつかひ

申事どもくちおしさよと申てりうていこがれたりけ
ればみかどゑいらんましゝてよしよくるしかる
まじ御みがむすめをこふるゆへにみとせはほうこう
ありつるぞいまはひめを參らせよ受たまはると申て
かたじけなくもうさ八まんのかいしやくにんにてた
まよのひめは十六ようめい天わう十八と中に御かど
にくはん御なり玉ろうきんでんのうてなのうちのす
まゐしゑんあうひよくのかたらひあさからずこそき
こえけれそのゝち御こをまうけさせたまひてしやう
とくたいしと申てわがてうにぶつぼうをひろめさせ
たまふなりたまよのひめはしやうくわんおんようめ
い天わうあみだ如來のけしんしやうとく太しくせく
わんおんのけげんなりようめいてんわうこひゆへあ
そばすふゑをこそくさかりぶゑと申なれゑらぬ事を
ばわごせたちわらはぬ事であるぞとよそのゝちきみ
のちやうはまちどりをめされい前にふゑ吹たるきや
うとうだとやらんはおもへば見るところのあるにこ

なたへつれてまいれうけたまはると申てうしわか殿
をぐそくし申さるあひだうしわかどのざしきになを
らせたまふちやう此よしを御らんじてあらふしげの
くわじやどのやざしきになをるふせいはよしともに
たがはず御めのうちはひとへにあくげん太にて御ざ
さふらふものたまふこはいろはともながにたがは
すもしもげんじのゆかりかゝりにてましまきばはや
はや御なりさふらへやうしわか殿はきこしめしこ
れは上らうのこにても候はずみやは三二でうよねま
ちにすまゐするげらうのこにて候ものをちやうこの
よしをきこしめしなふ御みはなにをの給ふぞみづか
らはよしとものさいぢなりまんじゆのひめと申て
わすれがたみの御ざさふらふをいらたかじのふもと
にしゆつけになしをき申なりさて此あなたに一けん
四めんにひかりだうをたてらみだの三ぞんを安じ申
よしともあくげんだともながふし三人の御ゑいをあ
らはし申なりもしもげんじのゆかりかゝりにてまし

まさばせうかうなんどあれかしなふあらこゝろぶか
のくわじやどのやみなもときこしめしのきのたまみ
づちりくぐさつゝめどもつゝまれずさてかくせど
もかくされず父よといへることをきゝやまぶきがほ
にうちにほひいまはなにをかつゝむべきよしともに
は八なんときはばらには三なんくらまのてらにすま
るせしゅうしわかと申ものなりちやう此よしをきこし
めしさてはくらまにおはせしゅうしわかごにて御ざあ
りけりわかぎみを見申せばおしてひさしくなりたま
ふよしともの御すがたを見まいらするこゝちのあり
てなつかしさよとのたまへばみなもとも二歳のとし
はなれ申せしちゝごをばゆめともさらにもわきまへす
たゞいまかやうにおほせらるればめいどにまします
ちゝ御前をおがみ申こゝちのありてなつかしさよと
の給ひて御たもとにすがりつきふしおづみてぞなき
たまふたがひにつきぬそのなみだよそのたもともぬ
れぬべしきみのちやうはまちどりをめされあれ／＼

ぐそくし申御ゑいおがませ申せうけたまると申て
うしわか殿をぐそくし申さるあひだうしわか殿たち
いり御らん有ければげにもよしともあくげんだとも
ながふし三人の御ゑいをあらはし申うしわかなめ
におぼしめしせうかう禮をまいらせならはぬたびの
つかれらいばんひきよせまくらとさだめすこしまど
ろみたまひけりかゝりけるところによしとも悪げん
だともながふし三人まつくるによろひうしわか殿の
まくらがみにたちよらせたまひてうれしくもおさな
きちないきち六とて兄だい三人がいふ事をわれく
ふし三人がいふ事とおもひにしをひがしきたをみな
みともそむくべからずきち次がたちをかづいておく
へくだり候へいとま申てさらばとてたちかへらんと
志たまひしがそよまことわすれたり日ほんごくのぬ
す人がきち次がかはごにめをかけあをのがはらによ
りきしゆふさり夜うちによせうぞようじんよきにつ

かまつれわれくぶし三人のものくさのかげにてく
ろがねのたてとなるべきぞかくてもあらまほしけれ
どもしゆらはじまるにいとま申てうしわかとてたち
かへらんと志たまひしときみなもとゆめごゝろにあ
らおさなけなの御事やいま志ばらくとおほせあつて
よろひのそでにすがるかとおぼしめしりやうがんさ
めて御らんすれば御ゑいのそでにとりつき申すさて
はゆめにてありけるやあへなのいまのたいめんやと
てりうていこがれたまひけりたしかにうしわか殿御
むさうありけるものをとおぼしめしもとのざしきに
御かへりありもゑぎにはひのはらまきをくさずりな
がにざつくとめしこんねんどうのこしのものを一も
んじに御さしりかうがひぬきいで枕とさだめひげ
きりの御はかせをはらのうへにとうどをきゆんでの
あしをさしのべめての足をきつとたてゆんでの御め
のまどろむまにめてのまなこがてんじやうをはつた
とにらんでとのゐしてこそふされけれ

きてもあをのがはらによりきするぬす人はたれ／＼ぞまづゑちごとゑなのゝさかひなる熊さかのちやうはんおやこ六人ざすせんくわうじなん大もんのゐばかりひのうまのせうごちやうの興次さいくちの七郎はつたのぎやうぶかひつかみのわし次郎まどをのぞくはそらめくらよひにぬつたるなまあせをあかつときはしるけら次郎でんがくがくばにはともをまよはすきね三郎おなじくいたち次郎ふじにばんどうじばんどうないづのおやまのやげじたの小六此人々をさきとして大しやうは七十よ人そのほかつがうこぬす八三百人にはすぎざりけりあをのがはらにうちよつて大まく三ゑにうたせ大つゝたいへいかきすへわれらがさけをのまばこそ吉次がかはごをのむなるにのめやうたへやもつともとてまふつうたふつさかもりをする

さだむるゑさいによつてさけをまいるぞいで／＼ちやうはんがぬすみゑはじめしゆらいをかたつてきかせ申さんまづそれがしがおやにて候ものはゑちごとゑなのゝさかひなるくまさかといふところたゞほとけのやうなるまたうどなりそれがしはいかなるぶつしんの御はからひにや七歳のとしをかのがうといふところにておぢのむまをぬすみ取てならひいひだのいちにてうりたるにちつともゑさいが候はずそれよりもぬすみはもとでも入ずよきあきないとおもひさだめ日ほん六十六かこくをはしりまはつてぬすみをするに一どもふかくをかゝずかくてちやうはんはこれを五人もつて候が太郎はひるがんだうがじやうす次郎はゑのびがじやうす三郎はようちがじやうす四郎はむまをよくぬすみ候五郎は人をかどひとつてあのさどがゑまにてうつたるにちつともゑさいが候はずきやつばらは一ごすぎうするのふをみなもつて候かくてちやうはんこんやむねこそさはげあつぱれ三百

七十よ人が中にはいかくまはつたる人や有らんに吉
次がやどへたちこゑでけごをそつと見てやがて御も
どり候へ人おほきその中にいづのおやまのやけじた
の小六なにがしみて參らんといふまゝにかきのすゞ
かけしかまのときんまゆはづかにひつこふてあふは
かのきみのちやうのもんぐわいにたちよつて大音あ
げてよばはるくまのさんのやまぶしぶつぼうしゆぎ
やうのそのためにおくまつしまへとをるなり山ぶし
は十人にあまつて候こんや一夜のほいたうたべやつ
とよばはつてうちのけごを志づかにみてとをるや
あつてうちよりもよねのたはらをなげいだす小六き
つきと見てものゑのかどいになわかかつたるもの
とおもひこしのかたなをひんぬいてかけなわはらり
ちやうはんこれを見てさていかにやげじた殿小六う
けたまはつてゑものはいくらも候八十四のかはごを

きりどのわきにつんだるは只たから山のごとし四
十二ひきのざうだ三疋ののりむまいづれもみなよき
むまにて候四十よ人のひやうじのものゆみやなぐひ
大だちをつとりそへようじんするていには見え候へ
どもれいのどうづきをあつるならばきやつぱらはみ
なゑんのゑたへかくれうすむまもかはごもやすく
ととらうするがこゝに大事のことが候ちやうはんき
いていまにはじめぬやげじた殿の大事とはなにごと
ぞ小六うけたまはつてかたらばきこしめせいにしへ
はつれてもくだらぬ十六七のしよくわんが候が此わ
つばがいしやうのていそつとみたるところはいろゑ
ろくじんじやうなるがはだにはどんきんをきて候き
たるひたゝれはからぎぬをもつて地をば山ばといろ
に一はけざつとはひて十八五しきのいとをもつても
のゝじやうすがぬい物をあり／＼とぬふて候まづゆ
んでのひほつけにはいがきとりゐしやだんをぬいめ
てのひほつけにはたけくらべにすぎを三ぼんぬふて

げんじのうち神玄らはとが十二のかひごをかひそだ
てはぶしとはぶしをくいちがへばつとたつてはざつ
とおりまひあそびたるいはひのところをあり／＼と
ぬふて候うしろの／＼とちにはきた山殿のさんざう
すみよしのすいびん御むろの御しよのけいきをあ
り／＼とぬふて候さてまたはかまのくだりにしくう
せいぐわんをまなんてたうどのましも千びき日ほん
のましも千びきたおどは大こくなればせいを大きふ
おもてをゑろくぬふて候日本は小こくなればせいを
ちいさうおもてをあかくぬふて候たうど日ほんの玄
ほざかひちくらがおきといふところにてたうどのま
しはにほんへこさんとす日ほんのましはたうどへこ
さんとすこさうこさじのかまのさうのところをばあ
り／＼とぬふて候さて又はかまのけましに岩にま
つるにがめいせきにかゝるかはやなぎおきのなみ
がとうとうつてきつとひいてゆく玄ほざかひをぬふ
て候きたるはらまきはければもゑぎおどしなりよのつ

ねのはらまきはくさすりを八まいさぐるが此くさす
りは十二まい十二まいのくさすりにゑろがねこがね
をもつてやくしの十二じんをいが／＼とあらはすさ
いたるかたなはみなこがねづくりなりとつつけさや
くちにくりからふどうみやうわうのたきつぼへとん
でおりけんをのうだるところをあり／＼とほつて候
おもてのめぬきはふどうのたいうらのめぬきはくら
まの大ひたもんの御玄んたいをあらはすさげをには
ほけきやうの七のまきやくわうほんを三ながれくん
で候ぞもつたるたちは二しやく六寸か七寸かとおぼ
えたりせつぱもゝよせうんとうかかぶとがねまこと
のめぬきそらめぬきせめしばひきいしづきかはさき
にいたるまで上ほんのこがねをもつてひかめきたつ
て見えて候きたるゑぼしは六はらやうのたうせいむ
きのつぶのちつとあらゝかなるをいくせみくせませ
ひながたにあひをあらせくしがたをいが／＼と一た
めためてひだりへおつたゑぼしなりびんのかみはち

ちむだりまゆのけはかつたりきのふかけふかの山い
で此わづばがありさまをものによく／＼たとふれば
木ならばしたんとりならばほうわうかねならばしや
きんむかしをとるならばげんじのたいしやうたうせ
いやうをとるならばきよもりむねもりの御きんだち
でましますがけいふの中にくまれあづまときいて
吉次をたのみておくへくだるとおぼえたりこのわづ
ばがめのうちを只一め見て候がゆだんする物ならば
三百七十よ人のぬす人のほそくびはたすかりがたく
おぼえたりちやうはん聞てやけじたどのゝものがた
りさらにはきもせんせぬ事にて候さりながらそのわづ

ばがなにともはやらばはやれれいのちやうはんがば
うをもつて只一うちのせうぶ候よ夜はなんどきぞ八
つのころじぶんはよきぞはやうつたてやもつともと
て手でにたいまつをとばしつれあふはかの君のちや
うのもんぐわいにのゝめきたつてをしよするくまさ
かの太郎はどうづきをつとつてどう／＼とあてたみ

なもときこしめしあは夜たうよとおぼしめしわざと
おもての志とみを二三げん取てゑんより下へなげお
ろしよするぬす人をいまやおそしとまらたまふくま
さかの太郎はくろかはのどうまるきかみをばつとみ
だしなぎなたをひきずりたいまつをふりたて人はな
ひぞ只参れまいれや／＼とげちをなすみもと御ら
んじてきやつはくせものかなきらばやとおぼしめし
はしりかゝつていかづちぎりとなづけてちやうとき
つて御らんすればむざんやな太郎はあへなくくびを
うちおとされてくびはうちへころびければどうはそ
とへぞたをれたる

くまさかの四郎がいそぎはしりかゝつていかになふ
ちやうはん太郎殿こそ手おふてましませちやうはん
きいてやあいた手かうすでか四郎うけたまはつてい
た手やらんうす手やらんくびがうせてさうばこそち
やうはんこのよしきくよりもむねんの次第かなその
わづばに手なみ見せんといふまゝに八しやく五寸の

さてもばうをばくきながにをつとりのべみなもとに
わたりあふみなもとは御覽じてちやうはんがばうを
一しやくをひてづんときり二しやくをひてちやう
ときつて手もと計のこされたり三百七十餘人のぬす
人みなもとをまんなかにとりこめてひみづになれと

もふだりけりみなもとは御らんじてたまになれたる
ほうらいのとりのふせいもかくやらんおどろくけし
きもましまさず大せいの中へわつていりにしからひ
がしきたからみなみくもでがくなわ十もんじ八つは
ながたといふものにわたりたてをんまはしてさんざ
んにきつてまはる天はうすまひてちはあけにそめか
れうがみづをゑくもをわけこくうへあがるごとく
なりいまだときももうつかぬまにくつきやうのぬす人
どもを八十三ぎきりふせたりちやはうん此よし見る
よりもせひそれがし手なみみせんといふまゝに六し
やく三寸のさてもなぎなたみづくるまにまはひてみ
なものとわたりあふみなもと御らんじおほくのかた

さるあひだみなもとそうじやうがかけにてならひし
さても天ぐのほうは出あふところとおぼしめしきり
のほうをむすんでかたきのかたへなげかけ小たかの
ほうをむすんでわがみにさつとうちかけちやうとき
つて御らんすればむざんやくまさかまつかう二つに
うちわられあしたのつゆときえにけりそれよりもみ
なもとおくへくだらせ給ひて天下をおさめたまひけ
り。

こしこえ

去程に判官おごる平家を三とせ三月にせめなびけ三種の神器ことゆへなく二たび帝都におさめ申剥平家の大將大臣殿父子いけどつて天下の御めにかけたてまつる彼義經を見きく人あつぱれ弓矢の大將かなと

神にてましますとやはたの御山をふしおがみ五月七日があかつきあは田ぐちをうちすぎておほうちやまと雲井のよそにながめこしほきの清水に着給へばおほいどの思ひつゝけてかくばかり

みやこをはけふをかきりのせきみつに
又あふさかのかけやうつさん

ほめぬ人こそなかりけれ有時よしつねさんだい有て
そうし申されけるやうは彼大臣殿と申は平家によつてもよき大しやうにて候へばみやこにてもうしなはるやうもや候らんか様に申せばおほそれいりたる御事なれども一には御朝敵又はわれらがいへのかたきなれば關東の頼朝にくだしたび候はゞ家の面目たるべきよしをそうし申されたりければみかどえいらんまし／＼て其儀ならば大臣殿ふしとらするぞいそきしゆごして下るべし承ると申て手勢すぐつて三百騎みやこの中のかみ／＼にもさま／＼の御いとまを申

殊更やはたの御神は當家弓矢のしゆごじんめでたき
とくちずさみたまひとしていそがぬみちなれどもこ
まもうちでのしゆくにつく是やてんぢてんわうの大
和の國をかもとの京よりも此ところにうつりみやつ
くり左たまひし其きうせきをふしおがみ勢多のから
はしうちわたりのちしのはらのしゆくすぎてくもり
かゝらぬかゝみやまそのかみならのおきなの
かゝみやまいさたちよりてみてゆかん

年經ぬる身はおひや左ぬると

おひをいとひてよみたりし其いにしへのことの葉ま
でおもひいだされてあはれなりゑち河わたればちど

りなくをのゝほそみちすりぱり山ばんばさめがゐか
しはばらをちこちのたつきもゑらぬ山中におぼつか
なくもよぶことどりふはのせきやのいたびさし月もれ
とてやまばらなるたるゐのしゆくを打すぎてはやく
あつたにつき給ふかの明神と申はかけまくもかたじ
けなや天照大神の其ひとつにておはしますをはり第
三の宮とは申ながらもをよそは日本第三の御かみに
てましますと其時こそおほいどの判官に語り給ひけ
れなにとなるみときくからにいそべのなみにそでぬ
らし參河の國にいりぬればはや八橋にかゝりはしの
ふせいを見給ふにいさごにねふるえんあうは夏をゑ
らでさり水にたてるとじやくは時をむかへてひらけ
けり花はむかしをわすれずしておなしいろにぞさき
にけるはしもむかしの名なれどもいくたびかわたし
かへつらんかげくらからぬ赤坂のしゆくにもつかせ
給ひける是や大江のさだもとが當國のかみたりける

ときにはかのしゆくの遊君にふかきちぎりをこめたり

しがうきよのならひのはかなさは見はてぬゆめと成
たりしあかぬわかれをかなしみてばだいのみちをさ
とりけんゆかりおもへばしゆせうなりするをいづく
と遠江はまなのはしを見わたせば南には海上まんま
んとしてきはもなしきたには又こすい有人家きしに
つらなつて松ふく風なみのをといづれものりのたぐ
ひぞとうちながめ下るほどに大井川にもつき給ふ大
臣殿御らんじて我よが世にて有し時かめ山の御かう
の御ともしもみぢみだれてながれ出し清瀧川や大井
川思ひいだしつゝなつかしやうきしまがはらよりも
ふじの高根を見あぐれは時ゑらぬ雪のいろ雲井にゑ
ろくなびきてふもとに東西へながく見えたるぬ
まの有あしわけ船にさほさしてむれいるかもめのこ
ころのまゝにかなたこなたへとびさるをうらやまし
くやおもはれけん大臣殿ふしともに思ひついけてか
くばかり

玄ほちよりたえすおもひを駿河なる

身はうきしまに名をはふしのね

御子有衛門のかみも

我なれや思ひにもゆるふしのねの

むなしきそらのけふりはかりは

はらにはゑほやのけふりへん／＼とし風にまかせて
ゆくゑもゑらすまよへり伊豆のみしまにつき給ふか
の明神と申はむかしのうゑんがなはしろ水とよみた
りし歌のみちをなふじゆありゑんかんの天より雨く
だりかれたるいな葉もたちまちにみどりの色と成た
りしめでたき神にてましませばたのもしくおもひ申
なり來世にてはかならす九品のれんだいへむかへと
らせ給へやときせいを申させたまひつゝさがみの國
に入ぬればぎけいのためによろこびをきくがはの宿
とうちながめすゑはさかわのしゆくにつく判官むさ
しをめされ案内申さでかまくら入ぶれのいたりとぞ
んするなりひきやくを立鎌倉へあんないを申べし辨
慶承てこの儀尤ゑかるべう候とていせの三郎よしも

りをもつてあんないを申されたりらいてう聞召れて
扱ぎけいがさかわまでくだりけるかやめでたさよこ
のかまくらと申はゑんさうの所にて見參どころ見ぐ
るしへんざむところをつくらせよわかひの津より
もざいもくをあげさせよかぢばんじやうをそろへつ
つ急げいそげとおほせける梶原承てをつとこたへて
御前を立てこゝろのうちに思ふやうあさましや此き
み在鎌倉ましまさばまつりごとゑきでうたゞしきた
みのむねまでもみな此君の御はからひとなるべしさ
あらんときにかぢはらがさかろのいこん殘てわれわ
れ父子ひきいだされてゆいのはまにてきられん事は
うたがひ更にあるまじそのぎにて有ならば先追かへ
し奉りより／＼ざんそを仕りこのきみうしなひまい
らせてうきよのなかをらく／＼とすまばやなんと思
ひければあんじすまして梶原は又君の御まへに參り
けりいかにわがきみきこしめされ候へけうとおんむ
の輩があふさかにかくれて世を亂らんとたくむよ

し風聞候關東には君かくて御座有都にはぎけいのけ
いごとましくてこそ天下はおさまりめでたかるべ
きに一ゑんに關東に御座有ては天下を誰かしゆご申
さん頼朝聞召れて其ぎにてあるならばさねひらをつ
かはし大臣殿ふしをうけ取てぎけいをばみやこへの
ばせよかちはら承て御前をまかり立土肥の次郎さね
ひらをちかづけ御身さかわへうちこえおほいどの父
子うけとつて義經をば都へのばせ申され候へさねひ
ら承てあつばれこれは一大事の御使かなとはぞむす
れともきみの御意とある間よしもりとうちつれさか
わのしゆくに參り此よしかくと申あぐるぎけいきこ
しめされていや／＼是はよりとの御返事ともおぼ
えすれいの梶原がちうにて申とおぼえたり只かまく
らへをし下てかちはら父子がかうべをはね此あひだ
のむねんをなさんせむとこそおほせけれさねひら承
て御ぢやう尤にて候さりながらまづ大臣殿父子をば
かまくらへうつし御中有てしばらくこのところに御

とうりうなされより／＼御そせう候は、實平もかく
て候うへ能やうに申なすべしととかくなだめ奉りお
ほいどの父子うけ取てかまくらへうつし申されたり
其後又いせの三郎よしもりをもつて土肥の次郎して
申されけれども是もかちはらがちうにて心得とく
とく御のぼり候へと申つけて候に長々とうりうめさ
るゝこそこゝろもとなく存ずれ此たびのけしやうに
はいよのくに一ヶ國を申あづけたてまつる別してち
うのあらばをつて九國の御代官を申あづけ奉らんと
の御意にて候とよしもりをかへす吉盛やがてたちか
へりさかわのしゆくに參り此よしかくと申あぐるぎ
けいきこしめされてこはいかにきそよしなかをちう
りくせしよりこのかた平家を三とせ三月にせめなび
け三種の神器ことゆへなく二たび帝都におさめ申刺
平家の大將大臣殿父子いけどつて是までくだりたる
義經にいかにざむしんありとても一度の對面はなど
かはなふて有べきぞ是もおもへばかけときがざんし

むによるなれば頼朝にうらみさらになしまたくふ
ちうなきよしを諸寺諸社の牛王ほうゐんのうらをも
つて申されけれ共是もかぢらがざんそによつてか
なはすぎけいむねんに思召いかに武藏きくかとよ一
通の状を書て參らせ頼朝の御めにかけ返事によつて
とも角もはからふべきにてはんべる也それ／＼むさ
しと仰ければべんけい承てすみすりながし筆にそめ
さうあん迄もなくし只一筆にぞ書たりける

とハミノ誤カ

みなものよしつねおほそれながら申上候との意し

ゆは御代官のひとつにえらばれちよくせんの御つか
ひとしるいだい弓せんの藝をあらはしくわいけいの
ちじよくをきよむちうしやうをこなはるべき處に思
ひのほかに虎口のざんげむによつてばくだいのくん
こうをもだせらる義經本ノマイおかすノ誤歟
もハノ誤カおかしなふしてとがをかうぶ
るこうもつてあやまりなしといへど御かん氣をかう
ぶるあひだむなし こうるいにしづむつら／＼事の
こゝろをあんするにざむしやのじつぶをたゝさずか
まくらへだも入られざればそいをのぶるにあたはず
數日ををくる此ときにあたつておんがんをはいし申
さすむばこつにくどうたいのぎたえすでに宿連きは
まつてむなしきに似たるか將又せんせのなういんを
かんするかかなしきかな此でうこばうふそんれいさ
いたんしたまはずば誰の人が愚意のひたんを申開か
んいづれの人があひれんをたれられむや事あたらし
き申状じゆつくわいに似たりといへどよしつね身體
はつぶを父母にうけはくたいの時節をへすしてこか
うのとの御他界の後みなしごと成はて母のふところ
にいだかれ大和の國宇多のこほりにをもむきしより
このかた一日片時安堵の思ひに住せずかひなきいの
ちを存すといへど京都のけいくわいなんぢの間諸國
をるぎやうし身を在々所々にかくし邊土遠國をすみ
かとし土民百姓等にぶくじせられしかるにかうけい
たちまちにじゆんじゆくして平家の一ぞくついたう
のために上洛せしむる手あはせにきそよしなかちう

りくの後平氏はろばさんためにあるときはがゝとある岩石に駿馬にむちをうつてかたきのためにいのちをうしなはん事をかへりみず又有時はまん／＼とある海中のうへにして風波のなんをしのぎ身を海底にしづめん事をいたまずかばねをげいぐのあぎとにかくしかのみならずかつちうをまくらとしきうせんをげうとする本意併ばうこんのいきどをりをやすめ申年來の宿望をとげむと思ふよりほか他事なし剩はよしつね五位の尉にふにんのでう當家のちうによく何事かこれにしかんしかりといへどいまうれへふかふしてなげきせつなり佛神のたすけにあらずよりほかたじなしこれによつて諸寺しよしやの牛王ほうゐんのうらをもつて野心を更にぞむせぬむねを日本國中の大小の神祇めうだうをおどろかし奉り數通の起請文を書進すといへどなをもつてゆうめんなし此國は神國たりしんは非禮をうけ給ふべからずたのむところたにあらず則貴殿廣大のじひをあふぎびんぎを

うかがひかうぶんにたつしひけいをめぐらされあやまりなきむねをゆうせられはうめんにあづからばしやくせんのよけい家門にをよびながくゑいぐわを子孫につたへんよつて年來のしうびをひらき一期のあんゑいをとくしゆせしめん事をつきす事のこゝろをあんするに爰につの國渡邊にてさかろ立のいこんによつて義經けいしのなかよからずやゝもすればひまをうかがひ折を得てよしつねをうたむとほつす猶もつてかなはざれば教頼範ノ假借の御てに付てさき立て關東に下着し頼朝にちか付たてまつりより／＼ざんそをいたすところそのいはれなきものなりほんぐのつみのうたがひをばかろくする共無實のつみのうたがひをば重くせよ理はばんみんのよろこび非は又諸人のなげきたりけんわうは一しんのために理をまげず先車のくつかへすをみてはこうしやをそれをなせりかみすなほなれば志もやすし水上すまざればかりうによつて月やどらす何ぞかぢはら一人に諸國のしよさ

ぶらひを思かへられむよりいそぎ遠島にはいりうせ
られ諸家のなげきをやめちうきんのいさみをなし給
へ誠惶誠恐謹言元暦二年六月五日進上因幡のかうの
とのへ義經はんと書たりし彼辨慶がひつせいほめぬ
人こそなりかけれ

・ ほりかわ夜うち

さるあひだはうぐわんあけければさんだい申された
り御かどゑいらんまし／＼していくほどなくてしやう
らくはこゝろもとなくおもへどもみかどをしゆごし
申さばあふさかよりにし三十三がこくをたまはると
せんじをまかりかうぶつてほりかわどのにうつらせ
たまふかくてきんごくりんごくの大みやう小みやう
くわんとうよりの御しやうらくとうけたまはりくん
こうけじやうにあづからんとてもんぐわいにこまの
はなゆるすことこそなかりけれされどもくわんとう
より御ゆるされなきあひだをこなひたまふ事もなし
四こくさいこくはみな此きみにおもひつき申いまこ
そかやうに御ざありともつゐには日ほんはんごくの
御大しやうにてましますといつきかしづきたてまつ
るこの事くわんとうにかくれなしかぢはらはやくき

きつけらいてうの御まへにまいりいかにわがきみき
こしめされ候へすでにはや御ざうし御ゆるされなけ
れどもあふ坂よりにし三十三がこくをわがまゝなり
とのたまひて四こくさいこくよりもくわんとうへま
いるつはものをみやこにてをしとじめたまふ此きみ
みやこに御ざあらばつゐには日ほんは此きみの御は
からひとなるべきなりいたはしくはぞんずれども此
きみをうちまいらせ御けうやうねんごろに御とひ
れと申頼朝きこしめされてそのぎならばいそぎうち
てをのぼせよかぢはらうけたまはつてたれをかうつ
てにのぼすべきあふこゝににくきあひてあり御うち
のとさしやうぞんはこゝろもがうにちゑふかしや、
ともすればそれがしにてきをなすあひてなりかれを
うつてにのぼすべしかれをうつてにのぼするならは
あんふかきものにてぎけいもうたれたまふべしたと
ひうたれたまはずととさをばつゐにうたるべしとさ
だにうたれてあるならばぎけいもほろび給ふべしり

やうてきながらほろぼしてうき世のなかをらく／＼
とすまばやなんとおもひければあんじすましてかぢ
はらはしやくとりなをし申やうたれ／＼と申とも御
うちのとさしやうぞんはこゝろもがうにちゑふかし
かれをうつてに御のぼせあれと申らいてうきこしめ
されてあふさる事あり此もの十九のとしいまだこん
わう丸とありしきかうのとの、御とも申おはりの
おさだがたちにて御さいごのかつせんにおさだがこ
どもそのかず人をほろぼしそこにてもうたれずそ
のなをゑたるものなればかれをうつてにのぼせよか
ちはらうけたまはつて御はんをたまはれおほせつけ
んと申らいてう御はんをいださせたまふとさがやど
へぞつけにけるとさは御はんをたまはりあらあさま
しの事どもや日ほんがよつてせむるともやはかはう
たれたまふべきざけいのうつてをとさ一人におほせ
つけらるゝ事御まへにひきいだされくびをきらるゝ
ほどの事ぢたい申たけれども御るにもれてもしやう

ぞんがいのちいきてもかいあらじたとひのぼると此
事をふかくつゝめといふまゝにむねとのつはものを
八十三ざそろへつゝかまくらうちをゑのびいでみち
にていでたちけるやうはかまくらどの、御だいくは
んにくまのへまいるといひろうしてかみからゑもに
いたるまでじやうゑひざぶりたちきせ一めがさにゑ
でつけさせよろひいれたるながもちにおはけたてし
めひかせひきむまどものおがみにもゆひ去できつて
つけさせわたるせごとにこりをかき夜を日について
うつほどにかまくらをいで、廿日にはみやこりと
ぞきこえける五でうあぶらの小路にやどをとるとさ
はきこふるめい人にてまづおんなをかたらひ御しよ
のけごをぞみせにけるおんなははしりかへつていつ
いつよりも御しよさまには御ようじんもましまさず
よきおりからと申さてはおりこそめでたけれ明々日
の暮ほどに是非におゐてかゝるべしつめかゝせたる
こまどものすそをひやせといひければ承ると申てざ

つしきどものがのりつれてか原おもてに打いで駒のす
そをぞひやしけるかゝりけるところに大將のみうち
なる伊勢の三郎よしもりは清水にまいりを乞けるが
河原おもてを見わたせばかふたる馬のきよげなるを
のりつれてぞひやしけるよしもり是を見て都にては
大將の御内にもか程の馬はなし東國方の大名の上洛
にてありげなやとはばやとおもひたちより物をとひ
けるにつゝみてさらにあかさずいかさまこれはやう
ありげなとおもひとねりおほきそのなかにくちのき
ひたるとねりありかれがそばへたちよりてきたるか
さをひんぬいでものをばとはすしてまづのつたるむ
まをぞほめにけるあつばれ御むま候やつめかみのき
りやはかまくらやう候なをつさまむかふよこはた
ぱりおくちそうとうつまぬのくさりしゝあひほねな
みよめのふしあふつくりつけたるごとくなりあつば
れ御むま候やかほどにおほき御むまのなかにうりむ
まなんどや候らんきやうがるかはりにひきかへてま

いらせんとぞ申けるとねりこのよしきくよりも御み
いかなる人なればぞうにくちのきゝやうはあやし
しとぞとがめけるよしもりきひてちたいわれらがな
らひにてくちをきかではかなはぬわざきやうとゐ中
をいへとしてむまをあきなひみをするもとはたん
ばのくにのものゐはらのことうさことてくすりかひ
のはりつかひすそのちをもいだすべし御むまなど
や候らん御ひけいあれとぞ申けるとねり此よしきく
よりもさてはくるしうなき人やこの御むまどもこそ
みやう／＼日のくれほどに大事にあはんす御むまで
候へすそのちりをもいたすべしやどをたづねて御い
りあれあふ御やどはいづくで候ぞ五でうあぶらの小
路にてとさどのゝ御やどゝたづねて御入候へとさ殿
と申はほうしの御みやう候か又ぞくの御なにてまし
ますかとねりがきいてうちわらひけふこのごろくわ
んとうにかまくら殿の御うちなるいほうぎほうとさ
ばうとて三人のほうしむしやありとはくにゝかくれ

もなし志らぬはいこく人かなとてからくとぞわらひけるよしもりきいてさほどあらんず大みやうのしやうらくまし／＼候にくに＼ひろうなき事はそらごとかなとぞいふたりけるひろうなきこそだうりなれ大事のかたきをうたんため志のびてしやうらくましませばさてこそひろうはよになけれ大事のかたきとのたまふは天下の御かたき候かわたくしのしゆくい候かとさどの＼御みにあて＼なんでうかたきの候べきかまくらどの＼御みにあて＼うつべき御かたき候ようたれたまひてその＼ちみやうじかくれよもあらじなむあみだぶつと申ければよしもりともにねんぶつしさてはぎけいの御事とき＼すましつ＼よしもりは堀かわの御しよへぞまいりけるきみの御まへにまいりいかにわがきみきこしめされ候へとうごくのとさばうがきみのうつてにまかりのぼりたるよしを申はうぐはんきこしめされてよしつねがうつてにとさんどをのぼせらるゝ事たうらうがをのをとつてり

うしやにむかふがごとしおこくうつしてかなふまじいそいでつれてまいれうけたまはると申てとさがやどへたづねゆきあんない申さううちよりたそとこたふるいやくるしうも候はず大しやうの御うちなるよしもりなりとぞこたへけるしやうぞんきひてさればこそ人のみ＼はかべにつきまなこは天にかけるとはいまこそおもひ志られたれゆふべついたるしやうぞんをたれやのものがまいり御しよにてかくと申つらんたいめんせではかなふまじこなたへつれてまいれうけたまはると申てよしもりをでいへしやうずや＼ありてしやうぞんは大びやくゑにびやくだんしわたぼうしにてひたいをつ＼みわつぱ二人にてをひかれていへよろばひいでよしもりがたいざにどうどゐていかによしもりひさしく御めにかゝらず候それがしがたゞいまのしやうらくべちの志さいにて候はずくわんとうのきみの御いれいもつてのほかにまし／＼ついづはこねみしまわかみやのほうへいは中／＼申

ばかりもなしことにとりわき候て人かすならぬしや
うぞんはみつの御やまの御だいくわんをたまはりく
まのへまいり候がせゝのこりみづに志みぎやうぶこ
ころにまかせず候へどもかゝる御きたうのおりふし
いれいと申せばくわんとうへのきこえもをそれとぞ
んじゆふべしやうらくつかまつりくわんとうよりの
御じやうなんどの候をもつてまいらんとすいぶんぞ
んじて候へどもいれいもいまだまざればふさん申
ところおもひのほかによしもりの御めにかゝる事こ
そなによりもつてしうちやくなれなにさま御しゆを
申さんと三々九どぞ志ゐたりけるしゆもなかばと見
えしときしやうぞん申めん／＼の御中へいなかづと
のありけるをとりこしゆとぞんするなにかかる御め
にかけよ承ると申てくらぐそくをぞひいたりけるし
やうぞんこれを見てあらみぐるしのくらぐそくやむ
まにそへはなどひかぬぞかねて申せしよしもりの
れうの御むまはこしらへたるかうけたまはると申て

くろつきげなるめいばの五きにゆりたるをやどの小
にはへひきいだすさきにひきたるくらぐそくまのま
へにてとりをかせ此あひだのなかたびにつめをかゝ
とチ脱スルカ
せてぞんすれどもこれにのつて御かへりあれ御しよ
さまの御きげんをばばんじはたのみたてまつるとま
ことしらかにたばかりければさけにはたけきをにが
みもとらくるならひなるあひださしもにたけきよし
もりもやす／＼とたばかられなに事をもか事をも御
しよさまの御事をばよしもりかくて候へば御こゝろ
やすくおぼしめせ御ざいきやうのあひだはかさねて
まいり候はんといとまをこふてよしもりはほりかわ
の御しよへぞまいりけるきみの御まへにまいりとう
ごくのとさばうはかまくら殿の御だいくわんくまの
へまいると申くまのまいりのだうしやなればさしも
をかせ給へかしわがきみと申はうぐわんきこしめさ
れていや／＼日ほん一のよしつねをうちにのぼりた
るくせものにて萬事にきよくをかへいかさまにもよ

しもりはしやうぞんにかたらはされたるとぞんする
本ノマ、いぶしう候御たちあれけうこうたいめん申まじいと
御ざをたゝせたまへばよしもりはときのめんぼくを
うしなひひきでものこそかたきよとてむまをはおが
みをきつてかはらおもてへをつばなしくらぐそくを
ばやいてたゞ一人きつて入しやうぞんとさしちがへ
てゑなんとこそくるひけれそのゝちべんけいをめさ
れいかにむさしとうごくのとさばうがよしつねがう
つてにのぼり五でうあぶらの小路にあるときくいそ
ぎつれてまいれまいれといふにまいらずばくびをき
つてまいれべんけいうけたまはつてあつぱれこれは
一大事の御つかいかなとはぞんずれどもさりながら
あんのうちとおもひ一まどころへつつと入どうまる
とつてうちかけうわおびゆつてちやうどゑめ一しや
く八寸のうちがたなを十もんじにさすまにくろき
むまにゑろきくらをかせひきよせゆらりとうちのり
わつば一人あひぐし土佐がやどへつつとのきこまを

かしこにのりはなつておちゑんにすんとあがり事の
やうをきゝければしやうぞんはよしもりをたばか
りおほせいまはとゆるすこゝろにておんないろごの
みなみすゑてさかもりなかばときこふるべんけいあ
ひのしやうじをさつとあけすいぶんしやうぞんのう
しろをそしらぬむさしめてよきときすゐさん申た
りにさま御ゐのとをりをまぢかくまいりて申さん
と大せいのつはものをのりこゑ／＼とをつてとさが
たいざにとうどゐてめての小うでをむすととつて申
せとの御ぢやうの候いれいときこしめされてもりに
むさしをまいらせらるはや／＼御まいり候へとこが
いなとつてひつたてゝぢゝめかひてぞいでにける大
せいのつはものどもそばなるうちものをひつたをし
をしはいきもとをくつろげすでにたゝんとゑたりけ
りとさは此よし見るよりもてごめにせられつかな
ふべきやうあらざればやあなにをさはぐぞわどのば
らいまにはじめぬむさしどのにてじやきやうことな

くましますぞ左はらくそれにてさかもりせよやがて
かへらん人くとやどの小にはにいでにけりとさが
らうどうつゝいていであれまで御とも申さんとわれ
もくとすみけりべんけいこれをみてきやつばら
にすめられかなふまじいとぞんすればやあめしも
なきにすいさんしてむさしめうらむなかたくと大
のまなこににらまれてすこひらむそのひまにとさ
がよはごしむすとだきくらつばにどうとをきわがみ
もやがてとびかへりうしろむまにうちのりゆんでに
てしやうぞんがはかまのきぎはむずととりめてにか
たなぬきすかしさもあれ御へんはいれいしてぎやう
ぶこゝろにまかせずとうけたまはつて候がおもひの
ほかにひきかへておんないろごのみなみすゑてさか
もり左たまふあやしさよ何事にのぼりたるぞしいし
ゆをのこさずはやかたれいかにくといひければと
さはきこふるめい人にてあふこゝにて御へんとそれ
がしがもんだうたいけつしたればとてりひをわくべ

きなかでなしとても御せんへまいるうへあれにてし
いしゆを申べし左はらくまでやむさしとてこまをは
やめてうつほどにほりかわの御しよへぞまいりける
もんぐわいにこまうつするてはやまいりたるよしを
申あぐるはうぐはんきこしめされてさすがにしやう
ぞんはかまくらどの、御だいくはんにくまのへまい
ると申すくまのまいりのだうしやなればまだかくめ
せとの御ぢやうにて中もんまでめされさぬきゑんざ
をなげいだすおめずなをりしきだいしかうべをちに
つけせきめんすはうぐわん御らんじてめづらしやと
さばうげにやらんなんちはよしつねがうつてにのば
りたるとなせいはいか程もちたるぞいづくにかくし
おきたるぞありのまゝに申せいつはるけしきのある
ならばまつたくそこをばたゝすまじいぞやあいかに
との御ぢやうなりしやうぞんうけたまはつてさん候
それがしがたゝいまのしやうらくべちの左さいにて
候はずせんどよしもりへも申あぐるごとくくはんと

うのきみの御いれいもつてのほかにまし／＼て伊づ
はこねみしまわかみやの御ほうへいはなか／＼申ば
かりもなしことにとりわき候て人かすならぬしやう
ぞんはみつの御やまの御だいくわんを給りくまのへ
まいり候がはやらうたいにまかりなりせゝのこりみ
づみに玄みぎやうぶこゝろにまかせず候へどもかゝ
る御きたうのおりふしいれいと申せばくわんとうへ
のきこゑもおほそれとぞんじゆふべしやうらくつか
まつる御ことづての御じやうなんどの候をもつてま
いらんとすいぶんぞんじて候へどもいれいもいまだ
すまざればふさん申ところにおもひのほかによしも
りを御つかひにたまはるきみの御いくわうにをそれ
申いれいもすこしとりなをしかみそりしやうじつか
まつりまいらんといでたち候ところにいまにはじめ
ぬ五どうの女いろこのみさけもたせかどいでいはひ
候ところへあのむさし殿御いであつておさへてつれ
て御まいりあるくわんとうよりの御じやうなんどの

候をもつてまいらんとぞんじ候へどもをくびやうし
ごくのくわじやばらどもにてむさし殿の御いせいに
をそれ申かなたこなたへにげさつてどうてんのあひ
だとりまざれもつてまいらず候しよじの玄だいをば
よしもりとむさしどの、御らんせられ候うへしきよ
くはゆめ／＼候はずとまことしらかにたばかりけれ
ば日ほん一のよしつねも二さうをさとるべんけいも
まさるとさにはたばかられに／＼それはさぞある
らん見えたる事もなきものをきつてつるはむざん
なりげになんぢすごさすはしやうじつゐでにきしや
うをかけゆるすべしとの御ちやうなり正尊うけたま
はつて中々御ゐならばたゞいまつかまつらんと申は
うぐわんきこしめされてそれ／＼むさしとおほせけ
ればべんけいうけたまはるとくまの、午わう一まい
にすゞりをそへてぞいだされけるとさはきこふるぶ
んじやにておひつにかふこそかいたりけれ
うやまつて申天ばつきしやうもんの事かみはぼんで

んたいしやくおもは四大天わうゑんまほうわう五だ
うのみやうくわんげかいのちにはいせてんせう大じ
んをはじめたてまつりゆやはくさんきふせんわうじ
やうのちんじゆいなりざをんかもかすが八はたは正
八まん大ぼさつまつのおひらのむめのみやそうじて
ゑんぶだいのうちのうせいむせいいかうかうたんのま
うりやうきじんきいれなふじゆたれたまへこんど
しやうぞんがきみのうつてにまかりのぱりたる事は
候はず又わたくしのしゆくいさらにはずもしいつ
はり申て候はゞたゞいま申おろすゑんばつみやうば
つをしやうぞんが四十四のつぎめ八十三のわうく
ごとにもかりかうぶり候てこんじやうにてはしやう
ぞんがゆみやのみやうがながくすたりらいせにては
むけんのそこにだざいしやうがううかぶよさらに候
まじいよつてじやうくだんぶんぢぐはんねんう月廿
日ふぢはらのしやうぞんはんとかきたるはさてみの
けもよだつばかりなりはうぐわん御らんじてきしや

うのおもてこまやかなりしんりよにまかせてかへす
ぞはやかへれとの御ぢやうなりしやうぞんわがやど
にかへりいへのこらうどうをちかづけさればみと
りはともかくにも物をかくべきものなりしやうぞ
んもんまうなりせばかたぐの御めに二たびかゝる
べきかあつぱれほうよきほうしとそゝろにみをぞ
ほめにけるさりながらほりかわどのあんないを見
おふせぬることしきれゆふさりの夜はんにせひ
におゐてかゝるべしなごりおしみのさかもりせよう
けたまはると申てたりはらとうかうをかきすゑまふ
つうたふつさかもりするよは何どきぞ八つのころが
ぶんはよきぞ人々はや打たてやもつともとて手々に
たいまつともしつれほりかわ殿へをしよせみなみの
もんをうちやぶつて大にはさしてみだれいるさても
そのよ御しよさまには御ようじんもましまさず十二
人のおもひ人をめされ夜ととものくはんげんなりか
かる御あそびのおりからとのばらたちはむやくとて

みなくやどへぞかへされけるむきしばうべんけい
もきたじらかわにやどありてわたくしにかへりてい
ざりけりたまくありあふものとてはねうばうたち
に中るの人さてはしよしよくのものばかりくうた
てかりけるおぶんかなみなくしゆゑんにくたびれ
せんごもおらずふさせ給ふそのなかにおづか御せん
ばかりこそよひの間におらぬねうばうのけごを見つ
るとあやしめゆもむすばすまどろまでまちかくる
ところにあんのごとく夜うちうんかにみだれいるさ
ればこそとおもひぎけいの御すがたを見たてまつれ
ばせんごもおらずふさせ給ふなふくとおこし申せ
ども御返事もましまさずおづか心におもふやうげに
たけきゆみとりはものゝぐのをとにおどろきたまふ
ときゝつるものとおもひ御きせながをとりだし
まくらがみにざつくとをくぎけいかつぱとおどろき
あらことそぞうしやおづか御せんなに事やらんと
おほせければおづかうけたまはつて夜うちの入てさ

ふらふにおきあひたまへと申ぎけいきこしめされて
夜うちといはんにことくしくしやうぞんにてある
なんにほどの事のあるべきぞよひのくわげんにあ
まりくたびれまづおばらくやすまんとの給ひて又こ
そやすみたまひけれおづか見まいらせなふすでにま
ちかくまいるなりおきあいたまへと申すぎけいかつ
ぱとおどろきさらばきせながまいらせようけたまは
ると申て御きせながをたてまつるゆんでのこてをさ
したまへばめてをおづかゝまいらするめてのすねあ
ておたまへばゆんでをおづかゝまいらせけりはいだ
てとつてをしあつればものゝぐのわたがみつかんで
ひつたてくさすりながらにざつくとめすはをびおむ
るそのひまにかたなをとつてまいらするさやがらみ
したまふまにたちをとつてまいらするおびとりおむ
るそのひまにかぶとをとつてまいらするおのびのを
をおむるまにゑびらをとつてまいらするかけをゝと
どむるそのひまにゆみをばおづかをおはつてすびき

つるをもちやうどしてぎけいにこれをまいらせけり
ぎけいこのよし御らんじてあつばれ玄づかはゆみと
りのおもひものやとの給ひてすでにすゝんでいでら
れたり

玄づかもつゝいていでにけりぎけい御らんじてささ
うなり玄づか御せん玄のべ／＼とおほせけれどもみ
みにもさらにきゝいれずまつさきにこそすゝみけれ
すゝむすがたを御らんすればもゑぎにほひのはらま
きをきぬの玄たにぞきたりけるぎけいのひさうの玄
らゑのなぎなたゆんでのわきにかひこふでたけなる
かみをばつとみだせばくろほろやらんと見えたりけ
りぎけい御らんじてあらおもしろのかつせんや四こ
くさいこくのたゝかひにもかほどおもしろきいくさ
はなしとてもの事にてあるならばにはへいでゝのあ
そびこそはなとてうとのみだれあし見てこそこゝろ
はすみ候へやあこなたへこよや玄づかとてにしのこ
にはにいでたまふころはいつぞのころぞとよ文じぐ

わんねんう月廿日の夜の事なりとうくわはまつにか
かりていろ／＼のさうくわはかたきのひにいろをま
すらんでんしたるありさまはにゑぎをさらすごとく
なりいけのみぎはにのぞむとき玄づかゝすがたはは
なににていまだきにてあらねどもをみなへしかと
うたがはるぎけいなかざしつがつてやさきにかたき
はきらふまじうけて見よとのたまびてさしとりひき
つめさんぐにこそあそばしけれおもてにすゝむつ
はもの十七八きはらりといられすこしやごろをひき
玄りぞくぎげいゆみやをなげすて御はかせひんぬい
てきつていでさせたまへば玄づかもつゝいてきつて
いで二人のひとぐのこゝをせんどゝきりたまへば
くつきやうのつはものを三十三ぎきつておとしたま
ふのこるつはものは風に木のはのちるやうにむらむ
らばつとひいたりけりよしつね玄づかゝてをひいて
おちゑんにつつとあがり事のやうを御らんすればて

りかゝつしところに大しやうの御うちなるいせの三郎よしもりはきみの御ふしんかうぶつて七でうしりやかにありけるがようちのよしをうけたまはつてどうまるとつてうちかけうはをびゆつてちやうとゑめ一しやく八寸のうちがたなを十もんじにさすまゝに三しやく八寸のいかものづくりのうちものをするりとぬいてうちかたげもみにもうでぞはしりしがほりかわどのにつきしかばみなみのもんにつつたつて大をんあげてよばはるやうこんやのようちの大しやはとさばうにてましますかかう申つはものをいかなるものとおもふらん大しやうの御うちなるいせの三郎よしもりなり御みゆへにそれがしきみの御ふしんかうぶるうへてなみのほどをみせんとおもてもふらずきつているとさがらうどうどもしうをかたきにうたせじとまんなかにとりこむるよしもりこのよし見るよりも大せいの中へわつていりにしひがしきたみなみくもでかくなは十もんじやつはながたとい

ふものにわりたてをんまはしてさんくにきつたりけりくび二つとつて大せいにてをおふせとうざいへばつとをつちらしきみはいづくにおはしますよしつねこれにひかへたりこれへくとありしかばうけたまはると申ておちゑんにづんどあがつて二つのくびをさしあげぎけいにこれをみせ申すかのよしもりがふるまいはたゞはんくわいもかくやらんよしつねかたさにいきをつがせてかなふまじいとのたまひて又きつていでさせたまへばゆんでにゑづかめてによしもりがすがりつき申いまはむさしまかたをかもくま井もげん八もさだめてまいり候はんと申もあへずもんぐわいに人のよばはるこゑはかすかなりむさしがひとつふしげにうまれつきたるずいさうありことのあらんとてはむなさはぎゑきりにしひだりのてをだにかきぬればはやことありとさとりをなすがいまことさらこのずいさうのゑきりなるにより候てほりかはどのになに事か御ざあるらん見てま

いらんといふまゝにどうまるとつてうちかけうわお
びゆつてちやうど志めれいの大だちさげはいてよる
はつゑこそよけれとてばうをもつてぞいでたりける
せつなが間にほりかわ殿にはしりつきもんぐわいを
みわたせばあんのごとく夜うちうんかにみだれ入た
だものにてはあらじしやうぞんにてぞあるらんされ
どもかれはきこふるつはものなればもしきみやうた
れたまふらんとこゝろもとなくぞんじよばはるこゑ
にてぞ候ひけるぎけいきこしめされてむさしかやあ
これにありとの御ぢやうなりべんけいうけたまはつ
てさてはこゝろやすく候かくあるべしとごしたらば
なぎなたもつてこふするものもちらはぬばうを
ついていかいせんされどもむさしうまれてより此か
たばこにて人をまだうたず人のもつほどにうらやま
しさにこしらへたりかのむさしがばうと申はあらし
げを八しやく五寸につゝぎつてなかをあつくはしを

ひらくとうかいわたるふなうなりにこしらくしさう
かねをのべつけはむねをやつてやいばをつけ八しや
く五寸のそのうちに八十三のいぼをすゑくぎのかし
らをみがきたてはざまをくろくぬつたればいぼはか
かやくちはくろしやいばはゑろし物によくくたと
ふればひとへにつるぎひしほこてつぢやうなんどの
ごとくなりかゝるめいよのばうついでみなみのもん
につつたつて大をんあげてよばはるたゞいまこゝも
とにすゝみいでたるつはものをいかなるものとおも
ふらんめづらしからぬむさしばうべんけいなり夜う
ちの大しやうにげんざんせんやつとぞよばはりける
かゝりけるところにあらいがわのよろひきひおどし
のそでつけながふくりんのたちはいて三日月のごと
に一そりそつたるなぎなたをひらりくるりとまわい
ておもてもふらすきつてかゝるべんけいこれを見て
むさしとなるるにをこのけなくもかゝるはたゞもの
にてはあらじみやうじをなのらせきかばやとおもひ

たゞいまこゝもとにすゝみいでたるつはものはたう
かかうけかみやうじをなれきかんといふみつかげ
きいてちたい夜うちのならひにてなのるはうはこれ
はわたくしならぬ夜うちなればゑんでもめいよをせ
んためむつのくにのぢう人にあねばのへいじみつか
げとしつもつて二十六八十五人がちからなりむさし
殿のてなみのほどをうけてみんと申べんけいきゝて
さてはなんぢはしやうぞんがらうどうよななんぢが
しいうのしやうぞんをだにもあはぬかたきとぞんする
にそこをひけとぞいふたりけるみつかげきいてはら
をたてきしもかくれなきむさしどの御ぢやうとも
おぼえぬものかなよにある人をたのむはみなゆみと
りのならひせんぢやうにてのぞくしやうだてさらに
きかれぬ事さうよこゝろのがうなるものをこそむし
やとは申候へいやしきものゝうつたちは世にある人
の御みにたつやたゞやうけて見たまへむさし殿と
いふまゝになぎなたのいしづきをつとりのべんけ

いがひざのあたりに小風をふかせさらり／＼とない
だりけりべんけいこれをみてあつ事なしとおもひば
うにはへさしօろしいしづきをおどらせ木のはが
へしといふてをいだしすそをはらつてすねあてのは
づれをくびやうがねまねきのいたばうのいしづきか
らりとあてやゝともすればみつかげはあふうたれつ
やうにぞ見えにけるさるあひだみつかげもなぎなた
は一てならふたりばうにあひては大事のものあしが
きかではかなはぬわざいかにもかたきをなぶりたて
ひらまんところを一たちとこゝろのうちにぞんずれ
ばかたきがかゝればとびゑさるなぎなたのきつてに
はこむてなぐてひらくてうしろをきるはなかきりさ
ざなみぎりにみづくるまきりこみわきこみたゞくや
みうちすてがたなずいぶん大事のひしよのてをのこ
さずこそはつかひけれべんけいあまりのやさしさに
てノ字脱スルカ 玄ばらくうたであひしておもしろいてをやつかふと
めをすまひてぞ見たりけるされどもいまはむさしに

ましひ事とおもふてもなければいつまでをゐてつみ
作りにいとまとらするさらばとてばうのいしづきを
つ取のべおがみうちにちやうどうつかぶとのからく
りはらりとくだけ落花のごとくちりければ首の骨が
うちこまれてどうへとつとぞに入たる五十四郡に
かくれもなきあねはの平次光かげも武藏坊が手にか
かりみぢんに成てぞ失たり

しがばうにあたるものいきてかへるはなかりけりか
まくらにて正ぞんは一きは十キ十キは百キにむかふ
ほどのつはものを八十三ざそろへしがたゞ十七キに
うちなされゆきがたゑらずおちにけりむざんやな正
ぞんもからぐいのちたすかつてかはらをさしてお
ちけるをよしもりとべんけいがあとをもとめてをつ
つめてからめてつれてまいりけりぎけいこのよし御
らんじてくまのまいりの正ぞんになはをかくるはも
つたいなしいかに／＼とありしかば正ぞんちつとも
さはがずるだけだかにのびあがり大をんあげて申や
うめいはぎによつてかろしいのちはおんのためにた
てまつる賴朝の御ためにすつるいのちはおしからず
きみにくしとおぼすなよとく／＼いとまたびたま
へぎけいふびんにおぼしめしあつがうなりや正ぞん
たすけたくはおもへどもなんぢ二くんにつかへじさ
らばいとまとらせようけたまはると申て六でうがは
らできりにけりかの正ぞんをみし人きせん上下をし

ほりかわ夜うち

なべかんせぬ人はなかりけり

四國落

さるほどに判官だいりを退出まし／＼て堀川殿に御下向有武藏をめしておほせけるはみかどのせんじをかうぶるうへ義經みやこにあらん事いちよくの玄とぞんするたびの出立をかまへよ辨慶承りむねとの人々二百餘騎すぐり都の内を出させ給ふ十二人のきたのかたも御供なりとぞ玄たはせ給ふぎけい此よし御覽じていかなる事ぞすでにはや關東よりのふけうの身にて候へば天にごうのあみをはり地にさかもぎの關をすへいづくにても義經がうたれん事は治定也さあらんときはなか／＼御前ぐそくし奉りそこともなき遠島にしてをき申さば義經が跡のゆみ矢のきずたるべしたい／＼とまり給へとよ十二人の北のかた此よしをきこしめしたとへりうたつ山のおくしで三津のかはなり共ともにこうればうかるまじと／＼ま

るまじの都やとてさきにぞたゝせたまひける
ぎけい聞召れてあふ玄たふもひとつだうりたれをたのみてまつらひめみやこにとゞめをくならば道のさはりとなるべしきれどもきうちれぬあひよくのうき身のさはりこれ也とて二百餘騎の人々は御こしをなかに取こめてなみだとともにたち出る是やゑんぎのせいだいにいへをはなれて三四月落るなみだは百千行萬事は皆夢のごとしより／＼ひさうをあふぐとゑいじ給ひしきうせきと今のぎけいのはいるのたびすがたはいづれがはるとも思ひはさながらひととなり末は山崎たから寺かうないかちおりすぎければ玄どろもどろにらんもむじあらむづかしやあくたがは牛島瀬川はんせうじみのをやまのこうえうにこゝろのとまる折節又うち出ればにしのみやなんぐうの御前のおきのあらゑびす松ばらどの、御さんさうむかしこひしとうちながめかすむうらぢはすみよしかきりのひまより松見えてなみにたゞゑふあまをぶねこゝろ

ほそしと打ながめはや大物のうらにつく辨慶申ける
やうはこれより西國へのたびのみちなむじよがんせ
きにて御こしのかち路ゆめ／＼かなひ候まじこれよ
り御ふねにめされ四國にわたり伊興の河野を御たの
み有あれに玄ばらく御座あり世のありさまを御覽せ
られ候へ四國九州一ゑんに思ひつき申さば十萬餘騎
は候べしその大勢をそつし都へせめてのぼりざんし
むのともがらを御こゝろのまゝにほろほしなどか御

代にたゞせ給はで候べき義經きこしめされてさらば
船を用意せよ承ると申てむねとの大船八そゝ十二人
の北の方の御供の人々二百餘騎おもひ／＼こゝろご
ころにとりのりをひてのかせをまつほどに日ものど
かなり出せよとてともづなとひてをしいだすまこと
に順風はよかりけり二時計の事なるにをとにきこえ
たる和田のみさきをこゝろばそくもはしりすぎ弓手
を見ればゑしまがいそては明石の人丸のあめのふ
ねべしたとひ風がはげしく共とちうをさひてやつて

れゆくあまをぶねこゝろばそしとうちながめ尾上た
かさこ過ければむろのおきにぞつきにけるぎけいお
ほせけるやうはいかにや水主棍取こゝかしこの津ど
まりにて中々ふねをよするならば玄せんの事もあり
ぬべし順風よくばたゞすぐに四國へわたせとおほせ
けり承ると申てかちとりなをし御座船を四國をさし
てをし渡す

かゝりけるところにさぬきのやしまのうへこりも黒
雲一むら立て悪風こそおこりけれ水主申けるやうは
いかさま悪風ののおこらんやらんくもの氣色らんて
んしうみのおもてどうようし玄らなみせがいをあら
ひいかゞはせんと申ぎけいきこしめされてそれがし
もさ存る去年やしまへむかひしどき渡邊よりもふね
にのりをしいだしたるかざ／＼もにちつともちがはぬ
けうあひなり船をよく乗用意せよ夜ふねにならばこ
のふねいかさまかせにさそはれてふね人ともにうせ

る夜もふらぬ夜もかせのたつよもたゞぬよも島がく

見よなをしもかせかはげしくばきなかほかけてはし
らせよそれにもかせがふきこはらばほばしらばかり
でやつて見よおもかぢをつよく取とりかぢをよはく
とりわいろをたてけしきをみて四國をさしてやつて
見よかんどり共とぞおほせける承るとは申けれども
能程のかせにこそ思ふさまにはあつかはるれ此あく
ふうと申はつの國むこやまおろしきの國の岩山おろ
し四國の玄ろみねざむよりもおこつたる惡風にてへ
い／＼と玄たるうみのおもてに俄にたにみね出來て
玄らなみせがひをあらふなりすいしゆ梶取（從ノ借字）ろかひと
るべきやうはなし十二人のきたのかた近所の人々は
ふなぞこにひれふしてさながら前後をわきまへずか
かりけるところに四方より惡風がもみあはせてふく
かせにはばしらふたつに吹折て八そうのもやひのつ
なが一度にはらりときれたりけり風にとられてふね
共がおもひ／＼におとさるゝ四國へおとす船も有西
國へおとすふねも有とさのみなとへおとすもありあ

るひはもとの明石なだひやうごのおきへおとすもあ
り八そこのふねどもがみなちり／＼になりにけりあ
らいたはしや大將のめされたる御座ふねには十二人
つさながら前後もわきまへずやう／＼のこる人とて
は義經辨慶只二人ふねの前後をあつかひてかせにま
かせておとさるゝ心ざしこそあはれなれんけい申
けるやうはそれ風は龍王の出し給へるいきとして時
のふしきをなし給ふにたからを玄づめて御覽せられ
候へさらばたからを玄づめんとて十二人のきたの方
のかさねの小袖くれなるのちしほのはかま判官のこ
がね作りの御はかせ海底に玄づめたまひけりもとよ
りもこの人々てらそだちのがくしやうにて法花經の
一の巻をときうつるほどこそじゆせられけれまこと
にりうわうも御なふじゆやまし／＼けんなみかせす
こし玄づまればふねはこなみにゆりすゆる又八島の
うへよりもからかさほどなるひかりものが七つ八つ

とんできて惡風こそおこりけれ辨慶これをみて只事
ならずとおもひふなぞこへつつと入ときんすゞかけ
うちかけふねのへいたにつつたちあがりだいをんあ
げてよばはるたゞ今こゝもとにすゝみいでたるつは
ものをばいかなる者と思ふらんをのゝたかむら右大
臣が末孫田なべのべつたうたんぞうが嫡子生るゝと
ころは出雲の國枕木のさとそだつところは三條京極
がくもんするは天台山あくまがうふくの貴僧と生れ
本ノマ、それ風はりうわうのいだし給リニアラスへるいきとしてときの
ふしきをなし給ふにしんぞき給へといふまゝにいら
たか敷珠をとりいだしさらゝとをしもんで東方に
はがうさんせみやうわう南方にくだりやしやみやう
わう西方に大いとく明王北方こんがうやしや明王ち
うわう大しやう不動明王けんがしんしやはつぼだい
しんもむがみやうしやたんあくしゆせんちやうがせ
つしやとくだいちゑちがしんしや卽身成佛とこの玄
むごんのひみつにくろけふりをたてゝいのられた

まことに龍王もさてもあくりやうも御なふじゆやま
し／＼けんなみ風すこしおづまれば船はこなみにゆ
りすゆるかゝるきざみに平家のあくりやうたちその
かすゆしゆつせられけれども辨慶にかちせられ皆海
底にいり給ふあかつきがたの事なるにそこともなき
遠島とともに火がほの／＼と見ゆるぎけい御らんじ
て里ちかき浦なればこそ火は見えて有らんとあの火
をたよりにこのふねをこぎよせとの御詫なり承ると
申て火をたよりにこぎよせ見れば八十餘りなるらう
おふのつりをたれてぞるたりけるぎけい御覽じてい
かにやせうとの此うらはいづくの國いかなるうらに
てあるやらんと御たづねありければおきなうけたま
はり其返事にはをよはずふねほと／＼と打ならし一
しゆはかうぞ聞えける

ぬさり火のもしほのけふり風にきえて

ふきあかしたるおきの一むら

義經聞召れてあらおもしろや誰か此うたのこゝろを

知たる人の有やらんと御たづね有ければいづれも船
ごゝちにて前後もゑらず見えさせ給ふ十二人のおも
ひ人のなかに靜御前ばかりこそふねにはゑはざりけ
るがす、み出て申さる、あらうれしやこのふねゑん
らはくさいしんたむとやらんへもおとされても有や
らんとこゝろもとなく思ひしになふいまはや安堵
にてさふらふぞされはおきにあまたのいみやうあり
よし共申あしともいへり村といふは里の名そのうへ
ふるき歌にもゐさり火と云事はなにはいり江によせ
られたりいかさま此うらはつのくにのあしやのうら
の事やらむなふ我きみと申けり義經きこしめされて
それがしもさぞんずるいかにやせうとの此うらは津
の國あしやの浦かさむ候扱せうどのは此うらの人か
いや住吉のかたのものなりとてけすが如くにうせさ
せ給ふ扱はうたがふところなしたつみのみやうじん
の義經をあはれみてをしへ給へるたつとさよとうし
ほで手水うがひしてそなたをらいし給ひけりさるあ

ひだ御座ふねをあしやのうらへをしよする彼浦の國
氏あしやの三郎みつゑげふな子にあふてとふた船子
こたへて申さん候是はかまくらどの、御舍弟太夫の
判官義經西國下向ましますが悪風にふかれこのうら
によらせ給ひて候と申みつゑげ聞てさればこそ此き
みは鎌倉殿の御中たがはせ給ふ人よいざ此君をうち
中關東へ参らせくんこうけしやうにあづからん人々
やつといふまゝに浦うちをふる、尤ゑかるべしとて
我もと思ひしうらの人二三百人まつくろによろひ御
座ふねを二重三重にをつ取まひてときをどつとあぐ
るいたはしや御座ふねにはいづれも船ごゝちにてせ
んごもゑらず見えさせ給ふその中に辨慶船にはゑは
ざりしがかねてようじんきびしければものゝぐこぐ
そくさしかため三十六指たる大中黒のそやおふて五
人ばかりのまんなかにぎり船やかたにつつたちあが
つて大おんあげてよばはる

たゞいまこゝもとにすゝみ出たるつはものをいかな

るものにてはんべるそやこれは鎌倉殿の御舍弟太夫の判官よしつねの西國下向ましますが悪風にふかれ此うらへよらせたまひて候に御ふれ狀こそなく其御けいごをば申さずして何ぞやいまのらうせきは手なみのほどを見せんとてさしとりひきつめさんぐに射たりけりおもてにすゝむ能つはものを十七八騎はらりといられすこし矢ごろをひきゑりぞくみつゑげこのよしを見るよりも御座船に今は矢種やつきぬらんかへせもどせ人々とて御座ふねまぢかく切てかゝるべんけい是をみてゆみ矢をからりとなげすてなぎなたひんぬいてふねより下へとんでおりみつゑげとわたりあひをふつまくつつさむぐにたゝかふたりさるあひだみつゑげ辨慶が打なぎなたうけはづし候て光重がかぶとのまつかうを二つにばつかときりわられうしろはしころほろつけまへははつぶりよだれがね四まいがなどうひつ敷くさすりふたつにきつときりわられて弓手めてへさばけたり是こそいくさの

手はじめ大勢の中へわつて入西からひがし北から南くもでかぐなは十文字やつはながたといふものにわりたてをんまはしてさんぐにきつたりけり手もとすゝむよきつはものを五十三騎さりふせ大勢に手おふせ東西へはつとをつちらしいくさの門出のでたしとて又御座ふねに取乗すみよしのうらにあがらるするすゑはんじやうと聞えけり

おつか

去間梶原平蔵景時鎌倉を立て都に看判官殿の思ひ人
本ノマ、あづかトヨアス、司土御前の御行衛を尋申せど行方なしつじ／＼に札
を立其つうげを相待る九重のうちにもあはれ司士か
のがれよかし縦くんこう有べくとたれやのものが參
六原にて角登申さんと上下涙をもよほして哀ととは
ぬ人ぞなき爰に司士が母の召使しあこやと申女有札
を讀て見るに判官殿の思ひ人司士御前の御行衛を六
原殿に参り申たらんするともがらにじやうらうなら
ばくわんをなしけ本ノマ、^{トヨアス}ならはいとのしやうくんこうこう
によつてけしやうのぞみたるべし景時判とかきとめ
たりあこやなゝめによろこふで此ふだをくわいちう
し六原さしていそぐ梶原は司土御前を尋かね關東下
向とて馬引立のらんとすあこやさうなく走寄人目を
ばかり此札を梶原がたもとへをとし入る梶原やがて

心得此女房をさき馬に取てのせ六原を出る女子綱を
ひきむけて大和おうちにさしかゝり三の橋打渡りほ
うしやうじをもさし過て伏見と深草のさかいなるし
やうとうじへ乗入て爰ぞといふて馬をとむ梶原馬の
上よりも大音上てよばゝる判官殿の思ひ人司士御前
の此寺にまします由を承り關東の梶原が御迎に參り
て候はや／＼御出候へ鎌倉へぐそくし申さんと大音
上てよばゝる司士も母上ももろともに夢にも人の知
らじと社ふかく頼みをかけつるにたれやのものがま
いり六原にて角と申たらんうらめしさよとかきくど
きすだれのまより見出せば年比召使しあこやと申女
さき馬に乗て來りたりあふ扱ははや此をんながちう
しんによりてけりどんよくまうねんはなさけをもす
てはてゝはぢをもさらにかへり見ずあこやがゑるべ
をする上は何と思ふとかなふまじいかゝはせんと申
つゝなくより外の事はなし母のせんじすだれ巻き上
たち出梶原に見えければ先のがさじととらんとすせ

んじなみだをおさへ司土御前はきのふまで此寺に有
つるがみやこの人目をつゝみかね大和の方を心がけ
小夜更がたに出つるが人をつれざる道なれば宇治方
にやまよふらん追手を掛させ給へやと一たん偽たり
ければ梶原聞てげにもさやうに候覽先さがし申てげ
になくば追手を掛申べし東はあくる津輕のはて西は
ろかいのとゝかんする程天下の其内をさがさぬ所有
まじゐ誰か有參りてさがし申せ兵どもと下知すれば
司土此由きくよりもなふそれまでもさふらはずみづ
からは是にさふらふぞや左ばらく暇たび給へ此程な
じみ申びくにたちにいとま申やがて罷出べし梶原殿
と有しかば景時聞て腹を立更ば先より此むねを角と
は仰なくして其間は門前に待社申さふらはめこなた
へしされ兵ども門より外に引出すあじろのこしのふ
りたるに力者計をあひぐして門より内に入尼見あら
痛しや司土御前此程なじみ申びくにたちにいとまを
こいなくく出んと志給へば母のせんじ是を見てお

ばらくなふ司土御前いとだに女はごしやうさんじ
やうゑらされつみのふかいと聞えさふらふよしつね
の草のたねやとして露もきこやらぬたらちねの其
中迄もさがせといふ事あらばめいどにおもむく人ぞ
かしかたきの手に渡らぬ間にかみそり衣ぬきかへか
いたもつてめいどの道をおしへられて出給へげにげ
に思ひ忘れてさむらふとてひじりをしやうじたてま
つり髪をろしと有しかばおとがめいかゞ有べきと人
を出して梶原に出家のいとまをこひければ景時聞て
是は關東よりの御使也わたくしにてはかなひ候まじ
おぐしをつけながら御下向あれよきやうに申なし御
出家の御暇をばまいらせんと申すげにく是も道理
とて髪をばいまだつけながら髪そり計ひたいにあて
かいみやうのもんをとなへて五戒を請させ給ひけり
抑五戒と申はせつたういんまうごおんじゆ其みなも
とを尋ねるにりやうへんたしやうのかゝのなれをく
んでかんしんの法をつたへたり天平勝寶六年に奈良

の都にかいだんをたて聖武皇帝はじめて受戒し給へり又天台の戒だんは弘仁五年にきんざすの立させ給ふ上下萬民をしなべて誠の道に入人の誰かは戒を請ざらん抑第一にせつしやう戒と申はものゝ命をころさぬ也其いはれをあんするに命はおもきたから也昔げんじやうさんさうのしやうけうをわたさむとて流沙を渡りそうれいのみねをこえさせ給ふ時ろくそくわう來りてしやうげうをうはい取る見る人は是をとぶらなければさんぞうのたまはくをろか也縦しやうげうはとらるゝとも命と云おもき寶をとられねば何をさのみになげかんとうれいたいろもましまさず此世一世の身ならず生々世々の命はおもきたからなるべし玄のことわりを知らずしてあるひはとんにたえず一世にものをころして七しやうまでころさるゝくわざうの角の上にして何事をかあらそはむ石火の光水

のあわたゞまぼろしの夢のように一たんのどんにふけつてせつしやうをするぞはかなき第二にちうたう戒と申は他の寶をおかさぬ也此戒をやぶる人はまどしき身と生るゝ也今もひんくに有人はさきの世にものもゝをぬすみせんきうにこめられしもさこそほくやしかりつらめとを山どりの花の色霞にこめて見えねば匂ひをぬすむ春の風おなじ其名はたちながら科にはあらじとぞ思ふおさへてあやめらるゝ事三更のふかき夜に啼郭公音をぬすみめいどの鳥と成にけり荒淺ましやかりにもちうたうをおかす事なけれ第三に邪嬢戒と申すは我がいもならぬ女にことばをもかけずわがせならぬおつとのことばをもかゝらぬ也玄とのつみはたしやうまできちくしやうに生るゝ也むらかみのあんしのねうゑんはせいりやうでんのくわうぐうにねたまれさせ給ひしゆじやくゑんの鬼となるおそれてもあまり有じやゑんかいをたもつべし

第四にまうごかいと申は空言をいましめり此いはれをあんするに偽りおほきことばには其科多き物也されば北野の天神のかじせうじやうにておはせし時亥へいのおとゝにざんせられ心つくしへながされゑの木寺にてうせ給ふ其科におとゝはならくにゑづみ給へばかんせうじやうはまさしくも今の北野の神となりまうしやうくんがいたづらに鳥のそらねにせきをあけて仇にうたれ給ひけりなをいましめのふかき事はまうごかいととめたり抑第五におんじゆ戒と申は酒にゑひてひれふし□□かう事をいましめりさくわどうによといつし人は五百しやうのあひだくろのやみにまよひしもぶくしゆはかいなるがゆへあるひはしゆふうせんノ誤歟のいましめとかうし又は三十六の科有ときへりいましめふかき酒を何とて天台山にはゆるすぞと尋ぬるに昔てんだい山におんじゆをことにいましめ酒をきらひ給ひしに九重のせうしやう御登山有し時けうおうのあまりに始て酒をゆるす事寒

をふせがんため也たいれいのゆうかんになを此酒をゆるせりましてくわていのゆうれいに誰かは酒をのまざらんそんの前にゑいをすゝめ林水に盃をうかべしうのちやうやを見渡せば山ももみぢにゑふとかや酒をあひする人をばふくしゆとは是を名付のむ事をゆるし□□かふ事をいましめたりそれはいはれぬところ佛をはじめたてまつてあなんがせうしゆばだいいづれか酒をまいりよろほひありき給ひし醉ては心みだれつゝをのづからじたをたちまちせつがいすなをいましめのふかきはおんじゆ戒にてといめたりかゝる五戒をまたうして一つもやぶる事なくばてんりんわうと生るべしむかしゑしんの僧都たうぎんのぎやうかうをかならず拜み給ふそづのあねあんやうのあまふしんをなして問給ふ何とてそづは王をおがませ給ふぞ僧都こたへての給ふさん候王のたつときうかうをかならず拜み給ふそづのあねあんやうのあまふしんをなして問給ふ何とてそづは王をおがませ給ふぞ僧都こたへての給ふさん候王のたつときうかうをかならず拜み申さすせんしやうにて戒をよくたもちいまくわうと生れ給ふしゆくせんのちからのたつとさ

に拜むとぞ仰けるいかにも我等さきの世にかいぎやうなき故により心もぐちにさとりなしいまこの申すかいぎやうによりゑんげうの衣のうへにかいほつをつゝみすてざれよたうらいにてはかならずじゆかいのしゆゑん淺からずむじやうとくだつ成給ひかへつて我をみちびくべし補覺に忘れ給ふなど懇にときをしへ申す其日すでにいりあひのかねつく／＼とちやうもんす梶原は待かねて遅しといひてせめければ聖なみだをながしゑかうのかねうちならしとうみやうをけしあんじつに入せ給へばゑづかはものゝふの手に渡るともしびくらうしてすごうぐしがなんだ夜ふけねればゑめむそかのこゑとはぐしか別れをかなしみてつくり給ひしにてありけりそれは異國のものがたり是は司土が身のなげきかんと和朝はかはるとも思ひの色はひとつ也かみは玉樓さんでんゑもは司土がふせやまでゑづかをおしまぬ人ぞなきみめといひのうといひ心の情の道といひたぐひもやわか有べき

と人々なげきしうたんは四方にもあまる計也かゝるあはれをもよほす處にくき事こそ候ひけれあこやと申女梶原にむかつていふやう忘れさせ給はぬさきに御約束のほうろくをいそぎたべと申す梶原聞て腹をたて何と申ぞあの女是程司土御前關東下向とて上下涙をもよほす處に申さんやなんぢはきのふがけふにいたる迄其内に有しものぞかし別れをばかなしまでほうろくのこいやうこそ心得られぬ餘りにものを知らぬ女なれば因果れきせんの道理を語てきかせんそれにてよくちやうもんせよよひには樓月をもてあそぶといへどもあかつきは離別の雲にかくれぬ心はこくうじやうじうにしてかたち計はかりの宿みゝはとせいのみゝ目はじやうはりのかゝみ口はわざはひのかど舌はわざはひの根舌三寸のさえづりにて五尺の身をはたす誰かあるあの女に引手物とらせよ承ると申てさうくるまに取て打のせて渡一所はどこ／＼ぞかみは一條柳原ゑもはから九重こうぢ／＼を渡し

見るものごとににくませ後には此女かつら河のふかき所を尋ねてふしづけに玄たりけりみやこの上下是を見てものいひしたる女房がしよ地をばたまはらでよみの國の大國をたまはつたりやと申見る人聞ものをしなべてにくまぬものはなかりけり角て梶原は司土御前をこしにのせしやうとうじを出る母のせんじもなくくかちにてあくがれ出る司土此由見るよりも母をかちにあゆませ申我身がこしにのりたればとてやすき心の有べきかとしよりたる母上をのせてかけとてこぼれ出るげにく是も道理とて馬をたてゝ母をのせみやこに名残うき思ひものうき事にあわだぐちわれをばとめよ關山玄なのすさまじさにすきふる雪の下道をあとよりも誰か大津浦きえはや爰に栗津が原思ひはなをもせたの橋野路に日暮て篠原やうきふしづげきかりの宿の夜ごとに物や思ふらんこのほどは心のやみにかきくもりかゝみのも見もわかず名はさめがいときくからにふかき心はいづみかない

といなみだのおほかるに雨山中やとをるらんあらしこがらしふわの關月のやどるか袖ぬれてあれたらやどの板間より玄ぼりかねたるたもとかな夜はほのぼのとあか坂やうちこそはたれくんせ河うゑしさなへのいつの間に黒田とは成てはらむらん夏はあつたとなるみがた三河にかけし八橋のすゑをいづくととをたうみ戀をするがの富士の根の煙りは空によこをれてくゆる思ひは我ばかり伊豆の三島や浦島があけてくやしき箱根やまさがみの國に入ぬればなをうき事をきく河の宿にもはやく着にけり梶原道よりもはや馬をたて司土御前をばきく河の宿迄めしぐして候道の草ばの露霜となしをやせんと申す賴朝聞召れて鎌倉までめしぐせよ尋ねべき子細有承て司土を大御所さしてかき入る折節有合大名連所せきまでなみゐたり司土こしよりをりかゝみをも見わかずしはるかにざしきのあひたるをわがためぞと思ひ人々の方をうしろになしつゝめどこぼるゝなみだの色みだれがみ

をつたひてつらぬく玉のごとく也やゝ有てより朝御
對面の其ためにあをかり衣にたてゑぼしめし和田ち
ちぶ左右にして御座になをらせ給ひいそのせんじが
むすめ司土とは女房が事か四國九國のたゝかい合戦
は珍しからぬ物がたり義經一人合戦世を治めたるこ
うにあらず頼朝がいせいによつて諸國はをのれと玄
づまりぬ世は我世にもあらぬには兵法のじゆつも叶
すとをくいてうを尋ぬるにけいかしんぶやうはんよ
きがくびをかつて志くわうていをねらひあはうごん
迄のぼるといへど運つきぬればうたれぬさしもなだ
かき弓取もきんの音にとらかさるいわんや義經はけ
いかしんぶやうはんよきほどはよもあらじましては
んくわいちやうりやうがいきをいにもをとりたる義
經一人戰ひ天下にみちし平家をかたぶくべしともお
ぼえずより朝がいせいのおをき所なるべしそれによ
しつね此世をくつがへさんと思ひ立義經といぢみし
あひねんふかく定なきちぎりをこむる玄づかには心

をゆるすべからずたとひ女の身なれどもおんみの心
ふかきをがうてきとする也何様ひくて定なき遊女の
身と有ながらさしも頼朝うらめしき草のたねをつぐ
ときくやあいかにとの御誕なり司土うとましげにし
て袂を顔にあてながらなくく申けるやうは人のち
ぎりと申は定なしとはいひながら生々世々舊縁のつ
きせずくちぬきえんにや昔源氏の大將もきりつばは
はき木うつせみのもぬけの衣きたりしあまにもちぎ
り給ひぬ若むらさきすゑつむ花もみちのが花の縁あ
ふひさかき花ちる里すまや明石みをつくしけきやよ
もぎふゑあわせ松吹風や薄雲それのみならず源氏は
六十帖の物語はかなきちぎり是ををし一じゆのかげ
や一がの水をくむこともたしやうのえんとこそきけ
とめる人もいつまでぞいつ迄草のいつまでとしもが
れゆくを志らぬぞと袂をかほにをしあてゝなくより
外の事はなし頼朝大きに腹を立給ひことばをゝしと
申せ共いつ迄草といひつるはかべに生ふる草也へい

ちにねをさすだにも秋はてぬれば玄もがるゝまして
やかべにつかぬまのねをかくる草なればみのあきは
てぬそのさきさかりの夏にかるればいつ迄草とは
いふさればにや玄づか我身の上をくわんじ源氏によ
そへ六十帖所々かたりつなりそれはともあらばあれ
いつまで草といひつるはよりともがことを申なりい
ま世に出てあめが玄たを我まゝにするともいつまで
さかふべきぞと申つる處それは玄づかゝいはずとも
うひてんべんの世の習ひあすまでたのむ事や有玄か
りとは申せども世に有程はいつまでも久しかるべき
ためしにかねては松をうゑをきすみよしとこそいは
ふなれみやうをんじしやう中々うつろひやすき世中
のいはへばかなふ事なるにそれに玄づかなんぞ其源
氏の物語にいつまで草といひかすめ頼朝が身の上を
てうぶくするとおぼえたりかゝるふしやうをきくみ
みはゑいせんのながれあらざればあらふべしと覺え
ずと御座敷をづんとたちいたあらゝかにふみならし

ない所へ入せ給ひけりれんざん有し人々一度に座敷
をはらりとたつこゝろぼそくも司土たゞ一人ぞ残り
ける去間梶原は思ふさまに玄すまし内々うちはらひ
玄づかゝあたりへ立寄て是は公方の御座ちかしこな
たへ入せ給へとてともなひ出したりけるがいや／＼
かゝるめしうどなんどを時刻うつせばないえん有今
夜のうちにたいないをさがしてうてきの御すゑをか
らさばやと思ひ宿を取てをしこめ日の暮るをぞ相待
けるさすがに人のせんどなれば最後を知らせて其支
度あらせばやと思ひ司土が宿へうちこへ今夜みうち
よりたいいないをさがし申せしつけむとの御誕の候お
ぼしめたることのさふらはゞ母ごせんに何事をも仰
脱字アルカ
のせんじ娘にいだき付つゝ人の親のならひにてあし
き子のあまた有だにも別れといへばものうきにまし
てや申さんみづからはたゞ一人の司土御前みめかた

り子をさき立何と成べきぞいかなるてうてきげきし
んも女をころす事はなしたといけんかくあらけなき
ゑびすのすみ家なれどもさかりの花を風なふてきり
からしたことや有うたてかりける鎌倉のまつりご
とゝかきくどきりうていこがれなきにけり能々物を
あんするに頼朝の御誕はゆめ／＼もつて有まじいた
だ是はざんしむのなせる所成べしこともなのめの時
にこそ人目もつゝみはづかしけれ御所中へまいり北
のたいへ此事を申さばやとおもひ司土御前にいとま
をこい御所中へ參り然るべき方に付て志づかゝ事を
申上る北の御方はをりふし御きげんめでたくて人の
親のならひにて子を思ふ道はあさからぬぞたといい
かなる仰成ともみづから心得てさふらはゝなどかは
たすけざるべき其上是は時刻うつしては叶ふべしと
もおぼえずはやとく／＼との御誕にて忝も北のたい
奉書をくだし給へば司土がはゝのうれしさを何にた
とへむ方もなし鳥ならば一飛にとんでもつきにけれ

共女の身のこの程の思ひにやせをとろへ夢路をそへ
るごとくたゞ一所斗におどるやうにぞ覺えける

角て梶原は日もいりあひの鐘をきゝこし一ちやうよ
ういしけいごのもの四五人けしからぬ姿にていでた
たせ司土がやどへをしよせてはやめされよと申玄づ
か此由見るよりも今を最後の事なればからあやのふ
たつぎぬかけおひ守りかけながらしゆへんに御きや
うとりぐしてこしの前へぞ出にける我よりもさきに
涙はたれをさそふてさきたつぞやなどやかんろの母
上の都のうちを出しよりかゝるべしとも志ろしめさ
れずやとてもかなはぬそせうゆへけさ御所中へ出ら
れつる面影計のたちそひてけさの別れを限りぞと知
らで行つるはかなさよ親は一世子ヲ脱スルカときくなればめいど
に又ぞあふべきかそれもこうくわいすべからずそれ
人間の習ひにてすゝみ志んだきとにかくにものうか
るべきうき世かな心に任せざりけるはしやうじ無常
の世成けりか様にかきくどき最後の輿にのり給ふの

るかとすれば武士どもこしをちうにとばせ由井の汀
へいそぐ爰にてたいないをさがさんとたちかくす所
に土肥次郎實平は鎌倉のけいごにて暮れば十騎廿騎
にてかまくら内をまはりしが何とは知らずはまばた
にあやしく人の見えければ馬打よせてたそと問くる
しうも候はず梶原是にありといふいそぎ馬よりとん
でをり何事にやととへば玄づかゝたいをたゞい
まさがすなりと申すそれはよくこそ玄たゝむれさり
ながら此邊は若宮ちかき所也是より少引のけなごい
が入のさんまいはいしかりなんと申おふ尤とどうじ
てまたこしよせてうちのせておうなごいが入江へい
そぎけり司士此由見るよりも是やめいどのかしやく
かきやうくろうのたびもかくやらんかねて一世とき
ひたりし親にはいきて別れてまたもあはぬによみが
へりくらき闇路を入行や當鎌倉の貞神はかの若宮に
玄くはなし然も八幡大菩薩そうべうの玄んとしては
うじやうゑをなしたまふ毎年八月一日より一切のう

じやうのとられて玄すべかりしをあたいをほうじて
かいあつめ同じき月の十五日にいはし私本ノマのながれに
はなちてたすけ給ふ也此ことわりに任せて放生會と
は申也神々ならばきこしめせ人こそ人をころすとも
わくわうのかげのあまねくば我をたすけてたび給へ
たといいのちは露の身のきえやすきならひにてなげ
く玄るしのあらすともいきて別れし母上を今一度見
せてたび給へ神は歌にかならずなふじうましますこ
となればこしをれながらはうたいのくゑいをよみて
まいらせむ

なとされはなにはにしてし浦浪の

玄つかもあらき濱の名はたつ

かやうに詠じて若宮にゑかう申されたりけるになに
とは知らずうしろに人のよばゝるこゑがかすかにこ
そ聞えけれいごのものきもをけし何事にやときけ
ば司士が母のせんじのよばゝるこゑはかすかなり梶
原はやくきつけもし奉書やくだし給ふらんにたす

けやせんくやしや何とも是非のなきさきにはからへ
やれ兵うけ給はると申てこしをちうになげをとしき
づかを取てひきいだしがいせんとせしとき土肥の次
郎ふさがつてさねひらかうて有ながら若奉書やくだ
し給ふらんにあはてゝ後の大事とをしとめたりけれ
ば梶原いといかつてたゞがいせんと申せんじは奉
書これありとよばゝりさけびはしれば玄づかは母の
こゑをきゝておそしともだへこがるゝをものによく
よくたとふればつみふかき罪人ぐしやうしんの手に
渡つてむけんたいじやうのそこにをとさるべかりし
を六道のうけの地藏の尺杖錫ノ假借
リノ誤カをからりとうちふりから
かみさんまいとよばゝるかけすくいあげたすけんと
玄給ふも是程ぞ有つらん扱こそ奉書よみあげて司士
も母もろともに同じこしに取乗きらくのゑみをふ
くめば司士は母にすがりつみて是はゆめかといひけ
れば母はむすめに取付夢とないひそうつゝぞさもあ
れあやうかりつるわごせがけふの命とはらゝとな

きにけりうき時は道理ながすなみだはことわりやう
れしき今何とてかさのみなみだのこほるらん角で
司士御前をば土肥の次郎にあづけらるゝ賴朝よりの
御誕には男子ならばてうてきにてちからにおよぶべ
からず女子のたいと有ならば母がたからたるべしと
かねて御下知ぞ下りける玄づかも母も都に有し時に
は義經の忘れがたみにてましませばなんしに生れ給
へとねがう心を引かへてたゞ女子になれとぞいのり
けるされどもかなはぬうき世の有さま玉をのべたる
ごとくなる若君いでき給ふ梶原はやくきゝつけ源太
をつかはしいはするやう御さんすでに平安に御座有
由をきこしめし男女子のあひだを見てまいれとの
御使に源太が参りて候と大音上でよばゝる司士も母
ももろ共に源太がこゑときくよりもあはう羅せつの
使のゑんまのせめをつぐるかときもたましも身に
そはず母のせんじいそぎ出なふいかに源太殿女子を
まうけてさふらふにかねてよりの御約束のごとく母

にたべと申かげすゑきひてそれは何より目出度御事
候よ何様いまのまれ人をそとおがみ申て後ともかく
もと申すゑづか産所よりたち出源太にうちむかひつ
つなくく申けるやうはなゝいろの島に八いろのふ
ねをかくすとやらん申たとへのさふらふなれば兎に
角に源太殿をこそたのみ申さふらはめ是々御らん候
とて玉のやうなる若君をいだきあげて見する源太是
を見てあらいつくしの御若君や候是程の御事をわたく
しにては叶ひ候まじ御所中へ御供申御目にかけや
がて返し申さんとたもとにつゝみふところにをし入
駒ひきよせてうちのり油比由井ナリの汀へいそぐ二人はあと
をしたひてなふせめてなくこゑを今一度きかせてた
ばせたまへやとよばゝりさけびはしけども馬にはい
かで追付べきあら情なや源太油比の汀にて取はづし
たる體にて浪うちぎわへぞをとしける礎うつ浪なく
こゑ濱松をさそふ風の音身にしみくと思へども取
もといめぬ事なればあたりにまろひふしこがれこゑ

をならべてなげゝども源太は少もあはれます沖より
浪がどうときて玉のやうなる若君を落花のごとくに
うちくだく其後むノ誤カふちタチをしとゝうち源太は家にかへり
けり司土も母ももろともにちりたるしがいを取あつ
めたもとにつゝみかほにあてりうていこがれなきけ
るがゑづか思ひにたえかねて身をなげんとせし時に
母のせんじ是を見て道理也ゑづかごせ何に命のをし
からんわれもつれて行やとて二人手に手を取くんで
身をなげんとしたりしをおりふし有合人々がすがり
付てぞとめにける思ひきりぬる道なれども心に任せ
ぬ事なれば此人々のゑうたんをあはれととはぬ人ぞ
なし角て日數をふるほどに御所中の女房たち大名達
の北の方ゑづかが思ひさこそやととぶらひとなづ
けて其ふみどもは數知らずゑづかもしゆせきよに
すぐれ源氏いせ物がたりをばうちをくふみのことば
にもたゞ此心計也御所の北の御方仰出されけるはう
ら山しやな司土はいかなるちへのふかうしてをんな

ののふをのこさずしゝたる事のゆゝしさよそれ我朝の女はやまとことばをむねとして歌のみちをしるべしさのうのみこのやくもたつと歌に詠じはじめ給ひし我朝のまほり花郭公と月雪はあだなるものと思へども玄きてんべんのむしやうをあらはすところ是也佛もたゞ此事を一大事とて五十年ときをかせ給へどもしむなふふかうしてとゞかぬことばなりければふせつふかしきなるがゆへたゞふかとくとばかりにてことばにのべつくされず爰をもつてまさしくもふりうもんじなるゆへぶつそふてんと是をいふたといふばそくうばいにてかたちは女成ともさとりをうけば佛成べし殊にかの玄づかはないてんげてんくらからず玄かも我朝のふうそく和歌の道達者也いまや玄づかにより合て源氏伊勢物語のふかき心を尋んもつとあそばせ給ひけるに北の御方仰けるはいかに玄づかごせん歌のふしんはさまぐをゝしと申せどもいせ

ものがたりのあふぎをくはしく知る人まれなれば玄づかごせんが情にをしへてをさせ給へやと仰出されたりければ玄づかうけ給みづからなればとていかでかそのあぶきをば知り候べきさりながら心得てさふらふ程をば申べし抑いせ物がたりと申は業平の中將の一生界をかたる也業平と申はへいせい天皇に第四の御子あはうしんわうに第五のわうじ母はくわんむてんわうに第八の御むすめいとうないしんわうの御子也てんちやう二年きのとのみのとし生れ給ふしゆんわ天皇の御時七歳にてわらはでんしやうし給へりふかくさのみかどの御時春日のりんじのまつりのとき内裡よりれうのすがたに出立てすきびたゞのかぶりをきこせつのれいしむにてたちしゆへしのぶすりのをみのころもをきたりし也又承和七年にうちのくらんづにふせ給ふこれたかのみこの御時かたのみかりにあひぐせり彼業平の中將はしやばのほうさんつきはて給ひ大和の國なかの郡有原といふ所にみは

かをてんじ給ふ是迄は業平の一生界をかたる也此物語をとうぐうの御所にてつゝられるにふるされ色のきぬきたる人一人來りゆゝしくも此物がたり作り給ふ物かなそれがしも歌二首入むと有し時にいづくよりの御使ぞとひければ其返事にをよばずして神風やいせのはまをきをりしきて

たひねやすらんあらき濱邊に
思ふ事いはてたゞにややみぬへき

我にひとしきひとしなければ

かやうに詠じたちかへらんとし給ふとき人々たもとにすがりつひてさも候へいづくよりいづかたへ御とをり有ぞと申せば是はいせよりと計にてけすがごとくに失給ふさてはうたがふ處なし伊勢太神宮の御使成と心得このことわりに任せつゝいせ物語とは申也北の御方きこしめしあら殊勝やさふらふさてういかふむりと申はいかなるいはれにてさふらふそれはふか草のみかどの御時春日の祭りのときだいりよりれ

うのすかたに出立てすきびたいのかふりをはじめて
給りしによつてういかふむりとは申さふらふおうこれもはや心得ぬ其外のふんにはながめあかしつみをつくしとぶほたるぬきすといふことぞたのむのと
りみのしう衣地いろのたけしのぶすり都どり此玄な
玄のふしんはいかなるいはれにて候ぞ其玄なく
のふしんはしんごんのごくひしあはんうんのたうに
あはらかけやのこもんごちの如來のしゆじとして四
季てんべんのしきさう雨土ひらけはじめにちぐわつ
しやうの三くわううじやうひじやうのたねとしてい
んやうふたつ和合して玄きてんべんの色をなす春の
色はあをけれど何とて花はくれなるの色にはいで、
ひらくらむ夏の色は赤ければてる日もやがてごくね
つす秋の色はうれいにてむしの啼音はことわりや冬
されぬればねはんにて雪ふる山は白妙の是を生老病
死の玄きさうさだめなき事を三十一字の歌によむこ
の歌のすがたはしやはせかいの人の身こくうとをな

じ事にて佛としゆじやうへだてなしされば歌をよく
よめば神も佛もなうじうあつてゑゆじやうもやがて
佛となるとときおしへ申とき北の御方をはじめまい
らせつゝ其外の女房たち和歌の道はくらからずたう
とくむじやうぼだびのしんによの道に入給ふ角てう
かりしかまくらきのふけふとは思へど女房達のなさ
けの得さりがたきにほだされてふかくさのいみもは
れにけり大名かうけさしあつまつてさゝやき申され
けるやうは彼ゑづかゝ舞と申すは日本一の上手也そ
れをいかに申すにあんじやうの夏の比ひでりをく
つゝき草木もことぐくせいめうのころべからず此
事天下のせうしとてくぎやうせんざまちくたりそ
れ龍神のはらをやすめ神の心をとる事は女の舞にし
くはなしたれかめいじんなるらんと御尋有し時こむ
えの院の左大將すゝみ出て申されけるはたれぐと
申ともいそのせんじがむすめ司土と申しらびやうし
父は伏見の中將とて藤原氏のくぎやうたり其子に司

土生年十七歳に罷成天下にならびなし是をやめさる
べからむとせんざ申されたりければおふもつともと
きせられやがてちよくしをたてないし所へめされす
るがの舞をまひけるにげつけいうんかくひやうしを
うつてはやされたり舞のそでへうやうしてんにんの
かけるごとく也うたな聲はさながらかれうびんがの
ごとく也きみをはじめたてまつりげつけいうんかく
かんにたへさせ給ふときてるひにはかにかきくもり
といろくとなる神もひやうしにあわせたりければ
雲へきらくにあつうしてゑんの雨こそふりにけれ
このほどてりし草木いつちうの雨をそゝげばみどり若
ばと成にけり扱こそ五穀葉はさかへねはふかくする
は雲井にのび秋は其身のまたきことすんのいなつぶ
玉にてしやくのほどけもなかりきしんも君も此舞
をかんせぬ人はなかりけりかゝるめい人たまさかに
まれにもいかで候べきいかゝはせんと内談す北の御
方司土が宿へ御使有はゝかりをゝき事なれど日本一

の舞とやらんを一目見ばやと仰けり司土こたへて申すやうまはぬとがめにふたつなき命をめされさふらふともまはじとこそは思へども君が情のふかれればまはではいかいなどしたうちとけて申けり北の御方きこしめしあらうれしやさふらふまはせ給はゝ若宮殿のすきらうにてしんちよも諸人迄も目をおどろかす物ならばひとつは神のかいなさし又はわが身のいのり彼是もつてめでたしと仰出されたりければ司土も是にどうし吉日取て若宮にてかいなさしと風聞將殿の御座敷にはまんまくをひかれたり北の御方のざしきには戸にはみすをかけうちにきちやうをひかれたり諸大名はくわいらうとおほ庭にところせきなくなみあたり費戻群集は中々に申に及ばさりけり彼若宮と申はうしろは山前は海左右には軒をならべみんかの門家／＼むねの數おほふしてたいたうのみやうじうの津ともいつゞべし荒面白や寺／＼のろう門

はうんこんにさしはさみ峯の嵐は松にふき汀の浪はよせひいてむしゆのざいこうをあらひけり沖のかもめばかいじやうの志ら浪よりもたちぬけりとうなくしんによのをきのなみほつしやうのきしをよせてうつだひじだいひの若宮はむみやうの闇をてらさんと神樂おとこのしやうこのをときねか袂になる鈴いつれをきくもいさぎよくわくわうのかげ涼しく司土が舞のしやうぞくはちばどの御やくふへはちゝぶの六郎どのつゝみはくどうすけつね彼すけつねと申はすすでに當日にも成しかば若宮殿の志やうめんに大だいりにもんやくの有し時つゝみを打てめいよをすきんろうきんちうのひやうしをだにもはやしたりし上手にてさゝるゝも道理也下武藏の住人なかぬまの五郎はとひやうしの役也司土は是にはやされてなにのなさけにかまくらにて舞まふべしとおぼえずとたもとを顔にをしめて泣より外の事はなし母のせんじ是を見ていかなる事ぞ志づか御前かほど目出度御座敷にて舞まはぬ物ならば御とがめをばいかゝせん

まづ庭はらひさふらふとてさきに立てぞ舞たりける
もとより舞は上手かたくりしほりはきをうたいすま
したりければ司士此由見るよりもあら痛しや母上の
何に心のなぐさみてかやうにうたい給ふべきぞ是も
たゞみづからをたすけんためのまいぞかしそれにみ
づからたゞいまものうき心あるまゝに舞まはぬ物な
らば母のとがめをいかせんまはばやと思ひなをし
うちぎぬのそでひきろひ袴のおひさしはさみ立出た
りし心のうちさこそやと思ひやられたり見渡せばれ
きくと座せられたる人々に和田ちゝぶ殿江戸笠井
ちば小山宇都宮いづれか日比我まゝにふるまはざり
し人やあるぎけいと妻がカとありし程は大名かうけをそ
れをなし舞まはせて見る迄は思ひもよらでありつる
はきのふは人を玄たがへけふは人に玄たがへりてん
もはづかしとはづかしながら玄づかごせん時の祝言
にんのごすいのはふさめぬると思へばよ所のみる目
成ければ君をはじめておがむには千代も經ぬべし姫

小松とうたいすましたりかたちは日本一也聲はたゞ
かれうびんがめうのひよき也けりうつぶくもみな上
手ひらりとあぐるかいなにてん人もあまくだり地神
もうごく計也いりまひに成ければ

志つや志つ賤かおたまきくり返し

むかしをいまになすよしもかな

とうたいすましたりければみすもきちやうもさゝめ
きさけぶところに頼朝みすをおろさるゝゆへをいか
にと申にあづやあづあづかをだまきくり返しむかし
をいまとうたふたはよし野て別れし義經をあたふ所
それはよりも見ぬところちゝぶどの申さるゝむか
しをいまとうたふたはこていのむかしいまにき世は
おさまるといふ處目出度覚えて候にみすをあげられ
候はでいかゞと申されたりければ御れうげにもとお
ぼしめしみすをさらりとあげ給ふ司土是を極樂淨土
の玉すだれかんじゆまんじゆのたまのはにあぐれば
いよ／＼ひかりますぎよくたいつゝがなふしてあめ

がしたこそどかなれと三返ふんではればみすも
きちやうもさゝめきほうしやくゆるく計也頼朝かん
にたえかね給ひてとにかくなをさし給ふ大名かうけ
ていしやうにころびおちこゑをあげてぞおめいたる
さてしも舞はおさまりぬ君よりの御誕に駿河の國神
原八十餘町たびにけり大名連のほうろくたからの山
を前につむゑづかはいよ／＼是にはぢいつぞの程に
舞まふてはうろくにほころべきかへせばおそれあり
やとかまくらうちのみやしろみだう寺にきしむしよ
しつねの御いのりまたは我子のためにとひとつも身
にそへすみやこへとてぞのほりける

とかし

去程に判官やまぶしのすがたをまなびくだらせ給ひ
けるほどに加賀の國あたかの松にほどなくつかせ給
ふほうぐわんまつを御らんじてあらゆふちやうなる
すがたかな四國西國みやこにてそのかずまつをみて
あれどかほどゆふちやうなるすがたはなし名のなき
事はよもあらじたづねてまいれむさし辨慶承てまつ
のあたりをみてあれば十四五なるをさきとしてわら
むべ四五にんまつの葉よせてぞるたりける辨慶する
するとたちよつてやあいかにわらはべ當國にてこの
松はなにのまつといふぞこざかしきわらはべがす
みいで、申さむ候たうごくはさかをへだてゝこなた
くさふかき遠國にてかほどの松に名づくる人も候は
すさりながらざい中將のながめにはあたかのまつ
共よまれて候それのみならず鳥羽院の御内なる佐藤

兵衛のりきよはうはのそらなるこひをして北國しゆ
ぎやうに出るとて西行とかれは名のるかのさいぎや
うのうたにはねあがりのまつとよまれたりなふきや
くそうと申けり判官きこしめされてもの聞給へかた
がたくわんがくいんのすゝめはもふざうをさへづり
ちしやのほとりのわらはべはならはぬきやうをよむ
とはよくこそ是はつたへたれこざかしきわらべに引
出物をとらせこれよりおくひらいづみへのじゆんだ
うをくはしくとへべんけい承てをひのなかよりもい
ろよきあふざとり出しわらはべ共にとらせやあいか
にわらはべ是より奥へはいづくをどなたへとをるぞ
とくはしくたづねとふときにこざかしきわらはべが
すゝみいでてもうすさむさうらふこれよりおくへは
あまたのみちが候まづかみみちしもみち中みちとて
三つ道が候がいづれも是がなんじよ也先下道のなむ
じよをかたらば聞召るべしくろへは四十八ヶせ親玄
らず子玄らずいちぶりしやうとうたのわき二三のは

ざまもがみ川あねはの松かめわり坂と申つゝ四十二
ところのめいよのこれがなんじよ也少人もおはしま
すがいかでかくだり給ふべきさてかみ道のなんじよ
はみやこのはるは過ゆけどこしちのゆきがまだ見え
ず去年の雪のむらぎえに今年のゆきのふりつもり谷
の志た水おちあひてみづかさまさり鳥ならでかよふ
べきやうさらになしなかみちと申は道もじゆんだう
にて人のこゝろもぢひなるがこゝにひとつふしづ
ありかまくらどのよりもこの國のとがしどのへふれ
状がくだつて城くわくをかまへやまぶしきんせいこ
はくしておとゝひの暮ほどに九人とをる山伏をはう
ぐわんとのゝ御つれとておさへて切てかけられたり
きのふのさうてうに六人とをる山伏を五位殿の御つ
れとてこれをも切てかけらるゝゆふべも五人きらる
るけさも三人きられて候かほどなるなんじよをたし
やうごうはふるともいかでかくだり給ふべきなふき
やくそと申ける

判官聞召れてさてはなにがし一人がゆへにゆく衛も
しらぬ山伏たちのさやうにいかほどもきられさせ給
ふことよ行てとぶらはばやとおぼしめし五人のわら
はべをさきとして松原に入て御覽すればけにも去年
のふゆのころよりもきさらぎ下旬迄きりかけたる事
なれば百ばかりほどまつしぐらにかゝる十三人の人
人はれいじせんぼうをたつとうあそばすそのなかに
べんけいせんぼうをばよますして爰かしこをはしり
廻て首共をひけんし五人のわらむべをはつたとにら
んでこの國のとがしさなにもぢらぬといふわらはべ
聞てはらをたてこの國のとがじとのゝ物ぢろしめさ
れぬいはれは候べんけい聞いていでゞゝとがしのもの
しらぬいはれを語て聞せんらんぎやうふぢやうの大
ぞくのくびをはるかのうへにかけびんぱつをまろめ
げだつどうさうの種々のほうえを身にまとひほうか
いたうちやうにしてみろくのしゆつせに生れをなさ
うすほうしのくびはるかの志もにかけたるはさても

のをばしらいでかけぬるわらはべ聞てうちわらひ
よこ手をちやうとあはせわかれたりきやくそうそれ
をとがめ給ふかうへにかゝつたそくのくびにあまた
のたんざく付られたりむかふはそつてさる眼こびん
の髪のちゝむでいろの髪ろきをばかまくらどのゝ御
舍弟に源九郎義經の御くびとがうしてはるかのかみ
にかけられたり又しもにかゝつたほうしの首にあま
たのたんざく付られたりかう申てあればとてはらば
したゝせ給ふなよ御坊のごとくにあく迄せいはたか
ふてきはめていろはくろくしてまなこにくちをも
つたるがもの云たるこはつきのぎごとなき法師をば
判官殿の御うちなるひざもとさらすのさいたうの辨
慶とがうしてはるかの下にかけられたるぞ御坊とい
ひければさしもがうなるむさしばうも我身のうへと
聞なしてひざふるうてぞ立たりけるべんけい聞てさ
てはとがしはなにがしが面をばよくも見しらざりけ
るや其儀にてあるならばなにがし一人うちこえとが

本ノマ
のをばしらいでかけぬるわらはべ聞てうちわらひ
よこ手をちやうとあはせわかれたりきやくそうそれ
をとがめ給ふかうへにかゝつたそくのくびにあまた
のたんざく付られたりむかふはそつてさる眼こびん
の髪のちゝむでいろの髪ろきをばかまくらどのゝ御
舍弟に源九郎義經の御くびとがうしてはるかのかみ
にかけられたり又しもにかゝつたほうしの首にあま
たのたんざく付られたりかう申てあればとてはらば
したゝせ給ふなよ御坊のごとくにあく迄せいはたか
ふてきはめていろはくろくしてまなこにくちをも
つたるがもの云たるこはつきのぎごとなき法師をば
判官殿の御うちなるひざもとさらすのさいたうの辨
慶とがうしてはるかの下にかけられたるぞ御坊とい
ひければさしもがうなるむさしばうも我身のうへと
聞なしてひざふるうてぞ立たりけるべんけい聞てさ
てはとがしはなにがしが面をばよくも見しらざりけ
るや其儀にてあるならばなにがし一人うちこえとが

しが城のていを見ばやとおもひきみの御まへにまい
り此よしかくと申あぐる判官きこしめされてこゝろ
がはりかむさしこゝろがはりに及ならばみやこのつ
ちとはなさずして北國のみちしばとならむ事こそく
ちおしけれべんけい承てこは御説ともおぼえぬもの
かなかほどやま伏きんせいのところを一人ならず二
人ならず十三人わめひてとをりあやしめられてはい
かにちんするともかなふまじまづなにがし一人うち
こえとがしが城のていをみんするに見おふせんはふ
ぢやう見そんせんは治説なり見おふする物ならば山
伏の法にてあるあひだよろこびのかひを二つ三つふ
かふす又みそんするものならばさいごのかひをたゞ
ひとつふくべきなりかひばし一つたつならばすはや
むさしめがさいごぞとおぼしめしきたかたのみまん
堂にてきよきじがいをおはしませいとま申てさらば
とてたちはなれんとしたりしが思へばこれがさいご
なりはうばいの人々に名残やおしくおもひけん龜井

かたをか伊勢駿河まちかきさまにちかづけていかに
かたぐむさしめ一人とがしのたちへうちこえ城の
けごを見そんじたらば辨慶が腹きらふす君御はらを
めされなばしでのやまにてまち申さんおかたくさ
きにもはらをきるならば三津のかはにてまち給へい
とま申てさらばとて名殘おしげにわかれけり

かくて辨慶ひたのたくみがうつすみなはにてはあら
ね共只一すぢに思ひきつてふぢづか手とりうちすぎ
さしもまちかくるとがしのたちへ入たるは人にかは
りておばえたりやまぶしの法にてあるあひだれいし
せんぼうをこそよむべきにむさしなにとか思ひけん
たか念佛を申あげつちもんよりつつといりとがしが
もてのやぐら十三ところわきのやぐら九ところ二重
三重にたかやぐらをあげさせひがしおもにくらを
き馬を四五十疋引立てをひたりけりにしのとをさぶ
らひをみてあればとがしがわかたう百人ばかりなみ

ゐてひきめくつたり矢はひだりごしやうぎすごろく
にこゝろをいたるところもありちやく座をみてあ
れば四十ばかり成男のひようもんのひたゝれにゑぼ
しのさしきをたぶくとあけさせふんとうにかゝり
てわかさぶらひにすごろくうたせじよごんしてゐた
りけるはこれぞ此國のとがしのすけとおばえてあり
あらくちおしやときこそあれ日こそあれとがしのい
でたるところへなにがしきたつたるはつめたるごう
と覺えたりしのばばやとおもひしが見えたる事もな
きさきにかたきにけごを見えられてあしかりなんと
ぞんずれば大のこはねをさしあげて熊野山のやまぶ
しが佛法しゆぎやうのそのために出羽のはぐろへと
をり候ときれうたべとこうたりけりとがしこれをみ
てもつたるあふぎにてたみのおもてをちやうとう
つてあれを見よ人々にん夏のむしとんで火に入と
よくこそこれはつたへたれこゝろをつくして待かく
るさいだうの辨慶こそ只今きたつたれうてはれから

めよさしなはなんど、ひしめひたもとより武藏我身のうへとは知たれどもきかぬていにもてなして大ぼくこぼくの花ながめそらうそぶひてぞ立たりけるちこくもうつさすとがしがわかつたう百人ばかりまつくろによろひむさしを眞中にとりこめたりべんけいこれをみていや／＼はやりうのわかもの共にひしひしとうちとられかなはじと思ひとがしがゐたりしえんのはなへづんどあがりとがしをはつたとにらんでいかなるやしんちやうきやうのものをめしをかれたゞいま参りたるほつし迄うき目を見んするやらんとよく／＼承て候へばこのほつしが身のうへと聞なして候はひが事候がとがしどのとがし聞てさて御坊は判官殿の御うちなるひざもとさらずのさいたうの辨慶にてはなきかどこに候それ山伏の名よのつねおほしと申せども判官坊ひざもとさらずなど、いふ山伏の名今こそ聞いて候へとがし聞てさやうにさいかく廻てべんせつのあきらかなるは扱辨慶にてはなきか

武藏聞てさいかく廻てべんせつのあきらかなるがべんけいならばさの給ふとがしどのも才覺まはつてべんせつのあきらかなるは扱御身もべんけいよとがし聞て何ともせんせんせよたゞ辨慶と云べんけいあまりにちんじねもしかう申ほつしがひたいにべむけいといふ字ばしすはつて候か字のすはつたるとおなじ事かまくらどのよりもたんじやうの有うへはうたがひあらじといふむさし聞てたんじやうはよもあらじたばかり事にいふぞとおもひしせうのあらばみんとこうたあらむざんや辨慶がいくほと命ながらへむとてたんじやうこうつるやさしさよそれ／＼とありしかば承ると申てとがしがわかつたう四五人ばらりと立て八しやくびやうぶをとり出し武藏が前にさつとたてゑづをさらりとなげかけべんけいに見するうつしもうついたりかきも書たるゑしかなむさしがたけたかくまなこのにくちをうついてありあまさへ

はむさしめがひだりのまなきにあざのあるまでう
ついたはのがれつやうはさらになし武藏今はことば
をかへてちんせばやと思ひなふいかにとがしどのい
せんこのほつし熊野山伏とのべて候は御身のこゝろ
をちつと引見申さんがためなりこれこそ南都東大寺
のくわんじんひじり候よとがし聞てたつとう候南都
のすゝめにて候はくわんしんちやうはおはすらん
おがまんとこはれたり武藏なんとのすゝめとはのべ
たれどもくわんじんちやうのあらばこそもたぬとい
はばばううちにくちふせられうすもつたといはんと
すればあらばこそせひをむさしわきまへかねて立た
りしがいや／＼持たといはばやと思ひおろかなりと
がしどの三國一大がらんのすゝめをせうするひじ
りかくかんじんちやうをもたであるべきかせひ見參
にいれんとてをひをひつたとおろしからげなはぶる
ぶるとひとつひて上だんに手を入れからり／＼とさが
しけれ共みやここにていれざる事なればをひには更に

なかりけりむさしもありのくちおしさに目をふさぎ
なむや八幡大ぼさつげんじのうち子をは百わう百代
まばらんとの御ちかひと承りて候ぞ一つのすいさう
を見せしめ給へやとからり／＼とさがさるゝげにや
八まん大ぼさつのあたへたびけるかみやこにてこの
たびいれたりともおぼえぬせんのわうらいのまき
もの一卷候ひけるををつとつてさしあげて勧進帳は
これにありおがみ給へとみせにけりとがしこれを見
さらば是へたべおがまんとこはれたりむさしこのく
わんじんちやうがまことのくわんじんちやうならば
いかにとがしがおがまじといふともおさへておがま
すべけれ共これはしせむのわうらい也あやしめられ
あしかりなんとぞんずれはおろかなりとがしどの恭
も十膳普なりていわうだにもかぶりのこしをかたぶけおが
ませ給ふくわんじんちやうをいはんや御身は大ぞく
の身として手にとりおがむものならば五體すくむで
立どころあやうししとおどすとがしむさしにおどさ

れさらばそれにてあそばせこれにてちやうもむを申
さんむさしこのくわんじんちやうをよみおふせんは
ふぢやうよみそんせむは治定よみそんずるものなら
ば人手にはかゝるまじあれにつるて立たるしらえの
なぎなたひんばふてとんでかゝらむ若ものどもをお
もひのまゝにをつぱらひあれにひかへてたつたるあ
しげのむまのつめかたさうていかにかけあしのはや
かるらんにひんばふてうち乗てみまんたうに參り一
のたちにて御前がいし奉り武藏めはらをきらふすき
み御はらをめされなば十一人の人々もみな／＼腹を
きらふすいきてはこうをなさず共死てはこうをなす
べきなり日ごろ我きみ七しやうまでとちぎりをかせ
給ひたる愛宕のやまの太郎坊ひらのやまの次郎坊や
ま／＼のせうてんぐてんのやしむ八しやうじんごつ
めづあはうらせついぎやういるいのをにどもをひき
ぐし候ひて本望なれば關東へせつながあひだにみだ
れ入てはこね山のたうげより黒雲をたなびきでんく

わうをとばせたまをみがくかまくらにしやぢくのあ
めをふらせやつ七がうをあらひながしにくかりしか
ぢはらをさうなくもころさすして百鬼神におほせ付
ねつてつのゆをわかしくちのうちへながし入六ふ五
ざうをやきはらひ七代子孫を取ころして本望をとぐ
るならばかんせうじやうにてあづ其あら人がみと
武藏めがあふがれむする事どもはあんのうちとおも
ひければちつともさはぐけしきはなし武藏此くわん
じんちやうをたかくもつてよむならばうしろなる人
によまれうす又ひきくもつてよむならばまへなると
がしにそれはといはれあしかりなんとおもひ六尺二
分の辨慶が七しやくゆたかにのびあがりしらうちて
の笠をづかうきつと着なして字ならば二くだり三く
だりそつとひらいてさうがんにをしあてゝなにとは
しらねども敬白とあげたりけりうやまつて申勸じん
のしやもんこくたんのちしきの状にいはく和州やま
しなの里東大寺のくわん進の事ことに十方だんなの

じよじやうをかうぶらむとほつすみぎのしいしゆい
かんといふにかのがらむのらんじやうはしやうむて
んわうのきさきくわうみやうくわうぐうと申はたい
しよくわんの御むすめしやうじんのくわんおんなり
玄かるにうろのしやうがいはあゆみをたかひにかく
るしやくそん又さうりんのけぶりと上り給ふ玄かる
にみかどきさきの御わかれたへにしてうんじやうに
くもりあればげつけいひかりをうしなへりかのつい
せんのために一字のがらんを建立し給ふいまの大佛
殿これなりみだうのたかさは二十丈本尊の御だけ十
六丈とをく異朝をたづぬるに大唐四十八ヶのだいが
らむにすぐれてんぢく祇園しやうじやにもこえまし
て我朝にならびなしさればしやうごん玄つぼうをち
りばめくわうえうらんけいをみがきみだうの内にし
ゆぎよくをかざりるりのかべしやこのたるきめなう
のゆきげたはりのはしら本尊はこんどうるしやなぶ
つならびに四てんはこがねをのべ十一ぢうのやうら

くこくうむかの風にみだれはなせうえんのたまのは
たかゝるぶさうの大がらんにらいくわふつてくわし
つすはめつのときにおひたがはずこゝにふかくさの
みかどのきやうさうこしのきざみにかうりよくしこ
とぐくみがき給ふこれはこれわうほうのはんじや
う也わうほうのはんじやうは天下のきつけいたりめ
でたかりける折節に東大寺こうぶくじ兩寺のあひだ
にしゆとけむくわをいたしたがひにはめつの火をは
なつまことにまゑんのしよいをなしけぶり庭に飛て
落らくわ雲をはしればぶつざう跡をけづりごぢの
はこやはつけうのぢくもはひとなす爰によたい
のみかどのきやうざうくわんじんのちからをはげま
すとはいへども三たい御くわんもはんさくなりめで
たかりけるおりふしにこゝに平家の大將ごくあくぎ
やくのげちに玄たがつて本三位中將玄げひら左衛門
ともかた民部玄げよしつがうそのせい三千餘騎治承
四年十二月廿八日に南都へはせむかふ南都のしゆと

ふせぎたゝかふとはいへどもほう末世につき忝もに
かいのさうもん手かひのもんにはうくわをせしむか
のみやうくわみちくしてだうとうそうばうじんじや
ぶつしんをきらひなく一宇ものこらずやきはらひ訖
けぶりうちやうてんにあがり雲と成てあらそひけれ
ば十六丈のるしやなぶつのみくしおちてつかのごと
し御しんはわひてやまのごとしこんじんせかいのし
やうごんをうつし奉るとうこんだうさいこんだうせ
つなが内にやきはらひおはぬかなしきかなやおんあ
ひべつりの生死のをくるまかれを見是をみるといつ
をかごすべきぞ御まなこしかと成て春日山にとびい
り給ふひくもびくにだうぞく男女のきらひなく大佛
殿のなごりをかなしみほのほのなかへとび入とびい
りやけ死するものはかずゑらずあなむふぞくのれい
ちのけさくわいじんと成てちにふまるきやうごうほ
ろびけいきよくたりこそたへぬ露じやうくたりた
まくのこりとゞまるものししやうきやうていのか

どにたちよりおばらくはねをやすむる爰にしゆしや
うばうひじりせんせいばうかすが大みやうじんの御
おげんをかうぶりくわんじんちやうをひたいにあて
をそれくほうわうの御方へそしやうを上らるゝほ
うわうこんしつをはこばせ給ひ肥後肥前ちくご筑前
豊前豊後日向おほすみさつま九國をよせらるゝ女院
の御かたより伊興さぬきあはとさ四國をよせられた
り四國九國よりかぢ千人ばんじやう千人そま千人三
千人かすが山へわけ入てざいもくを取て淀こづ河へ
くだす事おびたゞしゝ彼大もつせうもつをいかにと
してちきやうのおもてに引つぐべきとなけきかなし
むかつごうの涙きもにめいじ三ぼうのめぐみにより
たいこくよりもちしやのうしが來て一日一夜にひき
つけてうし大こくへかへりけり日本人よろこうでち
ぎやうのおもてみだうのたかさは廿丈本尊の御たけ
十六丈かうは八ちやうたもんぢこくぞうちやうくわ
うもく百よせんのふづくゑれいとつこはなさら本の

ごとくには奉るさりとはいへどみだうのくやう佛の
くやうかねのくやう三くやうをまだのべす此くやう
をのべむため六十六人の扱もこひじり六十六ヶ國へ
をの／＼廻てすゝむるところの勧進也いつしほんせ
む入たらんすともがらこむじやうにてはあんをんけ
らくのとくをかうぶり來世にてはぐせいの船にさほ
をさしせんえうのれんげにたはぶれんす事うたがひ
あるべからずなむきみやうけいとよみあげくる／＼
とひんまひて本のをひへなげいたるむさしがあり
さま人間わざてなかりけり

おひさかし

武藏坊辨慶はとがしのたちにて勧進ちやうほうがちやうをことくよみ上ければとがしよくくちやうもん有てまことに是は南都のすめにて御座ありけるをぞんじ申さで一時なれども次らずにたせ申つる事よさこそ佛神三ぼうもわれをにくしとおぼすらんそれこそなたへ申せとてべんけいをしやうせらるゝむさし安堵のおもひをなしいまはおひをこゝにをかばやと思がいや／＼忘れたるものにをひさがされあしかりなんとぞんすればをひかけながらざしきにむすとなるとがし御らんじてせうくわんじんにて候へどもとてまきぎぬ五十疋武藏のまへにつませらるゝとがしのきたのかたもまきぎぬ三十疋むしさが前にをかせらるゝそのほか心ざしの人々はむさしどのがまへにたからのやまをつむ辨慶これをみて

あらおびたゞしの御ほうがども候やたゞいまも賜はりたくは候へどもこれよりおくへあまたのなんじよの候へばこうする三月のころ都のやどへつけてたべと申とがし聞てきやうはなむでうととはるむさいつも云つけたる事なればみやこは三條河原崎の辨慶が宿へつけてたべといはんすとおもひみやこは三條かはらさきのべんといつしがあつとおもひてべんそとの御ぼうへつけてたべとぞのべにけるさらば御いとま申とてたがひにいとまをこひこはれとがしのたちをいでにけり

みまんだうにまいりてきみにかくと申ければむさしどにてなかりけりたゞはちまんの御げんげとて御手をあはせたまひけり

その夜はみやのこしさらたけの明神に一夜のつやを申夜をこめていでたまふ里人申けるやうはこれより越中への御下向はおもひもよらぬ事にて候それをいかにと申にくりからがたうげにはとなみの七郎が七

百餘騎にさゝへやまぶしをとをし申さず亥もみちの
あひだをば加賀と能登のさかひを亥ほの小太郎がふ
さぎさら／＼やまぶしをとをし申さず越中への御げ
かうはおもひよらずと申判官きこしめされてびんせ
むのたよりもあれかしと仰ければべんけい聞てはま
にくだりもし能登のかたへくだる船やあると問たお
りふし能登の國すゞのみさきへ下る船こそ候ひけれ
てんのあたふるところとてこのふねにびんせんしそ
の日のうちにのとのくにすゞのみさきにほどなくつ
かせたまふおんふねよりもあがらせたまひみぎはの
いはにこしをかけあたりのやまを御らんずればせき

はびがひみるめなのりそとらんとてあまどもうみに
おりひたりかつぎのためにうき怎づむかくてべんけ
いはとあるいはまよりもにしにみるめのついたるを
とりあげて御前にまいらせければにしはいきててう
ごきければみるめもともにうごきけりはうぐわん御
んらんじて御前のみやこにましまさばいきたるみめ
るをば何としてかは御覽すべきぞ遠國のはてまても
義經がとくによりかゝるめいよのもてあそびを御覽
するよとおほせければ御せんとりあへさせたまはず
みやこよりなみのよるひるうかれきて

みちとをくしてうきめみるかな

判官きこしめされてあらおもしろの御ゑいかや候い
で／＼義經も御返歌を申さんとて

うきめをはもしほとともにかきすて、

よろこひとなるすゝのみさきや

このうたになぐさみたまひ今は船路のたよりもなし
なみかけてそこあらいそのいは間にもくだけてみゆ
るうつせがひ人のこゝろはあらいそのかた思ひ成あ

そづたひ山づたひたへぐほそき谷のみち順道なれ
はせきたうざんをふしおがみくだらせたまひけるあ
ひだ越中の國に聞えたるろくどうしのわたりにほど
なくつかせたまふわたしもりが申けるはこのわたり
と申は南都ざうゑいのためなりちんなくしてはわた
し申まじと申べんけい聞いていかなるせきく津どま
りにも山伏のならひにてちんといふ法はなきぞた
だわたせと申いやちんなくばわたし申まじその儀に
てあるならばこれより御もどりあれと申ちんはなし
いそがはしゝちさむせばあとよりもいかなる事が出
來なんと御前のくれなるのちしほのはかまとりいだ
しせんはうつきてふなちむにこれこそあれとてたび
にけれわたしもりが申けるは是はわれくが見ゑり
申さぬ物にてちとふそくにはぞんじ候へどもさらば
わたし申とてろくどうじをこきわたしはうしつをあ
ゆみすぐいはやのわたりけふもはやうちでのしゆく
とうちなかめおんとをりありしところにたび人あま

たゆきあひてこれよりおくへのみちすがら少人をあ
ゆませ申ていかでかくだりたまふべきなふ客僧と申
けるはう官聞召れてそれはせきくのふさがりかい
かなる事にてあるやらんと御たづねありければたび
人申けるやうはいやみちにせきも候はずこの國をゆ
きすぎて越中と越後とのさかひにくるはまをふはま
をぶしおちあひなむど申てあまたのなんじよの
さふらふそうじてくろへは四十八ヶせときしもはる
のすゑなれば去年の雪のむらぎえにことしのゆきの
ふりつもり谷のゑたみづおちあひて水かさまさり鳥
ならでおよぶべきやさらうになしはうぐはんきこし
めされてびんせむのたよりもあれかしとおほせけれ
ばおりふしゑちごの國なをえの津へくだる船こそ候
ひけれ此ふねにびんせんしゑちごのくになをえの津
にほどなくつかせたまふ御船よりもあがせらたまひ
てなをえの太郎の宿所に一夜のやどをかりたまふう
ちの人々さしあつまつてないぎひやうぢやうするや

うはこの浦は當國のかう善光寺へ參るみちそうじて
あまたの道つじ見も玄らぬやまぶしたちのせい／＼
つかせたまふはもし判官殿かあやしやいざ／＼とが
め申さんとてわれもとおぼしき浦の人七八百人あつ
まつてゆみ矢をたいしひしめひたりおやどのねうば
うなさけふかき者にてべんけいをまねきよせさゝや
き申されけるやうはあらいたはしややまぶしたちを
判官殿なりと申てからめとりまいらせて鎌倉へぐそ
くし申さんとてたゞいまおほせいそつしてむかふな
りと申辨慶聞てうちわらひあふうれしくもきさせた
まひて候物かなわれ／＼ははぐろのかたのやまぶし
にてべちに子細もよも候はじ御こゝろやすくおぼし
めせとてさあらぬていにもてなしさて我きみの御前
に參りこのよしかくともうしあぐるぎけいきこしめ
されてこはいかによしつねはいかなるつき日生れけ
るぞやてんにごうのあみをはりちにさかもぎのせき
をすへ五しやくにたらぬきやうがいをかくしかねた

るむねんさよくちおほくしてはことばのあやまりも
ありぬべし御へんたちはやまぶしのみねのこきとる
ふせいにてうへのやまに入たまへよしつねひとり殘
りゐてもんどうてみんするにちんじそんする物なら
ばあひづのかひをふかふすその時はおりくだりてと
もに腹をきれ承ると申て十一人の人々はかたはらに
たちのぶ其跡に浦の人うんかのごとくあつまつて
鎌倉殿の御舍弟太夫のはうぐわんよしつね此うらへ
御つきあつたるよし承てらいてうの御だいくわんに
なをえの太郎が御むかひに參りて候はや／＼御出候
へかまくらへ御とも申さんと大音あげて申ざけい聞
召れてなにはうぐわんとのとはいづくにましますぞ
いつぞやの事かとよ平家をせめんそのため十萬餘騎
をそつしておくよりうつてのぼらせたまひしをはぐ
ろのかたはらにてそと見たてまつりて候ひしがたゞ
いまも千騎にをとる事は候まじやはかかほどの小勢
にてかなはせたまふべきぞ山伏たちにもたうぐたべ

でゐのとの御供し一方ふせぐべしとおはせければ
うらの人々あれを聞もつてのほかに相違してあきれ
てこゝに立たりけりなをえの太郎が申やうはうぐわ
んどのと申はせいちいさくいろいろふくむかふばそつ
てさるまなこあかひげにましますとうけたまはり候
がたゞいまさやうにおほせらる御ばうのぎやうさう
ちつともちがひ申さず判官殿におゐてはうたがふ所
なしはや／＼御出候へ鎌倉へ御供申さむとこゑぐ
に申義經きこしめされてあらうれしやついでをもつ
てをとにきくかまくらとやらんをみてとをらふにと
ふしてつれてゆきたまへ浦の人々これをきゝもしも
さもなきやまぶしをかまくらまではるぐとぐそく
したりともさしたるかうみやうはなくしてやまぶし
どものろはれよかりつべしともおぼえずしよせん
をひをたまはりなかをひらいてみんするに山伏のぎ
やうじやならばやまぶしのだうぐあるべし又そらや
まぶしにてあるならば山伏のだうぐよもあらじしよ

せんをひをたまはりなかを見んとこゑぐに申はう
ぐわんちからをよばせたまはず八ちやうのをひを取
出しうら人のかたへわたしたまふうら人此をひをと
りてゆきなかをひらいてみてあればまづ一ばんのを
ひにはこんがうかいのまんだらたいざうかいのまん
だらごまの次弟諸尊のほうかすをつくしていれにけ
りめくらしふみかあやしやとうたがひ申ところにく
がみの寺よりもほうし一人來てことぐくおがみ知
てあしくしてばちあたるなとてほんのごとくにとり
おさむる二ばんのをひのなかにはけんみつ二しゆの
ほうしやつけうのとめい有これもかたじげ無やとて
ほんのごとくにとりおさむる第三ばんのをひにはさ
んことつこれいしやくぢやうくわじやはなざらを入
にけり四番のをひのなかには五だいそんのれいざう
ふどうがうまのしよてん本尊のかすをつくしたり五
番のをひの中にはへんぢやうがんもんわうらいかな
まなの手本弘法の御自筆たうふうがふるひふでひほ

んのかすをつくしたり知もぢらぬもをしなべてたつ
としと申つゝ手をあはせぬはなかりけりをひに子さ
ゐがあらばこそいざもどらんと申なをえの太郎が申
けるは一切のわざがそつじにてはかなはぬぞ残るを
ひをばたがためにをきたるぞたゞさがせと申げに
げに是もいはれたりとて又つぎなるをひをとりてゆ
きなかをひらひてみてあれば判官殿の都よりもたさ
せたまひたるもえぎにほひの御はらまきこてこぐそ
くをとり出して是もやまぶしのだうぐ候かさればこ
そはうぐわんどのよとこゑぐに申判官聞られてさ
て／＼めん／＼は當國しよ山寺の山伏たちを見なら
つてはぐろの方の山伏の禮儀をばぢろしめされぬか
なふ抑はぐろざんと申はゑんのぎやうじやのこけの
みちやま伏のひしよたりこゝにしゆとと名づけてわ
がまゝにふるぎふかたありやまぶしこれをそねみし
んいのいかりたへせずこれによつてぶぐきうせんを
もたぬほつしが候はゞこそこのへんにもあはよきう

りぐそくや候御ひけいあれ山伏のかつちうもつ事し
よはうにかくれ候はゞこそせけんせばやめん／＼浦
の人々是を聞げに／＼にこれもいはれたりとて又つ
ぎなるをひをとりてゆきなかをひらひてみてあれば
あらいたはしや御前のみやこよりもたさせたまひた
る五しやくのかつら七尺のかけ帶からのかゞみ十二
のかけごいれたる手ばこなどをとり出してこれは
山ぶしの道具候かあらしゆせうとをこなひすまさせ
たまひたるやまぶしたちやさればこそ判官殿よとこ
ゑぐに申よしつねちつともさわがせたまはずあふ
めん／＼の御ふしんは道理まづかけをびかつらしや
うぞくの由來はそれがしがおばごにてましますはは
ぐろのごんげむの一のみこたるによつていまむかふ
三十こうの御こしの御供のため都にてあつらへかひ
くだしたまふ掛かけご手箱のゆらいは越中の國みつ
はしをとをりし時みつはしどのゝひめ君ぎやへいを
つよくいたはりぞんめい不定におはせしを此山伏の

なかにげんしやの上手あるにより七日とまりかぢし
たちまちげんにつけ申是によつてさいほうをほん尊
の前にとりかくるおぼつかなくは使しやをたてみつ
はしへ問せたまふべしうらの人々これをきゝさやう
に御のべあらんにはいづくにつめの候はゞこそ御身
にてもましませ同行にても候へせひ一人賜て鎌倉へ
ぐそくし申さんとこゑぐゑに申判官ちからにをよば
せたまはずこしなるかひをとりいだし二つ三つふき
たもふかひのこゑだにゑづまりければうへのやまに
かくしをく人々にむさしばうべんけいひたちばうか
ひぞん龜井かたをか伊勢駿河この人々をさきとして
うちかたなまさかりめんめにもつてみだれ入て何と
てわほつしはかひをば吹ぞそれやまぶしのかひふく
はやくそくが有てふくものをさうなふかひをならす
事ひが事なりと申つゝぎけいをなかにとりこめたり
はうぐわん聞召れてなふゑづまりたまへかたぐゑ
のうらのめんく此ほつし一人とりこめて判官にな

れぎけいになれと仰あれどうちもしゆじやうもなき
によりならじと申候へばたゞなれ／＼とおほせ候程
に餘りせんばうつきはてゝたゞいまのかひをふひて
候御めんあれやとおほせけり辨慶がこれをきゝさて
はきたいの事かなはぐろのかたのやまぶしによしな
き事を云つけはうぐわんになれぎけいになれとはな
に事ぞとてものことにあるならばなをえ千間をわ
れらか住家となすべきなりこゝに立たる太夫殿見ゑ
らぬかほにはゐたれ共六ちやう船のせんどう七月の
初あいたさかたこぎ出し八月のはじめ越前の國とか
やつるがの津にきこえたるせいしがもとを宿として
七里半あらちのなかやまかひ津のうらよりふねをた
てゝ大津ののほりおほちの藤太が本を宿として一年
に一度づゝおりのぼりゑたまふ六ちやう船のせんど
うと見なした事はそら事かいまこそこめはみるとも
みやうねんのなつのころいづくにても參りあひあら
くちおしや此わんれいを申さんとてから／＼とわら

ひければ浦の人々これを聞はうぐわんどのでましま
さばわれらがふねのつきどころやはかはゑろしめさ
るべき事のこはらぬそのさきこちこよ浦の人々とひ
とり二人にげてゆくべんけいつりいてをつかけてな
ことてめん／＼はをひをからげてかへさぬぞそれ山
伏のかけをひわたくしならぬ事ぞとよみねの八たい
こんがうどうじの乗うつりたまふなるかけをひをふ
ちやうの身にてとりほどき候ひてたゞは置べきかを
ひからけて得させよとつゝいてをふていでければ手
をあはせたちもどりけんきにとかく候はゞこそ何事
もうちわすれて御めん候へ少人も御座あればてむま
なんどの御用は御めにかゝるべしといふさしもがう
なるうらの人御かいりきにおされて其後物を申さぬ
はことはりとこそ聞えけれ

判官武藏を召れくがをゆかば此さきにものうきこと
も有ぬべし便せんのたよりもあれかしと仰ければ辨
慶承てそうじて我君のこゝにてはびんせんかしこに

てはびんせんと便船ごのみをゑたまふによつてかゝ
るむづかしき事の候ぞや四國西國のかつせんはみな
ふないくさにてあるあひだ船路の事をはよく心得て
候ふねを一そとかひとりて我とこぎくだらんになに
の子細の候べきはうぐわんげにもとおぼしめしなを
えの太郎をめされこのへんにうりふねや候御ひけい
あれなをえうけたまはりよそをひけい申迄も候はず
小鷹はやぶさなみくぢりいしわり太郎よぶことどりと
申てはやふねを七そともつて候御ようになまかせてめ
さるべしと申義經聞召れてあらおびたゞしともたさ
せたまひたるふねはいか程もせよかしとて義經の祕藏に
といへるふねはいか程もせよかしとて義經の祕藏に
おぼしめすゑろさやまきの御こしのものをとり出さ
せたまひてなをえの太郎にたぶなをえ御こしの物を
たまはりふなぐそくひし／＼とゑつくろひふねをし
うかべはやめされよと申十三人の人々はわれも／＼
とめされけり

うかりけるなをえの津をことゆへなくこぎいだし順
ぶうを得てほをあげゝりうんかいまん／＼としてき
はもなしくものなみかすみのけぶりわけがたしさう
はなをみちとをしみぎはのうみはにしきに似かりほ
くてんにとびにけりいづれのせいけつかよしつねと
もろともにかへらんことをえんことはかんせうじや
うのながめなりうらやましやなかりがねははつきに
ならばきこそせめ義經はいつのときみやこへとて
はかへるべしそめてたまつさ計をばことづてむとの
たまひつゝ歌をよみ詩をつくりかぢをとりほをあげ
てなみぢはるかにふかれ行心ざしこそあはれなれ
かゝりけるところに佐度のくにほくさんのかけより
も黒雲一村立おほふ雨か風かあやしやとおはせられ
けるところに又越後の國ざわうだうのうへよりもら
いでんくもをひゞかすあはけしきのかはるはやまか
げかせのかくれじまいづくにかるふねよせてこの
なんをのがるべしといふいはせもはてずして大風こ

すゑをふきくだきなぎさにいさごをとばすればへい
へいとゑたるうんかいにゆきの山こそおばかりけれ
みつをてんにふきあげさかさまのあめとぞ成たりけ
る上下ふねにゑひたまふそのなかにとつてもよしも
りと辨慶二人ばかりこそおほはだぬきにはだぬいて
ともへに立てぞまはりけるいかにもして此ふねをい
そへやすべからずあらいそにふねをよせ船そんじて
はかなふまじかせにまかせてかぢをとれほこもが風
にもまればほばたを切て風をとをせなをしも風がは
げしくはおほつなこづなをきりおとしともづなにゆ
ひつけひかすべしとりかぢより水いらばおもかぢへ
のりなをせ龜井かたをかはせんぢやうばかりのたし
なみにてかゝるときには前後をふかくに見えたまふ
ものかなふなそこへおり立てあかゆをなりとかへた
まへたとへこのふねがきかいかうらいけいたんこく
へおとさるゝと申共われ／＼二人あらん程は何の子
細の候べき我君と申はうぐわんきこしめされてあの

よしもりと申は伊勢の國のものにてわたりの船にの
りならつて船路の事をば心得べきがふしげやな武藏
はぶんにも武にもたつしやなるがふなぢのみちをも
これほどに心得たるかふしげやとそぞろにほめさせ
たまひけりあらいたはしや御せんの御身もたゞもま
しまさぬにあらきなみこはき風によはりはてたけと
ひとしきおんぐしをなみとなみだにゆりながしむづ
かるこゑもよはりはて今をかぎりと見えたまふ十一
人の人々は此よしを見まいらせげに／＼ふうふの中
ほどにわりなき事はよもあらじいたはしや御せんの
みやこに御座の御時は七重のひやうぶ八重のきちや
う九重のまんのうちみすふきかへすかせをだにも人
る遠國はたうにて母はてたまんいたはしやとをに
がみをあざむくともがらもふかくのなみだながしけ
る今迄はありともおぼえぬふねどもが其かずあまた
ほの見えたりあれはたすけ船かうれしやとおほせら

れけるところにさはなくしてあかはたさしあげたる
むしや共がいかほどもおほくわきいでたりふしげに
おぼしめすところにふねのうちにこゑありてむねも
り父子これにあり東國の九郎くわんしやこひしやと
よばゝり近付とみゆる能登守のりつねはせうせん一
そうに梶取めしぐしちかづくと見ゆる二位殿とおぼ
しきにこうせんていをいだき申たゞいまかいていに
身を玄づめんとてよしつねの方をうらめしげにみて
たゝせたまふべんけい是をみていんだうせばやと思
ひふなそこへつつといりときんすゞかけうちかけふ
ねのへいたにつつたちあがつて大おんあげてよばは
るきのふはにしのかいうんにてたせいのなげきを得
けふは又北國の江にしてがんせむなげきをなす事は
ゆめまほろしのごとなり有るの法はさながらいま
ふく風のごとしむさのくわんをなす事はいまたつな
みのごとく也大小のきろんはかせによつてかたち有
一つのかせがあればこそおほくのなみもかたちあれ

ふうはの二けんはまよひのまへのゆめなり一のうみ
くうかいにしてしやうとなしとさるとときはかせも
なみもあらばこそいたはしやへいけにはさるべきち
しやのなけれどこそおほくのおんりやうをほとけと

さらばとてなみのそこにいりたまへば風もなみも寒
づまつてふねはこなみにゆりすゆる人々のうれしさ
たとへんかたもなかりけり

はなさずしてしうちやくのたうしやうにりんゑ志た
まふいたはしさよ只今申辨慶がいんだうにつき法心
の一りをさとつてりんゑのきづなをはなれてめうか
くむゐのくらゐにつかせたまへと申とき二位殿のこ
ゑとしてむかしは一てんのこくむとしばんせうのせ
いしゆと有しかど今は又みもすそがはのながれ遠里
はていに身をいれししうたんのていきうしつとのし
うねんはいさごよりも猶おほしこれによつて六道お
ほくの里をめぐりさんづ八なんのきうこうをのがれ
がたく思ひしにたゞいま申べんけいがいんだうにつ
き法心の一りをさとつてりんゑのきづなをはなれて
めうかくむゐのくらゐについたる事のうれしさよむ
かしはかたきいまはだうしとなりたまふいとま申て

やしま

さるほどに判官山ぶしのすがたをまなびくだらせ給ひけるほどに七十五日と中にははるかをくにきこえたる佐藤玄のぶにつき給ふ判官むさしをめされ日はやうこくを出ふさうをてらしやうくにしの山のはにかゝるいづくへもたちこえ家のつくり玄かるべからんするところをみて宿とり給へ辨慶承て我おひにはわか君を入申たればいかゞは思ひけんかめいがをひにとりかへれんじやくつかんでかたにかけ爰にのばればゆん手にあたつてまるやま一つそびへり彼まる山のふもとにむねかどたかき家あり此家に立こえ宿とらばやとおもひほりのふなばしうち渡りおひをばいくわによせかけうちの體をみたりければいにしへよし有人のすみけるかすみあらしたるとおぼしくて門はあれども戸びらなしついちあれどもおほひ

もなくかはらも軒もくちはてゝきうたひはかとをとちむぐらはかべをあらそひてのきのひわだはこぼれをちぢりぐ水はもりゆけどもむすびてとむる人はなしさてでいをみてあれば一ちやうのことと一めんのびはをば立ならべてはおきけれども引人のあらざればつねに松風ふきをちてざらりんとひかんよりほかはびはこと玄らぶる人はなし昔にかはらぬものとはなでんのさくらほしのひかり月のひかりと日のひかり水のそここにてとしをふるかはづばかりぞねをばなくうちの體のいたはしさに宿とらふする事をはつたとわすれときをうつして立たりしがにしもてをながむればちぶつだうとおぼしくてほうぎやうづくりの御だうありたちよりおがみ申にあみだの三ぞんと人丸をゑざうにうつしかけ堂のあたり四せつの玄きをまなぶあれはてゝは有けれどもそのこゝろばかりはたがはず先ひがしは春にて大ゆふれいのむめの花むかしながらの山ざくらふし見さゑだの花まで

もきゞのこゑゑにさきみだれひはこがらうぐひすの
のきはの梅にはをやすめねをだしかねたる所には
フシけい／＼ほろゝのきじのこゑけいならばけいと
はなくしてなんぞや後のほろゝのこゑいつも春かと
みえにけり南は夏にてすはまに池をほらせたりい
けのその中にはうらいはうちやうゑいじうとて三つ
の島をぞつかせたる島よりろく地へはそりはしをか
けさせはしの下にはうら島太郎がつりぶねとうなん
くわぢよかうつをぶねを五しきの絲にてつながせじ
やうらくがじやうのかせふかばみぎはへよれとつな
ひだるはいつも夏かとみえにけりにしは秋にて四
方のこずゑのいろづきゑらざくたえぬふせひきたは
ふゆかとうちみえさんがくはがゝとそびへたりばい
たんのおきなはをのがころもはうすけれどふゆをま
つこそやさしけれ冬にもなればすみをやくすみがま
のけぶりのあをふてはそくたちのぼるはいつもふゆ
かとみえにけりコトハあらおもしろやと打ながめ山

ぶしのこゑたてゝやどとるほうのあらさればこしに
付たるほらのかいのおをときのべてむさしやどとり
のかいをえばかりくふけど人をともせずいや／＼これ
は人はなきやらんとおもひたゞがへらんとせしとこ
ろにかせもふかぬにつま戸がきり／＼となるふしげ
やと思ひそなたをきつとみてあれば六十にあまり七
十におよびたるにこうのくちばのこそでかみにかけ
すいしやうのじゆずをつまぐりくちにぶつごをとな
へ十三人の山ぶしたちをつく／＼と御覽じてなにと
ものをはおほせもなくて我子の事を思ひ出してさき
だつものはなみだなりうけたまはれば御大將判官こ
のくにへ御下向のよしを申がわが子のつぎのぶたゝ
のぶが西國がたにてうたれずし御とも申てくだるな
らばはにふのこやにたちよりやどとり立たるらんも
是にはいかでまさるべきと思ひまはせば小ぐるまの
やるかたなきはこゝろかないにしへの山ぶしたちは
よくつれたもふときは五人六人こそ御とをりありし

にこのたびは上下十三人御ざある中に少人も一人ましますや法は萬ばうぎやうは萬行とてよろづのぎやうのその中に山ぶしのぎやうほどにものうきことはよもあらじあれほどいつくしき花のやうなる少人を馬にものせ申くだれかしさらずばわかき山ぶしたちのかたにものせてくだらずしじやけんのまなこをふませ申事のいたはしさよせう人のちゝはゝのふるさとにましくてさこそなげかせ給ふらめみづからが明くれと子どもが事をおもふにぞいとゝ思ひのかはらじとなみだにくれてたち給ふにこう涙をとゞめこちやうはくばうがいにしへはうき木に宿をとること承りをよびて候へわれらばかりと思ひなばとてもねられぬ月の夜に野にふすとてもちからなし御らんせられ候へ十羅せつによの御あとをつがせ給ふべき少人をたゞ一人ぐし申でいままでがいやならばのきの玄たの御はうしの有べきなりとかりにけりにこうきこしめしてげにくもつとも御道理このところにてみづから御やどを參らせすばたれやのものが心有て參らすべきこなたへ御出候へとて十三人の山伏達を中のでいへしやうせらるゝをのくうつらせ給ひれいじせんぼうたつたうあそばすせんぼうも過ぬればへいじ一ぐてう花がたにくちつゝませねうばう達にいだかせにこう出あはせ給ひ人のおやのこを思ふみちほどにあはれる事よもあらじかれらがゆくゑのきかまほしさに自身立いで給ひ行衛もゑらぬ山伏たちにそゝろに酒をぞゑあられける酒もなかばとみえ

費長房ノ假借
飛鳥坊

し時にこうむさしがたもとをひかへひる御宿をめされしとき都の人と仰さふらひしほどにそなたの方よりふきくる風もなつかしくさふらふもし御大將判官の行衛をばし玄ろし召れてさふらふか玄ろしめされてさふらはゝゆめばかりかたつて御とをり候へ辨慶聞てさてはわが君の御下向がをん國ゑんりにかくれもなくてぐちあまを出しとはするぞと心得にこうをはつたとにらんであらおかしのにこうの仰やそれ山伏の名はよのつねおほしと申せ共御大將判官坊といふ山ぶしの名は今こそ聞いて候へさりながらきやくそは五人は五ヶ國十人は十國のものしつつる方もや候らんよの方へ御尋候へ此ほつしにをひてはいざ玄らぬさうとあひさうなげにこたふるにこうきこしめされてげに／＼もつとも御道理人のゆくゑを問申とてわがせんぞをば申さすし御かたりあれと申ほどに御かたりなきはことはりさふらふいで／＼みづからがせんぞを語てきかせ申さん是は兩國のひでひらが

いもうと出羽の玄やうじがごけ次信たゞのぶ兄弟が我ははゝにてさふらふぞや一とせ御大將判官この國へ御下向有て佐藤ひでひらをもよほし十萬餘騎にちやくたうつけ御上洛の御時みはあのむかひにみえたるまるやまのふもとに御ぢんをめすつまの庄司ざつしやうかまへて參るつぎのぶたゞのぶ兄弟のものきみの御とも申佐藤殿聞召やあいかにこれより西國への御ともは國をへだてせきをこえはる／＼の道ぞわれ又らうたいにて子共のすがたを二度あひみん事かたしあに御とも申さばおとゝは國にとゞまれ弟御とも申さばあにはくにゝといまつて老體のちゝははがならふするやうをみはてよあにが申けるやうは御ぢやうもつともにて候にたゞのぶは國にといまり父母をなぐさめ申せなにがし御共と申又おとゝが申けるはおとなしやかにつぎのぶはとゞまりちゝはゝをなぐさめ御申あれなにがし御ともと申これがたとへかや諸佛念衆生しゆじやう不念佛父母常念子々不

念父母ととかれたりもろくの佛は衆生を思ひ給へ
共しゆじやう佛を思ひ申さずたかきもいやしきもお
やは子をおもへど子は親をさらにおもはずわかき者
共にて候程にみやこをみんするがうれしきと申たち
よ刀よ馬ものゝぐと用ひす佐藤殿御らんじてちから
をよばせ給はず白川二所の關まできみの御とも申こ
まをかしこにのりはなつて子共をかんじよへちかづ
けやあいかにきやうだいよ是より西國のかつせんは
おくのいくさにべからずけしやういくさにてある
あひだかくるはやすけれども引が大事に有ときくか
けうするときも兄弟つれてかけ又ひかうするときも
きやうだいつれてひけまばらがけするなじやうをお
とさばかさへまはれかさに付ておとすならばはるか
のなぎさにくだつて小河についておとせ小河なけれ
ば大河に出よ大河に付ておとすならばやあかななら
さとに出べしむらがらす立ならば手をひ死人のあり
と知てねんぶつ申とをれおきにかもめをとづればか

たきのふねと思へ西國がたにて兄をうたせ國もと候
ちゝがみたう候はゝがみたいなんどゝてあにがかた
みをとりもつてたゞのぶ國へ下てらうしたわれをう
らむるな弟をうたせつゝづぎのぶ國へ下るなよかく
はいひてあれど花のやうなる兄弟を志ねとはさらには
おもはぬぞたゞし弓どりは名こそをしう候へ人は一
代名はまつだいなについたらんそのきずはまつだい
までもよもうせじとても御とも申ならば命をまたふ
高名をきはめとのばらもなをあげ庄司が家の名をも
あげてたゞとかやうにおゝせられ君に御いとま申宿
所にかへらせ給ひかれらがこひしきおりくは此も
のどもがうへをきはなぞのやまにたち入つねはな
ぐさみ給ひしが明ればつぎのぶこひしや暮はたゞの
ぶこひしや戀しくとの給ひしこひかせやつもるら
んさてちやうごうやきたりけん一日二日とすぎのま
どかぎりのゆかにふし給ふみづからあまりのかなし
さにいまだ庄司そんじやうにありしどききやうだい

のもの共に毛ぎれのしたるよろひきせみやこへのばせたりつるがこゝろにかゝり思ふなり鎧をどしたてよろこばせんと思ふとて兄のつぎのぶは小櫻をこのめばこざくらおどしにけつかうすさてをとくのただのぶは卯の花をこのめばうの花をどしにけつかうしいまやおそとかのもの共まつしるしこそなかりけれあらいたはしや庄司殿今をかぎりとみえ給ふみづからかなしさに二りやうのものゝぐとり出し二人

のよめにきせ申中門にたゝせつぎのぶまいりて候ぞ忠のぶまいりて候ぞなふちゝごせと申時今をかぎりの庄司どのかつばとおきさせたまひて二人のよめのすがたをつくじと御らんじてそのいにしへのおもかけの有とのみばかりにていまの心はなぐさみぬ三月のなごりにはこざくらばかりやのこるらん四月のなごりには卯のはなばかりのこりけりそれ天ぢくのならひにこひしき人のおもかげをみんと思ふ時にはせいせき山にあがりいはのかどをたゝひてゑきろのすゞをふるとかや大國のならひにはんごんかうをたくとかやさて我朝のならひには夢にならではみえ巴こそこれはうつゝにおもかげをみつるうれしさよこひしのつぎのぶやあらこひしのたゞのぶとこれをさいごのことばにてあしたの露ときえさせ給ふ庄司にはなれて三とせになり子共にわかれ七ねんなふきやくそうとの給ひてたもとをかほにをしめてゝはらはらとなかせたまひけり

判官御ざをたゝせ給ひ辨慶を召れ今迄はいかやうのものぞと思ひてあればさてはなにがしか命にかはりてありしつぎのぶ忠のぶきやうだいがはゝにて有ける事よかれら二人に一人めしつれ下りたる身にてもあらず何のいみじさにいにしへのよしつねとは名乗べきぞむさし心得てかれらがさいごをよそながらみたるていにかたりにこうがこゝろをなぐさめてたべ辨慶承て御ぢやうのごとくふびんに候かたり出してなぐさめうするにて候とてもとの座敷になをり思ひ

よらぬ物がたりを二つ三つかたりざしきのけうをも
よほし只今思ひ出したるふせいにてよこ手をちやう
とあはせそのつぎのぶ忠信とやらんのさいご所をこ
そ此法師がみて候ひしが御のぞみにて候はゞ語てき
かせ申さんといふにこう聞召れてあらうれしやさふ
らふかれらがゆく衛をきかんには十物十百物百をな
りともつむべけれ共折ふしもちあはせさふらふとて
まきぎぬ三十疋むさしが前につませらるゝさて又か
れらがためにとておどし立たるものゝぐをとり出し
なふこれ／＼御覽さふらへやかれらがこひしき折々
はこのものゝぐをとりいだし人にもきせかけてもを
き是をみてこそなぐさみしにきやくそうたちにまい
らせてあすよりのこひしさを何にたよりてなぐさま
んさりとては力なしかれらが行衛をきかんにはあす
の事をも思はずい／＼さらば參らせんと二りやう
のものゝぐのわだかみとつて引立て武藏殿がまへに
をく次信たゞのぶのわすれがたみつまのゆく衛をき

かんとてしや金百兩みつなりのたち花がたにつませ
つゝ四間のでいへいだき出てむさし殿がまへにをき
かみからしもにいたるまで物がたりきかんずとて三
戸をひそめてをともせず西塔のむさし八島のいその
かつせんをもとよりしたる事なればはじめよりをは
りまで事こまかにぞかたりける年號はげんりやく元
年ころは三月下じゆん四國さぬきの八しまのいそを
とをりしとき源平のかつせんまつさい中とみゆるそ
の時山ぶし六人さふらひしが二人はみんといふ三人
はとをらんと云中にもこのほつし人はなにともおも
はゞ思へかやうのことをみをきてこそ熊野にまかり
歸て人にもかたらばやとともにひおひをおろし小松の
えだにかけをきはるかなぎさに下て源平のかつせ
んを玄づ／＼とみたりければさるのなかばの事なる
におきの御ざぶねより六ひろばかりの小船一そうち
ざめかひておさするをみれば人三人のつたりけり一
人はかんどり一人はわつは今一人は大將大將とおぼ

しきひとのはだには何をかめされん大くちのそば
たかくとおつ取て卯の花をどしのよろひをめしな
しうちゑぼしをつこふで白あやたんではちまきに
むすと志めようだうづくりの五人ばかりまん中にぎり
よこたへ手矢ばかりおつ取て惣門のなぎさへ舟をさ
ざめかいておさすくがちかく成しかばふなぱりにつ
つ立あがつて大音あげてぞ名のられたる只今こゝも
とにすゝみ出たる兵をいかなるものと思ふらん一ぼ
ん式部卿かづらはらの親王に九代のこうゑんかどわ
きの二なん能登の守のりつねそう門のなぎさへ度々
におひてかよふといへどいまだ東國の大將にげんざ
んせず東國の大將に見參とぞなのられける源平なり
をゑづめみやうじなりをたしかにきく又げんじの
陣よりも大將とおぼしき人のすゝんで出させ給ふは
だには何をかめされんあかぢのにしきのひたゝれ
ひおどしのよろひをなじ毛のそで五枚かぶとにくわ
がたうつてたつがしらすへたるをゑくびにめされこ

んねんだうのこしのもの二尺七寸のこがねづくりの
御はかせあしをながにむすんできけ二十四さいたる
きりうの矢はずだかに取てつけ三人ばかりの眞中にぎ
りたけ七きばかりにてまつくろなる馬に金ふくりん
のくらをかせ御身からげにめされたつしがみかたの
なかを志づくとあゆませ出あひちかく成しかばあ
ぶみふんぱりくらかさにつつたちあがつて大音あげ
てぞなのられける只今こゝもとにすゝみ出たるつは
ものをいかなるものと思ふらん事もおろかやせいわ
てんわうに十代源九郎よしつねそうものなぎさへ
度々にをひてもかふといへどいまだ能登殿とやらん
にげんざんみせず能登殿ならば花めづらしう見參と
ぞなのられけるのと殿叱よし聞召れて大將の御めに
かゝりたる志るしなくて候べきか小兵にては候へど
もなかざし一すじ奉んにいづくとやゝほを承て仕ら
んと有し時げんじの御大將のがれがたくやおもひけ
んこしよりもくれないに日を出したるあふぎぬきい

だしあらりとひらきむないたをほとゝと音づれ矢
ごろはまつほこざうぞこの程をあそばせとぞお
せけるすでに御命あやうくみえさせ給ふ處に又げん
じのぢんよりもよしなはめのよろひきあし毛の馬に
のつたるむしや一騎かけ出きみの矢おもてにかけふ
さがつて大音上て名乗やう只今ぢんとうにすゝみ出
たるつはものをいかなるものと思ふらん奥州の住人
に佐藤の庄司が二人の子あにのつぎのぶ也のと殿の
大矢をまつたゞ中にうけとめて左んでゑんまの帳に
てうつたへにせんとよばはつたりのと殿此よしきこ
し召あつがうなるつはものかな一騎當千とはかゝる
ものをいふらん心ざしのさぶらひをのりつねがてに
かけいをとしてあればとてまけうす軍にかつべきに
てもあらず又たすけてあればとてかたうす軍にまく
べきにもあらばこそ心ざしのさぶらひをたすけてこ
そとの給ひてはめたるやをゆるされたりいしかつ、
る處にわづぱの菊王丸がさゝへ申けるやうはなふ御

謹にては候へども次のぶたゞのぶはがうの者にて候
ぞやそれをいかにと申に一の谷の落あし八島のおち
あしにもこゝにては次信かしこにては忠信と名乗て
せんてい女院の御ざぶねをもおそれずさび矢をいか
けしらうせき人にて候ぞや其上ぐん陣にてかたき一
騎うたるればみかた千ぎのつよりみかた一きうたる
ればかたき千騎のつよりと承て候ぞや其上彼者共は
異國のはんくわい張良をもあざむく程の人でさうい
くさ神の御たむけにはや一矢さうとさゝへたり能登
殿此よし聞召いしうも申たる菊王丸かな其ぎにて有
ならばなかざし一筋とらせんと十五束三かけつるぎ
のやうにみがいたるを五人ばかりにからりとつがひも
とはずうらはず一つになれときり／＼と引しばりま
ちをこぶしに引かけゑいやつとかつてうつたるはだ
うづきなんどのごとく也一陣にすゝんだる扱も次信
がむないたにはつしとあたりちけぶりがばつと立を
し付へくつとぬけにけりむざんや次信さいごはよか

りけりたうのやをいんすとて弓とやを打つがつて打
上てひかんあふはなさんと二三度四五どしけれ共せ
い兵の大矢にきものたばねはとをされつ何かはもつ
てこらふべき弓と矢をばかゝりと捨弓手のあぶみけ
はなつてめてへかつぱと落にけり今思ひあはすれば
御身の御しそくかいたはしさよとかたりけり二人の
よめ三人のまごにこうもう共に一度にわつとさけび
ければぎけいをはじめ奉り十三人の人々も八島のい
そのかつせんを只今みる心地してすゞかけのたもと
をしほられけりにこうなみだをとめつぎのぶは其
手にてはかなく成てさふらふか弟の忠信はさてなに
となりてさふらふぞ判官きこしめされて猶もすゑを
かたつてきかせよとおぼしめしむさしが方を御らん
すれば辨慶やがてふ得あらむざんや次信其後とをあ
さの事なるにかぶとの玄のひのおがきてたぶさは
なみにゆられぬかゝりけるところに能登殿のわつぱ
菊王丸なにさまつぎのぶがくび取てげんざんに參ら

んと舟より下へとんでをるゝたゞのぶ此よしめるよ
りもあにのくび平家がたへわたしては弓やのちじよ
くぞと思ひ四人ばかりに十四そく取てからと打つがひ
よつ引てひようといたあらむざんや菊王丸がいさみ
にいさんでをり立たるひざの口にしたゝかにたつ大
事の手なればうけもあへずいぬゑにだうどふすたゞ
のぶ此よしめるよりもわつぱがくび取てあにのきや
うやうにはうせんとこまをかしこにのりはなつてう
ちものぬいてさしかざしもみにもふてぞよつたりけ
る能登殿此よし御覽じて一時なりともそれがしがう
ちにあらんわつぱがくびげんしがたへわたしては弓
矢のちじよくとおぼし召舟よりもとんでをり菊王が
上おびをかひつかんで舟のうちへゑいやつといふて
なげられけりあらむざんや菊王丸この手にてかんび
やうするならばしぬまじかりつるものなれども大ぢ
からにふねのせがいにしたゝかになけつけられてか
うべみぢんにくだけてつゐにはかなくなつたりけり

事かりそめとはおもひけれどもげんじにさふらいう
たるれば平家にも郎等しんだりけり能登の守のりつ
ね此よしを御覽じてすきまかぞへのたゞのぶにたゞ
なかとをされ候ひてはあしかりなんとおぼしめしお
きへ舟をおさせらるゝかどわきのへいざいしやう能
登の守のり經こそくがのいくさにしまけてあれのり
つねうたするなようつけつはものと仰けりうけた
まはると申てつくし大名に大ともしよきやうきくち
はらだまつらとうこれとうこれずみへづきやますみ
此人々をさきとして七百餘騎にはすぎさりけりふね
一めんにをしならべむまどもをば海上におひひてふ
なばらにひつつけ／＼さゝめかひておよがせらるゝ
くがちかく成しかばこまを引よせ／＼ひた／＼とう
ち乗て一まいはぎのわたりだてを馬のかしらにつき
かざし七百餘騎がむれたか松へ一度にさつとかけあ
げたり源兵二百餘騎おもてのひろきぢやうだて一め
んにつかせやぶすまつくつてさし取引つめさん／＼

に射たりけり平家のぐんびやう共は一さゝへもさゝ
へすしなぎさへさつと引たりけり悪七兵衛これをみ
てにくしきたなしかへせもどせとおめきさけんでか
けにけりげんじ二百よき矢だねつくればうち物のさ
やをはづしわつといふてかけ合平家のをはるゝ時も
有源氏のおはるゝ時も有おふつまくつかけつもど
いつさるのなかばよりとりのをはり迄はかけあひの
合戦に源氏平家つかれつゝあひ引にさつと引たりけ
りさいたうのむさしばうか此よしをみるよりも是非
それがし一合戦仕りげんざんに參らんとこのむ所の
なぎなたみづぐるまにまはひてさいたうの辨慶がた
だ今かくるなり平家がたのぐんびやうどもにくしき
たなしかへせもどせと大ごゑをあげてぞかけにける
平けのくむ兵どもは辨慶がかゝるをみて中をあけて
とをしけり本より辨慶かたきにあふてはやき事ゑん
こうが木すゑをつたひあらたかゝとやをくゝつてき
じにあふがごとく也大こくのしうちくわいはかんこ

くのせきをやぶつててきにあふがごとくなりもとよ
りむさしうでのちからはおぼへたり長刀のかねはよ
しなぎなたをとりのべてむかふものゝまつかうにぐ
るものゝをしつけほろつけたかごしたうなかくさす
りのあまりをあたるをさいはひにはらめかいてぞき
つたりける手もとにすゝむつはものを三十六騎はら
はらときりふせ大勢に手をおふせ東西へばつとをつ
ちらしなぎなたかたにうちかたげあふみかたの陣へ
引たりける武藏坊がありさまはたいはんくわいもか
くやらんへいけのぐんひやう共舟よりもあかりしと
きは七百餘騎とみえしかども二百騎ばかりにうちな
されおきへまばらにさつとひくげんし二百餘騎も八
十三騎にうちなされうりうむざんにあがりをのく
ちんどりゑづまりければいぬゐのこくにぞなりにけ
る判官むさしをめされ奥州の忠信はいづくにあるぞ
ぐして参れ辨慶承て御前を罷立此へんに奥州の佐藤
殿やましますつぎのぶいづくに有ぞ大將のめしのあ

るにとつく御參りあれとたからかによばはるあらむ
ざんやたゞのぶひるしやきやうつぎのぶ手をひぬる
とみるからに合戦こゝろにそますとあるやまのはに
そなたばかりをみをくり心ぼそげにて立たりしが大
將のめしと承てむさしとつれて君の御前にかしこま
るはうぐはん御らんじていかにたいのぶあにつぎの
ぶが行衛はゑらぬか忠信承てさん候兄にて候ものひ
る手をひぬると見候いしか共かけあひのかつせんに
隙なくしてその行衛をもぞんせすと申あふそれはさ
そ有らん今しやうにもあらばとふべきゑさい有又ゑ
してもあるならばきやうやうよきにすべしはやとく
とくとの御ぢやうなり忠信承てあら有がたの御諂や
候御意くだらずともたゞねたく思ひしにまして御ぢ
やうのうへおつとこたへて御前を立めのとにゑのぶ
の十郎みつとををともとしてはるかのなぎさにくだ
りけり比は三月廿日あまりの事なれば月は出ずして
みちみえずなみだぞ道のゑるべなる太刀をつえにつ

きはるかのなぎさにくだりつゝ晝のいくさばは此へ
んぞと思ひてむれたかまつの西東すさきのだうの北
南なきさにそふて尋けり此へんに奥州の佐藤どのや
おはします次信やましますと玄づかによふでぞとを
りける軍みだれの事なれば手をひ死人のふしたるは
さんをみだしたごとく也手をひ共のにようごゑみゝ
にふれてあはれなりのりこえゝ尋るにいといあは
れぞまさりけるむれ高松の事なればすさきによする
なみのをとはまちどりのともよぶ聲われを問かとお
ぼしく心ぼそさはまさりけりあらむざんや次信は大
事の手をひて有けるがおとゝの忠信にさいごのな
ごりやをしかりけん玄にもやらすしてあげふねのあ
たりに下人の男にかんびようせられてゐたりしが忠
信がこゑときゝいそうつ波ともろともにたそよとこ
つぎのぶ聞て我身の事をばなにともいはずし玄ばら

く有ていきをつきみかたはいか程にうちなされて有
ぞ大將は御手もをひ給はぬかさておことは手をばお
はぬかたゞのぶ承てさん候みかたはわづか八十三騎
にうちなされ候ひぬ大將御手もをひ給はずなにがし
も手もおはず御心やすくおぼしめせつぎのぶ聞てあ
らうれしいものかなその義にて有ならばいまだ今生
にいきのかよふ時大將の御めにかゝりたひぞぐして
參れたゞ信あまりのうれしさにすさきのだうよりも
やり戸をいそぎとりよせつきのぶをかきのせまいら
せてさきをたゞのぶかきければあとを玄のふぞかき
にけるなみだぞみちの玄るべなり

武藏殿ひたちどの龜井かたをか駿河殿弓取と申はけ
ふは人のうへあすのわがみのうへぞかしいざや佐藤
をみつがんとはるかのなぎさにをりくだり次信をか
いしやくしてむれ高松にめがりければひがしの山の
はに月ほのぐゝと出にけりはやかいて參たるよしを
申判官聞召れてちかふかけ承と申て御ざまぢかくか

きよせければ忝もはうぐはん御ざをよせさせ給ひつ
ぎのぶがかうべを御ひざのうへにかきのせ給ひ手は
大事なるか心は何と有ぞ思ひをく事あらば只今申せ
明日にも成ならば奥州へ人をくだすべしいかに／＼
と仰けれども御返事をば申さずうちうなづいたるば
かりにてたうのうちにてよう聲ありわだちゝぶさう
にしてあらむざんや次信さこそ心がうなるむしやと
申ながらさいごちかづきぬればちからなしふびんな
る次第かなとておの／＼涙をながされけりあとにて
かいしやく仕るおとゝのたゞのぶ手をひにちからを
つけばやと思ひあららかなるこゑをあげあらゆいに
かひなのつぎのぶのふせいや候たとへ事にては候は
ね其かまくらのごん五郎かげ正はくりや川の城にて
とりのうみの彌三郎にゆんでのまなこをいさせその
矢をぬかでおりかけ三日みやもつてまはりたうの矢
をいをふせてこそ今迄もながらへ御前でものを申せゑ
い何事も／＼みないつはりとなるぞとよ國へかたみ
をくだすべしはやのまもりをば老してましますち、
はゝの二人に一人ながらへてもましまさばゆきみの
まどのをれ竹の世はさかさまの事なれどかたみにこ

そや一すじにさやうにやみ／＼とよはりたまふがか
たじけなくもまくらもとは三代さうおんの主君弓手
はちゝぶの玄げたゞめてはわだのよしもりなりあと
にてかやうに申はおとゝの忠信にて候ぞや何事をも
御前で申させ給へとてさしもにがうなる忠信も今
わかれのかなしさに二手のくさりをぬらしけりつぎ
のぶ聞てなにと申ぞたゞのぶ權五郎かげまさはくり
や川のじやうにてとりのうみの彌三郎に弓手のまな
こをいさせたうの矢をいをふせけるよなそれは少事
の手なればこそ三日はもつてまはりつらめかげまさ
につきのぶがをとるべきにてあらねども能登殿の大
矢は大國までもかくなきにたゞ中をとをされ次信
にてあればこそ今迄もながらへ御前でものを申せゑ
い何事も／＼みないつはりとなるぞとよ國へかたみ
をくだすべしはやのまもりをば老してましますち、
はゝの二人に一人ながらへてもましまさばゆきみの
まどのをれ竹の世はさかさまの事なれどかたみにこ

れを參らせんびんのかみをばわか共が母にとらすべしむちとゆがけをば二人のわかにとらすべし太刀をば玄のぶにとらするぞよろひは毛ぎれしたり共わどのとつてきてつぎのぶにそふたと思ふべしかまいてたゞのぶよ次信うきよに有やうに心づかひを仕てはうばいにくまれ申な御いとま申て我君いとま申てはうばいたちあらなごりをしのたゞのぶよかうしやうにねんぶつ十べんばかりとなへしがかすかなるこそをあげむさしどのはいづくにぞをとくのたゞのぶにめがけてたべといひすてゝをしかるべしをしむべしあしたのつゆときえにけり上下ばんみんをしなべてあはれととはぬ人ぞなき判官ふびんに思召たゞ今もきやうやうすべけれどもひる平家まけいくさにて有あいだもし夜うちにやあるらんとようがいかまへようじん隙もましまさず明ければ四ど^{志度ノ借字カ}の道場のひじりをしやうじきやうやうねんごろに玄給ふあらむざんやつぎのぶ度々所望せし事をかなへぬ事のむざ

んさよ所望といつば別の義にても候はずあれに候太夫ぐろか事一とせよしつね奥州へくだり佐藤ひでひらをもよほし十萬餘騎にちやくたうつけ上洛の時秀平入道大黒小ぐろとて二疋の馬をひさうしてもつ小黒といつしはあの馬よりもたけばつくんにのぼつて候ひつれ共心をくれたるによつてこぐろと名付大ぐろとはあの馬の事秀ひら申せしはそれ弓取の戦ぢやうにのぞんで高名をきはむる事馬ものゝぐに玄くはなし是にめされて御代をひらかせ給へとてものゝぐ一りやうをしそへてゑさす何がしが手にわたりのり心よし足のはやき事とぶ鳥なんどのごとく也がくの名によそへてせいがひはと名付かまくら殿のいけづきするすみかばどのゝとらつき毛何がしがせいがひはとてわてうにうへこす馬はなしげんりやく元年正月廿日にうち川を渡ゝ同き二月七日に一の谷てつかいがみねをおとし平家のくびおほく取て大路をわたし院の御めにかゝり太夫の判官になされ申其時馬も

源氏に吉事の馬なればとて添もりんげんにて太夫黒にふするされはゑんぎのみかどの御ときは白さぎをいだきとつて五位になされしためしこそ候へ馬の太夫づかさはためしまれなりとて太夫ぐろにぞふせらるける東寺四塚の邊にてあらむざんや次信何がしがあたりへ駒かつし／＼とあゆませあつぱれ御馬候や奥にてみ申せしよりはたけばつくんにのぼつて候あはれ此馬を給れかし君のまつさきがけ討じに仕らんするいのちは露ちり程もをしからじと度々所望せしか共其比つぎのぶにおとらぬちうのぶしおほし自餘のうらみをきじと思ひ今までとらせぬ事のむざんさよさいごなれば忠信引たふこそ思ふらんよし／＼おんをみて恩をゑらざるはきちくぼくせきにたとへたりいで／＼義經も太夫黒引て命のをんをほうせんと添も手をたゆふ黒がみづつきにかけさせ給ひ次信が玄がいのまはりをかなたこなたへ引まはしそのゝち忠信給りげにやつぎのぶ此世にてほし／＼と思ひ

しねんやつうじけん馬はきたのものなればほくふうにいばひてゑらあはかふてつゐにむなしく成にけり以下のものは是をみて正しく次信給りてめいどまでのよとはいはぬものこそなかりけれつたへきく大國の大そくわうていはひげを切てはいにやきこうしんにあたへたびにききすをいやし血をゑめしせんしをなでしかば命はぎによつてかろし命は恩のためにつかはずいかにも其身のころさるゝ事をいたむまじほんてうのぎけいは忠有さぶらいに太夫ぐろをひかれけりこれをみる人々いよくいきみ有べしとかんせぬ人はなかりけりあくる日の合戦にげんじ七騎にうちなされ四どの浦とかやまつがはなといふ所に陣取てまします熊野の別當たんぞう一千餘騎のせいにてみかたに參らるゝ源氏の御せい一千餘騎のせいにをごる平家を事ゆへなくたひらげ三しゆのゑんぎことゆへなく都にかへし給ひけるおとうとの忠のぶ吉野山まで御供すよしの山にて大しゆたちの心がはり

の有しひきその時たゞのぶ判官つかさときせながを
申給り一人みねにとゞまり判官殿と名乗て吉野法師
を待うけさんべくに合戦しそこにてもうたれずみや

がつふそとの浦ひわうばんをかまへいつきかしづき
本ノマ
申かの秀平が心中をばきせん上下をしなべかんせぬ
人はなかりけり

こへのぼつて腹切てむなしくなるその人べくの事な

らば今生のたいめむは思ひもよらぬ事也念佛し給へ

とてむさし殿がおひより次信の形み忠信の形みを取
出し候ひてにこうに是を奉るにこう形みを取上かほ

にあてむねにあてりうていこがれかなしむ何にたと

へん方もなし判官御覽じ心づくしにいつまでつゝむ

べきと思召れける間是こそいにしへの源九郎義經と

御名乘有ければにこう承子共が事は扱置ぬ三代さう

をんの君をおがみ申こそなげきの中よろこびと悦ぶ

ことはかぎりなし是にゑばらくとゞめ申てひらいづ

借字

みへ使を立にけり秀平悅ふでちやくし西きど二男や

す平を先として三千よきのせいにて御むかいにまい

りひらいづみへ入申衣川たかだちと申所にゑんざう

に御所を立やなきの御所と申てあいたさかたつがる

きよしげ

判官武藏をめされいかにむさし聞かとよ諸國の大名
高家たちもよしつねに心ざしのせつなき人も有らん
急ぎ廻文をまはし頼てみんとの御ぢやうなりべんけ
い承て狀を書て參らせければ判官御判をすへさせ給
ひ扱此狀をたれやのものにかふれさすべきれく
と申とも伊勢の三郎よしもり駿河の次郎清重かれら
二人ぞ候らんいそぎめせとて御まへにめされいかに
かたぐ、此じやうを諸國のぶしにみせてたべ萬事た
のむとの御謹なり二人の人々承て世間のやうをあん
するに合戦はひさしく候まじおなじく候は、いといま
つて御供せんと申はうぐわんきこしめされていくさ
のともをせん事も此くわいぶんをまはさむももつて
はひとしかるべしたいたのむとの御ぢやうなり
二人の人々承てこのうへはちからをよばずとてやま

ぶしのすがたにさまをかへをいに御はんをかくしも
ちたかだちどのを出にけりかりそめながらわかれと
は後にぞ思ひ亥られたるかくて二人の人々はおくち
かき國々下野上野安房かづさひたち下總かひ信濃武
藏の國へうちこえちゝぶどのを初七たうの人々に御
はんおがませ申本田のしゆくへぞ出にけるよしもり
がいふやうはこれより中道越よりも駿河の國へ出ん
といふ清重聞て日本の花のみやこは日のもとの大し
やうたゞし當時は猶かまくらかはなやかな新京た
りと聞てあり四十にをよぶきよしげがきこふる名所
を見ざらんはふかくのいたりとぞんずるなり此つゐ
でに鎌倉をひとめみばやと申けりよしもりがこれを
きゝかほどの大事をもちながら遊山見物もやくなり
もしも此事めでたふておきかまくらの御わひようあ
らば見あかうする鎌倉を志かるべくは駿河殿すぐ
伊豆へと申けりきよしげ聞て腹をたてかゝらんよう
のためにこそさまをかへたるいろ見ゆれ諸國一見や

まぶしのいかほどおほくとをらんなかにするがばかりがあやしめられんはきよしげ計が運さうか御身は一とせかまくらおりのぼりを玄げくしてみ忘れる人もありこそするらんいづくとあひづをさし給へやがてをつつき申さんといるまのしゆくをのぼりに鎌倉さしてゆくほどにちからをよばずよしもりも同道申たけれ共おほせのごとくそれがしは大略人が見玄りたり駿河のくに成たけの玄たにて待申さんとくをつつかせ給へとよしもりは伊豆の國駿河次郎はかまくらへゆきわかるゝをさいごとはのちにぞおもひ玄られたる

さるあひだきよしげはふたまた河をわたりつるがを
かくも井のみねをはるぐとうちながめけはひざか
にあがりかまくらうちを見わたせばこゝろことばも
をよばれずあらおもしろのかまくらや神宮寺のまつ
かせはりよじんの夢やさますらんぶつかくむねをな
らべつゝたみの在家はのきつゝきやつ七がうについ

ぢのかず以上八百餘もんなりゆいのはまに大とりゐ
いづみがやつにいひしまは名にしおほたる名所かな
しやうぐんの御所をまんなかにひがしむきにぞ立ら
れける諸大名のざい鎌くら日夜朝暮のはんすかふゆ
ゆしかりける御くわほうかなあはれわばきみ判官を
かやうにいつき申さでとおもへばたけき清重もなみ
だこぼるゝばかりなりその夜は若宮殿に參籠申夜も
すがらげんせあんをん後生せんしよときせいしさこ
そよしもりがたけの志たの宿にてまつらんものをと
おもひあけゝればをひ取てかたにかけいそげばほど
なく音にきくたかせ川にぞつきにけるかゝりける處
に梶原の源太かげすゑはやきとりがりして歸りしが
河中にてむすとゆきあふたり日比みゝえし事をかし
あやしめられあしかりなんとぞんずれば笠をかたぶ
け清重はさらぬ體にてとをりけりうんのきはめのか
なしさはならひの風が一もみはつともふて來てきよ
しげがきたりけるかさををづんと吹切てときんとつ

れてかはにおち浮つゑづむつながれたり清重これを
みてさかやき人にみぞられてあしかりなむとぞんす
ればすゝかけのさうのそでをさつとかざひて笠をを
ふてぞはしりける弓づえ二つえ三つえにてほどなく
をつつき候ひてぬれたるかさをうち着つゝさらぬ體
にてとをりけり

源太目ばやき男にてこゝをとる山伏の河風にかさ
をとられしがひたいを見たればさかやきのゑろく見
えつるあやしさよ山伏ならばとをすべしやうあらば
めしとれとてかけ足はやき駒共にめん／＼にむちを
もみそへ／＼いかにこゝもとをとをり給ふ山伏にも
の申さんといふまゝに我も／＼とをつかくる清重こ
れをみて一あしなりとも弓取のかたきにうしろを見
する事ふかくの至とぞんずれ共きみの御はんどくに
ぐにの人々のおうけの判共のあらはれむするかなし
さにみゝにもさらにきゝ入す五町ばかりゆきすぎこ
だかきところにはしりあがつてをひをひつたとおろ

しをひのかたはこよりも火うちつけだけとりいだし
ちやう／＼とうちつけ御はんとおうけのはんどもを
せつなにやひてすてたりしはがう成ゆへのはやわざ
かなとほめぬ人こそなかりけれ

そののち大せいとりこむればをひのあしにゆひつけ
たる三じやく八寸のいかものづくりするりとぬいて

まつかうにさしかざし大をんあげてなのるやういか
にかたぐが見とがめたるはだうりなりはうぐわん
どのゝ御うちのさぶらひ駿河次郎清重と申者にて候
がきみの御意にちがひ申おくをばいだされまいらせ
て二ちやうのゆみをひかじため山伏のすがたにさま
をかへ諸國一見まはりしがうんがつきて源太にみあ
ひぬればちからなしいまにおひてそれがし判官殿の
御内にあるなしなんどのちんばうをすべき身にても
有ばこそ四國九國のたゝかひにも駿河次郎がふるま
いをみても聞いてもありつらんそこをひくなといふま
まに大せいのなかへわつて入するが次郎がありさま

をものによくくへたとふればまつふくかせにかれ葉
をちらし小鳥千ばに鷹一もとはなちあはせたごとく
なりいまだときもうつさぬまにくつきやうのつはも
のを二十七騎きりふせ大勢に手をおふせ東西へはつ
とをつちらしがうなるものゝ自がいのやうを見なら
へ源太といふまゝにたちの眞中をつ取てはら十文字
にかき切て三十八と申にはかたせ河にて討れたる彼
駿河次郎きよしげをほめぬ人こそなかりけれ

さるあひだ源太は郎等あまたうたせけれ共きよしげ
が首をとりなゝめならずによろこふでいそぎ頼朝の
御めにかくる頼朝御覽じてぎけいがらうどうのくび
ならばゆいのはまにかけよとてはまのかうにぞかけ
られけるさるあひだよしもりは竹の下のしゆくにて
やくそくの日かすをいかにまでどもをそかりけりあ
まりひさしくぞんすれば海道にたちいでみちゆき人
にも問ばやと思ひはやかいだうにぞいでにけるかゝ
りけるところに二人つれたるたび人のきやうのかた

へとをりしがよしもりをみるよりもやまぶしを見申
せばおとゝひの事のあはれさよ人間有爲のならひと
は申せどもきうせんにかゝる事なげきのなかのなげ
きぞとかたりすてゝぞとをりけるよしもりがこれを
きゝやうありげなとおもひていそぎをつつきたび人
のたもとを取てひとつとゝめなふいかやうなる山伏が
なにと成て候ぞわれらがやうなるものならばきかま
ほしやと申けりたび人聞いていふやうはさむ候おとゝ
ひの事なるにかまくらをいでゝこなたなるかたせが
はといふところにて判官殿の御内のさぶらひ駿河次
郎清しげと申人にて候が梶原の源太景末に見あひぬ
ればちからなしをひふみやぶりかたばこよりも火打
つけだけ取出しちやう／＼と打つけ御判とおぼしき
まきものをせつなにやひて付給ひ其後大勢とりこむ
ればをひのあしにゆひ付かる三尺八寸のいかもの作
りするりとぬきまつかうにさしかざし大せいのなか
へわつて入そこばく人をほろぼし我身もはらをきり

給ふくびをばとつて鎌倉へのぼせられて候ぞ山ぶし
とてぞとをりける

よしもりがこれをきゝさばかりそれがしがといめつ
るをもちゐず扱はうたれてありけるぞやかくと申て
それがしが奥へまかりくだらならばいかばかり判官

も御こゝろばそくおぼすらんとてものがれぬあさが
ほの日かけをいとふふせいにて奥州くだりもよしな
やとて明ればやどにていとまごひ竹の下をぞ出にけ
り其よりもよしもりは都まちかき大名小名に御判お
がませ申すぐに京へぞのぼりけるたそがれときの事
なるに備中殿のかゝりのまへを笠をかたぶけよしも
りはさらぬていにてとをりけり番のつはもの足をみ
て夜ゑんにとをるやまぶしはやう有て覺ゆるなりか
さをぬがれ候へとて一度にはらりとおり立たりよし
もりこのよしめるよりもそれやまぶしのならひにて
みね渡りをする時はこの葉をゑき木の根を枕とつか
まつりよるをもひるをもきらはぬきやう出羽のはぐ

ろのやまぶしがくま野へ参るとこたへたり番のつは
ものはを聞何の山ぶしのぎやうにてもあらばあれか
さをぬがれ候へとてよしもりがきたりける志らうち
ての笠をひきおとしてみてあればあんの内のよしも
りなり

ばんのつはものこれをみて一度にどつとわらひてだ
うりにて御身はよるはとをり給ふぞとまんなかにと
りこむるよしもり此よしめるよりもをひやくひま
あらざればはらくとふみやぶつてをひのあしにゆ
ひつけたる一尺八寸のうちがたなするりとぬいてま
つかうにさしかざし大おんあげて名乗やういかにか
たゞくが見とがめたるは道理也判官殿の御内のさぶ
らひいせの三郎よしもりなりたゞし當家のばんのも
のあはぬかたきとぞむずれどもゆみとりの志にどこ
ろをばさだめえずそこをひくなといふまゝに大勢の
なかへわつていりにしひがしきたみなみくもでかぐ
なは十文字やつはながたといふものにわりたてをん

まはしてさんぐに切たりけり手もとにすゝむつは
ものを十七八騎きりふせ大勢に手をおふせ東西へは
つとをつちらしかたなのまんなかをつとつてはら十
文字にかききつて四十三にてうたれたるよしもりが
心中を貴賤上下をしなべかんせぬ人ぞなかりける

たかだち

さるほどにかまくら殿かぢはらをめされいかにかぢはらうけたまほれまことにぎけいがむほんにおゐてうたがふところなしいそぎよしつねをたいぢしよをおさめんとの御ちやうにてながさきの四郎に三百よきをくだしたぶ長なき三百よきを給はりいそぎおくにもつきしかばさいそくまはしせいぞろへやすひらがたちによりきしてりの太郎をふでとりにてちやくたうをつくるまづそうりやうなればやすひらつぎにしきど四郎もとよしひづめの五郎たまつくりのまくらどの御きやうだいそのほかの人々にけつその彌七きはらのげんごくも井の小太郎あつせのぎやうぶ中じまようとうじまつしまたまつくりをしまのひやうとうをさきとしてみやうじのさふらひ七百よきそのはかつがうつはもの七千三百よきとはやちやくた

うをつくるそもーころはいつなるらんぶんち五ねんうるう四月二十七日こんにつはひがらよからずみやうにちのたつの刻にむかふべしとさだめ大田やま口なかむらにすでにぢんとつてひかへたりさてもたかだちの御しよにはかたきむかふよしをきこしめしさぶらびたちをめさるゝによひまではさふらひ八人九人大將ともに十人のゆらいをくはしくたづぬるにきしうくまのゝちう人すゝきの三郎乞いへなりあるよすゝきにようばうにかたりけるはなにがしおもふ事ありて此あかつきあうしうへまかりくだり候べしこゝろのまゝにまかりくだりきみのめでたふましまきばみやうねんのなつのころたよりのふみをまいらせんなつのころしもすぎゆかばうきよはふぢやうのならひみちのくさばのつゆしもときゑぬるよとおぼしめしあとをばたのみたてまつるいとま申てさらばとてぢたいがすゝきとのくまのそだちの人なれば

山ぶしの姿にさまをかへをいとつてかたにかけもの
うきたひのつゑをつきそのふしぐによをこめてふ
ちしろをたちいで、ばやこゝのへにつきにけり人め

志のぶのたびなればいつしか花のみやこをばかすみ
とともにたちいで、大津のうらより舟にのりかひづ
のうらにあがりつゝほつこくみちのうきなんじよを
くだらせ給ひけるほどに人のやどをかさりればやぶ
れただうてらいはのほらかみすみあらすやしろをば
やどなきまゝのやどとして七十五日と申にはあうし
うころも川たかだちの御しよにつきにけりすゝきな
にとかおもひけんをひすゞかげをばかたはらにとり
かへしをひのなかよりもうちかけとりいだしきるま
まに十二ふかけたるあみがさをぶかくとひつこう
でたかだちどのへていをこゝろ志づかに見たてまつ
るにきしうふちしろにてうけたまはりをよびしとき
は日ばんたうばんそせうにんさながら御うちにみち
みちてもんぐわいにこまのたてどもなきやうにうけ

たまはりをよびしがこれはなにとてさびしく御ざ
るやらんふしげさよとおもひもんのからあしきにこ
しをかけ御うちのていをきゝゐたり

さてもたかだちの御しよにはかたきむかふよしをき
こしめしさぶらひたちをめさるゝにいつもかはらぬ
むさしばうをさきとしてい上八ノきみの御まへにか
しこまるはうぐわん御らんじていかにかたぐがて
にかけくびとつてくわんとうへまいらせくんこうの
しやうにあづからばはうこうのちうにはごせをとへ
いかにくくとおほせけれども御へんじを申ものはな
しかたをかかめ井の六郎がめとめときつと見あはせ
てこはくちおしき御ちやうかなたれあつてわがきみ
の御くびをたまはつてかまくらへかうさんをば申べ
き今までおちぬ人々はみな御ともとこそおぼすらん
さはありながら此なかにもおちんと思ふ人のあらば
ひらにいとまを申ておちよたれもうらみはのこるま
じとざしきをきつと見わたせばよしたけひろつな一

どうにすゝしく申されたるものやたれもかやうに申たき御へんじにて候ぞやおもふにかたきあかつきよすべしをふてからめてと二てにわけぬ事あらじみかたはたとひぶせいなりともりやうちんにむらがつていくさははなをちらすべしまだほのくらきさうてうにあれはをふてこれはからめてなんどとてこゑをばきくともすがたはみじわれも人もこゝろゑづかにあるときにかみへ申て御しゆ給はりさいごのなごりをおしむべしもつとも然るべしとてしゆぐの太へいおほづゝを御でるへ申いだしつゝきみも御いでましましてにようばうたちの御しやくにてかみにさかづきすはりければ下はい上八人三ごんのさけすぐればのちにはたがひに入みだれておもひざしもひどりじしやくじもりのらくあそびまふつうたふつ呑ほどにかめ井がのうだるさかづきをむさしどにおもひざしたつてまひをぞまひにける

ほうらいさんにはちとせふるまつのゑだにつるすく

ういはほのかたにかめあそぶしほりみつがしらかものいれくびゑぎのはがへしをさつとたちまはるところにてもんぐわいを見てあればたちわきばさんだ男のあみがさまぶかにひつこうだるがからゐしきにこしをかけかめ井がまひをきゝるたり

かめ井の六郎もあれはたれなるらんとおもひしがげにとおもひよりなければまひすでにまひおさめしやくにてかけてゐたりしが門なるおとこのこゑとして大のこはねをさしあげてなふく御うちへあんない申候はんとたからかによばはるなりをゑづめてざしきにはたれなるらんときく處にさいたうのむさしこのこゑをきゝつけてあれはかたきのやつばらがあんないけんみのそのためにいつはりまなんできたつてさうなにさまでうのつかひをばあますまじといふままにはかまのそばをたがくとつてなぎなたをつとりいでんとすかめ井の六郎もつゝいてざしきをつつと立むさしがそでをひとつとめなふゑづまり給へむさ

しどのふしげやこのこゑをきいたるやうにおもふと
てむさしをとゞめてかめ井はしりいで、見てあれば
しゃきやうすゝきのさぶらふどのたびやつれにおも
やせて一人こゝにたちたまふかめ井ゆめともわきま
へずする／＼とはしりよりすゝきがたもとにとりつ
けばあにもをとゝにとりつきてさていかにくとば
かりなりはるかにありてすゝきどのやあなに事かあ
るかめ井かめ井此よしうけたまはりその事にて候ぞ
やきみの御うんもわれらがうんもいま此ときにつき
はてゝあすをかぎりとはやなりぬそれをいかにと申
にひでひらうきよにありしほどはきみをもたつとみ
申せしがうゐむじやうのならひとてひでひらこぞの
冬はかなくなりて候ぞやそのこともわがきみにこゝ
ろがはりをつかまつりかまくらよりのけんみにはな
がさきの四郎どのを申くだし給はりてさてくにの大

のおぼしめしたつならば二ねんも三ねんもさきに御
くだりまし／＼て一たんらくを乞給ひておもひでと
おぼしめすべきになんぞつめたる御うんかはこんに
ち下りたまふこそよろこびのなかのなげきなれこん
じやうにてみゝゑ申こそなによりもつてうれしう候
へうきよのまうしうはれてあり上にも乞ろしめさる
まじとがめあやしむものあらじをちこち人のふせい
にて御かへりあれやすゝきどのはうき此よしうちき
いてふかくなりかめ井れうもんげんしやうの土には
ねはうつめどもなをばうづむがふかくさよ乞ていし
うぢうふしふうふ三せのきゑんなくしては何しに今
日まいるべきぞすゝきがまいりて候とかみへ申せか
め井とてわらんづぬぎすてうへにきたるうちかけぬ
いでふはとすておとゞひつれてはうぐわんの御まへ
をさしてぞまいりける

はうぐわん御らんじてめづらしやすゝきどのじやく
あくによわうありいんぐわれきせんだうりによりへ

いけにきせしそのつみをいまよしつねがみにかぞへ
てきてあすをかぎりとはやなりぬさればするのつゆ
ちとの志づくとなるふせいいしやうたもんのかたき
にうけかくなりぬるとおもひなばうらみもさらに残
るまじこれにある人々もかたきゆるすならばおとし
たくはおもへどもゆるさねばちからなしわぎみは人
も見らるまじとがめあやしむものあらじをちこち人
のふせいにてはや／＼くまのへかへられ候へ見しも
のとおもひなばごせをばとふてたべすゝきありても
このいくさにかつべきにてもあらばこそとうしてか
へり候へすゝきうけたまはつてこはくちおしき御ぢ
やうかなきみにをかせることがなくしてうたれさせ給
はんずるせんごをいかゞおはすらん何ぞやそもすゝ
きめが月日こそおほきに今日まいりあふ事は三世の
きゑんくちせぬゆへいくささんじてまかりくだりさ
もあれきみの御さいごどころはいづくにてかるら
んとおもひやり申たるばかりにてもんのから井しき

にこしをかけたゞ一人すご／＼とはらきらんする事
どもはなんぼうむねんに候べき御ぐそく一りやうた
まはつてうちじにをせんと申きつておちんするきし
よくはなしはうぐわん御らんじてこのうへはちから
をよばすいで／＼更ばすゝきどのにぐそくを一りや
うとらせんとてじやうもんじうつたるからうとのふ
たをあけ小さくらおどしのよろひをとりいださせ給
ひて此よろひと申はおぐりのさとうせんもんが子共
のまうけのためにぐそくを二りやうおどしたつあに
つぎのぶは小さくらしやていたゞのぶはうのはなお
どしけつけつかうしあひまつるところにかれら二人は
うたれぬめんぼくなけれどよしつねさとうがたちへ
うちこゑこどもがさいごを語てきかすはゝのにこう
はなげかすしかゝるいへのめんぼくさふらふ御とも
申いでしよりかへらん事はふぢやうぞとおもひま
うけてさふらへどもさはいひながらきやつばらが御
とも申てくだるならばとらせんするそのためぐそ

くを二兩おどしたつるこれ／＼御らんさふらへやま
ちてかひなき此かたみを見つる事のはかなさよたれ
によろひをまいらせんわがきみにまいらせん小さく
らおどしをよしつねにうのはなおどしをむさしどの
にゑさせたるぐそくなりひとつはかれらがかたみと
いひ又はさねよきぐそくなりゑせんの事のあるなら
ばよしつねちやくせんそのためにこれまでもたせて
はんべれども御へんにこれをとらするとおなじけ
の三まいかぶとにうちものそへすゝきがまへにとう
と置て旅やつれにさこそあるらんはやそこたまけれ
すゝきどのすゝきめんぼくほどこして御代が御よの
御時に千ぢやうまんぢやうたまはつたるより今この
よろひにゑかじとてかはらけとりあげ三ばいくんだ
るすゝきどのがしよぞんをばほめぬ八こそなかりけ
れさいたうのむさしちつともゑほれぬまなこよりな
みだをはら／＼とながしいこくはゑらずほんてうに
をひてをやわがきみの御うちの人のやうにそろふた

る事あるまじそれをいかにと申にひとゝせつぎのぶ
たゞのぶが討じにいせとするがいきやうかまくらに
てのゑにざまいま又すゝきどのが御ぐそく一りやう
給はつて千ぢやうまんぢやうの御おんにかへじとよ
ろこふづる事のゆゝしさよかほどまでよきらうどう
をもちたまふわがきみの御くわほうのほどのうたて
さはせめて大こく四五ヶこく御ちぎやうなきこそく
ちおしけれおくがたのぐんびやうがなん干ぎにてよ
せきたると申ともくじむしやのかりびやうおもふに
さこそあらんすらん今は此よもふけゆくらんにのめ
やうたへやもつともとてまふつうたふつさか盛する
すでにそのよもやはんばかりの事なるにすゝきの三
郎ゑげいへはゑたるところをづんとたつて中もんの
らうにいで弟かめ井をちかづけいかにかめ井こんど
ゑげいへきしうふぢ代を出しときせんぞぢうだいに
つたはるはらまき一りやうきてくだるみなはうばい
たちもきこしめせ此はらまきと申はかたじけなくも

くまのゝごんげんのいにしへまかだこくのあるじと
しぶわうが中のぶわうにて天かをおさめたまへばか
いだいことに玄づかなり玄かれどもかのみかどに御
よをつがせ給ふべきわうじのたんじやうあるべきと
きさきのかずをそろふるにすでに千人いはひ申てう
あひにおぼしめされたるきさきにわうじの御さなけ
ればましでやうときかたまにいかでかさらにおは
すべきされどもするのきさきに御すいでんと申こそ
くわいにんとおはしませ御かどゑいらんなめにて
今ははやよのきさき御きしよくさらによからず五す
いでんにたちそひてすでに一のきさきとし大りへう
つし申さんとせんぎありしおりふし數百人のきさき
たちこれをねたみそねみつゝみかど御座なきおりふ
しにものゝふをかたらひて五すいでんにみだれいり
きさきをがいしたてまつり玄んざんふかくすてにけ
りされどいかなるふしげにや玄がいもやぶれ損せず
やかんのものもあぶさずしまんする月にたんじやう

ある玄かもたいしとおはします人すむ山にてあらざ
れば玄んりんさらにたちよらずこらうやかんはたち
よれどもじきしぶくすこともなくしゆごをくわへ申
せしにいたはしや太しはゝの玄がいのにうみをぶ
くしたまへばたちまちに玄きとなりやかんのものを
ともとしてとし月をふるほどにあまのいはとのあけ
くれとはや七とせになりたまふ天下にはなげきにて
をんごくゑんりはたうまでたづねたまへどましまさ
ず世をうき事におぼしめしすでにはや位をすべりた
まふおりふしたつとき人のましくてきよしよをた
べぬるおりふしに太しを見つけたてまつて大りへ
かへつてそうもん申玄んかけいしやうふしげのおも
ひをなしつゝ山中にいたつてくはしく見たてまつれ
ばかたちは五すいでんにしてそのおもかげもかはら
ず太し御とし七さい人を見なれたまはねば玄んらあ
たりへたちよるをおぢをのゝかせ給ふをちけん上人
はしりより太しをいだきとり五すいでんの玄がいを

ばさんちうにべうをつきこめたてまつつてそのゝに
太しチ脱スルカをばうんしやうへうつしたてまつる御かどゑい
らんましくて太しをいだきとりたまひちけんひじ
りをちかづけてくわしくとはせたまへばひじりもい
かでぞんぢせんさんちうにいたつてじゆけ石上を心
がけきよしよをたゞねるおりふしに太しを見つけた
てまつつてそもん申て候とありのまゝに申みかど
ゑいらんありあふにごれるよにうまれてかいをたも
つごういんにかゝるつみをつくる事はまるがなきチ脱
てあらずやかゝるものうきくにはありてゑき事と
てばんりのひしやとなづけてこくうをかけるくるま
に今のたいしもろともにすでにせうじたまひけり第
一の志んかにのうみの大じん志げたかおくみの中じ
やうかねみづかれら二人をともとしてくるまの志ち
にせうじてひがしをさしてとびたまふわがてうきの
くにむろのこほりをとなしさとにしては又ゆやごん
げんとあらはれてしゆじやうをきいど志たまへり五

すいでんのわうじはにやくわうじにておはしますの
うみの大じんはこもりのみやとげんせらるゝおくみ
の中じやうはひぎやうやしやこれなりその御あとを
志たい申ちけん上人とびきたつてひじりのみやとげ
んせらるゝそのほかのかみたちは志だいくにきて
うしてしよしやみやうじん五だいわうじくはんじや
う十五しやこんがうやしやしよしやとげんじたまふ
もみな此ときの人々ぞ志かるにかめ井よくきけ志げ
たかより志げいへまで十六代とおぼえたり志げたか
のいにしへまかだこくよりわがてうへとばせ給ひし
おりふしみかどひやうじのそのために此はらまきを
めされてとびきたたりたまふなり代々ちやくしにつた
はるいへのたからを今鈴きまでさうでんすぢうだい
なればみをはなさず此たびもきてくだつておくがた
のやつばらにとられてつるにたもんのたからとなさ
んおしさよそれとてもちからなし志げいへはめんぼ
くにきみのきせながたまはりぬ此たびのつかれに二

りやうかさねん事かたし御へんにこれをとらすと
てからにしきおどしこがねざねの腹まきをぬいでか
め井にとらせけりかめ井はらまきひつたてこれみ給
へ人々六みやうぎやうのそのなかに人のくわほうは
ぎによつてぢなんにむまれてもそうちやうをつぐべ
しととかれたるはこれなるべしこのときいへのぢう
だいをかめ井の六郎ゆづりゑてちすちのやさきにあ
たる共むないたにうけとめてぢなんす事のうれしや
とおどりあがつてよろこふだるあつぱれぶしのてほ
んやとほめぬ人こそなかりけれ

すでにそのよもあけがたになりければむさしばうべ
んけいは四まどころへつつといりいつもこのむかち
んのひたゝれにみづにをしのはいだてし三びきりや
うのゆごてさしいまだよろいはきざりけり二尺ばか
りなるうちがたなを十文じにさすまゝになしうちゑ
ぼしをつこうでゑらあやたゝんではちまきにむすと
志め人々御めん候へとて四間のであるより中もんのら
うにいでからうとにこしをかけてひがしむきにぞる
たりけるすゝきの三郎ゑげいへもぎよれうしまずり
のひたゝれきみよりくだし給はつたる小さくらおど
しのよろひをき同じけの三まいかぶとのををゑめ三
尺八寸のいかものづくりのたちはひて三十六さいた
る大中ぐろのそやおふて三人ばかりのまんなかにぎり
これも四まのでいよりちうもんのらうにいでからう
とにこしをかけてひがしむきにぞるたりけるわしの
おかたをかくまい太郎源八びやうゑひろつなびせん
のへい四郎けのよろひかぶとのををゑめたちはき
やおひてみなながらからうとにこしをかけめとく
きつと見あわせたる此人／＼のありさまはほんくわ
いちやうりやうあんろくさんもおもてをそばめつゝ
はぢぬべしその中にとつてもかめ井の六郎重きよは
ひときはすぐれていでたつたりはだに取てはからく
れなゐひつちがへびせいがうのはつたるによせかけ
めゆいのひたゝれのくゝりをゆつてゑめたりけりや

うばいたうりのさうのことびやくだんみがきのすね
あてくまのかはのもみたびしろかねにてへりがねわ
たしあくち高にふんふんふん重複カごうだり亥しにぼたんのは
いだてしからにしきおどしこがねざねのはらまきざ
つくとゆりかけいとひおどしのよろひ二りやうかさ
ねはらりときおどりあがつてたかひほかけゆつてう
わおびちやうと亥め九寸五分のよろひどをしをめて
のわきにさいたりけり一尺八寸のうちがたな十もん
じにさすまゝに三尺八寸候ひしあをひづくりのたち
はひて四十二さいたるたかうすべうをはずだかにと
つてつけおなじけの五まいかぶとにくわがたうつて
いくびにきしらあやのほろをさつとかけぬりこめの
ゆみの四人ばかりせめのせきづるかけさせまん中にぎ
りよこたへ四間のでゐより中もんへゆるぎいでたる
その有さまものによくくたとふればめいほくたい
しはくたわう我てうにてはまさかどすみともよしの
山にてなをあげしあうしうのたゞのぶもたゞこれほ

どこそありつらめきりやうによせていてたつたりや
とこゑをそろへてほめたりけりすでにそのよもあけ
ければおくがたのぐんびやうもうつたつよしこそき
こえけれ先をふてへはときのじつけん人ながさき殿
を大將にて三千八百よきころも川ひがしのもんへを
しよするからめてはだてとりのうみ三千五百よきに
しの小もんへをしよする御しよのてはをふてはす
ききやうだいかねふさたゞ三きにてかためぬからめ
てはわしのおかたをかくまる太郎源八びやうへひろ
つなびせんの平四郎以上五きにてひかへたりべんげ
いはうきむしやにてをふてのやぐらにはしりあがつ
ていくさのげちをぞ亥たりけるかめ井の六郎も同じ
くやぐらにあがりかぶとをぬいてどうとをきゆみと
りなをしつるくいしめしすびきしてこそゐたりけれ
あにのすゝきが見あげてきつと見てや御へんはやぐ
らにあがりたるかかめ井がきいてさん候此じやうは
ひらじやうにて候へどもひさしくこしらへたるじや

うにてほりひろくしてそこふかしいかにかたきがつめかけてうめ草をこむと申とも三重のほりをばたゝ一ときにはよもうめさうじ亥げいへ亥げ清きやうだいとのつておくがたのぐんびやうにてなみを見せてくれさうすすゝききてあふよくいふたりかめ井たゞし亥げいへはながたびにはらまきにかたひかせやつばやづかもおぼゑねどもさらば射て見んかめ井とておなじくやぐらにあがるかくてよせての人々はをふてからめてもみあはせときをどつとあぐる六しう亥んどうかくやらん天地ひゝいておびたゞし、じやうには以上九人の人々いくさのほうとてやさしくもときをおつとぞあはせけるものによく／＼たとふればいかづちわたらはるの野にふるすをいづるうぐひすのはつねをつぐるごとくなりときのこゑづま

といへどもかまくらどのゝ御ゐにそむきおはしますさるによつてながさき殿御ごよしよたいし御下こうのそのうへあめが亥たにありながらいはい申にをばざるによつてざけいの御亥がいましまさばかいしやく申せとの御つかひにたかう參て候と申させ給へ人々とてゆんづえにすがつてひかへたりむさしばうべんけいはやぐらのあゆみのいたをこぼれよととう／＼どふみならしなにかういふはてるぬめかれつのうつたるかぶとをきようぎこつがらゆゝしくてよきむまに乗たればひでひらがこどものなかにはたれなるらんとおもひしに又らうどうのてるぬめがこのもんぐわいまでまいりきたつてむまのうへにてのなりやうらうせきなり其ぢんをやひいてのけとぞ申ける

てるゐの大郎がこれをきゝかくのたまふは武藏どのだしだおんあげてなのるいかに御ぢんへ申たき事の候きのふまでははうぐわん殿をしゆくんとあふぎ申りければてりの太郎たかなう一ぢんにこまかけいかことめづらしきざうごんかなきみをふかくたつとめばしんをうやまふだうりありかまくらどのゝ御ぎ

ようしよたいしけふの大しやう給はつてまかりむかつたたかなうにてわ人ともをはしんじつのもゝかすとはおもはぬなりむようのくわうげん申さんよりもさぶらひは渡ものぞかぶとをぬいでゆづるをはづしいのちをつげとぞ申けるむさしばうべんけいはことばなくしてたつたりけりかめ井の六郎がむさしがあたりへたちよつてなふ／＼むさし殿玄んめいをもたつとまずぶめいにもをそれすほうにまかせてふるまい候ばうじやくぶじんのやつめにはなにをおほせ候ともたゞけんをけうすにたるべしむようのろんをとめたまへきみこそ御はらめさるゝともわれらがかくて候はゞいくさははなをちらすべしかう申つはものをいかなるものとおもふらんゆやごんげんの一の玄んかにのうみの大じん玄げたかよりも十六だいのこうゑんすゞきのしやうじが二なんかめいの六郎玄げきよなりとしつもつて二十六てるゐどにや一すぢたてまつらんやうけて見よといひもあへず四人

はりに十四そくとつてからとうちつがいもとはずうらはすひとつになれときり／＼とひき玄ぼりまちをこぶしにひつかけゑいやつとかつてうつたるはどうづきなんどのごとくなり一ぢんにすゝんだるてゐがしやていにたか野の四郎がこまひつそばめてひかへたるよろひのそでの三のいためてのはいだておぐりのいたきものたばねをするりととをしあひびき懸てうらをかきくつとぬけてあまるやがうらにひかへたるるがむまのふとはらにはぶくらせめてづつぱとたつたかのはいたでなりければうけもあへずめてがへしにしころをつゐてどうどおつればてるゐがむまはいたでおひびやうぶがへしにひつたとかへしかたひざ折てふしければてるゐはむまよりおりたつたじやうにはむさしすゞきをさきとして射たりや射たりとゆりあげ／＼わらひけりよせてはいられてをともせずいこくのきんくわがゆみのいもたゞこれほどぞありつらめとよせても玄たをまひたりけりあ

にすゝきが弟かめ井がすがたを見あげてきつと見て
あ射たりやかめ井この五ろくねんはなれ御へんの
かほどにおひたつてあるやらんとこゝろもとなくお
もひきのくによりはるべくだつて見てあればよう
ぎこつがらよりすぐれたるながやづかのおほゆみは
よにもふしげにおもひしにをしでかつてのさだまつ
て射たりやかめ井あいたりやかめ井どのたゞいまの
そのきしよくをきのくにゝとゞめをく一ぞくどもに
みせばやなきみも御いであつて御けんぶつあれかし
なしげいへもや一すぢいて見せもうさんといふまゝ
にじゆうさんぞく三がけのなかざしぬいてあぶらひ
きやさまひろ／＼とひかせいかにやおくがたのぐん
びやう今のかめ井があにすゝきのしやうじとはわが
ことなり四こく九こくの御かせんに御とももうしど
どのかうみやうなをあらはし御よしづまつてきしう
ふぢしろはほんりやうなればあんどうをたまはりしよ
りやうにくだりぎけいのみやこ下ちやくをばしらで

御とももうさぬなりさはありながらこの五ろくねん
きしうふぢしろにありとはいへときみのおんことか
め井がゆくゑ一かたならぬによりさうてきうしふぢ
しろをいでいそぐとすれどかち路にて日かずつもつ
てきのふまで七十五日にてゆふべつき今日の御かつ
せんにあふたるはなんばうくわほうのものぞいまの
かめ井がやほどこそなくともうけてみよとぞいふた
りけりよせてのぐんびやうはたてのはをつきかざし
すゝきがいるやをまちかけたりすゝきこのよし見る
よりもじゆうさんぞく三がけさんにんぱりにからり
とつがひもとはすうらはず一つになれときり／＼と
ひきしほりかなぐりばなしにかつきとはなす一ぢん
にすゝんだるてるゐがいとこにまるたの藤じがたか
のがたうのや一すぢとすゝみかけたるむないたにた
つよりはやくくつとぬけうらにひかへたるむぎのゝ
四郎がくびのほねにびつしとたつ二きのむしやがた
めずしてゆんでめてへどう／＼とおちにけり

つゞくぐんびやうこれを見て此ものどものやさきにはくろがねのたてをつたりともかなふつべしともおぼゑずやこのぢんひけやといふまゝにむら／＼ばつとひいたりけりすゝき兄だいやぐらよりくだりこぶしにけよきむしやをかひえり／＼さしとりひきつめさんぐ／＼に射たりけりやだねつくればやぐらをゆらりととんでおりこまひきよせてうちのり衣川のなかのせをみづにかもめが一むすびなみまをつたふふせいにてあぶみのはなにてなみをたゝかせざゝめかひてわたしけりおくがたのぐんびやうこのよしをみるよりもすゝききやうだいてどりにせよたちもかたなもいるべきかとおりかさなつてひしめいたりすずききやうだい此よしをみるよりもたまになれたるほうらいのとりのふせいもかくやらんおどろくけしきはなかりけり大せいのなかへわつていりにしからひがしきたからみなみくもでかくなわ十もんじやつはながたといふ物にわりたてをんまはしてさんぐ

にきつたりけりすゝきの三郎しげいへ十三ぎきつておとせば弟とのかめ井がてにかけて二十七きなぎふするげにはかたきもこらへばこそかせにこのはのちるやうにむら／＼ばつとひいたりけりこの人々はてもおはずしかわゑづ／＼とわたしもどしいきほいかつてひかへたるはいこくのはんくわいちやうりやうもかくやとおもひしられたりむきしばうべんけいはやぐらのうへにてつくぐ／＼と見てあらおもしろとすゝききやうだいが合戦したるやうやさすがにあのかたぐ／＼は天かの御よういくしよのいくさをしならすゝききやうだいが合戦したるやうやさすがにあのかたぐ／＼は天かの御よういくしよのいくさをしならふたる人々にてかたきのいろをさとつてかけひいつる心ねのおもしろさよしばらく人々やぐらにあがつて御まち候へべんけいもでたつてこんといふまゝに四間どころへつつといりうの花おどしのよろひきさきのなしうちゑばしにて今度はゑらゑのなぎなたをうちかたげをふてのやぐらにはしりあがつてひがしむきにぞたつたりけりそもそも／＼ころはいつなるらん

ぶんぢ五ねんうるふ四月の二十八日のいまだみのこ
くばかりなるにてりにてつたるあさ日にものゝぐの
かなものはおりからいろやまさるらんひらいたあふ
ぎはくれなゐにて日にさしむかつてたつたりけるむ
さしばうがありさまはたうはつびしやもん志てんわ
うのあれたるけしきもかくやらんいかにやおくがた
のぐんびやうなりをしづめてことの心をたしかにき
けそれ人げんのいのちはでんくわうてうろうつもう
たるゝもゆめのたはぶれきのふまではかたをならべ
ひざをくみし人々のけふかたきとなる事もいんぐわ
れきせんの道りによつて世をも人をもうらむまじさ
りながらなんぢらがをんごくにすんでいりとりがう
だうをしさかひのはうじをろんじ二十き三十騎こゝ
かしこにひきわけ／＼そらゐんじしてつぶて打たら
んにはにまじいぞこんにちむさしがするいくさこそ
てほんよ見ならへんけいがなぎなたてきりのこ
されたらんともがらは見しものとおもひなばごせを

ばとふてたべんけいが末代のものがたりにまひを
一てまはふぞやはやいてたべや人々すゝききやうだ
いもかねてよういやしたりけんやぐらよりもつゝみ
を取りだしたゝきあげてぞはやしけるぢたいむさし
はさんとにてもらんぶゑんねんの上手まひをばひと
てならふたりてうしをうかがつてたつたりしがかす
みにかすんでおほきなるこゑをはつたとあげて一せ
いをこそとつたりけれうれしやとう／＼どなるはた
きの水日はてるともいつもたへせじおもしろやいか
だをくだすはおほ井川はなをながすはよしの河もみ
ぢをくだすはたつた川みやこあたりに名河はさまき
まおほけれどをんごくながらめいしよかなきりやま
たかねの殘のゆききえたにのつらゝもとけぬれば衣
川のみかさまさつておくがたのぐんびやうをべん慶
がなぎなたにてみなとをさしてきりながす切ながす
ともみゑぼしといふきよくを一ひようしはらりとふ
んでひらいたあふぎをやぐらよりころもがはへさつ

となげいれあふぎのおつるよりはやくやぐらをとん
でおりたりけりさんめだちのしらあしげ七き八ぶ
んあけ六さいに引よせゆらりとのつたりけりわしの
おかたをかゝさきにかけんとすみけりべんけいが
これを見ていで／＼むさしあらざりせんあとをばこ
なせわかむしやどもとてさきがけしてこそわたしけ
れむかひは志のぶもとよしたけびまるたをさきとし
ておくにはわれとおぼしきもの三百きばかりてひか
へたるぢんのなかへむさしこまをざつとかけ入たり
おくがたのぐんびやうぢんをふたつにわけたりけり
されどもこゝにたかたの太郎と名乗てむさしばうに
わたりあふべんけいこれを見てもつてひらいてよこ
てぎりにがんじときるかぶとのゆんでのふきがへし
おもてのほうさきめてのかぶりのいたをかけてづん
と切てぞおとしけるはなさき此よし見るよりもあき
つたりやむさしどのそこをひくなといふまゝにすき
まもなくかゝりけりべんけいこれを見てもつてひら

いておがみうちにもやうどうつかぶとのまつかうき
りわつてうしろはしころほろ付まへははつぶりよだ
れがね四まいかなどうひつしきくさすりふたつにざ
つときりわつてゆんでめてへさばけたり

志ばたの四郎がこれを見てあきつたりや武藏殿そこ
をひくなといふまゝにすきまもなくかゝりけりべん
けいこれをみておくがたのぐんびやうはあふ心はが
うにありけるやしりぞく風せいをみせざるはてなみ
のほどを見せんとてもつてひらいてちやうどうつた
りけりしばたもきこふるつはものにてかぶりのいた
にてうけながしさらぬていにてかけとをする二ぢんに
つゞいたるかめ井の六郎がむさしのゝきりのこし
をうけとつたりといふまゝにあふひづくり三尺八寸
よこてぎりにがんじときるかめいがうでやつよかり
けんたちのかねやよかりけん四まいどうををしかけ
二十五さひたるそやをかけしやこしのつがひをくる
まぎりといふものにふつときつておとしければがみ

はぬけてどうとおつればしもはくらにのつたりけり
これを初て七きの人々いれちがへもみちがへさんざ
んにきつてまはりけりかゝりけるところにときの八
郎たかなうとかめ井の六郎ゑげきよむすとくんで二
人がありやうばがあひにとうどおつるかめ井ぶさうの
かうのものかたきとくむならば大せいさだめており
あふべしといろかねてさとりとさをとつておさへて
くびふつとかきおとしたちあがらんとするところへ
とさがめのとの十郎がすきをあらせすおりあひてか
めるがゆんでのかひなを水もたまらずうちおとす

ふたりいまはかうとおもひてかめ井をかたにひつか
けてじやうのうちへつつといりたかきところにおろ
しをきやそこではらきれかめ井なむあみだぶつとも
ろともにすゝきはしやうねん三十三かめ井の六郎二
十六さしちがへてゑにけるをおしまぬものはなかり
けりむさしばうべんけいはきみの御まへにまいりは
やすゝききやうだいうちじにつかまつりて候と申判
官きこしめされてなにとすゝききやうだいうちじに
したるといふかさん候と申かめ井が事はさてをきぬ
あらむざんやすゝききのくによりはる／＼くだりよ
になきゑうのかたうどしてうたれぬこそむざんな
れけさよりよむ御きやうもはやほうなうの時分にな
るぞふせひてたべや武藏殿べんけいうけたまはつて
こんどはそれがしがしにばんにあたつて候と申もあ
へず御でるへつつと入くろがねをあつさ五ぶんにき
たはせたるをわけがはどうとなつけてかたなだまり
にぞきたりけるうのはなおどしのよろひいとひおど

しのどうまる三りやうかさねざつくときゆつてうわ
おびちやうどしめ一尺八寸のうち刀を十文じにさす
まゝにゑびらがたなくびかきがたなぎなたこぞり
はを取ちがへくらのまへわにしめつけゆんにくま
でををつとつてあてになぎなたうちかたげひざにて
むまにのつたりける辨慶がかけいづればたゞ小山の
うごくごとくなり大せいの中へわつていりひざぐち
たかもゝむまの腹はらり／＼とひきやぶればしやう
ぎだをしのごとくなり此いきほひにをそれですてむ
ちうつてにぐるところへ辨慶駒をかけよせくまでを
さし渡しかぶとのてへんにひつかけゑいといふてひ
きよせさげぎりしてぞすてにける

いわんやかんわうもろこしまでもそのなゑたるべ
んけいがいまをさいごのかつせんにおもてを合する
ものはなしいかれるまなこはくろくもの處々のはれ
まよりあさ日のうつろふごとくなりかたきをなびけ
ておめくこゑらいでんいなづまはたゝがみゑゝざう
とらのほふるこゑもかくやとおもひゑられたりべん
騎いが二どのかけにおくがたのぐんびやうは百八十
さひいくさかなとてこだかきところへこまかけあげ
ゑばらくぢんをぞとつたりけるかゝりけるところに
亥のぶの亥やうじが子に小太郎生ねん十八さいにな
りけるがべんけいがいせんのかけあしにちゝをうた
せびんひまをうかがつて一やいばやとねらふところ
にはやこゝにて見つけ二人ぱりに十二そくとつてか
らとうちつがひよつひいてひやうどいたあらむざん
やべんけいがのど／＼とひかへたるむないたにばつ
しとあたる小兵のいるやのかなしさはやたてにやを
ばためずしてひぞりけるそのやがうちかぶとにから
りと入てふえのくさりにひつしとたつもの／＼とい
ふまゝにやをかひかなぐつて見てあればとりのした
にてやいたりけんやがらはぬけてねはとまるさしも
にがう成べんけいもこまよりしもにどうとおつるあ

シナ脱
スルカ

らむねんやさいたうのむさしとておにがみのやうに
いはれしにかほどのほそやにあたつてはかなく成ら
んくちをしさよさいごにきやつをきらすばよみぢの
さはりとなるべしさりながらいせんのごとくむまに
とりのりをふならばおちてさうなくちかづくまじゑ
よせんそらじにをはじめちかづかんところをきつて
くればやとおもひそば成かぶとひつかけてそらじに
してぞたるみけるゑのぶこのよし見るよりもあれあ
れ御らん候へさこそ人々のをにがみのやうにの給ひ
しむさしばうべんけいをばなにがしがてにかけいお
として候くびとつて見せ申さんといふまゝに三尺八
寸のいかものづくりまつかうにさしかざしもみにも
ふでぞよつたりける

しかりなんとぞんずればちかぐとつめよせうしお
きにかつばとおきらうせきなるやつめにてなみのほ
どを見せんとてそばなるなぎなたをつとりのべをつ
つめさらりとないだりけりたかもゝきつておとされ
のつけにかへすところをはそくびちうにうちおとし
あけにそうだるなぎなたゆんでのかたになげかけこ
まひきよせてうちのりじやうのうちへつつといりこ
まをかしこにのりはなし大なぎなたにすがりたぢた
ぢとたゞよひあらくるしやかねふさよきみはいづく
におはしますかねふさむさしがてをひいて御まへさ
してまいるはうぐわん御らんじてあれはむさしかさ
ん候と申聲をきけばいにしへのむさしすがたはたゞ
きじんのごとしうら山しやなむさしどのはしやうを
かへずたちまちにあら人がみとなりたるよなそれへ
それへと仰ければうけたまはると申ておち椽につつ
とあがりよろひのそでをかたしきていまをかぎりと
見ゆるがかねふさをちかづけさいごに若君を一めお

がみ申さうかねふさわかぎみをいだき申武藏がてに
渡す辨慶若君をいだき申をくれの髪をかきなでかめ
わり山の峠にて御産あらせ給ひし時武藏が参りうぶ
ゆをひかせ申男子は七歳迄ものあやかりと承る若君
の御くわほうあやからせ給はいはくぶ頼朝に御あや
かり候へかいりきは御ゑんぶはうぐわんゆみはため
との御ゆんせい二さうをさとつてあくまのものゝ
をそれんは平のちゝぶにあやからせたまへうち物め
されものゝほねきつて人におぢられたまんはもの
そのかずにて候はねどもかう申むさしめにあやから
せ給へいのちながくわたらせ給はんは三うらのおほ
すけが百六になりしにあやからせたまへと申せし事
のゆめとなりいまだとをにもたらすして衣川の水の
あわと消させ給はんいたはしやとはら／＼となきけ
ればあらいたはしやわかぎみはなにのよしみをもゑ
ろしめされざりしがべんけいがあらけなきいで立に
もおぢたまはずむいたをくだりにあけのちしほに

みそかへしながらゝちを御らんじていたいけしたる
御てにてかきなでさせたまひつゝひし／＼といだき
つきわつとさけばせ給ふにぞ御前のによばうお末
の人かねふさも武藏も消入やうになきあたり
はうぐわん御らんじてべんけいがさいごにさけをの
ませよかねふさうけたまはると申てながゑのてうし
にもみぢのかはらけすへてまいらせあぐるはうぐわ
んとりあげさせたまひてこれは二世までのさかづき
をさすぞたまはれべんけいあまりのかたじけなさに
三度いたゞきたぶ／＼とうけゆく／＼とほしけれど
もあらなにともなやふゑがきたる事なればちにま
じはりて此さけがむないとをくだりにさらり／＼と
ながれけり

はうぐわん御らんじてべんけいがさいごはちかづき
たるぞねんぶつをすゝめよかねふさうけたまはつて
ねんぶつをすゝめければおくがたのぐんびやう此よ
しをきくよりもじやうのうちにあたつてねんぶつの

こゑのきこふるはいかさましさがはらをきるか大
がうのものゝじがいのやういざ見ならひててほんに
せんもつともかかるべしとてわれさきにと見だれい
るようぐわん御らんじてあはやかたきのちかづくは
かねふさはふせぎやいよべんけいははらをきれ御き
やうせんずるあひだとて御ざをたゝせたまへばべん
けいはかたきのよばはるこはねをちからとして大庭
におどりいでなぎなたにすがつて又たち／＼とたゞ
よふはうぐわん御らんじて又うつていづるかむさし
さん候と申はうぐわんおもひつゝけてかく計
のちのよも又のちのよもめくりあへ

そむむらさきのくものうへまで

べんけいうけたまはつて返歌とおぼしくてかくばか
り

六たうのちまたのすゑにまつそきみ

をくれさきたつならひありとも

とかやうに申てほりのふなばしをかぶ／＼と渡しけ

りおくがたのぐんびやうこのよしを見るよりもあら
おそろしや又べんけいがかゝるは爰をひけやといふ
まゝにわれさきにとぞにげにけるころもがわさつと
をつこしむかいのはばたにてへうたうするつはもの
を十七八ききりふせこなたのはばたへかへらんとし
たりしが次だいにしやうねみだるればにしむきにつ
つたつてなぎなたまなごにゆりたてくわうみやうし
んごんとなへつゝしやうねん三十八にしてころもが
わのたちにてわうじやうをおしまぬものはなかりけ
りおくがたのぐんびやうこのよしを見るよりもあら
おそらくしや又べんけいが人をきらんするばかりごと
よちかふよりではかなふまじとをやにいよといふま
ゝにさしとりひきつめさんぐにこそいたりけれむ
さしにあたるそのやはあしをたばねてまきのいたど
をつくふせいもとよりしゝたるべんけいにてそのみ
をちつともいたます

ろのがうなるもしやはたちながらしするいはれのあ
るぞたれかあるゆきむかつてゆみのはずをもつてそ
つとついて見ようけたまはると申て二十き三十きか
けよせくしけれどもおぢてさうなくよりつかすぬ
まだて此よしめるよりもをくびやうなるかたぐか
なそここのけぬまだてつかんといふまゝにこまのたづ
なかいくつてかつしくとあゆませよせゆみのはず
ををつとりのべをづ／＼かつばとついた本よりし、
た辨けいでかれ木をたをすごとくにかつばとまろび
けりまろびけるそのせんにもつたるなぎなたがひら
りとするを見るよりもぬまだてのしやうじはしヽた
るものとぞらずしてまたきつてかゝるとこゝろへき
もだましゐもみにそはすこまより志もにころびおち
うきぬゑづみぬながれてころもがわのぬせきにせか
れてゑんだりしをきせん上下をしなべてにくまぬも
のはなかりけり

はまいて

そも鎌倉と申はむかしは一足ふめば三ちやうゆるぐ
たいふのぬまにて候ひしをわだはたけやま惣奉行を
給はりいしきりつるのはしをもつてたかきところを

きりたいらげたいふのぬまをうめ給ふ上はつかい中
はつかい下はつかいとて三つにわる上はつかいは山
ちうはつかいは在家下はつかいは海なりけり上はつ
かいの一だん高きところにはげんじの氏神正八幡大
ぼさつをあがめいはひ奉る中はつかいのざいけをか
まくらやつ七郷にぞわられけるあらおもしろのやつ
ふらん夏はすゝしきあふぎがやつ秋は露くさごめ
がやつ冬はげにもゆきの下うめがえがやつこそひさ
しけれ

遙の沖を見渡せば舟にほかかるいな村がさきとかや

いひしま江の島つゝいたりほうらいきうと申ともい
かでは是にはまさるべきかるがゆへに名づけてあゆみ
をはこぶ輩は諸願かならずまんぞくせりていとうの
ついみのをとさつ／＼のすゞの聲々にちはやの袖を
ふりかざす神慮すゞしめの御かぐらのをとは隙もな
し

かゝるめでたきおりふしよりともしやうらくましま
して大佛くやうをのべさせたまひ御身は左近の右大
將に經あがらせ給ひ兵衛つかさ十人右衛門つかさ十
人廿人のくわんどを申給て其ころちうの人々にあて
をこなはせ給ふ中にも左衛門つかさをは梶原の平三
景時にくだされけるを嫡子の源太にゆづる源太司を
たまはりいそぎ國にくだり此事披露申さで有べきか
と大名小名てうしやう申いつきかしづき奉る先初番
のざつしやうにはほうらいの山をからくみ中にかん
ろの酒をいれ不死の薬と名付銀のさほに金のつるべ
を結さげはねつるべにて是をくむさけにあまたの威

徳ありうとき人さへちが付したしきなかは猶玄たし
むをちこちのたつきもしらぬたび人になるゝも酒の
いとく也ほうらいの山のうへにはりふじんがたちば
なけんぼのなしさうふのしゐかゝりゆとうなんせ
いのくりとかや皆いろ／＼になりつれて其あぢはひ
はしゆみをなす誠にふしのくすりぞとゑひをすゝめ
てまいらする二日の日のざつしやうにはさかなの數
をあつめぢんのはだじやかうのへそ鎧腹巻たちかた
な名馬の數をそろへ思ひ／＼にひかれけり三日の日
のざつしやうには江の島まふでにこと寄て御はまい
でとぞ聞えける忝も御れうの北の御方出させ給ふ其
上人々の北の方もみな御供とこそ聞えけれ船のうへ

にぶたいをたかくかざり立玄たんくわりほくやりわ
たしかうらんぎぼうしみがきたてぶたいの上にあや
を敷みづひきににしきをさげねれば浦吹風にへうよ
うして極樂淨土は海の面に浮出ぬるかとうたがはる
龍王に一おどりげんしやうらくのさしあしはとうの
まひのはちがへしりんたいはにはさすかひな青海波
にはひらくてことりしよに羽返しいづれもきよくを
もらさず夜日三日ぞまふたりける打もふくもかなづ
るもぼさつのぎやう是也天人はあまくだり龍神は浮

あがり船ぎやうだうにめぐるらんけもんかくちの輩
うかれて爰にたち給ふ御前の人々御所領給はり所知
入とこそきこえけれ

景清

今度頼朝の御代をめされし由來をくはしくたづぬるに御舍弟九郎御ざうし御こゝろたけくわたらせ給ふゆらひなりとぞ聞へけるかくてけんきう元年にきみうゐ京上ましゝて二度の御上洛おなしく南都のくやうをのべ給ふこうれいなればちゝぶどの先陣とぞ聞へける去間玄げたゞ本田の次郎をめされいかにちかつねうけたまはれ今度も玄げたゞがせんぢんを給はるや都のみにかぎらず五畿内の者共がだうぞくいちをなすときく本田どの御説也ちかつね承りわつぱにとつてはたれゝぞかた田のくまわうほうらい丸ふくだのまんざいをさきとしてわつば廿人にあかぢのにしきのひたゝれをさせまるまきのたちをかつがせて弓手のわきをぞとをしけるぢしろ二十人におりえぼしをさせ志らえのなぎなたかつがせてめてのわ

きをぞとをしけるちゝぶどのゝ御せいは七千餘騎鎌倉殿の御せいは十萬よきとぞきこへけるせんぢんも後ぢんもへいあんぢやうを御たち有なんとへとぞいそがれける東大寺四つの門はゆふきながぬま小山うつのみやをのくかため給ふ其中に取てもてかいの門こそ大事なれとてちゝぶどのゝしてん王ほうしやうをあざけるほどのつはものを五百餘騎にてかためらるかくてなんとのくやうはまつさいちうと聞へけり其中にとりわきてものゝあわれをとじめしは平家のさぶらひ大將に惡七兵衛かげきよにてものゝあはれをとじめたりあわれよの中にひんほどつらき事あらじ志たしき中はとをざかりうとき人にはいやしまれひんしやの家に生るゝほどつたなかりける事あらじうけたまはればかまくらどのなんとのくやうと聞て有はうゑの庭とはぞんすれ共主君のかたきでましませば志のびみやこへのぼりつゝ頼朝を一かたなきり申大臣殿のけうやうにほうせばやとおもひけれ

ばをはりのあつたをたちいで、玄のびみやこへのぼりけり清水坂のかたはらにあこわうと申て遊女の有けるにあさからずちぎりければかれが宿所に立よつてなんとのやうをくはしくとふあこわううけたまはりちぎるなさけのせつなさに有のまゝにぞかたりけるかげきよなゝめによろこふでいそぎ南都へ下り人の心のうちをもひき見ばやとぞんすれば出立やうこそおもしろけれどもえぎにほひのはらまきを草すりながにさつくと着もちのころもをうへにきて上帶玄つかと玄めたりけりちやうけんのけさをもつてほうかぶりを仕りおほい殿よりも給たるあざまるといふうちがたなを十文字にさすまゝにぬつたりしけいちにあひがはにてををたてつめはきにはくまゝにつくしのみのなぎなたの四尺八寸ありけるがぬけば玉ちるばかりなるをさやをばきつとはづいて弓でのわきにかひこふでちゝぶどのゝかためてましますてかひのもんを景清はあふさらぬ體にてとをりけりちゝぶどの

の御うちなる本田の次郎がこれをみてあらけなふことがめけれあれはいかなる人さうぞこれはちゝぶどのゝかためてましますてかひの門とは玄らざるかそれよりももどれとよかげ清は聞よりもあつことなしと存ればなぎなたまでにとりなをしちかふよつて小ごゑたつて申やうなふくるしうも候はず東大寺のかたはらにすまゐつかまつるつゝ井のじやうめうめいしゆむなりやあとをしてたべとぞ申けるまくのうちなるちゝぶどの此よしをきこしめし大まくつかんでうちあげあらふしげの事共や只今になまりの聲はほくろくだうのかたはらのなまりのこゑと聞いてありますよりももどれといへ運命つきはてゝちつともたてつく物ならばはからへとの御詫也さうけたまはり候とて其せいは三百餘騎たち長刀のさやはづし御とまりあれとてをつかくる景清はみるよりもあらわれぬるとぞんすればはひたりしけいちをとあるところにぬぎすて三百よきがまん中にて長刀のきつ手には

こむ手なぐ手ひらく手石付をかひつかんではらりは
らりとなひだりけりくつきやうのつはものを三十騎
ばかりまつしくらにきりふせのこりのつはもの共に
いた手うす手おふせて四方へはつとをつちらしきり
のほうをむすんで我身にさつとうちかけてかすが山
へつつと入世間のていをきゝあたり景清心におもふ
やうしよせん爰にて叶すば明日はんにやじへ御まい
りと聞てあり山伏のすがたをまなびねらはばやとお
もひかきのすゞかけしかまのときんまゆはづかにひ
つこふでたけとひとしくあるをひを取てかたにうち
かけゐのめすかひたる大まさかりをうちかつぎみね
いりしたる山伏たちを廿人ばかりともなひはんにや
じのまへにてよりともの御まいりをいまやをそしと
あひまつるさるあひだゑげたゞ此よしを御らんじて
あらおびたゞしの山伏達やめんくはどこやまぶし
と見なしたるぞゑげたゞは奥山伏と見なしたりおく

はやそとのはま大みねなんどをぎやうどしていそに
つかれたるやまぶしたちと見なしたりさりながらさ
きよりも九ばんあとよりも十二番めにいかにもせい
わからたかにてなまめいたる客僧をまことの山伏と
おもひてふかくをかくなよかたゞあれこそきのふ
てかひのもむにてのひげ大しゆのたゞひなれたゞを
つつめからめ取君の御めにかけ申せ本田殿御誕也ち
かつね承て其勢は五百よきたち長刀のさやはづし御
とまりあれとてをつかくる景清は見るよりもあらは
れぬるとぞんずればかけたりしをひをとあるところ
になげすてあざまるをするりとぬいて五百餘騎をう
ちやぶり又きりのほうをむすんでわが身にさつとう
ちかけて人よりさきにかけきよはゑのび京へぞのぼ
りけるかの景清がふるまひはたゞはんくわいもかく
やらんあらむざんや景清いまはせんはうつきはてゝ
わが身をだいて立たりしがいかにもして主君のかた
きをうたばやとおもふこゝろのうちこそあわれなれ

爰にひとつたとへあり一とせたかくらのみや三井寺をたのみぎやうかうならせ給ふ三井寺なんなくたのまれ申南都へ重状をこす大衆せんぎあつて返状をかの玄んけうにかゝせられけるにきよもりを平氏のさうかう武家のぢんがいと書てをくる其とがにより志んけうが討手をなんばせのおがたまはり一千餘騎をそつし南都へせめてぞのぼりけるなんとの大しゆたち志むけう一人にたのまれきよもりとてきになりかなふまじいとせむぎしてこゝろがはりをしたまひけりあらむざんやさいせうばうがたのみ申大衆たちは心がはりをしたまへば今はせんはうつきはてゝこつがい人のまなびをし志んのうるしをかひとつてつぎめ五體に志つかとさすみのうらかへしきるまゝにやぶれたる笠をくびにかけほそきつえをたよりとしなんとを立いでゝふてゝみやこへのぼりけりならざかやはんにやじのあたりにてうつてのせいにぞゆきあひける日比はかたをならべひざをくみしはうばい

たちまのあたりをとをれ共あればいかにさいせうかと目がくる人もなかりけり其も心ががうなればわにくちをのがれて鬼神が門を立てゝなるみがたにくだりつゝいしをもとめてれうちをし本のごとくにへいゆうなつてかくてさいせうくまのにこえ新宮の十郎ゆきいへの御てにつき申ぢせう四年の夏の比あつたのみやの願書のときにさいせうばうとぞ書たりける其後信濃にくだりつゝ木曾殿の御手につき申北國となみやまはにふの宮の願書の時にさいせうばうとはかゝずしてその名をかへてきその太夫覺明とぞ書たりけるあはれ志るしのなかりせばさいせうばうが命はあやうかりつるものぞかしかく申かげきよもそれにはすこしちがふましこつがい人のまなびをしてねらはばやとおもひ四條の町へたち出て志んのうるしをかひとつてつきめ五體に志つかとさす夏のうるしの物うさは五たいを志むるそたへがたきむざんやかげきよはわが身をきつと見てかくなりはつるも

たれゆへぞ主君の爲とおもへばうらみとはさらにお
もはずいかに二さうじんつうの玄げたゞと申ともか
の景清がふるまひをみしらるべうはなかりけりみの
うらかへしきるまゝにやぶれたるかさをくびにかけ
きよみづ坂のかたはらに百四五十人なみゐたるこつ
がい人にまじはりなふ人なみくにこなたへもせぎ
やうたべよとこふときぞいといむかしをこひごろも
こひごろも袖はなみだに朽ぬべしるあひだ重忠本
田の次郎をめされかゝるほうゑの庭にはすんせむし
やくまと申て大事の事が候ぞあのやう成こつがい人
は四季のてうしをそむくなり先春はきのへきのとに
てそうてうにてあらふすなつはひのへひのとにてわ
うしきにてあるべし秋はかのへかのとにてひやうで
うにてあらふす冬はみづのへみづのとにてばんしき
にて有べしどようはつちのへつちのとにて一こつに
てあらふすこれによつていしをんやうにもそうわう
ひやうほん一とつかひ候いまはあきにて候ほどにひ

やうでうにてあらふするがあらふしきや只今せぎや
うたべとこふつることをきくもひやうでうなり弓手
のまなこは志んのざうよりつうじてそのいろくろく
みゆるめてのまなこはかんのぞうよりつうじて其色
青くみゆるさうこくさうでうのかたちまさしく御身
はこつがい人ではなくして平家のさぶらひ大將に悪
七兵衛かげきよと見たわちゝぶがひが事かかぐとふ
がむねんならばかう申玄げたゞが君に御いとま申む
さしへくだつてあらん時大御所え玄のびいりめんら
うすきがきにてもねらひたくばねらひ候へ玄げたゞ
があらんほどはふつつとかなふまじいとまつしろに
いはれ申あつはづかしと存れば打うつぶひてぞ居た
りけるかげきよこゝろにおもふやう我等がちゝのか
づさのかみをげんぶくの親とたのませたまひたば
われらが父のたゞしげはちゝぶのしげにてちゝぶの
はたけ山玄げたゞと名のらせ給ふとうけたまはるえ
ぼしおやとゑぼし子は七生までのきゑんと承て候に

なさけなくもおげたゞの一度見ゆるし給はぬところ
はむねむなりその儀にてあるならばとても死せんわ
がいのちおげたゞとまいりあひとにもいかにもなら
ばやとおもふこゝろをさきとして上なるみのをさつ
とぬぎすていづくにかさひたりけんあざまるをする
りとぬいてみけんにさしかざしあふおとまりあれと
てをつかくるちゝぶどのは御らんじて心得たりとの
たまひて四尺二寸のかうひらぬいてわたりあふてぞ
見へられるあやうかりつるところに御馬まいりの
人々が一度にはらりとおりたつておげたゞをしへ
だてたてまつりかけきよ中にをつとりこめて火水に
なれとぞもふだりけるぢたいかけきよはこゝろはが
うなりちからはつよしもちたるかたなはつるぎしん
けいがじゆつはならふつ手をくだひてぞ切たりける
むまにとつてきるところこぐちとこわきおのうへさ
んづりうの毛からつらとからはなつかひをざむぶと
切ておとす人に取てきるところまつかうこびたいさ

うのこてふりあをのけばうちかぶとほろつけととう
なかこてのいたのはづれをばはらり／＼となひだり
けり馬人のきらひなくのりこえ／＼さんぐ／＼にきつ
てぞままはりけるくつきやうのつはものを其かず本ノマ、
れはきりといめのこりのつはもの共にいたでうすで
おふせて四方へはつとをつ散すそうじてかけきよが
ねらふところどこ／＼ぞたにのたうにみねのたうを
とはかづらときわの里なんとにては東大寺今度は清
水まふでまで一度ならず二度ならず三十七度に及で
こゝろをつくしきもをけし君をねらひ申せどもくわ
ほういみじくましまし／＼てちゝぶどのにさとられ申前
後にかなふ事もなしかげきよ心におもふやふいやい
やかゝる事そぐ／＼しきときかけきよが京すまひは
むやくなり玄よせん玄うとの大宮司をたゆみくだら
ばやと思ひ尾州あつたに下るさるあひだよりもか
ちはらをめされいかにかちはらうけたまはれ今度頼
朝よを取たりといへども取たる玄るしもなしそれを

いかにと申に平家のさぶらひ大將惡七兵衛かげきよといふものにこゝかしこにてせばめられよにもくちをしくぞんするいかにもして彼ものをちうしてすてよとおほせければかぢはら承て御まへをまかりたちしろかつしたをそのかずあまたとりよせふだにけづらせ筆にてものをぞいはせける平家の侍大將に惡七兵衛かげきよをうつても六はらどのへまいらせたらんともがらにけしやうのぞみたるべしかげときはんとかきとめて京白川のつじくにたつる札を立て十日ばかりはさしたるしもなかりけりかゝりけるところに清水坂のかたはらにあこわうと申女きた野まふでをしけるが京白川のつじぐにあく七兵衛景清をうたんと書いてたてゝ有あこわうあまりのものうさに此ふだをぬすみとりかも川かつら川へもながさばやと思ひしが中にてこゝろを引かへしましてしばし我こゝろ日本六十六ヶ國に平家の知

行とて國の一一所もあらばこそ平家一味のものとてはつまのかげきよばかりなりつゝむとするも此事つるにはもれてうたれうずかげきようたれて其後に不慮にをもひをせんよりも九年つれたるなさけには二人のわかのあるなればこの事かたきに志らせつゝかげきよをうちとらせ二人のわかをよにたてゝおとのゑいぐわにほこらんとおもひすましたあこわうがこゝろのうちぞおそろしき此札くわいいちうし六はら殿へまいり札のおもてにまかせてまいりてさぶらふと申あぐるらいてうなゝめにをぼしめしあこわうをめされくわしく問せ給へばあこわう承りさん候景清がゆく衛を人のしらぬも道理とおぼしめせ此あひだはをはりのあつたにさぶらひしが平家の御代の御時よりもきよみづを志んかう申月に一度は参りさぶらふ明日は十八日かならずみづからがところへきたるべしもとより大酒の事なればさけをすゝむる物ならば前後もしらずふすにてさぶらふぞ大せいそつしをしよ

せ景清をうちとらせみづからに所知をたべなふ我君
と申らいてう聞召れてうれしう候あこわう御前たつ
て所知をばあたふべしそれくとおほせければ承る
と申て志やきん三十兩わこわうにくだしたぶあこわ
うたまはりさふらひて清水坂にかへりつゝ其日のく
るゝを待たるはなさけのふこそ聞へけれあらむざん
やかげきよ是をば夢にもしらずして明日は十八日清
水へまいらばやとおもひ尾州あつたを打立て四日ち
のみちなるを其日のくれほどにきよみづざかのかた
はら成我宿所へ立よつて門ほとくとをとづるゝう
ちよりもたそとこたふるいやくるしうも候はずかげ
きよなりとぞこたへけるあこわうなゝめによろこふ
でいそぎたち出門をひらき景清をうちへぞ志やうじ
ける二人の若どもはちゝをはるかに見なれねば父が
あたりへたちよつてむつまじげなるふせなりあこわ
うなみだをながす風情にてあらいたはしや景清平家
の御代の御時は惡七兵衛かげきよとて公家にもぶけ

にもにくまれず一時のまふでにもちうげん小者はな
やかに馬くら小ぐそくぢんじやうにさもゆゝしくお
はせしがいつしか平家にすぎをくれ本ノマせいたまほ
こやつれはて御ともなふて景清はきこそくるしく
おはすらんかまへをきたる事なれば志ゆぐのさか
なを取りだしかげきよにさけをぞ志ゐたりけるか
げきよはみるよりもいとをしき子どもはなみゐた
りしやくに立たるはねうばう也いづくにこゝろが
をかるべきさしうけくのむほどにさしもにがうな
る景清もかたきの事をばはつたとわすれうれしう候
あこわう御前きよみづへは明日參ふするにて候いと
ま申てさらばとてあひのしやうじをさらりとあけれ
んちうにうつりてとうのまくらになみよりて前後も
志らずふしたるはうんのきはみとぞ聞へけるあこわ
うなゝめによろこふで清水へはみつからが參らふす
るにて候とてうすぎぬ取てかみにかけ門より外へ出
ると見へしがきよみづへはまいらずして六はらどの

へ参り此よしかくと申あぐる賴朝聞召れてさらば打たてつはものとて其勢は三百餘騎はたひとながれさせあこわうさきにをつたてゝあふ清水ざかへぞよせにけるころはいつなるらん八月十七夜のさようちふけての事なるに月は出てくまもなし玄たのこぐさにいたるまでかくるゝ所はなかりけりさるあひだあこわう御せんかたちを見れば春の花すがたをみれば秋の月みめもかたちもならびなきらく中一ばんの美人は申せども九年ちぎりをこめたりし悪七兵衛をうたせんとて大勢そつしよせたるはひとへに鬼神のごとくなり三百餘騎のつはものを門のあたりづいちらのわきにかくしをきわが身はうちへつつといりたゞ今こそ下向申てさふらへかけきよとぞおこしけるかげきよかつばとおきあざ丸をひざのうへにとうとをきあこわうをつくぐと見ていや／＼御身は清水へはまいらぬ人と見なしたりそれをいかにと申に日本六十六ヶ國に平家の知行とてくにの一ヶ國もなしへ

いけ一味の者とてはそれがしばかりなにがしが事をかたきの方へそせうしてうちとらせあとのゑいぐわにはこらんとおもふ共いんぐわたちまちむくうてまつたふよにはいづまじいぞあこわうあまりのふしぎさにいやさもなひものと申てかほにもみぢをひきちらす景清是を見てやあ有事はちんじそあることをちんずればもみぢのいろにみゆるぞやさればけてんのりうしゆほんけうにも七の子はなす共をんなにこゝろゆるすなと申つたへて有ほどにそらうたがひに言たるぞあこわう御せんといふこそをそかりけれひろゑんにおどりいでついぢのおほひに手を掛のびあがつて見てあればかしこに二十き三十騎かぶとのはちをならべつゝむらくもだつてひかへたりうちへはしり歸てにつことわらふていふやうはいかにやあこわう御せんわごせはさなしとちんずれ共こづめづあはうらせつかしやくをはやめてをそし／＼とせむるもいかでこれにはまさるべきさいごの別いかゞせんや

あねうばうとこそよばはりけりあこわうあまりのか
なしさに二人のわかの手をひいてあひの玄やうじを
はたとたれんちうふかくいりにけりかげきよこの
よしめるよりもあらおかしのあこわうがふるまひや
たとへばをにのたいしやうはちめんだいわうがいは
をたゝんて四十餘ぢやうについぢをつきくろがねの
もんをたてたりともかげきよほどのつはものがなど
いつばううちやぶらであるべきぞいはんやかみ玄や
じの一重やぶらんことはやすけれどもひごろのなさ
けとうざのゑしやく九年つれたるなさけにわごせは
こゝろかはるともかげきよはこゝろかはるまじやが
てことばをかへらるゝいかに二人のわかどもよはゝ
こそつらくともこれがかぎりのことなればちゝがひ
がたをいでゝ見よわかどもとありしかばむざんや二
人のわかどもははゝがところをたちはなれちゝがひ
ざになみよりてかほをなでひげをなでちゝよ／＼と
ばかり也かげきよは御覽じて二人のわかをゆん手め

てのひざにをきをくれのかみをかきなでゝをのれが
母の心中ほどつたなかりける事あらじそれをいかに
と申になにがしが事をばかたきの方へそせうしてか
げきよをうちとらせ二人の若をよにたてゝあとのゑ
いぐわにほこらんとおもふ共いんぐわたちまちむく
うてまつとふ世には出まじかくあさましきこゝろに
てよにしもたゞはあるまじい又よの妻にもそふなら
ば一つにおもへばけいしのなか又は敵の子孫とてあ
しからふするたびごとに玄やけんのつえにてうつと
きに父よ／＼とよぶならば草のかげにて景清がみん
する事もむざんなりいかにきくかわか共ようらめし
きはゝにそはんよりゑんまのちやうに參り父をまで
よとかたりつゝあにいやいしをひきよせて弓手のひ
ちのかゝりを二かたながいしてをしふするおとうと
がこれを見てあおそろしのちゝごせやわれをばゆる
させ給へとてゐたるところをづんとたちさらばよそ
へもゆかずしてころすべきちゝにすがりつくかげき

よは御らんじて何と申ぞいやわかよころす父はうら
みぞころす父はころさずしたするはゝがころすぞ
おなじくはあにとうちつれて玄でさんづをなげきこ
しゑんまのちやうにてちゝをまでよとかたりつゝこ
ころもとを一かたなあつとばかりをさいごにて兄弟
のわか共を三かたなにがいしつゝおなじまくらにを
しふせてかたなをかしこへからりとすてつがはぬを
しのゑいやこゑうかれこひのふせひにて我身をだい
てたゝれたり

かげきよ心におもふやういや／＼弓とりの心はたけ
くもてばがうになるちつとゆるせばふかくに成只今
こゝもとへよせられたる人々の家名をたしかに承て
討死きはめばやとおもひたゞいま爰元へよせられた
る人々はたうかかうけか名字を承てうちじにを仕ら
んと大音あげて申よせての人々これをきゝえまの小
四郎よしとき御所のかげする是にありとこゑん／＼に
よばはるかげきよ聞てあふえま殿と申はたうきみの
こじうと御所のかげすゑいつれもかたきにきらひは

なしまことや平家のさぶらひのがうおくのところと
覺へたり命のおしき時にこそながひぐそくもほしう
候へ又れいのあざ丸ばかりでさうすは參りさうとい
ふまゝにさつ／＼とはしりよりもんのくわんぬきを
取てかしこへなげすてかた戸をひらいてかた戸をま
へにあてそとなるかたきをうちへとひらり／＼とま
ねけれどもさうなふかたきはよらぎりけりあまりまで
ばひさしきにまいりさうといふまゝに三百よきがま
んなかへひらり／＼とかゝりしをものによく／＼た
とふれば玉ばんにたまらずりうの水を得くもをわけ
こくうへあがる如くなり大せいのなかへわつていり
にしから東きたから南くもでかくなは十文字八つは
ながたといふものにわりたてをんまはしさんぐに
きつたりけりくつきやうのつわものを七八十騎きり
ふせ大せいに手をおふせ東西へはつとをつちらしは
しつて門をちやうとさしこりておきたりし若共に
すがりつきはら／＼となひて立たりけるかのかげき

よの心中をば貴賤上下をしなべかんせぬ人はなかりけり

去間景清はあこわうがあたりけるれんちうにむかつて申やういかにあこわう今夜それがし死なんとくるへどもかたきのこゝろがをくびやうにてぢたい兵衛はうたれぬ也いとま申てさらばとて天じやうにあかりはふせきいたをけやぶつて家のむねにつつとあがりきよみづざかの事なればのきつゝきの在家を十四五間はしつてそれよりもはやしの中へつつと入せけんのやうを忘ばらく聞けれどもちかづくかたきはなかりけりそれより觀音の御まへにまいり心しづかにきねむして京中迄いでのがかゝる折ふしかげきよが京住居はむやくしよせん四國西國へも落ゆかばやど思ひしがいや／＼かゝるときこそ人をもたのみ頼まるれ又しうとの大宮司を頼み尾州へ下らばやとおもひみやこをば夜半斗にたち出てかもがわ白川うちわたり祇園ばやしのむらがらすうかれごゝろかむば

たまのくろかみもわけてゆく別路とめよ逢坂の關の明神ふしおがみ大津うちでのはまちどりともよぶこそに夢さめてうきみのたびをしがのうらぶみよせかへるあまをぶねからさきのひとつ松たぐひなき身をおもふにぞうき身のうへとおもはれていといなみだもせきあへず勢多のからはし打わたりひばりあかれかゝみ山馬ふちなはてこれたかのみこのうきよの中をいとひて立をかせたまひたるむしよじをふしおがみ入てひさしき五條宿年をつもるかおひそのもり河かせさむきたび人はさよのねぶりに夢さめてゑちがはわたれば千鳥なくをのゝほそ道すりぱりやまばんばさめが井かしはばらいます山中うちすきてあれでなか／＼やさしきはふはのせきやのいたびさし月もれとてやまばらなるたる井の宿をうちすぎてみのならば花もさきなんくんせかはおほくま河原の松風はきんの音をやらぶらんすのまたあしかをよひの橋

ひかりありたまの井の黒田のしゆくをうちすぎてを
りつかひづを過しかばをはりの國に聞へたるあつた
のみやにまいり三十三度のらいはいをまいらせつてつ
つ立あがつて景清は東をきつと見てあればまだよこ
ぐもはひかざりけりかくて大宮司のたちにもつきし
かば門ほと／＼とた／＼うちよりたそとこたふるい
やくるしうも候はずかげきよなりと申うちより門の
じやうをひきければかげきよ内へぞいりにけるこれ
にも二人のおさあひ者こそ候ひけれあらむざんや景
清二人のわかを左右のひざにとうとをき今夜それが
しみやこにてなんぢらが兄弟のわからどものありつる
を女のこゝろがにくきによりがいしてこれまでくだ
りたりふびんなるぞ若どもとて涙ぐみてぞゐたりけ
るあらむざんやあこわうさてのみやむものならばい
しかるべき事共を又六はら殿に參り彼かげきよと申
者は色ごのみの男にてみづからにもかぎらずおはり
の大宮司の三のひめにちぎりをこめこれも十年にな

ると承るおつるともよの方へはゆきさふらふまじし
うと／＼さいしをたのみをはりへおちてぞ候らんいそ
ぎ討手御くだしあれと申よりともきこしめしあらお
そろしのあこわうや九年迄ちぎりしものが重々そせ
うするこゝろのうちにくさよ自餘のをんなの見ご
りき／＼こりのためも有そはからへとの御ぢやうな
り承り候とてあこわうをとつてふせざうぐるまに打
のせて九重のうちをわたして其後かの女をかもとか
つらのおちあひにいなせがふちのふかき所をたづね
てふしづけにしたりけり上下ばんみむをしなべてに
くまぬものはなかりけり其後よりもかぢはらをめ
されてをはりへの討手にはたれをかくだすべきとの
御誑也かぢはら承ておはりへの討手はしかるべうも
候はずそれをいかにと申にかのかげきよと申ものは
合戦にをひてはなにとしてもうたるゝ事は候まじ先
しうとの大宮司をめしのばされろうしやさせられ候
ひて後日の御さたにをよぶべきと申らいてうげにも

と思召やがて御状をあそばされ大宮司のたちに付給
ふ大ぐじ此御書をひらひてはいけん仕りいつよりも
きらびやかにひきつくろひ御上落ときこへけり六は
らの御所にもつき給へばとがは何ともしらねどもこ
このつじかしこのものわきよりもくつきやうのつ
はものがひた／＼とおりあひていたはしや大ぐじを
手どりあしどりなはかけてやがてろうしやと見へに
けり梶原たちよつて申けるはなにて大ぐじは君て
うてきのかげきよを御ふち候ぞかけきよをいだされ
よ出されぬ物ならば大宮司の御いのちを給はるべし
と申大宮司聞召れて扱はそれがしがすごしたるとが
はなけれどもきみてうてきの景清をふちしたるいは
れによつて籠者させられ候やその儀にて有ならば景
清をめしのぼせかたきの手へわたさばやとおぼしめ
するまでしばし我こゝろ大宮司もこゝろがはりをし
かげきよを敵の手にわたしたるなんどいはれんも
はづかしやむざんや我ひめのうらみの程をいかゞせ

んなさけなのちゝごやまさしく身づからが二世まで
かねし景清をかたきの手にわたしつゝきらせ給へる
うたてやとふちにもせにも身を乞づめばあととのなげ
きをいかゞせんこほりはみづより生ずれども水より
こほりはひやゝかなりまごはわが子の子なれ共子よ
りもまごはふびんなり我身をものにたとふればをざ
さのうへにをけるつゆ水のうへにふるしらゆきみや
まぐくれのをそざくら木すゑのはなはぢりはてゝ今
したえだにのこれるがさそふあらしをまつふせい我
子と孫のふびんなれば大宮司このまゝきらるゝ共景
清をたすけむとあむじすましておはしますかの大ぐ
しのこゝろのうちたとへむかたもましまさずかぢは
ら申けるやうはあらいたはしや大ぐしは此二三日の
あひだにきられさせ給ふべしかたみのものををはり
へ御くだしあれと申大宮司きこしめしこのきはにの
ぞむでかたみはむやくとおもへども思ふ子細の候へ
ばすゞりれうしをたび給へ承り候とてすゞりれうし

まいらするすみすりながし筆にそめ其狀にあそばされけるやうは今度大宮司が上洛の義べちの子細ならずそのゆへは君てう敵のかげきよをふちしたるいはれによつてろうしやさせられて大ぐしはみやこにてきらるゝなりそれがしきらるゝ物ならばやがて討手くだるべし討手くだらぬそのさきにいそぎ信濃にくだつてうんのもちづきむらかみたうをたのむべしそれより奥州へ下てへいむしやをたのむべしかのへいむしやと申は大ぐしがためにはをひながらえぼし子なりかれらをたのむのならば十萬餘騎は候べしその大勢をいんそつしていそぎみやこへせめのぼりうち勢多東寺をさしふさぎあみだがみねに城をしてたへてひさしき平家の赤はたらくちうにはつと打立おごるかたきをついたうして草のかげなる大宮司にただし給ひけり三日と申にこの状をはりにつくかげきよひらいてはいりん仕り女房にかたりけるはあらめ

でたや大ぐしはこのあひだに御下向有べしとの御状の候ぞ御こゝろやすくおぼしめせといつはりまたそれがしは大宮司の仰に玄たがくて奥州へくだり候三ヶ年にてはのぼるべしそれすぎば五ヶ年五ヶ年過るものならばみちのくにて景清むなしくなりたると思召後世とぶらひてたび給へいとま申てさらばとてあつたをは立出やうやくいそきくだる程に遠江の國はま名のはしにつきにけりこゝにて景清おもふやういやくそれがし奥州まで下りたりともはや大宮司は都にてきられさせ給ふべしゆへもなきそれがしはるべくとくだりたのまれよといはんするにたのまるもの一人もなくしてけつくな落人ありやとてきらん事は治ぢやうなりとても死せんのちをしよせんこれよりみやこへのぼり大ぐじの御いのちにかはらばやとおもひそれよりもひつかへし又都へぞのぼりけるとてものぼるものゆゑに一時なりともとくのぼり御命にかはらばやと思ひて一足に弓つゑ二つゑ三つゑほどづゝをとりあかりはねこえひらりくとの

ぼるほどにあつたをはたつの刻に打たつてあわだぐ
ちにも着しかばさもあれけふの日は何時やらんとお
もひてふりあをのひて見てあればほつせうじの八つ
のたいこをとうくと打たりけり先清水へ参らばや
とおもひ觀音の御まへに参りこゝろしづかにきねん
してそれよりも六はらの御所にまいり南おもてのつ
いちをゆらりとはねこゑ御前のよりのかゝりに二わ
うだちにぞたつたりけるおりふしよりともはゑんぎ
やうだうしてましくけるが彼かげきよを御らんじ
てあのまりのかゝりにたつたる者はいかなるものぞ
と問給ふちぶのはたけやまさしよつて申さるゝあ
れこそきみてうてきのかげきよにて候へよりとも聞
召かけきよにて有ならばそれはからへとの御ぢやう
也承ると申て御前の人々にさんまほんま土肥つちや
あすけ中將よこちかつまたの人々がひたゝれのつゆ
をむすんでかたをこしたちなぎなたのさやはづしか
げきよをまん中にはやをつとりこめてぞ見へにける

かげきよこれを見てあらげうくしの面々のふるま
ひやそれがしおもひかるならばかたぐをきりころ
さんも天にあがらんとも大地をわつてくいらんとも
景清がまゝでありさりながらこのたびは大ぐじの御
いのちにかはらんためにのぼりてあればたちもかた
なもなにならずとからりとすててかげきよはこゝろ
となはをぞかゝりけるよりともの御ぢやうにはいか
でざうひやうの入たるろうには入べきぞはじめてろ
うをつくらせよ承ると申ていち井しらかしとがくす
の木ながさ一丈にとらせて地へは七尺いれうへをば
三尺のつめろうにこしらへ四五の木をとりよせくも
でがうしにきりくんで一尺三寸の大きさをもつてち
やうくとうち付くぎのさきをかへさねばろうのう
ちははらをほつてつるぎをうへたるごとくなりてう
つなはからむしにてたか手こてにいましめ七尺ゆた
かのかげきよを二重にとつてをしいれかみをば七は
にたばねて天じやうのかうしへ七方へつつたりけり

あしをばろうよりひきいだし三寸間のかうしをあしのぶんをひろふして弓手めてへとりちがへ山出七十人して引たるくすの大物にてあけほたしにぞうつたりけるひつつぬがねと申はうすう平打けるをかけよをいためんために丸ふとううたせたりしつちやうつめかね八さうかきがねとうくくるり木千引のいしがいもくをうへにとりつむだりこしにとうのつな三すぢゑつてつけさせくびにはねほりの大つゝを三ほんまでかつがせたりむざんやかけきよろうのうちにてかよふものはいきばかりはたらくものは兩眼なりせつたんより其ほかはすこしもうごくところなしよりともの御ちやうにはかけきよをめしとるまでのことにてこそ候へ大宮司はよりもがためにはげしゃくの祖父にてましませば對面あるべしとの御ちやうなり承ると申て梶原の源太かけすゑがろうの戸をひらいて大ぐじをぐそくし申よりとも御たいめん有てこのあひだの籠者の御しんらうさこそとおもひ

やられていたはしう候このたびのけしやうにはかさねて所知をまいらせんいそぎ國にくだり給へとの御ちやう也大宮司きこしめされてあら所知もしよりやうもほしからずおなしくば景清をともなひてくだるとだにもおもひなばいかゞはうれしかるべきときだつものはなみだなりさてあるべきにてあらざれば大ぐし御いとま申て國へくだり給ひけりかくて景清ろうしやしてきのふけふとは申せども七十五日になりにけりいたはしとも中々に申ばかりはなかりけりかゝりけるところに六はらのみのみおもてを京わらべの三人づれにてとをりしがさきなるものゝ申やうあのしんざうの籠にはいかなる者のいりたるぞと申跡なる者が申けるはあれこそ平家のさふらひ大將悪七兵衛かけきよの入たるろうにて候へつぎなるものがこれをきゝ彼かけきよと申ものは平家の御代の御ときは二さうをさとつてふづしんのけゝんなど、聞つるが平家にはなれ申かけきよが二さうもなにな

らすげんじがたにまさるつはものあればこそやすや
すといけどつてわづかの籠にをしこめてはをきつら
んあつぱれゆみとりはみると聞とはひとしからざる
ものかなとどつと笑てとをるかけきよううの内にて
これをきゝげにもきやつばらは道理をいひつるもの
かなかげきよほどのつはものがわづかのろうにこも
つてうき名をながすむねんさよさらば籠をやぶつて
出ばやとおもふがとがもなき大ぐじに二たびうきめ
を見せ申さんもいたしく又千引のいしがいもなくにあ
たつてなにごゝろもなくならびたるろうもり共を
うちころさんもむざん也いかはせんとおもふがそ
れもおんびんのいたりいや／＼籠をやぶつて出末代
のものがたりにせばやとおもひおくのちからをいだ
しゑいやつとうごきけれ共ちびきの石ざいもくがを
もければろうはちつともはたらかすもとより觀音を
しんじ申事なればみやうがうをこそとなへけれなむ
やせんじゆせむげんくわん世音生々世々けう有しや

一文聞ノ假借みやうがうめつてうざいむしやうぶつくわとく
しやうしゆと此もんを三べんとなへゆんでのあしを
ゑいと引たまことにくわんをむのりやくこそふしづ
のはうべんにてや候ひけん一しやく三寸の大きさが
ふつつときれて左右のあしはうちへいるたかてのな
はを一しめしむればはらり／＼ときれてのく七はう
へつつたるかみをゑいやつとひきければかみのねが
つよふしてぶる／＼はつとみだれたりこしに付たる
とうのつな寸々にねぢゝてかついたい身をちつとほそめて
籠のかうしよりつつと出てかけきよはにつことわら
ひてたつたるは人間のわざにてなかりけり景清こゝ
ろにおもふやうとてもいでたるつゐでに又きよみづ
へまいらばやとおもひ觀音の御まへにまいりなむや
大じ大ひのくわん世音さしも草さしもかしこきちか
ひのすゑ一せう一ねんなをたのみ有かまへてかけき
よをあつけんにおとし給ふなとねんごろにきせいを

申おくのくわんをんに參り後世の事いのりそれより
もさいもんに立いでゝみやこのかたをながむればそ
のいにしへぞしのばるゝいたはしや平家の御一門は
なのみやこに御座のときはきんくわをつらねすいし
やうを家にかざりつゝくわうしやにぎよしてはくわ
ゆうのきよくらんにのぞみ給ひしも人一さかりはな
ひと時ふちは瀬と成世中とて名のみのこりていまは
なしとてもうより出るうへこれより四國西國へも
おちゆかばやとはおもへどもしうとにうきめをみせ
じためもとの籠にわれといりこゝろと死をしたりけ
る彼景清がこゝろのうち何にたとへんかたもなし其
後かぢはらよりともの御前に參りなにとてかげきよ
ふべきと申頼朝聞召ともかくも梶原はからへとの御
誕也承ると申て嫡子の源太に申付る源太承りくつき
やうのつはもの共を三十余人こしらへかげきよを籠
よりとつて引だし六條河原にはめいて出にしむきに

ひつすへたりかげきよなにとかおもひけんゐたる所
をづんとたつて南むきにぞなをりける源太これを見
てげにや景清は二さうをさとつて佛神のけりんなん
どゝ承りしがさいごにもなりしかばこゝろどうてん
し給ひて西方をさへしらずして南方にむかひ給ふか
景清これをきゝおろかなり源太殿それ法花の名文に
十方佛土中ゆいう一乗ほう無二やく無三しよぶつは
うべんせつときくときは西方にかぎらす十方はみな
ぶつどさうぞはやきり給へ源太どの源太このよしき
くよりもそれは御身とそれかしがもんだうたいけつ
いたさばこそくちはきゝをとるべけれうけて見たま
へかげきよと三尺八寸のいかものづくりするりとぬ
きよこ手ざりにちやうとうつおしむべき年のほど三
十七と申にはくびはまへにぞおちにけるさる間源太
は景清が首をとつていそぎよりもの御めにかくる
よりもをはじめたてまつり八ヶ國の諸大名をのを
の首をじつけんし給ひけりその中にちゝぶのはたけ

やま殿は清水參りをし給ひてくびの玄つけんにもあ
ひ給はず六波羅の南おもてをうつて下向し給ふ處に
こゝにひとつふしきありかのかげきよがろうに又
人の有て申けるはあれをとをらせ給ふはぢぶのは
たけやまどのと見申たりさいごの時は萬事頼たて
まつる玄げたゞきこしめされてそれのみとりと申
はけふは人のうへあすはわが身のうへにて候へば
御こゝろやすくおぼしめせ御さいごの御ときはかな
らす人をまいらせんとて馬よりおりしきだいしそれ
よりもすぐに六はらどのに参り何とてかげきよを
ばひさしくろうしやさせられ候ぞよりとも聞召扱は
景清といふ者はいくたり候ぞ一人をば源太が手にか
け六條がはらにてちうし首はいまだこれにありそ
れ見給へとの御ちやうなり玄げたゞ謹言承り玄ばし
物も申さずやゝ有て申けるはこれはかげきよがくび
にても候はず又餘人のくびとも見えず候よりとも
きこしめしふしきの事をのふ給ものかなたゞいま迄

は景清がくびとこそおもひしに重忠のことばに付て
ちつとふしむにこそ候へよくく見給へとの御ちや
う也玄げたゞ承ていかでそれがしもくわしくは存
候べきそれ人間はみづと見れば魚はいへとみる天人
はるりと御らんすればがきはほむらとみるこれをし
けんの不同とは申なりよくく見たてまつればせ
んじゆの御くしにておはしますかたじけなくも五智
のほうくわんよりもこんじきのひかりのたゞせ給ふ
ぞやよりともきこしめしうらやましやなかげきよ
はいかなるせんごんを仕りかゝるりやくにあづかる
らんはたけやまとの御誕なり玄げたゞ承てあらおろ
かの御ちやう候たとひせんごんを玄ゆするともが
らと申ともみやうりをさきだてん者は無智無形のも
のにおとり候べしたとひむちむぎやうのともがらと
は申とも諸神しよぶつを頼申さんものはなにのう
たがひの候べきそればさつのさんげのぎやうと申は
三つに下ると見えたりあるひはせつしやうちうたう

しやけんはういちのともがらにあひまじはり給ふ時
もありあるひはこつじきひにんにあひまじはりせぎ
やうをうけ給ふときもありあるひはかゝる死縁に
のぞむで其苦にかはり給ふ也五りん玄ゆしづへん
きちくほうかいにんでんかいせ大日ととかれ佛道
ならぬ事なしかの景清と申はその身はけんのよ
ろひをきると申せ共ゑんいの火をけしまうねんのち
りをはらひほんらい玄やうぐのくわんに入てあり
ければかたじけなくもくわんおんはかたちをすいゑ
んのはやしにわかちかげをきゑんの水にうかべ給へ
り大ぢひ心大びやうとう心大にんにくしんうせんち
やくしんくうくわんしんいせつしんむしやうばだ
いしんこれ也はつかんはつねつのそこまでももらし
給はぬは大ひのりやくとこときこれ／＼御覽候へ
とかたじけなくも御くしをさしむかへ申せば鎌倉殿
をはじめてその座にありし人々かんたんきもにめい
じつゝひるいそでをうるほしてみならいはいをたて

まつる頼朝ふしきにおぼし召かけきよがろうへつか
いをたて扱かげきよはいかなる佛神をたのみ申て
候らん景清承てさん候それがしおやくねんよりもと
をきかたきを射ておとしちかき敵を切ておとすか、
るぶげいをこそたしなみて候へいかなる佛神をも頼
申さず候さりながらつねに清水をゑんかう申て候と
御返事を申されければよりともきこしめされて東山
清水寺へ御使たつまことにきよみづのありさま申も
おろかなりしとみかうしもみなあきて御ちやうをさ
つとをしあけてみくしもなきみそきれんげのうへに
そなはりて御身體よりあゆる血はひとへにたきのご
とくもないちんにあまりつゝらいばんなるとここまで
うかぶばかりに見え給ふ御使此よし見奉り六はらど
のに參りつゝありのまゝに申ければ扱はうたがふと
ころなしと諸寺のそうを千人玄やうじ一萬座のごま
をたきみくしをみそきにあわせ申二度清水寺とはや
り給ふぞありがたきよりも仰けるはかほどせんじ

ゆのふびんと思召るゝかげきよに對面有べしとの御
ちやうにていそぎ御前めされひとへにおことをば
清水の觀世音とおがみ申なりおことをちうするなら
ばせんじゆの御くしを二度うち申たるに似たるべし
このうへはたすくるとの御謹なりかげきよ承りあら
有がたの御たすけや候是と申も景清が十六のはるよ
りも三十七のいまゝでまいりたるりしやうとおもへ
ばありがたきはかぎりなしよりともの御ぢやうには
平家のときの所知はいかほどさうぞかげきよ承て二
萬ちやう給て候よりもが代にも二萬ちやうあはせ
て四萬町あてをこなふいまよりのちはあくしんをひ
るがへしよりともにつかへ候へかげきよ承てあら有。
がたや候命をたすけたまふのみならず剩御おんをそ
日向みやさきの庄をたまはると御判をすへてくださ
れけりかくて景清ははだのまほりにおさめて御前を
もふ所存はつゆぢりほどもうせ候まじそれおんをみ

ておんをしらざるはうへ木の鳥がをのが住えだをか
らすことならずちゝぶどのゝこがたなをこひとつ
て兩眼をくりいだしうす折敷にならべよりともの御
めにかくるよりも御涙をながさせたまひされば唐
士に玄といふとを三とせかふて古人ひとつとのとら
をとる我朝のはぢあるさふらひにをんをよくあたふ
れば玄うのいのちにかはるとはかやうの事をや申ら
んいかにかげきよこのまゝみやこに有たきか景清承
て花の都も何ならずなか／＼おもひもよらずと申さ
らばおはりに妻子があれば下りたきかとの御ぢやう
なりかげきよ承てゆくもゆめとまるも夢二世とかね
しも夢なればくだりてゑきも候はすおなじくは西國
へくだしてたべと申せばやすきあひだの事なりとて
主君のかたきよあつぱれ一かたなうらみ申さでとを
三百七十九

るありがたやくわんをんの三十三しんに身をへんじ
十九せつほう御法をのべ衆生のぐわんを見て給ふと
はいまこそおもひしられたれ内ぢんよりこんじきの
ひかりさいてかげきよかうべを半時ばかりてらし給
へばとつてなかりし兩眼がたちまち出來て本のごと
くに見えにけり爰をもつてあんするにやくがせい
ぐわん大ひちう一人ふしやう二世願かたこまうさい
くわちうふけん本覺しや大悲佛は三世にましませど
せんじゆのちかひありがたきさればうゐの法佛は夢
のうちのこんくわさて又むさの三身はかくの前の玄
つぶつゑきうのすゝのよるのこゑはんごむかうのけ
ぶりこそなきおもかげのかた見なれそれよりもかげ
きよ清水を下向しつくにくだりけりみやこを立て
東寺四塚うちすぎ月はなけれどかつら川ふねにのら
ねどくがなはてやまざきせき戸打すぎ兵庫にもつき
しかば御一ものすみ給ひしふくはらの京とは爰な
りけりとふしおがみすまいたやとはりまにいりぬれ

ばそつ名ばかりはたかさごのおへの松とうちすぎ
きみにたのみをかけ川の西方淨土はちかきやらんこ
こはあみだがしゆくであり備前にきびつみや備後に
ともをのみちそれよりもかげきよ日向宮崎の庄に付
て里人をよびいだし御判おがませ三とせと申に一間
四めんにひかりだうをたてをき新清水とがくをうち
朝夕他念こゝろなくねんぶつ申經をよみせんじゆの
みやうがうをとなへて八十三と申に大往生をとげに
けりかの景清が心中貴賤をしなべかんせね人はなか
りけり

きりかね曾我

安元元年神無月の比奥野の狩場にて河津の三郎うたれし時五つや三の若有しを曾我の太郎助延養育し兄の一滿十一歳弟の霸王丸のとし物うき事こそ候ひけれ東八ヶ國の大名小名頼朝の御前にて御物がたりのありし時頼朝おはせけるやうは天下におゐて頼朝にまして果報の者は候まじそれをいかにと申に保元の合戦に祖父爲義をはじめ一紋みなうち死し中一年有て父義朝悪右衛門督にかたはれ其軍にかけまけ東國さして落給ふ其時朝頼も御供申て候ひしが暗さはくらし雨は降西近江さがり松のあたりにて追おくれ奉り唯一人龍牙の間に迷ひしに横川法師め大將に大屋の忠寄といつし跡よりも追かけすでになんぎに及びしに北近江伊吹の麓草野の庄司にたすけられかれが所に年を越今はかうよとおもひしに義朝は長田を

祐信ノ假借

うたれさせ給ひ御首のぼり獄門にかけられ給ふ由をきくせめてかはらせたまひたる御姿を成とも見參らせ猶も命のながらへばさまをもかへて御苦堤を問參らせんとおもひしのびて京へのぼりしにいますかはらといふ所にて彌平兵衛にいけどられ六はらへわたらされたるべきにて有しを池の尼口后字ニ似タリ公ノ借字カに助けられ北條ひるが小島へ流され伊藤北條兩人に守護せられ廿一年の春秋をおくりむかへて過し時伊藤の入道助近につらくあたられ候ひつるその時の心にはあはれ伊豆を従へ野心の者を亡しもひ知らせばやと明暮佛神に祈誓申せしゑるしにや日本をあつめてゑるのみならず四海を太平にいたす事はしかしながら君の爲身の爲武略の功に玄くはなしと仰られたりければ御前なりし人々もげにくゆ、敷御果報やと同音に感じ申さるゝかゝりける處に工藤一老助祐ノ假借經すすみ出て申けるは今こそようせうに候得共末の世に野心を存べ

き者一二人おんひざのもとに候と申よりともきこしめされてそれはさていかなるものぞ助經さん候一とせちうせられ申たるいとうがまご河津が子一萬箱王とて二人の者候を曾我の太郎助延がやういく仕たるよしをもうすよりともきこしめされて曾我の太郎助延はさやうにふちうはあらじとこそおもひ候へそれをいかにともうすによりともが世をとりたるはじめよりふかきちうの候へばずゐぶんこなたをばたのもしくおもひしによりともがすゑ世のてきとならんことこそきつくわいなれいそぎかれらをめしのぼせよたれか有との御誕なり助經又申けるは誰々と申とも梶原の源太景^季末ぞ候らんと申いそぎ源太をめされ如何にかけすゑ伊藤が孫河津が子一満箱王とて二人の者の候を曾我の太郎助延がやういくし成人するを待と聞いそぎ彼等をめし上せうんきをはねてすつべしはやとくとくとの御誕なり源太承荒淺ましやとは存すれとも主命なれば背得すかしこまつて候とて御前

を罷立駒引寄で打のり曾我の里にチ脱スルカも着しかば助延の宿所にたち寄君よりの御使に源太がまわりて候とたらかにいひければ助延やがて立出かげするに對面し扱君よりの御使はなにの爲にて候ぞ源太聞て別の子細に候はす御子息達をめし上せ御對面あるべしとの御誕にて候まだようせうの人々に御罪科は候まじはやくとくくといひければ助宣祐信ノ假借聞しめしとかく返事もなかりけりあきを送るらうようは風なきに散うれひをもよほすなみだはとはざるに先おつる助延の心の中おしはかられてあはれなりやゝありての給ひけるはあはれ世の中に子に縁なき者を尋ぬるに助延にとやめたりそれをいかに申におさなき者を二人持て候ひしがいとけなくしてはかなくなりかれらが母は別れをかなしみいく程なくてむなしくなりかつましの字チ脱スルカのわかれ子どものなげき一方ならぬおもひとに助延チ脱スルカも遁世修行とおもひたつて候處に伊藤の入道つねにきたりなにがしをなぐさめ物がたりのついでに承

れば曾我殿は妻子にはなれ給ふときくなにがしが孫

子ノ字ヲ脱スルカ

一萬箱王とて兄弟の候をかれらを養にし給ひて母も
ろともをき給へと再三申され候程にさすがうき世も
いとはれねばかれらをやういく仕はや七年の春秋を
送れば成人程もなし一萬生年十一歳箱王今は九つな
り身のすいらふをもかへり見ず成人するを待たるは
別のためかうらめしやげにも仇のすゑなれば君の仰
は理りやされ共助延君の爲い今まで不忠をいたさね
ばもしやたすけ給はんとほうこうだてを申さるるい
かにがすゑよりともの御世をめされたる始めをかた
つて聞せ申さん石橋山の合戦に御身の父の景時かう
申す助延と平家方にてむかひしに源氏の勢を見渡せ
ば唯蠟螂がおのづからはつかのせいをたなびきて雲
霞の如くの平家の勢をふせぎ給ふはあはなれなるむ
かしが今に至るまで多勢に無勢叶はねば源氏合戦に
かけまけてまなづるかうら引なみの頼朝御方にをく
れ給ひふしきの中を頼つゝ御身をしのばせ給ひしは

御世のひらけんはじめなり其時かげとき助延心をあ

はせ申やう是はたくしのきにあらずせんぞのためか

うく也いざやとぶらひ申さんとふし木の中を見て

あれば御物具のかな物白く見ゆる處を弓の弭をとり
のべ木の葉をあつくはきかけさらぬ體にてたりし
につぐ共者あやしめかたらひよれば二人ふし木の

上にあがりとうとうとふみならしそもなにものか今

まで此木のほらにあるべきぞあやしきさまに宣ふは

いかさまかげとき助延に心をかせ給ふかと兎角ちん

する處に正八幡の誓ひかや此木のほらよりも鳩一番

たち出てこくうをさしてとんで行くその時二人力を

得あれ見給へやかたゞ人のあらんず木のほらに今

まで鳩のあるべきかかたきはかうこと落つらんおつ

つけや人々と大勢の兵者をすちなき方へおしへやり

君を引たて奉り真名鶴が浦まで御供申せし心ざしや

はかは忘れ給ふべき其時頼朝我世に出る物ならば命

の恩を忘れじと返々も宣ひしたとひおかす科ありと

などとは御免ならざらん御身の父のかげときに此事
かたり給ひてそせうかなへてたび給へ景末聞てそれ
がしも存の事にて候父もろともに御前にてよきやう
に申べきにて候御心やすくおぼしめせといひければ
助延聞しめされて荒嬉しやさふらふ去ながら母に玄
らせ候はんと簾中にたち入此よしかくとおほせけれ
ば母は夢ともわきまへずやがてきえ入給ひけり河津
殿にはなれ申せしその時はつゆの命もおしからず消
うせばやとおもひしが兄弟に目がくれいままたかか
る身となればいつかかれら成人し助延のたよりにも
なりもやせんと佛神にきせい申せし志るしもなく今
更かかるおもひをせんとしらずやと兄弟の若どもを
弓手めての膝に置をくれの髪をかきなでいかに二
人の若どもよおうち伊藤の科により鎌倉殿へめしの
ぼせころさるべきにあるぞとよ何とて君にはか程ま
でふかき敵をばなしつらん扱若どもをさきだてゝみ
づからはなになるべきとりうていこがれ給ひけれ

ば二人の若ももろともにくより外の事をなき源太
物ごしより申けるは御なげきを承なみだにむせびて
候去なから是ノ字カ口は御使の身にて候程にはやとくくと
いひければ母上聞しめされてげに／＼御道理にて御
座さふらふ去ながら別の悲しさにこそかやうに申さ
ふらへ今は力に及ばずと二人の子どもを出立たせと
もの者どもいつよりもきらべやかにこしらへ父もろ
ともに打つれて鎌倉へ行ぞあはれる痛しや母上は
あるにあられぬ心にてちうもんまで出させ給ひ兄弟
の若どもか行つる方を見給へば雲かうかくのあとを
うづみおもかげだにも残らねばおもひの外にわかれ
行霧に迷へる雁がねのなく音も我をとぶらふかよし
なや今はおもはじと常の所に歸りかれらか住し所の
しやうじをあけて見給ふに常に手なれしもてあそび
こゆみにちくばつくり太刀つくりがたなのいつのま
にはやかたみとは成たるや痛しや母上は責めておも
ひのあまりにやにうぼうたちを近づけてかたりなぐ

さみ給ふやうかなはぬうき世の有さまをなげくべき
にはあらねども一代けうしゆの釋迦如來も子には迷
の親の閻らこいちやうしととき給ふましてや申さん
人間はあまたもちたる子をだにも一人におくるれば
皆に別るゝ心地あり我はたゞひもなでしこの二人が
中にもし一人いかなる事もあるならばなにとなるを
の一松たぐひいかにとおもひしにかれにわかれて母
ひとりおもひこがれていきてよもあすまで命ながら
へじ此夕暮におとづれの聞まほしやとの給ひてきぬ
引かづき打ふしてりうていこがれ給ひけり去間助延
はとしよのひつじのあゆみひま行くこまのをのづか
らいそがぬたびとおもへどもその日のとりの刻には
や鎌倉に着にけりその夜は梶原が宿所にとまり二人
の子どもを左右に置夜もすがらかいしやくし定めな
き世をあんするにげに／＼心にまかせぬ別の道とお
もひきりおや子の契もけふ迄とあふ時よりもさだま
りぬなげくは迷ひの凡夫なりさとり則佛にてあふも

嬉しかるまじ別もいかがうかるべきとおもひきつて
まします處にかげすゑ申けるはなふいかに曾我殿そ
れがしも御前にてことの子細を申とも此まゝ御免は
候まし御對面も候はゞとり合よきやうに申べきにて
候とく出たゝせ給へと口にいひければ兄弟此よし聞
よりもいとけなき心にも最後とやおもひけんたがひ
に目とく見合てなくより外の事はなしなかぬもお
やはかなしきにましてかれらを見るよりも父が心は
かきくれて覚えず落す涙かなかくて有べき事ならぬ
ばかげすゑ御前に参る頼朝は御らんじてあれはいか
にかげすゑ何とて昨日は歸らぬぞかれらはいかにと
仰ければめしぐして参たる由申時刻うつして叶ふま
じ由井の汀に引すへ首をきつてすつべきなりはやく
早くと仰ければかげすゑ重て申ぐきやうのあらずし
て我宿所にぞ歸りける痛しや助延二人の子どもに宣

伊藤河津がつみ科今養育をうけざればなにの報のあ

るべきぞ唯願は神佛まいり給ひて兄弟を助けてたはせたまへと祈念もいまだおはらねにはやかげすゑは歸りけり助延いそぎ立出て上意はいかにと問給へば源太涙にむせびつゝとかく返事もなかりけりやゝありて申けるは荒口惜や候責て御對面も候はゞよそのそせうも頼べきに此儘由井の汀へ御供申首を切て参らせよ若君様の御教養に報せんとの御諭にて候と申もありへぬ處にまた御使ぞたちにける曾我の一萬箱王丸をとくくきつて參らせよ時刻うつらばかげすゑもおなじ罪科たるべしとかさねて御諭候とかたりすてゝぞ歸ける曾我も源太も兄弟もあまりのこととに肝もきえむねふさがりて聲出す實にせんだんはふた葉よりも香ししといふ鳥鳥ノ上脱字アルベシはちいさけれど虎名ノ誤歟を得ありかれは育けれどと儀による命をからんじ後命を家に傳えんとなげくけしきもなかりけり兄弟申けるやうはいかに候父御前いそぎ乗物給り由井の汀へ出べきなりもしや頼あるにこそしばしもかくてありたけ

れ又御使たつなればかげすゑの御爲しかるべくも候まじとも叶はぬ物故にかまへてなげかせ給ふなよ父御前といひければ曾我は子ともにいさめられこしさしよせて兄弟のせ由井の汀へ出けるが落る涙に目が暮て道もさだかに見えわかすしどろもどろにあゆみけり鎌倉中の貴賤上下曾我の一萬箱王丸のさゐ後の體のあはれさよと袖を玄ぼらぬ人ぞなきかくて汀に着きしかば敷皮敷せこしよりおりいまが最後候よきられて後に我くはいかなる所へゆくべきぞおしへてたばせ給へ父御前といひければまたようせうのものどもが最後を玄らぬあはれさよとみな涙をぞ流しける助宣さしよつてのたまひけるはいまた最後よ兄弟きられて後に汝らは祖父伊藤の入道父河津の三郎と一蓮に生べし必死で行者は佛の御前に参るなりまづ初七日はしんくわう王本地は不動明王也二七日は初江王本地は釋迦にておはします三七日はさうてい王本地は大聖文殊なり四七日は五官王本地は普賢

菩薩なり五七日は閻魔王本地は地藏菩薩なり六七日
は變成王本地はみろく菩薩なり七七日は泰山王本地
は樂師如來なり百ヶ日は平等王地本は觀世音一周忌
はとし王本地は勢至菩薩なり又三年はごだうてんり
ん王本地は阿彌陀如來なり七年記はあしく佛十三
年は大日如來三十三年は虛空藏菩薩なりかくの如く
の佛たちもろくの非願悲ノ借おこし衆生齋度濟したまへり
いとけなければ汝らはつくる罪のなきによりかゝる
佛の御前へ参るべき事どもはうたがひさだめてある
まじひがまへてふかくに見ゆるなとさもかうしやう
にのたまへども見ればあまりの不便さに人目もさら
にはばからずふかくの涙をながさるゝかやうに時刻
をうつす處に一つのよろこび候けり三浦の儀盛宇都
宮の友綱千葉助經高この人々を先として東八ヶ國の
大名に君そせうの爲に連參申也源太殿も曾我殿もそ
ぞろにきらせ給ふなよと使をたて給ひ各御所へ御參
ある申上られけるやうは曾我一萬箱玉丸を誅せらる

るよし年まだようせうの者どもになに程の事の御座
候べきたすけ御をき候へかしとおのく申されたり
けれど賴朝聞召て誠面々の忠節いつの世にか忘れ候
べきさりながらみなく存の如く伊藤の入道助近に
つらくあたられ候ひつる其時の心にはかれら程のも
のを平人切てあくべきか扱はめんくは伊藤に賴朝
をおもひかへ給ふか口おしさよとおほせければ連參
の人々もかさねて申べきやうのあらずしてみなく
屋形にかへらせ給ふ助延此事を汀にて傳へ聞扱はい
かやう成人の御申成とも叶ふまじひとおもはれけれ
ば草のかげなる助近にうらみ事をぞせられける金は
いさごにまじはれども朽ることの候か君は正しき清
和のなれ一旦落ぶれ給ふともすゑに頼をかけ申不
忠の心なかりせばかゝるうきめによもあはじ北條殿
は君の爲不忠の心なきにより君をむこにとり給ひ今
は子孫も富繁へ肩をならぶる人もなし浦山しの北條
や浦めしの助近やと過しむかしをうら見しははかな

かりける次第也さてあるべきにてあらざればはやき
り給べ源太殿扱々母が方へはなにとも申まじひかと
涙と共に仰給へば兄弟此由聞よりもさん候心にかゝ
る事とてはよはひかたぶきおはします母御をさきに
立て参らせ御あとをもとひ参らせんとおもひしにお
もひの外にさきに立ち申あとにて物をおもはせ申さ
んこそよみぢの障りとなるべき去ながらいまこそか
やうにありとも來世にては一蓮と候ゆへに生れあひ
申べし叶はぬ事をたのみになげかせ給ひ候なとは、
上の御心をもなぐさめ給へ父御前とおとなしやかに
いひければ貴賤群集の人々もみななみだをぞながし
ける扱あるべきにあらざればはやきり給へかげすゑ
念佛申せ兄弟と懇にすゝむればいとけなき聲をあげ
ゑもおもひきり太刀とりあげぬきもちてあゆみより
て見てあればいづくに刀を打かけてるべきやうの
あらずして本の座敷になをりけり助延御らんじてな

ふなにとてきらせ給はぬぞさん候一定きりそんじつ
べう候なにがしか内に吉田兵衛と申てふてきの者の
候こなたへ參り兄弟の太刀と申せとてかたはらよ
りも呼出す助延御らんじてなにがしが子にて候を御
内の人手にかけきれとの仰は口惜ふ候なにまでも
候はずなにがしが手にかけよみぢをかろくすべきな
り嬉しひか一萬座敷になをれ箱王とすてたる太刀を
とり上歩みよらせ給へばわれおとらじと手を合せ父
にきられんうれしや兄なれば一まん先さきにとぞす
すみける箱王は我を先とく／＼きらせ給へとて左右
の袂にとり付てむつまけなる有さまをなににたとへ
ん方なしかやうに時刻をうつすところに一つの悦候
ひけり父部の重忠はすちかい橋の屋形を出濱面を見
てあれば貴賤群集をなすなに事にやと問給へば曾我
の一萬箱王丸を誅せらるゝと申候へばかねてもきひ
つる事源太殿も曾我殿もそゝろにきらせ給ふなと使
をたてさせ給ひ御身は御前へ御參有申上られけるや

うは唯今出仕申とて滾を見て候へば貴賤群集をなすに事にやと尋ねて候へば曾我の一萬箱王丸を誅せらるゝ由年まだよう少のものどもに何ほどの事の候べきたすけ御置候てなにがしに御あつけ候へかしかれ成人仕もしも不忠を存はなにがしが手にかけ首をきつて參らすべし此度の命を御たすけ候はゝ時の面目たるべき由申上させ給へば頼朝聞しめしてなふいかに重忠かやうの事を申さねば唯頼朝がひが事もおもひ給はんする程にかたつて聞せ申べし頼朝流人たりし時北條ひるがこ島へながされ伊藤北條兩人に守護せられ廿一ヶ年の春秋を送りむかへてすぎし時伊藤が娘にいひかはしはいしよのうきをなぐさみぬかくて日かすをふるほどに若を一人まふけつゝ嬉しさたゞひ候はずかまへて果報目出度正八幡の嘉護ありて家をおこし名をあげて天下のぬしとあふがれよといつきかしづき日を送るかゝりけるところに伊藤の入道助近は三年のわうばん勤めて都より下り

しがはや此事を聞付誰がはからひに頼朝をはむことにとりてありけるぞ平家の御恩を此間天山に蒙り妻子をふちし身をたてゝ人となる助近が世になし者をむことにとり孫をまふくるものならば老のくげんに繩かかりうき目を見んこそ悲しけれとむすめをばとり返しやまきはんぐわんむこにとり三つになりし若をば伊藤がたきにしづめしはなさけなかりし次第也やがて頼朝をもうつべきにてありしを伊藤の九郎がなさけにて命ばかりはとにかくにながらへけるぞふしきなるはぢの上のなげきなつきのちりよくをは筆にも假借いかで盡すべきその時の心にはあはれ伊豆を下がへやしんの者をほろぼしもひぢらせばやと明暮佛神にきせい申せしゑるしにや日本國のぬしとなるやまきいとうをほろぼしくわひけひのはぢをすゝなりさればふるきこと葉にもぞちうをばなづきをわつてすいをとりてきとうをは根をたつて葉をからせと申ことの候ぞ彼等は正敷伊藤が孫此世に助けておかん

事虎の子を野にはなし龍に水をあたふるに似たるべしよく聞給へ重忠じよの事にて候はレなにかは背き申べき此事におゐてはおもひもよらぬ事なるべし時刻うつして叶ふまじひぞはやとくきれとぞ仰ける重忠かさねて申上られけるやうは御誕を委敷承り涙にむせびて候人間不定の慣ひにてはやきむくひを存不忠致す伊藤こそ返々も口惜ふ候へさればいんぐわたしまれきせんたり御物がたりのつるでいんぐわの道理を申上べしいま三しやうがさきかとよ天ちくくしな國にれう王と申御門一人おはします是隱なき悪王なり彼國にいんねんほつしと申て賢人の候がひだうのちよくをそむくとて親子三人誅せらる今度はいんねん法師太唐の玄んのゆうわうに生れかはり給ふ扱天ちくのれうわうはいたうのごめいしこうと申じなりさればかやうのいんくわに若君様もあへなく

むなしくならせ給ひぬ扱三じやうはちんりんすなをこのねんをして給はでいんぐわをかへり見給はずばたがひにうつゝうたれつ生々世々に盡すまじひあはれ此者兄弟を御たすけ候てともにしやうじをはなるべきたよりとならせ給へかしいかに／＼と申さるれどとかく返事もましまさずや、やりてのたまひけるは今朝よりも八ヶ國の人々の訴訟ありつるをもちいす唯此事をは頼朝にゆるさせ給へと仰ありさうなく用給はず重忠承口おしの御誕や候今朝よりも八ヶ國の人々の訴訟ありつるそのあとに重忠が參り無用の訴訟申かゝり叶はで歸物ならば父部の家のふかく末代とても面目なしきみは正敷せい將軍にて理非をたゞし國を守り給ふ身が是程の訴訟をなどや叶へてたび給はぬぞ祖父伊藤は過し事またようせうの者どもに是程迄の御罪科あるまじき事にて候何までも候はすかゝるそせうを申さんとおもひ立て候事ちゝぶみやうけん大菩薩にはなされ申此度一門の運のきは

まる處成べしかれをきらせ給はレ御前にて腹切てい
とけなき兄弟がさうの手を引候て四手三づを引わた
しあびたんしやうのそこに有わうぢ伊藤の入道と父
河津を呼出し二人の子供を手わたして口口口口の玄
るしにせんいかに本田半ざいよ濱に下りて兄弟が最
後の體を見て參れ暇申て我君と刀のつかに手をかけ
ておもひきられし有様を物によくくたとふれば漢
の高そのたゝかひにかううがせんにかけまけかんや
うの陣をはつしりよ馬どうをまねけどもかたきおそ
れてちかづかねば我とつるぎをぬきもつて我首をか
ききりかたきにわたすいきほいもいましげたの有
様もいかでかおとりまさるべきコトハ頼朝仰けるは
あらふしやうの重忠の訴訟や叶はずばはらきらんと
のたまふや前代未聞の事どもかな力及ばず兄弟を重
忠に参らする去ながら今朝よりもそせう有つる人人
の口口はうらみも有ぬべし心得たまへとのたまひて
くだしたぶこそ有がたけれ重忠あまりのかたじけな

さにかうべを地に付給ひあら有難や候唯今のそせう
叶へてたまはる事生々世々の間にやはかわすれ申べ
きとあまりの事の嬉しさに嬉しなきにぞなかれける
頓て御前を立半ざいを使給へば半ざい濱に下り重忠
の御そせう有兄弟の人々を御たすけ候なり源太殿も
曾我殿もはや／＼歸らせたまへとたからかにいひけ
ればイロフシ濱にあつまるのみならず聞人ごとにイロ
フシ手を合ありがたの重忠ややさしの人の心やとよ
ろこばざるはなかりけりコトハ助延は半ざいと打つ
れ二人の若を引具し重忠に参らせ給ひあら有難や候
唯今の御そせう有兄弟の者どもか命たすけてたまは
る事生々世々の間にやはかわすれ候べきとか・ルフシ
あまりの事の嬉しさに同嬉しなきになかれければ重
忠ももろともに悦の泪をながさる其後助延申さ
れけるはいま玄ばらく御物がたり申度は候へども古
郷に残りたる母にて候者さこそなげき候はん先口歸
此ほうしの有さまを委敷申聞せかさねて参り候はん

とねんごろにの給ひて二人の若をこしにのせ古郷に
かへらるる心のうちの嬉しさをなにへたとへん方も
なし痛しや母上は子どものおもひにたえかねてなき
ふしてまします處に曾我殿も若達も御よろこびにて
唯今かへらせ給ふといひければ母は夢ともわきまへ
ずカ、ルフシ二人の若もこしよりおりカ、ルフシ母の袂
にとりついて是はゆめかやうつゝかとなくより外
のことはなしやゝありて母上は涙とともに宣ふやう
此程はげにうばたまの夜もすがらなきあかしつるか
なしみに由井の汀できられしが若も夢にや來りけん
死たるものはさなりとも父は夢にはよもきたらじあ
な嬉しの夢ならば又やわかれもあるべきとおもひこ
がるる心こそことはりせめてあはれなれ片ツメやゝ
ありて助延はじめおはりの事どもくはしくかたり給
へば母やめのとは手を合ありがたの事どもや重忠の
ましまさずばいかでふたたびあふべきとよろこぶ事
はかぎりなしクセさればういのほうふつは夢のうち

のごんくわきてまたむさのさんしんはがくのまへの
しちぶつゑきろの鈴のよるのこゑ反魂香のけふり
こそなきおもかげもうつるらめカタツメ是はたぐひ
もなくとりのあくがれ母のなげきしに君のめぐみの
ふかうして科をゆるし理をたゞしあふげはたかきつ
くば山をいもかへす松風のみどり子なればなきおや
の君に不忠のすゑなればかくしそだてし古しへの心
にいまは引かへなげきはかへり悦の御酒ノ字ナ脱スルカもりと成に
けり扱兄弟の人々成人年をかさね兄をば曾我の十郎
弟を五郎時宗と隠れなきゆうしなりおやのかたき助
経を野にふし山に隠れ居てねらひうかがふ有様をよ
その見る目も中々に心ぐるしき次第也ねらふ所はど
こくぞばんにうと日らつかおほいそいそまりこ
川あみのいつしき小田原此世をいでの屋形まで三十一
八度ねらひ終に本望とげつゝこうめいを家に残しけ
り

元服曾我

文治元年正月十三日に鎌倉殿箱根まふでとぞきこえ
けるさるあひだはこねにはかまくらどのゝ御まいり
とてだいしゆ衣を用意しちごのいしやうをけつかう
す其中にかはづの三なんはこわうどのいしやうの事
をばおもはず玄ようちではなれしちゝごの御事今
やうにおもはれて玄のびの涙せきあへすこしの式部
をちかづけてかまくらどのゝ御參りに我は出仕を申
まじそれをいかにと申におほぢ伊藤ふちうの者とて
御にくみ有し事世にかくれも候はず玄きぶ此よしう
け給はりさも候へこれほどちごだいしゆけつかうあ
るによそながら御見物候へかしさらば見物申さんと
てかうだうのにはに出かまくらどのゝ御まいりをい
まやをそしとまち給ふかくて鎌倉殿御登山ましく
てかうだうにうつらせ給ふ去程にはこわう殿玄きぶ

たゆふをともとしてげちんのかうしのきはまで出さ
もあれかたきのすけつねと名のみ計はきゝけれど其
すがたをばいまだ見すかたきをとはてとおぼしめし
かまくらどのはいづくにまします式部殿とぞとふた
りける玄きぶ此よし承りだいものさしぬきにたて
玄ぼしめされたることそ鎌倉殿にておはしませはこわ
う聞召おろかの人のをしへ事やさればとてかまくら
どを見そんすべきにてあらね共かたきをとほんが
ためぞかしすけつねはととふならば玄きぶたゆふが
こゝろへてあれよとをしゆる事あらじ八ヶ國の大み
やう小名の名字をとひてみんするにすけつねといふ
者にとひあたらぬ事よもあらじとまだいとけなきこ
ころにもあんをまはすぞおそろしき

扱君の弓手のわきになをられたるは誰候ぞあれこそ
むさしにかくれなきちゝぶの玄げたゞと申人にてお
はしませ扱又めてのわきになをられたるはたれ候ぞ
さがみの國の住人わだのよしもりと申人にて候又き

みの御前に中座につきましますはいづくの國のたれ候ぞ伊豆の國の住人ほうでうの四郎ときまさとて君のためには御志うと其つぎなるはたれ候ぞたしろのくわんじやのぶつなとて是も伊豆には大名なりそのつぎぐは誰候ぞへんみたけだ小笠原一條いたがきなむぶしもやまみなついたりといひけれどなを祐經ときかざりけり扱又げちんのかうしをきたむきにはらりとゐながれたるはたれ候ぞあれこそ相模大名にさんまほんま土肥つちやとをたうみの國の住人にしたらなかやま皆ついたりと云けれどなを祐經ときかざりけりさて又げちんのかうしを西むきにはらりとゐながれたるはたれ候ぞあれこそ信濃大名にしなたかなしうむのもちづきいぬかひすは殿原こもりしろとりはつとりたうみな御ともといひけれどなをすけつねときかざるははこわうにつゝむかおぼつかなし扱はすけつね此度の御ともをば申さりけるや御供申て有ならば伊藤の大將にて有あひだばつ座に

はよもあらじさらばかへらんとおもひしが又たちかへりとふたりけりさてあのらいばんのきはにうすかうそめのひたゝれを着さもゆゝしげなる大名はいづくの國のたれ候ぞ志きぶ此よしうけたまはり今まで志ろしめされぬやあれこそ御身のためには眼せんのいとこくどう一郎すけつねと申人にておはしませ箱王どのは聞召能こそたちかへりとふたりけれようちにてはなれしちごにすこし似てや有らんとおもへば敵ながらもなつかしく見とれてこゝにはこわうどのはうせんとしてこそおはしけれ祐經何とかしたりけんはこわうどを見つけあふぎをあげて是へ／＼とまねきけりはこわうどのは御覽じてかたきのよぶがうれしさに大勢の中をのりこへ乗こえとをつて祐經がそばへぞよつたりけるすけつねはこわうどをひざのうへにかきのせ申いかに箱王殿それがしも御一ぞくのかたはしとめしをかれくどう一郎祐經と申ものにて候はこわうどの此寺にましますよし承て候

へどもくはうひまなきゆへ御めにかゝらぬなり見參のはじめになにをがな參らせん少人の御ためには似合ぬ引出物なれ共家につたはる重代とてあかぎのつかに志ろかねのめぬきどうがねうちたるこさすがをとり出てはこわうどのにぞ引にける

箱王此由御らんじてあらうれしやかたきの手よりもかたなを得たる事ひとへにはこねごんげんのいたさせ給ふつるぎなりとつてひきよせ一かたなと思ひ切ては有けれどすけつねはふるつはものはこわうは生年十三なりうてがほそくしてきごめのうへをとをするまじとをさぬものならば鎌倉殿の御目の前八ヶ國の大みやう小名の御らんするところにておやのかたきをうちそんじめいどにましますかはづどのまつだいそがのうきなをくださん事のむねんさよとやせんかくやあらましとあんじわづらふその時刻にかまくらどの、御下向とて大名小名一度にざしきをはらりと立すけつねも座敷をたつまのあたりなるかたきをう

たですごすぞむねんなるそれよりもはこ王殿がくもんじよにたちかへり只この事をぞあんじけるぬればかたきが夢に見えをくれば身にそふこゝちにてがくもんこゝろにいらすかくて年月ををくるほどに十六になるはほどもなし去程にべつたうはこわうどの、の御ぐしおろさんとて吉日えらび曾我へ案内を申されたり母上きこしめされて明日箱王法師になすべしとてけさころもをよういしはこねへのばせ給ふ十郎どのはきこし召ちごのすがたを今一度見ばやと思召はこねへのぼり給ひけりはこわうなめによろこふで一間どころへ玄やうじ申扱はこわうはほうしになるべく候やはこわうほうしになるならば御身にたぐふものあらしたゞしほうしになるならば一人はてらのすまゐをし祐成はさとにましまさばかたきのくどうすけつねをなにしてかは打べきぞ十郎どのとかきくどきなくよりほかの事はなしすけなりさうがんに涙をうかべあはれげによの中に兄弟にえんなきも

のは祐成にてといめたりそれをいかにと申に京にまします小次郎殿は都の住居とましませば身の本望をもかたりなぐさむ事もなし越後成せんじばうは國はるぐにてをとづれなし二のみやのあねごはによしやうの身ある玄るしもましまさずはこわうさへ法師になり祐成はとも、なぎさのうつせがいくだけともをおもふともたれかあはれととふべきぞ箱王殿とかたりつゝ又はら／＼となき給ふその義ならばはこわうもおとこになりますけなりの御供申へきかたいし母上の御ふけうもや候べき御身男になりて後たとへ母上御ふけう候ともそれがしよきやうに申なをすべしさらばおもひたらんとてつねのところにたちかへりくわしき事をかきとむる名殘カヘシ歟重複本ノマをばはこねのおやまにといめをきふたつとなきいのちをばめいどにましますちゝかはづどのにたてまつるししやう同宿人々に名ごりのかずはおほけれどおもひたちぬるたび衣又こそきてもあふべけれかへすぐも

なごりおしのしきぶたゆふとかきといめ夜のまに玄のび出にけりはまべの宮をすぢかひにやけるの露にそばねれてそがの里にそくだりけるすけなりおほせけるやうはやがておとこはなすべきがゑはしおやはいかなる人を取べきぞ伊豆の北條をとるべしさりながらかちにていかゞ行べきぞ祐成馬を用意すさすがむまは一疋なりすけなり馬をひきまはし乗やはこわうめされ候へ十郎殿すけなりきこしめされてあらおろかの事やちごをかちにてあゆませ大ぞくの身として馬にのりろじをゆかうすほどのぎやくなる事の候べきかいかかる御事候ぞ舍兄をかちにてあゆませ申弟の身として馬にのり路次をゆかうするほどのぎやく成事の候べきかめされ候へ十郎どのはや乗やはこわうと兄弟馬を玄きだいす時刻うつりて夜明なばおほかたとのにもれ聞えといめられてはかなふまじはこわうどのものり給へ助成ものらんとてむまいつぴきに兄弟のりそがのさとをぞ出にける上古も今も

末代もためしすくなき次第なりこまをはやめてうつ
ほどに北條のたちに着馬場ゑにてむよりおり門
外にこそたゞみけれ折ふしえまの小四郎出あひて
いづくへの御とをりぞすけなりきこしめし是へ參る
事別の子細にて候はずこれなるわつぱにゑぼしがき
せたく候てこれまでまいりて候えま殿きこし召やす
きほどの事にて候さりながら父北條に申きかせんと
てうちにいりときまさにかくと申ほうでう聞あへず
涙をさつとうかべたまひそれむかしは六十六ヶ年を一
むかしとし中比は三十三ヶ年當代は廿一ヶ年を一
昔とすあらむざんや此人々よが世にてゑぼしおやを
取なればげんじにてはかまくらどの平家ならば小松
殿の御前にてゑぼしをきうする人々が時代にしたが
ふならひとてはうばいをたのみきたる事のあはれさ
よそれこなたへゑやうせよとてなけれどでの
ちりをとりやれねどすだれかけなをしひきつくろへ
ばすでにはや時うつり返事もなかりけりはこわうお

ほきにはらを立いかにや十郎殿ふしきやなえまどの
はなにとてをそく見ゆるぞやがて心得たり昔は伊藤
ほうでうとて鳥のふたつの羽がひくるまのりやうわ
のごとくにてをとりまさりはなかりつるに當きみの
御代と成て我々兄弟よになし者にて有あひだ北條が
いやしめてゑぼしをきせじそのために扱ばしをそく
見ゆるか其儀にて有ならばすは八まんも御ぢげんあ
れ今生此世にておやの敵はうたすともれんちうへみ
たれ入てほうでうとさしちがへ死なふするにて候ぞ
やそここのほどをは十郎殿も御用意あれとぞ申ける助
成きこしめされてよし／＼北條もさはおもはれ候ま
じこゝろをゑづめてまたせ給へとせいし給ふところ
へ江馬殿たちいでざつしやうかまへ候とてをそく參
り申て候こなたへ御出候へとて兄弟をゑやうすその
時箱王いろをなをし兄弟つれてぞ入にける一にはち
ご又客人なればはこわうをゆんでのわきになをしす
けなりをめてのわきにゑやうせらるゝ其外えまの小

四郎をはじめ一ぞく家のわかたうくるま座にはらりとゐなをり三ごんの酒すぎてのち北條ざしきをたち給ひゑぼし一かしら取いだしはこわうどのゝかみはやゑびんかきすましきせ申名をばほうでうの助五郎時宗とつけいかにめんく聞給へそれゑぼしをきる事はわたくしならぬ事にて有清和天皇の御代の時異國よりも我朝へ作り物をわたされたりくぎやう殿上人納言さい相以下北面うくわんむくわん闘白殿下さしあつまつてのせんぎなりみかどえいらんましくて是はおのこのたましる名をはゑぼしといふものなりへりは大海つぶはほしくしがたは半月とがるは國のたけきさうかさくちのひろき事はいのちの長きさうにてありこゆいをゆひてきる事はさながらゑゆみのはんふくのまなびなり此ゑぼしをきる人はいのちもながく名もたかく壽命長遠徳自富貴の家に生るゝなりこのえぼしめされてするはんじやうといはひつつたちとかたなをとり出しはこわうどにひき給ふ

助成御らんじてうれしやとはのたまはでなみだをさつとうかべたまひあらはづかしやむかしがいまにいたるまでゑぼし子のかたよりもゑぼし親のかたへこそ引出物をば申ならひの候に却て給はる事のはづかしさよとおもへばあせもなみだももろとともにといめかねたるばかりなりほうでうとの御らんじてあらむざんや助成弟が鳥帽子をきるほどに有し昔をおもひいだし涙のふせいのあはれさよすけなりがこゝろをもなぐさめばやとおぼしめしさけたぶくとひかへ給ひ承はればちぶには六郎殿三浦にあさいな曾我には十郎殿一師に付て舞ならはせ給ふが中にも十郎殿の御まひすぐれたるよし承はるこれははこわうどのゝゑうげんなればたゞ一かなでとこはれたりすけなり聞召まはじものとはおもはれけれ共まはではざしきのけうもなしまばやとおぼしめしいつせいをこそあげにけれ

ゑつやゑつ賤のをたまきくりかへし

昔をいまになすよしもかな

むかしを今になさばやとやゝしばらくうたひしがあ
ら何ともなやこれはむしやうのたいぞかしまひなを
さばやとおもひて和歌のたいをぞあげにけるきみを
はじめておかむには千代も經ぬべしひめ小松／＼と
三返ふんてまはれば北條をはじめ奉りれつ座有し人
人一度にあつとかんじけり其後まひもすぎければい
とまをこふて兄弟曾我ふるさとにかへりけり

和田酒盛

相模の國の住人わだのよしもりは一門九十三ぎをひきぐして山したじゆくかはら長者の宿所にうちよつて夜日三日のさかもりはおもしろふこそきこえけれどやうじやもかねてごしたる事なればかうしやうしゆんによせきくあひと申てとらにをとらぬゆうくんを十八人すぐつて和田どとのをもてなせどされどもわだの心ざすとらはざしきになかりけりつかひをたてめさるゝに一度のつかひにまいらず二度の使に返事せず三度にもなりしかばわだ大きにはらをたて異國をみねばそはしらずほんてうにをひてをや武州にちゝぶ相州によしもりなんどがうちよつてさかもりをせんする人はよばすと出あひしやくをもとり今やうをもうたひすいさんせんこそほんにてあるべきにかほどめすに出あはぬとらはふしげのものかな山

下内をいでよといへあさいなとこそいかられるのはのちやうじやこのよしを聞召いや／＼あしかりなんとおぼしめしとらさせのゐたりける一間所へたちいり志やうじをへだてゝのたまはくいかにとらさせたとひまん／＼の事有とも只今出てわだのまへにて志やくとつて三うらへかへし給へそれふてんのしたに生をうけ王土にその身ををく事は大事にてあらずやとらさせとぞおほせけるとら此よしをきくよりもあらうたてのはゝ子の仰やけんしむは二君につかへず貞女りやうふにまみえずと申ほんもむこそさふらへすけなりにけいやくし又助成をひきかへてわだにけいやくあらんとやおもひもよらぬ事なるべしとらは是にありつるがよになしものゝ十郎とちぎりをこめ鎌倉のかたへとも申させ給へはゝうへとめせどもとらはいでざりけり母のちやうじや至極のはらにすへかねていかにとらさせきゝ給へむかしもおやにかうあるともがらをわごせに語てきかすべしそれはく

ゆうは母にうたれ打つえをばかなしまでよはるつえ
にねをぞなくおんのまうそははゝのねがひ物とて
ときならぬ志はすにたかんなをもとむるに雪くうざ
んにふりつみたかんなさらになかりけりしよてんこ
れをあはれみたまひ雪のなかに竹の子三ほんまでそ
だつよろこび是をとりてかへり八十にあまりたる母
のねがひをみてけるとうけたまはるくわつきよはは
はをやしなひかね我子をつちにうづまんとうちける
くわの下よりもこがねのかまをほりいだし二度ちや
うじやに成ときくさればにや人の子のたいないにや
どりたねをおろすばかりごとはほんてんよりもいと
をそろし大かいのそこなるはりのみゝをとをすより
なをうけがたふてまうけたり二百七十餘日はたいな
いにやどり神ほとけにもいまれ申九ほんのじやうど
へ參る事もなしたまゝ人に生れくる其ときのくる
しみはいきたるうしのかはをはざせんからたちの其
中へをひいるよりたへがたしげんとうそせつのふ

ゆの夜はふすまをかさねはごくめり九夏三伏のなつ
の夜は松風にたはぶれてそらふく風をまねきよせを
よそさんしをはごくめり三歳になるまでのみけるに
うみばんぶいかで志るべきぞかたじけなくも釋尊は
だんどくせんのかたはらにて志づかにさんだむして
見たまふにをよそ一百八十石に志るさるゝ此ことは
りをきくときは志ろきほねはちゝのおんしゝむらは
はゝのおんほうじてもほうじがたきは父のおんとと
かれたりしやしてもしやしがたきははゝのおんとと
かれたりじふおんかうによしゆみせん悲母おんしむ
によ大海いづれをほうじつくすべきぞやあとらごせ
たゞ今いでゝ和田のまへにてしやくとつて三うらへ
かへし給へそれさなきものならばそうじてあの十郎
殿のむまくら見ぐるしきていにてそがよりもこれま
でのしゆくがよひを思ひとゝまり給へとあららかに
のたまひてちやうじやさしきへなをられしは十郎ど
のゝためにはめんぼくなふぞきこえけるすけなりま

うがんになんだをうかべそれ天人の五すい人間の八

の事はなし

苦とて八つのくの有其中にあはれたひんくほども
のうき事はよもあらじひんくとだにもなりぬれば志
たしきなかもうとふなりうとき人にはいやしまれた
んほの衣をそめされば佛ぼうそうをもくやうせず朝
本ノマ、夕ともしければ三ぼうのふせをもをこなはずひやり
しゆんしにましはらねはなぐさむかたもなしたまた
まばつ座につらなつてこゝろはかうしやうに人にす
ぐれておもへどもかさねのきぬを身にきねばかたみ
つまりてはづかしゝけふこのごろすけなりなんどが
たのみたらんするゆうくんをそらくばあの殿原が
ぶんとしてゆうくん出せさかもりせむなどいは
しなれどもよに志たがへばちからなしさぶらひか侍
にむかつてうでくびをにぎりきちよくするはなら
ひ也世をも人をもくすのはのくうらむべきにてな
しやとてはんくわいそねむ助成もわがみのほどをく
わんじつゝたもとをかほにをしめてなくよりほか
けんらう地神と申釋尊よつてとひ給ふ三がいをいた

とら此よしをきくよりも十郎殿は何事を仰さふらふ
ぞむかしの人がめに見えさふらふが東方さくが九千
さいうつゝらの八萬歳りうちくわしやうの二萬ざい
上明こしのおきなの一千ざい二千ざいをふるとは申
さふらへど名をのみ聞いていまは見ずあすを志らざる
心につけふのらくこそうれしけれとゝろゝとなる
かみもおもふなかをばよもさけじ一人ましますは、
のふけうはかうふるともざしきへはいづまじき十郎
殿とかたりけり助成きこしめされてあらやさしの女
のことばやかほどやさしきゆうくんを座敷へいださ
ぬ物ならば長者のうらみふかゝるべしと思召いかに
とうござたひいまの言葉はやまならばしゆみせんう
みならばさうかいよりも猶たのもしく候が爰にちか
しならずさんがいをいたひてまします佛の御名を

だひてましますはいかほどをもきぞと問給へば地神
こたへていはくしゆみの山にとうしみを一すぢをき
たるたとへよりもなをかろく候が爰にをもきものあ
りおやのふけうを得しうのかんだうをかうぶりたる
ものゝとをるとき大地がわれてみがいればあたりの
木草もかれはて川をわたれば瀬だへしそのうろく
づも生をめつし地神がかうべに七尺の歟をたつるよ
りたへがたしとのたまへばしやくそんもあみだ佛三
世のしよぶつたちゑたをまひてぞおぢ給ふ又五しや
うと申は五のまきのたいばほんに一しやふとくさぼ
む天わう二しやたいしやく三しやまわう四しやてん
りんしやうわう五しや佛しんととかれたり三じうと
申はいとけなきとき父母の家とて家をもたねばおや
にゑたがふく一つわかくさかなる時はおつとの家
といへをもたねばつまにゑたがふく一つさて老し
て其後子どものいへとて家をもたねば子にゑたがへ
るくひとつされば佛のとかれたり三がいにかきもな

し六道にほとりなし女に三の家なしとこゝをほとけ
のとき給ふかゝるいはれの候ぞやたゞいま出てわだ
のまへにてしやすく取て三うらへ返し給へそれなき
ものならば名ごりおしくは候へども助成は曾我へ歸
るべしとら此よしをきくよりもはゝごのふけうとお
ほせらるゝをさへ御身にかへておもひしに御身もふ
けうと仰あらばさらば出んといふまゝに十二ひとへ
のきぬのつまを取てざしきへこそ出られけれつもる
年は十七歳がいたう二ばんのゆうくんおとなげなく
もよしもりのとらにこゝろをかけられしはことはり
とこそ聞えけれどらさせ出て和田殿ともてなせども
さかづきのけうたいこゝろにそます吉盛御義ノ誤らんじて
いかさまにもとらごせがさかづきのげうたいこゝろ
にはまずみゆるはつま十郎がうちにあるかゐたらば
出て酒のめとつかひをたてよ虎虎ごせとらなゝめによ
ろこふで十郎のかたへつかひをたつるすけなりきこ
しめされて出じばやとおぼしめすがたゞいま出ぬも

のならばおくしたりと思召俄の事にてある間かけえ
ぼしにぞ着たりける夏の野にすりつくしぬふたるひ
たれ九寸五ぶんのよろひどをしたみたるあふぎを
つとりそへ前はんにぞさひたりける大まくつかんで
うちあげすけなり是に候とてざしきをきつと見わた
せばちやく座にはよしもりをはじめ虎も長者も一も
ん九十三騎くるま座にはらりと居ながれすけなりが
るうするざしきはなし爰に和田の右座にたれみが一
帖あいだ和田は三浦の大將とて恐れてなをる人もな
し祐成御らんじてあらことぐしや和田といふに三
誤歟 うらの大將祐成は伊藤の大將まつごかくなるさぶ
らひがわだがゐうするざしきに祐成座せて有べきか
とおめすおくせずはしゃからで右座にむんずとなをる
かくてさかづき三ごんとをつてのち母の長者ゐたる
ところをづんとたつてちやうだいへつつといりまき
ゑのばんにもみぢのかはらけすへていでいかにとら
ごせ此さかづきひとつのみで何方へなりともおもふ

するかたへさし給へとらこのよしをきくよりもあら
むづかしのはゝごの仰やわだへならばよしもりへ十
郎殿ならば祐成へさせとは仰もなくしていづかたへ
なりともおもふするかたへさせとは和田にさすなら
ば十郎のうらみあり又十郎にさすならば和田のうら
みありとやせんかくやあらましとあんじたりしあり
さまを物によく／＼たとふればあかしのうらの人丸
のすりと筆とれうしをそばにをかせたまひて出る
船入ふねたつなみ吹風によそへて三十一字のことの
はにもらさじとあんじ給ひしもこれにはいかでまさ
いと申志かるにくわうていに三千人のきさきあり第
一人おはしますみかどの御名をはげんそくはうて
いと申志かるにくわうていに三千人のきさきあり第
一のきさきをぐし君と申さてその次のきさきをこう
のうのやうげんゑんの御むすめやうきひとこそ申け
れ志かるにやうきひ三國一の美人たりみかどてうあ
ひなゝめならずくぎやうせんぎまち／＼たりいやし

きひさぶらひの子どもやうきひか一のきさきにそな
はらばもゝしきや大宮人をふりすてわれ／＼内裏を
まかり出むとそもんすみぎをくだりにやうげんゑ
んの一たうぐしきみの一のきさきにそなはらばもゝ
しきや大宮人をふりすてわれ／＼大りをまかり出ん
とそもんすみかど此事をえいらんまし／＼てやう
やうしのありさまやあなたをいはへばこなたのうら
みあり又こなたをいはへばあなたのうらみありいづ
かたのうらみをもおはぬやうにと思召てんぼう十二
年七月七日のひしゝむでんのかくのまに二人のきさ
きめされてるりのばんにはくせき黒石のてうづにす
いぎうのつのゝさいを自かねのどうにいれはやく三
ばん一とくせうぶにかけてくらゐをあらそひ給へき
さきたちとせんじあるきさきは聞召れてうらみもこ
ひものこらずさらばうたんとてさいのめをあはせら
るはじめのかちはやうぎひそのつぎはぐし君手づめ
のせうぶに成ておりはになりければやうきひのこひ

めにてう三をこはれたりぐし君のこひめにてう四を
こはれたりりやうのこゝろいくばくぞてう三にもて
う四にもかたきつておりずしどうのうちでこのさい
二つづゝにわれては四つに成てぞ出にけるやうきひ
のこはれたるてう三もおりて有ぐしきみのこはれた
るてう四もおりてありみかどえいらんまし／＼あふ
やさしのさいやなんぢは牛のつのなれど人のこゝろ
をちゞに知てさやうにふるまふかやさらばくわんを
なせとてさいのめにしゆをさいてそのときまでて
つち重二てう三てう四でく重六と申せしをしゆさん
しうしと申事この御代よりも始まれりそのさいと申
はものゝこゝろゑつたれば二つにわれ四つでいて二
人のきさきそなはるそのごとくみづからもさしたき
かたは兩かたなりさかづきはひとつ二つにわれての
けかしとちぐさにものをあんじけるとらごせの心中
たとへんかたはなかりけりはゝのちやうじや此よし
を御らんじてあらをそやとらごせさらばそのさかづ

きひとつのみでいづかたへなりともおもはざらん方
へさし給へとら此よしをきくよりもはゝごはさなが
らものにくるはせ給ふぞやこのことばのなかりせば
らう人なりきやく人なりわだへこそさすべきに此こ
とばをきゝながらわだへきすならばかいたう七ヶ國
の遊君のなをりたるべしなんでうこのさかづきをば
わだへはさすまじものつまの十郎にさそうす男なれ
ばとつてのまふすのむほどならばあさいなかふるこ
ほりか座敷をたてぞせんずらんそのときみづからう
へこそ女なりともこゝろは男子にちがふましあらな
さけなしとよわだとのいろある人にいろなきは花み
てえだを手折かやこゝをばひたすらみづからにゆる
させ給へときゆるていにもてなしあきいながめての
わきにさいたる刀ひんばうてねだのこゝろもとにさ
したてかへさんかたなにてみづから自がいし妻の十
郎にはらきらせして三途の大河をすけなりもろとも
にてに手をとりくんてゆかばやとたゞ一すぢにおも

ひきりいかにや御一もんの人々はゝごのおもひさし
せよと仰さふらふほどによそのけまふもさふらふま
じとつまの十郎にさかづきをむすとさすすけなり御
らんじていや／＼のふでは事あしかりなんいかゝは
せんとおぼしめすが只今のまぬものならばおくした
りと思召あらめづらしの御さかづきやともつて三度
ぞくんだりけるよしもりきしよくかはつてやあ十郎
只今のさかづきはのむまじきさかづきなれどもまさ
しく吉盛をさけてとつてのふづるものかなそれさか
づきのむはうがあるぞ志せんわかきとのばらの川が
りかりくらうちすぎゆうくんのもとへうちよつてさ
けをのむにさかもり亂舞に成ておもはしきゆうくん
が一つくむでこれをばあれにまします人へとさいた
るをとつてのふだるをこそ時のめんぼくなれさすは
日比の女のむはひごろの男二人のものがたちいて又
ざしきに人もなきやうにさかづきをさしかよはしの
ふづるところはよしもりがぞんじにははつくんちが

ふて存するそれおひたるをもつてうやまふを父母のごとしわかきをもつてあびするを師弟のごとし玄るをもつて玄んりん玄らぬはきちくおくせきはうばいのこらしめに座敷をとつてをつたてよはやたてよとぞいからるゝ

かみをまなぶ下なれば玄も座なるわかものそばなるうちものをひつたをしづくはいきもとをくつろげおほせて候ぞたてとをつたつるいたはしやすけなりからのかゝみに身はひとつ立もさすがなりいぶんさんしゆに至てちくくになをきんぎよくのこゑありかはづとの御名をばくださじものとぞんずれはいかにわだどの大名なれど三浦の大將すけなりは身こそひんなれど伊藤のこれは大將まつごくなるさふらひに當座のはぢをあたへ給ふものかな只今ざしきをたてうす者はそもをつはたに孫太郎いとひさに源八ゑがらの平太たねながあさいなぞ有らんにたゞ一人が立ざればうしろの體もさびしきによしもりも立

給へとかたなのこひくち三寸ばかりくつろげたもの下にかくしをきはんじこふてまちゐた助成の心中は玄んるんにのぞむではなくへうをふむがごとくなり

すけなりこゝろにおもひかへすおとゝの五郎ときむねがたびくせいぶんしつるものをそれしゆくがよひと申はうとくなる人のしゆくがよひをば人がうらやみひんなるものゝ宿通をばかならずにくみ候馬ののりあひかさとがめにても助成うたれ給ふならば時宗一人のこりゐて親のかたきと申御身のかたきといひ何としてかはうつべきぞ理をまげて宿がよひをおもひとゝまり給へとたびくせいぶんしつるものをおもひすし打こえあさいなかふるこほりがてにかゝつてうたれん事は治定なり玄せん命はつゆぢり程もおしからねども年來のすけつねおやのかたきをばうたずしてしやうがいをうしなひなにかせんあさいな三郎がざしきをたてといふならばたゞばやとこそ

おもはれけれかくおもひ給ひけるがそがへやつうじ
けん弟の五郎ときむねはふるゐといつしところに矢
のねをみがひてゐたりしがあまりねむさにごばん引
よせまくらとしゆたかにこそふしにけれかゝりける
ところに舍兄すけなり枕眞ノ誤歟がみにたちよらせたまひて
やあいかにときむねそれ長者が四十二ヶ條の兵法の
まき物をがくしたりといへどもさけをすぞしぬれば
何にもをとれり千日したる用心もめをつよくぬれば
一夜にむになるぞかほどのはくちうにさやうにゆた
かにふす物かやあおきよ／＼と二三度四五度おこさ
せ給ふとゆめ見てかつぱとをきあたりをみるには
なしふしぎさよとおもひ下女をちかつけて十郎殿は
と問ば下女承て宵よりもおほいそにて是にはるすと
申時宗聞て扱はうたがふところなしかたきくどうす
けつねか一騎うつてとをるを五郎だにも有ならばは
ちある矢をも一すぢいてはらきらばやと思召がかく
おもかけにたつかさらばばんどう海道十五ヶ國の

人々のうつてとをらせ給ふが十郎殿は只一騎と玄た
めにかけてねむるがかくおもかげに立かその儀にて
あるならばすはの上下も御ぢげんあれしやきやう助
成の影をば人にふますまじ物をと云まゝにちやうだ
いへつつと入しやうもんしうつたるからうとのふた
をあげおうち伊藤の入道殿よりつたはつたるさかお
もだかのはらまき四人してもちけるをわだかみつか
んで引たてくさずりながらにさつくと着かたなと申に
かたきくどう祐經がはこねまふでのありしとき見ぐ
るしけなれ共とてえさせたるあかぎのつかにゑろか
ねにてめぬきどうがね打たるこさすがをぞさひたり
けるたちと申に河津殿おくのゝかりはのかへりあし
におほみの五藤太やはた三郎が一二のまぶしをかた
めはなちける矢にあたつてやみ／＼とうたれさせ給
ひしきとき是をははこわうにとらせよとかたみにくだ
し給たる四尺八寸有けるがぬけばたまちるばかり成
玄ろきたづなにてまん中むすとゆふてわつそくにぞ

かけたりける御馬屋へはしり入て見てあればおりふ
しかげ成こまにゆあらひしてぞをきにけるくじをか
むひまがあらざればはづなはらがけ引ちぎつてあら
ひぐつはをはめさせひきよせゆらりとうちのりまは
れば三里すぐにうてば五十町まはらは時刻もうつり
なんとおもひ曾我中村にさしかゝりかけあをつては
しとゝうちしとゝ打てはかけあをりこまにぢらあは
かませ只一打にといそひだるときむねが心中あすは
むけんからこくゑんぶのちりともならばなれけふに
をひて時宗あつたのもしくぞみえにける

ふ座敷へ十郎殿もとらごせも出させ給ひてさかづき
のこうろんたゞ今なかばなりと申時宗聞て扱其さか
づきをは和田へさひたるか十郎へさひたりけるか下
女承て虎ごせのやさしくましゝて十郎殿にさゝせ
給ひてさふらふぞ時宗聞てさてそのさかづきをおく
してとつてのまさりけるかなふ御こゝろやすくおほ
しめせ取て参て候ぞときむね聞てからくとうちわ
らひ日本六十六ヶ國に大がうのつはもの又二人とも
なかりけり舍兄すけなりにてましますよなけんじん
なる女よにおほしといふともとらにましたるけん女
よもあらじとらなればこそさひたれ十郎なればこそ
あれほどおほきかたきのなかにておくせで取てのふ
ではあれのふだりや十郎殿さひたりやとらごせとた
ちのつかをたゞむてひとりかんしてたちにけりさて
いづくからゆくぞこなたへいらせ給へとてめんらう
くわいらうまごびさしをさし過しやうじを一間へだ
てあれなるは新左衛門ふるこほり左衛門えびな兵衛

あしな兵衛すのさきの孫太郎これなるは十郎どのと
いち／＼にをしへけり

ときむねこれを見てたとひなものなりとも舍兄す
けなりにとつてかゝるものあらばしやうじの一けん
もの／＼しはら／＼とふみやぶつて大將とかしつき
和田がほそくび中につんと討おとしあさいながみけ
んからたけわりといふものに二つにさつときりわり
のこりのやつばらとしにもたらぬしよくわんどもも
の／＼かずにてかずならずしやうぎだをしをするごと
くさん／＼に切てすてしやきやうすけなりとさしち
がへてゑなんはあんのうちとぞんすればふんじかつ
て立たりしはたもんぢこくぞうちやうつくりすへた
二王にちつともちがはざりけりよしもり御らんじて
やあいかにあさいななんぢは日ごろのちせうにはに
ぬものかな十郎をとつてをつたてよはやたてよとぞ
いかられけるあさいなこゝろにおもふやうあふさひ
たるも道理又のふだるもだうりそのうへ弓とりはけ

ふは人のうへあすは我身のうへなるべしさすが名あ
るゆみとりにいかにとしてはぢをすみべきぞげにや
らんこのもの殿原兄弟は魚と水とのごとくにてあに
がさけをのむときはをととがのます弟がのめばあに
がのまでたがひにようじんすると聞つるもの今もや
弟の五郎が内に有らんにあしうかゝつて座敷をは立
そんじまつかうわられあしかりなんとぞんすれば人
もはやさぬまひを立てぞまふたりけるうすをしきの
そばを取て其ころかいだうにはやりし硯わりと云歌
のたいをはつたとあげ半時ふんでぞまはれけるよし
やあしゝとてきりすてられしくれだけもくれ竹も本
に一夜はある物をよしやあしゝとてつきすてられし
庭くさも本しのふとてあるものをよしもり此事を御
はらるさせ給ふべし十郎殿も虎ごせも心にかけ給ふ
なよ一かうこのよしひでにゆるし給ふべきなりとは
んしふんでぞまはれけるあさいなが心ざし生々世々
に至るまでわすれがたくぞおぼえける舞もすぎ時分

になりしときしやうじのうちにかなものゝをとがからりとなつたさればこそとおもひこゝをちつと御めんなれやといふまゝにあひのしやうじをさつとあけ内をきつと見てあればなにはゑらねども六尺ゆたか成大おとこのむないた見ればまつしろなるが五尺あまり成たちを七八寸くつろげかゝらばきりよげに見えしかばをにのやうなるあさいなもたゞひざふるうてぞ立たりけるいかにや御身は五郎殿にてましますか舍兄助成もざしきにましますになど出てさかもりをばおたまはぬぞと有しかばときむね聞いて仰かしまつて候へ共御らんせられ候ごとくびやくえでさうとて出もせずあさいな心に思ふやうげにやらん五郎はじやにつなを付たりとも馬ならばのらんとくわうげんすると聞つるものを座けうながらじつにちからほどのほどをためさばやとおもひげに御へんは出まじいかといふまゝにはしりかゝつてはらまきのくさすり二三まいかひつかんでどうのいたにひつしめ前へゑ

いやつといふて引けれ共ちとも更にはたらかずげにこれはつよかりけるぞや三うら一もんは九十三騎れんばんは四百八十餘人が中にこばやしのあさいなとて名にしおふたるそれがしが五郎をたゞいまとさへひきいださぬものならばしやうがいなりとおもひてあさいなの三郎がちから出るゑるしにさうのうでとかひなにちからすぢといふものが十四五二三十ふつくといでにけりむねをおふるちからげごはんのおもてにあかゞねのはりをすりならべたるごとくなりどうのすぢがひたいへあがりひたいのすぢがどうへさがりものによくへたとふればきうちやうの藤が松をからんできりんかともをこうたるにちつともちがはざりけり

あふけうぐしのありさまやうさみくすみかはづ三ヶの庄のうちにあら馬のつての大ぢからの五郎とよばれあさいなほどの小男にやみくとひかれござしきへは出まじものげにつよく引ならば三まいの

くさすりがきるゝかひざのふしがちがふかふまへた
いたが大地へ落つくか三つにひとつはぢやうのもの
とおもひてふんじかつてたつたはつしんをいらげ
前へゑいと引たうしろへゑいとひた草すりきれての
きけれどたちどころをさらすしてふんじかつて立た
そがの五郎時宗を大ぢからと申ておぢぬ人こそなか
りけれ三まいのくさすりをもつて父の御前に参りこ
れこれ御らん候へ五郎ときむねの内にゐられて候こ
れをさかなにて今一つさかもりゑたまへとありしか
ばよしもりきしよく引かへ何五郎殿のうちにましま
すか舍兄すけなりも座敷にましますになどいへさ
かもりをゑ給はぬぞとありしかばときむね承ておほ
せかしこまつては候へどもびやくえて候とてをと
もせず

去ほどに十郎殿弟の五郎ときむねがうちに有とだに
も聞ければ只きまんこくのきわうとらせんこくのら
わうをあざむくほどのつはものを千騎萬騎もちたる
れどもげんざんは是がはじめそれ／＼とありしかば

より猶たのもしうぞおもはれるなに五郎が内に有
かおとなさぶらひのめしのあるになどいでゝ御しや
くを申さぬぞときむね承てびやくえでさう御めんあ
るぞ只まいれうけたまはると申て大はらまきをきな
がら大だちをもちながらゑどけなげにもいで新左衛
門のめてのたい座につめ座にちやうどなをる新左衛
門はいらんしてこれほどひろき座敷にてつめさかも
りはしようさうそこへをちつとくつろげたまへさか
もりせんとありしかば時宗聞てなんさう新左衛門殿
まいれとおほせあればこそ参りたるにさしきを立と
おほせあらば只今たゝんといふまゝにはらまきの草
すり二三まいひざのうへにゆりかけ猶つめかけてな
をつたるけうさめてぞ見えにける吉盛御らんじてい
かに五郎殿御身はようせうよりはこねにのぼり別當
の御坊にてがくもんし其後伊豆に下り北條をえぼし
親にたのみ助五郎ときむねと名乗せたまふとは承は

うけたまはると申てもえぎにほひのはらまきにたち
とりそへて引たりける時宗これをみてたゞいまの引
手物をとらばやとおもふがまで志ばしわがこゝろ明
日に成ならば坂東かいだう十五ヶ國の人々のつたへ
聞召れてあらむざんや曾我殿原兄弟は身のひんなる
に志たがつてひき手ものにめがくれ遊君を和田へば
はれたなんど、あらんずるときはこうなん也とおも
ひいかによしもりたゞ今引手物を給はりたくは候
へども後日に三うらへ參て給はるべしそのあひだは
あれにましますわかき人にあつけ申さんといふまゝ
にたちのおびとりとはらまきのわだかみかひつかん
でしも座へからりとなぐる吉盛御覽してたゞいまの
ふせいはれうけんさうか座けうさうか時宗聞てうと
く成人のうへにこそれうけん座けうは候へひんなる
ものゝ座けうは志らぬて候と申よしもり聞召ようさ
う五郎殿いとま申て長者とてざしきをたゞせ給へば
九十三騎はらりと立てこゝやかしこにてこまひきよ

せ／＼ひらり／＼とうちのる其中に和田殿大將でま
しませはえんのはなへ馬ひかせのらんとし給ふとき
むねこれを見ていせん舍兄助成にこめをみせたごと
くにおどさばやとおもひて四かく成まなこを五かく
にくわつと見ひらきいかに和田殿此やかたと申は和
田殿もたてられず十郎殿もたてられず又時宗がたて
たる事も候はずばんどうは八ヶ國海道は七ヶ國十五
ヶ國の人々のつしさかもりのそのためにたてをかれ
たやかたなりこれから乗うちはびろうさうぞわだ
どのおりさせ給ひ候へおりられぬ物ならばすは八ま
んも御ちげんあれときむねがたゞ今おろすべしとぞ
おどしけるよしもり聞召いや／＼きやつばら身本ノ
づるものによせあはせ爰にてことを志いだしわかつ
ううたせあしかりなんと思召ようさう五郎殿年はよ
つつ目は見えず日はくれがたになりさうつくらぐそ
くみんためにひかせてこそは候へそれ／＼わかたう
むまひけやと有しかば承ると申て志つけざかまで引

たるは五郎におちたところ也兄弟の人々はかまのそ
ばをたかくとりゆみ矢のれいぎ是まで候はやくめ
され候へとくくめされ候へとひきはしまでぞをく
りける其後兄弟やかたに歸てもしも三浦より夜討に
よせやせんとて夜まはりつじがためようじんきびし
かりけれど一門の中なればよする事こそなかりけれ
此人々の心中をばさせん上下をしなべかんせぬ人は
なかりけり

小袖曾我

去ほどにそがきやうだいの人々はふじ野へのいとま
ごひの其ためには、うへにまいらるゝ祐なり仰ける
やうはいかに五郎どの御身はゑばらく待給へまづそ
れがし一人参り御きげんをうかがひ申御みのそせう
申さんとて母うへに参りふじのへのいとまごひをぞ
申されける母上聞召れてふじのとはおとに聞えたる
ゆきの有所なればさだめてよさむなるべしとて御こ
そでを下さるゝ祐成謹而申さるゝ哀同は時宗にも下
され候へかし母上聞召れて何時宗とはたが事ぞみづ
からが子共の中にときむねといふ者おぼえず京の小
二郎は名乗すゑちごのせんじばうは法師の身なれば
名乗ましあふさる事ありおさなくてはこわうとてわ
らはの一人さぶらひしをちゝのぼだいをとはせん
ために別當にけいやくし箱根へのぼせて候へば母が

めいをそむきはこねの寺をにげ下さいの北條をゑば
しおやに頼みすけ五郎ときむねとなるるときくその
時宗とやらんが事申いだしたらんには今生後生ふち
うのものにてあるべしと仰もあへず御なみだにむせ
ばせ給ふ祐成うけたまはり其御事にて候むざんやな
ときむね十六の春のころ法師になると申て里へ人を
くだすちごのすがたを今一度見ばやとぞんじはこね
へのぼりて候へばはこわうなのに祝て一間所に引
入さて箱王は法師になるべく候やちごは法しになり
ねれば三年は山籠と申てさうなく里へくだらぬよし
を承る其うへらうしやうふぢやうのならひ此まゝ御
めにかゝらぬ事もや候べきとふかくなげき候ほどに
祐成ふびんにぞんじ其儀ならば里にくだり男になれ
と申せばさだめて母うへの御ぶけうもや候べきと申
御身おとこになりて後たとひ母上の御ぶけう候とも
よきやうに申なをすべしととかくすゝめよのまには
こねをにげくだりこれへ参らん事ををそれと存すべ

にいづにくだり北條をゑばしおやにたのみあれにて
げんぶくせさせ北條の助五郎時宗とはそれがしが名
乗するにて候ぞ御ふしんむざんさよはこわうつねに
なげくやう母うへの御ふしんは十郎の御とく候と明
暮うらみ候ほどにおとゝながらもめんぼくなしあは
れおなじく候はゞ時宗が御ふしんを十郎に御めん候
へかしこゝろやすくめしつれてするがのふじへまか
りのぼり候はんとかさねぐ申共つやゝ返事もま
しまさず時むね物ごしにて承りさてはいかやうの人
の御こうしゆなりともかなふまじまづかへらんとお
もひしがいま申さではいつの世に申べきぞとおもひ
しやうじのあひをばふるひゝたち出ふるへる聲を
さし上落ゑんに手うちかけおつるなみだをおしとい
め二時ばかりくどくにぞ上下涙をながしけるそもそも
もそれがしがみのとがをなに事やらんと只今承て候
へば男になりたる御ふしなりそれはなによりもや
すき程の事にて候男になりては候へども五百かいを

たもち給ふ御そうの身にもおとり申さず魚とりをも
ぶくせず寺へ上たるゑるしにはちゝのけうやうのそ
のためにかみつけのほけ經を五百ぶかゝんと大願を
たて去年の秋のころ二百七ぶかたのことくかきたて
箱根へこめて候へば其御經のくりきもなどかはなふ
て有べきそれのみにかぎらず日夜に經はおこたらす
ちゝのためにはけうやうさて又母の御きたうとせつ
なもさらにおこたらすつとめぎやうする身なれども
申上る人なふしてあくれば御かんだう又くるれば御
ぶけうとうけたまはるぞかなしきその身男の體なれ
ども道智津師律ノ誤カといつし人はいけをゑいじてわうじや
うすくわかいびくといつし人はうみをえいじて往じ
じやうすはくらくてんはまさしく竹をあひして往じ
やうすゑんらうびわを引きんわうことたむじつゝ
一心にまよはん事をかなしめばわうじやうのそくわ
いはとげん事はうたがひあらじと承る又佛に四ぶの
御弟子有びくびくにうばそくうばゐとてあま法師男

女も御弟子にてしやうあみだやくし御くしあおふしていとをわくるがごとしてんとう佛の其中にけんさくつるぎほうはう弓矢をたいし給へ共ぐせの願あさからずばさつたちもみなながら男の體にてましませどにうはのじひこれおほし十方さつたのそのなかにちぞうばさつはいはれ有かみをはもたせ給はずされはほうねん上人の一しゆのうたにかくばかり

そめはやなこゝろのうちをすみそめに

ころものいろはとにもかくにも

とゑいじ給ひけるとかや又布衣和尚の十無やくにきやうがくとせつにて僧形むやくとのべ給ふ我朝の開闢ノ假借白いせ明神の御前へ法師をむかへ給はず爰をもつてまさしくしんていはづぶをふぼにうけ赤白の二ていはたいこん兩ぶの佛にてかみひげゑしむらは母のあたふるせいとくほねは父のあたふる父のあたふる骨をばみのおはるまで捨ず母のあたふるかみひげをそりすつることまよひなれとこゝを神明いましめて法

師をむかへたまはすながぐ敷は候へ共爰にたとへの候てんぢくの事かとよせんならと申て弓とり一人おはしますゑかるにせんならぶ女とちぎりをこめ給ひ二人のわかをまうけさせ給ふあにが名をばけんしやう弟がなをばかうしやうばらもんとぞ申けるかれらせいじん程もなし七月十四日にすまふのばへ出事を忘いだしおほくの人をほろぼしあけにそふだらうち物を弓手のかたになげかけわがやをとして引て入父せんならは御覺じてこはそも兄弟にはものがつねてくるはするか二きのひがん卯月の八日七月十四日は一年があひだの六さい日にさゝれたるに今日人をがいる事いかゝり有べきと大きにいからせ給ひければ兄弟承はりそれをたがゑらぬ事ぞ親ぎしよくしてかゝるけうけはむやくかな手なみのほどを見せんとてちゝせんならの御くびを水もたまらずうちおとす母のぶ女は御覽じてあらあさましの事共やくわこのしんもふかくげんざいのしむもふかとくみらいのし

んもふかとく三世ふかとくにいづれのしんかおやとなり子の手にはかゝるぞやいづれのしんが子とむまれ父のくびをはきるやらんいづれのしんが當母となり跡にてもを思ふぞやかやうにふかくなげかせ給ふ兄弟の者承りとてもちせんならわれらをよかれと思召るまじいさや父のけうよう千人ぎりしてあそばんとて爰のつちかしこの門にてきる程に九百九十九人切で今一人たらずしてせんほうだうへぞ參りけるかのだうの庭にはちすのいけありおりふし萬ごうをへたるかめがこうをほいてぞゐたりけるけんしやう申けるやはいかにばらもんかめは萬ごうをへねれば佛になると申いざや此かめをがいし千人の行にたつせん尤と同じて此かめ引上がいせんとせし時かめも生ある物なればもんを三度となふ我八十三年龜八萬劫必生安樂國龜成佛となふる母のぶ女もこのたびせんならにはなれ給ひ是も又千のいき物の命をたすけてまいり給ひしが九百九十九たすけ今ひと

つたらずしてせんほうだうへぞ參り給ひしがかめの聲を聞召いかにきやうだいたゞ今のかめの聲ばしちやうもんしけるかいやきだぬ也と申あふなんぢらが聞亥らざるはだうりいでく語てきかせんがはちといふははらに七つの子をもつてわが身共にはやつなり七つの子をきうせんにかけん事をかなしみとなへたるもんにて有き八萬ごう必生安樂國龜成佛ととなり七つの子をきうせんにかけん事をかなしみとふるは龜は萬ごうをへねれば必佛になると申に只いまきうせんにかゝり佛體をやぶらん事をかなしみとなへたる文にて有されば人のこのたいないにやどりたねをおろすはかり事は梵天よりもいとをおろしきいのそこなるはりのみをとをすよりもうけがたふてむまるなり亥ろきほねは父のおんしむらは母のおん父のおんがいやしくば八くとなる骨をぬきすてよはのおんがいやしくば八くと名付てあかきしむらをそきすてよ此ことはりにまかせて其かめをたすけよ兄弟承て我ぎやうをばたつ

せんとや人のぎやうをばやぶらんとやあふそれは尤

いはれなし只がいせんといふまゝに此かめを引あげ
てがいせんとせし時は、此よしを御覽じてみづから
かめの前にてかめをがいする物ならば九百九十九た
すけたるいき物が無にならんと思召やあをのれらが
ざやうにはみづがらをがいせよみづからが行には其
かめをたすけんきやうだいとこそ仰けれ兄弟承てた
れもさこそは存すれとてかめをばいけにはなつて打
ものぬいてかゝりしにいかゞはよかるべきぬいたる
たちが三つにおれてのきにけり刀をぬいてかゝりし
にふたつにおれてのきにけり心得たりといふまゝに
大手ひろげてかゝりしに眼にきりふつては、のすが
たもみもわかつ大ちがさうへさつとさけきやうだい
のもの共ははやならくをさしてぞ玄づみける母は御
覽じてなをもおその御ぢひにたすけんとおぼしめし
きやうだいの者どもかたぶさをつかんでひきあげむ
とし給へばむなしきたがさ手にとまきやう弟のも

の共はつゐにならくに玄づみける

は、は御覽じて此たぶさをなににせんとの給ひてこ
くうをさしてなげ給ふ我朝にとびきたり大和國とか
やもとより山とこれが成のころたぶさはろとうにと
どまり道玄ばとなつてじんばのひづめにかゝると承
て候ぞかゝる子をだにも親の御ぢひにはたすけんと
玄給ふにましてや申さん五郎めが男にこそ成たれど
四をんのおもき事存知しゆにく五しんをきんかいし
ねにふしとらにおききんう東にかゝやけばじやうや
のねぶりはやさめかねつくぐとざを玄めしやもめ
がうすのうかれごゑかうぞとないてつげわたるいと
どむぢやうをさへぎればねふりもさめきも消八聲の
とりの八度なくあひべつりくのはつくつげわたると
りの聲なればあふ物に別ありさかんな物もおとろへ
くわういんさらによまらずかいらうの身を持なが
らわかき時につとめずばおいての後にかなしまん今
生てなげかずばみらいを誰かたすけんとかゝるいは

れを存ひめむすに經をよみ夜すがら念佛おこたらず
ぎやうじゆざくわにしては又父のためには御ほだい
さて又母の御祈禱とせつなもさらにおこたらずつと
め行する身なれ共申あぐる人なふしてあくれば御か
んだう又くるれば御ぶけうと承ぞかなしき大ぢをい
たゞいてまします佛の御名をばけんらうぢ神と申大
ぢはおもき事なくて親のぶけうのものゝふむしたご
とに劍となり御身にたつと承るとがありての御かん
だう申ともかなひ候まじとがなくしての御ふしんは
ふびんのいたりこれなり明日も助成のふじのへ御出
あるべきになか／＼伊藤の何がしとてみ亥らぬ物も
なき物をかげとかたちに時むねも御供申て出べきに
かりばのをのゝならひにて尾こしたにごしのながれ
矢にもあたりもしもむなしくなるならばつゑにぶけ
うのゆりもせでみらいのごうをいかせんあはれよ
のなかに親にゑんなきものは時宗にてとじめたりそ
れをいかにと申に父河津どには三つの年はなるれ

ばゆめともさらにわきまへず今生にまします母上に
は七さいの春てらへのぼりしとき見まいらせしまで
にてまかりくだる事もなしちごにてありし時にこそ
よそ／＼なりと申共男になりて候はゝ只一人の母上
にはそひまひらせんと思ひしにあんにさほひ仕うかノ誤り男
に成たるとがによりやがてぶけうとの給へば母うへ
の御すがたをおがみ申事もなしなさけなの御事やた
とひぶけうはゆるさす共すがたをなどやみせ給はぬ
とにかくにこれもおもへばつみぞかしいとま申て女
ぼうたち御いとま申て母うへと涙をおさへてまかり
たつ心づよき母上もあひのしやうじをさつとあけ五
郎がたもとをひかへつゝ道理なりはこわうよにくし
とさらにおもはぬぞおやの身にてわが子を何しに
くしと思ふべきこれもなんぢをおもふゆへ今までふ
けうありつるぞけふよりしてはかんだうをゆるすな
りとの給ひて御涙にむせび縁へば時宗もはゝうへの
御たもとにすがり今は又うれしなきになきければ祐

成もともによろこびの涙はさらにせきあへず御前なかゐの女ぼうだちあらめでたや時宗の御ふしんゆるさせ給ふ事よとさゝめきあひ御さかづきをまいらせらる母上さかづきをとりあげさせ給ひて祐成にさし給ふ祐成は時宗へときむねは十郎殿へとやゝ玄ばらくの玄きだい也母上御覽じてはこわう法しになるならばさきにのむべけれ共男になる上まづすけなりのめとのたまへば三度くんぞほされける母上祐成の盃を取上させ給ひ盃をひかへげにやらん五郎は父におとらぬまひの上手と聞一拍子うたへさかなにせんと仰ければ時宗承て母上の御前にて舞まふべき事共もこれをさいごと思ひければいつくよりのまひよりも心ぼそくぞまふたりける玄づや玄づ玄づのをだまきくりかへし昔を今になす由もがな昔を今になさばやとやゝ玄ばらくうたひしがおつる涙にめがくれてまひをばちうでまひとむる母上つくと御覽じてげにくちにもおとらぬ

舞の上手にてありけるぞや同は此まひを河津どのもろともにみるとだにも思ひなばいかいはうれしかるべきと御らくるいはひまもなし涙をといめ御さかづきを時宗にさし給ふときむね御さかづき給り三度いたゞきはさんとせし時母上御覽じて玄かしさかづきをひかへよみづからもさかなとらせんとの給ひてからあやの御こそでをくださるゝ時宗給はる小袖をきたることでをぬぎとある所にをしよせこれなる小袖あかつきみぐるしく候へ共誰か女ぼうたちへ参らせ候母うへ御らんじて子どものきたるこそでを女ぼうたちへはかなふまじそれこなたへと仰ければそれをながら母の御手に参らせあぐるはゝうへ此こそでを取まはしゝ何と御らんせられけるぞや御かほにをしおほひ玄ばしは物ものたまはずふしげやはすぎしやよひの比十郎にかしたるこそでなり祐成はつねにきてみづからにこそでをかるほどにかすとのみばかりにてかへすといふ事さらになしはかなやみづ

から思ふやう若者にてさふらへばあそびの女いろご
のみにもとらせけるかと思ひしにひんなるおとゝは
ごくみける心ざしこそあはれなれか程に思ひあふな
かをふしんをなせるみづからはわが身ながらもうら
めしや玄ほれたる小袖哉か程玄ほるゝ小袖をみづか
らこそはふけうする共みうらのやへのおばごはなど
やすゝいでとらせぬぞおばごがすゝがぬ物ならば二
のみやのあねごはなどやすゝいでえさせぬぞあねご
がすゝがぬ物ならば御前なかゐの女ぼうたちなどや
すゝいでたばぬぞやすゝぐとみづから見たりせばか
んだうの子也とてうへにはしかりさふらふともない
しんにうれしかるべきにおやのにくむ子共をば一ぞ
くうちのもの迄もにくみけるかやむざんさよ母うへ
涙をとゝめいかに時宗去年の五月比二のみやのあね
ごがかたよりもこそでばしめたるか給はつて候それ
もあねごはとらせぬぞかんだうの子なればさぞある
らめと思ひこれよりとらせたる小袖なり又みしまの

はうじやうゑの比みうらのおばごのかたよりもひた
たればしめたるか給はつて候それもおばごはとらせ
ぬぞこれよりとらせたるひたゝれなりそのゝちは給
はるかたも候はずと申はゝは此よし聞召いま一しほ
の御涙やる方なふぞ見え給ふいかに祐成時むねよ玉
玉あふたる事なれば何とかたるとつきすまじこよひ
はとゞまり給へかし祐成五郎承りいたはしや母上の
玄んしわりなきかなれ共さいごをゑろしめされず
かやうにとゞめ給ふとよはゝの心のいたはしさに玄
のびゝの涙なり祐成しやく取なをし申す我君の此
たびふじのへの御出は日本國の侍の名字なりを玄
ろしめされためなり人數にまかり出にげしゝのひ
とつもとゞめ伊藤が玄そこに去物なりと玄られ申け
んめいのちのかたはしにあんどをなし出入すがたを
今一度みせ申さんがためにて候とかくいつはりさま
ざまに御いとまを申御前をまかり立これをさいごと
思はれければかたみのためと思ひやたてまきものと

りいだしすけなりのうたにかくばかり

けふいてゝ又もあはすはをくるまの

このはのうちになしと忘れきみ

ときむねもかくばかり

ちゝふやまおろすあらしのはけしきに

このみちりなははゝいかゝせん

かやうに二しゆのうたをよみしやうじの間にをし入
こま引よせて打のり門外さしてうつて出る時宗もば
ばすゑまで馬ひかせ玄づくと二陣につくあらい
たはしや母上數の女ぼうたち兄弟の物共が馬うちの
出あれ／＼み給へ女ぼうたち兄弟の物共が馬うちの
れいぎのたゞしさよすけなりはあになればさそくま
み／＼上るくヲ脱スルカ
みしと思ひしにおとゝにいづきかしづかれ心やすく
も有やらん色もゑろくじんじやうなるや五郎ははこ
ねそだちのものなればさぞ有らめと思ひしにあにが
供をする程に月日に照されけるやらん色も黒くまみ
たる也あつたら若き物共にうさみくすみをとらせを

きいで入姿を今一度みるとだにも思ひなばいかがは
うれしかるべきと御なみだにむせび給ひけりげにま
ことわすれたり弓取のものへのかどいでにあとを見
かくす事はなし皆こなたへとの給ひてつねのところ
に入給ふ是をさいごの別とは後にぞ思ひ忘られたる
兄弟の人々こまをはやめて打程にまりこ河につきに
けり折ふし水かさまさる祐成御覽じてふしづや此河
のか程にござる事はなし親の敵にあはんために兄弟
がわたるほどに水も心があればこそまでにござる
色みゆれ時宗承り扱は十郎殿はいづ箱根の權現のゆ
らいを玄ろしめされぬや昔天ちくきやうし國の有主
をはきんくわ大王と申奉る然に二人の姫宮おはしま
す五つや三つの御時母のきさきほうぎよならせ給は
じめてきさきをそなふるに昔が今に至迄けいしけ
ばの中程にうたてかりける事はなし有時きさきの宮
しちやう官人らを召て二人の姫君をこしにのせそせ
本ノマ、うが湊へ下くわのきのうつば船に作籠鹽みつ島の方

へながしうしなへと有しかばあかぬは君の仰なれば
いたはしや二人の姫宮をこしにのせそせうが湊へ下
くわの木のうつぼ船に作籠鹽みつ島の方へ風に任て
つきながす先世此君果報のせうれつましましけるに
や鹽みつ島へはより給はで日本秋津島いづの國めら
がさきへより給ふ浦人是をみてより船有やとて船を
ほどいてみてあればさもゆうちやう成姫宮の一人な
らず二人迄泣ノ假借鳴亥はたれておはします浦人きもをけし
東西へはつとにげちりけり宮たち御覽じて是は鹽み
つ島かととひ給へば日本あきつ島いづの國めらがさ
きと申宮たち聞召扱はうれしき物かないざやさらば
上らんとて船よりも上らせ給姿をみ奉ればすひたい
こうがんたへにしてたうりのよそほひなめならず
まなぶたはふようにてむねは玉にことならずまがき
の菊の露をふくみ楊柳の枝よくせいしがよそをひ
もかくやと思ひ知れたり宮たち仰けるやうはこれをひ
ぼたいのたねとして世をのがれんとの給ひてたけ成

かみをそりおとし日本秋津島をしゆ行し給ひけりあ
ねごりやうさいごせん三年三月と申にいづの山に
上ていづの權現とあらはれて衆生をさいどし給へり
いもうとのりやうしゆ姫も三年三月と申に箱根山に
上て箱根の權現とあらはれて衆生をさいどし給へり
か程れんげんあらた成御神とは申せ共五つや三つの
年よりも物を思はせ給ひし也いはんや我我兄弟も五
つや三つの年よりも親の敵を請取て今又敵にあはん
爲此河を渡る程に權現の哀みてながさせ給ふ涙が涙
の雨と成水の色はにごる也其上此河はいづ箱根の權
現のみたらしにて候へば何かはくる敷候べき一首つ
らねてお通りあれや十郎殿とぞ申ける祐成聞召れて
あら殊しやうや候いづ箱ねの權現の由來を只今承て
候へと水を結んで手水とし伊豆はこねをふしおがみ
祐成の歌にかくばかり

わたるよりふかくそたのむまりこ河

あすはかたきにあふせならまし

ときむねかくばかり

まりこかはかたきのえたにかけつゝ

かゝりあしくはきりてなかさん

とかやうに二首の歌をよみこまをはやめて打程に年
來五郎が住なれし箱ねの寺につき給ふ兄弟のうれし
さたとへん方もなかりけり

つるぎさんだん

さる間曾我きやうだいの人々こまをはやめてうつほどにはこねの別當の御坊じつき給ふいつしかちごどうじゆくに至るまでめづらしやいまかとてたいめんせぬはなかりけり人もまれなるところへ兄弟をしやうじべつたういであひ給ひいかにきやうだいひさしき見えさせたまはぬものかなはこわうどのは男に成て候ハともにくしと更におもはぬぞ愚老もわかきときならばともにおとこになりたひぞ此ほどはうちつづきゆめにもあしく見ゆればまたなにごとかきゝいだしらうぐにそへてこの法師がものおもはんずらんところもとなくおもひしにふじ野へいでさせ給ふこそ心もとなき次第かなはこ王とのは七さいにて此寺へのぼりつゝ十六まではいさゝかもおりのぼることもなくあとふところにそだてをきちしやのうげに

なしたてゝ跡をとはれんためぞかしかくあやなくもわかれで思ひをせんとおらずやくちはつべきむもれ木のつれなくうき世にながらへてきやうだいの人々の親のかたきと討死しきうせんのさきにかゝりなば一時三きのひまもなくしゆらのくをうくべきにあとをとふべき法師の一人ありとおぼしめされ候へとてくろざやまきのかたなをばすけなりにたひ給ふ兵庫ぐさりの太刀をばときむねにこそたびにけれ別當の御ぢやうにはそれ人の持たからいはれをきかねばなにならず時宗にまいらするたちのいはれを語てきかせ申さん昔こんぢくよたうさんにれううんといふ瀧ありかのたきのさうがんに三尺のくろがねのまるかせありて日夜に人をなやますあるときしやりふんといふものいのり出しえみに八尺のなぎなたに打たてゝもつたりしをかううんといふものぬすみいだしこれをたうへわたすたうより日本へわたさるゝならのみかどの御ときかゝるめいよのなぎなたをたちに

せむとのせんじにてかちの上手をめさるゝにおくの
まうふさと三でうのこかちとかれらはめいよの上手
とてこのなぎなたを二つにわけ二人のかちにあづけ
給ふおくのまうふさは三年にて三尺に打てまいらす
れば三でうのこかちは三年三月にて二尺七寸にうち
たてゝ参らせ上のみかどえいらんましゝてにくい
かちかないかさまにもこかちはかねをぬすみたりと
てあらむざんやこかちをつちのろうにをしこめ給ふ
籠のうちのすまるなかゝ申ばかりもなしさる間ま
うふさがうつたるたちをばまくらがみと名つけて一
だん上にたてられたりこかちがうつたるたちをば寸
なしと名付て一だん玄たにたてられけりこかちあま
りのむねんさになむや九萬八千のかちの神たちこか
ちがあやまりなきところのその玄るしをみせ給へと
ひるいていきうしかんたんをくだきいのりければま
ことにかちのしゆごじんなふしゆありけるか寸なし
さやをはづれてまくらがみにながれ懸てちやうとき

るまうふさがうつたるたちもけしやうのかねにてあ
るあひださやをはづれてわたりあひをふつまくつ
さんゝにたゝかふたり御てんのうちしんどうすみ
かとをはじめたてまつりくぎやう大じんこれはいか
なるものゝけぞとあやしめ給ふところに寸なしと枕
上さやをはづれてたゝかふたりみかどえいらんまし
ましこなたはまくら上かあなたは寸なししかあれはい
かにとおほせ有御目をさますばかりなりやゝもす
ればまくらがみはうけだちになつてぞまいりける
猶も寸なしむねんにやおもひげんとあるところへ
をつつめ我たけにたちくらべきつき三一寸きつてす
てもとのさやにぞおさまりけるみかどえいらんまし
まして寸なしをひきかへてともきりにくわんをなる
なノ下さチ脱スルニアラズ
さてこそこかちはあふつちの籠をばいだされけれそ
のゝち二ふりのたちたゞのまんぢうの御手にわたる
こかちがうつたるたちにてとが有ものをめしよせく
びを切て見給へばあまりにはやくくびがきれひけを

かけてきれければひげきりにくわんをなるまうふさ
がうつたる太刀にてとがあるものをめしよせくびを
きつて見給へば餘りにはやくくびがされひざをかけ
てきければひざきりとくわんとなるそのゝち彼二
ふりの太刀よりみつの御手に渡るこかぢが打たるひ
げきりにてをにの手をきりければをに切にくわんと
なるまうふさがうつたるひざきりにてへんげのくも
を切ければちくさりにくわんとなる其後二ふりの
たち八まん殿の御手にわたるそれよりもためよしの
御手にわたりけるそのころためよしのちやく女にた
つはらのひめと申て熊野にこそまし／＼けれかのひ
めくま野にましますいはれは後白河のほうわう熊野
さんけいまし／＼てせうじやうでんに籠らせ給ひ此
やまにべつたうはなきかとたづね給ふ此やまひらけ
て七百餘さいのいまに至るまで別當は候はずとこた
へ申おりふしなつごもりしてはなつみける法師あり
ほうわうえいらんまし／＼てこれをべつたうにさだ

めよとかのひじりを別當に定め給ふ御堂寺のべつた
うはおそんにつたへてもつべきにつまなくしてはか
なふまじつまをかたらひたまへとてためよしのちや
くぢよたつはらのひめをべつたうのつまにさだめ給
ふためよし此よしきこしめしなにがしがむこにげん
ペい兩家をえらみ弓矢を取てきりやうの人をむこに
とらんと思ひしにゆくゑもゑらぬ法師をむこにとる
こそむねんなれとふけうして音信なしかゝりしとき
のおりふしみやこに事出來たゝかふべきわざはひあ
りけうしゆんつたへきゝこれはかんどうのむこなれ
どしうとのせんどなる間一見つぎ見つがんとて三つ
のやまには八しやうじんやまぶしなどをもよほして
きの國を打立てよどやはたに陣を取てかりをたか
せひかへたりためよし御らんじてあれほどの大せい
はいかなるものぞとひ給へば爲義のちやくしむこ
たなべのべつたうけうしゆんばうとこたへらるため
よし聞召さもあれけうしゆんはたがすゑぞととひ給

へばさねかたの中將の末孫也とこたへらるためよし
聞召さてはさるべき人にてありちゝはあほう親王と
て世にかくれなきぞくしやうなりためよしがために
はくわぶんのむことおぼえたり此時たいめん申さん
とてたなべのべつたうけうしゆんばうにたいめんし
ちやくしにつたはるつるぎなればひけきりをよしと
もにちゝうきりをたなべのべつたうけうしゆんはう
にひき給ふふけうこそゆりんめ劔給はりけうしゆん
は熊野に歸り給ひけりかくて壽永のあきのころげん
べい兩家たてをつきたゝかふべきわざはひ有けうし
ゆんの給ひけるやうはわれはすでに法師の身と有て
劔もちてもせんなしとて義經にまいらせらる此つる
ぎのとくによりおごる平家をほろぼし三しゆの神器
ことゆへなくみやこにかへしおさめ申關東へくだら
るゝかぢはらざんそを仕りさかわの宿よりこのきみ
二たびみやこにのぼり給ふがこのやまにあがつて御
兄弟の御中のわびやうのいのりのためにとてごんげ

んにきしんある此とき申おろしてめん／＼にたてま
つるまぼりのためとおぼしめせ明王のけんさくは萬
里がほかのてきをうち四天王のゆみ矢は四まのいく
さをふせがんため此劔すけつねがくびを討べきつる
ぎなり是をさかなに今ひとつまいりて御立候へとし
ゆずさら／＼とをしもむでしやだんを禮し給ひけり
別當の心中末たのもしく見えにけり兄弟の人々はこ
ねのてらのいとまごひ野七里山七里たけ七里廿一里
をゆきすぎふもとの宿でこりをかきやしはのみやこ
にまいり七番づゝのかさかけあふぎをたてゝあそば
ししよぐわん成就といのつてあひさはのはらにいで

給ふ

夜討曾我

去間右大將の御れう信濃の國みはらのゝ御かりすぎ
其後あひざはのはらのいとがり三日へて駿河の富士のすそ野へ御出ときこえけれ御れうの其日の御亥
やうぞく青狩衣にたて鳥帽子をばな色毛のいちもつ
に白鞍おかせてめされたり御馬添には五郎丸赤地の
にしきのひたゝれをくだし給ひてきるまゝにちから
は八十五人がちからもえぎのはら巻を着ごめにして
君をゑゆごし申すちゝぶどのいしやうぞく鷹すえて
御とも也和田の義盛狩袴束鷹すえて御供なり千葉お
山うつの宮何もかりばの出立にてたかすえて御供成
惣じてたかは五十本犬は八十四疋犬のすゝたかのす
すくつはの音がさゝめひて上下六萬六千餘騎さしも
に廣きふちのすそ野に駒のたちどはなし抑かのふぢ
山と申は仁王廿七代の御門けいたい天皇の御代せむ

き三年三月十五日に一夜がうちにこんりんざいより
ゆゑゆづゑたる山なりあら面白の名山や南は田子の
浦波ややかぬ鹽谷屋ノ假借のけふりたつにしは海上濤々とし
てきわもなしさればよの山を下もにするがのふぢな
れば雲より上の八えうは皆金銀のいさごにてまなこ
につもる白雪の所々はむらざえて嶺には煙たえもな
しふもとにかすみたな引て山のおひかとうたがはる
山は八ゑう九尊薦歎にてりやうかひをへうせりみねには
九じやく明王の住給へる池有ふもとにせんげん大菩
薩のいらかをならべてたち給ふせうじやうけんごの
れひちとしてせつしやうかひをきむだんしれうしの
いらぬやまなればかせきの數は多かりけり三千餘人
のせこのものせんてうをまつくだりに岩をおこし枯
木をたゝきおめきさけんでかりくだすおほくのかせ
きけだものすそのをさしてくだるわかき出たちあひ
てをくそわれ先にと是をいてとるこのたびふぢのゝ
まきがりに東八ヶ國の大名小名あるひは鹿の四かし

ら五かしらといめきみの御目にかゝり御所領給て皆所知入ときこふる其中に曾我兄弟の人々は亥へに心のいらざれば鹿の子の一つもといめすいかにもしてかたきすけつねにめぐりあはでとたくみけるに爰に弓手のそばのかしわぎはらの中を見るに討手のあまた有中に四十斗成おとこひようもむの弓小手さし夏毛のむかばきひつこうで三つある亥へにめをかけてかりまたつかんておつかくる時宗たぞと見るにあはすけつねと見るからに氣もそぞろぎ身ふるひうとん花も海中にひらけるよとうれしくて亥へ矢をそろりとすて頼しなかざしぬき出し弓をふせてうちつがひ矢つぼはおほしと申せどもわれらが父の川津殿おくのゝかへり有ときくらの前わのはづれむかばきの引合をいられ給ふときくものをむくひの矢なれば祐經をもおなじ矢つぼに討てをとし川津が矢目はたがはずと諸人に見せ十八年が間のちそくはおなじからざれどかりばと矢目はたがはずてばひびきたゝけば

なるおもひは餘所になのりけり身のせし科の報ぞと亥らせばやと思ひはやあらはれていでけるがやまで亥ばし我心五郎一人無念をはれ十郎殿をむなしくせば今生の恨のみならずくわうせむ迄もはれがたし父母けうやうの矢ならば兄弟して一矢づゝとぶらふにぞとおもひあたりを見れば寺に瓦一本ノマ一つへだて十郎殿餘所目してこそおはしけれ五郎あまりのうれしさに鹿こそとをれ十郎殿御覽せられてさうか鹿ぞといふに心得て東西をきつと見るに瓦を隔たる敵なれば見つけぬは道理五郎餘りにたえかねて夏山や亥げみの鹿は射にくふさうそのをにあがつてせこにあひてゆきがたをとはせ給へと申時さては此瓦のあなたにかたきのあるぞと心得てそばをのぼりに駒かけあげてむかひのはらをきつと見るに實も祐經爰に有亥かもあたりに人はなし天のおしへ佛神のあたへ給ふとされしくて十郎はあになり一の矢をば何者かさまたぐべきとおもひてうつぼの底のひさうのとめ矢をとつ

てからとうちつがい矢さきをさゝへはづかへしちやうの矢をと心得敵のやつばばかりに目をかけて馬の足は見ざりけりこゝろははやれ共人に色をさとられじとこかげにすゝめあゆませゆくに乘たる馬は國本よりもかふはまれなりのり玄げしよはき馬につよく手綱を乗程にとあるふし木にむねをつきびやうぶを返すごとくにはやまつさかさまにどうとおつ五郎餘りのかなしさにいそぎこまよりとんどおりすけ成をとつてひつたて申馬をこさんとひしめくまに祐経名馬にのりたれば谷みねへだてゝうちのびぬ行方玄らねばいづくをとしてたづねてゆくべき方もなし兄弟の人々たから山にいりながらむなしく歸風情してうたてやみぬる兄弟の心ざしこ無念なれ助成涙をながしつゝあゝらゆゝしの敵の果報やうたてしの我等が運めいや候果報しみじき祐經をねらへども不叶こゝまでのきはなればいざや人目をつゝみ腹をきらん時宗承り御誕のごとく弓をれ矢つくるとやらんも

かやうの事をこそ申べけれさりながら爰は人目を乞ふ候へば閑所をもとめて御自害あるべき也と申兄弟つれて歸るちゝぶどの和田殿此よしを御覽じて重忠仰けるはあふあれゝ吉盛御覽せよ川津が子共のあり様を君に捨られ申みなし子と成はて中々とんせいろうきよもせでおやの敵やうたんとて年來つきそひねらふぞや此狩くらへひ見えがくれの御供申て候をあふ御とものためにてはよもあらじびんぎよくば敵にながれ矢一つとこゝろざす望にてこそ有らめと思ひつるにたがはずして唯今の有様は目もあてられぬ風情なり秋のかりにかりまたをさかさまにはぐるならひは候へども弓矢とる身の心ざしまことやさしきものかなあのとのばらがぶんとして祐經をねらふ事はたうろうがをのとかやちゝうがあみにあひおなじ我等もわかき子共の日數多候へば明日は身のうへにてや候らはすらんいざやかれらにこゝろをそへゆふさり夜うちにせさせん尤玄かるべしとてむかばき

つゞみうちならして重忠發句をこそ出されけりなつ
山やおもひ志けみのこがるゝはよし盛頓てつけたま
ふこよひふち野にとふ火もえたつ曾我兄弟は承りか
り場の庭のゆいすてはものさはがしき次第かなさり
ながら我等をとぶらひ給ふぞやよし盛こよひふち野
に飛火もえ出すとあそはしちるはゆふざりの暮程に
よううちにせよとの言葉也それをいかにと申に飛火と
いへる心はむかし大唐に諸國の武士をめさんため町
のさつみと申て町に一づゝのたいこをかけはうくわ
をそえておかれたりだいりにことのあるときはうく
わをあげたいこをうてば遠嶋遠國も一度におこり即
時に都へはせ上り帝都を志ゆごし申也此はうくわを
ばなづけてとぶ火とこれを申なりひやうかくの時の
かゞり我朝にて夜うちのときたいまつと云事は此御
代よりもはじまりいこくの事をゆい出しわれらに
心をそへたまふは狂言ながらまことなるべしいざや
我等もつけ申さむとて十郎殿とりあえずうへもなき

戀のけぶりのあらはれて時宗やがてつけてけりあま
の岩戸を明てとへ君重忠義盛聞食さてはこよひをか
ぎり明なば跡をとぶらへとやはれなりいたはし、
よにはゞかりのなかりせばとぶらひ矢をもいつべし
となみだをながし日暮れば野宿にかへり給ひけり此
人々のうれしくて柴おりむすぶ草やかたになくく
かへり給ひけり馬より飼鬼王だう三郎と人なみな
みには下ちし給へ共野邊の草より其外は何をさしか
かふべし余のや形にはみち／＼たりと申せども曾我
兄弟の屋かたには水より外はなしかくてゆふざり敵
にあふべき身がつかれなをさでいかゝせんまちやへ
ゆきて宿とれだう三郎承と申處へ長もち一ゑだかひ
てきたる是はどれよりぞちゝぶどのより曾我殿へ御
ざつしやうと申あふめでたしかき入よだう三郎取そ
なへける處に又ながらもち一ゑだかいてきたる是はど
れよりみうら殿より曾我殿へおざつしやうと申すあ
ふめでたし此間人の酒をえて呑て其振舞もなかりし

にわんれいこゝにて有べしそがとはた野は隣家まね
きよせて玄ばるに居三々九度五度七度情をかけても
りながすもとより祐成時宗は用心なれば醉ざりけり
うまかひつかれなをして酒も過れば十郎殿時宗にい
とまをこひけこ見むために出給ふ太刀脇ばさんて敵
のやかたのけこを靜に見て通るある屋形をみてあれば
ば明日は鎌倉入あるべしとて馬のゆあらひにわのり
してひしめく屋かたも有又あるやかたをみてあれば
たいこつゝみうちならしどめひてあそぶやかたもあ
りかく見てとをりければ餘りこくうに存東へ廻り家
家のまくのもむをぞ見たりけるくぎぬき松かわ木村
こ此木村こは三浦の平六兵衛吉村の紋なり石たゞみ
は玄のゝ國の住人ねんいの太夫大彌太あふぎはあ
さりの興市舞たる鶴は井原右衛門いほりのうちにふ
たつかしらの舞たるははするがの國の住人天智天皇
の末孫竹の下の孫八右衛門井たら貝は岩長たうあみ
の手はすがはとうおほすながしは安田の三郎月に星

は千葉殿からかさはなごやどのうちわのものは小玉
たうすそぐろにいろこ方は北條殿の紋なりつなぎ馬
は相馬おりゑばし立鳥帽子大一大萬吉白一文字は山
のうちの紋なり十文字は島津の紋車ははまのれうわ
うの末孫佐藤のもん竹笠は高はしたうきつかうわち
がひはな空穂三本がらかさ雪おれ竹二つへひしうさ
見の左衛門二つがしら右どもへ小山のはうぐわん三
つがしらの左どもへはうつの宮の彌三郎友綱かぶら
矢は伊勢のみや方水色はときどの四つめゆいは佐々
木殿中玄ろは三浦のもんちゝぶとのはこもんむらが
しろは御所の御紋でありこゝに庵のうちにもつかう
あり／＼と打たる紋あり是は我等が家のもんぞと思
食ひとしほなつかしく十郎殿時をうつしてたゞせ給
ふかゝりける處に祐經がちやくし犬ばうといつしわ
つばまくの隙より見つけ父の御前にまいり十郎の御
とをり御申有と申すけつねきいてやあ十郎とはたが

事ぞあいざは十郎かぶんごにうすきの十郎がかつまたに遠江の十郎が此たびの御とともに十郎のけみやうその數を志らすなんぢはこくう成事を申もの哉と志かれ時ならぬかほにもみぢをさつとちらしさん候いつぞや三浦殿にて花見のけうのありし時舞まわせ給ひたるさがみの曾我の十郎の御通りと申すけつね聞て打わらひあう此もの共がおうち伊藤こそ人のさかゆるをにくみほろぶるをよろこびし人のすえなればかやうになりはて、候ぞや昨日谷ごしにてあれば玄たひ曾我殿はふそくの人とおぼしくてやせたる馬にこしばりぐらざうにんの其中に打まぎれゐたるありさまは山田にたてるかゝしも是にはいかでまさるべき國よりもようのものもたせずつかれにはのぞんず推參のためかよふで一つ呑せよ承と申てまくつかんでうちあげ十郎の袂にすがり御入あれと申それはかたきのちやくし犬ばうなり尤とどうしてまくの中ゑぞりにけるすけつねかたひざをおしたて玄

のびに刀の柄に手をかけわざとかびんぎさうかこれへくとしやうする備前の五藤内此由を見るよりもすけつねの志きだひはやうある人ぞとおもひたゝきやくはこなたへとしやうするあなたへなをらばやとおぼしめすがいやくあれば他門にていせんより座上すこなたは一門の事くるしからじとおぼしめしうけつねがめての座敷になをらせたまふいまだすけ成の左右のひざなをらざりけるにすけつねが志よたいめむのことばこそ中々以て無念なれまことやうけたまはれば面々それがしをおやのかたきとのたまひてねらひ給ふとうけたまはるそれは以外のひが事也御身の父のかわづどののよしなき事によつてうたれさせ給ひて候を永々敷は候へども語てきかせ申さんによく御き候てつねは御入候へよたとへば賴朝十三にて伊豆の田中へはひ志より伊豆さがみの人々よりあひてひやうぢやうをするやうたれか此きみの父左馬のかうのとの御恩にあづからぬ人やあ

る世に有人をなぐさめ申はそれはときのきら世にな
き人をなぐさめ申さんこそさぶらひの志ゆんしにて
は候へ尤とどうして山ござえよりも頼朝を伊藤のたち
へいりまいらせて三日三夜のさかもりはことにこえ
たるあそびなりあげくにはわか侍にはのかりにを
りたつておごへをあげてまりをけきみの御めにかく
る時よりとも南を御覽じて山の高く見えたるはいか
なる山ととひ給ふ若侍承り山の見えて候はかしわが
たうげと申也たぎつてたきのおつるをば松がえがふ
ち共申さう伊藤川の水上かまだかふちとも申也たい
せんし山につゝいて候めいよの鹿のかよひ所鹿をか
らせて御見物我君と申されたり頼朝聞めし鹿は所望
との給へば伊豆さが見の人々赤澤山にて三日のかり
くら心ことばもおよばれず後には人々なごりおしみ
のさかもりする玄ばるの事なればこゝに座敷中に青
めな石のたけ五尺ばかりに見えたるをさがみの國の
住人に本間が年は十九にくい石の有やうかな座敷の

わづらひすてんとて此石をおつたてもちは持て候へ
共たもつ所を忘らずして本のざしきになをりけり同
國の住人大庭が志やでい又野の五郎かけひさ此よし
を見るよりも居たる所をづんとたちてひたゝれぬい
でふわとすて此石をおつたてちうにづむとさしあげ
座敷を二三持てまはり申候て是程の石をばよのつね
のつぶてにこそ打べけれどもたぬは國のなをりとては
るか東へすてんとすかゝつし所に同國の住人岡崎の
惡四郎よしさねの嫡子さなだの與一よしさだ其比年
は十三也父の代官にやさしくみゆる花うつぼけてう
のひたゝれあかねのやがけ志ちくのむち足かふちな
るこまに乗りはるか東を打てとをる又野きつと見て
爰詮をとをらせ給ふをばなどとのと見申たるが此
石をまいらせんす馬の上にてめされうすかなふさな
だ殿とぞかけたりける眞田きいてあらことゝもなや
又野殿そもそもかさよりなぐる石を下にて給るおこのも
のやわかさうと笑てとをる又野此よしみるよりもふ

かくなり眞田どの三浦にとつてはふる郡へん見の七郎岡崎の悪四郎おうたうみさき杉本御一門の中に岡田かたはきこふるきりやうの仁と承て候が此いしめさぬ物ならば其は三うらのなむにては候はぬか如何にくとかくる眞田無念に存すればいそぎ駒よりとむでおり竹笠ひたゝれをはらりとかなぐりすてそれほどの石をば二つも三つもとくなげよとらんと申のとにぶんざう御袂にすがりつきこはいかなる事を仰候ぞめのとをや御供申ながら此いしもしもめされそんずるものならば大殿よりの御かんどうは一かうぶんざうめがかふむらふするにて候になふいかなる事とけうくんするさなだ聞てやあけうくんもことによるぞ三うらのなむとかくるは無念成そこはなせと云まゝにひかふるたもとふり切て此石を持たりけりちたいまた野はおこのものゑいやつといふてなぐる五尺餘りの大石が花のごとく成興一が上へひらめいておつるを弓手にあひさけきつと取てめてのかたに

たうと置てなむぼうとつたぞ又野殿いでく此いしをやがて歸し申さんとゑいやつといふてなぐる又野弓手にあひ附所は取て候へ共力のおつるかるしにはるか東へすてたりけり伊豆さがみの人々は此よしを御覽じいや又野十人が力をさなだは持て有やとて一度にどつとぞ笑ける時にとつて眞田殿はあつぱれ弓矢の面目哉去間又野は諸人にどつとわらはれちつとも科もなき四方をはつたとねめまはし面々は何を笑ひ給ふぞかゝるちからわざは時によるぞすまひを取て伊豆さが見の人々をすまひのあひてにもち申かた手をはなつて百日百夜うつともやはか笑はれ申べき伊豆の人々きこし召こは無念なる次第哉同國のものがわたりあひいしをなげてとりそんじ他國をかくるはいはれぬ所あふやがて心得たり伊豆は四郡相模は八郡小國とおもひなして伊豆をかくるはどうりいづさがみはねきりのすまふにてあるべしすまいをめさぬものならば弓矢參らんとぞひしめかる、伊豆がた

には狩野介もち見つきがみ方には土肥の次郎二人の
ぎやうじに出給へばすでにすまいははじまりけり先
一番に宇治河の十郎よきすまい九番うつて入岩や川
の彌二郎十七番打て入ねぶかは廿三番うぬ井の太郎
九番打又野此よし見るよりも君の御座にて候にいつ
までそれがし出ざるべき唯今罷出ひとりころびして
あそばむといふまゝにすまひのこしらへおもふさま
に仕り場中へおどり出げにもちせうの如くよかつし
すまふがつつと出ればつきたをしとつと出ればはた
とほけたをし手にもためずしてはや五十九番打たり
けり今は諸方のすまいが盡て候はぬかすまひつきて
候はずはうちどめはかけひさつうぞおいとま申べし
と云かゝりける所にと井の次郎さねひらはさがみ方
のぎやうじにてましませば又野があたりへたちよつ
てあつぱれすまいやとつてきひて目ばやきすまい心
もきひたりからもつよしげにやすまいつくればぎ
やうじ出てころぶよしうけたまはれ共彼殿年寄せ給

ふあはれ土井が年を十も廿も取てのけたらば又野殿
と一番花々と參らぬかとてからくと笑ひ給ふさる
あひだ又野おとの返事をこはく申すなんぞう土肥
殿座敷座上にて盃のとつくめされんこそおとなにて
はましませ共かゝるあそびはらうにやくをきらはぬ
習にて候へばたとひ土肥どのにてもおわせよ御出候
へ花々と一番參て老のなみにかしわがたうげのあか
土を付申さむと申土肥どのきこしめされてやあわか
いやつに言葉をかけはぢかいたりとおもはれけれど
もものゝ上手にてましませばさあらぬていになし給
ふ其比伊藤のひめを土肥に置土肥どのゝ姫をいたう
におかるゝ伊藤御覽じて此邊の河津はなきか土肥の
次郎さねひらの腹立給ふ色をば見ぬか是非川津がと
らずはいとう出てころばんとぞくるはれける河津承
せんなさよとは存れども父の仰にてある間をつとこ
たへて御前をたちすまひのこしらえひしゝと志つ
くろひ又野を引たてゝつれて場中へ出る時にや引立

る所にて人の力は志るゝものをむげに又野はよはかりけりと心の内に存ればかた手をはなつて場中へ打ていづさがみの人々の志んゐのほむらを止ばやとおもふがいや／＼名人にふかくをかゝするは却而てかわづがふかく也取てのやうを人々にみせばやなんとおもひつゝはらりとひらき手さきを取てくるりとまはるすまひの手にはむかふつきさかつきかもが入くひ水車かくればはづしいればあますたうくわのせちえの取合いさむ心ははるごまのたちといめぬる風情して四十八手の取てをは百やうにみたしたれば伊豆相模の人々はおもしろやとさゝめかるゝいつまでと存れば又野は人ぎわへかつばとつきたをしとつて引立をくる時かくてもいりたらばいしかるべき事共をうてたるあとをきつと見てまゝまじきすまひなれども爰成木の根にけしとうで又野は一後のふかくをかひて候あにの大庭が是をきゝすまひのかちまけ志らね共木の根は是に有といふ伊藤殿御覽じてやあいか

にかはづよの常の辻すまひなどこそ人ざはなむどと申事は候へすでに又野はばんどう國ハチ脱スルカにきこえたるすまひの上手ものその數にてなけれ共坂より東三十三ヶ國が其中にすまひを取て名人とよばれ申は身のふせうまつはな志ろにせうぶをつけよ河津とぞいかられける河津承人のなさけのある時こそ我もなさけはこめらるれとる所とおもひてはらりとひらき手さきをとつてくるりとまはる又野河津にふかくをかゝせんそのためにくみいりにつつと入あましておくれをむすと取て前のつゝ一志め志めてかたてをはなつてつゝけて二番とう／＼と打たるはあふ中々いきたるかひぞなき兄の大庭がこれをみてすまひをとるは常の事片手をはなつて打方はそれは相手をいやしむ所いきては歸るまじなど云土肥と伊藤がひとつに成てやうないはせそたゞうちころせとひしめかるゝすでに弓矢に成べかりしを頼朝如何なること、御けうくんあれば御誼そむきがたきによつてゆみやはとま

りけりそのすまひのいこんによつて御身の父のかわづ殿をばいはう山のこなたなる赤澤山のふもとにてあにの大庭がうつた共申又おとゝの又野が討たる共申其比それがしは都にて傳へきくこはむねん成玄だひかないそぎ國にくだり大庭がたちにおしよせ一矢いばやとねらひしに御身のおうち伊藤どのそれがしが代官の玄わざなりとの給ひて國の留守にとゝめをきおほみやはたをめしとつてりふぢんにきられ申すうらみの矢をもいたけれども一つは養子の父母ふたつにゑばしおや三つにくふ四つに玄うとゝおもひながらもさてありぬそれこそあらんめとがもなきすけつねを親の敵とねめんより常はさし入給ひて駒に水をけさするならばらうどうとはよもいはじ家の子とこそいふべけれ馬なくは面々さかへに多きあら馬を一疋取て乗ぬかひたゝれなくば犬ばうがぬぎかへをとりてき給へやけふよりしてはすけ成と祐經と中にい玄ゆはあるまじいわゆのさかづきさすぞとて益

に一つくみ十郎殿にさひたるは座敷のはぢとおもはれて無念たぐいはなかりけりあら口おしやとふにつけらさのまさるとは今こそおもひ玄られたれおんしておかむ家の子にせんなむどゝいはれては親の敵ならず共玄なでは何のゑきあらんくるだるさけをすけ經がおもてへさつといつかけ一かたなうらみともならばやとおもひしがまで玄ばし我心時宗一人残しをき同じよみぢといひながら本望をばとげさせでざうひやうの手にかけうき名ながさせんする口おしさよとやせんかくやあらましとくんだりしさけをばほしかねてぞみえにげる二人のてうは色をみて御盃のながもちはおさかなの所望かや座敷にてうの有ながらいざやうたひてまいらせん玄かるべしとて今やうなむどうたひけり祐成思ひなをしつゝ時はかはると日はかはらじすなはち今夜二人づれようちにせんす敵也此世の中のおもひでに何共申せとがむまじいされ共心ぐるしきは五藤内がみるめは西國武士の見るめ也

二人のてうのきくみゝは東國の人々のきこしめされん所もげむざいおやの敵をまのまへにおきながらかかるゑさんをいはせつゝきゝながらへてたちぬるといはむ後日の恥しくよし／＼それもゆふさり今のはちをばすゝぐべしさのみ座敷になかいし無念度々重り處々の死をして時宗にうら見られむよりたうして立にこそとおぼしめし三ごんくんで請ながしゆふさりは御番申度候へども北條殿の方様へ申べき事の候明日五郎ともないまいりて御めにかゝらむと座敷をたちて出様に敵の屋形のけごを心ゑづかに見すまして草やかたに歸る去間時宗は草やかたに有けるが十郎殿を待かね申太刀おつとり出るかどの邊にて參あふ痛はしや祐成ゑほ／＼として出來たまふ時宗見參らせて十郎殿の涙の風情は何事をおなげき候ぞや助成聞られて某がなみだの風情別のゑさゐにて候らはず敵祐經に對面し初對面の言葉のこはかりし時さしちがへてとにもいかにもなるべかりしを御へんにな

ごりおしうてつれなくいのち長らへ二度あふたがうれしさにさてぞなみだやこぼるらん時宗承りあゝら有難の御誼や候ゑひは上より下るとはいまこそおもひえられて候へかう申時宗ならば助成の御事をばゆめにも思ひ出すまじいたまにあふたる敵なればとおもひざしきになをらぬ先にさしちがへとにもいかにも成べきものをおぼしめし出されて是までの御出はありがたふこそ候へ早々敵のやかたのてい御物語候へ承度候祐成聞食れて安きほどの事出々語て聞せ申さむさてもよりともの御くわほういみ敷御座あるによつて北條殿の給りにてうすひはたに十八間にひたゑろのまくをうつてふじおろしにもませたるはたゞはく雲の立たるにことならず國々の大名にするがの國に吉川舟越高橋たう遠江の國によこちかつまたるの八郎參川の國にあすけ中將星のきやうめひ尾張の

郎近江國ににしごり佐々木の山本柏木木村の源藏成綱やかたをならべひつしと打て君をしゆごし申なり
いせの國には加藤の彌太郎伊賀の國にはつとりたう
大和の國には宇野が一たう三千餘騎つくし大名に大
友玄よきやう菊地原田松浦たうこれたうこれすみへ
つき山すみやかたをならべひつしと打丹後の國には
たなべの小太夫おほちのすへたけ若狭の國にはある
のかうけん玄やうくに政が末子あをの太郎鳥羽の兵
衛越前の國にはあまや白崎堀江本明加賀の國にはと
がしのふんせい林の六郎井上左衛門能登の國には土
田武部越中の國にはいしぐろ宮崎南部の殿原むく田
の兵衛宮路の左衛門越後の國には五十嵐の小文次信
濃の國にはにしな高梨うむの望月くはらきのあんど
うじあむどうないねづの甚平これゆき上の宮のすは
のはうり下の宮のすのはうり深山がくれのかいげ
んし一條板垣南部下山へん見武田小笠原下野の國に
はなす玄ほの屋宍戸佐竹の人々上總の國にはいはう

いなむちやうふくちやうなんあひろ河か見うさ山野
へ下總の國には安さいかなまりまるとうでう武藏の
國には横山たう平山たう玄たうたんのたうせいの
たう小玉たう七たうこれたうそうじて四十八たうの
人々は屋形をならべひつしと打て君を守護し給ひけ
りさが見の國には土肥土やさむさ岡崎さてもふとこ
ろ島山のうちの人々ひたはらきの者どもくたんのす
けつね君のまちかきやかたには我等か一ぞくに武州
にちぶ殿相州に和田殿諸司の別當に梶原平三景時
其外は千葉小山なし田星田いん田とん田すは内の殿
原やかたをならべ打つゝけ君を玄ゆごし申也敵のや
かたは八千八ながれなり馬はついち人はらんぐいき
まんこくのきわうとらせつこくのらわういやおにを
からめしはくたわうつなきむときやうやう田村とし
ひとよごしやうぐん二さうをさとる人なりとたやす
く此陣でおやの敵を討取てやすくと出ん事おもひ

へんせつはたらふた言葉にはなをさかせ二時計物語
おくゆかしうそきこえけれ去間時宗は十郎殿の御物
語大息つるてきゝ居たり扱は案内日雲なし夜更はお
もひたちぬべし宵の間の慰に文共書玄たゝめて古里
へ言傳む玄かるべしとてやたて卷物取出しあぶり火
すこくかきたてありしむかしのおもひより今のうき
身のはてまでをことこまかにぞ書れける十郎殿はと
もすれば大礎の虎が名残を書れけり五郎が筆のすさ
みには箱根の別當の御事さて其外は何れも同じ文せ
うなりけり時宗がよろこび申けるはふしきに最後の
時大かた殿にまいりふけうゆるされ申父母けうやう
の命を富士のすそ野に捨置骨を野ぐわいにうづめど
も名をばん天にあぐる事父が子たれば取傳ふ家引お
こす弓矢の名れうもんに骨はくちながらかもんの名
をうづまつ^{すの誤歟}きよくのこゑはさん玄ゆちく遠島ま
でくもりなしひそかに是をおもむ見るにたうをにぎ
りけんをたいし弓馬の道にたづさはり戦場に出て命

をする是かうめいのためなりきほほ玄そねむのなげ
きにはかなしみを三五の時是をうけ十八歳の玄うた
んは唯二人のみなげきあり年たけ月日さつて後時に
けんきう四年五月のするの八つの夜天はくらしと申
せ共今宵晴候なり助成時宗判と書とやめ次第の形見
を取あつめ筆をして、ぞなきにけり助成には鬼王時
宗にはだう三郎と二人の者を召れ文をば御上へ参ら
せよ弓空穂をば曾我殿へはだの守とびんのかみをば
箱根の別當の御方へ馬と鞍おばわどのはら恩なひ主
の形見ぞとおもひ出さむをりふしは念佛と申て得さ
すべし態文にはかゝぬぞ御上にて申べき事は給はり
たるおんぞを身にまとひ敵とあふて玄なん事いき
てとかやうに着て出つると語り申せと云ながら又は
ての面目玄にての名只さいごに母上を拜み申心地し
ら／＼となきにけり鬼王どう三郎もなみだにくれ御
返事を申かねたる斗なりさのみなみだにむせびても
はかりおほき事なればしやく取なはし申けるはい

づくにていか程見おとされ申かゝる御誕の下るぞや
兄弟の人々のあれほど多敵うたんと出たち給ふ所に
たゞ二人ある下人がみすてゝ歸る法やさうああらう
らめしのとのゝ御誕やたとへば仰に玄たがひかたみ
のものを給りて曾我ふる里に歸りつゝはじめて人を
たのも其ふだひの主を見すてゝ玄なぬほどゆひが
いなしが何の用にたゞむとてたれやの人が目を懸む
たとひ入道仕り世をいとふ身と成たりと恩を玄らぬ
はつはらがだう玄んいかゝあるべきとう玄ろゆびを
さゝるゝならば出家してもめんぼく有まじ上らうも
下らうも玄ぬべき時に玄なねばいきがひはさらに候
はずいかにやとの鬼王まるようちの御供をこそ申さ
ずともおくびやう玄ごくのくわじやばらが腹切やう
をみせ申さむに爰へよれやといふまゝにたがひに刀
を抜持てなむあみだ佛を最後にてさしちがへむとぞ
玄たりけるすけ成も時宗もあはてゝ中へとむで入二
人を左右へおしのけあふおもひきりたりなむぢらさ

ればせんだんのはやしはけいきよ／までかむばしゝ
わうちの砂はみな金玉と成風情我らがおもひきりた
ればなむぢらもおもひきりけるかや見をとす事はな
きぞとよこゝろざしにたゞ下れ國へかた見を届すば
時のちんじ一たんの口論に玄ゝたりと人もおもひ母
上も覺しめされむする口惜さにわざとくだすぞたゞ
下れたとひ千騎萬騎味方にすると申共此ふぢ野にて
は思ひもよらず只壹人成共忍びいらばうち得む人あ
またにてかなふまじいぞはやとく／＼と仰ければあ
かぬはきみの御誕とて形見と文を給り主じなきこま
の口を引ゆかむとすれば五月やみ涙にくれて道みえ
すおもひするがの富士の根のけぶりは空によこおれ
てへだての雲となりにけりすそのゝ草は露玄げくま
だ秋ならぬ道野べにほたるかすかにとびつれて身よ
り思ひのあまりにむしさへむねやこがすらんいとゞ
なみだのおほかるになにとかはつのなきそひて井て
の屋かたをわかるらん馬も心のあればこそ北風にい

ばひけめげに心なきちくるいもなるれば玄とふ者有
ましてやいはむ玄んりんにかたちにかけのそふごと
くふだいさうでんめしつかへ明ればおに王暮れば又
だう三郎と召遣れ申せしが今宵はなれてあすよりも
すけ成共時むね共たれをか申てなぐさむべき同うき
よに生るゝと曾我の十郎時宗のその殿人でなかりせ
ばかほどにものはおもふまじ我等ばかりとおもへ共
むかしを傳へてきく時は玄ちた太子は十九にてわう
くうを忍びいでだんごくせむのほうれいあら羅仙人
を師とたのみ御出家ならせ給ひし時玉のかぶり石の
おび御衣諸共にぬぎすてゝ金札を書添てこんでいご
まもろ共にわうぐうへ歸し給ひけりこんでい駒もし
やの雲君のわかれをかなし見てせむこくにいばい悲
るいていきうせし事も今のわれらにあひをなじそれ
は佛のさいどにて終には廻りあい給ふかの祐成や時
宗に今宵はなれて明日よりも又もあふべき君ならず
なごりおしとも中々に申もをろかなりけり兄弟の人

仰けるは今ははや此もの共富士の原をば過ぬらんい
ざや最後の出立せん尤玄かるべしとて十郎殿の其夜
の御玄やうぞくはだには御上より給る小袖ひつちが
へてきるまゝにむら千鳥のひたゝれのそばたからか
にさしはさみ黒ざやまきの刀をさいて三玄やく五寸
の玄やくどう作りの太刀はひてまきのたい松一尺貳
寸にたばねたるを弓手の脇にかひこふで火は持たる
か時宗とて先にすゝむでぞ出られける五郎がそのよ
の玄やうぞく是もはだには御上より給りたる小袖ひ
つちがへてきるまゝに上にはさひみにす見えにてう
を三つ二つ所々に付させ下はこむの小ぱりまのそば
たからかにさしはさみ赤木のつかの刀をさいて別當
より給たる二尺七寸のひやうごぐさりの太刀はひて
とうの火もつてぞ出にける玄のびて敵をねらふよは
くらきに玄くはあらね共辻々のかり火は天をもて
らすばかりなり草のかげなる細道までもかくるべき
やうのあらざればたゞ日中のごとくなりされ共とね

り草かりのむまかふていにもてなし屋形／＼のまへをすぐるあやしやたそとがむれは是は御内の草かりなりとこたへてかりやの御りやうの御所中へ玄のび入こそあぶなけれ霄に見たりし事なればまよふべきにてさふらはず數千のかどをゆきすすぎ祐つねがやかたへ忍び入にことによつくいふせし用心はたれもかふする物をとがめばやがて亂入てめぬきをかぎりにうちあふべしそれまでは玄のべとてたいまつに火をたて左づかにふつて見たりければ五藤内にいさめられやかたをかへて爰にねず惣じて人をおかざれば二人ながらあきれてさていかになりなむ弓手はやがて御所なりめてはちゝぶまへは和田後の陣は横山けいごのぶしはかゝりたき矢さきをそろえたてをつきつきてさとられ敵やかたをかへにけりきやうだひの人々羽ぬけどりのなかぞらにたちわづらうぞあはれるかゝりけるところにはらまき着たる男の長刀持

てよりければ兄弟の人々あは敵ぞとおもひ太刀取なをし懸りよふされども此をとこ長刀をとりもなをさす小ごゑに成て申けるはなふくるしうも候はずちゝぶ殿のこうけんに本田の次郎ちかつねにて候昨日からばの庭の言すての弓矢のなさけをとほんため本田をいだしたてられて候祐經は霄までは此やかたに有けるが五藤内にいさめられ御所の左の妻戸の脇に玄ゆくしたり先たいまつをもふり玄めし太刀をもさやせよこちへ／＼と手をぞ引うれしさはたぐひかぎりなし中門わたりろうまの前をゆき過あやしやたそとがむればちゝぶ殿のこうけむ本田の次郎ちかつね自番するといゝければさらとがむる人はなし和田の手の人々吉盛かねて今夜はひそかなれと玄めされ人をも更にとがめず御ちゝと北條殿五郎が鳥帽子おやなれば色兼てさとり何事ありと今夜はさうなくはしり出るなど玄のび／＼にふれらるゝ心得たるやか

たには東西ひつそとしたりけりかくはすれ共外様の
もの何事もあれかし時の高名仕り御感にまかりあづ
からんなどゝ思ふもの共いれちがへてまはれどさ
れども本田付そい引まはしとをれば更に子細はなか
りけり

かくてきやうだひの人々を祐經がふしたりし妻戸の
わきえをしほいれ人數にちかつねも御供せんと申助
成聞し召れてまことの時の心ざしちゝぶ殿の御はう
し本田殿の御なさけとかう申におよばれず若も此事
玄おふせて雑兵の手にかゝらん時御手にかけてなき
あととりかくし給ひなば最後のともにはまさりなむ
人あまたにてかなふまじいぞはやとくくと仰けれ
ば本田承げにく是ちいはれて候さらばおるとま申
とて本田ははやかへりぬたがひにとりつたへたる弓
矢のなさけこゝまでとふたりめと目を見合て風はい
つも吹ども今宵の風は身にぞゑむなごりはいつもを
しけれど今夜ことさらをしきなり一日が間に一千歳

をふるとはいふとも萬年がそのうちに兄弟と成事
かたかるべし今宵はなれて其後に未來の契りさだめ
なし未敵にあはぬまに別れの姿よく見む父ゆうれい
が見度ばすけ成を見給へや母かうさうとおもひて時
宗をみんとてたいまつはつとふりたてゝたがひにか
ほを見合てもろきは今になみだなりかゝりける所に
風も吹ぬに妻戸がなつてきりくはつとひらいた兄
弟の人々さうのわきにひつそうてすまひてものを見
給へば女にてこそ候へけれどれなるらんとおもひし
に大磯の虎がいもうとにきゑゆと申者今夜御所中に
有けるが曾我殿原のようちのよしをゆめばかりほの
きゝてもしさもあるならば此妻戸のかけがねをはづ
さんためによひよりも待こそ久しうさふらひつれな
き妻戸はあひつ人はなしさらばたい松をたてよとて
たひまつに火をたてゑづかにふつて見たりければ郎
等共はおそれてよりつかざる座敷に五藤内と祐經只

二人宿したり助成御覽有ていかにや五郎敵を見るに
二人我等も兄弟御へんはそばにふしたる五藤内をき
れすけ成はすけつねをきるべしとぞ仰ける時宗承り
こは御説とも存候はず五つや三つの年よりも十八年
が間ねらひたまにあふたる親の敵をば扱置て行衛も
亥らぬものをきつては何ゑきあらんそうりやうにて
ましませば一の太刀をばあそばせ二の太刀におゐて
は時宗が仕らんと申すけ成聞し召れてあふ思ひあや
まつて候但ねいりたるもの切は死人を切ににたる
べしあつたら親の敵のいきかほ見てきらん尤志かる
べしとてねやまくらにたちより太刀をつか手にとり
なをして申けるこそあはれなれ三千年に一度花さき
見のなる西王母のそのゝもゝたう花のせちゑうどん
げのはるおやのかたきにあふは稀なるとは申せ共あ
ふおもへばやすかりけるぞやいかにやとのすけつね
大事の敵もつものがかくふかくに見ゆるはおきあひ
て亥んじやうに死霊の念佛は一念な只今の十念申さ

れよちやうもむせん五藤内がさかしら今こそする所
よおきあへやつといふまゝにあゆみの板をどうとふ
むすけつねが最後もよかりけりさつしたりと云まゝ
におどろきさまに枕なる太刀おつとりすばとぬきお
きんと志ける所を助成是にありやとてもつてひらひ
てちやうとうつ弓手のかたからめてのちの下へはら
りつんときつた時宗是に有やとて持てひらひてちや
うと打腰のつがひをきりはなす五郎が太刀はつるぎ
にて疊三てううらかへしあゆみの板に切つけゑひや
つと云て引間に助成又はたと切時宗つばをかへしと
つてなをしてちやうと切せめても切てなぐさめ日比
の念やはるゝとおどりあがりとびあがり三刀づゝ切
ほどに果報いみじきすけつねも六つになつてころび
けりそばにふしたる五藤内太刀風にめをさましかつ
ぱとおきてにげけるがにげはたゞもにげすゝ夜討は
曾我のとのばら明日の亥よけんは五藤内とのゝ亥つ
てもみにもふでにげにけり祐成御覽じにくいやつが

唯今のことばかなにげはにがさんとおもひしに玄よ
けむといふがにくさに人とちぎるはさはなひぞとも
につれてごくそつのか玄やくのせめの所見にまかり
たてとの給ひてすけなりの太刀にてたかもゝ切てお
とされのつけに返す所を時宗是にありやとてほそく
びちうにうちおとすおとゝひあんどたまはりせむな
も人にかたらはれひかうの玄にを玄たりし五藤内が
最後をばきせん上下をしなべにくまぬものはなかり
けり

十番切

けんきう四年五月廿八日の夜半ばかりの事なるに曾我兄弟の人々はおやのかたき祐經を思ひのまゝにうちおふせこしばのかげへさつと引しばらくいきをつぐ助成おほせけるやうは本望をばとげついざやこゝにてはらきらん時宗承て御ぢやう尤にて候へどもとても御れうはおうぢ伊藤の敵なればんちうへみだれ入頬朝を一かたなうらみ申名をこうだいにあぐべきなり助成聞召れてげに／＼これもいはれたりさりながら祐經にとゞめをさしてありけるかときむね承てあれほどになすうへなにの子細の候べき助成きこしめされてそれはさもなし五郎殿あけてじつけんあらんときあはてたるかをくれたるかあつたらおやのかたきにとゞめをさゝで打すてにしたるなど、あらんときかばねのうへのふかくたるべし五郎殿とあ

りしかばさあらばそれに御まち候へとて有しところに立歸りたいまつをぶりたてゝ祐經をみてあれば跡も枕も見もわからずされどもしがいをひき返しむなしかほをつく／＼とみてかまいてめいどくわうせんまでわれらうらむる事なかれ日ごろ作りじつみとがの只今むくふと思ふべし我等が父の河津殿にたむけんためのめいたうなりさこそそんりやうかはづどのうれしくおぼしめさるべきいひもあへずときむねこしのかたなをひんぬいてこみゝのねにさしたてすこしさたらくやうなるををしうごかしていひけるは此かたなと申は御へんがひさうせし刀いつぞや頬朝のはこねまふでの有しとき御へんは時の御ともにてまことやらん此山に河津殿の三男にはこわうの丸の有なるに見參せんとよびいだしそれがしにたいめんしましたしきがむつばぬはぐちのいたせるところなり他人なれどもむつべばこれ又威せいたるべしおとなしくならん迄わきざしにせよとて此刀をとり出しそれ

がしがこしにさしはやかへれよといひしときおやのかたきときくなればほかをばもとむべからず此刀にてたゞなかを一かたなとにらみしをこしの法師がいろをみてをしへだてかきいだきほんばうにかへりぬさてそのゝちにこのかたなうしなはでもつ事は御へんはもとのぬしなればかへさんがそのために今までもちてあるぞとよかねはかねてもしつづらんこゝろ見給へといふまゝにめてのこみゝしたよりも弓手へとをれと三かたなさす刀めかかさなりてくちとひとつになりにけり

あけてじつけんありしときよひのざしきのざうごんにくちをさかれけるやと御ひやうぢやうはとりぐなりされども遊女二人がはじめをはりをかたるにぞとゞめにこそはなりにけりよゐにははれてありけれどかたきうちける其時刻にそらかきくもり五月雨うのはなくだしそふりにふるつじくのかゝり火も一度にはつときえければ東西俄にくらぶ成ておちむど

たにもおもひなばこゝろにまかせておちぬべしされども思ひきるうへこゑぐによばはるたゞいま御れうのかり屋の御前にておやの敵祐經を討て出るつはものをいかなる者とおもふらん伊藤がまこ河津が二人の子十郎時宗爰に有當君の御内にゆみとりはおはせぬかなどおりあひてうちとゞめ名をこうだいにあげたまはぬやつとこゑ／＼によばはるくらさはくらしあめはふる御ぢん俄にしんどうし弓一ちやう太刀一ふりに二人三人とりついて我人のとむばいあふつなぎむまに乗ながらむちをうつところもありみかたどうしがきりあひてかたきと思ふものもあり前後ふかくにひしめひてうへをしたへぞかへしけるされ共一番にたいらくの平馬のせうと名乗て夜討はたぞめづらしやわれ／＼が目のまへにてらうせきをばせさすまじ手なみの程を見せんとておごゑをあげて切て出るすけなりきこしめしかほどにおほき人中に一人名乗ていづることたぐひすくなきゆみとりなれ曾我

の十郎是にありうけて見よと云まゝにこしばのかげ
よりつつと出てもつてひらいてちやうとうつゆんで
のうでくび打おとされて言葉には似ざりけりはや御
内をさしてぞ引にける二番にあひきやうの三郎と名
乗て五郎にむすとわたりあひほうさききられ引て入
三番に御所かたのくろ彌五と名乗て十郎殿にわたり
あひかたさききられ引て入四ばんにもて木どの五郎
にむすと渡り合ひさくちをわられて御うちをさし
て引給ふ五番の度には伊勢の國の住人に吉田の三郎
もろしげ十郎殿にわたりあひもろひざながれ引てい
る六番のたびには吉川と名乗て五郎にむすとわたり
あひたかもゝきられ引ている七番にはしながはと名
乗て十郎殿にわたり合めての小わきをきられてまく
のうちへぞひきにける八ばんのたびにはかひの國の
住人に市川の別當太郎たゞみ大音あげていひける
は夜うちといはんに何程の事のあるべきとおごゑを
あげて切て出るときむねこれをきゝやあなんぢはお

とに聞えたるうすいのたうげなんじにてぬすみこそ
のふなりともはれわざのきりあひは是はじめにて有
らんに手なみのほどを見せんとてもつてひらいてち
やうとうつほそくびちうにうちおとされてあしたの
露とぞきえにける九番につくしむしやうすきの七郎
もろしげ十郎殿にわたり合まつかうわられ引て入十
ばんのたびには二たんの四郎たゞつな大音あげてい
ひけるはなにさま東西くらふしてものゝあひ色が見
えぬにたいまつ出せとよばはつたりすけなりきこし
めしか程におほき人中にたいまつごのみをするやつ
に手なみのほどを見せんとていれちがへてきりむす
ぶ其ひまにたい松を我をとらじとさしいだすえびら
うつぼみのかさましてからかさんどをばよきたい
松と火をつくるまんどうゑにはことならずいとよい
さめるつはものが此火のひかりにちからを得さん
さんに切たりけりれうが雲を引つれとらが風に毛を
ふるひはんくわいがほこをふりちやうりやうがいき

ほひも是にはいかでまさるべきその夜五郎が手にかけ五十人に手をおふする直に死するはたゞ一人別當太郎ばかりなりとても今夜はすごすまじつみつくりにとをもひて人をばさらに切ころさむ名字を名乗て出るをこそ十人とはしるされけれ兄弟が手にかけやみうちのすてがたな數をもしらぬところなり扱すけなりとたゞつなはしのぎをけづりつばをわりきつさきよりもくわえんを出しをふつまくつつたゞかへどしばしせうぶはなかりげり二たんいかゞはしけん十郎のたちをうけはづし少手おひてこれまでなりいとま申てさらばとてまへのうちへ引しりぞく助成つゝいてをつかげとても今よひはすごすまじざうひやうの手にかけころさんよりも返しあはせてせうぶをせよたゞなとて追かくる取てかへしてきりむすぶすこしあしたちかたさがり上手に成て十郎殿二を下へをひおろさんとはしりかゝつて打たちを二たんさらりとうけながしつかをつゐてすそをなぐ十

郎のめてのちからあしひざのくちをさしさけてつんと切てぞおとしける弓手のあしばかりにて半時おどつてたゞかふたり是やこのれうわうのぼじつにむかふほこの手入日を返し一おどりうしろをふせぎこす刀百手をくだきたゞかへどゆんでの足ばかりにてさのみはいかでこらふべきいぬゑにどうとまろびあたりに五郎やある祐成こそたゞいま二たんにあひてうたれ候へおなしきみちと云ながらたゞつなに合てうたるればうらみとは更におもはずや御へんはいのちをまたふしてきみの御まへに參りわれらがありさま申てしねはや首とれやたゞつな二たんくびを討おとすまんする年は二十二おしまねものはなかりけりあらむざんやときむね弓づえ二つえ三つえ程へだてこそをせんどたゞかひしがすけなりのさいごのよしを聞はやうつたちもよはりはて是非をもさらわきまへずかくてはかなじと思ひ御内をさして切て入爰に御所の五郎丸と申て十八歳になりけるがうすぎぬ

取てかみにかけとあるところにひつそふて今やを
そしとあひ待る是をば玄らで時宗つま戸をはつとけ
やぶつて御うちをさして切ている五郎丸やりすごし
得たりやあふといふまゝにゆん手すがひにむすとだ
くときむね是をみて女とおもひ見そんじいだかれぬ
るところくわいすされども事のかすにせすちうにづ
むどひつたて、七八間ははしりけり五郎丸是をみて
かなはじとやおもひけん夜討をばくみとめたりおり
あへやつとよばはつたり此こそにしたがつておりあ
ふ者はたれ／＼ぞみとの九郎源八またの太郎と民部
のせうわれもと思ひし大ぢから七八人おりあひて手
どり足どりなはかけて大將殿へをつたつるあふむね
んたぐひはなかりけりさるあひだよりとも夜討まぢ
かく参るよしをきこしめし御はらまきをめされ小長
刀よこたへゆるぎ出させ給ふ爰に大ともの一はうし
と申て九つに成けるがきみの御きせながにすがりつ
き君はすでにせいゐしやうぐんにておはしますか、

ることなんどに御手をおろさせ給ふ事かろ／＼し
くもや候らんととゞめ申たりければよりもげにも
とおぼしめしとゞまり給ふところへあんのごとく夜
討からめとつて庭上にひつすゆるよりとも御らんじ
てあふいしくも申たる一はうしかな父大ともがつた
へ聞さこそよろこび申べきにゑぼし子にせんとの給
ひて大ともの左近のしやうげん義なとめされ大す
みさつまをくださるゝときのめんぼく世の聞えなに
事かこれにまさるべきさるあひだ頼朝さきの御しや
うぞくをあらためひろびさしまで御いであり曾我の
五郎時宗とはなんぢが事かさむ候と申親のかたきす
けつねをうつは道理といひながら京かまくらのおり
のぼりみちのすゑにてもうたすし頼朝がいはひの座
敷にちをあへすでういはれなし又かたきならばすけ
つね一人こそうつべきに當番のめん／＼に手をおふ
するでういはれなしおなじざいくわはかざり有せつ
たうのつみと云ながらかゝるぢうくわはためしなし

ありのまゝに申せときむね承てさん候祐經をば京か
まくらのおりのぼり道のすゑにてもうちたくぞんじ
て候へども君の御覺えめでたふてよきものをあまた
つれうつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎
はをとり申さずわれらは君の御ふしんかうぶり身は
どくしんとなりはておとゞいよりほかむつぶものも
なきあひたつきそひねらひまはれ共おりを得ざれば
うちもえず此かりくらへの人ごみをさいはいと存ま
ぎれ入てうつて候御ぢやうのごとくかねてはすけつ
ね一人をこそうたむと存候ところに當番のめんく
がなまじゐになのりいでをくびやうがたなつかふて
にげあしふむがにくさにおどしにそつとたち風をお
ふせつるにて候むうおんをまさにかうぶり妻子をふ
ちし身をたて人となるかたゞくが夜うちの入てみだ
るゝにたれあつてきみの御せんにたゝんと住るもの
はなしとざまなれども二たんと御内の五郎丸よりほ
か御ようにつべき者もなしその内かの手おひども

みなめしよせてじつけんあれむかふきすはおほく候
まじか程をくびやう成人々にあつたらしき御所領を
いたづらにたばんよりわれらにすこしくだしたひ御
はうしにあづからはこれほどまではにくまじやたと
へはおうぢ伊藤はふちうのものにて候ほどにしそん
我等にいたるまで御にくみあるは御道理さりながら
ふんしよにはいかりをたておんにむくへばかたきも
味方本ノマと成親子兄弟なれどもよくしんうちにふくめ
ばとてきたうと書れたりせんびをくひこゝのしよ
にしたがへと古人もをしへをかれたりおうぢ伊藤は
ひが事なしむかし源平兩家のときあめがしたのしよ
さぶらひ二ちやうの弓に一すぢのつるをかけきのふ
源氏へひくゆみをけふは又ひきかへて平家へ引やか
らも有かやうに人はせしかども伊藤はこゝろふたつ
なくきてゆみ矢をとりしなりかやうに弓矢とるも
のはたのもしき弓とりたうせんと是を名付たりそれ
に伊藤がしそんをうとみはてさせ給ひてめいをつぐ

べきたよりもなしろうてうのくもをこひこちうの魚
のわづかにあはにいきつくふせいでいきてかひな
きうき身と成ともきゆべきつゆの身をおやのかた
きとうちじにし名をのちのよにあげむため我きみと
こそ申けれ

よりもきこしめされてさほどがうなるものがなに
とて五郎丸にはとられけるぞ又かたきうつての其後
内所をさして切ていり我にてきをなすでういはれな
しありのまゝにかさねて申せときむねうけたまはり
さん候すけつねはおやのかたきと申ながらさしてう
らみも候はすせめいちしむにきすと申てもあまりあ
りうらみ申てもつきせぬは君の御身にとじめたりた
とへばおうぢいとうはふちうのものにて候へども名
にあるものゝ子孫をいかでかたやしはてもと二人が
中に一人めしいだされんめいの地のかたはしにあ
んどをなしてたぶならばたとへすけつねうちたくと
もほんりやうがおしさにおもひかへなぐさみてもす

ぎぬべしさればゆみ取のいのちにかへておしきはけ
んめいの地の本領なりそれにひとつものこさずめし
あげらるゝのみならず剩かたきすけつねに一ゑんに
くだしたびうへみぬわしとふるまひしかゝるうらみ
の數々のそのみなもとをたづぬるにきみの御身にと
どめたりすけつねよりもさきにそとこゝろをかけ申
せしにそれでにたつものはなし五郎丸きぬかつぎか
みゆりさてゐたりしを女と思ひ見そんじてさうな
くとられて候ぞや五郎丸だになかりせばあつぱれ君
の御命はあやうかりつるものをやよりもきこしめ
されてあつぱれ大がうのものかな思ひのいろをのこ
さず申あぐる事こそ神妙なれたゞし親のかたきうた
むとてまゝちゝそがにはしらせけるか京の小次郎越
後のせんじ二のみやのあねはゝにはしらせざりける
かときむね承てさん候小次郎はほんしよにしこうつ
かまつりひまなき身にて候へばしらする事も漢はず
ゑちごなるせんじばうは經をよみねんぶつ申おやの

あととふその子をころして何にせんとぞんじ玄らする事も候はず二の宮のあねむこよになきこじうとくみし一しよけんめいをうしなはんとよも申さじとぞんじ玄らする事も候はずはには玄らせたくは候ひつれども人のおやのならひにてわかき子どもをさきたてとしよりあとにながらへものおもはんといふおやのよにあらじと存しらする事も候はずま父はなきぬ中けいしけいふのむかしよりなかよき事のあらざれば玄らせすとこそ申けれ頼朝御涙をながさせたまひ今は問べき子細もなしはや／＼いとまとらせよと仰出されるところにいづくよりかきたりけん敵のちやくしいぬばう時宗を見つけこそもおしますわつとなきもつたるあふぎにてときむねがおもてをちやうとうつ時宗ちつともわろびれずにつこと笑ひあふゆ／＼しくもうついぬばうかなうらやましやな犬坊は雷にち／＼をうたせいまでにかけてうつ事よかなしきかなやわれ／＼は五つや三つの年よりも父を

なんちが親にうたせ十八年がそのあひだ野にふし山を家としこゝろをつくしきもをけしつゞやはたちに餘りつゝうちたるだにもうれしきにきこそいぬばうがごゝろもつくさすをこのけなく打をうれしく思ふらん是もきみの御おんぞやわどのがうでにかなふまじうつてはらだにゐるならばいか程もうてや犬坊とかほふりあげてうたせけり御前に有し人々弓とりにたう座のちじよくをあたふる事もつたないなしといぬばうをだきいるゝ頼朝よりの御誕にはときむねがさいごにすけなりがくびの見たくや有らんに二たんはなきかとおほせければうけたまはると申てむらちどりのひたゝれにつゝみたりしすけなりのくびに討そんじたるたちをそへときむねがまへにをくあらむざんやときむね今までがうのまなこを見いだしわろびれざりしけしきもかはりなみだをながしうつぶしなりあらいたはしやはやくもかはり給ひたるやちくばにむちをうちしより一つところにおきふしすこ

しも見えさせたまはねばとや有らんかくやわたらせ
給ふらんとこゝろをそへて思ひしにかなしきかなや
今ははや五たいふんべつづゞかねばありしかたちも
かはりはていたづら事となりにけりとくしてわれも
かくなりておなじみちへと思ひければつゝめどこぼ
るゝなみだは庭の玄らすもぬれぬべし

そののちときむねがたちをとりいだしこれにてきれ
との上意なりときむね此たちをみてあらふしきやあ
のたちはおとゝし京へのぼり四でうまちにてかひと
りゆふべのかたきをうち又このたちにてそれがしが
首をきられん事のふしぎさよとのぼらぬ京へのぼり
たると申はこのたちの出ところをかくさんための言
葉なりなはとりはほりの小次郎とぞ聞えける賴朝よ
りの御説には大がう一のときむねなればたかゝをか
にてきれとの上意なりうけたまはると申てときむね
をひつたてたかゝをかへいそぐ折ふしありあふ貴賤
くんじゆたゞよのつねのゆみとりさへさいごのてい

はおもしろきにことさら名にしおふたるときむねな
ればさいごのていをみんとてわれさきにといそぐ時
宗人のおほきをみてあらくちおしやかほどのくわう
座にてなはのはぢにをよぶ事よよしくそれも時宗
がさんぞくかいぞくを志たる身にてもあらばこそぶ
もけうやうのそのためについたるなはにあるあひ
だかみのまへにてみしめなは佛のまへにてせんのつ
なきやうのひぼともいつつべし心あらんずゆみ取た
ちはよつて手かけてけちゑんせよ人々といふまゝに
いやたかゝをかへぞいそぎけるたかゝをかにも着し
かば九ほんのまつの玄たに玄きがはを玄かせ西むき
になをつて申けるはさいはいときむねがこの松の玄
たてできられん事もひとへに九ほんの淨土とおほふ
るなりいかにたちとりなはとりすこしのいとまを得
させよまつごの一句にじやうどの三部經をあら／＼
とひてきかすべしけもんしゆの人々もなりを玄づめ
てちやうもんあれそれ法花一乘のくりきはたつとし

ありがたきみたいしやうほうまんとくのくらゐ三世
の諸佛出世のほんくわいは衆生じやうぶつのむきだ
う也經にあらはす時は妙法れんけの五字につゝめな
にとくときはなむらみだ佛の六字にせつするなりし
ゆいといつば座せんの異みやう座せんしゆぎやうの
てんちにいたりがたきものは六字をせうしてごくら
くに往生すぐち成ほんぶに至てはかうしやうのほう
もん也いつしをさゝぐるそのときは大せんせかいも
こゝに有たけをうちたうをみてごだうする事ふんみ
やうなりめうらく大師の御しやくにいはくしよけう
しょさんたさいみだ西方をもつてさきとせりゆいし
んのみだこしんの淨土なればほんらいむとうざいか
しやう有なんばくとくわんすべしそれ六字のみやう
がうをあつむるきやうろんはげごんきやうにて南の
字をつくりあごんきやうにて無の字を作りほうどう
きやうにてあの字をつくり大はんにやにて彌の字を
つくり法花經をもつてだの字をつくつてなむあみだ

ふつと申なり十方三せぶつ一切しよぼさつ八まんし
よしやうげうかいせあみだととくときはちやうもん
の老若もかうべをちにつけときむねをおがまぬ人は
なかりけり

かのときむねと申はおさなかりけるときよりもごん
ぎやうをこたらす一しむ三くわんの月はむみやうの
やみをてらしくわんねんのまどのまへにはまゆに八
字の亥もをたれいちしちうだうのくるまは無二無三
の門にとゞろき一乗ばだいのこまはびようどうだい
亥のそのにいばふとうがく一てんのほとゝぎすはめ
うかくたいせうのみねになきにうちうけんもむのう
ぐひすはげゝ衆生の谷にさへづるしよぎやうむじや
うの春の花はせしやうめつぼうの風にちりしやうめ
つめついの秋の月はじやくめつゐらくのくもにかく
るゝはんさむにふんくしかくのごとくとあるもの
をたゞねんふつを申べしとをよぶもをよばざりける
もみな念佛を申ける是はたかゞをかの事さてもきみ

の御まへにはわだちゝぶ北條殿とり／＼そせう申されけるはかのときむねと申は大かう一のつはもの又は名にあるものゝ子孫なればたすけも御をき候へかしとをの／＼申されたりければ賴朝もない／＼たすけたく思召るゝ折ふし三人のそせうをうれしくおぼしめしみづからあんどの御状をあそばし志んへいの右馬のせうにたぶさてもたかゞをかにはときむねを志きがはになをらせ太刀取うしろへまはるとき志んへいの右馬のせうたてぶみもつてはしりやあ其時宗なきつそあんどの御状是にありこれ／＼おがみ給へとて時宗がひぎにをくことのはをゆるされたからかにこそよふだりけれどす状さがみのくにの住人そがの五郎時宗はやくくわんゆうすそれくわをこんじてちうとなす志んかうは人に有て志かもみやうのちけんたりおやにけうのふかきものはてんたうのあをいたし理になせり天下爰に感應すそくばくの弓と

りたうけんをさし置なんだそでをうるほふしおんこむにきく物ひるいきもにめいじたりこれを更にうちばつし志ざいになしをはんなばきゝうの家たえ弓馬の道はながくすたりなんあふぎてもなをあまり有はんくわいにくらぶればときむねはまさりたりやうりやうにあはすればかうそのなせしいせいたり一てん四かいがそのうちにかくれぬがうのものなればさきの日をかへしいまよりのちは賴朝にちうしむたるべし本領なればうさみくすみかは津三ヶのしやうゑいたいあんどの御状かくのごとくみなもとのよりともはんとぞよみ上たるきせん上下のけもんしゆ一度にあつとかんじつゝゆゝしの人のくわほうやとよろこばざるはなかりけり去程にときむね御教書いたりきなみだをながしつゝあら有がたやおなじくは此御状を舍兄助成もろともにおがむとだにも思ひなばいきやはうれしかるべきに惣領の助成今はうきよにおはせねばときむね一人ながらへそりやうをつぐと

もいきたるゑるし有まじたゞくきらせ給へと申こ
うてぞきられけるみる人目をおどろかしきくものこ
れをかんじけり君もあはれと思召かほどがうなるつ
はものじやうこも今も末代もためしすくなき次第あ
らんかみにいはへとてふじのすそ野にやしろを立て
あにの宮をとゝの宮と申ていははせたまひけるとか
や今當代にいたる迄おやのかたき討人はこのやしろ
にていのればたちまちかなへ給ひけり

しんきよく

つらしくおもむみるにいにしへより今に至るまで朝敵を一時にほろぼし太平を四海にいたす事武略のこくはなしされば代は異國玄うらいのをそれもなくていゐをあらそふかたもましまさず是併武運の天命にかなはせ給ふによつてなり爰にけんこう建武のむかしを思ふに戦場にしてかばねをさらすのみにもあらずあるひは君臣の儀をまばつて身をさうかいのなみに玄づめあるひはいもせのわかれをかなしむで思ひを古郷の月にいたましむるなかにもあはれなりしは一の宮のみやす所の御事と右衛門のふしやうはたのたけぶんがふるまひなり其ころ宮すてにうるかぶりめして玄んきうのうちに人と成給ひしかば御才覺もいみじくようがんもよにすぐれましませばさだめてとうぐうにたゝせ給ひなんとよの人皆ときめ

きあへりしに關東の御はからひとしておもひのほかに後二條の院の御子とうぐうにたゝせ給ひたればこなたへ參りつかへし人々はみなのだみをうしなひみやもよのなかよろづに付て只うち玄ほれ明くれば詩歌に御こゝろをそへ風月におもひを添させ給ふ折につけたる御あそびなど有しかどさしてけうせさせ給ふ事もなしさるによつてはいかなる宮腹一の人の御むすめなどなりともかくと仰いだされば御こゝろをつくさせ給ふ迄の御事にはあらじと覚えしに御ころにそむいゝもなかりけるにやこれをと思召たる御氣色もなく只ひとりのみとし月ををくらせたまひけるとかや有とき關白家にてなまかんだちめ天上人さしあつまつてゑあはせのありけるにとうかんの左大將殿のいだされたるゑにげんじのむばそくの宮の御むすめは玄らにゐかくれてびはをひき給ひしにくもがくれたりつる月の俄にいとあかくさし出たればあふぎならでもまねきつべかりけりとてばちをあげ指

のぞきたるかほつきいみじくらうたげににはやかな
る御けしきを云ばかりもなく筆をつくしてぞかきた
りける宮これをつくぐと御覽じてかぎりなく御こ
ころにかゝりければこのゑをなばしめしをかれみる
になぐさむかたもやとまきかへし／＼御らんじけれ
ども御こゝろさらになぐさまず昔りふじんのかんせ
むでんの床にふしはかなくならせ給ひしを武帝かな
しみにたへずしてはんごむかうをたかれしにりふじ
んのおもかけのかすかに見えしを似ゑにうつして御
らんせしにものいはずわらはず人をしうさすと武帝
のなげき給ひしもことはりかなと今更に思ひぞなれ
せたまひける我ながらはかなのこと、まよひやまこと
とのいろをみてだにも世は皆夢のうつゝとこそおも
ひすつべき事なるにこは何のあだし心ぞやくわさん
のそじやうへんせうをつらゆきがうたのさまは得
たれどもまことすくなしたとへばゑにかける女をみ
ていたづらに心をなやますがごとしと古今のじよに

もかきたりしそのたぐひにもなりぬるものよとおも
ひ捨させ給へども猶あやにくなる御心むねにみちて
ぞおぼしめすさればかたへの色となる人を御覽じ
ても御目をだにもかけられずましてとき／＼のたよ
りにこととひかはされし御かたさまへはひとむらさ
めのあまやどりにもたちよらせ給ふべき御こゝろげ
もなしせめてよのなかにさる人ありと聞召御こゝろ
にかゝらばたまだれのひまもとむるかせのたよりも
ありぬべし又わづかに人をみしばかりなる御心あて
ならば水のあはのきえかへりてもよる瀬はなどかな
かるべき是はみしにもあらず聞しにもなくむかしは
かなき物語あだなるふでのあとに御こゝろをつくし
ていかにせんとこひかなしませ給ひて月日をぞをく
らせたまひけるせめて御心をやるかたもやと御車に
めされかものたゞすの宮にまふでさせ給ひ御手洗川
にて御てうづをめされなにとなくかはにせうようせ
させ給ひむかしなりひらがこひせしとみそぎせし事

のあはれなるやうに思召いで、

いのるともかみやはうけんかけをたに

みたらしかはのふかきおもひを

かやうにうちすんじ給ふときしもむら玄ぐれのすぎ
ゆくほど木の玄たつゆにたちぬれて御そでもいと
ほしあへず目もはやくれぬと申こそに御くるまをと
どろかして一條をすきさせ給ふにたがすむ宿とは玄
らねどもかきにこけむしかはらのまつもとしふりて
すみあらしたるやどなればものさびしげなるそのう
ちにばちをとけだかくせいがいはをぞひきけるあや
しやたれなるらんとおぼしめしすぎかてに御くるま
をといめはるかに見入させ給ふにみる人ありとも玄
らすして有明の月のくもまよりほのぼのとさし出た
るにみす高くまきあげいとあてやかなるねうばうの
秋の別をかなしみてびはをたんするにてぞありける
せつさんこをくだく一りやうきよくこほりぎよくは
んにおつせんばんせいかきみだしたる其こそ庭のは

おち葉にまがひつゝよそにはふらぬむらさめに御袖
も玄ほるゝ計也あやしやとおぼしめしみや御めもあ
やにつくぐと御らんせらるゝに此ほどそゝろに御
こゝろをつくしてゆめにもせめて見ばやとこひかな
しませ給ひし似ゑにすこしたがはずなをあてやかな
るかたちはいはむかたなくぞ見えたりける御こゝろ
そらにあこがれてたとくしきほどになりしかばつ
き山の松のこかげにたちやすらはせ給ふに女みる人
ありけりとてびはをばきちやうのかたはらにさしを
きうちへまざれいりにけり引やもすそもあからさま
なるおもかけに又たち出る事もやと夜ふくるまでた
ちやすらはせ給へばあやしげなる御所さぶらひみか
うしおろすをとしてよもふけはや人みな静まりけれ
ばかくても有べき事ならねばみやもくわんぎよあり
にけり

唯今のことばかなにげはにがさんとおもひしに玄よ
けむといふがにくさに人とちぎるはさはなひぞとも
につれてごくそつのか志やくのせめの所見にまかり
たてとの給ひてすけなりの太刀にてたかもゝ切てお
とされのつけに返す所を時宗是にありやとてほそく
びちうにうちおとすおとゝひあんどたまはりせむな
む人にかたらはれひかうの志にを志たりし五藤内が
最後をばきせん上下をしなべにくまぬものはなかり
けり

十番切

けんきう四年五月廿八日の夜半ばかりの事なるに曾我兄弟の人々はおやのかたき祐經を思ひのまゝにうちおふせこしばのかげへさつと引しばらくいきをつぐ助成おほせけるやうは本望をばとげついざやこゝにてはらきらん時宗承て御ぢやう尤にて候へどもとても御れうはおうち伊藤の敵なればれんちうへみだれ入頼朝を一かたなうらみ申名をこうだいにあぐべきなり助成聞召れてげに／＼これもいはれたりさりながら祐經にとゞめをさしてありけるかときむね承てあれほどになすうへなにの手細の候べき助成きこしめされてそれはさもなし五郎殿あけてじつけんあらんときあはてたるかをくれたるかあつたらおやのかたきにとゞめをさゝで打すてにしたるなど、あらんときかばねのうへのふかくたるべし五郎殿とあ

りしかばさあらばそれに御まち候へとて有しところに立歸りたいまつをふりたて、祐經をみてあれば跡も枕も見もわからずされどもしがいをひき返しむなし
きかほをつく／＼とみてかまいてめいどくわうせんまでわれらうらむる事なかれ日ごろ作りしつみとがの只今むくふと思ふべし我等が父の河津殿にたむけんためのめいたうなりさこそそんりやうかはづどのうれしくおぼしめさるべきいひもあへずときむねこしのかたなをひんぬいてこみゝのねにさしたてすこしはたらくやうなるををしうごかしていひけるは此かたなと申は御へんがひさうせし刀いつぞや頼朝のはこねまふでの有しどき御へんは時の御ともにてまことやらん此由に河津殿の三男にはこわうの丸の有なるに見參せんとよびいだしそれがしにたいめんしたしきがむつばぬはぐちのいたせるところなり他人なれどもむつべばこれ又威せいたるべしおとなしくならん迄わきざしにせよとて此刀をとり出しそれ

がしがこしにさしはやかへれよといひしときおやの
かたきときくなればほかをばもとむべからず此刀に
てたゞなかを一かたなとにらみしをこしの法師がい
ろをみてをしへたてかきいだきほんばうにかへりぬ
さてそのゝちにこのかたなうしなはでもつ事は御へ
んはもとのぬしなればかへさんがそのために今まで
もちてあるぞとよかねはかねてもしつつらんこゝろ
見給へといふまゝにめてのこみゝしたよりも弓手へ
とをれと三かたなさす刀めかかさなりてくちとひと
つになりにけり

あけてじつけんありしときよひのざしきのざうごん
にくちをさかれけるやと御ひやうぢやうはとりぐ
なりされども遊女二人がはじめをはりをかたるにぞ
とゞめにこそはなりにけりよゐにははれてありけれ
どかたきうちける其時刻にそらかきくもり五月雨う
のはなくだしそふりにふるつじ／＼のかゝり火も一
度にはつときえければ東西俄にくらふ成ておちむど

たにもおもひなばこゝろにまかせておちぬべしされ
ども思ひきるうへこゑぐによばはるたゞいま御れ
うのかり屋の御前にておやの敵祐經を討て出るつは
ものをいかなる者とおもふらん伊藤がまこ河津が二
人の子十郎時宗爰に有當君の御内にゆみとりはおは
せぬかなどおりあひてうちとゞめ名をこうだいにあ
げたまはぬやつとこゑ／＼によばはるくらさはくら
しあめはふる御ぢん俄にしんどうし弓一ちやう太刀
一ふりに二人三人とりついて我人のとむばいあふつ
なぎむまに乗ながらむちをうつところもありみかた
どうしがきりあひてかたきと思ふものもあり前後ふ
かくにひしめひてうへをしたへぞかへしけるされ共
一番にたいらくの平馬のせうと名乗て夜討はたぞめ
づらしやわれ／＼が目のまへにてらうせきをばせさ
すまじ手なみの程を見せんとておごゑをあげて切て
出るすけなりきこしめしかほどにおほき人中に一人
名乘ていづることたぐひすくなきのみとりなれ曾我

の十郎足にありうけて見よと云まゝにこしばのかげ
よりつつと出てもつてひらいてちやうとうつゆんで
のうでくび打おとされて言葉には似ざりけりはや御
内をさしてぞ引にける二番にあひきやうの三郎と名
乗て五郎にむすとわたりあひほうさききられ引て入
三番に御所かたのくろ彌五と名乗て十郎殿にわたり
あひかたさききられ引て入四ばんにもて木どの五郎
にむすと渡り合ひさのくちをわられて御うちをさし
て引給ふ五番の度には伊勢の國の住人に吉田の三郎
もろしげ十郎殿にわたりあひもろひざながれ引てい
る六番のたびには吉川と名乗て五郎にむすとわたり
あひたかもゝきられ引ている七番にはしながはと名
乗て十郎殿にわたり合めての小わきをきられてまく
のうちへぞひきにける八ばんのたびにはかひの國の
住人に市川の別當太郎たゞみ大音あげていひける
は夜うちといはんに何程の事のあるべきとおごゑを
あげて切て出るときむねこれをきゝやあなんちはお

とに聞えたるうすいのたうげなんじにてぬすみこそ
のふなりともはれわざのきりあひは是はじめにて有
らんに手なみのほどを見せんとてもつてひらいてち
やうとうつほそくびちうにうちおとされてあしたの
露とぞきえにける九番につくしむしやうすきの七郎
もろしげ十郎殿にわたり合まつかうわられ引て入十
ばんのたびには二たんの四郎たゞつな大音あげてい
ひけるはなにさま東西くらふしてものゝあひ色が見
えぬにたいまつ出せとよばはつたりすけなりきこし
めしか程におほき人中にたいまつごのみをするやつ
に手なみのほどを見せんとていれちがへてきりむす
ぶ其ひまにたい松を我をとらじとさしいだすえびら
うつぼみのかさましてからかさんどをばよきたい
松と火をつくるまんどうゑにはことならずいとい
さめるつはものが此火のひかりにちからを得さん
さんに切たりけりれうが雲を引つれとらが風に毛を
ふるひはんくわいがほこをふりちやうりやうがいき

ほひも是にはいかでまざるべきその夜五郎が手にかけ五十人間に手をおふする直に死するはたゞ一人別當太郎ばかりなりとも今夜はすぐさまじつみつくにとをもひて人をばさらに切ころさす名字を名乗て出るをこそ十人とはしるされけれ兄弟が手にかけてやみうちのすてがたな數をもしらぬところなり折すけなりとたゞつなはしのぎをけづりつばをわりきつきよりもくわえんを出しをふつまくつたゝかへどしばしせうぶはなかりげり一たんいかゝはしけん十郎のたちをうけはづし少手おひてこれまでなりいとま申てさらばとてまへのうちへ引しりぞく助成つぢいてをつかげとても今よひはすぐさまじざうひやうの手にかけころさんよりも返しあはせてせうぶをせよたゞつなとて追かくる取てかへしてきりむすぶすこしあしたちかたさがり上手に成て十郎殿二たんを下へをひおろさんとはしりかゝつて打たちを二たんさらりとうけながしつかをつるてそをなぐ十

郎のめてのちからあしひざのくちをさしさけてつんと切てぞおとしける弓手のあしばかりにて半時おどつてたゝかふたり是やこのれうわうのぼじつにむかふほこの手入日を返し一おどりうしろをふせざこすのみはいかでこらふべきにどうとまろびあた刀百手をくだきたゝかへどゆんでの足ばかりにてさたるればうらみとは更におもはずや御へんはいのちをまたふしてきみの御まへに參りわれらがありさま申てしねはや首とれやたゞつな一たんくびを討おとすまんする年は二十二おしまねものはなかりけりあらむざんやときむね弓づえ二つえ三つえ程へだてこそせんどゝたゝかひしがすけなりのさいごのよしきを聞はやうつたちもよはりはて是非をもさらわきまへずかくてはかなじと思ひ御内をさして切て入爰に御所の五郎丸と申て十八歳になりけるがうすぎぬ

取てかみにかけとあるところにひつそふて今やを
そしとあひ待る是をばぢらで時宗つま戸をはつとけ
やぶつて御うちをさして切ている五郎丸やりすごし
得たりやあふといふまゝにゆん手すがひにむすとだ
くときむね是をみて女とおもひ見そんじいだかれぬ
るとこうくわいすされども事のかすにせずちうにづ
むどひつたてゝ七八間ははしりけり五郎丸是をみて
かなはじとやおもひけん夜討をばくみとめたりおり
あへやつとよばはつたり此こゑにしたがつておりあ
ふ者はたれ／＼ぞみとの九郎源八またの太郎と民部
のせうわれもと思ひし大ぢから七八人おりあひて手
どり足どりなはかけて大將殿へをつたつるあふむね
んたぐひはなかりけりさるあひだよりとも夜討まぢ
かく参るよしをきこしめし御はらまきをめされ小長
刀よこたへゆるぎ出させ給ふ爰に大ともの一はうし
と申て九つに成けるがきみの御させながにすがりつ
き君はすでにせいゐしやうぐんにておはしますか、

ることなんどに御手をおろさせ給ふ事からぐし
くもや候らんととゞめ申たりければよりもげにも
とおぼしめしとゞまり給ふところへあんのごとく夜
討からめとつて庭上にひつすゆるよりとも御らんじ
てあふいしくも申たる一はうしかな父大ともがつた
へ聞さこそよろこび申べきにゑぼし子にせんとの給
ひて大ともの左近のしやうげん義なをとめされ大す
みさつまをくださるゝときのめんぼく世の聞えなに
事かこれにまさるべきさるあひだ頼朝さきの御しや
うぞくをあらためひろびさしまで御いであり曾我の
五郎時宗とはなんぢが事かさむ候と申親のかたきす
けつねをうつは道理といひながら京かまくらのおり
のぼりみものすゑにてもうたずし頼朝がいはひの座
敷にちをあへすでういはれなし又かたきならばすけ
つね一人こそうつべきに當番のめん／＼に手をおふ
するでういはれなしおなじざいくわはかぎり有せつ
たうのつみと云ながらかゝるぢうくわはためしなし

ありのまゝに申せときむね承てさん候祐經をば京か
まくらのおりのぼり道のすゑにてもうちたくぞんじ
て候へども君の御覺えめでたふてよきものをあまた
つれうつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎に
はをとり申さずわれらは君の御ふしんかうぶり身は
どくしんとなりはておといよりほかむつぶものも
なきあひたつきそひねらひまはれ共おりを得ざれば
うちもえず此かりくらへの人ごみをさいはいと存ま
ざれ入てうつて候御ちやうのごとかねてはすけつ
ね一人をこそうたむと存候ところに當番のめんく
がなまじゐになのりいでをくびやうがたなつかふて
にげあしふむがにくさにおどしにそつとたち風をお
ふせつるにて候ぢうおんをまさにかうぶり妻子をふ
ちし身をたて人となるかたゞが夜うちの入てみだ
るゝにたれあつてきみの御せんにたゝんと仕るもの
はなしとざまなれども二たんと御内の五郎丸よりは
か御ようにつべき者もなしその内かの手おひども

みなめしよせてじつけんあれむかふきすはおほく候
まじか程をくびやう成人々にあつたらしき御所領を
いたづらにたばんよりわれらにすこしくだしたひ御
はうしにあづからはこれほどまではにくまじやたと
へはおうぢ伊藤はふちうのものにて候ほどにしそん
我等にいたるまで御にくみあるは御道理さりながら
ふんしよにはいかりをたておんにむくへばかたきも
味方と成親子兄弟なれどもよくしんうちにふくめ
ばとにてきたうと書れたりせんぴをくひこゝのしよ
にしたがへと古人もをしへをかれたりおうぢ伊藤は
本ノマひが事なしむかし源平兩家のときあめがしたのしよ
さぶらひ二ちやうの弓に一すぢのつるをかけきのふ
源氏へひくゆみをけふは又ひきかへて平家へ引やか
らも有かやうに人はせしかども伊藤はこゝろふたつ
なくきてゆみ矢をとりしなりかやうに弓矢とも
のはたのもしき弓とりたうせんとは名付たりそれ
に伊藤がしそんをうとみはてさせ給ひてめいをつぐ

べきたよりもなしろうてうのくもをこひこちうの魚
のわづかにあはにいきつくふせいにていきてかひな
きうき身と成ともきゆべきつゆの身をおやのかた
きとうちじにし名をのちのよにあげむため我きみと
こそ申けれ

よりもきこしめされでさほどがうなるものがなに
とて五郎丸にはとられけるぞ又かたきうつての其後
内所をさして切ていり我にてきをなすでういはれな
しありのまゝにかさねて申せときむねうけたまはり
さん候すけつねはおやのかたきと申ながらさしてう
らみも候はすせめいちしむにきすと申てもあまりあ
りうらみ申てもつきせぬは君の御身にとじめたりた
とへばおうちいとうはふちうのものにて候へども名
にあるものゝ子孫をいかでかたやしはてもと二人が
中に一人めしいだされんめいの地のかたはしにあ
んどをなしてたぶならばたとへすけつねうちたくとも
ほんりやうがおしさにおもひかへなぐさみてもす

ぎぬべしさればゆみ取のいのちにかへておしきはけ
んめいの地の本領なりそれにひとつものこさすめし
あげらるゝのみならず剩かたきすけつねに一ゑんに
くだしたびうへみぬわしとふるまひしかゝるうらみ
の数々のそのみなもとをたづぬるにきみの御身にと
どめたりすけつねよりもさきにそとこゝろをかけ申
せしにそれてにたつものはなし五郎丸きぬかつぎか
みゆりさげてゐたりしを女と思ひ見そんじてさうな
くとられて候ぞや五郎丸だになかりせばあつぱれ君
の御命はあやうかりつるものをやよりともきこしめ
されてあつぱれ大がうのものかな思ひのいろをのこ
さず申あぐる事こそ神妙なれたゞし親のかたきうた
むとてまゝちゝそがにはしらせけるか京の小次郎越
後のせんじ二のみやのあねはゝにはしらせざりける
かときむね承てさん候小次郎はほんしよにしこうつ
かまつりひまなき身にて候へばしらする事も度はず
ゑちごなるせんじばうは經をよみねんぶつ申おやの

あととふその子をころして何にせんとぞんじぞらす
る事も候はず二の宮のあねむこよになきこじうと、
くみし一しよけんめいをうしなはんとよも申さじと
ぞんじぞらする事も候はずはゝにはぞらせたくは候
ひつれども人のおやのならひにてわかき子どもをさ
きにたてとしよりあとにながらへものおもはんとい
ふおやのよにあらじと存しらする事も候はずまゝ父
はなさぬ中けいしけいふのむかしよりなかよき事の
あらざればぞらせすとこそ申けれ頼朝御涙をながさ
せたまひ今は問べき子細もなしはや／＼いとまとら
せよと仰出されけるところにいづくよりかきたりけ
ん敵のちやくしいぬばう時宗を見つけこそもおしま
すわつとなきもつたるあふぎにてときむねがおもて
をちやうとうつ時宗ちつともわろびれずにつこと笑
ひあふゆゝしくもうついぬばうかなうらやましやな
犬坊は香にちゝをうたせいまでにかけてうつ事よか
なしきかなやわれゝは五つや三つの年よりも父を

なんちが親にうたせ十八年がそのあひだ野にふし山
を家としこゝろをつくしきもをけしつゝやはたちに
餘りつゝうちたるだにもうれしきにさこそいぬばう
がこゝろもつくさすをこのけなく打をうれしく思ふ
らん是もきみの御おんぞやわどのがうでにかなふま
じうつてはらだにあるならばいか程もうてや犬坊と
かほふりあげてうたせけり御前に有し人々弓とりに
たう座のちじよくをあたふる事もつたいなしといぬ
ばうをだきいるゝ頼朝よりの御詫にはときむねがさ
いごにすけなりがくびの見たくや有らんに二たんは
なきかとおほせければうけたまはると申てむらちど
りのひたゝれにつゝみたりしすけなりのくびに討そ
んじたるたちをそへときむねがまへにをくあらむざ
んやときむね今までがうのまなこを見いだしわろ
びれざりしけしきもかはりなみだをながしうつぶし
になりあらいたはしやはやくもかはり給ひたるやち
くばにむちをうちしより一つところにおきふしすこ

しも見えさせたまはねばとや有らんかくやわたらせ
給ふらんとこゝろをそへて思ひしにかなしきかなや
今ははや五たいふんべつついかねばありしかたちも
かはりはていたづら事となりにけりとくしてわれも
かくなりておなじみちへと思ひければつゝめどこぼ
るゝなみだは庭の玄らすもぬれぬべし

そののちときむねがたちをとりいたしこれにて、され
との上意なりときむね此たちをみてあらふしげやあ
のたちはおとゝし京へのぼり四でうまちにてかひと
ゆふべのかたきをうち又このたちにてそれがしが
首をきられん事のふしげさよとのぼらぬ京へのぼり
たると申はこのたちの出ところをかくさんための言
葉なりなはとりはほりの小次郎とぞ聞えける賴朝よ
りの御詫には大がう一のときむねなればたかゞをか
にてきれとの上意なりうけたまはると申てときむね
をひつたてたかゞをかへいそぐ折ふしありあふ貴賤
くんじゆたゞよのつねのゆみとりさへさいごのてい

はおもしろきにことさら名にしおふたるときむねな
ればさいごのていをみんとてわれさきにといそぐ時
宗人のおほきをみてあらくちおしやかほどのくわう
座にてなほのはぢにをよぶ事よよしゝそれも時宗
がさんぞくかいぞくを志たる身にてもあらばこそぶ
もけうやうのそのためについたるなほにてあるあひ
だかみのまへにてみしめなは佛のまへにてせんのつ
なきやうのひぼともいつつべし心あらんずゆみ取た
ちはよつて手かけてけちゑんせよ人々といふまゝに
いやたかゞをかへぞいそぎけるたかゞをかにも着し
かば九ほんのまつの玄たに玄きがはを玄かせ西むき
になをつて申けるはさいはいときむねがこの松の玄
たてきられん事もひとへに九ほんの淨土とおほふ
るなりいかにたちとりなはとりすこしのいとまを得
させよまつごの一匁にじやうどの三部經をあらゝ
とひてきかすべしけもんしゆの人々もなりを玄づめ
てちやうもんあれそれ法花一乘のくりきはたつとし

ありがたきみたいしやうほうまんとくのくらゐ三世
の諸佛出世のほんくわいは衆生じやうぶつのぢきだ
う也經にあらはす時は妙法れんけの五字につゝめな
にとくときはなむみだ佛の六字にせつするなりし
ゆいといつぱ座せんの異みやう座せんしゆぎやうの
てんちにいたりがたきものは六字をせうしてごくら
くに往生すぐち成ほんぶに至てはかうしやうのほう
もん也いつしをさゝぐるそのときは大せんせかいも
こゝに有たけをうちたうをみてごだうする事ふんみ
やうなりめうらく大師の御しやくにいはくしよけう
しよさんたさいみだ西方をもつてさきとせりゆいし
んのみだこしんの淨土なればほんらいむとうざいか
しやう有なんぼくとくわんすべしそれ六字のみやう
がうをあつむるきやうろんはけごんきやうにて南の
字をつくりあごんきやうにて無の字を作りほうどう
きやうにてあの字をつくり大はんにやにて彌の字を
つくり法花經をもつてだの字をつくつてなむみだ

ふつと申なり十方三せぶつ一切しよぼさつ八まんし
よしやうげうかいせあみだととくときはちやうもん
の老若もかうべをちにつけときむねをおがまぬ人は
なかりけり

かのときむねと申はおさなかりけるときよりもごん
ぎやうをこたらす一しむ三くわんの月はむみやうの
やみをてらしくわんねんのまどのまへにはまゆに八
字の玄もをたれいちしちうだうのくるまは無二無三
の門にとゝろき一乗ばだいのこまはびようどうだい
ゑのそこにいはふとうがく一てんのほとゝぎすはめ
うかくたいせうのみねになきにうちうけんもむのう
ぐひすはげり衆生の谷にさへづるしよぎやうむじや
うの春の花はせしやうめつぼうの風にちりしやうめ
つめついの秋の月はじやくめつゐらくのくもにかく
るゝはんさむにふんくしかくのごとくとあるもの
をたゞねんふつを申べしとをよぶもをよばざりける
もみな念佛を申ける是はたかゞをかの事さてもきみ

の御まへにはわだち、ぶ北條殿とり／＼そせう申されけるはかのときむねと申は大かう一のつはもの又は名にあるものゝ子孫なればたすけも御をき候へかしとをの／＼申されたりければ頼朝もない／＼たすけたく思召るゝ折ふし三人のそせうをうれしくおぼしめしみづからあんどの御状をあそばしゑんへいの右馬のせうにたぶさてもたかゝをかにはときむねをゑきがはになをらせ太刀取うしろへまはるときゑんへいの右馬のせうたてぶみもつてはしりやあ其時宗なきつぞあんどの御状是にありこれ／＼おがみ給へとて時宗がひざにをくこてのなはをゆるされたからかにこそよふだりけれどす状さがみのくにの住人そがの五郎時宗はやくくわんゆうすそれくわをこんじてちうとなすゑんかうは人に有てゑかもみやうのちけんたりおやにけうのふかきものはてんたうのあをいたし理になせり天下爰に感應すそくばくの弓と

りたうけんをさし置なんだそでをうるほふしおんこもにきく物ひるいきもにめいじたりこれを更にちうばつしゑざいになしをはんなばきゝうの家たえう馬の道はながくすたりなんあふぎてもなをあまり有はんくわいにくらぶればときむねはきさりたりちうりやうにあはすればかうそのなせしいせいたり一てん四かいがそのうちにかくれぬがうのものなればさきの日をかへしいまよりのちは頼朝にちうしむたるべし本領なればうさみくすみかは津三ヶのしやうゑいたいあんどの御状かくのごとくみなものよりともはんとぞよみ上たるきせん上下のけもんしゆ一度にあつとかんじつゝゆゝしの人のくわほうやとよろこばざるはなかりけり去程にときむね御教書いたりきなみだをながしつゝあら有がたやおなじくは此御状を舍兄助成もろともにおがむとだにも思ひなばいかゝはうれしかるべきに惣領の助成今はうきよにおはせねばときむね一人ながらへそうちやうをつぐと

もいきたる志るし有まじたや／＼きらせ給へと申こ
うてぞきられけるみる人目をおどろかしきくものこ
れをかんじけり君もあはれと思召かほどがうなるつ
はものじやうこも今も末代もためしすくなき次第あ
らんかみにいはへとてふじのすそ野にやしろを立て
あにの宮をとゝの宮と申ていははせたまひけるとか
や今當代にいたる迄おやのかたき討人はこのやしろ
にていのればたちまちかなへ給ひけり

しんきよく

つらくおもむみるにいにしへより今に至るまで朝敵を一時にほろぼし太平を四海にいたす事武略のこ
うに玄くはなしされば代は異國玄うらいのをそれも
なくていゐをあらそふかたもましまさず是併武運の
天命にかなはせ給ふによつてなり爰にけんこう建武
のむかしを思ふに戦場にしてかばねをさらすのみに
もあらずあるひは君臣の儀をまばつて身をさうかい
のなみに玄げめあるひはいもせのわかれをかなしむ
で思ひを古郷の月にいたましむるなかにもあはれな
りしは一の宮のみやす所の御事と右衛門のふしやう
はたのたけぶんがふるまひなり其ころ宮すてにうる
かぶりめして玄んきうのうちに人と成給ひしかば御
才覺もいみじくようがんもよにすぐれましませばさ
だめてとうぐうにたゝせ給ひなんとよの人皆ときめ

きあへりしに關東の御はからひとしておもひのほか
に後二條の院の御子とうぐうにたゝせ給ひたればこ
なたへ參りつかへし人々はみなのぞみをうしなひみ
やもよのなかよろづに付て只うち玄ほれ明くれは詩
歌に御こゝろをそへ風月におもひを添させ給ふ折に
つけたる御あそびなど有しかどさしてけうせさせ給
ふ事もなしさるによつてはいかなる宮腹一の人の御
むすめなどなりともかくと仰いだされば御こゝろを
つくさせ給ふ迄の御事にはあらじと覚えしに御こゝ
ろにそむいろもなかりけるにやこれをと思召たる御
氣色もなく只ひとりのみとし月ををくらせたまひけ
るとかや有とき關白家にてなまかんだちめ天上人さ
しあつまつてゑあはせのありけるにとうゐんの左大
將殿のいだされたるゑにげんじのむばそくの宮の御
むすめはゑらにあかくれてびはをひき給ひしにくも
がくれたりつる月の俄にいとあかくさし出たればあ
ふぎならでもまねきつべかりけりとてばちをあげ指

のぞきたるかほつきいみじくらうたげににはやかな
る御けしきを云ばかりもなく筆をつくしてぞかきた
りける宮これをつくぐと御覽じてかぎりなく御こ
ころにかゝりければこのゑをゑばしめしをかれみる
になぐさむかたもやとまきかへしく御らんじけれ
ども御こゝろさらになぐさます昔りふじんのかんせ
むでんの床にふしはかなくならせ給ひしを武帝かな
しみにたへずしてはんごむかうをたかれしにりふじ
んのおもかげのかすかに見えしを似ゑにうつして御
らんせしにものいはずわらはず人をしうさすと武帝
のなげき給ひしもことはりかなと今更に思ひぞゑら
せたまひける我ながらはかなのこゝろまよひやまこ
とのいろをみてだにも世は皆夢のうつゝとこそおも
ひすつべき事なるにこは何のあだし心ぞやくわさん
のそじやうへんせうをつらゆきがうたのさまは得
たれどもまことすくなしたとへばゑにかける女をみ
ていたづらに心をなやますがごとしと古今のじよに

もかきたりしそのたぐひにもなりぬるものよとおも
ひ捨させ給へども猶あやにくなる御心むねにみちて
ぞおぼしめすさればかたへの色ことなる人を御覽じ
ても御目をだにもかけられずましてときふのたよ
りにこととひかはされし御かたさまへはひとむらさ
めのあまやどりにもたちよらせ給ふべき御こゝろげ
もなしせめてよのなかにさる人ありと聞召御こゝろ
にかゝらばたまだれのひまもとむるかせのたよりも
ありぬべし又わづかに人をみしばかりなる御心あて
ならば水のあはのきえかへりてもよる瀬はなどかな
かるべき是はみしにもあらず聞しにもなくむかしは
かなき物語あだなるふでのあとに御こゝろをつくし
ていかにせんとこひかなしませ給ひて月日をぞをく
らせたまひけるせめて御心をやるかたもやと御車に
めされかものたゞすの宮にまふでさせ給ひ御手洗川
にて御てうづをめされなにとなくかはにせうようせ
させ給ひむかしなりひらがこひせしとみそざせし事

のあはれなるやうに思召いで、

いのるともかみやはうけんかけをたに

みたらしかはのふかきおもひを

かやうにうちすんじ給ふときしもむらゑぐれのすぎ
ゆくほど木のゑたつゆにたちぬれて御そでもいと
ほしあへず日もはやくれぬと申こゑに御くるまをと
どろかして一條をすきさせ給ふにたがすむ宿とはゑ
らねどもかきにこけむしかはらのまつもとしふりて
すみあらしたるやどなればものさびしげなるそのう
ちにばちをとけだかくせいがいはをぞひきけるあや
しやたれなるらんとおぼしめしすぎかてに御くるま
をといめはるかに見入させ給ふにみる人ありともゑ
らすして有明の月のくもよりほのぼのとさし出た
るにみす高くまきあげいとあてやかなるねうばうの
歎の別をかなしみてびはをたんずるにてぞありける
せつさんこをくだく一りやうきよくこほりぎよくは
んにおつせんばんせいかみだしたる其こゑ庭のは

おち葉にまがひつゝよそにはふらぬむらさめに御袖
もゑほるゝ計也あやしやとおぼしめしみや御めもあ
やにつくぐと御らんせらるゝに此ほどそゝろに御
こゝろをつくしてゆめにもせめて見ばやとこひかな
しませ給ひし似ゑにすこしたがはずなをあてやかな
るかたちはいはむかたなくぞ見えたりける御こゝろ
そらにあこがれてたとぐしきほどになりしかばつ
き山の松のこかげにたちやすらはせ給ふに女みる人
ありけりとてびはをばきちやうのかたはらにさしを
きうちへまぎれいりにけり引やもすそもあからさま
なるおもかげに又たち出る事もやと夜ふくるまでた
ちやすらはせ給へばあやしげなる御所さぶらひみか
うしおろすをとしてよもふけはや人みな静まりけれ
ばかくても有べき事ならねばみやもくわんぎよあり
にけり

こひかなしませ給ふもことはりなり其後よりはたゞ
ひたすらなる御けしきに見えながらさすが御言葉に
は出されずつねに御くわいにまいりし二條の中將爲
冬いつぞやかものたゞすの御かへるさのほのかなり
し雪の間の月又も御らんせまほしくおぼしめさるゝ
にやその御事にて候はゞやすきほどの御事にて候此
にその御事にて候はゞやすきほどの御事にて候此
ねうばうのゆゑをくはしくたづねて候へば今出河
の左大臣きんあきこうがむすめにて候を徳大寺の左
大將に申名付ながらいまだ皇太こうぐうのみくしけ
にて候なりせつにおぼしめされば歌の御くわいにこ
とよせて彼てゐにいらせ給ひたまだれのひまもみづ
から御こゝろをあらはす御事にても御覽せよと申せ
ばみやれいならず御こゝろよげにうちゑませたまひ
さらば今夜かのてゐにてほうべんの御くわいあるべ
きよしを左大臣のかたへ仰つかはされければきんあ
きここうかたじけなしととりきらめきすきの人あまた
まねきよせ案内申せばためふゆのあつそんばかりを

御ともにてかのてゐにいらせたまひけりうたの御事
は今夜さまでの本意ならねばひかうばかりにてほう
べんはなしあるじのおとゞこゆるぎのいそぎ御かは
らけ持て参りたればみやつねよりもけうせさせ給ひ
ゑいきよくげんかのたへぐに御さかづきたばせた
るにあるじもいたくゑひふしひ宮も御まくらをかた
ぶけさせ給へばはや人みなゑづまりて夜すでにふけ
にけりなかだちの左中將はこゝろありてゑはざりけ
ればかれにあんないせさせ此ねうばうの住けるにし
のだいにゑのびいらせ給ひかひまみ給へばともし火
のかげかすか成に花もみぢかりみだれたるびやうぶ
ひきまはしをきもせずねもせぬさまにゑほれふしつ
つ只いま人々のよみたりし歌のたんざく取あげてか
ほうちかたぶけたれはこぼれかゝれるびんのはづれ
よりにほやかにほのかなるかほせつゆをふくめる
はなのあけばの風にゑたがへるやなぎの夕部のいろ
ゑにかくともふでもをよびがたくかたるに言葉もな

かるべしよそながらほのかに見ゆる形のよに又たぐ
ひもやあらんすらんとあやしきまでにおぼえしが猶
かずならざりけりとおぼしめさるゝ程にはやはれほ
れと成て志らず我たましゐも其そのうちに入ぬる
やらんとおぼしめさるゝばかりなりおりふしあたり
にもなくともし火さへかすかなるにつま戸をすこ
しあけ内へいらせ給ふに女おどろくかほにもあらず
のどやかにもてなしやはらきぬひきかづき打ふした
りしけはひ云志らずなよやかなり宮もかたはらによ
りふしたまひありしながらの御こゝろづくしあはれ
なるまでに聞えけれどもとかくいらへも申さずたゞ
おもひ志ほれたるその氣色まことにほひふかうし
て花かほり月かすむよの手枕にみはてぬ夢の御こゝ
ろまよひにあくるも志らず打かたはせ給へどもな
をつれなきけしきにてつゆほどもなびかぬさまなる
に八こゑのとりのつげわたりなみだのつららとけや
らすをのがきぬぐひややかにたぐひもつらき有明

のつれなきかげにたちかへらせたまひけりそれより
してたびくの御せうそくありていふばかりもなき
御ふみのかずははや千束にもなりぬるやらんとおぼ
ゆるほどになりければ女もあはれるかたにこゝろ
ひかれてのぼれば下るいなぶねのいなにはあらずと
おぼゆる氣色になんあらはれたりされ其人めをなか
のせきもりにて月ごろすぎさせ給ひけるにある時式
部少輔秀房といふじゆしやをめしてじやうぐわんせ
いようをよませてきこしめされしにむかし唐の太そ
うていしんきがむすめをこうひのくらゐにそなへて
けんくわでんにかしづきいれむとし給ふをぎてうい
さめて申やうこの女はすでにりくしにやくせりとそ
うし申たりければ太宗其いさめに志たがつて宮中に
めさるゝ事をやめ給ひきとだんしけりみやこれをつ
くぐと聞召いかなればよのきみはかくけんじむの
いさめに付て色このむこゝろを捨はてたまひけるぞ
いかなるわれなればすでに人にいひ名付事定まりた

るなかをさけて人のこゝろをやぶるべきかと昔のた
とへにはちよのそしりをおぼしめしてそれよりして
御心のうちにはこひかなしませ給へどもさすが御言
葉にはいだされず御ふみさへかきたえたれば女も百
夜の玄ちのはしがきもいまは我や數かくまじとうち
わびてあまのかるものにおもひみだれて月日をぞをく
らせ給ひける徳大寺此よしきゝ及みやのさやうにお
ほしめしたらんをいかでびんなふさる事の有べきか
とはやあらぬかたへかよふみちありと聞召みやもい
まは御はゞかりなくして御ふみをつかはさるいつよ
りもくろみすきて

玄らせはや玄ほやくうらのけふりたに

おもはぬ風になひくならひを

女もあまりつれなかりし事を我ながらつらきこゝろ
かなとおもひ返すほどになりければことばはなくて
たちぬへきうき名をかねておもはすは
風にけふりのなひかさらめや

其後よりかなたこなたへむすばふれしこゝろの玄た
ひぼうちとけてさよのまくらを河島の水のこゝろも
あさからぬ御中とならせ給ひけり
いきてはかいらうのちぎりふかく死ては又おなじこ
けの玄たにもとおぼしめしかはしていまだ十月にも
たらざるに天下の亂出來一の宮は土佐のはたへなが
されさせ給へばみやすどころはひとりみやこにとい
まつてあけくれなげき玄づませ給ふせめてなきよの
わかれなりせばうきにたへぬいのちにて生れあはん
する後のちぎりをもたのむべきが是は又おなじ世な
がら海山をへだてたがひに風のたよりのをとづれ
をだにもきかせ給はず年ごろめしつかへし青侍くわ
んちよの一人もまいりかよはすよろづむかしにかは
りたる世とこそならせ給ひけりすみあらしたるよも
ぎふのやどのつゆけきに御袖のかはくひまもなくお
もひくづをれ給ひていかでなみだのたまのをもなが
らへぬらんとわれながらあやしきほどにて思召宮も

みやこを御出より君のわかれ御身の上一かたならぬ
御なげきみやすどころの御なごり今をかぎりとおば
しめし道のくさ葉の露ちもときえはつる共おしから
じとおぼしめさる、御命のながらへてつれもなく土
佐のはたといふところのあさましげなるはにふのこ
や此世のうちとも思はれぬ浦のあたりにながされて
月日ををくり給へばはるゝまもなき御なげきたとへ
むかたもましまさす思ひくづをれ給ひしを御いたは
しくや思ひけん御けいごに候ひし有井の庄司なさけ
有てすゝめ申けるやうは何かはくるしく候べきみや
すどころを志のびやかにこれへくだしまいらせて御
こゝろをもたがひに御なぐさみ候へといろある御
きぬ一かさねてうしん申て其外のみちのほどの用意
までねんごろにさたしければみやはよろこびおぼし
めしたゞ一人候ひしたの武文を御むかひにぞのば
せらるゝたけぶん御ふみ給はりていそぎ都へのぼり
しにいくほどなきに御座どころみしにもあらずあれ

はてゝむぐら玄げりてかどをとぢ松の葉つもりて道
もなくをとづれかはすものとてはふるき木するゆ
ふあらし軒もる月のかげならでは住人もなくあれは
てたり扱はいづくにか立ゑのばせ給ふらんとかなた
こなたと御ゆくゑをたづねけるほどにさがのゝおく
なるさとにまつの袖がきひまあらはなるにつたはひ
かゝりいけのすがたものさびしくみぎはの松風あ
きすさまじくふきゑほり誰すみぬらんとみるも物う
げなるやどの内にびはをだんするをとしけりあやし
やと思ひたちとゞまりてこれをきけばまがふべくも
なきみやすどころの御ばち音なり武文うれしくおも
ひかきのやぶれよりうちへいり縁のまへにかしこま
りたればやぶれたるみすのうちよりもはるかに御覽
じいだされて何とおほせいださるゝ御ことばもなく
あれやとばかり御こゑかすかにきこえながら女房た
ちさゝめきあひてまづなくこゑのみぞ聞えけるたけ
ぶんみやの御つかひにまかりのばつて候と申もあへ

すえんに手打かけさめぐとぞなきにけるやゝ有て
たゞこれまでとめざるればみすのまへにひざまづき
くも井のよそに思ひやりまいらするも餘りせんかた
もなき御事にて候へばいかにもして田舎へ御くだり
候へとの御むかひにまかりのぼつて候と御ふみをさ
さげければいそぎひらいで御覽せらるゝにげにと御
思ひのせつなるいろさざと覚えてことの葉ことにを
く露の御そでにあまるばかり也

よしやいかなるひなのすまゐなり共せめては其うき
にこそたへめとてやがて御門出ありければたけぶん
かひぐしく御こしなどをたづねいだし先あまがさ
きまでくだし參らせて渡海の順風をぞあひまちける
かゝりけるところにつくし人にまつらの五郎と云け
るぶし京よりゐななかへくだりけるがこれもおなじや
うにかせをまちてゐたりしが御息所の御すがたをか
きのひまより見たてまつりこはそも天人のこのどに
あまくだれるか此よの人ともおぼえずと目かれもせ

でまほりゐたりしがあなあぢきなやたとひぬしある
人なり共又いかなる女院ひめやにてもおはせよか
し一夜のほどのちぎりに百年の命にかへむ事何かお
しからんむばひとつてくだらはやと思ふところに武
文が下部のはま出してあぞひけるをよび寄て酒のま
せ引出物をとらせさても御へんがしうのぐそくした
てまつる上らうはいか成人ぞとひければ下らうの
ものゝかなしさはさけにふけり引出物にめで事のや
うを有のまゝにぞかたりけるまつらおほきによろこ
ふでけふ此ごろいかなる宮にてもおはせよかしむは
んにんにてながされさせ給ふ人のところへ亥のふで
くだり給ふ上らうをみちにてむばひとりたらんはさ
したる罪科は有まじきものをと思ひらうどうとともに
やどの案内見せをかせ日のくるゝをぞあひまちける
夜すでにふけければまつらがらうどう三十餘人もの
のぐひし／＼とさしかためたいまつに火をつけしと
見やり戸をけやぶつて前後よりうつてぞいりにける

はたのたけぶんは京家のものとはいひながら日比手がらをあらはして人にすぐるゝものなればがうたう入たると心得まくらに立たるたちをつとり中門さて切ていいです、むかたきを三人手の玄たにてきりふせのこるかたきを大庭へ一度にばつとをひいだし大音あげて名乗やう右衛門のふしやうはたのたけぶんといふ大がうの者こゝにありとられぬものをとらんとてふたつとなきいのちをうしなふものゝふびんさよとのつたる太刀ををしなをして門のわきにぞ立たりけるまつらがらうどうどもたけぶんひとりにきりたてられてもの外へ引たりしがきたなしかたきは只一人ぞ返せ／＼といふまゝにそばなる家に火をかけおめきさけんでよせたりけり武文心はたけけれどもけぶりを風にふきかけられてかなふべきやうあらざれば内へはしり歸てみやすどころをおひまいらせむかふかたきをうちはらひみなとの船をまねきつゝいかなるふねにて候ともこの上らうを玄はらくのせ

てたべとよばはつてなみうちぎはにぞ立たりけるふねどもおほき其中にうんのきはめのかなしさは松浦が船にこれをきゝ一番になぎさへさしよする武文なめによろこふでやかたのうちへのせ申御供のねうばうたちをもふねにのせむと思ひてはしりかへつてみてあればありし宿には火かゝつて我かたさまの人人はゆきがた玄らすぞなりにける

其ひまにまつらはこの上らうのわがふねにめさるゝ事はひとへに天のあたふるところなりいそぎ船に乗やとていへの子らうどう百餘人とるものをもとりあへず皆ふねにこそ乗たりけれともづなどひてをしげだすたけぶんなぎさに歸て船はととへばなかりけり見ればおきにぞうかんだるなふその船よせられ候へやかたのうちへのせ申上らうをあげ申さんとこゑをばかりによばはれ共順風にほをあげければふねは次第にへだたりぬたけぶんあまりのむねんさにあまのをぶねに打乗てみづからををしていそげ共をひて

を得たる大船にをつ付べきやうあらざればあふぎを
あげて其ふねとまれゝとまねきけるを松浦がふね
に是をきゝどつとわらふこゑしけりたけぶんやすか
らぬものかなその儀にて有ならば只いま海底のりう
じんと成てそのふねにをひてはやるまじ物をといか
つて船のへいたにつつ立て腹十文字にかき切てさう
かいのそこにぞ入にける

みやすどころは宵のまの夜うちのいりたるさはぎよ
りきもこゝろも御身にそはず夢のうきはしうき玄づ
みふちせをたどる心ちして何となりゆく事やらんと
なきふしてこそおはしけれふねのうちなるもの共が
あつぱれ大がうの者かな主の上らうを人にむばはれ
てはらを切つる事よといひさたするを武文が事やら
んと聞召ながらそなたをだにも見やらせ給はずきぬ
ひきかづき屋形のうちに泣ゑづみてましますところ
にみるものおそろしくむくつけなるひげおとこの
こゑいとなまつていろのあくまでくろきが御そばに

まいり何をかさして御なげき候ぞおもしろきみちす
がら名所うらゝを御覽じて御なぐさみ候へさやう
にてはいかなる者もふねにはゑふ物にて候ととかく
なぐさめ申せ其御かほをもたげさせ給はず只をに
一車にのせられふの三こうにさほさすらんもこれに
はすぎじとおぼえしむくつけおとこもばうせんと成
てふなはたによりかゝりこれさへあきれはてたる體
なり其夜は大物のうらにいかりをおろし世を浦風に
たゞよひ給ふ明ければかせよへなりぬとておなじと
まりのふね共もほを引かちを取るのがさまぐこぎ
ゆきければ都ははやあとのかすみとへだたりの九國
へはいつかゆきつかんずらんと人の申を聞召扱はこ
ころづくしへゆくたびなりと御こゝろぼそきにつけ
ても北野の天神のあら人がみとならせ給ひしそのい
にしへの御こゝろづくしいまもおぼしめしわすれず
ばわれをみやこへかへし給へと御こゝろのうちにい
のらせ給ふ其日のくれほどにあはのなるとをこぎゆ

きしに俄に風かはり玄ほむかひ此船さうなくゆきや
らず船人おどろきほをついてちかきうらによせむと
すればおきつ玄ほあひに大のあな出來てふねを海底
に玄づめんとす水主櫂取共いかはせんとあはてゝ
ほむしろとまをなげいれうすにまかせて其ひまにこ
ぎとをらんとしけれども船かつてはたらかずうすの
まふに玄たがつてなみとともにめぐる事はちやうす
ををすよりもすみやか也是はいかさま龍神のざいほ
うにめをかけなやますと覺えたりなにをもうみに入
よとて鎧腹巻たちかたなかすをつくしていれけれ共
うすのまふ事猶やましもしも色有いしやうにやめを
見いれてぞ有らんとみやすところの御きぬとあかき
はかまをいれければ玄らなみいろへんじこうじつを
ひたせるごとくなり是にうすは玄づまりけれど船は
おなじところに三日三夜ぞめぐりける船中の人々一
人もおきあがらず皆船底にひれふして前後も玄らず
ぞ見えにける宮すどころはさらでだにいきたる心ち

もなきうへにこのなみのさはぎに人ごゝちもましま
さすよしやいきてうきめを見んよりはいかならんす
るふち瀬にも身を玄づめはやと思召けれどもさすが
に今をかぎりとなきさけぶこそをきこしめせば千い
ろのそこのみくづとなりふかきつみに玄づみなん後
の世をたれかはしりてとぶらふべきあさましさよと
おぼしめす御こゝろのうちこそあはれなれまつらも
いまはばうせんとなつてかゝるやむごとなき人をと
り奉りたるゆへにいかさま龍神のとがめも有けるか
せんなきわざを玄つるものかなとまことにこうくわ
いの氣色也かゝりけるところに船底よりも櫂取一人
はひいで申けるは此なると申はりうぐうの東門
にあたりたるところにて何にても龍神のほしがらせ
給ふものをうみへ玄づめたまはねばいつもかゝるふ
しきの有所にて候是はいかさまやかたのうちにめさ
れたる上らうをりうじんの思ひかけ申されたるとぞ

一人のゆへにそこばこの者共が非分の玄にをせん事
は不便の次第にて候へばこの上らうを海へ玄づめた
てまつり百餘人のいのちを御たすけあれと申まつら
ももとよりなさけなき田舎人の事なればもし我命や
たすからんとおもひやかたの内へまいりみやすどこ
ろをあららかにひきおこし申あまりつれなき御けし
きを見まいらするも本意なく候へばうみへ玄づめま
いらすべきにて候御ちざりふかくば土佐のはたへな
がれよらせ給ひてみやとやらんどうとやらんとひと
つうらにすませ給へとあららかにかきいだき申海へ
志づめ參らせんとは程の御事になりては何の御言葉
のあるべきなればつや／＼御こゑをも出させたまは
す御こゝろのうちには佛の御名ばかりとなへたえい
らせ給ひぬこれをみて僧の一人便船したりしがまつ
らがたものをひかへいかなる御事にて候ぞそれ龍神
と申も南方むくせかいの成道をとげ佛のじゆきを得
たる者にて候へばまつたくざいごうのたむけをばう

くべからず只經をよみだらにをみて龍神のほうらく
にそなへむ事こそ眞實のいのりともなるべく候へと
かたくせいしければまつらもさすがいはきならねば
みやすどころを船底へあららかになげつけ申さらば
僧の儀に付ていのりをせよとて船中の上下一句同音
に觀音のみやうがうをとなへしにふしぎなるものど
もが海上にうかびいで、ぞ見えに先一番にたい
こうのしちやうがながびつをかひてとをると見えて
うちうせぬ其次をみてあればあし毛のこまに白鞍を
き八人のとねりが引てとをると見えて打うせぬや、
玄ばらく有て大物のうらにてはら切て玄んだりしは
たのだけぶん火おどしの鎧着五まいかぶとのをを玄
めきつきげなる馬のりゆんづえにすがつてみなく
れなるのあふぎをあげまつらがふねにむかつてとま
れとまれとまねひでなみのそこにぞいりにける梶取
ともがこれをみてなだをはしるふねにふしげの見ゆ
るはつねの事にて候へども是はいかさま武文がおん

りやうとこそぞんじ候へ其ゑるしを御らんせむがために小船一そくこしらへかこを一人あひそへ此上らうをのせまいらせなみの上につきながしいかにところを御覽せよと申此儀尤亥かるべしとて小船一そくばかりうずのまき返すなみのうへにぞうかべける彼さうりそくりがかいかんざむにはなされてきかんのうれへに玄づみしもそれは人すむ島なればたちよるかたもありぬべし是はうらにも島にもなくいかでなるとのなみのうへ身をすてふねのうき玄づみ玄ほ瀬にめぐる水のあはのきえなん事こそかなしければ龍神も思はぬ巾をばさけられけるにや風俄にふきわけて松浦が船は西をさしてふかれゆくと見えしがのたにのおきにてむこ山おろしにはなされてゆきがた玄らずたゞよひしがげききらうふねをくつがへしてそこのみくづとなるとかや其後なみかせ静れば御息所の御船はむしまにつかせ給ひけりこの島と

申はつりするあまのいへならではすむ人もなきひまあらは成あしのやのうきふし玄げきすみかのうちへぞいたてまつりける

此四五日のなみかせに御こゝろもよりたえいらせたまひぬ是をみてこゝろなきあまの子共までもこはいかにしたてまつらんとなげきかなしんで御かほに水そゝぎなどしてやうくいき出させ給ひけり何しにうきいのちの其まゝにたえもせで又うきめをみん事よとなげかせ給へどかひそなきさらでたになみだのかゝる御袖はかはくまもなきおりからにとまものかづくあらいそのいはにくだくるなみのつゝきえをあらそふふせいなりいつまでかくて有べきぞ土佐のはたとやらんいふうらへをくりてもあれかしと打わび給へはあま共申けるはかほどまでいつくしくまします上らうをわれらがふねにのせ申はるく土佐迄をくり奉らんにいかなる准どまりにても人のむばいとり申事も候べきにゆめくかなふまじきよしを申

ければちからをよばすなみの立居に御そでをゑぼり
つゝ今年はこゝにてくらせ給ふ御こゝろのうちこそ
あはれなれさても一の宮はかやうの御事をばいか
でかえらせ給ふべきなれば御息所の御むかひに武文
京へのばされしのち月日はるかになりぬれども何と
御左右をも申きねばいかなるうきめにもあひぬるか
と玄づこゝろなくおぼしめして京よりくだりけるも
のに御たづねありければみやすところは去年の九月
に都を御たちまし／＼てはたへくだらせ給ひしとこ
そたしかに承りしがと申ければさてはみちにて人に
むばはれけるか又世をうらかせにはなされてちいろ
のそこにも玄づみぬるかと玄づこゝろなくおもひわ
づらはせたまひけり有夜の御けいごに候ひけるぶし
ども中門にとのゑして四方山の事どもをかたりける
なかにあるものゝ申けるは扱も去年の九月に阿波の
なるとをすぎて當國へわたりしときふななかにかゝ
りたるきぬをとりて見しかばいくしかりつるもの

よ尋常の人のしやうぞくとは見えずこれはいかさま
だりり院御所の上らう女房たちのゐなかへ下らせ給
ふとてなんぶうにあひてうみへ玄づませたまひたる
そのしやうぞくにてぞ有らんあなあはれさよなど、
いひきたするをみやかきごしにてきこしめし去年の
九月の事ならばもしそのゆくゑにても有らんとこゝ
ろもとなくおぼしめし其きぬいまだあらば持てまい
れとおほせければいろこそそんじて候へどもわたく
しに候とてとりよせて參らせあぐる宮つく／＼と御
覽せらるゝに御息所の御むかひに武文京へのばせら
れしとき有井の庄司が調進申せし御きぬなりふしき
やとてたちのこりたるきぬをめし出しさしあはせて
御らんせらるゝにあやのもんすこしもたがはずつゝ
きたればなにの御うたがひのあるべきなれば宮二目
共御覽せず此きぬを御かほにをしおほひなき玄づま
せ給へばあり井も御前にさぶらひしがなみだをおさ
へてまかり立みやすどころを今ははや此世にましま

す人とはつゆもおぼしめされずこのきぬのかちにかかりし日をなき人のきにちにさだめられみづから御經あそばして過去のゆうれい藤原の氏の女ならびにはたの武文ともに三界の苦海を出すみやかに九品のじやうせつに至れといのらせ給ふぞあはれるさるほどに其年より諸國にいくさおこつて六波羅鎌倉九國北國のてうてき同時にほろびはてしかば先帝はをきの國よりもくわんかうなりたまひ一の宮は土佐のはたよりも都にかへりいり給ふ天下ことぐく公家一とうの御代と成めでたしとは申せ共一のみやの御かたには御息所のおなし世におはしまさぬ御事をふかくなげかせ給ひしにあはぢのむしまに御座有よしを風のたよりに聞召御むかひをくだされかくて都に入給ふ只わうしつが山よりいで、七世のまごにあひ方士がうみに入てやうきひを見たりしもかくやと思ひ玄られたり御息所はおもはずもこゝろをつくしにをもむきし御あはれのみの心うさなみにたゆたふう

たかたのきえぬ身ながらながらへふたとせすぎし物おもひ御をしはかりもなをあさくやと御袖を拂ぼり給へば宮は又とわたる船のかちのはにかくともつきぬ御なげきわかれの中のわかれとなき跡とひし年月のかずくつもりしかなしみたゞ身ひとつもの思ひわすれかねにし有さまを語過させ給ひけりかくてうかりしよのなかのときのまに引かへ人間のゑいぐわ天上のごらくさはめすと云日もなくつくさすといふ御遊もなし長生殿のうちにはりくわのあめつちくれをやぶらす不老門のまへにはやうりうのかせえだをならさすけふを千年のはじめとめてたきためしにあかしくらさせ給ひけり

張良

去間張良は天下を治めん其ためにじゆぶうせんへぞまいられける彼御寺の御本尊は十一面觀世音彼御寺に參り夜も三十三巻書も三十三局の觀音經を讀三十度の禮拜をまいらせ大慈大悲の願なれば軍にたやすく勝といふ利生をたべと祈念して七日籠せ給ひけりまんじける曉忝も御本尊は御帳のうちよりもあらたに御聲を出させ給ひ我は大悲のちかひにて衆生濟度のためなれば汝に利生をあたふべし此まへにながらばしやうみやう國に着べし彼國の中程に一つの橋渡るべし彼橋の詰に七日立て待ならば八十の翁来るべしか、ル其翁に行會て諸願の利生を蒙べしと玄めさるゝ御玄げんに任せて御手洗川に着やうく下らせ給ひけり百日と申にじやうみやう國につきにけり

彼國の中程に一つの橋こそ渡りけれ柱にはるりをのべゆきげたにはこがねを敷寶子はしやことめなう也橋は高し雲にそひ虹をなせるがごとく也されどもおげんなりければ向に渡りて人に逢て問ばやと思ひつ既にすのこをふみつたふ彼張良の心ざし末頼母敷聞えけりツメ橋を見じと目をふさぎ漸々渡り給へば中程に成にけり向ひを急度見てあれば八十餘りな翁の白きかり衣めされて蘆毛なる駒に乗ながらさしもにせばき此橋をとゞろがけして渡さるゝ張良急度見てあとへも渡り戻て馬乗をたやすく透さはやと思ひしが我は先より渡るものあの馬乗は後也かへさば馬をかへすべし我は何しに歸るべき渡るにこそと思ひて面もふらず渡りけりたゞ中にて馬と人かまつかなつめに渡りあふ既にそこにて馬と人打違むとせし時本ノマニに弓手の沓を張良が袖のくちに引かけ橋のすのこへ落しけり張良仁儀たゞしくして老たる人はかならず父母のごとくに思ふとて此沓を取上翁にあたへたて

まつるさしかけてはかんとて取はづしをとさるゝな
を取上でまいらせるいかゞはして此沓をまたこそを
とし給ひけれ取上んとせし時いさめる駒にけられて
橋より下へ落て行翁此よし御覽じてあれをくと仰
ければ此沓をとらんとて張良□に落にけり彼橋の高
さは三十餘丈成けり沓は水にうかべば張良水に落付
てくつをとらんとをよぎ寄川の底らんでんしふしだ
け五丈ばかりになる大蛇ひとつうかび出つかしらに
角は十六ひれに劍を突たてゝ眼はたゞ夕日の水にう
つろふごとく也紅のごとくなる舌のさきをふり立既
に張良を呑んとこそはしたりけれ張良急度見て少も
ひるまずおよぎ寄て大蛇にのりこぶしをにぎり角の
あひ七つ八つはりけぬば大じや怒をといめ項き上で
張良を橋の詰にをろしをく終に沓をば取上翁にあた
へ奉る翁御覽じてあつがうなるや張良脣病にて兵法
の叶ふべしとも覺えねば汝は剛麿かノ誤歟を見て兵法を傳ん
ため種々のざうさう現したりいざ更ば此次而に翁が

淨土を拜せん道遠して叶ましひ此翁が乗たる馬の尾
づゝに取付かた手にて目をふさぐべし承と申て左り
手にては尾づゝを取右の手にては目をふさぎ仰のこ
とく仕て候と申しければ頓て霞の鞭をあてさせ給ふ
馬は天にあがれはせつなか間に南方の觀音の淨土に
着給ふ翁御覽じて爰こそ我常に住都なれと仰ければ
馬は平地に飛をりの翁即觀音にて三十二さうをあら
はしてみけんびやくがう雲を分左右眼目の輪のごと
し御眉すでに桂をかき御唇は蓮のかたふくがごとく
也きよいの袖薰していきやうまどかに匂ひありさう
のてんだう幡をさし御迎に參ればにさうかんのてん
たうは雲の袖を翻し廿五の菩薩たち十三十二さうに
わけ歌舞の卉はこゑぐに曲をなし舞遊せうちやく
きむくごびわねうとうはつまてもたつとからすとい
ふ事なし亥ちくの亥らべこまやかにかんたん肝にめ
いじたり扱張良を引ぐして臺に入せ給ひけりあら有
難の御事や淨土を拜むめでたさよ調頓て翁は陰陽卷

と申す卷物を取いださせ給ひ此卷物のとくゆうは他
心ノ誤歎本ノマニ
神通をあさらめ代の吉山をあらはし天下大平國土安
穩壽命定穩成べき事ども此卷物の内に候ぞ給はれ
張良張良餘りのかたじけなさに三度いたゝき懷中す
長遠ノ誤歎本ノマニ
一卷の書是也其後さうのどうじを出し淨土のあかた
せんと申てきらく本ノマニ詞もなき酒をべいるりのつぼに
入いのちながへのてうし幸ひらく盃ちんみの菓子を
肴にて給れ張良ちやうりやう餘りのかたじけなさに
たぶくと請てほさんとせし時翁御覽じて暫張良盃
ひかへよ汝がじやうみやう國にてくつの口に酒のい
とくを語て聞せんむかしながらこくの大王は父母の
恩を報せんため須彌の半ふくにあがり白石の塔を卅
六堂にくむ彼塔立て七千年と申時たうの中よりもま
かまんだけまかまんじゆしやげとて種々のれんげ
が咲蓮ちつて百味ミの菓子となる有ときけぶつ菩薩は
須彌の半ふくにあがり白石の塔を拜みあらめでたや
むかしやうにこそ石に花の咲て實のなるとは申せ是

はさながらめでたさよと一つをて取ぶくするに天の
かんろのごとしいまひとつを取て笈に入なむにやう
けんといふ山にする彼なんにやうけんといふ山は
高さも四萬ヒヨンじゆん廣さも四萬ヒヨンじゆんにて菊より
外の草生す彼菊ヒノ字脱スル歟の葉のひろき事まはり八十ひろにひ
ろごれり其菊のはにをく露が玄たの水更にをち合て
不老不死の藥となる薬師の淨土で不老山この淨土に
てあかだやく人間にあたふれば其名を和らげて卽酒
と申也 ツメことに彼あかだせんは一度呑ば一千人二
度のめば二千人が力つきつゝ壽命定穩なる酒なりた
まはり給へ張良張良餘りかたじけなさにうけて三度
汲にけり二獻になれば肴とて扇を一本出さるゝ此扇
と申すはたゝめ八つのほねひらけば廿五のほね有
廿五のほねは廿五の菩薩八つのほねは藥王菩薩此扇
を持ならばたといねがはすとすぐに淨土へまいるべ
し延命さうとかきて命をのぶるとよまれたり夫を肴
に今一つ給玉へ張良張良承りて亦三度こそ汲にけれ

三獻にさかなとてむちを一つ出さるゝ滄海浮とは彼
鞭此むちを腰にさし海河を渡るに船にのらねど水上
平地のごとくはしけども水の底にも玄づまず水中に
入れども其水身にも玄まぬ也身をかくさんと思ふ時
おんぎやうの法を誦し木のはの玄たにかくるれど人
の目には見えぬなりかゝるめでたき重寶ぞそれをさ
かなにて今一つ給り玉へ張良張良承り能肴好酒仰は
おもしもとよりもちやうりやうは大酒にてさし請
さし請呑程に八十一度給りぬ凡そ力は八萬一千人が
力也有難しとも中々に申に及ばざりけり酒はよく給
りぬ下向せんと思へども道を忘れて玄らばこそ其れ
うにこそ延命草とさうかいふをば給れ招かばやと思
ひて我ふる里をまねきけりへだてゝ遠き古郷にたゞ
一時に着て榮花に昌給ひけり

新群書類從第八終

米 黒
光 川
關 真
月 道
校

明治三十九年十一月二十日印刷

非賣品

明治三十九年十一月廿五日發行

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯兼市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者 本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所 內外印刷株式會社分工場

大正十四年二月
春代吉雄

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5145